
(仮)

イオン水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(仮)

【Zコード】

Z8400W

【作者名】

イオン水

【あらすじ】

気が付いたら魔王になつてた。

みんなも良く分からぬけど僕はもつと良く分からない。

初めから説明すると「ふと目を見ましたら知らない部屋で寝ていて、傍らに美人の女性が居た」

あれ?余計に意味が分からない。誰か助けて。

タイトル?そんなの考へる余裕もないよ!
とりあえず「(仮)」と言つ事で!!

編集中に7話の内容が6話と同じになってしましました。

なんてこった：

しかし残っていたデータを頂けたので修復しました！！

第1話 魔王（前書き）

「」のお話は一人の少年が異世界の魔王になつてたと書かれてあるお話です。

内容 자체も「」かで見たような話を面白く出来ない感じが滲み出でいると思います。

作者の限界です。勢いでやりました。「」めんなさい。
時間を無駄にしていい方。駄作を読んでも怒らず生暖かい田で見れる方はどうぞお読みください。

第1話 魔王

気が付いたら魔王でした。

僕達の冒険はまだまだ続く！！

応援ありがとうございました。

先生の次回作にご期待ください。

…終われる訳無いよね。

そもそも始まつてもないし。

目を覚ますと知らない部屋で寝ており、知らない女性が傍らに居た。

うん。これだけ話すと色々と誤解を受けそう。

でも実際の所は女性はベッドの傍らで看病してくれていただけなんだけど。

状況が分からず脳味噌がフリーズしている僕には今の状況を説明してくれる存在は有難かった。

どうやら僕は魔王の体に入ってしまったらしい。

意味がわらないよ。

魔王といつてもまだ正式な魔王ではなく、父である魔王の跡継ぎをめぐつて骨肉の争い勃発。

いざ魔王を名乗つて活動をしようとした時に勇者にエンカウントをしてしまい、壮絶な戦いの末に辛くも勝利を治めはしたもののかなりの深手を負つてしまつたらしく。

自称魔王（笑）

笑つたら長時間文句を言われた。ついで。

僕が魔王の中に入ってしまった原因は勇者との戦いにある。

魔王と勇者の戦いは熾烈を極め衝突により生まれたエネルギーは大地の形を変えるほどだった。

そして戦いの果てに魔王と勇者それぞれが放った魔法の余波が異次元の世界へとつながるゲートを開くことになり、そこから精神体が飛び出して弱った魔王に入り込んだらしい。

本来なら情弱な精神などは時間が経てば溶けて無くなるので問題はないけど（大アリだよ！）その後にイレギュラーが起こり僕の精神が定着して体を乗っ取つてしまつたらしい。

元に戻る方法は今のところわからない。

とりあえず元に戻る方法もわからないので当面は魔王として他の魔王候補をぶちのめしながら元に戻る方法を探そうという事になった。

うん…?

ぶちのめす？

無理無理無理無理！

僕は元の世界ではただの中学生だよ？

運動も得意じゃなく勉強も中の中と下を行つたり来たり、社交性も殆ど無く「クラスに一人いる目立たない奴その3」頑張つても村人その2だよ！「今日はいい天気ですね！」しか台詞が無いモブだよ！

嫌がる僕への説得はただ一言「やらなきゃ死ぬぜ？」

勇者との戦いに負傷したために現在は隠れているけど何時までも隠

れていられる訳も無く、発見されたら刺密などがわんわんか沸いてくることが予想される。

『だからやられると前に殺れ…』って事らしい。

勘弁してくださー…

「一体どうやって戦えばいいんだ」と思つたら魔王の身体能力は他のものより優れていますし魔力自体も失われてた訳ではないので、それで十分戦えると聞いて一安心。

よかつた

ドヘビーハサウエー使つの?

そこからが大変だった。

魔力は膨大にあるので魔法の使い方さえ理解すれば使うのは簡単だ
と思ったのに、いくら教わっても一つも使えない。
難しい話は分からなければどうやら魔法のバイパスが魔力に繋がつ
てないらしく、何で繋がらないかは原因不明。

魔力は膨大に在るのに使えないとか。。。。

ならば戦闘技術はどうかというと身体能力は魔王そのものだとして
も動かす僕はヘボ（悪かつたね！）いので、そこら辺の魔物にも勝
てない状況。

さてどうしようと困った所へ美人さんが「人族の土地へ身分を身を
隠しながら力を蓄えるのはどうでしょう？」と提案した。

人族の土地は魔族の土地に比べて魔物が弱く魔王も手を出しにく
い場所なので都合がいいらしいので人族の土地に行く事になった。

人族の土地に来てから『お前、こんな事も出来ないのか?』と蔑まれ、「頑張つてください~」と言いながらモンスターの巣に突き落とされる日々。

僕は身も心もぼろぼろになっていた。

実際は魔王の強靭の生命力を持っているので少々の傷なんかはすぐ回復するんだけど精神はズタボロだよ。

人族の町に来た晩に美人さんに「実は僕は魔王じゃ無いんです」と伝えたところ、『何で勝手にバラ済んだ!』と文句を言われてうんざり。

「僕は魔王じゃないけど魔王の精神も残ってはいますと言つと、美人さんは笑顔で首を傾げたが「魔王には変わりありませんから」と変わらぬ忠誠を誓ってくれた。

といつも美人さんは魔王の従者だったの!?

美人さんの言葉を聞いて『今日は何とかなったが…』うんぬんかん
ぬん

『今後は他人に簡単に話すな!』と喚いてるのが魔王です。
魔王の声は僕にしか聞こえないらしい。
直接頭に響くので耳を塞いでも意味が無くつるさい。

美人さん「入れ替わりの事などは危険ですので他の者には話さない
ほうがよろしいでしょう。」

笑顔で言われたので今後は気をつけよう。

魔王『なんで我的話は聞かず、美人の話だけ聞くんだ!』

「ふるさいなあ

そうして僕は剣術に関して超一流らしい美人さんに剣術を、魔王に
この世界や魔法について（無理やり）教わる事になった。

世界には2つの大きな大陸と大小さまざまの島がある。

一方の島で最大勢力を持つのが魔族
もう一方の島で最大勢力を持つのが人族

2つの島の間には激しい海流があるのでなかなかお互いの土地に軍隊を送るのは難しい。

だからと言って行き来が全く無いわけではなく、多きな戦争も数年～数十年に一回は起きることがある。

世界には他にも数多くの種族があり魔族や人族はそれぞれの大陸に偏っているが、それ以外の種族は一部特殊な種族を除いてどちらの大陸にもいる。

見た目に関しては人族と魔族の殆ど違いは無いようだ。

元々は同じ種族だったけど思想や信仰するする神の違いにより対立。

信仰する神の力を受け進化して人族に勝る魔力を手に入れた種族が魔族。

なら魔族が優位かと思つたら魔族はそれほど協調性のある種族じゃない上に身体能力に関しては、殆どの魔族が人族とさほど変わらないかちょっと上くらいのでしかないらしい。

魔族と聞いて想像する羽が生えてたり角があつたりするのは魔族ではなく妖魔族といい、別種族らしきけど思想が近いので魔族と共に存関係にある。

魔獸と言われるのは獸の類で殆どが知性は殆どないらしい。

種族は数が多いので全てを把握するのは難しいが大まかに分類すると「魔族側」と「人族側」の他にどちらにも所属しない「中立の種族」の3つに分かれるらしい。

うん。これ以上何か言われてももう覚えれないから！

まあ人族の中に魔王の僕が居てもよっぽどのが無い限り気づかることは無い。

ただ一箇所にとどまるのは危険なので冒険をしながら戦い方などを勉強していくことになった。

人族の土地に来て早数ヶ月

美人さんは最初の数日こそ剣の持ち方や構え方を教えてくれたけど「実践は練習の数百倍の価値があります」と、笑顔でモンスターの巣に落とされた時には本当に死ぬかと思った。
危ない時は助けてくれるけど少々の危ない状況なら笑顔で見ているだけなので美人なだけにその笑顔が余計に怖い。

そんなこんなで毎日命を掛けた結果、魔法は全く使えないままだったけど剣に関しては一端の冒険者波には使えるようになっていた。

…多分。

人族の土地に来て半年。

冒険者として色々とモンスター退治などのクエストをこなして来た僕は、他の冒険者に一日を置かれる存在になっていた。

なんて事は無かつた。

ただ「ものすごい美人を連れたガキが居る」という噂が聞こえてくるようになった。

美人さんはいつも通りの笑顔を浮かべているけど魔王が「そろそろここも潮時だな」と言つてるので別の町に移動する時期らしい。大体そういう噂が広がりだすとよからぬことを考える人間に町の外で襲撃されたり時には町の中でも絡まれる。

美人さんが居れば対応は簡単だけど、そういう問題に巻き込まれると色々面倒で仕方ない。

今は町から約半日の街道から少し外れた森の中で野営をしていた。美人さんのスペックはどどまることを知らず、ナイフ一本で晩御飯を調達しておいしい料理を作る。

美人さんって一体何者なんだろ？

聞いてみたけど「魔王様の従者です」と言われただけで、後は何を聞いても笑顔を返すだけなので聞くのをやめた。

2日目の晩

ぶつかり合ひ音と怒声に目を覚ます。

獣よけに絶やすことの無い火が消えた森の中は薄暗い。

ただ何も見えないわけではなく夜目が利くのは魔王の体質のおかげのようだ。

少し先に屈んで遠くを探る美人さんの背中が見えた。

僕「ビ…モ」

近づいて美人さんに尋ねようとした僕の口を手でふさぎ、静かにするようにジエスチャーで伝えてくる

魔王『少し先で数人の戦闘があるな。剣がぶつかる音がするから旅人が野盗にでも襲われてるのだろう。』

そんな事まで分かるのか。

僕（ビリショウ？）

美人さん（状況を見る限り野盗ですね）

美人さん（襲われているのは商隊のようで護衛が戦っているようです）

美人さん（ただ野盗の数は多く商隊の護衛は劣勢のようですね）

魔王『ここは捨て置いづ。巻き込まれるのは得策じゃない』

僕（え？）

戸惑つた僕に美人さんが目だけで「何か?」と問いかける。
魔王の言っていることを伝えた美人さんは少し考えてから判断は任せますと僕を見つめてくる。

魔王『今出たところで死体が一つ増えるだけだ』

僕のような弱い人間が出て行つても死ぬだけだと言つことか。
無力感に打ちひしがれる僕は美人さんが僕を見つめて『ここに気が付かなかつた。』

魔王『そうと決まればヤツラが気が付く前に移動しよう』

反応が出来ない。

魔王『早く移動しないとヤツラがこちらに気が付くかもしれん』

魔王の言葉を美人さんに伝えようと目を向けた時、いつも笑顔の美人さんが笑みを消しこちらを見つめていることに気が付き息を呑む。

『』！！

女性の悲鳴が聞こえる。

馬車の中から女性が引きずりだされたのが暗闇に浮かぶ人影でなんとか分かつた。

どうやら戦闘の音は止み野盗が勝利したようだ。

逃げようとする女性らしき人影を周りの人影が突き飛ばす。

子供の僕だってこんな状況に落ちいつた女性が受ける仕打ちについては大体の予想は出来る。

下卑た笑いが聞こえてくる。

倒れた女性の髪をつかんで引きずり立たせる姿を見て僕は無意識のうちに飛び出していた。

隠れていた草陰を突つ切つて行く事はない。

居場所がばれていらない状況で物音をするのは愚作。

木の葉を迂回し走り出す。

姿勢を低く足を音を立てないよつこー

野盗に気付かれないよつ馬車の陰に隠れて見られないよつこづこしていく。

敵の数は……8……9

馬車の横、女性の近くに4

少しほはなれたところで死体を漁っているのが5人

魔王『馬車の中にもう一人気配がある』

10人

とりあえず女性の近くから行く

息を止め一気に馬車の陰から飛び出す

立ち位置は最後に見た位置とさほど変わっていない。
こちらを向いていた野盗が声を上げようとしたがそいつの喉に向か
つてナイフを投げる。

ナイフは狙った場所ではなかつたが訓練の成果か右肩に刺さりAが
倒れこむ。

他の3人がとつさの事に剣を構えようとする。

女性の髪を掴んでいた野盗Bは背を向けていたために反応が遅れて
いたので背中から斬り付ける。

右手でナイフを素早く引き抜き右手に居る野盗Cに投げる。

当たらなくとも牽制になれば十分。

Cが怯んでいる隙に左手に居る野盗Dにぶつかる様に突っ込んで剣を突き刺す。

魔王『飛べ！』

剣が引き抜けずに止まつた僕に魔王の言葉が聞こえ無我夢中で剣を手放し左に転がるように飛ぶ。

急いで立ち上がって見るとCが背後から僕に斬りかかるつもりしていた様だ。

僕が急に避けた為にCの振りおろした剣は「僕という支えを無くして前のめりに倒れるD」を斬り裂いていた。

ここに来て自分の手に残る人を殺した感触に血の気が引く思いをする。

人を殺した。人を殺した。ひとをこうした、ヒトヲコロシタ・・・

魔王『しつかりしろ！死にたいのか！！』

魔王の声にはつとする。

まだ目の前に1人、周りに5人以上居るのに剣が無い状況。
ここで呆けていたら殺されてしまう。

急いで腰のナイフを取り出す。

他の連中が来る前に目の前の敵を倒すか武器を奪わないとやばい。

魔王『あせるな』

魔王の一言に気持ちを無理やり落ち着かせる。

そんなんで落ち着くわけ無いけど！

そういう気持ちだけでも持つてみる。

大股で突っ込んできた野盗Cが剣を振り下ろして来るのを体をずらして避ける。

ナイフを突き出したがCは後ろに引いて逃げながらなぎ払ってくる剣をどうにかナイフで受ける。

剣を押し戻しつつCに向かつて踏み込む。
バランスを崩して倒れこむCに覆いかぶさるようにしてCの胸にナイフを突き立てる。

痙攣をして動かなくなつたCを見て疲れと恐怖がどつと押し寄せる。

魔王『

！』

荒い呼吸と心臓の鼓動がうるさい。

魔王『おい、気を抜くな！』

魔王の声にまだ野盗が居ることを思い出し急いで野盗の剣を拾い周りに注意を向けたところで、馬車に寄りかかりこちらを見ている美人さんと目が合う。

どうやら残りの野盗は美人さんが倒したらしく、僕が野盗と戦つているのを見ていたようだ。

美人さん「相手が油断していたとはいえ敵に察知されずに近づいたのは中々良かつたですね。」

魔王『一人で突っ込んだのは大間違いだがな』

美人さんは僕より後に飛び出したはずなのに何時から見ていたんだろ？

美人さん「最初の投擲は命中精度が低いですね。減点1です。当たつてよかつたですね。」

何ぞの減点！

美人さん「2投目は牽制のつもりでしょうが、それでも急所に当てるつもりで投げないと駄目ですね。減点2」

何点でどうなるの！？

魔王『魔法があれば牽制なんぞ考えずとも敵を葬れる』

美人さん「まだ敵が近くに居る状態で突きは判断としては良くないですね。減点3。現に抜けなくなりましたしね。」

僕が疑問を口にするより先に減点数が増えていく。

もう止めて！僕の点数は〇よーー！

美人さん「ただ背後からの攻撃を避けたのは中々の判断でした。振り返つたりしたら死んでました。」

魔王『避けたのは我の忠告のお陰だがな』

それはありがとう！魔王。

美人さん「その後に別の事に意識を取られたのは減点4。敵を目の前にして注意が散漫になるとやられますよ。」

魔王『全くだ。人を殺した程度で動搖なんぞして』

！！

そうだ僕は…人を殺したんだ…

美人さん「ナイフを使った戦闘はバタバタしてよくないですね。減点5。相手がバランスをくずさなければ危ないところでした。」

魔王『本当に吊人形の劇を見ているような無様さだ』

美人さん「最後に敵がまだ残っている可能性があるのに気を抜いたのは致命的ですね。減点6…』

そこで顔を真っ青にした僕に気が付いたのか美人さんは僕を抱き寄せる。

美人さん「ただ初陣としては及第点を挙げてもいいかもしません。

』

と優しい声で囁いてくれる。

美人さん「貴方が野盗を倒したお陰で一つの命が助かりました。まずはその事を誇りに思ってください』

美人さんの体温と匂いに心が少し落ち着く。

美人さん「人に手を掛けた事に対しても慣れるともいいません。人を殺す事に慣れるのは怖いことです。」

美人さんの鼓動が聞こえる。

美人さん「ただ相手は野盗です。罪を感じる必要は在りません。」

冷え切っていた指先に血が戻つてくるのが感じる。

美人さん「人を手に掛けた事に潰されること無く乗り越えてください。」

美人さんの優しさに心苦しさが溶けていくように感じた。

魔王『状況を利用して女に抱きつくな……策士だな』

そ、そんな事考えてないからねーーー！

色々台無しだよ魔王。。。

第1話 魔王（後書き）

誤字修正
数十年い一回は 数十年に一回は
立ち居地 立ち位置

第2話 首輪

小刻みに震える女性 小柄だし少女?を田の前に僕は途方にくれていた。

僕「怪我は無い?」

少女(ビクッ)

「ひこう時に話しかけられて驚いているようだ。」

困ったな。

魔王『仕方ない。我的言つとおつとが良かぬつ』

魔王『女へ掛ける言葉一つ知らないのか?』

「わざとこな。

魔王『仕方ない。我的言つとおつとが良かぬつ』

僕(魔王)「『賊は退治した。もう心配する事は無い』」

その言葉に少女が恐る恐ると言った感じでこちらを見る。

いい感じだよ魔王！

僕（魔王）「『さあ涙を拭ぐがよい。愛い奴よ。我が可憐がつてや
ろう。苦しゅうない、近k』『おかしいから…』」

僕の（傍から見たら）一人ツツ『ミ』に少女がビクッと体を揺らす。
また警戒心を抱かせてしまった。。。。

まだ魔王は何か言ってるけど役に立たないのが分かつたので放置。
地味にうるさい。

どうしようか困っていたら野盗を縛り上げた美人さんが戻ってきた
ので少女の事は任せ、僕は賊の見張りに付くことに。

生き残りは僕が最初にナイフを刺したAと美人さんが倒した5人の
計6人か。

全員生捕りとかさすが美人さん。

賊は全員氣絶させられて縛られてるので見張る必要が在るのかは疑
問だけど何もしないよりはマシだよね。

少しして美人さんに呼ばれる。

どうやら少女が落ち着いたらしい。

焚き火の光の中に美人さんと毛布にくるまれた少女が居る。毛布なんてどこにあつたんだろう?と思つてたら、どうやら馬車の中についたのを拝借しているらしい。

僕「落ち着いた?」

少女(「クリ」)

一瞬、体を膠着させながらも小さくうなずく。

焚き火の明かりに照らされる少女の後ろにある羽を見て「あれ?」と思つ

魔王『ほう。妖精族の者か』

僕「妖精族?」

妖精少女(「クリ」)

魔王『妖精族というのは精靈の森に住む種族で滅多に外に出てくることは無い珍しい種族だ』

何でそんな種族がこんな所にいるんだ？

魔王『大方、人間にでも捕らえられたのである。』

よく見ると首に大きな首輪のよつなものが付けられている。

魔王『封輪か。』

封輪？

魔王『あの首輪を付けられたものは魔力を封じられる。』

美人さん「どうやら彼女は住んでいた森の付近で囚われ無理やり連れてこられたそうです。」

どうしたことなの？と美人さんに目を向けると、さつきの短い時間である程度美人さんが話を聞いてくれたらしい。美人さん優秀すぎる！

べ、別にその間の会話が面倒だったわけじゃ無いんだからね！

- ・名前は妖精少女
- ・妖精の森附近に居るところを人間に捕らえられてしまった。
- ・妖精の場所は良く分からぬ（外に出ることが無いので地理は理解してない）
- ・捕まつて1ヶ月くらい（眠らされてたりしたので正確な日数は不明）
- ・どこに連れて行かれるかは不明。
- ・一緒に居た人たちは私を捉えた人たちの仲間（奴隸商人の一昧らしい）
- 全部で7人（商人が1人、御者が1人、護衛が5人）
- ・皆の所に帰りたい

奴隸商人の一昧は全滅していた。
少女に関してどうするかだけど…

魔王『ちょうどいい。珍しいから買おう』

うん。だまれ。

僕「この子を家まで送つて上げようと思つんだけど」

美人さん「わかりました」笑顔で即答

妖精少女（キヨトン）

何を言われたのか分からなかつた妖精少女は僕の言つてる意味を理解し驚きをあらわす。

僕「とりあえず封魔の首輪だけど。どうにかならないかな？」

美人さん「そうですね。本来なら鍵になるものがあるはずなんですが奴隸商人はそれらしいものを持つて無いようなので、鍵自体は本来の目的地にあるのかもしれません。」

鍵が見当たらないのは困ったな。

魔王『なんでわざわざ外すんだ。』

』

「ねむことよ、魔王。

美人さん「無理に外すのは危険ですね。」

首輪自体に魔力が込められており正規の鍵以外で外そうとするのは
装着者の命に関わるらしい。

魔王『このまま飼えばいいではないか』

だから少し黙つてね。

見ていて気持ちいいものじゃないので外してあげたいんだけどなあ。

魔王『別に鍵なんて無くても外すことは可能だ』

もういいかげんに…え?何だつて?何て言つたの魔王!?

魔王『我はねむることのあいつ。黙つておるから好きであるよ。』

「めんなさい。もひねむること（あまつ）言わないから機嫌
を直して!」

魔王『……』

本当に『い』めんなさい。魔王様の力を見誤つておりました。

魔王『……』チラリ

さすが魔王様、博識！僕らに出来ないことを平然としてしまつ……！

魔王『……』ニヤリ

そこにはびれるーあこがれるーー！

魔王『……』テレ

優しい魔王様。どうか無知な私めに魔王様のすばらしい英知をあとえくださいませーー！

魔王『……仕方がないな』ニヤニヤ

この魔王ちよろす、ぎーーー！

魔王『何かいつたか？』ギロリ

イエイヒ。メツソウモアコマセン。

で一体そつすればいいの？

魔王『簡単な事。我的魔力を持つて首輪の魔力を相殺してしまえばよからづ』

でも僕、魔法使えないよ？

魔王『魔法は関係ない。直接首輪に触れて魔力を注入するだけで無効化できる』

おお！

魔王『はずだ』

確信じゃないのかよ！

魔王『お主がちゃんと魔力を出せるか分からぬからな。我がするなら確実なんだが。』

なるほどね。

美人さんと妖精少女に首輪は何とかなりそうだと伝えると妖精少女が伏せていた目を僕に向ける。（可愛い！）
ただ僕自身もやったことが無いのでぶつつけ本番じゃなく少し練習する時間がほしいということも伝える。
そして妖精少女を元に居た場所に送つていく予定だと語りつと妖精少女は「お願いします」と小さな声で言つてきた。（本当に可愛い！）

縛り上げていた野盗の一人を起しして尋問する。

妖精少女は馬車に居てもらつている。

尋問は美女さんがする事になった。

僕は尋問なんて出来ないからね！

魔王『へたれめ』

その通りだけど、つむれこよー！

野盗E「うう……」

美女さん「田が覚めましたか？」——

野盗E「一体何が…はつ！」

野盗Eは縛り上げられているのを理解し声を荒げる

野盗E「一体どうこうつけやうだ！」

美女さん「私の質問だけに答えてください」 一一二一

野盗E「俺たちを誰だと思つてるんだ！」「なん」としてタダで済む
と思うなよ！！」

美女さん「一体誰なんですかね？何が起りるんでしょ？」「一」

顎に手を当てちよこんと首を傾げる美女さん。

野盗Eは「どうだ！」とばかりに名前を言うが、そんな名前を僕たちが知るわけも無く美人さんは笑顔のまま。

美女さん「で、その由緒正しき野盗さんは全部で何人くらい居るんですか？」 一一二一

野盗E「聞いて驚け。全部で100人を超す大盗賊団だ！」

美女さん「あらあら」 一一二一

野盗E「さつやと」の繩を解かないと俺らの仲間が容赦しないぜ！」

美女さん「そうなんですか？」 一一二一

野盗E「へつ今更怖氣付いても遅いからな

美女さん「で、本当の所は何人なんですか？」 一一二一

野盗E「だから100人を超す…」

美女さん「別に本当の事を言わなくてもいいですよ、いずれ自分が
ら言いたくて仕方なくなると思いますし」二二二二

野盗E「へ？」

美女さん「別に貴方に聞かなくても他にも聞く相手はまだ居ますか
ら」二二二二

その後の美女さんの拷問については多くは語るまい。
ただ野盗E・F・Gが精神的に少し陽気になつたくらい。

陽気ナノハイイコオダヨネ。

魔王が『美女だけは怒らせないよ』といつぱりと呟いたのに僕も心
の中で盛大に頷いた。

美女さんの誠意溢れる説得で聞き出した内容をまとめると

- ・本当の人数は19人（ここに居る人数を抜いたら残り9人）

- ・近くの山の中腹に拠点がある

- ・2ヶ月ほど前に別の土地からここに流れてきた

- ・いつもはこの街道を通る商隊や付近の村を襲っている

- ・別働隊の9人は近くの村を襲っているはず

- ・親分は妖精少女の髪を掴んでいた男（最初に倒しちゃったよ）

それだけ聞くと美女さんは野盗に自身を入れて氣絶させてしまう。

笑顔がむっちゃくちゃ怖い。

奴隸商人の馬車は前が馬も無事で使えるようなので使う事にする。人が乗る箱部分と後ろが奴隸を入れるだらう牢屋部分が連結してい

たので、生き残った野盗を縛つたまま後ろの牢屋部分に押し込む。少し考えて一応、奴隸商人と護衛の死体も一緒に牢屋に突っ込んだ。

もしかしたら商人の死体から何か分かつて他の奴隸が助かつたりしないかな？

とか思つて美女さんに聞いたら「大丈夫でしょうが私たちが商隊を襲つたと勘違いされるのを防ぐためです」と言われた。

前の箱に僕と妖精少女が乗り込み美女さんが御者をする事になった。

夜が開け日が昇つて少したつてから騎乗した兵士10人に出会う。騎士たちは野盗を討伐する為にきた領主の兵で馬車の後ろの牢屋の話をすると死体と野盗は引き受けくれる事に。

妖精少女については奴隸商人に連れられていた奴隸の少女で元の村

が僕たちの向かう方向と一緒になのでついでに送る旨を伝えると、当初は自分たちがと言っていた騎士も最終的には美女さんの笑顔に「お願いします」と言っていた。

美女さんの笑顔、最強ですね。

まあ妖精少女が僕たちに懐いていたのもあるかもね。（主に美女さんただけど）

妖精少女の羽は毛布に包まって隠していたので大丈夫。

恐怖に今だ怯えた少女を演出（殆どその通りだけど）

褒美も出るし出来ればこのまま館まで野盗と死体を運んで貰えないかと言われ美女さんが快く了承。

後で聞いたら「あそこで断ると不振に思われるから」と笑顔で言われた。納得

野盗と戦った場所、アジトの場所、残りの野党の人数、近隣の村に被害が出ている可能性を伝えたところ、討伐体の騎士たちは馬を駆つてあつという間に見えなくなつた。

僕たちは後に残つた一人の騎士と共に領主の館へ向かつた。

昼前に領主の館に到着。

騎士に案内されて領主に面会する。

領主「野盜討伐に協力してくれたらじいな。感謝する」

50代のダンディーなおじ様きたこれ！

領主「つてもつとぼつてりと不健康に太つていて無駄に威張つてると
思つてた！」

魔王『まあやうこいつ輩は腐るほど居るがな』

やっぱりいるんだ！

領主には僕をとある地方貴族の三男で美女さんはその従者で、見聞
を広げるために冒険者をしながら旅をしていると伝えた。
領主の言葉に美女さんが如才がない対応をしている。

いいのかな任せきりで。

魔王『人間界の事は美女に任せなければ間違いなかろう』

意外と信頼してるんだね。

魔王『……』

あれ？ 照れちゃってるの？ —ヤ—ヤ

魔王『つむやこ』

領主「褒美は何がよい？」

美女さん「頂けるのでしたら奴隸商人の馬車を」

領主「あれでいいのか？」

美女さん「はい。旅に馬車があると便利ですので」

領主「ふむ」

美女さん「あと、出来ることならばむつ一つお願いしたい事が」

領主「それは？」

美女さん「奴隸少女は私たちが村まで送らせて頂きたいです」

領主「私の方でも送り届けるつもりだったのだが？」

美女さん「奴隸少女も私に懐いておりますし、ちょうど彼女の村の方面に向かいますので」

妖精少女が美女さんを不安そうに見上げてギュッと服を掴む（可愛い！）

それを優しい微笑で見つめる美女さん。

魔王『綺麗だが薄ら寒いモノを感じるのは何故だろ？』

そうだね、と心で頷いた瞬間に美女さんがチラッとこちらを見たのと田^タが合った

全然何も思つてませんよええとても素晴らしい笑顔に僕は神に祈りを捧げる勢いで

と奥く分からぬ言い訳を心の中で一心に呟え続ける。

「、心が読めるの？ 美女さん！」

魔王『ナーモイシナマセンパー』遠い目

魔王の声は聞こえない筈なのに同じへ言い訳をする魔王。

その姿勢を弱いとは言えない。

領主「ふむ。確かに懷いてるようだな。」

妖精少女と美女さんを見て呟く。

領主「よし分かった。その少女のことはそなたに任せよう。

美女さん「ありがとうございます」

領主「他に何か望みはあるか?」

そういう領主に美女さんは僕を見つめる。ああそか。

僕「特にありません」

一応、僕が主人なのか。

魔王『一応じゃなく主人なんだがな』

全然そんな気にならないね。

その後、領主が今日は泊まつていって欲しいといつ申しだして「期日の迫った届け物があるので」と辞退。

では風呂は無理でもお湯を沸かすので身を清めてはとこうのには美女さんが笑顔で「ありがとうございます」と言つ。

1刻後。

スッキリした僕が部屋で待つてると美女さんと妖精少女が戻ってきた。

妖精少女の衣服は領主さんが「子供用は無いが詰めて使ってくれ」と幾つかの服をくれたので、それを美女さんが簡易で詰めたのを来ている。

ゆつたりとした服で羽が隠れるように出来ているようだ。

なんていうのかな。

身を清めて着替えた妖精少女は本当に妖精のよう可愛い！（妖精だけど！）

魔王『ホウ、これは将来有望な逸材だな』

将来とかじやなく今でも十分な逸材だからね！

その後、簡単な食事をこ馳走になり領主に挨拶をし、館を後にした。

第2話 首輪（後書き）

1話で魔王で魔族の後継者争いがビリーフの話が出ましたが当分は関わって来ません。そもそもそこまで話が続くかどうかも分かりません。

とつあえず言えることは「可愛いー！」

誤字修正

ナイフを指した	ナイフを刺した
持つて内容なので	無いようなので
陽気ナナノハイイコオダヨネ	陽気ナノハイイコオダヨネ
要請のように可愛い	妖精のように可愛い

第3話 戦士

旅の一日は日が高いうちに移動し日が落ちる前に野営する。

朝は美女さんに馬車の扱いを教わるが簡単そうに見えて中々うまくいかない。

妖精少女は馬車の中から興味津々と言つ感じで見ている。

「一緒にやる?」と聞いたら小さく首を横に振つて僕がやっているのをじつと見ていた。

昼からは馬車の中で妖精少女の首輪を外す特訓。

といつても手のひらに魔力を通せるようになる訓練だけど魔王が『そんなことも出来ないのか』『子供でも出来るぞ』『恥ずかしい』と言つのが煩い。

夕方頃に野営準備をする。

野営地は街道にある程度あるので通常はそこを使用する。

先客が居たり後から人が来たりする場合は要注意。

妖精少女の正体が妖精族と悟られないようにも注意しなくてはいけないけど、大体は美女さんによからぬ事をしようとする輩が出でくることがある。

誠意を持つて告白する相手には笑顔できつぱり拒絶するだけですむけど、腕力にモノを言わせようとする相手には笑顔でねじ伏せる美女さん。（コワいー）

魔王『花が野花か食人花かも見分けれんと愚かな。あんなのに手を出そとする気が奴の知れん』

貴方の従者ですよね？

食事の後は美女さんの剣術指南。これがハード。

美女さん曰く「疲れきつたら夜中に何かあつた時に対応できないので程ほどに」やつてゐらしきけど。

妖精少女はここでも興味深そうに見ている。
さすがに「一緒にやる？」とは聞かない。

その後は僕と美女さんが交代で見張りをし一日が終わる。
妖精少女も見張りをするつもりらしいけどすぐに船を漕いでしまう。
(可愛い！)

領主の館を出て数日。

その間のエンカウントはモンスターとの遭遇が2回。
毛皮と食用の肉が手に入った。肉はその夜に美女さんが燻製にした。

途中に寄つた村で一部の毛皮と燻製肉を物品と交換する。

その中に子供服も何点かあつた。さすが美女さん。

無地のワンピースだけどよく似合つていて可愛い！

そして5日程たつたある日。

魔王『やつとか

魔力を宿した手を見つめて呆然とする僕

魔王『結構な時間がかかつたな』

僕「やつた…」

この日、やつと手に魔力が通せるようになったのだ。

魔王『ますは第一段階クリアだな』

やつと、これでやつと妖精少女の…第一段階？

魔王『うむ。これからその魔力をコントロールできるようにな
とな。』

まじですか！

魔王『次の段階は魔力を手のひらに集めるよつとする。』

ふむふむ

魔王『その後は魔力の強度を調節できるよつについて何とか首輪を無
効化できる』

なるほど

魔王『武器などに魔力を通せるようになつたら元壁だな』

武器に魔力！魔法戦士ですね！

魔王『まあそこらの武器などは魔力を通した瞬間に碎けるがな。』

意味無いじゃん！

魔王『うまく魔力を通せばなまくらでも少しくらいの切れ味や強度
は上がるだらつ』

おお！

魔王『その脆弱な武器を壊さないようつと魔力が通せるようになれば首輪も外せるだろう』

砕けるなりそれで外しちゃえぱいのに

魔王『首輪に限ったくない破壊は装着者も傷つけて場合によっては死ぬが?』

練習大事だよね!

魔王『手のひらに集めることが出来たら後は微妙な調整をするだけなのであつといふ間だ』

よし、がんばりつ!

魔王『(多分な)』

ん?何か言つた?

魔王『何も言つておらん。まあ始めるが』

もつすぐで妖精少女の首輪が外せると思つと修行にも力が入る。

魔王『力みすぎだ、もっと力を抜け！馬鹿者ーー！』

空回りでした。

数日後

空回りは続く。

魔力を手のひらに集めることが出来ない。

魔王は『魔力をボツボツじゃなくホツホツといつ感じにすれば出来る』と言つ。

意味がわからんないよ。

知識についてはちゃんと教えることが出来る癖に（口は悪く偉そうだけど）

感覚の話になるとまじ苦労してない分、説明が出来ないらしい。

美女さんに愚痴をこぼしたら少し首をかしづ

美女さん「魔力は出せるのですからその魔力を手のひら全体ではなく手のひらの中心に意識をし、丸い石のようなものを掴む感じをイメージしてみてはどうでしょう？」

とアドバイスをしてくれた。

その説明は分かりやすいけどそんな事でいいのかな？

とか思いながらやってみたら出来た。

掌に魔力が集まっている。

妖精少女はそれを珍しそうに見た後に自分の掌を眺めてた（可愛い！）

魔王『ほれみる。言つた通りできたではないか』得意げ

魔王の説明で出来たんじゃなく美女さんのおかげだからねーー！

そこからは物に魔力を通す特訓が始まった。

さすがに剣を駄目にするわけには行かないのでも石や木の枝などに魔力を通す。

最初はどれくらいの量なのか分からずにとりあえずちょっと力を入れたら

手のひらサイズの石が一瞬で割れたのにはビックリした。

数日が経つ頃には物の大きさ魔力の容量では無いことが分かった。

同じ場所の石でも物によって容量が違うのは不思議だ。

分かつたからと言つて壊さずに通せるわけではないけど。

魔王の説明は相変わらず良く分からぬ。

本当に感覚の説明は壊滅的に駄目だな。

駄目元で美女さんに聞いてみた。

美女さん「私は魔力自体はさほどありませんので良く分かりませんが」

僕「美女さん魔力はそれほどでもないんだ。」

美女「ええ。ドリフトンを丸焼きにする程度にしかありません」

僕「そうか、ドリフトンをええええ？」

美女さん「冗談です」――

美女さん…冗談に聞こえないから。

美女さん「魔法に関しては嗜む程度なので詳しくはわかりません。」

美女さん、この前「剣術以外は嗜む程度」って言つてたのに無理やり手籠めにしようとしたゴツイ男を3人素手で倒してたよね…？

美女さん「魔力を通すという感覚ではなく入れるという感覚なのでしょうか？」

僕「何が違うの？」

美女さん「そうですね。通すとなると流し込む感じをイメージするのですが、入れると言つのは」

とセリで田の前にある器を取り

美女さん「」のように器に水を貯める感じなのではないでしょうか？」

器に水を注ぐ美女さん。

美女さん「一氣に入れると水はこぼれてしまいます。最初は緩やかに次第に勢いをつけて入れます。そうしていっぱいになる前に止めんんですね。」

水をぎりぎりまで入れる。

美女さん「ただ水をいっぱいまで入れてしまうと少し揺れただけでこぼれてしまいます。ですのでMAXまで入れるのではなくすこし余裕を持たせる感じで魔力を通せば壊れてしまつ事も無くなるという事ではないのでしょうか？」

なるほど~

試しに横に転がる石を手に取り試してみる。

最初は少なめで徐々に満たしていく

石に魔力が通るのが感覚で分かる。

とすぐに石が割れてしまった。

妖精少女が割れた石を見て「おお～」と手をたたいていた（可憐い！）

美女さん「あら～ダメでしたか？」

全然そんな事ありません。

いつもは一瞬で壊れていたものが少しでも魔力を通す」とが出来たので

何となく感覚はつかめました。

魔王『だから何度もそうこうつてたのに。これだから理解力の無い奴は』ブツブツ

もうひとつじゃないよ？

そりに数日。

途中、立ち寄った村が野獸による作物の被害で困っていたので退治の依頼を受ける。

妖精少女は危ないので村に居たらどうか?といつ村長の申し出は妖精族だとバレと困るので連れて行くことに。

美女さんがいたらある程度の脅威なんか田じやないだろうしね。

野獸は村の東の森から来るらしい。

数名の村人と日中に東の森を探してみたがそれらしいのは見つからなかつた。

夜は村長の家を間借りする事に。

野獸は深夜に現れるらしいので村人と協力して見張りに立つもの有何事も無く朝を迎える。

翌日は東の森から少し南のエリアを探すもののやはり野獸は発見できず。

途中でゴブリンを発見したので倒す。

村人曰く今までこの森でゴブリンを見たことは無いらしい。ゴブリンは群れで行動する。必ず近くに巣があるはずだ。

今まで見たことが無いことはまだ巣が出来たばかりだと思われるが、放置をすると数を増やし必ず村に被害が出るので早めに潰しておくことに。

足跡を辿っていくと崖に穴を掘った巣らしきものを発見。

森からこじり伺つと巣の前で5匹の「ゴブリン」と2匹の狼が争つていた。

村人に物音を立てないようにじつとしている様に指示を出す美女さん。

狼は「ゴブリン」に傷を負わせているようだが劣勢のようだ。
それでも引かずに「ゴブリン」に向かっていく。

一匹の狼が「ゴブリン」の喉に噛み付く。

その狼に別の「ゴブリン」が手にした木の棒をたたきつける。

その後も両者の戦闘は続いたが数の勝る「ゴブリン」が勝利を収めた。
しかし2匹の狼もただやられた訳ではなく、2匹の「ゴブリン」を倒し
生き残った3匹も満身創痍の状態だった。

そこまで見て僕と美女さんが飛び出す。

驚いた「ゴブリン」はこちらに向かおうとするものが2匹、残り一匹は
逃げようとしていた。

正面にいる「ゴブリン」が一匹向かつてくるのが見える。
僕はのっそりとした動きに注意をしながら接近。

振りかぶった木の棒を持つ腕を斬りつけた後にがら空きの体を斬り
裂く。

美女さんを見るとあつという間に1匹の「ゴブリン」を倒したいつもの
笑顔で逃げる「ゴブリン」を見ていた。

あれ？何で逃がしたんだろう？

そう思つてると美女さんが村人を呼び寄せて指示を出す。

美女さん「数名私とついてきてください。ゴブリンの巣を潰します。

」

美女さんはここがゴブリンの巣じゃないと判断したようだ。

美女さん「残りはここで他に居ないか確認作業をしてください」

僕は居残り組みだった。

まあもし他にゴブリンが残っていた場合に村人だけだと厳しい、信頼されてると思つておこう。

美女さん「妖精少女をお願いします」――

そういうと数人の村人を引き連れてゴブリンの後を追つた。

ゴブリンと野獣が本当に死んでいるのか確認をすると狼にやられたゴブリンは2匹とも喉を食い破られて死んでいた。

僕と美女さんが倒した2匹も即死のようだ。

2匹の狼のうち1匹はすでに死んでいたが、もう1匹は辛うじて息

はしていた。

光を失いつつある田がそれでも僕を必死でにらんでいる。

魔王『ほひ』

村人の話ではこの2匹が村を襲っていた野獣らしい。村人は止めを刺して毛皮を剥ごうと話をしている。

魔王『トメロ』

え？

魔王『あやつらを止める』

毛皮を剥ぐことを？

とりあえず村人に止めを刺すことと毛皮を剥ぐことをやめるように伝える。

不満の声を上げるがどうにか納得をしてもうことが出来た。いつの間にか妖精少女が狼のそばに座つて毛並みをなでていた。血で自分の服が汚れる事は気にならないようだ。

そんな妖精少女を見ていた狼の目の光は弱つていき小さく鳴くと動かなくなつた。

魔王『いやつらは戦士だ。 戦士の身を汚すような事はするべきでは

ない『

そういうものなの…かな。

狼の死体を埋める穴を掘らないとと思つたところで洞窟の中から小さな声が聞こえた。

見ると狼の子供が2匹、洞窟の入り口から飛び出した。

どうやらここには狼の巣でゴブリンから子供を守っていたらしい。村人達が「狼だ」「子供だ」「まだ残っていた」と騒ぎ出す。小さいうちに殺してしまおうという村人達に声がかかる。

妖精少女「この子たち殺しちゃうの？」

全員の目が妖精少女を見る。

妖精少女「殺しちゃうの？」

不安げに見上げてくる。

村人が「仕方ないんだよ」という風なことを説明するが納得されるわけもなく
妖精少女は2匹の子狼を抱き上げる。

妖精少女「かわいいそつ」

どうしたものかと思つてゐるところに美女たちが戻つてくる。
どうやらゴブリンの巣があつたようで、5匹ほどいたけど全部倒し
巣を潰してきたらしい。

さすが美女さん。

子狼に関しては話を聞いた美女さんは少し首を傾げたが、妖精少女
に「ちゃんと責任を持てますか?」と聞く。

頷く妖精少女を見て「私達が責任を持つて連れて行くので任せて欲
しい」と笑顔で村人に伝えた。

「村長に相談しないと」としどろもどろになる村人。
美人さんの笑顔つよ!

力技だなあ

2匹の親狼を丁重に埋葬したいという魔王の意見を聞いた美女さんは狼の巣に2匹の遺体を入れて崩すのはどうかと提案してきた。
狼の巣が別の野獣の巣になる事もないし埋葬も出来るというのだ。

魔王『戦士の身が汚されることの無いようになるなら問題は無い』

いいんだ。

狼の巣に他に何もない事を確認。巣はそれほど大きくも深くもな

かつた。

親狼2匹の遺体を巣の奥に横たえた後、美女さんが洞窟の入り口上方に剣を走らせる。

それだけで入り口が崩れ埋まる。

魔王は小さな声で何かを呟いていた。
魔族に伝わる戦士を送る言葉らしい。

入り口は完全に埋まった。

洞窟全体を考えると中は空洞が在るかも知れないが、無理に掘り起
こそうとしたら崩れて危険なのでもう使用されることは無いだろう。
子狼は妖精少女の腕の中で大人しくしている。
どうやら親狼の血の匂いが子狼を安心させていたようだった。

村に戻つて村長に狼の脅威がなくなつた事とゴブリン退治を説明。
驚きの後に村長はゴブリン退治の謝礼が出せるほど蓄えが無いと申
し訳なさそうに切り出した。

通常、ゴブリンの巣を潰す依頼となると規模にもよるが野獣退治の
報酬の数倍もする。

僕「いえいえ。かまいません。我々は皆様が安心して暮らしていく
事が最大の喜びです」キリッ

なんて事を僕が言えるわけも無く

美女さん「いえ。狼はゴブリンとの戦闘で果てました。我々はその後にゴブリンを倒しただけ過ぎませんので先のお約束の報酬でかまいません。ただその代わりと言つてはなんですが2匹の子狼は私どもにお任せください」

それでようじいですね?と僕を見る美女さんに頷く。

全く問題ないです。

村長も村人も僕達にすごい感謝をしていたけど、それよりも2匹の子狼について妖精少女が喜んでいたのがよかつた。（可愛い！）

魔王『我の眷属として立派に教育してやひつ』

得意げに2匹の子狼を見て言つてるけど、懷いてるのは妖精少女にだからね？

第3話 戦士（後書き）

数日が立つ頃 数日が経つ頃
物の多きが魔力の容量では 物の大きさ魔力の容量で
体をな切り裂く 体を斬り裂く

第4話 出会い

子狼が来て数日がたつた。

順調に妖精少女に懐いているようで周りでじやれあつてゐる。
食事も妖精少女の手からなら食べるようだ。

最近の妖精少女はよく笑うようになつたと思う。（可愛い！）
元々は良く笑う子だったのだろうけど怖い目にあつて心を開きはじめていた。

子狼を助けて本当によかつた。

ただその笑顔をまだ僕には向けてもらえてないけどね。

さ、寂しくなんかないんだからね！

魔力の訓練はある程度の成果を見せつつある。

手当たり次第にそこらにある石や木の枝に魔力を通しているが、勝率は7割と言つていいまで来た。

魔王『石程度で100%じゃないといふのはマダマダだな』

厳しいなあとも思わないでもないけど妖精少女を危険な目に合わせる訳には行かない。

僕達は国境を越え新しい国に入った。

国境は兵士が多く物々しい感じだったが、特に何も言われなかつた。

僕達の旅は特に問題は無く進んでいる。

たまにある野獣とのエンカウントは問題に含まれない。食糧補給になるしね。

2日目の晩に美女さんが「他の旅人などと会わなくなりました」と呴いていたのが印象に残つた。

確かにここ数日、旅人も商人ともすれ違つていない。

ただそういう事もあるかな、という程度のものだつた。

3日目の昼前に村を発見したので寄る。

近づくと至るところが壊れており廃村だとわかつた。
村に入ると黒焦げた家などが見受けられる。

炭になつた部分を見る限り燃えてある程度の日にちがたつているようだ。

壊されたり焼けたりしている家を見る限り野盗の仕業かもしけない。野盗の5人や10人程度なら美女さん一人で大丈夫だと思うけど村が一つ潰れるような状況というのを鑑み、この場を離れたほうが多いという事になり廃村を後にする。

5日目の夕刻

争う声が聞こえて馬車を止める。

街道脇の森のほうから複数の人間が飛び出してきた。

どうやら大柄な人物に手を引かれた小柄な人物が複数人の人間に追

われているようだ。

追われているほうはどちらもフードを被っている為にどういう人物かは分からぬ。

相手はこちらに気がついたようで僕らと違うほうへ行こうとして小柄な人物が躊躇転んでしまった為に後から追ってきた集団に追いつかれる。

「逃がすな！」 「取り囮め！！」

大柄な人物は小柄な人物を庇う様に敵に剣を向ける。

なんなんだ？

状況が良く分からない僕。

美女さん「いつでもいける準備をしてください。妖精少女は馬車に隠れていてくださいね。」

美女さんが小声で言つてくる。

追いかけ來たのは同じデザインの鎧をきた男が9人。

そのうちの一人が顎で合図を送ると2人が馬車に向けて走つてきた。その様子を見た大柄な男がこちらへ「逃げろ！」と声を張り上げる

美女さん「2人こちらに来るようです。どうやら私達を害するつもりのようです。状況はわかりませんが仕方ありません。あの2人を助けてます。タイミングを見計らつて馬車から出て注意をひきつけてください。」

馬車に近づいた男に美女さんが「い、一体なんでしょう?」と怯えたような声を出す。

魔王『いつも笑顔の美女の怯えた声の顔ってどんなんだ?』

馬車で息を殺して隠れている僕に魔王の呟きが聞こえる。

「うわ〜、どんな顔だろう?

緊張感溢れるシーンなのにもう僕は好奇心が一杯で仕方ない。もう敵に発見されてもいいから見に行っちゃおうかな。

といつものすごい誘惑に駆られながら我慢する。

鎧男「旅人か?」

美女さん「は、はい」

鎧男「女か・・・悪く思つな」

その声を聴いた瞬間に僕は馬車から飛び出す。
鎧2人はこちらを振り返り警戒をしようとしたがその隙に美女さんが2人を斬り伏せていた。

くそ！

魔王『残念ながら美女の顔は見えなかつたな』

本当に！じゃなくて！！

美女さん「行きます」

笑顔で僕に告げて走り出す美女さんに僕も続く。

囮まれていた人物は7人のうち1人を斬り伏せていたが人を一人を庇つて戦つて居るために至る所から流血していた。
だがいまだ倒れることは無く6人を威嚇しながら隙をうかがつているようだ。

小柄な人物も剣を構えてはいるがあまり使えそうな感じではない。

周りを囮んでいる鎧のうち何人かがこちらに気がつき仲間に警告の

声を発する。

美女さん「助太刀します」

短く発した美女さんと僕は近くの鎧男にそれぞれ斬りかかる。

大柄な男「・・・感謝する」

そういうと僕と剣を合わせている鎧男を後ろから斬り伏せ小柄な人物の手を無理やり引き、僕と美女さんの間を抜けると小柄な人物を隠すように反転して鎧男に対峙した。

先ほど大柄な男が斬った1人と、一瞬で美女さんが1人を斬り伏せていたので残りは4人。

4対3では劣勢と見たより男達のリーダーらしき人物が「引くぞ」というと全員背を向けて走り出した。

背を向ける一瞬の隙に美女さんが距離を詰めリーダーらしき鎧男の背中をばっさり。

その行動にぎょっとして1人の動きが止まつた瞬間を見逃すことなくあっさりと斬り伏せる美女さん。

容赦ない。

残り2人は気がつかなかつたのかどうか分からぬがそのまま走つ

て逃げていった。

「ふう」と一息ついて剣の血のりを払う美女さん。

ただ鞘に収めることは無く剣を半身で隠すように立つ。

美女さん「状況が良く分からぬのですが説明いただけますか?」

二口二口

大柄な男「あ、ああ・・・」

美女さんの笑顔に若干押され気味の大柄な男。

僕と美女さんがまだ抜き身なのを確認し自分の剣を収める。

それを見た美女さんが剣を収めるのを横目で見ながら僕も剣を収めた。

大柄な男はフードから顔を出すと若くきいえる声よりナイスなミド
ルだった。

大柄な男「まずは助け立ちして頂き感謝の念に耐えない」

美女さん「いえ、成り行きですから」

大柄な男「詳しい説明をしたいが時間が惜しい」

美女さん「戻ってきます?」

大柄な男「来る」

「ふむ」と笑顔で首を傾げる美女さん

美女さん「野盗じゃないですよね。」死体をチラリ

大柄な男「うむ。」の国の騎士だ

美女さん「巻き込まれました?」

大柄な男「すまない」

美女さん「ではまずは」」を離れましょう。当てはありますか?」

大柄な男「距離はあるが・・・」

美女さん「説明してくださいね?」

あれ?

僕の良く分からぬうちに話が進んでる。

魔王『脇役だから仕方あるまい』

何！その衝撃の事実！？

馬車に戻つて妖精少女に大丈夫という事を伝える。

妖精少女を見た大柄な男は「こんな幼子が大事無くてよかつた・・・」と呟いていたので案外いい人なのかも知れない。

自己紹介での僕達の関係は僕は貴族の3男で見聞を広げる旅をしている。

美女さんはその従者で妖精少女は旅の途中で出会つた孤児で分け合つて一緒に旅をしているという説明をした。

どちらかと言えば美女さんの従者が僕という感じだけど黙つておいた。

相手は大柄な男と子供と名乗のる。

御者は僕と大柄な男が勤め馬車の中に美女さんと妖精少女と子供が乗り込み大柄な男の指示により移動した。

馬車の中と外だが布一枚なので話す分にはあまり問題は無い。

妖精少女は少し子供のことに興味を引きながらも美女さんに引っ付いており子狼をひざの上に乗せている。子供はフードを田深く被りひざを抱えているが妖精少女の手元の子狼を見ているようだ。

大柄な男「この国の現状はどうまでご存知で？」

美女さん「殆ど知りませんね。」

どうやらこの国は前王が崩御して第一王子が後を継ぐ予定だったが戴冠直前に暗殺されてしまったそうだ。

その後、病弱な第2王子と第3王子のどちらが王になるかで取り巻きに寄る争いが起こつたが第2王子が病死（というのが本当は不明）の為に第3王子が帝位についた。

しかし政は自分を支持した貴族に任せ贅の限りを尽くし、貴族も自分達の富と権力の為だけに政を行うようになり国が荒れていった。

第3王子即位1年後、今から約4ヶ月ほど前に密かに準備を進めていた第4王子と第2王女は、共に民衆の為に立ち上がるべくクーデターを起こすも裏切りに合い負けてしまう。

第4王子も第2王女も何とか逃げ出す事が出来たようだが今は行方が知れず大柄な男と小柄な人物はクーデター加担者として追われている状況らしい。

大柄な男「我々は各地に隠れ力を貯めながら時期を待つている状況です。」

なるほどね～。物語によくあるパターンだ。

僕「じゃあもしかしてそっちの小柄な人物が第2王女だったり」

まあ子供と名乗ってたので明らかに違つけど。

何気ない気持ちで言つた僕の冗談に大柄な男と子供がピクリと動く。

魔王『ほひ』

美女さん「やうだと面白いですね。なんぞう思つん?」

ん～僕の昔読んだ本はどうだったかな?

僕「だつてたつた二人に正規の国の騎士が追つかけて来るんだよ。大げさな」

美女さん「でもクーデターの主要メンバーならありえるのでは?」

僕「うん。でも捕まえず殺そうとしたり田撃者を消そうとしたりするの生きていて欲しくないけど騎士が殺害した事が噂になるのはまずい人物という事になる。」

美女さん「なるほど」

僕「大柄な男さんも自分の身を盾にしてでも子供を守っていた。屈強の戦士である大柄な男さんが明らかに弱いであろう子供をそこまでして守るとしたら、よほどの重要人物なんだらうしね」

美女さん「もしかしたら自分が巻き込んだ相手をたとえそれが誰であっても見殺しに出来ない性格なだけなのかもしれませんか？」

僕「そうなんだけね。でももし途中で出会った見知らぬ子供だとしたら騎士がそこまで執拗に狙つかな？」

大柄な男「といつと？」

馬車の空気が少し変わったことに気がつかずに僕は自分が読んだ物語の内容を話していた。

僕「だつてもしだだの子供なら大柄な男さんを殺した後に口封じでも何でもすればいいのに、騎士達は大柄な男さんではなく子供を優先的に執拗に狙っていたように見えたよ。」

大柄な男「もし仮にこの子供が重要人物だとして、何故王子ではなく王女なのだ？その理由は？」

僕「ん～あるにはあるけど……」

大柄な男「ぜひ聞いてみたいな」

僕「国の王子ともなると少しは剣術位は習つてゐるはず。それにも関わらず剣を扱うのが不慣れな感じがした」

大柄な男「ふむ」

僕「それと手を引かれていて自分の走りが出来ないとはいえ走りなれていない感じがもう一つ」

大柄な男「……」

僕「でも一番の理由は……」

そこまで言つてちょっと馬鹿らしい理由過ぎるかな?と思ひ口を濁す

大柄な男「理由は?」

僕「え～っと……」

今まで自分が読んでた物語と照らし合わせてしまつたり顔で話していたことが急に恥ずかしくなる。

振り返つて馬車のほうを見ると全員が僕を見つめていた。
子供ですらフードの奥から鋭い目を向けている。

「… 女の子呼ばわりした事に怒っているのかな。

子供の目を見つめ、「冗談だよ」という感じで笑いながら

僕「だつて王子様もいいけど、どうせ助けるなら可憐な王女様のほうがうれしいから」

場の空気が死んだ。

見つめていた子供の目が大きく見開かれる。

ああ、呆れられた…

馬車のガラガラという音だけが大きく聞こえる。

大柄な男「つぶわつははははははははははは」

大柄な男が大笑いをしてくれる。

止まっていた空気が動き出す。

笑っていてくれてありがとうございます。助かりました。

魔王『鈍いのかそうでないのか・・・』

いつもは「うるさい」で片付けるけど空気を読めずしたり顔で読んだ物語と照らし合わせて妄想をしゃべってたのは自分なので今日は甘んじで受け取る。

魔王『やはり鈍いだけか』

やつぱつわるわこよ。

何回も言わなくてもいいじゃないか。

魔王『やれやれ』

大柄な男「素晴らしい推理でした」

それだけ大笑いしていただければ幸いです。

大柄な男「どうでしよう?彼らなら信用できると私は思いますが」

と大柄な男が馬車の中の子供に話しかける。

子供「爺に任せる」

子供は僕を見つめた後に大柄な子供に向かって囁いた。

大柄な男 改め 爺「真にすばらしい推理でした。」

クエスチョンマークで一杯の僕に爺が言つ。

大柄な男「私はこの国で騎士団長を勤め上げた後に第2王女付きの近衛騎士隊長をしておりました。そしてあちらにいらっしゃる方が・・・」

子供「自分で自己紹介をします」

そういうながら取り扱つたフードの中から、一〇代の綺麗な少女が出ていた。

僕より少し上かな？

子供、「あなたの母だとおつ、私はこの国の第2王女です。」

あまりの超展開に思考が走りいていけずにただ第2王女の皿を見つめてしまつ。

魔王『お前が予想した通りじゃないか』

そうだけど！

美女さん「あらら。あまりの美しさに目を奪われているんですか？」

ただ見つめ続ける僕に美女さんの楽しそうな声がし第2王女が恥ずかしそうにひとつ田線をそらす。

違いますからー。あまりの展開にフリーズしただけですからーー。

無駄にあわあわする僕。

美女さんはもつと早くに気がついていたのかな？

もしかしたら最初からかも知れないと思つてしまふ所が謎だよね。

魔王『最初からだらうな』

妖精少女は「当たつた～す、い」と目を丸くして手をたたき僕を賞賛していた（可愛い！）
ちょっとほっこりした。

魔王『そればっかりだな』

妖精少女故、致し方なし！

第2王女と爺は別の拠点にいる所を襲撃され逃げてきて隠れながら落ち延びているところ発見されてしまい、これまでかと思つた時に僕たちに出会つた。

これからの方針を聞くと

爺「出来れば姫にはこのまま一度国外に出たほうが安全なのだが・・・

・

子供 改め 姫「民を見捨てる」とは出来ません！

ところ姫の強い希望によつとつあえず信頼できる者の所へ向かう予定らしい。

爺「勝手で申し訳ありませんがその者の場所まで行つて頂けないでしょうか？」

爺曰く、このまま国境へ向かつても先ほど逃げていった者たちが戻つてきて捕まるかもしれない。

もし関所に着いたとしても馬車の形などの手配書が回つている可能性が高いので信頼の置ける者の所まで行つて頂いたら新たな馬車を用意させる。

悪くない申し出だけど問題はその人が本当に信頼できるのか？…とう問題。

行つてみたのの敵が待ち伏せしていて捕まる…のは勘弁して欲しい。

爺「それは大丈夫です。奴は昔に私と一緒に騎士団にいた者ですが領地に戻った後も登城の度に姫に会いに来られてました。間違いなく姫の味方をしてくれる男です。」

姫「幼い頃は会つたびにお願いをして騎士の話をしてもらいました。

懐かしそうに目を細める姫。

爺「あやつは頑固者です。上が変わった程度で姫への忠誠は変わらない男です。」

爺にも翁にも姫は孫のようない存在なのかな?
チラリと見ると美人さんがいつも通り微笑んでいた。

僕「分かりました。その方の領地へ向かいましょう」

頷く僕に爺は腕を掴んで振り回しながら「ありがとう」と何度も言った。

美人さんは相変わらずの笑顔で、妖精少女はいつの間にか美人さんの膝枕で寝ている（可愛い！）

姫を見るにつつとすぐに目線をそらされてしまう。

嫌われてしまったかな・・・

やつ言えば魔王自身も自分の国では王位を争っているのに何がな
のに他の国の内乱に巻き込まれるなんてひょっと笑えるね。

魔王『やつだな・・・』遠い目

なんか色々じめん！

第4話 出会い（後書き）

誤字修正

鎧男に退治した

鎧男に対峙した

充てはありますか

当てはありますか

体感直前

戴冠直前

第4王女

第2王女（数箇所修正）

第5話 お兄ちゃん

街道を外れ森の中を移動していたが日が暮れ視界も悪くなつたので野営をする。

追われている為に火をおこす様な事は出来ない為に干し肉でおなかを満たした。

夜の見張りは僕と美女さんと爺で2人交代で行う事に。

姫は丸一日走り回つたらしくすぐに疲れて寝てしまった。

妖精少女は子狼と一緒に寝ている。

一人で寝るときは毛布に丸まつて団子のように寝るのは種族的な寝方なのか個人的な寝方なのか興味は尽き無い。

美女さんとの見張りのときは「ついでに夜間戦闘の訓練しましょう」と言われ軽い気持ちで同意したら「じゃあたまに投げるので避けてくださいね」と頭に小石をいっぱいぶつけられた。

魔王の『鈍すぎだな』という声がうるさい。

爺と2人の時はたまに会話をする程度で特に何をするというわけでも無かつたので魔力特訓をした。

早く魔力制御が出来るようになつて妖精少女の首輪を外してあげたい。

翌朝、日が出る前には出発。

姫は自分一人寝入つてしまつた事を恥じ入つていたが「疲れを癒し万全の体制を整えるのも旅では大事な事です」と笑顔で諭されていた。

御者は美女さんと爺が交代で行つ。まだ僕はうまく出来ないので役に立てない。

昼前に一度馬を休ませたが日が沈むまで移動をし2日目の野営を行つた。

見張りを行つと姫と休んでくださいといつ爺と言い合ひになつた（と言つても爺は及び腰だった）けど姫の意思は変わらず今日は試しに行うことになつてしまつた。

さすがに姫を1人にカウントできるわけも無いので美女さんと同じ時間を担当する事になつた。

その話を聞いていた妖精少女が「じゃあ私も」と言つていたが1刻もしないうちに寝てしまつていた。（可愛いーー）

昨晩と同じように美女さんと一緒にときは小石を頭にぶつけられた。姫は当初は少しの物音でも反応をしていたけどすぐに落ち着いた。途中からは僕と美女さんを眺めていたが「投げてみます?」という美女さんの申し出には「え、いえ、いいです」と少し慌てていた。爺との時も昨日と同じように魔力制御をした。

3日目の朝も同じく日が昇る前に出発する。

出発して数刻、森が開け小さな泉があつたのをここで早めの休憩を取る。

そこで今後の方針を話し合つ事になつた。

ここまで来ると馬車で移動すれば昼前には森を抜ける。

その後は草原を数刻走れば目的の館は見えてくるらしい。

ただ敵も翁を頼ることは予想しているはずで必ず兵を配備していると予想され、さすがに領地内にあからさまな兵を配置出来ないとは思つが馬車で突破するのはかなり難しいと思われる。

爺「姫たちには」の場で待機しても「ここ」の先は私一人で向かおうと思います。」

その言葉に姫が声を荒げよつとあるのを爺が手で制す

爺「お聞きください。森を抜けた所の兵士もやうですが、もし館にたどり着いても一安心と言ひわけではあります。」

翁は捕まり館に敵がいる可能性は〇ではない。

なので爺が一人で館に向かい確かめた方がいい。

森を抜けてからでも爺の足で半日ちょっとあれば館に付く。すぐに戻つてくれば一日ちょっとで戻つてくれるはず。

爺「ですのでもし一日半たつて戻つてこない場合はすぐこの場を放棄し逃げてください」

姫「！」

美女さん「もし逃げるとして、逃げます。」

爺「・・・近くにはあつません。もし逃げる場合は国境を越えて隣の国へ亡命してください。」

美女さん「隣国へ亡命して姫の身は安全なのですか?」

姫「隣国には第一王女のお姉さまが嫁いであります。」

爺「あの方なら姫を悪くはしないでしょ」

方針は大体決まった。

魔王『またお主は何も言つていなーいな』

悪かつたね！

美女さん「話は分かりました。ただ幾つか提案があります

爺「どうこつた内容でしょ」

美女さん「私も同行しましょう」

爺「いや、しかし

美女さん「敵は姫様と爺の2人組みを探しています。もし発見された場合に爺のみだと姫様を探して森を捜索される危険性があります。

』

僕「なるほど。そこで美女さんが同行して田ぐらましにするんだね。

』

魔王『うまく話しに割り込んだな』ニヤリ

「うるさいよ！」

美女さん「マントを被れば少々の身長差は誤魔化せるでしょう？」

爺「しかしこの先は危険だ」

美女さん「私はこいつ見えても結構強いですよ？」

爺「いえ、それは最初に助太刀頂いた際に理解していますが」

姫を守つて欲しいと爺の意見に美人さん「2人の方が生存率が上がります」と笑顔で押し切つた。

出発は森を抜けるときに暗いほうが言いと詮つことで日が落ちてからになつた。

人は滅多に来ない場所らしいけど念のために泉から少し離れてぱつと見ても分からぬように馬車に偽装を施す。

昼までの間に近くに危険な生き物が居ないかを探したが居ないようだつた。

僕「美人さん」

美人さん「どうしました」

僕「1日ちょっととはいえ僕と妖精少女と姫だけになる状況を考えたら妖精少女の事は伝えた方がいいと思うんだけど」

少しはなれた所で姫と一緒にじやれ合つてゐる子狼と一緒に見ている
妖精少女を見る。

数日だけど妖精少女も姫に対してはあまり警戒心を抱いていないよ
うだ。

魔王『お主よりは懷いているな』

そんな気はしてたけど煩いよ！

美女さん「そうですね。お一人なら信頼できると思いますし、当分
一緒に行動する事になりますので話して起きましょうか。爺はうす
うす感じていたようですが」

さすが年功といつやつなのかな。

美女さん「だからと言つて魔王様の話はしませんので注意してください
さいね」

キラッケマス

姫と爺に妖精少女の事を伝えると爺は納得がいった感じで頷いた。

姫は妖精少女が奴隸商人に捕まつっていた話を聞いたときは少し悲し
い顔をしていたが、話を聞き終わると笑顔になり美女さんの後ろに
隠れていた妖精少女の頭を優しくなでてあげた。

昼からは馬車の周りに簡単なトラップを仕掛けた。

とはいえ何かが近づいたら音が鳴るようなものと、足を取る程度のトライップではあったが何も無いよりはマシだった。

その後は日が暮れるまで順番で仮眠を取る事になった。

夕方に簡単な食事を取り一緒に取り、日が陰りだす頃に美女さんと爺が出発した。

爺は僕の手を取り「姫を頼みます」と頭を下げる。

魔王『そろそろ良いかもしれないな』

掌の石を眺めて魔王が言つ。

やつと魔力の制御が出来るよつになつた。

魔王『だからと言つてまだまだだからな。これからも精進を怠るな』

うん。うん！

妖精少女は毎晩をしたためいつもより遅くまで起きてるので僕は妖精少女を呼んだ。

姫と連れ立つてくる妖精少女。

僕は警戒されます？

僕「魔力の制御がうまく出来るよくなつたので首輪が外せるよ」

妖精少女「ほんと？」

僕「うん。ただ僕が触るけど少しの間じっとしていてもらひえるかな」

妖精少女（こくん）

僕「じゃあこっちに来てもらひえるかな」

音を立てずに近づいてくる妖精少女。

僕「頸を上に上げて

僕の言われたとおり僕の前まで来て一生懸命頸を上げる。（可憐い）

魔王『今なら何でも命令できるな』

そうなり、しないからね！何を言つんだ！

魔王『緊張を紛らわそうと思つただけなのだが・・・』ドン引き

僕「じゃあ少し我慢してね」

僕は妖精少女の首輪を両手で包む。傍から見たら少女の首を絞めるという少し危ない図である。

包んだ掌から指輪に向かって魔力をゆっくり注ぐ。

薄く青く光る首輪に姫が息を呑む。

魔力の量を調節しながら魔力を注いでいると「パキッ」という音が聴覚でなく感覚で聞こえて首輪の明かりが消えた。

魔王『上出来だ。』

首輪の魔力を相殺することが出来た。

魔王『後は首輪を石のように碎いてしまえ』

よし

再度少し魔力を込めると「ビシ」という音を立てて首輪にヒビが入った。

後は腕の力を使つまでも無く妖精少女の首から首輪が外れた。

僕「もう大丈夫だよ」

僕がそういうと一生懸命目を瞑つて我慢していた妖精少女は目を開け自分の首に首輪が無いのを確認する。

そして首から首輪が無いのを確認すると目から涙が溢れ出した。姫が後ろからそつと抱き寄せると姫にしがみついて声を出さずに無く。

良かつた。

少したつて落ち着いた妖精少女は僕のほうに走ってきた。

僕「どうしたの?」

妖精少女「えっとね。ありがとう」

その一言で今までの苦労が全て吹つ飛ぶのを感じた。妖精少女はまだ僕の前で何か言いたそうにしている。

妖精少女「ありがとう、お兄ちゃん」

ぐはー！ナーナーナーナー！何なのこの可愛い生き物は！# \$ %
&

魔王『何語を話しているかわからん。落ち着け』

あまりの衝撃に新しい信仰に田覓めそうにならん僕に魔王のシッコミ
が入るが、もちろん僕には届いてない。

「ふおおおおおおおお」と叫びそうになるのを我慢してたら「ひら
を見ている姫の存在を思い出す。

暗いから表情まで見えないけど微動だにしない。

ちよっとドン引きしてる？

魔王『してるかもな』

一気に現実に帰つてきました。

妖精少女の頭をなでながら「じついたしまして」というと妖精少女
はつれしそうに笑つた。（可愛い！）

その後、妖精少女に魔法が使えるようになつたけど実際に何を使え
るのか聞いてみた。

妖精少女「隠れるのと風と水とお話できる」「

魔王『ほつ。精靈と話せるのか』

姫「精靈とお話が出来るなんて素敵ですね」

僕「今できる?」

そう聞くと「うん」と頷いた妖精少女は指を立ててぐるぐる回して僕に指を向ける。

なんだ?とその様子を見ていた僕の首筋に風が流れる。

僕「びっくりした」

魔王『それほど強い精靈を呼べるわけでは無い様だな

姫「風を起させるのですか。水の妖精はどんなことが出来ますか?」

妖精少女「ん~水をゆらゆら揺らせる」

僕「風で何かを切り裂いたり水で攻撃したりは?」

妖精少女「出来ない」

姫「妖精族は争いを嫌うと聞きます。精靈をそのまま使おうと思わないのでしょうか?」

魔王『そういうのはちゃんと契約を結ばないと無理だしな』

僕「それでもす』』こなあ」

讃められた妖精少女は「えへへ」と笑みを浮かべる（可愛いー。）姿消しも試してもらつたが良く見たら全く消えるわけではなく薄つすらとは見えるようだ。

魔王『力が上がればもう少ししっかり消えるし、周りのものも姿を隠せるよ』『うわ』

す』』いなあ

その後も首輪が外れたうれしさでテンションの高い妖精少女は子狼と風の妖精で遊んでいたが急に眠つてしまつた。

姫「疲れて眠つたようです」

僕「久々に魔力を使つたし仕方ないね」

・・・・・

やばい！姫と2人きりつて初めてだけど何を話していいかわからな
い！

沈黙が痛い。

魔王『適当に話せばよいではないか』

そんな事言われても、元の世界ですら女の子となんて殆ど話せなかつたから良く分からないよ！

魔王『情けない。仕方ないな、我が話すきっかけを作つてやる。我的の言つよに話してみるが良い』

僕（魔王）「『寒くないか？』」

姫「え、はい」

僕（魔王）「『わつか。まだ夜は肌寒いから無理はするな』」

姫「そうですね」

僕（魔王）「『よければ我が暖めてやる。苦しそうない、このネタ前もやつたからね！』

姫「うんとする姫。

僕「あ、あはは、なんてね」

魔王のばか～

姫「ふふ・・・」

笑つてくれたああああ。

魔王『ほれみる。うまくこつた』

もう魔王の手は借りないからね！

その後は途切れ途切れだけじ会話は出来た。

姫と言つことで緊張したけど話してみたら普通の女の子で安心した。

魔王『普通の女の子とやらとも殆ど話をした事無いのであるが』

やうだけぢやー。

話の内容は「王宮はどんな所」とか「いつもは何してるの」とか。姫も「どんな所を旅してきたのか」や「どうこう冒険をしてきたのか」を聞いてきた。

どんな所といふのはそれほど記憶に無いので冒険についてはゴブリン退治の話をした。

こうこう話は姫は向かないかなと思つたけど、ゴブリンとの対決の時には真剣な表情で食い入るように話を聞いてくれていた。

ゴブリン退治の話で僕の活躍を5割り増しで語ったくらい大目に見てもらえるよね？

魔王『10割は増していただろう』

「うるせーよ。

夜の見張りについては美女さんが事前に「夜は若（僕の事）に任せ、翌朝に若が仮眠取る時にお願いしますね」と笑顔で言い含めていたので問題は無かった。

姫が眠つて数刻、僕はいつもの日課の魔力制御の特訓をしていた。

やつぱり一人で起きてるのはやつぱり寂しいなあ

魔王『我が付き合つてているではないか』

そうだけどちゅうと違つんだよね。

魔王『仕方あるまい・・・む?』

身を寄せて眠る姫と妖精少女を見る。

と、その傍らで寝ていた子狼が2匹とも急に身を起こし遠くを見る

どうしたんだろう

魔王『何かくるぞー。』

え？

魔王『かなりの数だ。戦闘の準備をしろー。』

僕は物音をさせないよつと急いで寝ている2人のところへと寝ている姫を揺すり起します。

僕（姫、起きてください）

姫「え・・・」

僕（し！静かに。何者かが集団で近づいてきています）

はっと起きる姫。

僕（馬車の中に隠れていってください）

姫（私も戦います）

僕（いえ、妖精少女をお願いします）

カラーン。音系トラップが静かな夜の森に響く。
僕は剣を抜き馬車を静かに下りる。

魔王『結構な数がいるな』

追手かな

魔王『わからん』

相手は音系トラップの存在を知ると気配を消そうともせずに近づいてきた。

カラカラカラ。幾人かは音系トラップを踏んで音を鳴らしてしまつが気にしない。

多い！

少なくとも面前に10人以上いる。
全員が抜き身で警戒しながら近づいてくる。

謎の男「何者だ」

僕「そちらこそ何者だ」

震えそうな声を虚勢で何とか押しとどめる。

謎の男「何者だ」

僕「旅のものだ。そつちは野盗なのか?」

謎の男「嘘だな。旅人なら何故野獸避けの火を焚かない」

僕「寝ている間に消えてしまって」

魔王『囮まれたな』

謎の男「それも嘘だな。火を焚いた後はどこにも見当たらぬ」

つ！

謎の男「本当の事を話さないよつなら仕方ない」

周りの男が殺氣立つ。

魔王『くるぞー!』

馬車を背に回りこまれないよう気につけながら対峙する。謎の男の指示で1人の男が向かってくる。

振りかぶった剣を受け止める。

剣を絡め取られそうになるのを透かして流す。

体が泳いだ男の胴を斬りつけようとした所、横から別の男に攻撃されそうになり断念して剣で受ける。

目の前の男を剣で押し返しすぐにもう一人の剣を受ける。

「ほう」と謎の男が一言呟く。

魔王『来るぞ！避ける！』

剣を受けて止まつたままの視界の隅にもう一人が剣を振りかぶるのが見える。

避けられない！

自分の体に迫り来る剣を睨み付ける事しか出来なかつた。

第5話 お兄ちゃん（後書き）

9／21 「爺さん」 「爺」に修正。

誤字修正

興味は付き無い	興味は尽き無い
一杯ぶつけられた	いっぱいぶつけられた
昼間での間に	昼までの間に
見張りにるについては	見張りについては

第6話 美女

森から街道を伺うと歩哨がいた。

やはりこじら一帯は警戒されているらしい。

数はそれほど多くは無いが月明かりの為に遠くまで見渡せる。

誰かが街道を横切るとしてもすぐに見られてしまうだらう。

横を見ると同行者が上を指した後に小さく「雲」と言つた。

どうやら月に小さな雲がかからうとしているらしい、少しでも暗くなつた時に行こうというのだ。

ゆっくり流れる雲が月にかかるうとする直前に兵士が立ち止まつてしまつ。

目配せをすると相手は頷いて「兵が動いたら行つて下をい」と森を引き返していった。

雲のお陰で辺りが暗くなつた事により街道を抜けるのに好都合な状況にもかかわらず動けないことに焦燥感が募る自分の心を叱咤する。屈みながら兵士を見ていると離れた場所で草が擦れる大きな音が聞こえた。

兵士がそちらに向かう。

全員の注意がそちらに向いて歩いていくのを確認すると音がならな様に飛び出し街道に向かつて走り出した。

一心不乱に街道を横切るとそのまま背を低くし走り抜ける。

街道から少し離れた場所に背の高い草むらを発見しそこに隠れるようになり込みながら地面に伏せた。

弾む呼吸を押し殺すようにしながら街道を伺つと一人の兵士がこちらに明かりを向けていた。

明かりといつても紙などで作った丸い筒を倒したのに蠅燭を立て居るだけのものなので、それほど遠くは照らせる訳ではない。だが隠れている立場からすると「もしかしたら衣服の一部が見える位置にあるかもしだれない。何かが光に反射するかもしだれない」という恐怖と、身じろぎするには自殺行為だといつ理性に挟まれて時間の流れがいつもより遅く感じじる。

少しの間あちこちを照らしていたが何も見つける事が出来ずに仲間の元に戻つていぐ。

小さく息を吐いた後に同行者はどうしたのか心配になつた。あの音はその同行者が起こした音である事は間違いない。もしかしたらあの音のせいで見つかってしまつかもしれない。

身を伏せたまま兵士の声に必死に耳を傾ける。

何を言つているのか分からぬが警戒しながら音が鳴つた辺りに近づいているようだ。

見つからないでくれという思いに兵の声が微かに聞こえる。必死で声を拾つと「ウサギ」「驚かせて」等の単語が聞こえてきて見つかっていないだらう事にほつとする。

月が出てきて少し明るくなる。

兵は移動を開始したがこれではまた街道が渡りにくくなつてしまつ。同行者が街道を渡るのをどう手助けしようか考えていると近づいてくる影が見えた。

ぎょっとして見ると「お静かに」といつ風に指を口に立てた同行者が二つの笑顔で近づいてきた。

「コニコニ笑う美女殿に疑問をぶつけたいが」こじで声を上げるわけにも行かず指で街道から離れる方向を指す。

「コリと笑った美女さんは街道のほうを向いて屈んだままソロソロと後ろに向かつて進みだした。

街道に立つ人物が認識できない距離まで来ると「行きましようか。方向は?」と笑顔で告げてきた。

指を刺すと「日が昇るまでにある程度進んでしまいましょう」と背を低くして走り出したので慌てて追いかけた。

街道から一切見えない場所に来るまで屈んで走っていたが、その後は普通に走り出した、

街道を渡つてからずつと走り続けている。

もともと急がないとは考えていたので不眠不休で向かうつもりだった。

ただ美女殿は女性なので体力なども考えて最終的には背負つてで進むつもりで出発した。

しかし実際はどうだらう。

先ほどからすでに3刻ほど走り続けている。

しかもペースが速い。

年老いたとはいえ体力ではそちらの若者に負けないとと思っていたが、その自分が息を乱しているといつのに、笑顔を絶やさず息もさほど上がつているようには見えない。

目の前に森に覆われた丘が見えてきた。

それを見た美女殿は「あそこで一旦休みましょう」と笑顔で告げて

丘に向かつて速度を落とさずに走つていった。

荒い息を抑えながら水を口に含む。

美女殿は「ふう」と汗を拭つてはいるが息を乱していくよいつには見えない。

空を見ると戸が上に見えるので夜明けまでまだ時間はある。

美女殿「館まで後どれくらいありますか?」

爺「1~2で3、4割とこいつくらいでどうか?」

美女殿「このまま行けば今日中につけやうですね。」

爺「そうですね」

美女殿「まだ行けますか?」

美女殿が笑顔で聴いてくる。

今は刹那の時も惜しいのは確かである。

一度小さく深呼吸をした後に頷く。

それを見た美女殿は笑顔で「参りましょい」と言いつと走り出した。

まだ日も変わつていないうちに館の前に立つ。出来るだけ早くとは考えていたが翌朝までにはと思つた距離を今日中に付くとは思わなかつた。

途中、短い休憩や歩いたりしたものの予定の時間の半分以下くらいでついた。

息を整え館に近づく。

まだ敵か味方か分からぬ状態なので美女殿には隠れておいてもらう。

領地の門の前に来ると門の中に立つてゐた若い兵士が「用が無いなら立ち去れ」と言つてきた。

2人いるが残念ながら見知った顔ではない。

前に訪れたときには門番など居なかつた。

時期が時期なので念のために警戒しているのか、敵の手に落ちて居るのかはわからない。

「領主の翁に面会したい」と伝えると、「こんな時間に?」と不振がられてしまつた。

用があるなら明日、日が昇つてから出直せと言つてくれる。

どうやら翁はまだ健在で敵の手は回つてないようだな。よかつた。知り合いだからこんな時間でも問題なく合つてくれると伝えても素氣無く返される。

仕方ないので伝言だけでもお願ひできなかつて伝えても同じ返答だ。せめて伝言さへ伝えてもらえれば何とかなるのに困つたなと思つていたら、館のほうからもう一人の兵士が歩いてきた。

兵士「どうした」

若い兵士「この老人が翁に会わせるとしつこくて」

兵士－こんな夜更けにか？」

近づいてくる兵士の顔をみて笑いがこみ上げるのが自分でもわかる。彼は翁に付いて私に何度か合つたことがある。兵士隊長をしている男だ。

彼も私の顔に気が付いたようで若い兵士の一人に翁へ伝える用に指示を出すと「姫はご無事で?」と聞いてくる。
手短に状況ともう一人同行者が居る事を伝えると兵士隊長は「信頼が置ける者ですか?」と聞いてきた。

私が頷くと兵士隊長は門を一人分だけ開けるように、
門が開いている間に美女殿を呼んだら一つの間にか門の影に隠れて
いたようで笑顔で出てきた。

顔には出さないが私もかなり驚いた。

美女殿は本当に得体の知れない人物である。

館に入ると翁が寝間着姿で剣だけもつて現れた。

翁「姫は！」

爺「領地の境に見張りの兵が多かつた為に領地には入りずに隠れて頂いておる」

翁「そうかーではすぐに少數精銳を送り姫の無事を確保しよつ」

さすがと詰つかなんどこつか、全て説明しなくても話が通じる。急いで兵士達に集まるように指示を出し始めたがすぐに翁の息子の現領主が姿を現すのを見て兵への指示を引き継がせた。

姫の迎えをする兵士達の選抜や姫を乗せる為の馬車の用意を始める。

「それで姫と別れてからどれくらいの時間が」と翁が言った所で10代後半の若い男が現れる。

若い男「爺殿が来られたと聴いたが」

翁「来るのが遅いーもしこれが敵襲だつたらどうするーー..」

現れた若い男は現領主の長男で翁の孫になる。

立派な体格で武芸においては同年代では敵うものはそうそう居ないぐらゐに秀でているとは翁に聴いていたが、さすが全身から自信が満ち溢れいい男である。

ただ近年はその事で慢心をして思慮に欠けると嘆いてはいたが。

領主長男「戦ならずすぐに来ますよ」

翁「気構えがたらんと言つてるんだ！」

煩い爺だとばかりに肩をすくめる領主長男

領主長男「姫を迎えて行くのでしょ、うへ。」

翁「今、行くものを選んで準備させている」

領主長男「俺も行きますよ」

翁「お前はいかんでいい」

自分以外に適任が居るのか？と自信満々に言つ領主長男
行く、行かなくていいのやり取りを見ていた美女殿が発言する。

美女殿「私も参りますので私の馬も用意頂けますでしょ、うか？」

領主長男「なんだこの女は」

美女殿「若の従者の美女と申します。姫様と爺様には途中で出会い
共に行動をしておりました。」

美女さんが礼節を持つて自己紹介をするも領主長男は鼻で笑う。

領主長男「ふん、女子供は黙つていろ」

爺「美女殿になんて事を…」

領主長男「足手まといにしかならん」

客人に対する長男領主の無礼な物言いに翁が顔を真っ赤に怒鳴りつけようとした時

美女殿「翁様」

翁「孫の無礼、許してくれ」

美女殿「気にしてませんので。馬ば『』用意頂けますか?」――ココ

翁「お主もいくのか? 危険だぞ」

爺「美女殿は中々の手馴」

翁「ほづ」

領主息子「ふざけるな!姫の救出を遠乗りか何かと勘違いしているのではないか!?」

美女殿「領主息子様」お城へのパレードと勘違いされておりませんか?」

領主息子「なんだと…」

笑顔の美女殿の台詞に領主息子が憤怒に染まる。

美女殿「姫様の救出が危険なことを貴方は理解していない」

領主息子「なんだと！」

美女殿「では貴方の考える救出方法を述べてください」

領主息子「何で貴様なんかに」

翁「面白い、言つて見る。よければお前に指揮を取らす」

領主息子は「救出の指揮」という言葉を聞いて自信と期待を満ち溢れさせて言葉をつむぐ。

領主息子「兵を率いて姫の下へと駆けつけここまで案内するだけだろう。途中、国王軍との戦闘も予想されるが街道に居る数はたかが知れている。向かつてくれば蹴散らせばいい」

美女殿「貴方はその程度の理解で救出に出向くといふ

笑顔の美女殿を中心に温度が若干変わった。

気配を察した兵士隊長がとっさに剣を抜こうとするのを翁が止める。

美女殿「貴方の蛮勇は周りを巻き込む」

領主長男「なんだと！」

美女殿「言い直しましょつ。貴方の無知蒙昧が姫を殺す」

領主長男「知つた風な口を！」

美女殿「正直にいいますと、この国の人間でも無い私は姫様がどうなろうが知ったことではありません。ただ若を危険にさらす状況となると見過ごせません」

笑顔の美女殿から発せられる凄みが少し増す。

真横にいる私は美女殿の気迫に一步後退し柄に手をやるのを堪えるが、ここ数日の美女殿を見て感じた人柄からはかけ離れた物言いに眉を寄せる。

翁は「ほう」と再度声をもらし兵士隊長は驚きの顔を隠せない。少し離れた場所で兵士の指揮を取つていた現領主と一部の兵がこちらを向く。

常人には気がつけずともひとかどの者なら気がつく程度の殺氣。それに気がつく者が何人か居ることに頬もしさを覚る。

それを真正面に受けて動じない領主息子はよほどの大物か、それとも

前者であれば良かつたのだが様子を見る限りでは、何かを気がついてはいるが怒りが大きくて見逃してしまっているらしい。翁もまだまだという感じで肩を少し落とした。

領主息子「女と思って甘く見ておればー国の大事を何と心得るーー。」

美女殿「私の国ではありませんので巻き込まれてなければ知った事ではありません。」

領主息子「これが翁の客ではなく男なら決闘を申し込んだ上で斬り伏せているところだ！」

無礼な態度は取つても客人に手を上げるのは不味いという理性は残つていたようだ。

だが沸騰寸前の所に美女殿は笑顔で火に油を注ぐ。

美女殿「あら？ 女に負けるのが怖くなりましたか？」

領主息子「なんだとー！」

美女殿「井の蛙かわづに大海を教えてあげましょうと言つているんです」

領主息子「爺殿、貴方の連れですが教育がなつていらない様なので指導を受けたいのですが、よろしいですか？」

怒りを殺しきれない様子で私に告げる領主息子。

チラリと見た美女殿はいつもの笑顔を浮かべていた。

剣を抜こうとする領主息子を止めようとする兵士隊長に「やめせり
おけ」と翁が含み笑いで言つ。

どうやら領主息子程度では相手にならない事を読んでこるやつだ。

爺「じいちゃんの娘はお転婆で仕方が無い。よろしく頼みます」

領主息子「許しが出た。女だからと言つて容赦はせん!腕の一本く
ら二覚悟しろよ。」

美女殿「殺すくらいがいいですよ?後で『女だから手を抜いた』と
か言われても面倒ですし。時間もさほど掛けられませんので、さつ
さとお越し下さい。」

憤怒に染まった領主息子が振り下ろした剣を受け止める。

片手で!

あの細腕にどれだけの力があるのか分からぬが笑顔で片手で受け
止めたのだ。

美女殿「あら?本気で来られるのではないかたのですか?」

決して今の一撃は気を抜いたものではなかつた。

その台詞に腹を立てた領主息子は剣を両手で掘ると力任せに振り下ろした。

今度はそれを受け流す。

やはり片手で。

上体が流れで踏鞴たたらを踏むがすぐに美女殿に向き直り両手で剣を振り下ろす。

それをまた片手で受け流し、踏鞴を踏んでまた振り下ろす。

今度は流されても体が泳ぐ事無く何度も剣を打ち付け始める。

それを片手で左右に流していた美女殿は領主息子が打ち疲れた所を狙つて剣を絡め取つた。

剣が床に落ちる音がする。

館にある人間は全て、今起こつた事に息を呑んでいた。

領主息子は決して油断しても女の細腕にいなされて剣を奪われるような腕ではない。

美女殿「もうお終いですか？」

領主息子自分の手から剣が無くなつた事に呆然としていたが美女殿の言葉を聴いて「手が滑つただけだ！」と言い剣を拾いなおす。

美女殿「では今度は私から向かつてもいいですか？」

領主息子「おうー女などには後れを取らん！」

それを聴いた美女さんは無造作に距離を詰める。

そして片手で無造作に鞭でも振るうように左右に剣を振るいだした。

その全てを領主息子は受け流しながら笑みを浮かべる。

今度は美女殿が疲れたところを剣を絡め取り、雪辱を晴らそうとして思つたのだろうか。

領主息子「そりゃやる様だが所詮は女と言つた所だな」

美女殿「あらあら。ではスピードを上げましょうか」

領主息子「む」

美女殿の剣を振るう速度が上がる。

領主息子は驚きながらも捌く。

美女殿「まさかこれ程度で終わりだと思つてませんよね？」

そう言つとせりに速度を上げた。

笑みは完全に消え必死の形相で剣を裁く領主息子。

美女殿「頑張りますね。ではもう少し上げましょ」

領主息子「つー」

さうに速度が上がる。

何回かに一回の確立で捌ききれなくなつてきている。

美女殿「頑張らないと死にますよ？」

さらに速度を上げる剣を前に元々捌ききれなくなつていた上に焦りと疲労で半数以上が体に迫る。

だがどの剣戟も体を傷つける事無く衣服だけを斬り裂く。

どれだけの時間をそうしていただろうか。

実際はさほどの時間では無いが領主息子には永遠に感じただろう。疲労で尻餅を付いた領主息子の目の前で剣を止める美女殿。呆然と見上げる領主息子を見て一步下がって剣を収める。

まさかここまでの者とは

美女殿「貴方は私が言葉に込めた殺氣を気付くことが出来なかつた」

最後まで息も切らすとは

美女殿「私を女と思い侮り実力を見抜こうとしない浅慮が貴方を何度も殺しました。」

全身の服に付く傷一つ一つが本気なら死に繋がつていただろう。

美女殿「貴方一人が死ぬなら問題はありませんが、領主息子と言つ立場ではそれは行きません」

美女殿はこれを伝える為にあのような態度を取つたと言つのか。

美女殿「貴方行動には兵士や領民の命が掛かってます。貴方の浅慮が彼らを殺す事もあるのです。」

領主息子は美女殿の笑顔から目が離せない。

美女殿「考へる事を。聴く」とを学んで下さい。目に見えるものだけに囚われず、他者の言葉にも耳を貸しその上で決して鵜呑みにせず自分で判断できるよう」

領主息子「……」

美女殿「自分の損得だけじゃなく周りの状況を考慮して結果を予想しながら動けるようになれば、貴方はいずれ素晴らしい領主様となるでしょ。」

翁がよく言つてくれたとれしそうに「よく言つてくれた」何度も頷く。

美女殿「よもや領主様になつて民や兵を導けるより、『精進致して下
れい。』

やつ言ひと、「無礼を働き申し訳ありませ」と笑顔で優雅に腰を折
つた。

第6話 美女（後書き）

誤字修正

何とか鳴る
自身と期待
繭を寄せる
状態が流れて
裁ききれなく
何とかなる
自信と期待
眉を寄せる
上体が流れて
捌ききれなく
(数箇所修正)

第7話 救出（前書き）

キヤッショウが残っていたらしくトータを頂けました！
再度書いてみたら前と（もう殆ど覚えていなかつたのですが）全く
違つ話になつてしまつてました。
本当に感謝です。

第7話 救出

ゆつくりと笑顔を上げて姿勢を正す美女殿はまるで歌劇の一幕を切り取ったような雰囲気だつた。

誰もがその姿に声を出せないで居ると翁が拍手をしながら美女殿に近づいた。

翁「素晴らしい腕だつた。そしてよいついでくれた」

美女殿は笑顔で軽く会釈する。

翁はまだ尻餅をついて呆然とする領主息子を見て言つ。

翁「大海は知つたか?」

領主息子ははつと我に返ると立ち上がる。

色々思うところが在るのだろうがこの場から逃げ出さないだけの矜持はあるようだ。

翁「美女殿の言つた意味は理解できたか?」

領主息子「…はい」

翁「美女殿に敗れた事に屈辱を感じてあるのか?」

領主息子「……こえ」

心中は穏やかではないが怒りを露にするほど懸かではないようだ。

翁「もしあの事を恥に思つおなら間違つてゐる。恥に思つべきは見田に騙されて本質を見抜くことが出来なかつた己を恥じよ」

領主息子「…」

翁「まあワシモ」のよつな見田麗しい女子が居たら騙されてしまつだろつがな」

豪快に笑いながら「どうじや~、つちの孫の嫁に」と翁が言つのを「私には仕えるべき主がこますので」と笑顔で流す。

翁「蛙かわすは大海を知つた。なりやるべき事は分かるな?」

領主息子「はい」

領主息子の目に恥を飲み込み變わらうとする強い意思が宿る。今のは忘れず邁進すれば将来が楽しみだ。

領主息子「美女殿、数々の無礼お詫び申し上げる」

美女殿「私のほうこそ差し出がましい事を申しました」

領主息子「いえ。田が覚めました。貴方の言つとおりでした」

気持ちを入れ替え生まれ変わった領主息子にはもう美女殿を見下したりする気持ちは無く、まるで師事すべき師を見るような眼差しになつてゐる。

周りの兵士達も同じような目で美女殿を見ていた。

といつより教祖とか神を見るようだな

同じ事を思つていていたのか翁は私を見た後に眉を少し上げ「まるで宗教じゃな」と呟いた。

もしかしたら新しい宗教がここに生まれたのかも知れない。

翁「さて準備と選抜はどうまで進んでおる

現領主に声を掛けるとはつとしながらも「ほぼ終わっております。もう出れます」と言った。

現領主も例外では無かつたようだ。

選ばれたのは兵士隊長を含めた30人。

街道付近まで進み、一部の人数で姫を救出する。

残りのメンバーはもし敵に発見された時のための護衛要員である。

爺「翁が行かないとは予想外だな」

翁「本当は行きたいがワシもしなければならない事があるからな」

爺「ほう？」

翁「ワシらだけでは数が足りん。集めねばならん」

爺「大丈夫か？」

翁「幾人か前から連絡を取つてゐる信頼できる者達がいる。連絡を取れば2000くらいは集まつ」

時間掛ければ領民などからも兵を募れば一領主でも1000を越える兵を集めることが出来るだろう。

だが兵は何も常時金がかかる。

領主が抱える専属の兵士となると普通は50名から多くて200程しかいない。

少ないところは10数名という小規模領主もいる。

中には一声掛けば5000以上を集める大領主もいるが、それは自分の一門の領主や貴族の私兵を集めてであり、個人で数千もの兵を持つ領主は居ない。

王宮だけは別格で幾つかの騎士団等を抱え、全部集まれば万を越えるかもしれない。

翁の領主は国境に面しているが隣接国とは第一王女が嫁ぐぐらい的良好な関係が築かれているのでそれほどの兵数は居ない。

それでも有事の際は最前線となる為に350名の騎士を召抱えてお

り、武具なども豊富に揃えている。

数十年前、まだ隣国と緊張感にあつた時は最大で600名近く居たらしい。

翁「皆、今の国のあるように心を痛めているものばかりだ。必ず呼応してくれる」

国の混乱を憂いでいる者は意外と多い。

先のクーデターの時も手は貸さなかつたがクーデターが眞くいけばいいと思っていた者も居ただろう。間に合わなかつただけの者も居たかも知れない。

その後の国の荒れように危機感を抱いいる者も多いはずだ。

このまま内部からの腐敗を止めないと内外部両方からこの国は死んでしまうだろ？

その事を理解している者達が手を貸してくれたら今度こそいけるかもしれない。

翁「領主息子よ。今のお主なら何故お主が選ばれないか分かるか？」

領主息子「はー」

翁「そうか。反論は無いな」

領主息子「はー」

翁は満足に頷くと美女殿に振りかえる。

翁「お願いがあるのだが」

美女殿「出来る程度の事でしたら」

翁「領主息子を連れて行つてもうえんだりつか」

姫「わかりました」

領主息子が驚きの顔で美女殿を見る。

翁「感謝する。領主息子よ」

領主息子「はー」

翁「美女殿に付いて色々学べ。盗めるものは何でも盗んで」

領主息子「はー」

翁「美女殿、よろしく頼む」

翁は軽く頭を下げながら言つと、自分も他の領主に連絡を付る為に動か出した。

美女救出部隊が集まつた。

よく見ると美女殿の殺気に反応した者は殆どおり、全部で三十名だった。

「指揮をお願いします」という兵士隊長が私に言つてくるのを首を「私より適任者がいる」振つて否定し横を見る。

兵士隊長も美女殿を見た。

爺「お願いできますか?」

美女殿「他の人がいいと思つのですが」

領主息子「貴方なら異存は無い」

「困りました」とさほど困つた風でもなく弦く美女殿に他の兵士達も頷く。

やはり信仰に近いな

爺「他のものも異存は無い様だし。頼みます」

美女殿「では、やれるだけだけやってみます」

館を出る前に地図で姫たちの居る場所とその近くの街道を確認すると作戦を話し出した。

日が昇ると街道を抜けにくくなってしまう為、ここからは時間の勝負だ。

美女殿「まず10名の騎士がこちら（地図上で目的地との角度方向が違う方向）へ出発してもらいます。」

爺「この館も監視されると？」

美女殿「2人か3人は居るでしょうね。一刻ほど走つたら2人一組に分かれて4方バラバラに分かれてここ（目的地の街道から少し離れた場所にある林）へ向かってください。もし追われている人がいたら数刻ほど走つた後に大回りをしてこの館に帰還してください。指揮は兵士隊長様お願いします。」

兵士隊長「様はいりません。了解しました」

美女殿「次は少しして15名と馬車に出でもらいます。方向は最初の10名と逆の方へ行つてください。1刻ほど進んだら適当な場所に隠れてください。指揮は爺様お願いします。」

爺「わかつた」

美女殿「隠れる場所は周りの開けた場所にある小さな茂みなどがないですね。少ししたら10名はそのまま先へ進み最初のメンバーと同じように半刻ほどで2人一組で散つてください。」

爺「馬車は？」

美女殿「馬車は場合によつては邪魔になるので無理には連れて行きません。10名が出発して半刻たつたら馬車と共に目的地と別の方に移動し3刻後に大回りで館に戻つてください。」

美女殿「領主息子様と最後のメンバーは半刻後に私と共に目的地に向へ向かいます。1刻ほど進んで追われてそななら国境方面に方向転換して途中で同じように2人一組で分かれ、後は同じやり方で。全員の目的地はここ（街道から半刻ほどの距離）です」

美女殿が指差した場所を確認し全員が頷いた。

美女殿「鶏鳴の始め（1時頃）に集まりを見て街道を越えるメンバーを決めます。遅れた人はここに待機になるので頑張つて時間までに集まつてください。」

時間との勝負である。

美女殿「皆さんお願ひしますね」

笑顔で告げる美女殿に皆は敬礼した後、行動を始めた。

一組目の部隊が館を出た。少し待つて私達も出発する。
馬車を無理が無い程度に急がせながら一直線に走る。
半刻進むも適した場所が見当たらすにもう少し進む事になった。
途中、開けた場所にある小さな林を見つけ入る。
追われているかは今の状況では分からぬ。
5名を選び追手に十分に気をつけるよう言い馬車を任せて先を急ぐ。

2刻ほどして最初の手はず通りに2人一組に分かれる。
追手の気配は無いようなので目的地へ向かつて向かつた。

目的地の林に着く。

美女殿と領主息子と兵士隊長はすでに着いており、他の幾人かの兵と共にいた。

10名ほどが目的地に着いているようだ。

その後も兵がぱらぱらと集まりだし鶏鳴前までに全員が揃つた。
迎えに行くのは美女殿、私、領主息子と兵2名。

兵士隊長には「日が昇りだしても戻らない場合や発見された場合は館に戻るように」と伝え、この場を指揮してもらうことになった。

徒步かちで街道に向かつ。

未だに数名の歩哨が居るが闇が濃くなつたお陰で見つからずに街道は渡れそうである。

美女殿が街道の向こうにある小さな岩を指差す。

あそこに行けと言つ事らしい。

歩哨の位置を確認し、私が先に行く。

出来るだけ低く音を立てないように走り岩の後ろに隠れる。

すぐにもう人一人の兵士が来た。

岩は小さく2人が隠れるがやつとなので兵に奥の森へ隠れるようこいつと音を立てずに移動する。

次の兵も同じように伝え領主息子も森へと消えたのを確認して私も森へ隠れる。

奥へと伝えると領主息子は「美女殿は?」といつ顔をしたがすぐ後ろに美女殿が居て驚きの声を上げそになる。

街道から十分離れてから走り出す。

もつすぐ目的地という場所で美女殿が皆に姿勢を低くして下がるよう集合図をする。

少し戻った所で美女殿に話を聞く。

爺（どうしました？）

姫（知らない兵が居ます）

爺（――）

姫（姫と若が無事なのか分かりませんが数が多いようです）

領主息子と兵は無言でどうするかの判断を待つてている。

姫（結構の数が居そうですが、とりあえず様子を見てまいります。）

「少し待つててください」といふと美女殿は気配を消して田代地の方へと向かつた。

第7話 救出（後書き）

誤字修正

繭 眉

手を貸し手くれたら 手を貸してくれたら

さつきの反応 殺氣に反応

依存 異存

付いている 着いている

第8話 少年

僕を斬りつけようとしていた男が何かに弾かれたように転ぶ。

妖精少女「お兄ちゃんを助ける！」

仲間が急に転んだことに意識が行つた相手の剣を押し戻しそちらをみると

妖精少女が馬車から身を乗り出し指を突き出していた。

僕「隠れてるんだ！」

魔王『もう遅い！』

妖精少女に走り寄ろうとした所、別の男に妨害されてしまつ。

このままでは妖精少女が！

姫「私が守ります！」

妖精少女の前に庇つよう立ち懸命に剣を掲げる姫。
2匹の子狼も健気に2人の前に立ち威嚇をする。

だめだ！

この集団は普通の野盗なんか足元に及ばないほどの使い手だ！
姫では手も足も出ないうちに殺されてしまつー！

揺れる剣先を懸命に敵に向ける姫。

だめだだめだ！

目の前の敵に阻まれ2人に届かない。
姫にじり寄る男達。

このままでは守れない。どうすれば！

魔王『後ろから来るぞ』

自分の身すら守れない。

姫「私が相手になります！」

懸命に震える声で叫ぶ姫の声がより一層僕を焦らす。

何か手は！

魔王『後ろからもくるぞ…』

姫に斬りかかるひとする男が見える。

僕は無我夢中で鍔迫り合いをしている相手を力任せに押した。すつるとバターでも切るような感触で相手の剣が2つに切れる。あまりの事に驚く相手の男をそのまま押し倒し姫に向かって走る。

間に合わない！！

謎の男「待て…！」

その一言に全ての男が動きを止める。

良く分からぬがその隙に姫の前に躍り出た僕は剣を突き出した。

謎の男「もしかしてその声は第2王女様では…？」

黙っている僕達を無視して謎の男は剣をしまうと跪く。

すると周りの男達も剣を収め跪いた。

根元から折れた剣を突きつけた僕は何がなんだか分からずニキヨトンとする。

姫「貴方達は？」

謎の男「私は第4王子直属の騎士隊長です。」

信用して大丈夫かな?と姫を見ると頷いた。

姫「確かにあの顔は第4王子と一緒にいる所を何回か見たことがある」

騎士隊長「姫とは知らず」無礼を働いた事をお許しください

姫一のよろづや暗闇の中では仕方ありません。誰も

と周りを見渡して負傷者が居ないことを確認し

姫「誰も怪我をしなくて幸いでした」

しつかりと話す姫を見てさつき僕と話していた普通の女の子が遠くへ行ってしまったように感じた。

ちよつと寂しいな

と思つてたら姫が震える手で僕の手をそつと握つてきた。
見知つた顔だつたとしても先ほどの恐怖は中々消えないのかも知れ

ない。

僕も何も言わずに姫の手を握り返した。

魔王『いい所すまんが、何時まで折れた剣を突き出してるのだ?』

ベ、別に忘れていた訳じゃないんだからね! -

無意識に込めた魔力により刃が折れてしまったようだ。

僕は出来るだけ何でも無いように装いつつも、どうじょうか一瞬だけ迷つて折れた剣を鞘に納めた。

謎の集団は第4王子直属の騎士団らしい。

騎士団長「爺はどういらっしゃい?」

姫「翁の所へ支援を要請に行きました。」

騎士団長「お一人ですか?」

姫「いえ手馴れたものが一人、一緒に向かいました。」

騎士団長「やうですか。ああそだ、まずは我々の陣営へお越しください」

その申し出に僕を握る姫の掌に力が入る。

魔王『用心しろ』

どうこうこと?』

魔王『顔見知りだとしても敵である可能性はぬぐえない』

第4王子付きの騎士団長なのに。

魔王『脅されたり敵に降つたりしているかもしない。』

そんな事が。

魔王『ありえない事ではない。相手の話に乗らざ様子をみろ』

力が入る姫の手を優しく「大丈夫だよ」と伝える為に優しく握る。

伝わったかは分からぬいけど。

僕「いいでしようか?」

騎士団長「何か?」

僕は騎士団長に自己紹介をする。

とある地方の貴族の三男で見聞を広める為に旅をしている。妖精少女の正体は羽が隠されておらず精霊魔法を使ったのを田撲されてるので隠しようが無く、旅の途中で出会って一緒に旅をするよつになつた僕の妹のような存在と説明。

そして爺と共に向かったのは僕の従者であることを伝えた。

僕「僕達は爺達が戻るまでここを離れる訳にはきません」

騎士団長「それは何時頃戻られる予定なんでしょう?」

僕「一昨日の夜に出ましたので早ければそろそろ戻つてくるかと」

僕の嘘に姫の掌が震える。

もし相手が敵に通じている場合はこの事を聞いたときに何かの反応が見られるだろう。

出来るだけ警戒していない風を装いつつ周りの騎士も注意深く観察する。

騎士団長「分かりました。では我々も合流して待ちましょう」

騎士団長は少し考えるそぶりを見せるもすぐに頷いて周りの騎士達に指示を出す。

魔王『まだ安全と決まったわけじゃない。油断はするな。』

わかった。

慌しく一人の騎士が森の奥へ走つて行く。

周りに注意を払いながら姫に小声で話しかけ「知り合いで敵になつてゐる可能性もあるので気を抜かないように」と伝えるとすぐには小さく頷き返してきた。

その可能性を姫も考えていたようだ。頭がいいなあ。

僕は折れた剣を鞘に戻し姫の剣と交換してもらひ。

そうしていると騎士団長が近づいてきたのを感じた2人は僕の近くに寄つてくる。

妖精少女は服のすそを、姫は剣の交換に離していた手を握つてくる。

騎士団長「すぐに我々の仲間が参ります」

相手は友好的な感じだがもし敵ならこれ以上増える前に逃げたほうがいいのかな?

警戒心を露にした僕達を見て騎士団長が肩をすくめる。

騎士団長「安心してください。私達は味方です。」

魔王『まだ信用は出来ない』

騎士団長「といつても今のような敵の多い状況では難しいかもしませんが、これからこられる方にお会いになれば信頼していただけます。』

『この流れからしたら第4王子か。それとも別の信頼できる人物か？

魔王『捕まえた美女と爺を田の前にして降伏を強制してきたりな

なんでそんな怖いことばかり思いつくの。

魔王『魔王だからな』

確かに！

魔王『ただ、そういう最悪の状況も想像できないと様々な対処法は思いつかない』

魔王がまじめなことを言つてる。

魔王『我はいつも真剣だ』

少しすると数人の人物が僕達の馬車に近づいてきた。
その人物をみた姫はハツと息を呑む。

姫「第4王子！」

大人に囲まれた相手は少年だった。

魔王『ほう、あれが』

僕と同じくらいの年だね

魔王『だが威厳は奴のほうが数段上だな』

悪かったね。

第4王子と僕は互いに自己紹介をする。

どうやら先ほど走つていつた騎士にある程度話は聞いていたようでも、
妖精少女を見ても驚くことなく微笑んでいた。
その笑みはどこと無く姫に似ている。

王子「姫姉さまを助けて下せつたそりで、お礼を申し上げます」

僕「い、いえ」じどりもじどり

王子「君もありがとうね」

妖精少女にもも礼を言ひつ。

王女の後ろから王子を眺め「うん」と呟く妖精少女。
どうしが守られてるのか分からぬ。

姫「よくじ無事で」

王子「姫姉さまにや」

お互に今までの状況を話す。

王子は裏切りの事実を知り姫の救出へ向かうも間に合わず、逆に敵の前面におびき寄せられ追い詰められて逃げ落ちる結果となつたらしい。

何とか騎士団長を含む20名ほどの騎士と逃げ切ることが出来き身を隠しながらか信頼出来そうな領主の館を極秘裏に回っていたらしく、翁の所に向かう途中だつたようだ。

姫は急な裏切りで背後から攻撃を受け動搖している所を敵に攻撃され挾撃の形となり軍は瓦解。

逃げ延びて山の麓に拠点を構え仲間達と時期を探つていた所、居場所がばれてしまい攻撃を受けた。

みんなは姫の脱出の時間を稼ぐ為に敵と奮闘をし、その間に爺と2人で脱出した。

その後は一時撤いたと思った敵兵に見つかり追いかけられている所で僕達に出会つたらしい。

お互いの話が終わつた後に爺がもうすぐ戻ると言つのは嘘で、早くても明日の夜けぐらいだと説明する。

それを聞いた騎士団長は「あの場合は当然でしょうな」と僕の嘘に頷いてくれた。

戻つてくるまで丸一日あるとこいつと騎士達は野営の準備を始めた。

とはい天幕などがある訳でもない。

人数も居ることだし見張りも十分つけると言つひと火が2つほど焚かれた。

小さな光を見た姫がほつと息を吐く。

王子「見張りは騎士達が交代で行いますので今日はゆっくりお休みください。」

姫「ありがと」

王子「ただ我々より信頼のおける人物が居るようですが」

王子は未だに繋いだままの僕と姫の手を見て笑顔で言つ。

それを聞いて繋いだままだったのに気が付いたのかぱっと手を話で俯く姫。ちょっと残念。

僕は気が付いていたけど手を離すのが惜しくて黙つてただけなんだけどね。

と、あいた僕と姫の手を掴み「私も繋ぐ」と言つ妖精少女（可愛い！）

王子「暖かい飲み物を用意させますのでビーフ火のそばへ」

笑顔の王子に促され焚き火へと歩みを進めた。

まさか第4王子と出会つとはね。

魔王『確かに低い確率ではあつたが同じ相手を指しているなら必然と言えよう。』

でもこんな幸運があるなつてまるで物語みたい

魔王『だがそういう幸運にも恵まれてゐるからこそ何かを成し遂げることが出来るんだ。だからこそ後に語り継がれるのだろうがな。』

確かに

剣を振つてると騎士団長が近づいてきた。

騎士団長「鍛錬ですか」

僕「はい」

騎士団長「剣は誰に教わつたのですか?」

僕「従者です。今、爺と共に行つてゐる」

騎士団長「さぞお強い男性なのでしょうね」

あれ?美人さんは女性だつて言わなかつたっけ?

魔王『言つてないな。面白いし黙つておこう』

騎士団長「よければお相手いただけませんか？」

僕「あ、はい」

別の事に気を取られていた僕はつい返事をしてしまった。

さすがに妖精少女と姫が寝ている横で剣をぶつけるわけにも行かず少し離れた場所で向かい合つ。

騎士団長「闇夜の戦闘経験は？」

僕「少しだけ」

騎士団長「そうですか。では軽く流しましょつか

騎士団長は軽く剣を構えると僕に笑いかけた。

魔王『いきなり来るぞ。下がるなよ』

え？

魔王のつまらなそうな一言に聞き返そうとした瞬間に騎士団長は
気に距離を詰める。

僕は魔王の「下がるな」という一言を信じてすぐに前に出る。

前に出た僕に軽く眉を動かした騎士団長は剣を振り下ろしてくれる。
それに剣を合わせながら押しつぶそうとする騎士団長の力に負けな

いように押し返す。

ふと「力押しだけでは引かれたときに体が泳いで危ないですよ」という笑顔の美女さんの言葉が浮かび力を少し緩める。急に僕が力を緩めた事に体が流れそうになりながらも力の方向を変えて僕を突き飛ばそうとする騎士団長。

その力を流しつつ互いの体の位置を入れ替える。

彼我の距離はどちらかが一步踏み出せば剣が届く。

待つ必要は無い！

僕は一步踏み出し剣を振るう。

僕の剣を弾いて斬りかかかりそれを剣で受け流し再度剣を振り、弾かれ、流され、避け、受けられる。

互いの剣が何度も何度も重なり合う。

互いの剣が弾かれた瞬間に距離をとる。

気合を溜め再度飛び込もうとした時

王子「そこまで！」

声に動きが止まる。

見ると王子と姫と妖精少女がそばまで来て見ていた。

あれ？寝ていたんじゃ？

魔王『近くであれだけ騒がしければ冬眠中の獣でも飛び起きるだろ

『い

そんなに煩かった？

一步引いて剣を取める騎士団長を見て僕も剣を取める。

王子「素晴らしい剣術ですね」

僕「いえ、ありがとうございます」「テレ

騎士団長「こえ、騎士団にもそこまで使えるのは中々いません」

王子「これほどの使い手がいたとは」

騎士団長「彼に剣を教えている従者殿はあらへお強っこい」

王子「なんと…」

僕を囲んで褒め称える王子と騎士団長。

誉められ慣れてないのでもう勘弁してください。

魔王『これぐらいでいい気になるな。』

その毒舌の所為だからだからね！

周りで見ていた騎士にも解散が告げられる。
どうやら見張り以外の者は僕達の仕合を見ていたらしい。
ものすごく恥ずかしい。

騎士団長「騎士の剣を押すだけで二つにしましたが、あれは？」

魔力の事は言つても大丈夫かな？

魔王『それくらいならかまわんだろ？ 珍しいとはいえ人族でも出来る奴はいる』

僕「剣に魔力を通して切れ味を増やしました」

騎士団長「魔法剣士のですか！」

僕「いえ、そんなすごいものではありません。」

持ち上げられるのが照れくさくて頭をかく。

妖精少女が「お兄ちゃん強かつたね」と膝に抱きついてきた（可愛い！）

姫は少し離れたところで見ていたが僕と目が合つと「そろそろ寝ましょう」と妖精少女を呼んで手を引いて行つてしまつた。

嫌われてしまったかな

魔王『……なぜそつ細ひつっ。』

田を畠わざれるといひわれんし、近くに行へと身を強張りせらじみせらし

魔王『そつ細ひつならそつなのではないのか』

そつか。。

凶んでる僕に魔王の「やれやれ」という雰囲気が伝わってく。呆れなくてもいいじゃないか。

少しきらこ仲良く出来たらこいな

魔王『ソウカ。ガンバレ』

ありがとう魔王

滅多に無いあまりにも優しい言葉に勇気付けられる。
激しい運動で乱れた呼吸は戻りつつある。

日を瞑つて馬車に寄りかかる。火照った体に夜風が涼しい。

美女さんと爺は無事かな。

そう思つたときに騒然とした音が聞こえた。
すぐに駆け寄つてくる王子と騎士隊長。

騎士団長「見張りをしていた兵が人影を見たよつです」

僕「敵ですか？」

騎士団長「分かりません。ただ用心は必要です」

緊張した瞬間、周りの兵が剣を抜いた。
一人の人物が歩いてくる。

美女さん「ただいま戻りました」

僕「美女さん！」

周りの兵は緊張を解かないものの笑顔で悠然と歩く美女さんに困惑
している。

騎士団長「お知り合いでですか？」

僕「爺さんと一緒に行つた人です。こんなに早く何かありましたか
？」

美女さん「無事戻つてきました。爺様と他の兵も居ます」

僕「もう行つて返つてきたの！？」

明日の夜になるんじやなかつたの?とい疑問に笑顔で返す。手短に王子と騎士隊長に挨拶をすると「とりあえず皆さんを呼びますね」と言い騎士隊長と数名の騎士を連れて森の奥へ消えていった。

第8話 少年（後書き）

誤字修正

魔王「後ろから来るぞ」

魔王『後ろから来るぞ』

話しかけ知り「合い」でも

話しかけ「知り合い」でも

恵まれているからそこ

恵まれているからそこ

だからそこ後に

だからそこ後に

繭を 眉を

氣合を貯め 氣合を溜め

そんなすごいものではなりません

そんなすごいものではありません

追加

僕が折れた剣を構えているという状態を魔王につつこまるシーンで「何故折れたのか」などを追加。

第9話 潜息

合流した爺は王子を見るとすぐに腰を折り「よべぞ」無事で「と涙を流さんばかりに喜んだ。

一緒に来た領主息子という人と2人の兵も膝を折る。

姫も起きたらしく、半分寝ぼけた妖精少女の手を引いて現れた。

首輪が無い事と羽を隠していない事をみた美女さんは何も言わなかつたがある程度察したようだ。

姫にも長い礼を尽くそうとしていた領主息子は「時間はあまりありませんよ」という美女さんの一言に短い礼をして共に後ろに下がった。

すぐに情報交換をする。

とりあえず翁の方は話がついて何人かの信頼できる人物に連絡を取つてくれているらしい。

街道には歩哨が居る為に兵を待機させ一部の兵で来たらしい。

王子の方も幾人かの領主と話は付けており翁を頼ろうとしていた矢先に僕達に出会つたといつ事を伝える。

王子「姫姉さまと爺はこのまま翁の元に向かつてもうつた方がいいと思つ

姫「王子はびづかるのですか?」

王子「僕は話を取り付けている領主の下へ行き、姫と翁が立ち上がるのに呼応して兵を挙げます」

姫「一緒に翁の所へは？」

騎士団長「兵が集まらない」「箇所に集まるのは危険です。」

爺「王子が話を付けてくる領主とこののはめぞりですか？」

騎士団長「いい」と

地図に丸と三角を付けていく指揮団長。

騎士団長「丸が協力を必ず得れる領主。三角が兵は出せないが国王側には付かないと約束を取り付けられた領主です」

王子「三角は状況によつては兵を出すでしょ」

爺「丸の兵を集めると1500と言つたどりですか。」

騎士団長「2000近くはいくかと。三角は1000を越えないといつた所ですね」

領主息子「翁も2000は集めると申しておつました」

爺「合わせて4000集まるかどうかといつ所か。後はどれだけ味方に付くかだが」

僕「敵はどれくらいの数が居るんですか？」

王子「近衛騎士団1000名、白の騎士団2500名、赤の騎士団

2000名、黒の騎士団4000名、それに国政を掌握している有力貴族の一門とその取り巻きが10000名で合計20000といつた所ですか。』

魔王『ものすごい物量差だな』

騎士団長「それに王宮に頭を垂れる者達が数千といったところですね。」

美女さん「多いですね」

騎士団長「そうですね。周りの領主を取り込んで増強しないと厳しいですね」

僕「一つ質問があるんですけどいいですか？」

手を上げた僕にみんなが注目する。

王子「どうぞ」

僕「何で3つの騎士団で兵数に差があるんですか？」

王子「黒の騎士団は先のクーデター後に新設されました」

騎士団長「我らを裏切った褒美でのじ上がったヤツが騎士団長に任命されてたんですね」

騎士団長が苦々しく言つ。

美女さんは僕を笑顔で見つめてる。

僕「人物像は？」

王子「有力貴族達に迎合する小物ですね。」

姫「私も何回か合つたことがあります、纏わり付くような嫌な視線を送る人でした。」

騎士団長「大事な場面で自分の出世の為に王子と姫を裏切った忠義の欠片も無い屑です。」

僕「嫌な奴なんだね。ごめん。話を逸らしましたね」

本当におぞましい事を思い出すよつて姫に「嫌な事を思い出すせて」「めんね」と言つと姫は少し微笑んで「たいしたことはありません」と言った。

それに安心して僕は騎士団長に先を促す。

騎士団長「ヤツは有力貴族に取り入り有力貴族と反発氣味だった白赤両騎士団長を幽閉して両騎士団の兵を自分の騎士団に組み込んだのです。」

僕「それで黒だけ数が多いんですね。今の白赤の騎士団はそれで誰がまとめているの？」

爺「白赤両騎士団の団長に自分の子飼いの者を置いているそうです。」

「

僕「不満が多いだろ?」

騎士団長「素晴らしい両騎士団長を幽閉して、あのような能力が無いヤツラが上に立つてゐるという状況に怒りを感じている者は多いでしょ?」

僕「じゃあ何で誰も不満を言わないの?」

騎士団長「言えれば自分は投獄されるのが田で見えてますからね」

僕「なるほど?」

「これは案外いけるかもしれない?」

僕「兵を擧げるとしてすぐに騎士団が来ると思つ?」

騎士団長「私なら(王都までの間に)ある大砦を指差す)に騎士団を配置しますね。」(王都へ行く兵を止める事が出来ます。)

僕「なるほど?」

騎士団長「やうして周りの領主に呼びかけて兵を集めながら敵が来るのを待ち受けます。」

爺「定石じやな」

魔王『つまらん手だ』

なら魔王ならどうするんだ?

魔王『大砦まで行きまわりの領主から兵を徴収する』

一緒にやないか

魔王『その後は大砦の防衛兵を残して全力で敵を蹂躪する…待つな
ど好かぬ!!』

なるほどね

僕「黒の騎士団長の人間性を考慮に入れてどう動くと思つか」

王子と騎士団長と爺が考え込む。

爺「いくらあ奴が愚かでもこの大砦の重要性は理解できるだろ?か
ら大砦までは来るな。」

王子「小心者なので3つの騎士団全部を全部連れてくるでしょうね」

僕「小心者なんですね。じゃあ8500を連れて来たとして、半分
以下の約4000の兵に対しても籠つてしまふかな?」

騎士団長「小心者ですかね。その大人数でも籠つて出てこないで
しう」

王子「多分出てこないでしうね」

僕「本当にやうかな?」

王子「といいますと?」

僕「4000と半分の上にその軍隊には王子と姫がいるんだよ?」

僕の言葉に王子と爺と騎士団長の三人が思案する顔になる。

僕「2人を捕らえるなり仕留めるなりしたらものすごい武勲だよね。そんな武勲を虚栄心の塊の人放つて置くかな? 半分以下の兵数だよ?」

爺「確かにそれは出て来ざるを得ないですな」

王子「それでも自分を危険にさらすような真似はしないんじやないかな?」

騎士団「白赤合わせて4500、近隣の領主を合わせてこれを使って来るでじょうね」

僕「自分の5500は出れない」

騎士団長「出しません。自分の騎士団は傷つけないよにして、両騎士団で取った武勲を自分の手柄にしようとしてます。」

爺「いつも両騎士団の数を減らして、いずれ自分の騎士団に吸収して1つにじょうとか考えるじゃうつな」

僕「なら都合がいいね

笑う僕に「どうこうつ事だ?」とみんなが首を傾げる。

僕「相手が両騎士団を出してくれるんだから取り込もう

ぽかんとする一回。

美女さんだけ相変わらずの笑顔だけど。

僕「両騎士団は騎士団長を幽閉されて怒りを覚えているからね

騎士団長「その騎士団長の命を盾にされているので、いかひに靡くなびく」
事はありませんよ

僕「別に僕らと共に戦つてもいい必要は無いです

王子「どうこう事でしょう?

僕「両騎士団の今のトップは騎士団に受け入れられていないと思ってます

王子「そうですね

僕「なのでその2人を倒して残りの騎士団には傍観に徹してもらいましょう」

王子「は？」

僕「王宮は騎士団長の命を盾に取つてこりますよね」

爺「そうですね」

僕「実際に処刑すると思っていますか？」

騎士団長「もし両騎士団が裏切ればするでしょうね」

僕「今もまだ出来ませんよ」

爺「どうこういとですかな？」

僕「今は両騎士団で4500、黒の騎士団の一支部もあわせると5000以上の兵が両騎士団を慕っています。その状況で処刑すれば、それだけの兵を敵に回すといふことです」

僕の台詞に感心する王子と爺と騎士団長。

姫がじつと二つ巴を見ている事に緊張する。

美女さんが微笑んで見ているのは僕を査定してこようでもっと落ち着かない。

魔王『美女は確実にそうだな』

だよね！

僕「ですので敵に回れば処刑されますが、戦闘放棄なら処刑しようが無いんです。」

王子「なるほどー黒の騎士団も奴の子飼いは100程度で他は元々両騎士団の騎士。それが傍観を決めたら勝機はあります！」

それだけしか子飼いが居ないの！？

魔王『張子の虎だな』

僕「とりあえず当面は2つの騎士団をおびき出す方法を考えましょう。あまり大砲に近ければこちらが危ついのですが、適度の距離でいい場所はありますか？」

騎士団長「大砲から馬で半日ほどの距離に小砲があります。大砲を取れない状況では拠点にするに適した場所はここですね。」

僕「爺、翁の場所から小砲までかかる時間は？」

爺「そうですね。朝から向かって1日といった所ですか。翌日には小砲につくでしょう。ただ翁もまだ兵を集めて居ないと想いますので集めるのに2日見て3日ですかな」

僕「王子が兵を集めて着く時間は？」

騎士団長「今から向かって兵を集めるのに3日。小砲まで2日で5日には付けるかと」

僕「小砲の兵数は？」

騎士団長「200といふ所でしょ?」「ひよ

僕「近隣領主が小砦を守る可能性は?」

爺「あつても500ほんばかり、全体で700といつた所ですね」

僕「王宮から騎士団が小砦に来るまでの時間は?」

王子「翁が兵を集めているのが伝わるのに1日。出陣の準備などがあるので先発隊で数百ほどが飛ばして到着に半日。本陣が大砦に来るのは3日後くらいですね。」

僕「爺。一日で落とせますか?」

爺「厳しいですが出来るでしょう?」

僕「翁の兵力でどうにか先に小砦を落としておへので、ここで合流しましょう?」

王子「はい

僕「ではその後の方針はあつた時にきめましょ?」

そう言つとみんな慌しく動き出した。

「ほつ」と息を吐くと姫と目が合つた。

調子に乗つて話していた事に恥ずかしくなつて照れ笑いを浮かべると「そんなことはありません」と言つてくれた。

姫「本来なら関係ないのに一生懸命考えて下さつてありがとうございます」

僕「いえ、気にしないで下さい。」

姫「何もお返しえませんが、この国が平和になつた時は出来る限りの事をします」

深々と頭を下げる姫に困惑する。

そこまで大した事を考へてるわけじゃないのに！

一生懸命な姫を少しでも助けたいと思つただけなのにさう二つ事を言つられてあせつた僕はつい口を滑らせた。

僕「じゃあ僕は姫と仲良くなりたいです」

姫「え？」

何をいつてるんだ、僕は！

僕「えっと、一国の姫に対して大それた事ですが、僕は姫と仲良くなりたいんです」

魔王『一応、我も一国の王子ではあるんだがな』

確かにそうだった！

姫「えっと、あの

僕「妖精少女とかとは笑つてゐるのに僕とは目を合わせてくれないのが悲しくて。こういう形で言つのはどうかなとも思つんですが、出来れば仲良くできたらなあ…とか思つてみたりして」

あせつて取り繕つとして口を滑らせまくつた僕の台詞は尻窄しりばみにな
る。

何を口走つてるんだ~~~~~

姫「嫌つてなど、その、あの、私も緊張してしまつて…

僕「え？」

姫「あの、よ、よろしくお願ひします、」

僕「本当ですか？やつた～」

魔王『まさこ、大逆転！』

なにそれ？

魔王『わからん。何となく言わねばいかぬ雰囲氣ふんいきだったのだ』

うれしさに姫の手を掴んで握手をすると姫は「あ、あの、準備がありますので」と顔を真っ赤にして走つていってしまった。
恥ずかしいといったし、手を繋ぐのはいきなりだったかな？

魔王『まさかあそこでああ来るとは。鈍いと思っていたがやるな』

まわか僕もあんな事を言ひてしまつとは思わなかつたよ

魔王『まあ結果的には良かつたのではないか』

そうだね。友達になつたことずつと思つてたし

魔王『は?』

出来れば仲良く話せる位に友達になりたいよね

魔王『……姫の気持ちを確かめたのではないのか?』

そんなつもりは無かつたけどね。結果的に僕の事を嫌つてないつ
て分かつてよかつた。

魔王『やはりお前はダメだ』

え? 何で?

魔王『いや、逆にすこしお主は』

まあ僕自信も姫といふへ仲良くなれてすこしうつじられない

よ。

魔王がため息をつく。
最近増えてない?

心配事でもあるのかと思つてよくよく考えたら、魔王の国も後継者争いで大変だったのを思い出した。

早くこの問題を片付けて妖精少女を送つたら魔王の国も考
えようね

魔王『そつだな』

そつひとつ僕も急いで準備を始めた。

第9話 溜息（後書き）

誤字修正

案外しけるかも
塊の人が頬つて

案外いけるかも
塊の人が放つて

第10話 気迫

姫が街道を越えた瞬間につんのめる。

静かな夜に小さな音が響く。

それは小さな音に閑わらず意外と響き歩哨の耳に届いたのかこちらに歩いてくる姿が遠く見える。

後ろを走っていた僕は姫に覆いかぶさり「静かに、動かないで」と小さく言ひ。

今居る場所は街道から見えるか見えないか微妙な場所。もしかしたら見付からないかもしれない。

足音が近づいてくる。

ちょっと離れた場所に立ち止まり周りを見ている。

早く立ち去れと思ったときに「ん?」と一人が呟いた。明かりがこちらに向けられている。

「どうした」と言ひ声に「あがが気になつて」と近づいてくる足音。

見付かつた

姫に「このまま」と言ひ足跡に集中する。

近づく足跡。柄に手を掛ける。

相手が近づいて覗き込む気配がした瞬間にぱっと起き上がり相手を斬り裂く。

近くに居たもう一人も剣を抜こうとする前に斬り伏せて周りを見る。

10歩ほど先に2人。

一人が抜刀してこちらに向かう後ろでもう一人が笛を取り出し吹こうとする。

あれを吹かれると周りから兵が集まつてくるだらう。

ナイフを投げようとするも一人が向かって来たので剣を避けすれ違
いざまに斬り裂きそのまま走る。

間に合わない！

そう思つたときに美女さんが立ち、笛を咥えた兵の首を一瞬
で捻じ曲げた。

笛の音は「ひょ」と微かに鳴つたが近くの僕でも聞こえるかどうか
だつたので周りに知られる事は無いだろう。

すぐにはみんなが集まってきた。

妖精少女は街道を越えた先の草むらから顔を覗かせている（可愛い
！）

その場で待つてているようと言われたようだ。

美女さんが皆に兵に死体を移動するように指示する。
僕も一人運ぼうとするのを爺は「私が」と死体を担ぎ「姫をお願い
します」と言われる。

震えている姫に「大丈夫ですか？」と声を掛けると「私のせいで見
付かつて」

僕「姫、立てますか？」

姫「みんなが危ない目に」

僕「姫」

震える姫。よほど怖かったのだろう。

「」で優しい言葉でも掛けられたらいいんだけど、」いつの経験が全く無い僕には出来そうにも無い。

姫の方を揺する

僕「大丈夫です。問題ありません」

反応が無い姫の顔を両手で掴み多少強引に掴み顔を覗き込む。

僕「聞こえますか？」

姫「ツ！」

僕「他の兵に知られる前に対応できました。まだ大丈夫です。」

「殺した」という言葉は避ける。

僕「ただここに居ると他の兵に見付かります」

動かない姫に僕は心を鬼にして言い捨てる。

僕「これ位で怯えないで下さい。今まで多くの人が犠牲になりました。これからもっと血が流れます。知り合いの血も！それでも貴方は毅然としなければならない立場なんですよ……」

姫は目を大きく見開き同様に揺れる。

僕「僕（たち）が貴方を（友達として）支えます。貴方は一人ではない。だから辛くとも負けずに前に進んでください。」

姫が驚きに目を開き強い意志が宿る。
その顔は高揚している。

元氣が出て良かつた！

魔王『…なぜだよな？』

もちろん発破をかけてやる気を起こしてもう一つ作戦だよ

魔王『もつ聽かん』

何だというんだ。

立ち上がる姫に手を貸す。

死体は街道から外れた草むらに隠した。

美女さんが街道上の争った後や落ちているものを処分して近づいてくる。

「日が昇るくらいまでは時間が稼げると思っています。急ぎません」

そういうと他の兵の待機する場所に向かって走りだす。

待機している兵はすぐ近くに居た。

美女殿が手早く馬を受け取る。

馬なんか乗れませんけど！

とか言える感じでもなく馬を渡される。

魔王『私は乗れて居たんだ。その体を持つお主も乗れる』

そりなんだ！よし！

他の人のやり方を見て同じように乗ってみる。

乗れた！

魔王『本当に乗れたのか！』

え？

魔王『まさか本当に乗れるとは

言い切ったくせに確信なかつたの？

魔王『まあ美女の訓練で体が動くようになって来たからな。元々体が覚えている事が出来だしても可笑しくないとは思っていた』

『結果良ければ、だ』と笑う魔王に馬の操作を簡単に図り。ちよつと歩かせて方向転換して止まる。軽くその場で駆け足で回る。

いけるかな？

魔王『走り出したら後は馬のリズムに合わせろ』

できるかな

と爺が「姫を乗せてください」と僕の所に姫とくる。2人乗りはしたこと無いし（本当は乗るのも初めて）だし「そういうのは爺とか美女さんの方がいいのでは？」と聞くと、美女さんは妖精少女を乗せているし爺は敵の追手があつた場合に指揮を取るので姫を乗せられないと言つ。

では別の兵にと言うと「おいそれと姫の体を若い男に触れさせていいと思つんですか！」と怒られた。

僕も若いんだけど

とりあえず他に姫を乗せる相手は居ないらしい。

「僕でいいですか？」と聞くと姫は頷いたので手を持つて引き上げ

る。

爺が後ろから足を支えて何とか馬に横乗りじやなく跨った。

あれ？ 後ろの元のんじや？

魔王『これから飛ばすのに後ろに乗つたら振るい落とされるとかも知れんだろ？』

ナウニツモノカ

なんかこんなに密着したらどうだきどきするな、いや今は非常時そんな事を考えたらでもいい匂いがする様な

出発の号令が聞こえ美女さんを先頭に走り出す。

僕も「行きますね」と姫に声を掛けて出発する。

意外といけそうかも、とか思っていたら周りがどんどんスピードを上げていく。

姫が前で馬の揺れに体を揺らしていたので片手で肩を掴む。片手で姫を支えながら操作は難しかつたのでそのまま僕に背を預けるように誘導し腕をおなかに通して固定する。

姫が何か言つてるけど風の音でよく聞こえないが多分、馬の速度に驚いているんだろう。

どうにか安定しそのまま領主の館まで休みなしで走り通した。

昼遅くなつてやつと田を覚ます。

疲れと久々のベッドと言つ事もありぐつすり寝てしまつた。

明け方に着いた僕達は翁と現領主に面会した。

簡単な自己紹介を行うと「お主が美女殿の主か」とまじまじと見られた。

妖精少女の事も正直に話すと「妖精族を見ると幸運が訪れると言わ
れてある。縁起がいいな」と翁が笑つた。

どういう言い伝えなのか気になつて後で聞いたら「嘘じや。ああでも言つておつたら妖精少女を蔑ろにする奴はおらんじやねり」と翁は豪快に笑つた。

「おじこさんす」¹。

王子に会つた事を伝えると翁はものすく喜んだ。

王子たちの計画を聞いて頷いていた翁と現領主は「騎士団を籠絡する作戦」の発案者が僕だと知つて「さすが美女殿の主となるほどの人物だ」と感心していた。

なんでこんなに美女さんの評価高いの!? 確かに色々出来てすごい人ではあるけど!

魔王『一回、しかも短時間しか会つていらない筈なのに何があつたん
だろうな』

美女さんの謎がまた一つ増えた。

他の領主達の伝令は全部送つたらしく早いものは戻つてきているらしい。

すぐに兵を準備してこちへ向かうので画にには集まりだす、と言つ。

塙を出す領主達に再度、2日後の朝に出発するのでそれに間に合はないようならまた連絡をくれるよう早馬を飛ばす。

行き先は念のためにまだ伝えない。

まずは休息を取らうといつ話になり、僕達は部屋を宛がわれ久々のベッドで眠つた。

そうして起きた^{ほじ}? 時前(15時頃)に話は戻るのである。

と言つても「何がある」と言つわけではない。

やる事が無かつたのでいつもは寝る前に行う美女さんの剣術指南を受けていただけだ。

美女殿に中庭で剣術指南を受けていたらいつの間にか人が集まつてきた。

姫もどこからか用意された椅子に座り、妖精少女を膝に乗せて見ている。

爺や翁や現領主の他まで警備以外の全員が来てるんじゃないだろう

か。

なんかものすゞくやりにくい。

「いろいろな人と剣を合わせるのはいい事です」 という美女さんの同じく見に来ていた領主息子と手合せをする事になった。

美女さんの開始の合図でお互いに間合いを詰める。

領主息子さんは見た田とは裏腹に力任せな攻撃を行う事は無く、細かい剣捌きを見せてくる。

しかし一つ一つの剣に重さが無いためにそれほどの齧感ではない為に、剣を捌きつつ隙をうかがう。

こちらの隙を見てぱつと離れた領主息子は納得いかないという感じで何回か剣を振った後に「もう一度お願ひする」と剣を構えた。剣を構えながら様子の変化に今回は間合いを詰めずに様子を見る。剣を構えていた領主息子がじりじりと間合いを詰める。

と一気に間合いを詰めたかと思つと先ほどより大降りで剣を振ってきた。

受けようとして剣の重さに受けから流しに変える。

急に変えたせいで少し体勢を崩しそうになる所に相手の剣が迫る。それを流しながら体勢を立て直す。

剣質が変わった事で戸惑つたが3合4合と会わせる内にこちらが本来のスタイルだと気がつく。

このままでは押し負けるのを待つだけだ。

どうにか手を出したいが相手の剣が重く次の一手が出せない。

魔王『気迫を出せ』

答える事も出来ずに剣を弾く僕に魔王が言つ

魔王『手が出せないなら氣迫を出せ』

どうこととか分からず防戦一方になる。

魔王『手が出なくても相手の急所や隙がある場所に一瞬だけ斬ると
いつ氣迫を出せ。場所は見なくていい』

どうことか分からぬが言われたとおりにする。
だからなんだと叫ぶ感じで特に何があるとこうわけでの無く、
防戦一方の僕。

魔王『氣概が足りない。手合せだと思つた。相手を殺す氣でいけ』

と言われてもよく分からない。

領主息子の攻撃に後ろに下がりそこのなる

魔王『相手をくい奴だと思えー負けたら妖精少女や姫がひどい目に
に合わされてしまう相手だと思つてやってみろー』

捌くのが辛くなりつつある。

魔王『お前がやられたら2人はどうなるかな。普通に殺される程度なら良いが、妖精少女はまた奴隸になつて首輪生活かもな。』

もしそうなつたらと思ひと血の氣が引く思いがする。

魔王『姫は確実に凌辱されるだろうな。もしかしたら妖精少女もされるかも知れん。妖精族は珍しいからな。歪んだ趣味を持つ奴もいるだろ?』

もしそうなつたらと思つたら怒りがわき、歪んだ趣味を持つ奴という言葉で怒りが一気に冷める。

そうなつたら殺す

魔王『お前が負けたらそつなるかもな』

なる前に殺す！

剣が捌き切れずに引きそつになる所と半歩踏み込む。

相手は剣の間合いを乱され半歩下がる。

少し剣が乱れた時を狙つて気迫を叩き込む。

場所は逆手の首筋。

下がりながらも剣を振つていた領主息子が一瞬何かに反応しけかつ剣を繰り出す。

捌きながら別の場所を「斬る！」とこう気迫を送ると一瞬そこに意識を取られるようで動きが遅れる。

次はやるー

振り下ろした剣を捌いたときに相手の「剣を持つ手首を斬り落とす！」という気迫を打ち込むと相手が手を引い瞬間に前に出る。それを察して後ろに引く相手を逃がさないように前を出て剣を突き出す。

相手がさらに後ろに逃げようとするが一いつ瞬の手が早い。相手の胸に剣先が刺し「そこまでー！」

美女さんの声に剣を止める。

そこで相手が妖精少女と姫を狙つ変態ではなく領主息子だと思い出す。

僕が剣を胸に突き刺そうとし、領主息子は剣をなぎ払おうと構えている所で止まっていた。

どうやら僕の一 手の方が先に届く状態である。

魔王『のめり込み過ぎだがいい気迫だった。怒りではなくアレが出来るようにになれ』

剣を引いて收めるとお互いに礼をすると大きくため息をつく。

「さすが美女殿の主だ。」と領主息子が握手を求めてくる。
だから美女さんは一体何をいたんだろう。

美女さん「中々の気迫でした。相手に押し負けず前に出了のも良かったです。ただ全ての剣を流すのは良くないですね。何手か受け止めるべき瞬間がありましたが捌くのに必死で見逃してしまってます。ああいう時に受けて押し返すなりして相手の体勢を崩しに掛からないとダメですよ」

美女さんの言葉を聞きながら先ほどの戦いを思い返す。

確かに全て捌くと変化が無く防戦一方になってしまつかもしれない。でもどちら辺が受ける時だったのかは分からないという事は余裕が足りないという事だらう。

美女さん「全体を通して中々良かつたですね」

僕「ありがとうございます」

領主息子「もしよければ私にもお教え願えないだらうか」

その申し出に美女さんは笑顔で首を振る。

美女さん「私は弟子などは取りません」

領主息子「しかし若には教えていいでは無いですか?」

美女さん「若は弟子ではなく主です。そして私は若の従者です。」

領主息子「どういたしまして？」

美女さん「従者として若の身の安全を守るのが使命です。ですので若には自分でも身を守れるよう私は出来る事をお伝えしておきます」

領主息子「弟子ではないと？」

美女さん「違いますね」

領主息子「どうしてダメですか？」

美女さん「良い悪いじゃなく、弟子を取るような事は無いだけです」

周りにも聞こえるように言つて、美女さんは「だた」と叫び、「若の相手をして頂けるのは助かります」と。

美女さん「私達がいる間の話だけですけどね」

その後も旅に付いて来るところでは無じですよ、と美女さんは微笑む。

領主息子はあきらめた風で「よろしくお願ひします」と一礼をして下がつた。

その後、兵士隊長も「お願ひします」と言つてきた。

美女さんの「では時間を区切つて仕合ましょ。」といつ一晩で手合をさせする事が決まった。

兵士隊長は領主息子と同じくらいか少し上の腕前のように全然反撃の糸口が掴めないまま美女さんの終了の合図を聞いた。

かなり息も上がり疲労もたまっている。

にも拘らずその後も爺と現領主と兵士3人まで相手にさせられた。

5人程相手をして1勝、2敗、2引き分け。

爺に負け現領主は引き分け。

意外と強い現領主。

兵士隊長に「いやらじで水が浴びれますよ」と井戸に案内してもらひ、上着を脱ぎ捨て水を浴びる。

ついでに喉を潤すと冷たい水が気持ちい。

一息ついて空を見ると真っ赤に染まっていた。

こんな夕日は初めて見た

元の世界ではもちろん、いつに来てからも夕日をゆっくり見るのは初めてだ。

着たばかりの頃は夜の静けさと星の多さにビックリしたがすぐに飽きてしまった。

「どうしたんですか?」と声を掛けられ振り返ると姫が居た。

僕「空が真っ赤なので見てました」

姫も夕日を見上げる。

僕「燃えるような夕焼けとこのはなにこの事を言つたんですね」

姫「そうですね」

初めての感動に姫が相槌を打つまで声を出していく事に気がつかなかつた。

恥ずかしい。

「燃えるような夕焼けといつのはなにこの事を言つたんですね」とか
「一体お前何者！」
「燃えるような」とか！
「燃える」が「萌える」だつたら「萌えるような夕焼け」ってどん
なだよ！
夕焼けに萌えるつてレベル高すぎだろー

魔王『萌えとはなんだ？』

説明難しいよ

魔王『そなに難しい一言なのかな？』

少なくとも僕には無理だ！

萌えとはなんだろう?とか良く分からぬ事を考え逃げようとしていた僕に「お疲れ様です」と姫が乾いた布を渡してくれる。お礼を言つて体の水分を拭き取りながら夕焼けを見上げる。

あれ?これってよく聞く「部活上がりに女の子がタオルを差し出す」という夢の場面じゃない?

魔王『ぶかつあがりとたおるとは何だ?』

状況を理解して舞い上がつて居る僕は魔王の台詞が聞こえていなかつた。

第10話 気迫（後書き）

誤字修正

笛を加えた
剣を避けられ

笛を咥えた
剣を避け

「何がる」「何がある」

攻撃をお行う
件を振つた後

攻撃を行う
件を振つた後

体制 体勢
(複数修正)

変わつた事へで
撒けたら 負けたら

もし追うなつたら
もしそくなつたら

気迫を置み込む
別の場所を切る!

美女さんの聞きながら
旅に着いて来る

旅に付いて来る

一例をして
こっちに着てから

こっちに来てから

着たばかりの事は
着たばかりの頃は

第11話 新興宗教

布を受け取り体の水滴を拭きながらテンションが上がっている僕に背後から声が掛かる。

美女さん「思ったより元気ですね」

僕「え？」

美女さん「呼吸は戻りましたか？」

僕「あ、はい」

美女さん「では馬上剣術の稽古を行います。」

マジですか？

マジでした。

美女さんの馬上剣術は熾烈を極めた。

まずはお互い騎乗状態での剣の振り方や馬の動かし方、相手が剣のときと槍の時を叩き込まれる。
というか何度も叩き落される。
美女さん槍も使えるんだ。

その後は相手が騎乗の場合を教わる。

相手がどのような攻撃で来るのかを剣と槍で。

その次は自分が騎乗で相手が徒步の場合^{かず}。

止まらず動き回る事と乱戦でも敵を近づけないようになると叩き込まれるというより叩き落される。

美女さん「一対一ならともかく戦場では落馬したら周りの兵士に取り囲まれて死にますよ。自分だけではなく馬も守るように動いてください」

美女さん「乱戦の時はどこから来るか分かりませんよ。周りにも意識を抜かず敵を馬に近づけない！」

美女さん「相手だけを攻撃せずに馬にも攻撃してください。馬を倒せれば半分は倒したも同然です。だからと言つて止めを刺すまで気を抜いてはいけません」

美女さん「あまり近づきすぎると馬に蹴られて死にますよ。騎手に届かないなら馬を狙つてください」

美女さん「攻撃の最中も馬の動きを止めない。絶えず動きながら攻撃しつつ優位な位置取りを心がけてください」

美女さん「体だけで避けない。馬」と動かないと次には動けなくなりますよ。」

美女さんの指導は容赦なかつた。周りで皆が見ている。

兵士隊長が「いいか！今の言葉を忘れるな！」と言ふと兵士達が頷く。
何なのこれ？

一人の兵士が呼ばれて騎乗する。

「今日は馬への攻撃は無しで」と言ひつとお互に羽引きされた剣を持たされて手合わせさせられる。

どうやら相手はさほど剣術が上くないよう何とか出来ているが馬の操作に気を取られ攻撃が出来ない。

何とか攻撃をしようと思ったら美女さんが抜き身で寄つて来るのが見えたのでさつと馬を動かして背後を取られないようにする。すると美女さんは元の位置に戻る。

何なの？気を抜いたら来るの？

何回か僕が攻撃しようとしたら美女さんは近づいてくる気配を出し、それに気がつき位置を変えると元にも戻るを繰り返す。

攻撃しようとした時に毎回来るわけではなく、何回に一回の割合で来るのはランダムなのか何なのかな。

魔王『分かつたぞ』

何が？

魔王『美女の動きだ』

何？

魔王『お主が馬を止めて攻撃しようとした時だけ来ようとしている。

動き回れというのを実践できて無いからなのでは無いか?』

試しに何回か動きを止めて攻撃しようとしたら美女さんが動く気配がした。

当たりだ!

魔王『止まるとラスボス扱いされる美女さん』

魔王にラスボス扱いされる美女さん。

否定できない。

馬の動きを止めないように意識を集中しすると相手の死角を突けそうになる機会が増えってきた。

と思ったら2人目が追加された。
どうやら2対1のようだ。

攻撃をすることは出来ずに剣を弾きながら馬を移動させまくる。
背後を取られないように動く捌く動く捌く。

気がついたら3人目が来てた。

2人でも精一杯なのに3人は無理!とか思つたけど、馬の体が大きくて3人同時には来れない。

ただ3人目が退路を邪魔するように入れ替わるので詰く逃げれない。

」のまま捌いていても無理なので剣を受け止めて押し返して隙を作る作戦に出る。

捌きの中に受け止めて弾くという動作を入れる。

左の兵士が体を崩した瞬間を狙つて馬で当たりながら囲みを突破する。

逃げるわけにも行かないので2人が来るのを待ち構えたところで「そこまで」という声が掛かる。

先ほど押した兵士は落馬は免れたようだ。

美女さん「馬が止まってしまったのに気が付いてよかったです。もつ少し気がつくのが遅ければ私が言つて叩き落しました」

魔王G「！」

魔王『ぐつじょぶ?』

いい仕事したって意味だよ

美女さん「馬は守らなければなりませんが、囲まれそうな時などは相手を崩すのにもつと馬を当てて行かなければ行けませんよ」

なるほど。

兵士隊長（少し離れた場所で）「忘れるな！相手を崩すのに馬を当てるのも有効だ！」

兵士達（少し離れた場所で）「はつー！」

美女さん「囲まれる前に相手の輪の外に出るよう心がけてください。

再度囲おうとするのに連携が乱れたりするのでチャンスです。外へ外へですよ」

兵士隊長（少し離れた場所で）「分かったか！外へ外へだ！囲まれるな！…」

兵士達（少し離れた場所で）「はい…」

…

美女さん「対峙した状態で回頭させる時は大回りではなく小回りで素早く行って下さい。相手より遅かつたら体勢を整える前に来ますよ」

兵士隊長（少し離れた場所で）「回頭は小さく素早くだ！相手に遅れるな！…」

兵士達（少し離れた場所で）「はい…」

美女さん「少し煩いですよ」

兵士隊長（少し離れた場所で）「静かにしやー」

兵士達（少し離れた場所で）「はい…」

だから何なの？」の「ノンヒト。

美女さん「とりあえず今口はまじめにして畠口にしましょ。明日は朝からしますよ」

僕「マジですか？」

美女さん「まじです。明後日には戦になります。全然時間が足りません」

そうだった。

明後日以降は戦が始まるんだ。

美女さん「ですので明日はもつとびしひしひ行きまわよ

少しほなれた所で「よしー今までの内容を忘れないよう訓練開始だ！」
と言つ兵士隊長の言葉に兵士が「はいー」と答えて騎乗すると訓練
を始めた。

何だこの士気の高さは。

晩御飯はなかなか豪勢だった。

翁が「姫があられるから料理係も張り切つたのだろう。戦場では贅沢できないからせめて我が館にいる間だけでもな」と笑った。

夜は魔法の講義だが妖精少女も勉強したいと言い出した。

どうやら昨晩のピンチに何か思うところがあつたようで「お兄ちゃんを助ける」と言つていた（可愛い！）

魔力の制御に関しては後は実践しながら精度を上げていくだけなので僕の口を介して魔王が精靈について講義する事になった。
どうやら精靈について知つておくことは無駄では無いらしい。

美女さんと爺は僕の講義を笑顔で眺めている。

意外な事に姫が興味津々に妖精少女と聞いていた。

僕（魔王）『まあ「人族でも魔族でも波長の合ひ精靈が居たら使えるし、理論上は気に入られれば上位精靈とも契約を結べるから」な』

姫「魔力が無い私でも妖精と契約できたりするのでしょうか？」

僕（魔王）『「契約に魔力の多さは関係ない。確かに魔力を多い方が好まれる傾向にはあるようだが、魔力が無くても問題は無い（な）です」』

姫「なるほど」

僕（魔王）『「そもそも生きている限り魔力が0と言つ事は（無い）ありません。』』

姫「そうなんですか？」

僕（魔王）『「魔力の源は精神力（だ）です。これはどんな生き物でも持つていい生そのものだ。無ければ死んでいる」』

頷く姫と首を傾げる妖精少女。

妖精少女にはもう少し分かりやすく言わないとダメだな。
「博識なんですね」という姫に笑って誤魔化し続ける。

僕（魔王）『「その精神力を魔力にどれくらい変換できるか、それを魔法と結びつけるかどうかが魔法の有無に繋がる。」』

姫「変換と繋ぐ事ですか？」

僕（魔王）『「こればかりは感覚だから教えようが無い。それで変換効率で魔力の大小が生まれる。中には魔力は甚大でも魔法が使えない（馬鹿者「うるさいよ！」）者や、魔力ではなく法力に変える者もいる（しな）ようです」』

姫「魔法と神法は一緒なんですか？」

僕（魔王）『「元は一緒（だ）です。感覚で覚えるか、神の声で目覚めるかでの違いに過ぎ（ない）ません。」』

姫「と言つ事は両方使える事もあるんですか？」

僕（魔王）『過去には居たようだがものめずらしい程度（だぞ）ですね』

姫「そうなんですか？便利そうですが」

僕（魔王）『「確かに使える術は増えるのは便利（だ）ですね。でも精神力の総量はそうそう変わらない。両方使えると言つ事は精神力を2つに分けるという事になる。」』

姫「どういう事でしょう？」

精神力と言つるのは魔力と法力の源ではある。

だからと言つて消費したら精神力からいくらでも補充するというわけには行かない。

大きな器に水が一杯満たされている状態をイメージする。

器が人のキャパシティであり水が精神力である。

器の大きさは人によつて大小さまざまあり、その大きさはそつそつ変わらない。

もちろんその中に貯まる精神力も器の容量を越える事は無い。

その器の一部を区切つた中身が魔力や法力で使える精神力となる。その区切りの大きさが変換率とも最大魔力や法力とも呼ばれる。区切る範囲の大きさはも人それぞれで基本的には変わらない。

その区切りに入つた精神力は魔力か法力のどちらかに変換される。魔力と法力は精神力の使い方が違うからである。

そして魔法などを使うと区切りの中の魔力は無くなつていき、枯渇

すると魔法が使えないくなる。

いくら区切りの外に精神力があつても区切りの中に無ければ魔法は使えない状態になる。

区切りの中の失った魔力はどうやって回復するのか。

それは休息を取る事により区切りの外の精神力が溜まり、それが溢れて区切り内に流れ込む事によって回復していく。
だから休みを取らなかつたり体調を崩したり、精神的に弱っている時は回復しにくい。

では魔力と法力を同時に使つた場合はどうなのか。

先ほど言つたとおり2つは使い方が違うので一緒に出来ないのでそれぞれに区切る必要がある。

しかし器に空きがあるうが区切りは一つしか出来ない。

一つの区切りをさらに細かく2つに区切る事になる。

片方が枯渇してももう一方から分ける方法は無い。

だから両方覚えるのは単純に使える魔力を減らしてしまつ事に繋がる。

しかも2つの大きさは選ぶ事が出来ないので、場合に拠つては得意な方が容量が小さくなつてしまつ事もある。

ただ魔力は何時、何処でどの様に目覚めるかは分からず、法力に至つては神の気持ち一つなのでどうしようもない。

長いよ

魔王『仕方あるまい。事実そうなのだから』

このままでは妖精少女が寝てしまう！

一応、うんうんと頷いているけど本当に理解してるんだろうか？
妖精少女が飽きないように簡単に話さなければならぬ。
でも同時通訳だとあまり考えて話せない。辛いところだ。

精靈は火・水・土・風・光・闇の6つあり、精靈王、上級、中級、
下級の精靈に分かれている。

それぞれの属性の他に光は正の感情、闇は負の感情を司ると言わ
れている。

基本的に精靈はどこにでも居るが大抵は下級精靈である。
妖精少女に協力してくれているのもそうであろう。

ただ水の中などに火の精靈が存在できないように、基本的にはそれ
ぞれ属性と対する場所では数が少ない。

逆に自分の属性の場所、水なら湖、火なら火山などの場所にはそれ
ぞれの属性の妖精が多いだけではなく中級の妖精も居たりする。

上級や妖精王クラスになると妖精界と呼ばれる別の世界に居て自らこちらに出でくる事は無い。

各地にある特定の場所のみで交信することが可能だが、人ではなかなかたどり着けない場所だつたりする。

妖精と契約をし力を借りるのには精神力が必要だが妖精少女のようにお願いして力を借りる場合には一切必要ない。

ただ力を借りるのは相手に入られないと無理だし、借りれる力も周りのものを利用するだけなのでそれほど多くの力は使えない。頑張つても妖精少女のように風の力で相手をよろめかす程度が精精である。

契約を結ぶのはまずは相手に認められる必要がある。

その上で契約を結ぶのだが、精神力に魔力や法力とは別の区切りが出来る。

これが精靈魔法を使う為の靈力になる。

靈力は同じ属性の精靈なら同じ区切りで使う事になる。

この多きさも精神の器以上は大きくならないし、魔力や法力とは一緒に出来ない。

ただ魔力と法力と違ひ靈力は新たな契約で増える事がある。

だからと言つて下級と数多く契約を結んでも増えるわけで無い。

例えば呼び出すのに靈力3が必要な下級精靈と契約を結ぶとする。その時に最大靈力10の容量が出来た。

靈力10のうち3で呼び出して残り7を使って下級精霊で出来る精霊魔法を使う事になる。

次に同じ属性の靈力4の下級精霊と契約を結んだとする。
その場合は最初に契約した際にできた最大靈力10で十分呼び出せるので靈力は増えない。

靈力10あるので4と3の2つの精霊を呼びぶ事も可能だ。
2つの精霊を呼びぶ事により
だが使える靈力は残りの3になるのでそれほど多くの精霊魔法は使えなくなる。

靈力が増える状況はどういう場合か。

それは最大魔力10の状態で靈力20必要な同じ属性の中級と契約を結んだ時である。

10では呼び出す事も出来ないので最大靈力が50に増える。

気をつけないといけないのが精神力の最大値以上の契約を結んでしまった場合である。

精神力の最大値が100の時に呼び出すのに靈力150が必要な上級精霊と契約を結んだばあい。
最大靈力は100までしか増えない。

その状態で靈力150の上級精霊を呼んでも靈力が0になるだけで呼ぶ事は出来ない。

気をつけないといけないのが説明しやすいように靈力を数値にしたが、実際は感覚でしか分からぬ。

なので自分の最大値は分からぬし精霊を呼び出すのに必要な靈力もどれくらいか分からぬ。

僕（魔王）『「精靈に氣に入られるのはどうしたらいのかは分か（らない）りません。』』

姫「そうなんですか？」

僕（魔王）『「精靈と契約を結んだ事も無いし、精靈は（我々）僕達とは思考が違うから（な）」』

妖精少女「でもお兄ちゃんの周りには多いよ？」

魔王『ほつ』

僕「え？ そこの？」

うんと頷く妖精少女

多いのか。 なんでだろう？

姫「見えるんですか？」

僕（魔王）『「靈力を持つと精靈を見れるようになるらしい。靈力が低いと上のクラスの精靈は見えないが氣配を感じるくらいは出来るだろつ。」』

姫「では妖精少女は靈力を持っていて妖精が見えるんですか？」

僕（魔王）『「妖精族は昔から精靈と強い結びつきを持っている。住んでいる森にも多くの精靈が住んでおり幾人もの精靈使いが居るだろうから、小さな時から触れ合ってわずかでも靈力が付くのは理解できる。そういう種族性が精靈に好まれる要因の一つかもしだい』

「精靈が見えるなんて素敵ですね~」と呟く姫。

妖精少女が「えへへ」と少し得意げにする。（可愛い！）

僕（魔王）『「靈力が無くても日頃から意識をしていたらいつか精靈から語りかけてくるかも知れないな」』

姫「そうなんですか！頑張つてみます」

僕（魔王）『「妖精少女が精靈と契約を結ぶ方法だが」』

妖精少女「うん」

僕（魔王）『「精靈の属性の強い場所で精靈に語りかければ後は精靈が判断してくれる（だろう）よ」』

姫「そんな事でいいのですか？魔方陣を描いたり必要なものがあつたりとかは」

僕（魔王）『「中級までは必要（ない）ありません。上級以上は場所（だの）だつたり儀式（だの）が必要なのですがね」』

なるほどと頷く姫と「今度やってみる」という妖精少女。ここに辺に精霊が集まる場所はあるのだろうか？

とりあえずは今日はここまでと言つ事にし、それぞれの部屋に戻った。

第11話 新興宗教（後書き）

相手が勝ちの場合	相手が徒步の場合
間引きされた剣	羽引きされた剣
死角を付けそうに	死角を突けそうに
体制を整える前に	体勢を整える前に
妖精が居たら使えるし	精靈が居たら使えるし
同じく切りで区切りで	同じ区切りで
残り7えを使って	残り7を使つて
靈力ある10	靈力10
見えるんですか	見えるんですか
妖精と強い結びつき	精靈と強い結びつき
精銳と契約を結ぶ方法	精靈と契約を結ぶ方法

第1-2話 小砦攻防戦

翌朝から続々と兵が集まつてゐる。

姫と爺は翁と現領主・領主息子と共に挨拶に来る領主に面会で大忙しだ。

僕は美女さんの指導の下、馬上剣術の訓練と戦闘の稽古を受けている。

その後ろでは美女さんの言葉に過剰反応する兵士隊長と翁の兵士達。本当に意味が分からない。

僕に声援を送る妖精少女に注目が集まつてゐる気がする。

昼は姫や翁達と新たに来た領主と昼食を行う。挨拶をすると意外とすんなり受け入れられた。どうやら姫を助けた事や騎士団の無力化などを考え事で評価されていふらしく、いふらしく、ちょっと照れる。

妖精少女に関しては翁が言つてた「妖精族を見ると幸運が訪れる」という話を理解しているらしく「出会えて幸運です」と言つていた。どうやら他の領主にも早馬で話は通していたらしい。

それで兵士達は妖精少女を見に来ていたようで一安心。

夕方には館を発つ為に昼は訓練を行わず集まつた領主や各兵士隊長達と作戦を話し合つ。

僕と美女さんは姫と一緒に本隊にと言われたが美女さんの一言で翁の兵を100名程預かり遊撃部隊となつた。

妖精少女は姫の移動用馬車に乗る事になつた。

姫は移動の際は馬車を使つが戦場では馬に乗り兵士を鼓舞するそつ

だ。

目標の小砲攻略の作戦を話し合い解散となる。

日入（18時頃）翁の館を出発する。

集まつた兵は約1700名。

間に合わなかつた領主達は途中で合流する事になつており、もひ400程増えるらしい。

後はどれくらい静観を決めている領主を取り込めるかといった所である。

現在集まつてゐる者の殆どが騎乗してゐる為に進軍スピードはなかなか速い。

通過する近隣の領主にドンドンと通過の挨拶と参軍の呼びかけを行う。

内容は

「国の乱れを憂いて姫を旗頭に兵を挙げた」

「近くを通過するのに挨拶しないのは失礼だと思い、急だが挨拶だけでもさせて頂く」

「我々が勝利した暁に國を腐らせる逆賊を一族も加担したものも厳罰に処し國を正しい方向に導く所存」

「もし国を思う気持ちがあるならば一緒に兵を率いて戦わないだろ

うか？」

「勝てば今回の戦の功績に見合つた以上のものを下さるつもりである」

「まずは小砦攻略を考えているが、ここが一番の正念場になると思われる」

「ただ王子も別方向から兵を率いて小砦に向流する事になつてるので、小砦を落とせば後は問題なく勝てるだろ?」

「王子も王女も今回の国の荒廃に本当に心を痛めており、勝利した暁には国賊の一族とそれに加担したものの財産を全て没収し国の復興に当てる事を決定している」

「もちろん国難に何もしない者や我が身可愛さで代わりに勝ち馬に乗るような節操の無いものも国の荒廃に加担したとして資産の一部を差し出してもらひし、よりよい国作りの為に立場も改めさせてもうらう」

「もし我々の勝利が聞こえて来たならば多くは報いる事は出来ないと思つが駆けつけてください」

簡単に言つと

「とりあえず今から戦争しに行くけど一緒にどう? 今から参加してくれるなら勝つた時に頑張り次第で褒章考えるけど。敵対したら全部財産没収の上にお家断絶、傍観したままでも財産の一部と利上げと身分を下げたりするけどね。ちなみに一番しんどいのは小砦だから。そこで王子たちも来るから勝利は確実だけど、これ以降に来た奴は小砦攻略に参加した者より確実に功績は低いね。」

と言つ事だ。

そんな「敵対したら」とか「傍観でも」とか過激な発言してもいいのかな?とも思つたけど魔王が『どうせ負けたら全て終わりだ。それなら過激な事を行つても周りの奴に発破をかけて引き込むしか

あるまい』と言つので納得した。

『敵に情けをかけることも無い。勝てば一族郎党皆殺しは基本だ』
と言つのはどうかと思つけど、中途半端にして後々反乱を起こされ
ても困るので仕方ないらしい。

夜に野営を行う。

僕の天幕は姫の天幕の横にあるもので爺と一緒に使う。
美女さんと妖精少女は姫と一緒に天幕で休む。
さすがに大所帯だと見張りをする兵がいて夜も休めるようだ。
ただ戦場ではあるので夜襲などには気をつけないといけない。

日が昇る頃には起きて移動の準備を行つ。
すぐに準備を終了、移動を開始した。

?時（16時頃）に皆まで1刻ほどどの距離に付く。

兵士の数は3000まで膨れ上がった。爺と翁の脅しの効果が出て
いる。

兵士が隊列を組む。

本陣は姫、爺、翁 約1500

右翼は現領主 約700

左翼は領主息子、兵士隊長 約700

遊撃は僕と美女さん 約100

小砦には敵領主軍はあまり集まつていないよつだ。

居ても元居た小砦兵と敵領主兵を合わせて500居るかどうかのようだ。

まだ騎士団は到着していない。

原因はわからないが居ないなら小砦を攻めやすくなるので、それはそれでいいかと気持ちを切り替える、

戦が始まった。

右翼と左翼で砦を半方位しながら近づいて弓を射掛けては離れてを交互に行つ。

嫌がらせでしかない。

左右に敵が寄つたときに本陣の部隊の一部が城に取り付こうと近寄るそぶりを行つ。

相手は援軍が来るまでは持ちこたえようと必死で弓を射掛けてくるが盾に阻まれてそれほどの損害は受けない。

小砦への敵領主軍の援軍は実は来ていた。

ただ取り囲んでいるこちらの軍に気がつき行動が取れなくなつてい

た。

そこにはひから兵と使者を送る。

内容は「よく参軍してくれた…まあ一緒に小砦を落とそう…」といふものである。

敵として来たのを知つていながら。である。

そうしてここに来るまでに他の領主に伝えたのと同じ内容を伝え「一緒に勝利の栄光を！」と押し切る。

「自分は国王軍側だ！」と言えば自分より数の多い本陣に襲われ全てを失いという恐怖から否定できないまま反国王軍側へと祭り上げられる。

無理やり反国王軍側に仕立て上げられたにも関わらず「今、小砦を攻撃している所ですが、来たばかりで兵もお疲れのようすで今回は後方で休まれた方がよろしいのでは？」と言われる。

本来なら参加したくない戦になつた場合には相手の言い分に頷いて兵力を温存し、時機を見て領地に帰ればいい。

だが今回に関しては姫だけでこれだけの兵が居るのに後に王子の兵も来る。

国王軍が勝てばいいがもし負ければ傍観していたらまずい。

もしもの時は「ここでやら無いと功績は殆ど認められない」という気持ちと、適当に戦闘に参加して体裁だけ保つて後は状況を見て勝ち馬に乗ろう、という打算が働いて「このまま参戦する」と言つていた。

そうして国王軍側として着たのにも関わらず丸め込まれ反国王軍になつた領主達は次々と左翼と右翼に割り振られていった。

反国王軍は丸め込んだ領主達を信用はしていなかつた。

わざと右翼も左翼も弓を射掛けて逃げると言つ消極的な行動を取つていた。

丸め込まれた領主軍はここに組み込まれ一緒に「これ位なら自分の兵はさほど被害が出ないか」と消極的な行動を取る。

どんどん取り込まれる領主達が左翼と右翼に組み込まれるたびに、元々居た反国王軍の兵士達が気が付かれ無い様に少しずつ右翼と左翼から抜けて本陣に戻る。

半分以上が元国王軍派の領主の軍になり、国王軍派の援軍も途絶えだした頃に右翼と左翼がいつもより深めに小砦に近づき弓を掃射する。

目を疑つたのは小砦の兵士である。

自分達の援軍として着てくれるという約束だった領主達が裏切り反国王派に付いたばかりか、先陣を切つて攻撃して来るのである。

小砦の指揮官は怒りに顔をゆがめて裏切り者の領主の旗を狙えと叫んだ。

元国王軍派の領主達も急に小砦からの猛攻に驚き必死で応戦する。そうなるともう国王派、反国王派関係無く自分を攻撃するものは敵である。

特に自分達を狙い攻撃して來るのである。

信頼関係はすれ違いにより敵対が決まった。

こうなればもう相手を倒すしかない。

「壁に取り付け！」という指揮官の声と周りの兵士の動きに合わせて一緒に壁に取り付くべく前進した。

僕達別働隊は戦場を離れ本陣後方に居た。

魔王が騎士団が不在がどうしても解せないというのだ。

その事を美女さんに伝えたところ「もし隠れているなら本陣への急襲しかないでしょ」うと言つので大回りをして本陣後方に配置し隠れる事にした。

今は美女さんが5騎程連れて偵察に行つていた。

美女さんが戻つてきた。

赤白合わせて200名ほどの兵士がいるらしい。

そのうち50名ほどが陽動の為か離れて移動したのでそれを狙う事になった。

50名を背後から100名で包囲を狭める。

魔王の『これ以上は確実に悟られる』の一言に他の兵に合図を送る。すると50名の隠れる場所の前を斥候を装つて美女さんと数名の兵士が通りかかるふりをする。

隠れながらどうするかを合図で話し合つ騎士達。

『やり過ごそ』うという結論に出たあたりで「ん?」と美女さん扮する斥候が何かに気がついた振りをする。

その瞬間に飛び出そうとする騎士達の背後から僕達が一斉に飛び出

し騎士達を取り押さえる。

出来るだけ殺すなとは言つていたが、何とか全員無事に取り押され
たようだ。

捕まえた兵士は45名

全員を武装解除して縛つて馬に乗せ連れて行く。

向かう先は残りの約150名の騎士の場所。

少しはなれた見渡しのいい場所で縛った騎士を座らせ兵士で周りを
囲んで見張る。

僕と美女さんは数名の騎士とともに45人の中で一番偉いだろう騎
士を縛つたままつれて150人の騎士の下へ向かった。

僕達が近づくと約150名の騎士が殺氣立つ。
十分な距離を取つて話しかける。

魔王『交渉は堂々と威儀を持つて、そして相手には主導権を渡さず
自分に有利に進めるのだ』

そんな難しいことはできないよ。

魔王がそんな事をいつの『いつこう時にどういえばいいのか分か

らなくなってしまった
それで出た一言が

僕「こんにちは」

返事は返つて来ない。

僕「責任者の方と話したいのですが」

そういうと一人の人物が名乗り出した。
赤の騎士団中隊長と言つちしい。

僕「お話を聞いてもらえますか?」

赤の騎士団中隊長「人質を取つてか? 降伏なら受け入れない」

僕「人質は話を聞いてもら手段なだけで降伏を勧めに来たわけじゃ
ないわけもないか」

赤の騎士団中隊長「どういふことだ?」

僕「とりあえず他の44名も全員生きてます。」

赤の騎士団中隊長「全員無事だと?」

僕「少しきらい怪我をしている人もいるので無事ではないですが、元気だと思います。お話を聞いてもらつた後は全員解放します。」

赤の騎士団中隊長「何が目的だ」

僕「話を聞いてもらつことです。僕の話を最後まで」

赤の騎士団中隊長は話してみると促す。

僕「赤と白の騎士団には戦に参戦せず傍観して欲しいんです」

赤の騎士団中隊長「何を馬鹿な事を」

僕の言葉を一笑する赤の騎士団中隊長。

その赤の騎士団中隊長に僕は「騎士団長が投獄されているのに笑つてられるんですね」と言つと赤の騎士団中隊長が殺氣を放つ。

僕「助けたくは無いですか？騎士団に正式な団長を迎えたくないですか？」

赤の騎士団中隊長「……」

僕「僕達が国王軍を倒せば騎士団長は開放の上で騎士団長として復帰してもうひし、恥知らずの黒の騎士団長一味も処刑しますよ？」

赤の騎士団中隊長「……どうやつて勝つと言つただ

僕「そのために赤と白の両騎士団には戦闘に参加せず傍観して欲しいのです。」

赤の騎士団中隊長「だが団長の身の安全をちらつかされて戦闘を強制されるとどうなるもな」

それに關しては裏切つたらまだしも傍観では処刑できないといつ根拠を説明をする。

赤の騎士団中隊長「……たしかに理屈は通つてゐる。だがそれでも団長の命をかけることは出来ない！」

僕「どうせしてもじつじりと戦力を削られ、脅威で無くなつた時点で処刑されてしまします」

赤の騎士団中隊長「つ……」

周りの騎士団も僕の言葉に悔しそうに唇をかむ。
どうやらみんな薄々気が付いてはいた様だ。

座して団長の処刑を待つか、打開できるかもしない案にのるか。

僕「姫も王女も赤と白の騎士団とは争いたくないと考えてます」

赤の騎士団中隊長「……」

僕「それは手ごわいと書ひのもありますが、両騎士団が国にとつて必要だからです。こんな無駄な戦いで消耗していい存在ではありません」

赤の騎士団中隊長「姫と王子の氣持ちは心から光榮に思ひ」

僕「ですのでこの案に乗つてもうえませんか？」

赤の騎士団中隊長は僕を見つめ、「それで交渉のつもりか？」と聞いてきた。

良く分からぬ僕は首をかしげ、「お願ひなんですか？」と僕は赤の騎士団中隊長が少し笑つた。

赤の騎士団中隊長「…私では判断が付かない」

僕「ではこの話を上に上げてください。あ、でも黒の騎士団団長や領主の手勢にはやめてくださいね」

赤の騎士団中隊長「分かった、赤の騎士団団長に話してみよ」

僕「白の騎士団にも伝えて欲しいのですが」

赤の騎士団中隊長「赤の騎士団副団長が白の騎士団副団長とも話すだろう」

「大丈夫だ」と頷く赤の騎士団中隊長。

僕「そういえばどうして白の騎士団の先発隊は来て無いんだ？」

赤の騎士団中隊長「王子側の軍隊の足止めに行かされている」

まさか僕の独り言に答えが返ってくるとは思わなかつた。
もしかしたら赤の騎士団中隊長は僕の意見に傾いてくれているのか
かもしれない。

赤の騎士団中隊長「貴殿の意見は聞いた。赤の騎士団副団長にも必ず云えよ。」

僕「お願いします」

赤の騎士団中隊長「だが何もせず戻ると疑われかねない。それは団長の命に関わる可能性があるので出来ない」

僕「うーん……ではここで戦闘しましちう」

赤の騎士団中隊長「何？」

僕「正確には僕達とであつて戦闘になつて痛みわけしたと言つ事で

赤の騎士団中隊長「…………」

僕「向こうに小さな怪我をした騎士も居るので丁度良いですね」

赤の騎士団中隊長「捕虜を解放すると?」

僕「話は聞いて貰いましたからね」

赤の騎士団中隊長「捕虜を解放した後の貴殿らに襲い掛かる可能性があるぞ?」

僕「それなら大丈夫だと信じてます」

赤の騎士団中隊長「これくらいの数は対処できる兵士達だと?」

僕「いえ。赤の騎士団中隊長をです」

彼は騎士団長を敬愛している。

その騎士団長を守る為、助ける為に僕は害する必要は無いと感じている。

赤の騎士団中隊長「つはははー!まーつたー!」

僕（？？？？）

魔王『男にも効果ありか』

なにが?

赤の騎士団中隊長「分かった！必ず伝える。捕虜の返還も感謝する

そういうと騎士団たちは剣を収めた。

僕達は捕まえていた騎士団達を解放し武器を返す。

赤の騎士団中隊長が去り際に「貴殿の名前は？」と聞いてきたので
「若と言います」と伝えた。

赤の騎士団中隊長は領ぐと騎士達を連れて小皆とは別の方へ去つて
いった。

赤の騎士団を見送った僕に美女さんが「お疲れ様です」と微笑む。

僕「あんなので良かつたのかな？」

美女さん「大丈夫です」

魔王『交渉としては最低だつたが、結果としては上々だ』

2人の言葉にほっと息をつく。

あ～怖かった。

いつ斬られるかと心臓どきどきしてたよ。

ふと戦場から響く声が大きくなつたので見てみると壁に取り付いた
兵がはしごをいくつも掛け、小皆の壁を乗り越えているのが見えた。

魔王『決まつたな

美女さん「堀を越えればもう決まつたようなものですね。時間の問題です」

僕「結局、小皆攻略は参加しなかつたね」

美女さん「でもそれに匹敵するくらいの功績は挙げたと思しますよ」

僕「だと良いんですけどね」

美女さん「やあ戻つて姫に報告しましょ。きっと心配で倒れそうになつてますよ」

確かに自分の命を掛けた博打の結果に関しては、どうなつたか心配で仕方ないとと思う。

美女さんと魔王が『勘違いしてゐる気がする』といひ。

僕「そうだね!早く戻らないと失敗と勘違いするかもしれない!」

僕達は本陣へと急いだ。

第1-2話 小砲攻防戦（後書き）

誤字修正

館を立つ為に 館を発つ為に

後輩に

荒廃に

撒けたら

負けたら

全方位 半包围

範囲を狭める 包囲を狭める

変換 返還

第13話 願望

小堺は陥落した。

小堺の指揮官と生き残った領主達は投降。どうやら小堺には450名の兵が居たらしいが生き残ったのは260名程だった。

犠牲者は殆ど領主の兵で、反国王軍が壇を乗り越えて来るのを止め事が出来なくなつた時点で指揮系統が壊滅し混乱し各自が独自で動いた結果、同士討ちもあつたようだ。

それに対して反国王軍は戦闘が終わつた時点で動ける兵は3200。戦闘中に来た元国王軍の領主達を取り込んドータルで3800まで膨らんだ。

犠牲の約600の内の7割が元国王軍領主の兵であった。

捕まえた領主は今度の対応として「国賊」として財産、領地、爵位は没収と伝えると膝を折つて許しを乞つた。
それを無視して牢屋へ送る。

小堺の指揮官は昔から小堺を守つている人物である。

本人は「生きて虜囚の」とか言つてたけど、よくある「死ぬほう
が不忠義だ!」といつので自害は留まつた。

ただ今の状況で小堺の指揮官に復帰するのは混乱を招くとして、指揮を副官に任せ自室に自主軟禁となつた。

僕「その行動も自己満足だと思つんだけどな」

美女さん「そういう儀式をしないと動けない人もいるんですね」

面倒な人は多い。

戦争は奇麗事だけじゃない。

小砦にいた領主の一族を捕らえに領地に兵を派兵する。
その兵は元国王軍領主の兵だ。

元々同じ国王軍だったのだから家族ぐるみの付き合いがる場合もあ
つただろ？

「これは踏絵じやよ」と翁はいつ。

国王軍に寝返るか反国王軍のままでいるかの踏み絵だ。

領地に向かう領主と兵に姫直々に言葉を傳える。

姫「略奪や暴行は一切してはなりません。歯向かう者は仕方ありませんが領主の一族は国賊とはいえて重に扱ってください。わが部隊からも兵は同行します。略奪暴行があつた場合はたとえ兵のしでかした事でも領主の罪になります」

翁「暴行略奪を行つたものは死罪、その者を抱える領主は財産と領地の一部を没収。領主が行つた場合は財産、領地、爵位を没収の上で一族も同罪。國賊の一門を逃がした場合は国王軍に組したとして國賊と同じ扱い。匿つた場合も同じく国賊と同じ扱い。」

領主達が顔を青くして聞く。

翁「逃亡した國賊の一昧を捕まえた者には誰でも褒章を取らせる。ただし過剰な暴行略奪を行つてしたり、不正があつた場合は死罪。これに関しては國中に触れを出す」

元国王軍の領主達は各領地へ行き今回的小砦に関わった9割近い国王軍の一族を捕らえてきた。

接收した領地には反国王軍の兵士が強盗などが入らないように警備に立つた。

集めた国王軍の領主の一族は成人男性と子供の3つに分けられ、大人の男は砦の牢屋に入れ、大人の女と乳幼児、子供はそれぞれ後方の別の館に軟禁されて元国王軍派の領主の兵士に守られる事となつた。

領主の一族を拘留するのが一通り終わった頃には翌日の日になっていた。

一睡も出来ず顔を真っ青にしながら報告を聞いていた。
「少し休みます」の声とともにみんなが下がる。

だが休めるわけがない。

今はそれなりの対応、軟禁は仕方ないとしても人として最低限が守られていたとしても、彼ら彼女らに待っているのは戦後の断頭台である。

幼い子供は助けるかもしねりが、それでも親兄弟が殺されるというのは幼心にどれだけの傷を与えるか分からぬ。

せめてその日まで酷い目にあわぬようだにと思い、「略奪暴行を絶対させないで下さい」と翁に頼んだ結果があの厳しい厳罰だ。だが逆に言えばあそこまでしないとそういう事が行われる可能性が高いという事だ。

しなくてはいけない事だとしても罪の気持ちに押し潰されそうになる。

椅子から立ち上がる」とも出来ずに俯いていた視線の端に足が見えて顔を上げた。

一睡も出来なかつただろう事は顔色を見たらわかる。

報告を聞いた後に「休みます」と呟いた姫の顔は見えなかつたが国王派の領主の一族の今後の事で胸が張り裂ける思いをしているのだろつ。

敵の一族のみまで案じて「略奪暴行禁止の徹底」を姫は熱望していった。

これは何とか守られたようだが、処刑は免れない。

今も立ち上がるにも出来ず頃垂れている姫が心配で近づいて行つた。

姫が顔を上げる。

いつもは白い肌も今は血の気が失せた様に真っ白だ。

姫「大丈夫ですっ」

僕が声を掛ける前に姫が口に出す。

僕「全然、大丈夫そうに見えません」

姫「分かつてます。仕方ない事なんです。大丈夫です」

自分に言い聞かせるようににいつ姫。

座る椅子の手すりを硬く握り締める姫のに手を添える。

僕「姫はどうしたいですか？」

姫「私がどうしたいかじやありません。しなくてはいけない事で？」

僕「しなくてはいけないのは分かりました。姫はどうしたいですか？」

姫の目が泳ぐ

僕「ここには僕の他には誰も居ません。心の内を吐き出しても誰も文句は言つませんし言わせません。」

姫「っ」

僕は姫の言葉を待つ。

姫「　たい　す」

唇が震える。

姫「助けたいです」

その一言を吐き出すと壇を切つたように言葉が溢れる。

姫「みんなを助けたいです。殺したくない死んで欲しくない。小さな子に家族全員が殺される思いもさせたくない。一緒に暮らせるようにしてあげたい。でもどうしてもできない」

僕「やりましょう」

姫が止まる。

僕「出来る限り助かるよつ一緒に考えましょう」

姫「え」

僕「国王軍に加担した者は基本的に助ける事はできません」

呆然と聞く姫

僕「ですので国王軍に参加した人を助命できる方法と一緒に考えま
しょつ」

姫「……」

僕「もしかしたら状況的に仕方なく国王軍に付いた人で、復興に必要な人材もいるかもしません」

姫「そう、ですね」

僕「状況を見て助けましょう」

姫の目に色が戻る。

僕「でも状況なんて曖昧ですね」

姫「え、ええ」

僕「基準も曖昧で線引きが難しい」

探るように僕を見る姫

僕「なのでいっそ、全員助けましょう」

姫「は？」

何を言つてゐのか分からないと止まる。

僕「国王派への加担は領地と財産と爵位の没収です」

姫「そうです」

僕「ではそこまでして命を取る必要はありません」

姫「でも状況がそれを許さないのです」

僕「そうですね。なので処刑しなければならない人だけ処刑します。」

どついことか分からぬ姫に説明する。

僕「まず全員、領地と財産と爵位の没収を行います。これは決定です。」

姫「はい」

僕「その後、彼ら一族には最低限の家と畠を元領地のどこかに用意し一領民として今後は生活してもらいます。」

姫「……」

僕「新しい領主は今回の戦で貢献した人の中から信頼の置ける人をつければ言ひと思います。そうすれば褒章の問題も一挙解決しますしね」

そんな事でいいのかな?と考える姫。

僕「領民から搾取や圧政を行つていた元領主は、元領主と…一族の成人男性は処刑をするしか無いでしょ?他の女性と成人前の男子はその場での生活は危険なので離れた他の領主の土地で一領民として生活してもらう事になります。」

姫「成人男子もダメですか」

僕「本来なら子供以外全員と言われるのです。仕方ありません」

姫「ツ」

僕「圧政を敷くことなく領民を守つていた元領主は、自分の元土地で数年間の開墾を行い、その後に何かしら理由をつけて領主に復帰してもらひ。処刑も無し」

姫「！」

僕「ただし復帰の事は言わない。領地は代理で誰かが治める…と後々揉めるかな?」

姫「国王の直轄地といつ扱いなら問題ないと思います」

僕「じゃあそれでいいましょう。いい領主だったかは領民が判断してくれます。これで殆ど処刑せずに済むかも知れません」

そういうと姫は大きく見開いた目から涙を流した。
力が抜けて縋つて来る姫を受け止めながら言つ。

僕「まだです。まだ現実ではありません。これから翁を納得させないと。それが出来ないと実現しません。一緒に頑張つて説得しますよ」

姫は何度も頷きながらも涙を流し続ける。

魔王『黙つて聞いていたが、面白い事を考えるな』

『どう思つ?』

魔王『後々の事を考えると一族郎党皆殺しが良いと思つ』

それは姫には出来ない

魔王『だろうな』

無理だと思つ?..

魔王『するんだろう?..』

そうだね

少ししたら姫が寝てしまった。

疲労に緊張感が切れたせいでと思つけど、困った。

と思っていたらドアが開いて美女さんがと爺と翁が入ってきた。僕が寝ている姫を抱えているのを見て爺が「よかつた」と言つ。

姫を部屋に運んで寝かせる。

心配そうに姫を覗き込んでいるの妖精少女の頭を「大丈夫だよ」と撫でる。

僕が部屋を出た後に美女さんが寝やすいように衣服を緩めて寝やすいようにしてくれる手はずになつていて。

「姫を見てあげていてね」と妖精少女に言つと僕は部屋を後にした。

部屋を移して先ほど姫と話していた内容を話す。
大体は聞こえていたようで翁は険しい顔をした。

説得は難航しそうだな

翁「わかった」

僕「はやー！」

翁「姫のたつての要望だしの。出来ない事でも無いしの」

「少し詰めて考えてみよう。」と翁は言つと部屋を出て行った。

どうやら翁の説得はうまく行つたらしく。

後は王子だが、王子なら賛同してくれる気がする。
確証は無いけど。

といつあえず僕も寝てないので一眠りしようと部屋へと向かった。

夕方に国王軍の領主の兵、約2500が現れる。
小砦を見下ろす小高い丘の上で陣を敷いていた。

小砦を攻めるには兵力が足りないが何もせずに引き返すのも癪で、
一体どうしようといった所か。

長い間そうしていた国王軍の領主はといつあえず一戦交えて撤退しよ
うとうとこう判断になつたのか兵を2つに分け城を包囲しようとした。
だが決断に時間を掛けすぎた。

僕と美女さんは100騎程連れて小砦を気が付かれないと出てい
た。

離れた場所で国王軍派の領主が2つに兵を分けるのを見て小さな集

団の方の背後に回りこむ。

国王軍が小砦を両方から包囲を狭めて行くのを見ながら時期を計る。小砦からの「が届く範囲に近づく直前に、流れ矢に当たるのを嫌つた領主と取り巻きが動きを止め、兵の隊列から分かれる。兵士が盾で矢を受けながらじいじりと小砦に近づき別のものが矢を射返す。

領主達と兵が少しばかり離れた所で僕達は声を出さずに飛び出した。無言で馬を駆る。

領主達は幾つかに集まっているようで、その一番外側の集団に僕達50名ほど引いて突っ込む。

美女さんも反対側の端の集団に50人で襲い掛かつて居る所だろう。相手は20ほどの集団でこちらに気付いておらず、気が付いた時は肉薄していた。

すれ違いざまに兵士3人ほどを斬り倒し領主らしい人物を一人馬から叩き落す。

振り返ると20名は制圧されていた。

生き残りは5人。

素早く周りを見渡し、10人の兵に死んだ領主の遺体を一人の兵に馬に乗せるようにいい、生き残り5人を武装解除と捕縛して連れ去るように指示をし、残りの兵を伴つて少しばかり離れた場所の領主の集団に襲い掛かつた。

恐慌に陥つた一人の領主の撤退指示により小砦を包囲していた半分の兵が連鎖的に撤退しだす。

その撤退の音を聞いた反対側の領主達も体勢を崩したところに小砦から飛び出した2000の兵が襲い掛かつた。

すでに崩れていた国王軍側の領主軍は支えきれずに数を半数以下にしながら撤退していった。

討ち取つた領主とその一門の人間は15名。20名近い者達を捕らえた。

捕らえられた者たちは身代金を払うので釈放しようと騒ぎ立てた。

しかし元々国王軍に組した領主は戦後に財産と土地と爵位は没収だと通達しているという話をすると、顔を顔を真っ青にして心を入れ替えて反国王軍に下ると言い出した。

その嘆願に翁は「状況も読めない愚か者は必要ない」と縛られたままの領主達を牢屋へ入れるように命じた。

今回捕まえたり討ち取つた領主達は国王軍派の支配地の領主が多く一族を抑える事は出来ていないが、領主も兵も居なくなりよっぽどのことが無い限りもう出ては来ないだろ。

国王派領主軍を圧倒的に撃退した事は瞬く間に伝わった。

国王派で近くまで来ていたが心変わりをしてこひらに付く領主も出てきて、数は5000程に膨れ上がつた。

戻候に出ていた兵から続々と「大砲に領主軍が集まつてゐる」という情報が入る。

大砲のもともとの人数は焼く1000。

集まつた国王軍派の領主たちは約6000。

7000近い兵が集まっているようだ。

日が落ち辺りが暗くなる頃に赤と白の騎士団が大砦に入つたと知らせが届いた。

その内の一人の斥候が周りに気が付かれない様に翁に言葉を伝え何かを手渡す。

部屋に姫と爺と翁と領主と僕と美女さんが残る。

「姫宛に預かつたようです」と手紙を差し出した。

聞けば斥候途中に騎士団の斥候と出会い戦闘になつて取り押さえられたらしい。

どこの所属かと聞かれ黙つていると、その騎士団は姫に必ず渡して欲しいと手紙を渡し開放してくれた。

姫が封を開けるとさらに封筒が入つていた。

短く「若殿へ。人定前（にんじゆう）あの場所で待つ」と書かれていた。

相手は赤の騎士団中隊長で「あの場所」と言つのは話をした場所だと思われる。

みんなに説明する。

「一人で行くのは危険だ」と言つ意見が出たが相手も少数だろうし、他の領主に悟られても面倒なのでからこちらも少數で行くと伝えた。一番「危険です」と言つっていたのは姫だが、美女さんと爺が付き添つという話で納得してもらつた。

黄昏（ひるごと）（22時頃）美女さんと爺と翁の兵士隊長のほかに3名ほど

の兵を連れ立つて斥候の為といつ建前で小砦を出た。

第13話　願望（後書き）

誤字修正

450名の塙が居たらしいが

反横行軍　　反国王軍

取り込んトータルで

皇帝の直轄地

国王の直轄地

すでに崩れていた

すでに崩れていた

領主軍派

領主軍は

体制を崩した

体勢を崩した

という情報がはに入る

という情報が入る

あの場所からで待つ

あの場所で待つ

描かれていた

書かれていた

第14話 憧れ

約束の時間より早かつたが、約束の場所に着くとすぐに一人の人物が近づいてきた。

赤の騎士団中隊長である。

彼は僕達を見ると一言「いらっしゃへ」と言い、歩き出した。

少し離れた場所に案内され、そこで数人の人物と落ち合つ。

赤の騎士団中隊長が「連れてまいりました」というと相手は頷く。こちらを見るとまずは爺に挨拶して僕の方へ向くと「赤の騎士団副団長です」と挨拶した。

思ったより若く30代といった赤の騎士団中隊長の方が年上かもしれないというのに驚いた。
僕も名を名乗る。

赤の騎士団副団長「話は伺いました。」

魔王『なかなの手馴れだな。』

赤の騎士団副団長「本来ならこの場に白の騎士団副団長も来る予定だったのですが、さすがに両騎士団副団長が大駄を出るのは不自然であつた為に断念しました。」

代わりに白の騎士団からは連隊長2人がきていた。

魔王が『今回もどの様に話を転がして楽しませてくれるか傍観させてもらひ』とうれしそうに言つ。人事だと思って！

赤の騎士団副団長「貴方の話は突飛無く、とても正氣は思えない。」

僕「やつでしょつか?」

赤の騎士団副団長「敵を前に手を拱いて^{ひまね}るのは騎士団の規律に反する」

白の騎士団連隊長をみやる。

どつやうら話は赤の騎士団副団長が担当するらしい。

その赤の騎士団副団長の田をしつかり見ながら告げる。

僕「敵とは誰のことでしょう?」

赤の騎士団副団長「もうちさん、貴方達反逆軍です」

僕達は反逆軍らしい。

僕「僕達は反逆軍ではないですよ?」

赤の騎士団副団長「では何だと?」

僕「國と民を憂いて奸臣を討つべく立ち上がった、いわば王國軍ですね。」

相手が国王の地位、突き詰めればその周りの甘い汁を好き放題吸つてゐる者達の地位を守る為の王国軍だとしたら、僕達は國や民の将来を思い立ち上がった王国軍である。

僕「まあただの言い方の違いでしかないのでどうでもいいんですけどね。それほどまでに僕の意見は実現不可能ですか？」

赤の騎士団副団長「可能不可能の話ではなく、騎士団の規律に反する言つてこる」

僕「規律とは？敵前逃亡や戦闘放棄がですか？」

赤の騎士団副団長「そうですね」

僕「敵とはなんでしょう？」

赤の騎士団副団長「……」

僕「いえ、この話はいじめじょう。時間もあつません」

本当の敵は団長を捕らえている王国軍側といつ話をしても意味が無い。

そんな事はどうに理解してこるはずだ。

それでも彼らはそれでも団長を案じ今の状況に身を置いているのだ。

僕「このままでは遠く無い未来に団長が処刑される可能性は？」

赤の騎士団副団長「… そのような事が無いよう行動しています」

僕「どうなの？」

赤の騎士団副団長「戦で功績を立て、我らの存在意義を示し続ける事です」

僕「その結果、騎士団は疲弊していき脅威と看做されなくなり、結果団長は処刑される事になると」

僕の言葉に赤の騎士団副団長が口を開いた。

僕「どうせ黒の騎士団長辺りからも無理難題を押し付けて貴方方の戦力をそいつとしているんではありませんか？」

赤の騎士団副団長は微動だにしない為に何を考えているのか分からぬ。

僕「もし両騎士団が僕の案に乗ってくれたら、騎士団長を取り戻せるかもしれません。」

赤の騎士団副団長が「案に乗つた前提での作戦」に興味をしめす。

僕「まず聞きたいのは幽閉されている場所はわかりますか？」

赤の騎士団副団長「王宮の一の郭の館に軟禁されています。」

僕「城の地下の牢だつたり高い塔の上ではないんですね？」

赤の騎士団副団長「兵は多く配備され我々は一切近寄る事は出来ないが、さすがに我々を刺激しないように配慮はされています」

僕「そんなに多くの兵を配備されているのですか？」

赤の騎士団副団長「せいぜい50といった所で騎士団長は一の郭内だつたらある程度の外出も許されているが、その場合は護衛と称した見張りが大人数付いて回るようですね」

僕「もし騎士団長を助け出すとなると、相手は見張りの50人程度だけですか？」

赤の騎士団副団長「館の周りは50名しか居なくとも何かあれば周りから倍以上の数が集まつてくので、城外に逃げるまでに取り囲まれてしまうでしょう。」

僕「一の郭に騎士団は上がれますか？」

赤の騎士団副団長「騎士団本部は一の郭にあり、日中は門が開いているので騎士団なら通れますが必要なれば行く事は無いですね。」

僕「すでに騎士団長が処刑されている可能性は？」

赤の騎士団副団長「月に何度か、騎士団長の家の者が騎士団長の状

況を報告してくれてます。その者は騎士団長の家に古くから仕える者なので信用できる人物です。」

僕「ならよかつた」

もし近寄れない場所だつたり騎士団長が衰弱してると難しかつたが何とかなりそうだ。

僕は騎士団長救出作戦の方法を伝える。

僕「大砦は王宮から物資を運んでいます。多くの国王軍派の領主が集まつたので、これは当たり前の事です」

頷く赤の騎士団副団長。

僕「しかも黒の騎士団も出でくるとなると大砦の蓄えではすぐに備蓄がなくなつてしまつてしまつ。」

赤の騎士団副団長「それが？ 兵糧攻めでもするのですか？ そちらこそそれほどの蓄えはあるとは思えませんが」

僕「ああ、大砦は両騎士団が手を結んでくれれば半日で落とせるので問題ありません」

赤の騎士団副団長「何ですつて？ いくら我らが手を結んで参加しなくとも黒の騎士団4000と国王派領主軍で1万近い数が居るんですよ？」

僕「その話は後にして順番に話しましょう。まずは団長救出の話です。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「補給物資は大切です。奪われる事も考慮して騎士団が受け持つていいのです？」

赤の騎士団副団長「そうですね。」

僕「それを使います」

赤の騎士団副団長「物資を送るなど、無理です」

僕「いえ、違います」

赤の騎士団副団長「では何を」

僕「王宮に戻る補給部隊に紛れて両騎士団の騎士を王宮にひそかに戻すのです。」

赤の騎士団副団長「どうせひつて？」

僕「戦力を殺ぐ為に、きっと両騎士団は不利な状況で前線へと送られます。」

赤の騎士団副団長「……」

棒「その戦いで一部の人死んでもらいます」

赤の騎士団副団長「！」

僕「そうして死んだ人たちは隠れて潜み、補給部隊が帰るとこりで合流して王宮に隠れます。王宮にも騎士団の詰め所などで隠れる場所はありますよね？」

赤の騎士団副団長「え、ええ」

僕「数は100名程度、できれば200名居れば大丈夫だと思います。数日隠れる場所はありますか？」

考えて頷く赤の騎士団副団長。

僕「僕達は騎士団が兵を王宮に送り込んで準備が出来たら大砲を攻め落とします。」

赤の騎士団副団長「びっせつて」

僕「そこでまた両騎士団に手を貸してもらいます。」

訝しそうに眉を顰める赤の騎士団副団長。

僕「黒の騎士団のメンバーも元は両騎士団の団員だったと聞きます。

「

赤の騎士団副団長「ええ

僕「取り込んでください」

赤の騎士団副団長「何？」

僕「一斉蜂起の仲間に取り込んでください。大砦攻略の際に黒の騎士団の一部と両騎士団にやつてもらいたいことがあります。」

赤の騎士団副団長「あからさまな裏切りは団長の身を危なくするので無理です」

僕「伝わらなければ大丈夫ですか？」

赤の騎士団副団長「といつと？」

僕「大砦を攻める際は両騎士団は外からの大砦との挾撃を進言し出してください。」

赤の騎士団副団長「進言しても無視されるかもしれない。」

僕「黒の騎士団と国王派領主軍あわせて10000近くいます。その上で大砦に守られています。両騎士団が疲弊するのを望むので問題なく通るでしょう」

赤の騎士団副団長「……」

僕「両騎士団はそのまま大砦と王宮の道と僕達が包囲していない方面に隠れてください」

無言で先を促す赤の騎士団副団長。

僕「次に僕達が大砦を攻めだして幾許かした時に黒の騎士団達には騒ぎを起こして貰います。」

赤の騎士団副団長「騒ぎへそんなのすぐに取り押さえられてしまうでしょ？」「

僕「数人ならそうですが、黒の騎士団の大半は両騎士団の団員と聞きました。それにも関わらず少數しか取り込めませんか？」

赤の騎士団副団長「……そんな事は」

僕「では成功するでしょう。内容は『裏切りだ！領主が逆賊に内通しているわ。』です。そうして周りを煽りながら言いまわってもらいます。」

赤の騎士団副団長「それでもすぐにばれてしまつ」

僕「一時の混乱で構いません。そうして混乱した中で門の警備は自分達が行うと言つ張り門を制圧してもらいます」

赤の騎士団副団長「……」

僕「その後。門を開けてもらい我々が突入して制圧します」

赤の騎士団副団長「黒の騎士団にいる我々の仲間の身の保障は？」

僕「大砦の一部、3箇所程度に安全箇所を設け、そこにいる黒の騎士団には手を出さないという方針で行きましょう」

赤の騎士団副団長「その事に対しての信頼は?」「

僕「信じてもらつしかありません。我々も攻撃されないと信じて放置します。もし安全地帯の黒の騎士団の中に黒の騎士団長派が居た場合はそちらで制圧してもらえると助かります。立ちはだかる黒の騎士団は黒の騎士団長側として討ち取らせて貰いますが。」

赤の騎士団副団長「戦場です。仕方ありません」

僕「門が開いて両騎士団と黒の騎士団の一部が放棄すれば、残りは国王派領主6000と黒の騎士団の残り。我々の軍は王子が合流すればそれ以上になる。しかも相手は混乱している。半日も持たずに大砦は落ちます。落ち延びる領主達は両騎士団で誘導して我々の軍隊にまで引っ張つてきてください。」

赤の騎士団副団長「それで?」

僕「取り囮んで武装解除の後に捕らえます。両騎士団が味方のところまで送ります。といえば信じるでしょう」

赤の騎士団副団長「…騎士団長救出の方法は?」

僕の話を聞いていた赤の騎士団副団長は、大砦の話が一段落したら聞いてきた。

僕「それは西騎士団に行つてもうります」

赤の騎士団副団長「方法は?」

僕「大砦から王宮の間の道を塞ぎ、大砦と王宮からの伝令は全て捕まえてください」

赤の騎士団副団長「それで?」

僕「騎士団から伝令に扮して偽の情報を伝えます。それは大砦が伝令を送らなくてもです」

赤の騎士団副団長「ほつ」

僕「内容は増援を求める伝令といった所でしょうか。」

赤の騎士団副団長「それでは兵が来てしまって大砦が落とせないのでは?」

僕「来るまでに十分落とせます。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「大砦を取られると喉元にナイフを突きつけられるのと同じなので、王宮から慌しく出兵の準備に入ると思います。その混乱を狙つて団長を守る警備の兵に入れ替わつて団長達を連れ出してください。その際に危険ですが身代わりで残る人物が必要です。」

赤の騎士団副団長「……団長の身代わりなら喜んでなるでしょう」

僕「連れ出してもすぐに外に出るのは危険です。ですので団長は隠れていてください。」

赤の騎士団副団長「すぐに城を抜けた方がいいのでは？」

僕「出来そならいですが城を抜け出せない場合もあるかも知れません。もしもの為に、その後の脱出の機会は我々が作ります。」

赤の騎士団副団長「どのように？」

僕「大砲を奪つた僕達は大砲の先の領地を攻め、王国軍に加担した領主の一族の身柄を拘束します。殆どの者が領地には家族を残し兵は少ししか居ないでしょう。そこに2~3000の兵で攻めます。もちろんわが軍は略奪暴行は死罪としてますので行いませんが、手向かう場合は斬り捨てていいと伝えます」

赤の騎士団副団長「自分の領地を守る為の兵に紛れて城を脱出するという事ですね」

赤の騎士団副団長の言葉に頷く。

僕「はつきり言つてザルと言つても良い程の作戦です。殆どを両騎士団にお願いしている上に、方針は伝えましたが細かい『隠れる場所』や『どうやって警備兵に入れ替わる』など、色々な部分を丸投げしてます」

赤の騎士団副団長「……」

僕「そもそも赤騎士団が拒否したら、いつも実行できない辺りがもうダメですね」

赤の騎士団副団長「…………」

僕「だからお願ひするしかありません。一緒に手伝ってください。」

赤の騎士団副団長「…………」

僕「団長を取り戻すついで構いません。」

僕を見つめていた赤の騎士団副団長が「いいですか?」と呟く。

僕「なんでしょう?」

赤の騎士団副団長「この国の者では無い貴殿がここまである理由は

?」

僕「姫に会ったから、ですかね?」

赤の騎士団副団長「?」

僕「偶然なんですけどね。でも姫と友達になつたんです。」

赤の騎士団副団長「…………」

僕「…………」

赤の騎士団副団長「…それだけ、ですか？」

僕「え？ ですけど？」

他にどう言えばいいんだろう？

何か言わなきゃと思い、考えて思いついた事を言つ。

僕「姫の手を取つて国を救う為に戦うつて、囚われの姫を救う事の次ぐらいに子供の頃に憧れた状況じゃないですか？」

白の騎士団連隊長が「確かに」と呟いたのが意外と大きく響いた。その声に騎士団のメンバーが笑つ。

赤の騎士団副団長「確かに！ 私も昔は憧れたものです！」

豪快に笑つと赤の騎士団副団長の張り詰めていた気配が和らいだ。

赤の騎士団副団長「実は貴方の案に乗る事は決定していました」

なんといつ驚きの事実！ 今までの緊張感を返せ！！

赤の騎士団副団長「だが私自身も貴方の人となりを見たかったためにあいつ態度をとらせてもらいました。」

失礼な態度で申し訳ありません。といつ赤の騎士団副団長。

赤の騎士団副団長「それがまさか団長救出まで考えているとは」

僕「穴だらけの計画ですけどね」

赤の騎士団副団長「確かにそうですが、我々の用意していた方法と組み合わせれば実現可能だと思います」

僕「では！」

「手を組みましょう」と頷く赤の騎士団副団長。

あまりのうれしさに差し出された手を飛びつかんばかりに握り合った。

その後、連絡の取り方や決行日を決めると互いの陣に向けて戻った。

第14話 憧れ（後書き）

サブタイトル付けてみました。

誤字修正

打つべく 討つべく

だつた聞きます だつたと聞きます
すすけど すすけど

場外に逃げるまでに 城外に逃げるまでに

繭を潜める 繭を^{ひそ}顰める

一斉放棄 一斉蜂起

伝令をは全て捕まえてください 伝令は全て捕まえてください

わが軍派 わが軍は

赤の騎士団服隊長との密会の帰り。

僕「これで大皆はなんとかなりそうだけど、問題は王都か」

爺「そうですね」

僕の呟きに爺が答える。

まだ大皆攻略を攻略していない状態で別の事を考えるのは良くないとだとは分かっている。

でも次の展開を考えておかないと行き詰ってしまう。

僕「王都を攻めるこれと言つ手が思いつかないんですね」

爺「手ですか」

僕「このままだと兵力では相手に勝る事が出来るだろうけど、王都に籠もられて攻めあぐねてしまつ

爺「そうなると長期戦になりますな」

僕「王都はどれくらいの間、籠城できると思しますか?」

爺「そうですね、月の満ち欠けが2周するくらいは持つやも知れません」

約2ヶ月と言つたところか。

僕「それだけ時間を持つのは厳しい?」

爺「こちらの兵糧の問題などどうにかなるとして兵の士気の維持と隣国の状況がどうなるか」

僕「隣国が攻めてくる可能性が高い?」

爺「さすがにそれだけ時間を持つと来られても防ぎようがありませんからな」

僕「出来るだけ短期で決着をつけないとダメなのか」

王都の状況を知らない状態で考へても何も思いつかない。

戻つたら情報を集めよう

そつ決めると帰路を急いだ。

翌日の夕方に王子達の軍勢約6000が小砦に合流し、これで合計11000程になった。

すぐに王子と騎士団長を含めて現状と明日以降の確認が始まった。

王子「お待たせしました」

姫「道中大丈夫でしたか?」

王子「途中、白の騎士団に阻まれましたが、途中で撤退していつたので大した被害も出ずに済みました」

みんなと挨拶をした王子と騎士隊長に赤白両騎士団との密約と大砦の攻略について説明すると「なるほど、それでですか」と納得がいった様だ。

大砦の今の戦力は黒の騎士団が到着して15000程になっていた。現状は大きな戦闘は起きておらず、小康状態となっている。赤白騎士団の戦死偽装は順当に進み王都にある程度送る事は出来ているようだ。

王子「では大砦攻略は明後日決行という事でいいでしょうか?」

翁「そうですな。あまり時間を持つると相手が攻めてくるやも知れませんしな」

やれる事はある程度やった。

後は実行するのみである。

話し合いは手短に終わり解散となる。

皆が席を立つ中、疑問に思つた事を爺に聞く。

僕「明後日の大砲の編成を聞いて思つたのですが、攻城兵器の話は無かつたのですがどれくらいあるんですか？」

騎兵や槍兵などは記載されているが攻城兵器の話は出なかつた。

爺「いじょうじょへいき、ですか？何でしょうかそれは

僕「城を落とす為の武器と言つか道具です」

爺「そういう物となりますと、丸太は予備も含めて2本、大槌は數本、後は梯子を数十台という所ですね。」

僕「それだけですか？」

爺「少ないですか？大体こんなものですが

僕「数ではなく、他に何か無いんですか。」

爺「他と言われましても」

「どうやら他には無いらしい。」

それならもしあれば戦を優位に進める事が出来るかも知れない。
出て行こうとする王子と王を呼び止める。

僕「攻城戦の兵器などは無いと伺いました。作つて使えば王都の攻略が有利に進むかも知れません。」

王子「へいき?」

僕「城を落とす為の武器です」

王子「落とすと言ひど?」

僕「門や壁を壊すようなものです」

翁「丸太や大槌のようなものですかな」

僕「いえ、大きな石を飛ばしてぶつける道具です」

翁「大きな石を?」

僕「應用すれば油の入った樽などを投げる事も出来ますね」

翁「それはどういったものですかな」

僕は木のスプーンに小石を乗せ、スプーンをしならせて小石を飛ばす。

僕「原理はこれです。これを大きく作れば子供くらいの筋なら飛ばせるようになると思います」

それを聞いた爺は工兵長と数名の工兵を呼び出した。
工兵長達が来るまでの間に魔王に確認をする。

「この世界には伸び縮みする素材と言つのはある？」

魔王『どんなものだ？』

強度があり、引っ張ると激しい勢いで元に戻るような奴

魔王『そういうのは無いな』

そうか、ありがとう。

現れた工兵長達に「今から若の話を聞いて作れるか言つてくれ」と
言うと話を促した。

僕は先ほどと同じようにスプーンで小石を飛ばす。

僕「これを作ります。」

工兵長「大きくとはどれくらい？」

僕「スプーンの部分だけでも人の2倍」

工兵長「そんなに?」

僕「それくらい無いと大きなものは飛ばせません」

工兵長「大きいのはいいとして、飛ばす勢いはどうやって作るんだですか?」

僕「おもり錘でつけます」

工兵長「錘をどうするのですか?」

僕「スプーンの柄の部分の下の方に棒を通します。」

僕は説明をしながらスプーンの柄に木の枝をあてる。

僕「これで木の枝を持ってばスプーンは回ります。木の枝を左右から支え、自由にスプーンが自由に回転するようになります。」

工兵長「ふむふむ」

僕「スプーンの柄の部分の方に錘をつけます。錘の重さは飛ばすものの2倍はいるでしょう」

工兵長「なるほどーそれで物を載せた後に錘の重さで飛ばすんですね。」

僕「ええ、柄と錘が床に付かない様にするといいかもですね。」

工兵長「ふむ」

僕「それとスプーンの物を乗せる方は紐で引けるようにしてくさい」

工兵長「そうですね。そうしないとなかなかスプーンをおひせません」

僕「そういう紐を引く方法は巻き取り式にしてしまじょい」

工兵長「巻き取り式ですか」

僕「その方が人の手で引くより力強くひけるしね。小砲の跳ね上げ式門と同じ構造でいいと思います。あれに少し手を加えれば」

工兵長「手とは?」

僕「あのままでは引いた後に元に戻らないようにしないといけません。それを勝手になるように細工が必要です。」

工兵長「ほつ

僕「歯車を2つ重ねて一方は逆に回らないうちに細工します。そうすれば勝手に戻る事も無いでしょい」

工兵長「その状態だと飛ばす事も出来ないので?」

僕「逆にしか回らなよつにした歯車を横に滑りせるよつにして、発射のときに横に移動させればいいんです。」

H兵長「なるほどー。」

僕「横に滑らせたり戻す方法も考えないと手をはさむと危ないですけどね。そこいら辺は無ければ無いでしかたありません」

H兵長は「考えてみますー」とこいつと他のH兵たちとあれこれ話しうけた。

翁が「どれくらいでできる?」と聞くと「試作品は今晚中こと」 H兵長は言った。

H兵長「でも試し打ちをしたり改良したりで数日は必要です」

翁「明日の大砲攻略には間に合わないか」

H兵長「はい」

僕「大砲は攻略法があるので必要ないでしょ?。王都攻略までに間に合えば」

H兵長「それまでにはいくつか作るよつにします。とりあえずは今から製作にとりかかります」

そうこうとH兵たちは部屋を飛び出した。

明日の朝には試作機が出来るらしいので、とりあえずは明日にその

出来を確かめようと言つ事になつた。

翌朝、兵器の試作品が出来ていた。

すぐに小砦のすぐ横の広場から平野に向けて試し打ちが始まる。

岩は小砦に常備している石を飛ばす。

飛んだ距離にさほどの誤差が無い事を確認をした後に棒を取り外す。
どうやら長さの違う棒が何種類かあるようだ。

その後何個か飛ばした後に一番飛んだ長さを選ぶ。

次は距離を測り大きな岩に向かつて飛ばす。

何回か外した後に直撃した岩を確認。

岩にヒビが入っているのを見て工兵長が頷く。

工兵長「数を作つて同じ場所に何発も打ち込めば壁も崩せそうですが

翁「距離は最大どれくらいだ」

工兵長「岩が転がる範囲で良いなら弓の範囲外からでもいけますが、
壁に当てるとしたら弓の射程内に入るしかありません。」

翁「射程は変えられるのか?」

工兵長「距離を伸ばす事は無理でも引く長さを変える事で短めに飛ばす事も可能です」

翁「なるほど。王都攻略までにどれくらい作れる」

工兵長「作り自体はさほど難しくありませんので慣れれば一日十何機かは作れるでしょう。持ち運び用に組み立て式にします。これにより数も運べるでしょう」

翁「そうか。それに平行して飛ばす為の石も用意するよにしておけ。すぐに作成に取り掛かってくれ」

工兵長「はい!」

今日中だけでも数機は作れるので試しに大砲に持つていいか?という話も出たが、出来るだけ敵に新兵器の情報を知られないほうが良いという話になつた。

僕は弓の範囲から出れないと聞いて砲を取り付けたり発射したりする人が矢から身を出来るだけ守れるように盾を付けるようにお願ひした。

この案に工兵長は「わかりました」と頷いてくれた。

大艦の攻略を明田に控え小艦内は忙しくなる。
忙しくなっているのに全然忙しくない僕。

なんで皆あんなに忙しそうなんだらつ

魔王『明日の戦に向けて準備があるからだらつ』

なんで僕は忙しくないんだらつ

魔王『ああいう者の殆どがああやつて準備をしている雰囲気を出しているんだ。実際には戦の準備などする必要が無い者ばかりだ』

何の為にそんな事を？

魔王『不安だからだ。ああやつて明日への心構えなり諦めを付けていくのだ』

やつぱりみんな不安なんだね

魔王『まあ上に立つものは本当に色々忙しいんだがな』

うん、僕は上に立つもののじゃないからいいんだ

魔王『美女も色々忙しそうだな』

…「ん、僕は上に立つものじゃないからいいんだ

その時、美女さんが部屋に入ってきた

美女さん「若、ちょっと手伝ってもらつていいですか？」

僕「もちろん！」

美女さんに連れられて廊下を歩く。

せっぱつやる事があるつていいよねー

魔王『そうだな』

廊下を進み扉の前に立つとノックをし「若をお連れしました」と言

葉を掛けるする美女さん。

中から「どうぞ」という声と共に中に入る。

あれ? こは姫の部屋?

中に入ると王子と爺と翁がいた。

どうやら姫に何かを言つてゐるようだ。

妖精少女が姫の横に腰掛けて姫を心配そつて見ている。

何でこんな所に呼ばれたのだろう?

爺「おお若、忙じい中わざわざ済みませんな」

魔王『忙しくないがな(うるわこよー)』『

僕「いえ、どうしたんですか?」

爺「姫が今回の大皆攻略に参加すると聞こ出されました。」

今回のところよつ今後の戦は姫は出陣しない事になつていて了。
出陣する兵士達に激励を送つた後は後方で待つていてもひつ事になつていたのだ。

それが何故か前日になつて自分も行くと言つ出して聞かないらしい。

王子「姫姉さまの説得をお願いします」

僕「は?」

王子「姫姉さまの説得をお願いしたいんです」

翁「ワシは準備があるでな」

爺「また来ますのでその間、説得をお願いします」

美女さん「や、妖精少女も一緒に手伝つてください」

妖精少女「うん」

そういうと、狼を抱いて皆出て行ってしまった。

あるうえ？

魔王『はめられたな』

だよね！

腰を下ろして俯く姫を見る。

とりあえず向かいにある椅子に腰を掛けた。

僕「姫」

ビクッとする姫。

なんで怯えてるんだろ？

僕「姫、何で今更行くと言ったんですか？」

姫「……」

僕「前に話したときには残る事に納得してくれたじゃないですか？」

か？

姫「……」

僕「姫、（友達の）僕にも言えない理由ですか？」

姫「：大砦攻略で多くの兵が危険に見舞われ帰らぬ事もあると思つと、私だけが安全な場所に居られません！」

僕「そうか　でもね、姫。姫が戦場に出るとその分だけ守る為に兵が裂かれる。となるとどうなるか分かりますか？」

姫「」

僕「大砦を攻める人間が減ります。その分、戦が伸びて傷つき倒れるものが増えます」

魔王『極論だな』

「うだけどね。仕方ないよ。

姫「それでも」

僕「それを分からぬ姫じゃ無いと思つんだ。」

姫「でも」

僕「その上で我意を言つ本当の理由は何なんですか？」

その言葉に姫が声を詰まらせた。

僕「本当の所が分からないと僕は賛成も反対も出来ません」

姫が言ひよどむ。

僕「僕は姫の味方で居たいと思つ。でも危ない日にもあつて欲しくないとと思つ」

姫「…みんなが心配だからです」

姫が話すのをゆっくり待つ。

姫「王子が、爺が、翁が、美女さんが、わ、若が」

そうか、優しいからこそ心を痛めて悩むのか。

「姫」と呼ぶと顔を真っ赤にして俯く肩がピクッとゆれる。

僕「大丈夫です。（僕達は）必ず貴方の元に帰ってきます」

姫「えつ？」

僕「貴方を悲しませるような事が無いよう、必ず（みんなで）！」

そう云ふると顔を真っ赤にしながら「待つてます」と姫は呟いた。

僕「姫が無事を祈ってくれるだけで（兵士達は）それを励みに戦えるのです。笑顔で送つて笑顔で出迎えてください」

魔王『またか？またなのか？』

魔王が何か言つてゐるが良く分からぬ。

姫は「」言葉に出来ない声を出しコクコクと頷く。
分かつてくれた姫に一安心をし「爺たちを呼んできましょつか」と
席を立とうとした時に姫が「あつ」と呟く。

ん？何か言いたいのかな？

魔王『……』

魔王の呆れる雰囲気を感じ立ち上がるのを辞める。

きっと「僕が気が付いていない何か」を見落としているはずだ。
今ここで立ち去るのは良くないらしい。

でも見落としているんだもつ。姫の何かかな？

姫を見ると俯いてはいるが、じりじりをじりじり見てくる。でも決して真っ赤な顔を合わせようとしない。

じつこつ意味の態度なんだら。

深く注目する。

顔が真っ赤で恥ずかしそうにじりじりを盗み見てる。そして僕が出て行こうとするとき何か言おうとした?

セイジだ僕はひらめいた!

そ、そつなのか?

僕「と、思いましたが爺も準備に忙じてついてましたし、後で来るといつきましたので急ぐ必要は無さですね」

その言葉に姫が顔を上げる。

僕「時間もあつたですし、よければお話しませんか?最近姫と殆ど話す機会も無くて残念に思っていたんです」

真っ赤な顔をじぐじくと頷く姫。

やっぱりそうか…うれしいな！

魔王『一応、何に気が付いたか聞いてみようではないか』

姫は待つと決め手も怖いし不安なんだ

魔王『…それで？』

だから独りになりたくないんだ！

魔王『……そこから導かれた答えは？』

僕を友人としてた頼ってくれている…！

魔王『ナンダツテー！』

本当にうれしい！

うれしさが溢れた僕は笑顔があふれ出してにやけ顔が止まらない。
「話さう」と言つても話題が見付からないのか視線を泳がせる姫

僕「姫、別に何でもいいんです。時間はあります。」

姫「は、はい」

僕「僕は（爺たちが来るまで）ここに居ます。話す言葉を無理に搜

す必要尾ありません。無言でもいいじゃないですか。ゆつたりした時間を過ごしましょ。思いついたら何でも話せばいいんですよ」

僕は出来るだけ姫がリラックス出来るよつに話しかける。

本当はここでいろんな話題で話を盛り上げることが出来たらいいんだけど、現実世界で女の子と話した事が皆無に近い僕には引き出しが空っぽだ。

実際は僕自身が沈黙に耐えれないからああ言つただけだ。

「うひうひ時はどういう話をしたらいいいんだ！」

魔王『だから何でもいいんだろう？』

『ううだけど取っ掛かりが無いよ。

沈黙が部屋を包む。気まずい。

容量の少ない脳味噌をフル回転させて思ついた事を口に出してしまつ

僕「妖精少女は」

なんで用事も無いのに部屋から連れ出されたんだろう？

魔王『…馬鹿か？』

この質問はダメらしい。

別のを、と思つたら姫が「え？」と反応した。
えーと。

僕「最近どうですか？」

姫「最近？」

僕「あ、え、姫に任せきりになつてるので元氣にしてるかな?とか
迷惑あけてないかな?とか」

姫「迷惑なんて事は全然ありません。妖精少女と居ると心が暖かな
気持ちになります。逆に一緒に居れて嬉しいです」

「私、昔に妹が欲しかつたんです」と微笑んだ。

姫の笑顔に選択が間違えてなかつたと思つてほつとした。

その後はものすじく弾むという訳でもないけど会話が長時間途切れ
る事も無く、ゆつたりとした時間は爺たちが来るまで続いた。

第15話 新兵器（後書き）

誤字修正

攻略に付いて

攻略について

納得が行つた

納得がいった

そういうのとなりましと

そういう物となりますと

出来きますね

出来ますね

逆にしか魔わらに歯車を

逆にしか回らなによつにした歯車を

無視でも

無理でも

急ぎそだな

忙しそだな

時間を掛けるのは氣厳しい

時間を掛けるのは厳しい

こづじょうせんへいき

こづじょうへいき

ええ、柄と錘のが

ええ、柄と錘が

古兵長

工兵長

兵が裂かれる

兵が割かれる

大砦を守る人間

大砦を攻める人間

第16話 大砲攻防戦

「みなさん、無事帰ってきてください」

姫の演説が終わった。

本来なら1万近い人物に肉声が届くはずは無いが、妖精少女が風の精靈にお願いをして声を遠くまで届けてくれているらしい。

各所で敬礼の合図が掛かり兵士が敬礼をする。

次に妖精少女が呼ばれる。

いつの間にか殆どの兵が「妖精族は幸運を運ぶ」と言ひ噂を信じている。

最初は翁の妖精少女の立場を守る為の粹な嘘だった。

次に姫と王子の無事は妖精少女と出会ったお陰だという噂がたつた。そこから小さな噂が聞こえて来るようになった。

「出陣前に妖精少女に会つた斥候部隊が敵陣深くまで入り込んだにも関わらず損耗0で帰還した」

「翁の部隊が当初から妖精少女を熱烈に崇めているらしい」

「妖精少女を馬鹿にした部隊が部隊を維持出来ない状態になつたらしい」

「妖精少女に『頑張つて』と言われた部隊が赤や白の騎士団と何回も出会つても死者0で戦果を上げている」

最初の斥候はたまたまだと思つ。

翁の部隊は妖精少女へと言つより美女さんへの信仰だと思うけどね。妖精少女を馬鹿にした部隊は不和を警戒した翁に解散させられバラ

バラの部隊に配置されただけ。

最後のは僕達の部隊で、両騎士団とヤラセを行つてゐるだけです。ありがとうございました。

こついう偶然と勘違いとこじ付けが殆どの兵士が信じだしていた。もちろんずっと姫と一緒にいる事や人見知りする性質などから人目に滅多に出ないのも噂に拍車を掛けているらしい。

台上に上がつた妖精少女は王女の後ろに隠れながら「…頑張つて」と一言小さく言つた。

その小さな声が風に乗つて端まで届く。

その声を聞いた兵士達が号令も無く敬礼をしていく。

魔王『新たな宗教が生まれるかもしねれないな』

ありえそだから怖いよね。

その後、王子の挨拶があり「出陣」の掛け声と共に先発隊から随时出発していく。

僕達は遊撃なのでいつ出発とかは無いが、とりあえず王子の部隊と一緒にに行くことにした。

さすがに万を越える数になると出陣も一苦労である。

続々と出発する部隊を見ながら王子と会話していると姫と妖精少女が来た。

2人の足元を転がるよしに子狼も一緒にくる。
周りの兵が敬礼する。

姫「気をつけてくださいね」

王子「はい。大砦で会いましょう」

姫は僕の方を向く。

姫「ご武運を」

僕「ありがとうございます」

妖精少女「頑張って！」

僕「ありがとう。妖精少女も子狼と一緒に姫をお願いね」

妖精少女「うん！」

妖精少女の頭をなでて言うと笑顔で頷いた。

すると近くの部隊から「出陣！」と聞こえてきた。
そろそろ僕達も出る時間だ。

僕「では行ってきます」

姫「…どうか」無事で

僕「はい、必ず無事に戻ってきます」

見送る姫と妖精少女に手を振り、僕達は小砦を後にした。

?時（ほじ、16時、）日が傾きだした頃に小高い丘に立つ大砦が視界の先に見える。

進軍を一度止めて隊列を組む。

反国王軍 総数約11000

大砦攻略 約10000

本隊、王子、騎士隊長、兵数約4000
右翼、翁、兵士隊長、兵数約3000
左翼、現領主、領主息子、兵数3000
遊撃、僕、美女さん、兵数約200

小砦待機

姫、爺、妖精少女、兵数約1000

対する国王軍は大砦に籠るつもりらしい。

斥候の話では赤と白の騎士団は首尾よく大砦を離れたようだ。

国王軍、総数約14200

大砦内 兵士計、約10000

黒の騎士団、兵数約4000（殆どが戦闘放棄予定）

国王派領主軍、兵数約6000

大砦外、兵士計、約4200

赤の騎士団、兵数約1900（戦闘放棄予定）

白の騎士団、兵数約2300（戦闘放棄予定）

大砦の側でも塹の上に人が並ぶのが見える。

続々と編隊完了の知らせが届き王子の「前進！」と言ひ言葉にラッパが鳴り響き、至る所から「前進！」と聞こえ全軍がゆっくり進みだす。

四方に斥候隊が走り回り伏兵が居ないかを探し回る。

前進を続ける隊列の先頭に大砦からの弓が届くが、盾を掲げながら

も前進を続ける。

ある程度進んだ所で「こちら側からも弓」が届く範囲に入り弓を打ち出した。

弓矢の応酬が続く中、右翼と左翼がそれぞれ展開をしだし大砦を包囲する。

数刻が過ぎても敵の応酬は激しく兵が大砦に貼り付けない。兵の損害も決して少なくない。

このままでは消耗戦で負けてしまうために一度引く事にする。もし敵が追撃に出てきたらすぐに反転し野戦に持ち込もうというのだ。

後退のラッパが鳴り響き兵をじりじりと下げさせる。そのまま矢の範囲外に出ても敵は追つてこない為に一度大きく後退をして態勢を立て直す。

反国王軍（死者、怪我人で先頭離脱を引いた数）

本隊、王子、騎士隊長、兵数約3900

右翼、翁、兵士隊長、兵数約2850

左翼、現領主、領主息子、兵数2800

遊撃、僕、美女さん、兵数195

隊列の立て直し、矢などを補充すると、すぐに再度進軍する。

矢の応酬が再開されて数刻、日は陰り大砦の兵に數え切れないほどのかがり火が焚かれる。

大砦の上の兵は倒しても倒しても次々と沸き壁に張り付く事は出来ず、どれくらいのダメージを相手に与えているかが全く見えない。

田が陰つて少しして変化が起きる。

大砦の壙の上が慌しくなり兵の補充に隙が出来る。

きたか！

偶々（たまたま）かもしけない。

はやる気持ちを抑え門の上の敵兵に『』を射る。

門の周りが騒がしくなつたと思つた瞬間に巻き上げ式の橋が倒れてきて門が開きだす。

僕「突撃！城門を確保しろ！…！」

僕の号令に遊撃部隊が『』を捨て剣を抜き盾を掲げて門へと馬を走らせる。

僕「仲間が来るまで門を死守しろ！」

門を閉じようと来る敵兵を斬りつけながら叫ぶと半数の兵を連れて奥へと進む。

あつという間に敵が押し寄せてくるが敵は混乱しているようで統制が取れていないうだ。

部隊毎に向かってくる敵を斬り奥へと進んでいると後ろでひときわ

多いな鬨の声が上がつた。

騎士隊長が2000程引いて門へ突撃してきた。

騎士隊長「若と美女殿に遅れるなー。」

兵士「応！」

押し寄せる騎士隊長率いる兵隊で門の中は溢れかえる。

騎士隊長「無抵抗の者は武装解除だけして無視しろー歯向かう者は容赦はいらない！」

元々、兵力的に無抵抗な人間を全員相手にする余裕は無い。

もし無抵抗な敵を無駄に斬つてまた完全に敵に回られると数で負けるので武装解除だけして最低限の兵で見張る事に決まっており通達はしている。

だが戦場で興奮して忘れる兵も居るかもしないので念を押しているのである。

騎士隊長「旗を持っている奴は壇の上の弓兵を処理しろー。」

門が先に破れた場合など城壁などに上つて敵を倒すが、その際に日が落ちた後などは味方に弓で射られないよう信号を送る為に旗を用意したりする。

すぐに左右の壁へ200ずつ並べて、兵が登つていぐ。

混乱の為に立ち向かう敵は少なく2枚田の門の向こうに逃げようと/orする者が殆どだった。

だがその門も半分近くが閉まりかけている。

その門へ向かつて走りながら僕は力の限り叫んだ。

僕「このままでは我らの味方が門の中に閉じ込められてやられてしまつて、門が閉じる前に味方と合流するんだ!」

門を閉めようとしていた相手がぎょっとしたように後ろを振り返つて身構える。

その男は何かを叫ぶと近くの男に斬りかかった。

どうやら僕が叫んだ言葉に疑心暗鬼になつて、たまたま田に付いた相手を敵だと認識したようだ。

その相手も自分が斬りかかった相手が敵と内通していると勘違いをし、お互いの仲間同士で仲たがいを始めたようだ。

その間に距離を詰めた僕は半分閉まつた門に無理やり突入した。

周りの敵を斬り伏せながら30名の兵にてを守るよう立派なさりげなく進む。

しかし皆の建物の門は硬く閉ざされてしまつて、いる為に仕方なく広場の敵の排除を行つて、いるとすぐに後続の兵が雪崩込んできた。

すぐに皆の上の兵へ弓が雨のように打たれ、門を破壊する丸太が届く。

門は何回か丸太が当たると切れ目を大きくしていった。

そこに向かつて丸太を打ちつけながら周りから大槌で門を叩く。

壊れた門の間から槍を突き出して応戦しようとしてくるがある程度隙間が大きくなつた時に勢いをつけて丸太が門にぶち当たると片方の門が壊れて開いた。

すぐに敵が門からの侵入を防ごうと門へ殺到してくるのを見て弓矢を門へ向かつて一斉に放つと臆したのか敵の足が竦んだ。

その間に突撃を命じると兵士達が門の間から内部へとなだれ込む。

僕「一般人と投降するものは傷つけるな！歯向かう者は一般人だろうと兵士だろうと容赦する必要は無い！」

僕は建物内部に入り、内部の人間に聞こえるように叫ぶ。

周りで部隊長が同じように周りの敵兵に聞こえるように叫んだ。

僕は美女さんと数十名の兵をつれて上の階へと上がる。上に上がると数人の兵が廊下を塞ぐように立っていた。

僕「今、投降するなら命はとらないが？」

そう言うと頷き指示通り剣を鞘に收め床に置くと壁に向かつて膝立ちになり手を頭に載せた。

兵士に剣を回収させて後から来た兵に階下へ連れて行くように指示する。

さうじて上の階に上ると階下とは構造が違う広いフロアに黒の騎士団と思われる騎士が30名ほど待ち構えていた。投降を呼びかけたが無視したまま何も言わずにこちらに剣を向ける。

僕「投降しないと？」

無言のままこちらを見つめる黒の騎士団団員達。

僕「では交渉決裂ですね。行きます」

そういう瞬間に美女さんが黒の騎士団の中に飛び込んで1人斬り倒す。

僕もすぐに飛び出して2人きりつけるとそのまま先に抜けて振り返る。

美女さんも同じ考えだったようで、これで黒の騎士団は僕・美女さんと他の兵に挟まれた状態になる。

あまりの事に呆然としたままの黒の騎士団が「投降する！」と剣を床に落として手を上げる。

僕「は？」

黒の騎士団A「投降する」

僕「何故今更？」

そういうと彼は美女さんに斬り倒された奴を指差して「…黒の騎士団団長だ」と言つた。

弱ー副団長弱ー！

決して弱い訳ではないんだろ？けど美女さんの相手では無かつただけという事か。

僕「では全員、武器から離れて頭で手を組んで床にうつ伏せになるんだ」

兵士達が武装解除を行うのを横目に見ながら黒の騎士団Aに話しかける。

僕「黒の騎士団長と他の領主は上か？」

黒の騎士団長A「…そうだ

僕「Iの強さに降りても来ないが、逃げた後か？」

僕の質問に首を振る。

黒の騎士団A「…上に居る」

僕「どうへりこ？」

黒の騎士団A「黒の騎士団長と領主のお気に入りが合わせて20名
といつた所だ」

僕「待ち伏せか」

黒の騎士団A「いっている」

僕「は？」

黒の騎士団Aの言っている意味が分からず聞き返す。

黒の騎士団A「酔い潰れているッ！」

吐き捨てるよつて黒の騎士団A。

どうやら黒の騎士団団長は来てからずっと酒を飲んで居たらしく、
反国王軍との戦闘が始まつた時も「ヤツラの足搔く様を見ながら飲
むのも一興」と領主達とお気に入りの部下を呼んで酒盛りを始め
たらしい。

そうして今はもう醉いが回つて剣も十分に振れない状態のようだ。

すぐに兵を上に上がらせて確認をさせると証言通り黒の騎士団団長
と領主達が酔い潰れて居た為に苦も無く全員を拘束した。

それを確認して黒の騎士団長と領主達の身柄の拘束と戦闘の終了を告げる。

すると兵が窓に駆け寄り反国王派の旗を掲げると先頭終了のラッパを鳴らす。

すぐに対し勝利の歓声が聞こえて来た。

戦闘が終わって時間は深夜になつたが大砲は慌しく人が動いている。

戦闘終了後、主だった人物が砲最上階に集まつた。

どうやら全員無事だつたようだ。

大砲攻略後戦力

反国王軍 総数約100000	総数約8~200(重傷者約300名、軽症者多数。)
死者約1800	

それに対する大砲防衛だつた国王軍は

国王軍、総数約14200

　　総数約10550（重傷者160

0、軽症者多数）

死者2550、逃走者1100

戦闘放棄者約8000名

大砦内　兵士計、約100000

　　約6350

黒の騎士団、兵数約40000

　　兵数約3850（内、約380

0が元赤白騎士団）

国王派領主軍、兵数約60000

　　兵数約2500

大砦外、兵士計、約4200

赤の騎士団、兵数約1900（戦闘放棄）

白の騎士団、兵数約2300（戦闘放棄）

投降拘束した兵だけでも約6350名。

全員を国王派領主軍と黒の騎士団と黒の騎士団（元赤白騎士団員）
で別々に10名ほどに分けて兵舎（6人部屋）に監禁した。

翌日の朝に美女さんと領主息子が兵2000を率いて姫と妖精少女
を迎えて大砦を出る。

兵数が重傷者を抜いて5900ちょっとと厳しくなるが、姫をいつ
までも兵数の少ない小砦に居てもらひるのは心許ないので仕方ない。

暁過ぎに元国王派の領主が大砦より王宮側の領地を総兵数1500程の兵で落とし、国王派の領主達の身内の身柄を確保して回る。もちろん、前のときと同じく暴行略奪に対する刑は重くしている。ただ今回は王宮から兵が来たらすぐに逃げるようには言っている。赤白両騎士団団長が王都から逃げる為の牽制はしっかりしないといけない。

もちろん国王軍派の領主への脅しもあるけど。

翌日の暁前に大砦のバルコニーに立つ。

やつと大砦攻略か

魔王『やつとだな』

まだ王都があるのにこの兵数でどうにかなるんだろうか

魔王『そなたの言つていた新兵器もある。やるしかあるまい』

やつだね

遠くをぼんやりと眺めながら魔王と取り留めない会話をしていた。ついで姫達の軍勢が見えるのを待つていてるのだ。

どれくらい時間が経つただうづか。

大砦内部の広場が騒がしくなる。。

眼下に3騎の馬が大砦に飛び込んでくるのが見える。

入り口で兵士達に止められた3騎は下りるももどかしそうに兵士と何かを言い争っている様だ。

そこに兵を連れた騎士隊長が現れて3騎の兵に話を聞いていたが、

周りの兵に幾つか指示を出すと何人かの兵が厩うまやへ走っていく。

3騎の兵は馬から下りると騎士隊長と兵達に囲まれて砦の中へと足早に入つて行つた。

騎士隊長と3騎の兵が砦内に消え、厩へ走つた数名の兵が騎乗して大砦の外へ飛び出していくのを確認すると僕は状況を確認する為に翁の元へと向かつた。

第16話 大砲攻防戦（後書き）

誤字修正

殆どが強戦闘放棄予定	殆どが戦闘放棄予定
先頭離脱	戦闘離脱
炊かれる	焚かれる
合図が係り	合図が掛かり
国王運は	国王軍は
先に敗れた場合	先に破れた場合

第17話 影響

翁「国王軍が来るらしい」

現れた僕に翁が言つ。

先ほどの3騎はその事を知らせる為に来た所候だつたようだ。

翁「出兵した兵数はまだ不明だが、1000や2000じゃきかない数のようじゃ。」

王子「こんなに早くに兵を出してくれるとは

騎士隊長「赤白両騎士団の出した偽の伝令に載せられたのか。はたまた大砲攻略後の疲弊した我らを一気に倒してしまう算段でしきうか。」

翁「ただ単に領地を攻められて頭に血が昇っているだけなのかも知れないがな」

そういうと翁は笑つた。

だが実際は笑つていられる状況ではない。

こちらの兵力は4400程しか居ない。

姫を迎えに行つてゐる兵が戻つても6500にしかならない。
国王派領主の土地を回つてゐる1500の兵は元々国王派の領主の
兵の為に、大砲が劣勢に陥ると裏切りかねない。

3騎の兵によると國王軍到着予測は明日の朝か遅くとも夕方だ。

騎士隊長「唯一の救いは外壁の門を壊さなかつた事ですね。そのお陰で大砲に籠城してもある程度は持ちそうです。」

籠城したからといって援軍はない。
だからと言つて撃つて出るのは危険すぎる。
どの様な状況にせよ籠城しか取る策は無い。

皆、その事を理解しており、すぐに籠城に向けて動き出した。

姫を迎えていた兵たちが戻る。

大砦内の広場に降り立つた姫は周りを見渡していたが、妖精少女の「お兄ちゃんだ」と言ひ言葉に反応してこちらに駆け寄ってきた。

姫「良くぞ…」無事で

僕「（皆で）無事に、と姫と約束しましたから。姫との約束は何があつても破れません」

笑顔で答えた僕の言葉に姫が嬉しそうに頬を染め俯く姫。やはり皆が無事で嬉しいらしい。

美女さんに手をひかれていた妖精少女は僕を見ると膝に抱きついてきた。（可愛い！）

すぐに今まであつた事を色々報告してくれている。

「昨日何を食べた」とか「大砦に来る途中に狐の親子を見た」「子狼がどうしたこうした」「お兄ちゃんたちが出た後は小砦が静かで少し寂しかった」などの内容だったけど、逆にそういう何気ない事を一生懸命に話す妖精少女が可愛くて仕方ないので頭を撫でながら話を聞く。

その様子を美女さんも姫もにこやかに見ていたのに妖精少女が「お姉ちゃんが迎えに来た時に姫お姉ちゃんが一番最初に聞いたのはおに」と言つた所で「王子にも挨拶に行きましょうね」と連れて行つてしまつた。

真っ先に王子に会わないと行けないと僕を見かけて来てくれたらしこ。

姫は本当に優しい。

妖精少女の手を引いて遠ざかっていく姫の後姿を見ていると爺がにこやかに話しかけてきた。

爺「無事で何よりです。」

僕「爺……」

爺「姫は若達が出撃した後は心配で寝ていられなかつたようで、姫殿が迎えに来た時もすぐに大砦に向かおうと言つたをお止めしなければならないくらいでした。」

僕「それほど心配なさつていたんですね」

爺「美女殿に無事を聞いても自分の田で無事を確かめたくて仕方無い様でした。いえ、逆に無事だったからこそすぐに会いたかったのかもしませんね」

いつの間にか戻つてきていた姫に「爺ー早くー！」と姫には珍しい大きな声で呼ばれていた。

爺はその姿に笑みを一層濃くすると「それではまた」と姫に付いていった。

「勝手な事を言わないでー」と真っ赤に怒る姫にこやかに「申し訳ありません」という爺を見送る。

よつぽじH子の無事が心配だったようだ。

姫と爺を見送る僕に『逆にここで教えたなら我の負けのような気がする』とか何とか魔王が言つてたが意味を尋ねてもその後は『何でも無い』と答えてくれない。

まあ本当に大切な事ならちゃんと伝えてくれるだろう。

それくらいは無条件に思える程度には僕は魔王を信用していた。

魔王『ニヤリ』

信用しているからね！

籠城の準備は夜を徹して行われる。

結構な数の投石器が届いたので投石器を急いで堀の上に配置する。夜が深ける頃には何とか全方位の堀に十何機かずつ配置できた。

だが数がまだ足りない。

工兵長が大砲の工兵に作成方法を教えるのには実際に作り方を見てもらい一緒に作り、その後に実際に作つて貰わないと難しいらしい。

この世界の物作りは一人、もしくは数人の集団で完成までを作る。

完成品に対する職人の自負なのだろうか？

作業の一部を誰かに投げるというやり方はしない。

だからこそ教えるのに時間がかかる。

だから僕は部品毎に作る人間を分けて作成する方法を工兵長に言う。最初は戸惑い否定的だった工兵長も、一つの作業に特化する事がどれだけ作業が単純化し作業が楽になるかを説く僕の話を真剣に聞いていた。

僕のいう事を理解した工兵長はすぐに投石器の工程を7つに分ける。そして工兵達と大砲の工兵も7つに分けると作業を指示した。

翌朝、主だったメンバーが集まつて朝食を取つていた。本来なら他にも色々な領主を呼ばないとダメらしいが、誰を呼んだ呼んでないの話になつてしまい煩わしい事この上ない。だから領主達は誰も食事に呼ばないようになつたそうだ。

卓を王子、姫、爺、翁、現領主、領主息子、僕、美女さん、妖精少女で囲む。

当初はテーブルの一番遠くに座つていた姫が、昨日の晩から隣で食事を取るようになつっていた。

あまりにも自然と隣に座られたので反応も出来なかつた。特に場所など決まって無いが、通常の王族は上手かみてに座るものなのではないのだろうか？

上手かみて下手しもてなんて分からぬいけど。もしかしたら僕が間違えたのかな？

王子を見ると僕の対面に座つているし誰も何も言わない。ただの食事の席順の話だし深く考える必要も無いか。

食事の後はそのまま今後の方針を話し合ひ。

斥候の情報をまとめると國王軍は約10000。

それだけの兵を出せるとこつ事は國王軍はもうと多くての兵が居るのでかもしれない。

それを考えると鬱積したものを感じる。

とりあえずは田の前の敵をどうにかするのが必要である。少数による奇襲なども出たが、防衛を考えるとそれ程の兵を割ける訳でもなく、数百程度の兵では無理なので却下となつた。

王子と姫を逃がすという話も出だがこちらは当人2人が猛反対した。

王子の「自分はこの軍の旗頭だから逃げる訳にはいかない」という言い分に爺と翁が「ご立派です」頭を垂れる。だが姫も同く「自分も王族で逃げる訳には行かない」という言い分は誰にも受け入れられなかつた。

姫には一度、国外へ出でもらつた方が安全だという話で纏まりそうになつた。

まだ反撃しようとする姫に美女さんが笑顔で立ち塞がる。

美女さん「姫様、今の状況は把握されていますか？」

姫「はい」

美女さん「それでも残ると？」

姫「はい」

美女さん「この国の為に戦う兵を置いていけないと？」

姫「そうです。私は」

何かいいたそうな姫をそつと制し

美女さん「それなら国を出るべきです」

姫「何故！」

美女さん「わかりませんか？旗頭になれる人物が同じ場所に居るのは不都合があります。しかもその場所は戦火に巻き込まれるんです」

姫「……」

美女さん「國を思つなら今後を考えて一時的に國を出るべきです」

姫「それならせめて小替に」

美女さん「そうすると今度は姫を守る兵を割かないとといけません」

姫「つー」

「他に残るべき理由はありますか？」という美女さんに俯く姫。
少しの間、姫を待っていた美女さんはこちらを見て「姫と2人で話をさせてください」と僕達を部屋から追い出した。

そう長くない時間で部屋の扉を開き、美女さんと姫と妖精少女が出てくる。

どういふ話し合いが行われたのかわからないが美女さんはいつもの笑顔で姫は俯いており、妖精少女は姫を心配そうに見ている。

美女さんは僕を見ると頷いた。

何とか美女さんがちゃんと説得してくれたようだ。

美女さん「お待たせしました」

爺「姫は納得いただけましたか？」

美女さん「その前に、若」

僕「はい？」

急に呼ばれて驚く。

美女さん「若はどう思います？姫を国外へ、といふ話は」

僕「寂しいですが姫の安全を考えると仕方ないと思います」

美女さん「寂しいんですか？」

僕「もちろんです。出来ればそのまま（嘘）一緒に居たいくらいですよ。」

僕の言葉に姫がふらつくのを妖精少女が支える。

やはり美女さんの説得で納得していたとしても悲しいのだろう。

僕は出来るだけ姫の気持ちを和らげてあげよつと思つた。

僕「僕は姫に元気に笑つていて欲しいからこの戦争に加担しているんです。だから」

美女さん「だから?」

僕「だからその姫を出来るだけ危険な目に會わせたくない」

美女さん「『僕が守る』へりこ言えばいいのでは?」

僕「今の状況はそれだけじゃ済まないくらい危険なんです。とても言えません」

美女さん「言えるなら言つと?」

僕「もちろんです。(友達の)姫の笑顔を守る為ならー。」

美女さんは笑顔で頷いた。

姫はもう座り込んで両手で顔を覆つてしまつてゐる。
妖精少女が「よしよし」と姫の頭を撫でていた。

自分で逃げるよつに言われる状況に涙が止まらないのかもしだい。

美女さんは翁と爺を見た。

美女さん「姫と話をしまして、納得しました」

翁「では」

美女さん「はい。姫には残つてもらいいます」

寂しいけど仕方ないよええええええええええ！

美女さんの言葉に翁が「は？」と言ひつ。

美女さん「私も國の為なら出るべきだと諭しました」

爺「では何故！？」

美女さん「國の為ではなく一人の人間として大切な人を残して自分だけ安全な場所に居るのは嫌だ、と言われ私が納得しました」

確かに王子や付き合いの長い爺を残していくのは本当に心苦しいだろう。

「姫……」と爺が諭すような声を出すが姫は顔を覆ったまま首を振る。それを見た爺が僕を見る。

え？ 何で僕？

よく見ると姫以外の人人が僕を見ていた。

何なの？

魔王『…何か言えば良いのでは？』

僕が口を開く前に「先ほど、若の意見を聞きました」と美女さんが言つ。

美女さん「若が姫の笑顔を守るといつなり、従者の私はそれに従うだけです」

そつか、だから美女さんは僕に話を聞いたのか。
顔を覆つたままの姫を見る。

顔を覆い俯いて座り込む姫は本当に小さく弱々しい。

美女さん「若」

美女さんを見ると笑顔で僕の言葉を促した。

僕「姫にこのままいつ事は出来ないでしょうか？」

一同が僕を見る。

僕「姫の脱出に多くの兵は割けません。でも少數だと無事脱出できるかも分かりません」

爺「それで?」

僕「姫が大砦を出るとなると士氣にも関わります」

翁「だから残るべきだと?」

頷く僕。無理やりなこじ付けだ。

小砦に行けば少しばしは兵が居るので、そこから出せば問題は無い。姫が残ると士氣が上がるのは確かだが、王子がいればそれほど問題は無い。

それを承知でこじ付けたのだ。

翁もそれを理解の上で首を振り否定的な事を言おうとしたのを制して僕が先に口を開く。

僕「姫の望む事を叶えたい」

翁「それが危険だとしても?」

僕「姫の笑顔に為なら」

翁「なぜそこまで?」

僕「姫は(友達として)大切な人だからです」

翁と視線を外さずに言つ。

「はは田を逸らしたらだめだ。

後ろで姫の「はうわあ」という良く分からぬ台詞と、妖精少女の

「ひ、姫お姉ちゃん!」という声が聞こえてくる。

どうなつてゐるのか物凄く見たいけど翁から視線を逸らすわけにはい
かない。

翁「それでもダメじゃ」

翁はビリじても譲りない。

僕「では僕もここまでです

王子「なんですか?」

僕「姫と一緒に国外に出ます」

翁「何をいつてゐるのか判つてゐるのか?」

僕「はい」

翁「今、この大事な時に?」

翁の言葉に怒氣が孕む。

それを僕は無表情に見る。

僕「ええ」

翁「とち狂つたか！」

僕「僕はずつと正常ですよ」

翁「この状況で投げ出す事など許されん！」

僕「誰の指図も受けない」

翁「何？」

僕「先程も言つたとおり、僕は姫の笑顔を守る為にここにこります」

翁が「だからどうした」と言わんばかりに僕を睨む。

僕「はつきり言つてそれ以外興味が無い」

翁が眉をひそめる。

僕「この国なんか知つたことではない」

僕の言葉に翁が一喝しようとする前に

僕「姫がこの国と民をを守る事を望むから僕はここにいる」

爺「……」

僕「もし姫が逃げる事を望めば連れて逃げるし、国を潰す事を望むなら潰す」

翁「な、に?」

僕「僕は自分のしたいようにする。その『したい事』に『姫の笑顔を守る』というのが当てはまつたから反国王軍にいるだけだ。他人に指図される覚えは無い」

僕の言葉に翁が黙る。

僕「邪魔立てするなら」

僕は楽しくて仕方なくなり冷笑を浮かべる。

僕「全員敵だ」

その雰囲気に周りの何人かが腰の柄に手をやる。

それを見ながら「やるならやるよ」とばかりに冷笑を強くする。
一気に緊張が高まる中、翁が「また」と周りを制する。

翁「美女殿の意見は?」

美女さん「若の意のまま」

美女さんが笑顔で言ひ。

翁「ここには6000以上の兵が居ても?」

美女さん「若が望むなら

迷いも無く言つ美女さん「翁は何も言つ事が無く僕を見る。

翁「若、本氣か?」

僕「それはこっちが聞きたい。」

翁「……」

僕「時間は無いので今すぐ決めてくれ。国王軍が来る前に姫を連れて出ないといけないのでね」

翁「姫も連れて行くと?」

僕「元々国外に逃がすのだろう、俺が第一王女とやらの所まで連れて行つてやる」

翁「ならんと言つたら?」

僕「仕方ない」

僕は全然「仕方ない」感じを出さずに腰の剣を懸すように半身立ちになる。

実際にどうでも良かった。

邪魔するなら排除するだけだ。

俺が出るより一瞬早く「わかった」と翁が言った。
半身立ちのまま翁を見る。

翁「姫には残つて頂く」

それを聞いても俺は動かない。

翁「だからここは収めてくれ」

俺は翁を見たまま「姫」と呼びかけた。

姫「は、はい」

僕「姫はどうしたい?」

姫の言葉を待つが反応は無い。

僕「ここに残り今まで通り国王軍を倒す為に戦つか 僕と来るか」

姫「え、あ…」

僕「笑顔になれる方を選べば、俺はそれを手伝うぞ」

姫「…戦います」

僕「そうか」

それを聞いた僕は半身立ちから体を戻し姫に振り向く。

僕「姫がそう望むなら俺は国王軍を倒さう」

姫「！」

驚きで顔を真っ赤にする姫を見て面白い事を思いついた。

僕「姫、立つて

俺は姫の手を引き立ち上がらせる。

俺「今から俺が言つ事に納得できたら剣を取つて何か言え。気に入らなければ剣を取らずに何か言え」

姫「え?」

俺「それでいい。『はい』でも『いいえ』でも『あ』でも『え』でも何でもいい。最初に発した言葉で判断する」

立っている姫と向かい合い、一步下ると片膝をついた。

剣を鞘ごと抜き取り葉の部分を自分に、柄の部分を姫に向ける。

僕「我が剣を姫に捧げる。」

姫が声を出しそうになり無理や飲み込む気配を感じ顔に出さないようにはそく笑む。

姫が震える指で剣を受け取り「はい」とか細く言つ。

俺は立ち上ると姫を真っ直ぐに見つめ

僕「敵を打ち滅ぼすまで貴方の剣となり戦いましょう。剣を

呆けている姫に「剣を」と再度言つとあわてて渡してきた。

僕「貴方の笑顔を守る事をこの剣に誓う」

そう言ひと振り返り翁を見た。

經「詩」卷之二

僕「見ての通り」

翁「今までどおり戦ってくれると？」

僕は、國軍を倒すまでは、それには

翁一それに?

僕、今まで通りじゃないですよ

卷一

「僕は姫にのみ忠誠を誓いました。他の誰の指図を受けるつもりもありません」

翁「姫の騎士だと？」

僕「そうですね」

「国王軍を倒すまでですが」と言つと翁が「わかつた。お願いする」と笑い出した。

「わらしの」「という姫の声と「姫お姉ちやんがまた!」「という妖精少女の声が聞こえて振り返ひつとした時に翁が声を掛けた。

翁「先程の書いの作法はなんじや?」

僕「昔見たとある騎士の叙任式を自分なりにアレンジしてやつました」

翁「なるほどいのう」

美女さんが「とつあえずお部屋に戻りましょう」と姫と妖精少女を連れて部屋に戻る。

王子「しかし先程の若殿はす」「迫力でしたね」

爺「全くです。危うく腰の剣を抜くといひました」

僕「そりですか?」

そんなに酷かったかな?

翁「普段はじちらかと言ふば温厚に見えたのに、いやほや全く見かけにこよつませんな」

翁「なぜ美女ほどの者が従者として付いているのかと若干不思議に思っていたのじゃが、あれを見ると納得じゃな」

皆が驚きをあらわすが、実は自分自身が一番驚いている。普段の自分からは想像も出来ない態度と口調だった。

もしかして魔王が体を乗っ取った?

魔王『乗っ取つておるのはお主だらう』

やうだけど!

魔王『別に入れ替わつたりしたわけではない。やり方もわからんし、出来るならどうこうしている』

確かに、じやあ何だつたのだろう?

魔王『眠つていたお主の本性では?』

まさか!

魔王『あの状況で女に告白とは、見下げた性根だ』

ぼ、僕はそんな奴じやない!それに告白違つ!—!

魔王『だらうな。冗談はさて置き、あれは我の意識と長い期間いる事による影響だな』

どういう事？

魔王『一つの体に一つの精神があるのだ。本来ならどちらか弱い方が吸收されて消えるがが、それが起こらすに長い間一緒に器に居るんだ。互いに影響しあつても可笑しくあるまい』

じゃああれは魔王の性格の所為じゃ無いか…』の口…！

魔王『子供のお主と違つて我は大人だからな。あれくらい何とも無い』

くつ、もういいよ。で、このままずっとこの状態だと僕達はどうなるの？

魔王『分からん』

わからんって

魔王『今まで聞いた事も見たことも無い状況だ。今言った事も所詮は状況から見た推測でしかない。先の事はわからん』

確かにそうだ。

魔王も僕に影響されているの？

魔王『かもな』

かもなつて

魔王『先程みたいに変化が顕著ならわかるが、徐々になら気がつかないだろ?』

そうか

魔王『だからこそ怖いのかもしれないな』

これ以上魔王に悪影響を受けないよう、この戦いが終わって妖精少女を送つたら元に戻る方法を探そうと心の中で思った。

第17話 影響（後書き）

誤字修正

作詞柄方法

作成方法

手を惹かれていた

手をひかれていた

すぐに合いたかつた

会いたかつた

作詞柄方法

作成方法

裂かないと

割かないと

姫と話をしまし

姫と話をしまして

避けません

割けません

第18話 夜襲

翌日の夕方。

大砦の周りには国王軍が^{ひいて}今にも怒号を上げて襲い掛からん状態だった。

なんて事は一切無かつた。

本来なら夕方には大砦に到着するはずの国王派領主軍はまだ姿を見せてなかつた。

何かの作戦で到着を遅らせているのかと探らせた。
もしかしたらまだ援軍が来るかも知れない。
別働隊が回り込むのを待つてているかも知れない。

斥候を四方に飛ばし色々確認したが、どうやらただ単に進軍速度が遅いだけのようだ。

もしかしたらこじらりを焦らして不安感や焦燥感を煽る為なのかもしない。

逆にそりであつてくれ！

相手の意味の分からぬさに良く分からない事を願つ。

斥候から国王軍の到着が朝以降になるだらうといふ報告が入つた。

爺「なんといつか」

翁「やはづ奴らは無能じやな。」

僕「え?」

翁「時間を空ければ空けるほど程、こちらが準備を進めるといふのが理解できでおらん。」

僕「何かの作戦とかでは?」

騎士隊長「その可能性は無いと思われます。」

翁「ただの馬鹿なのじや。どうせ有力貴族の誰かが疲れただの何だの言つて遅らせているのじやろつ。」

僕「それなら一部の兵だけ置いて他は先に行かせるべきでは?」

翁「そこら辺が無能の極みなんじや。」

爺「怖くて一〇〇〇〇の軍勢を分ける」とが出来ないんでしょ?」

魔王『そんな俗物を相手にしなくてはならんのか』

王子「有力貴族は国内でも屈指の兵数を持っているが戦闘自体はし

た事が無いものばかりです

翁「だから戦の何たるかを知らん。逆に言えばこそが我々の付け入る隙となろう」

防衛の準備は夜通し行われたお陰でかなり充実した。
これも国王軍が夕方には現れると思われていたからである。

それがまだ来ない。

兵士の緊張感が肩透かしによつて若干緩んでいる。

僕「もしかしてコレを狙つたとか！」

翁「現実をみよ。ただ遅いだけじゃ」

僕「ソウテスカ」

爺「でも兵士の緊張感が切れてしまつたのはまづいですね」

王子「どうか士氣を上げる事が出来たらいいんですけど…」

うむむ、と頭が考え込む。

僕「姫と美女さんと妖精少女が部署廻りしながら『頑張つて』って

言つたら上がりすぎてヤバイ事になりそひ

王子・爺・翁・騎士隊長・現領主「「「「それです（じゅ）」」」

「」

僕の冗談で呴いた葉に一斉に吹き散る。

マジですか？

魔王『いや、士氣を上げる策としては最善だろ？』

すぐに姫と美女さんと妖精少女へ行つてくれる様にお願いをした。姫は軍隊の指揮を上げる必要があると聞かされ2つ返事で了解した。美女さんは笑顔で「それくらいなら構いませんよ」と答え、妖精少女は「お兄ちゃんが一緒なら」と頷いてくれた（可愛い！）

魔王『王子にも行かせろ』

王子？

魔王『少なからず女の兵士も居る。その為だ』

なるほど

僕はすぐにその事を伝えると王子も一瞬困惑したが納得した。

部隊への激励は功を奏している。

といつよりは上がり具合が過剰すぎて怖い。

幾つか部署を回って兵士達の上がり具合を見ると、何となく分類が見えてきた。

美女さんと妖精少女のファンの色の違いが凄すぎて際立っている。多くは語らない。

さらに幾つか回って疑問に感じる。

兵士達が腕に付けている紐が気になる。

最初は気にも留めていなかつたが、途中で気になつたものの元の部隊の目印か何かだと思っていた。

だが殆どの兵が何かしらの色を付けている。
しかも数種類を付けている人も居る。

謎だ。

幾つか回った時に気が付いた。

色は全部で5種類のようだ。

もしかしたらまだあるのかも知れないが、今のところは見てない。

一時半（約3時間）程たつて半分ほど回った。

残り半分である。

とある女性部隊で謎が深まった。

女性兵士と話をしていた所に王子が近づいてきた。

王子の笑顔にテンションが上がる水色をつけた女性兵士達。

王子「もうじわけありませんが、そろそろ次へ行かないといけません」

僕「もうそんな時間ですか

女性兵士達に別れの挨拶をしその場を去るとして王子が木材の破片に足を取られる。

とっさに腕を掴んで倒れるのを防ぐ。

僕「大丈夫ですか？」

王子「ありがとうございました」

女性兵士水・女性兵士黒・女性兵士水黒「「「「」」

「！」「！」「！」

ものすごい超音波が飛んできて驚いて後ろを振り返ると女性兵士達

が発狂してた。
なんか怖い。

と、良く分からぬテンションのまま女性兵士水黒の一人が女性兵士水に黒い紐を手渡し、女性兵士水がそれを受け取り腕につけて女性兵士水黒にクラスチェンジした。

握手を交わす女性兵士水黒と新たに水黒になった女性兵士。「水黒？ 黒水？」などどちらでもいいような良く分からぬ事を話し合っている。

何の儀式なの？といふかいつも紐を持つて歩いているの！？

他の色の紐をつけていた女性兵士達も次々と水色と黒色の紐を受け取つて付けている。

周りの部隊でも同じようなやり取りがなされている。
謎は深まる。

次の部隊に行く為に部隊を離れるときに注意深く兵士を見ていたら、どこの部隊でも激励の後に新たな紐の交換会が行われていた。あれは兵士間のコミュニケーション手段なのだろうか？
この世界の流儀はまだよくわからない。

とある部隊では男性全員が黒だった。
姫や美女さん、妖精少女の激励も物静かに聞いている。
今までと違い落ち着いた部隊だ。

王子が挨拶し僕も「頑張つてください」と言つて終わった後に「はつ！」と全員が一斉に敬礼した。

全員話終わったからと言つていきなりそいつ事されると焦る。正直ビックリした。

騎士隊長の部隊は全員が赤だった。

美女さんの挨拶に全員直立不動で聞いていた。ますます反応が信仰っぽくなってきた。

全ての部隊を回り終わった。

どこの部隊でもやはり紐の受け渡しと握手が行われていた。

気になるのは姫がいつの間にか黒の紐をしていた事だ。

どうしたのか聞いたら「女性兵士の部隊で貰いました」としどろもどろに答えた。

どういう意味か聞いたら物凄く目が泳いでいた。

「お守りみたいなものですよ」と美女さんがいい「そ、そつなんでもうー」と姫が囁んでいた。

僕「お守りですか。どういう意味があるんですか？」

美女さん「紐によつて違つよつですよ」

僕「そなんですか。僕も何かつけよつかな

姫「！」

僕「何色がいいかな。黒が一番付けやすい色かな」

美女さん「願掛けのような物ですから色で選ばず内容で選ぶべきか
と」

僕「何色が何かわからないですか？」

姫「も、桃色なんてどうぞよしあつかつ…」

僕「どうこう意味があるんですか？」

姫「え、えっと…」

美女さん「幸運を呼ぶんです」

姫「そ、そなんなんです」

僕「姫のつけてる黒は？」

姫「つー！」

美女さん「大切な人の無事を祈る、ですよ」

僕「なるほど、じゃあ桃色でいいか。後で誰かに貰おう」

美女さん「どうぞ」

「なんで持ってるの？」と思つたら姫が貰つた女性部隊で貰つていいらしい。

それを腕につける。ミサンガみたいだ。

美女さんは妖精少女に「私達は姫と同じ黒にしましょうか」といい、嬉しそうに頷く妖精少女に付けていた。

子狼の首にも巻いていたが、危なくないのだろうか？

姫が後ろを向いて小さくガツッポーズをしていた。

妖精少女と一緒にうれしいらしい。

その夜にいつもの面々で食事を取つていた時の事。

翁「若是桃色をつけているんですか」

翁が僕の腕の紐を見ていう。

隣で姫が「力チャ」と食器を鳴らす。めずらしい。

僕「ええ幸運の色だと聞いたので

翁「ほう。幸運ですか」

僕「はい」

翁「黒は？」

僕「たしか、無事を祈る？」

美女さん「大事な人の無事を祈る、ですよ、若」

僕「それです」

翁は姫を見て「なるほどのう」と言つた後は、別の事を話しあしりの話題には触れなかつた。

翌日^{（ひよりの）}の日入前^{（ひいりまへ）}（17時頃）になつて国王軍が現れた。
国王軍は大砲の横を流れる小さな川のあたりに集まると陣を引き出した。

爺「あんな所に陣を引くとは」

爺「おおかた水欲しきでじょうな」

場所としては悪くないが大砲から近すぎる。

自分達の数が圧倒的に多い事と大砲から弓が届かない距離という事を考慮しているらしいが、本来ならありえない距離である。

僕「舐められますね」

翁「それもあるが、やはり馬鹿なのじやうひつ」

僕「届きますね」

翁「届くな」

僕「夜にでもやりますか」

翁「今じゃなく夜とは人が悪い」

翁が「それがいい」と笑った。

すぐに主だったメンバーが呼ばれる。

国王軍の居場所を確認し投石機が届く距離なので夜中に打ち込むと言つ話をする。

翁「夜なら敵も何が起つたかわかりにくく混乱するじやうひつ」

僕「ついでに夜襲も掛けましょう」

騎士隊長「しかしそれはこの前、無謀といつ結論に至ったのでは？」

僕「この前と状況は変わりました。投石機の混乱に紛れれば十分可能だと思います」

一同が考え込む。

爺「しかし投石機で石が飛んでくる状態では味方も危ないのでは？」

僕「撃つ数を決めたらいいんですよ。各2発撃つたら突入等とね」

爺「ふむ」

僕「一撃離脱で離れたら皆に合図をし投石をまた始める、といつ感じで」

この方法なら投石機にやられる危険はある程度は危険は減る。

王子「確かに今のうちは出来るだけ削つておいた方がいいと思います」

翁「これで崩れてくれれば、万の兵が一夜でやられたといつ情報で我が方に乗り換えるヤツラも出でてくるかも知れんな」

王子の「やりましょ」の一言で夜襲決行が決まった。

夜襲は僕と美女さんと領主息子、騎士団長が行く事になった。
兵は多すぎてもばれる可能性がある。

僕、美女さんと領主息子、兵士隊長の2組に分かれて各200名ずつ
兵を率いる事になった。

夜中の間に小分けにして兵と大砦外に出る。

そのまま2手に分かれて国王派領主軍の左右に陣取る。

鶏鳴(けいめい)（2時頃）、予定の時間に差し掛かる。

後は混乱し出したら突入するだけである。

じりじりと時間が過ぎるのを待つ。

見付からないように少し距離をあけて待機しているのでもしかした
ら声が聞こえないかも？などと思っていたら「どん」という鈍い音
と共に人の悲鳴が聞こえてきた。

それを合図に僕達は馬を駆る。

無言で馬を走らせ国王軍の陣に乗り込むと、そのまま声を出さず手当たり次第に斬り倒しながら陣を進む。

人もテントもかがり火も。

何でもかんでも剣でなぎ払いながら無言で走り、そのまま国王軍の陣を通り抜け追いつかれないように遠くへ逃げる。

合流地点に向かうと領主息子の部隊は先に届いた。ドンという鈍い音が聞こえてくる。

どうやら投石を再開したようだ。

領主息子が再度の夜襲を提案してきた。

2回も来るのは思っていないはずで今なら混乱もしているので大打撃を「えるはずだ、と言つのが言い分である。

確かに理屈は分かるけど僕は否定した。

領主息子「なぜですか？」

僕「投石中で石が飛んでくる中に突っ込むのは危険です」

領主息子「大膽に云ふに至らえばいい」

僕「伝令を送り戻つてぐるのを待つてこる間に敵は撤退するよ

「領主息子」伝令を送つてすぐに出ればいいではないか！」

僕「それはタイミングが不確定すぎる。」

領主息子「投石が止まつたタイミングで行けばいい

僕「それだけでは止まつたのが夜襲の為なのかたまたまなのかが分からない。」

領主息子「削れるうちに削らないと。」

僕「それは分かります

領主息子「な、う。」

僕「でももう遅いです」

領主息子「何と?」

僕「今から向かっても敵は移動してしまつてますよ」

領主息子「何故分かるんです?」

僕「領主息子は岩が飛んでくる所にいつまでもこますか?」

領主息子「だからこそ急ぐのです」

僕「だから間に合いませんよ。もう投石も止まつてますし」

そういつ話をしている間に石の落ちる鈍い音がなくなつてゐる。

領主息子「なぜ止まつた?」

僕「暗闇で国王軍の撤退は分かりにくいですが、明日の籠城戦もあります。石を無駄撃ちしない為にけりょうと早いかなぐらいで止めたんでしょう」

領主息子「美女殿はどう思われる」

美女さん「若の意見に賛成です」

領主息子に無言で指名された兵士隊長も「同じです」と短く答えた。その意見を聞いて「やはり自分はまだまだ思慮が足りないな」と言うと「わかりました。戻りましょ」^うと領主息子は笑顔で言って帰路についた。

夜襲メンバー総勢400名のうち未帰還者25名、負傷者14名。一万の陣営に飛び込んでこの結果なら上場だと言えるだろ^う。後は日が昇った後の相手の損害予測だけだ。

斥候から国王軍の現在の位置が伝えられる。

どうやらある程度大砲から離れたようだが未だに撤退せずに残つているみうだ。

日が昇り国王軍の陣営後が見えてくる。

意外と陣営は天幕などが綺麗に残つていた。

確かに石が押しつぶした場所や夜襲で通り抜けたであろうあたりは

無残な状況だが、それ以外の場所は天幕などが綺麗に残っている状態である。

どうやら投石と夜襲の混乱が恐怖を呼んで連鎖的に撤退していくた
ようだ。

国王軍の場所を確認しすぐに兵を出して国王軍が置いていった補給物資をある程度大砲に運び込む。

本当は全部回収したいが国王軍が戻ってきては元も子もないのでもつていけない分は火を放つ。

これで国王軍の物資は大幅に減り短期決戦を挑むか撤退しか無くなるだろう。

陣営に残っていた死体から夜襲と投石で1000～2000くらいは死んだようだ。

国王軍の残りは多くて9000。対する僕達は6500。

まだまだ厳しい状況は変わらない。

昼前に国王軍が来た。

昨日見たときより若干、みすぼらしく感じるのは昨日の夜襲のイメージの為だろうか。

一部の兵が陣営の中を回っていたがすぐに国王軍本隊へと戻つていった。

もしかしたら置きつ放しの物資を期待していたのかもしれない。

すぐに国王軍から前進のラッパが聞こえていた。やはり短期決戦しか無いといつ判断だろう。

翁「やはりすぐに来たか」

爺「諦めればいいものを」

翁「さすがに何もせずに逃げ帰るとまことにいつ頭が働いたのかの」

爺「頭に血が上ってるだけで無いといいが」

国王軍が隊列を組んで向かってくる。

こちらの矢が届くかどうかあたりで盾を掲げて一気に走ってくる。

翁「頭に血が上っていたようじゃ」

兵士隊長の「撃て！」の命令と並に矢と投石を撃ち始める。

矢は前に走る雑兵に降り注いだ。

しかし投石は雑兵を飛び越えて少し奥に落ちると敵を巻き込みながら小坂を転がって止まつた。

どうやら国王派領主軍の正規兵の一部に当たつたらしく明らかに距離を取り出した。

雑兵と正規兵の間が開く。

数刻がたつた。

矢と投石で国王軍は未だに壙に近づけないでいる。

「のままなら行けるかもしれない！」

誰もがそう思った瞬間に物見やぐらの兵が「敵影発見！」と叫ぶ。仰ぎ見ると物見やぐらの兵が領主軍の方を指差していた。

「領主軍右後方より接近する部隊があります。数不明、1000以上はいる模様！」

ここに来ての敵への増援は大砦にいる者に大きな衝撃を与えた。

第18話 夜襲（後書き）

誤字修正

開ければ開ける程

そこが

部署周り

部署廻り

気になたもの

気になつたもの

何かしらの色

何かしらの色

機能見たとき

昨日見たとき

少し置くに落ちる

少し奥に落ちる

第19話 死亡フラグ

「3000以上はいる模様！」

その声を聞いて僕は塹の上に掛け昇った。

軍勢は遠くてよく分からないが騎兵が多いようだ。
敵の援軍だと知り兵の士気が下がるのを感じる。

魔王『このままでは崩れるぞ！』

目は振り返り大きな声で叫んだ。

僕「手を止めるなー・撃てー！」

僕も弓を打ちながら叫ぶ。

このままでは

僕「たかが数千増えるだけだー・やることは一緒だー！」

周りの兵を叱咤する。

敵に押しつぶされる

僕「いいでやらなきゃ押し込まれるぞー。」

士氣の低下が止まらない。

そうしたら姫と妖精少女が

僕「打たなきや死ぬぞ！姫や妖精少女が死ぬぞ！僕はそんなのは嫌だ！！」

必死で弓を打つ僕の言葉に弾かれたように周りの兵が弓を打ち出す

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

僕「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！そんな田には呑ませたくないんだーーーーー！」

必死で弓を打つ僕を「出すぎです」と数人の兵が僕を羽交い絞めにして物陰引きずり倒す。

どうやら必死すぎて堀から身を乗り出さんばかりだったようだ。
気がつくと周りの兵が「姫を守れ！」「妖精少女の為にーーー」と声を出しながら弓を射ていた。

皆の広場でも同じように叫んでいた。

魔王『何とか耐えたな』

何か疲れた

まだ始まつたばかりなのに物凄く疲れた。

隙間から先ほどの軍勢を探す。

魔王軍の後方から来た軍勢はほぼ騎兵で魔王軍に合流しようとしないようだった。

どこの軍勢だろう。

そう思つた瞬間にその軍勢が牙を剥いた。

ゆつくりと魔王軍に接近した軍勢はいきなり鬨の声を上げると魔王軍の側面に突撃した。

その光景を見ていた兵の一人が「赤と白の騎士団の旗だ！」と叫ぶ。

それを聞いた僕は塙を飛ぶよつて降りて騎乗すると近くの王子の所に駆け寄る。

僕「来たのは赤と白の騎士団で魔王軍に攻撃します。今がチャンスです」

「打つて出ましょつ」と僕が言つと王子は僕を見つめて「分かりま

した」とこうと「打つて出る！開門！…」と叫んだ。

それに合わせて僕は「赤白両騎士団がこじりこ付いたー今こそ国王軍を打ちのめすぞ！」と叫んだ。

門前の弓がやむ。

それを好機と見て門に突っ込もうとしていた敵集団は、開いた門から出てきた騎兵に浮き足立つた。

「蹴散らせ！」と叫びながら突っ込んでいく騎士隊長。

そのまま一部の壙を連れて回り込むように壙に張り付こうとしていた敵兵に当たつていく。

僕達はそのまま真っ直ぐ国王派領主軍の正規兵集団に向かつていく。

乱戦になる。

このままでは犠牲が増えてしまつ。

ふと見ると乱戦の輪の外に巻き込まれるのを避けるように退避する集団が見えた。

僕「目の前の敵だけに掛かりきりになるな！敵の指揮官が逃げるぞ！近くの者は優先的にあいつを狙え！…」

剣を突きつけて叫ぶ。

そんな事は無理なのは分かりきつている。

ただ相手の頭が逃げる事を敵に教えていいるだけだ。

そこからの決着は早かつた。

僕に剣を突きつけられた相手は剣が届く距離でもないのに「ひつ！」と声を出すと「早く逃げるぞ！」と乱戦から離脱して行った。

それを見た兵たちが次々と後を追つようつに逃げていく。

その動きが連鎖的に加速してあつといつ間に国王軍は撤退をしていた。

僕は兵に追わない様に伝え大砲に引き返した。

3刻ほどして大砲に赤と白の両騎士団が現れた。

両騎士団から4名の人物だけが砲の門の前に進み出る。

その内の一人が自分は赤の騎士団長でもう一人が白の騎士団長、残りの2人が両騎士団の副団長である、と言つた。

赤の騎士団長「反国王派への帰順を求める。王子に面会を…」

すぐに騎士団長と爺が門の上に立ち確認する。

爺の「確かに両騎士団団長ですな」といつ葉に門を開いた。

広場で出迎えた王子と姫に騎士団全員が跪く。

赤の騎士団団長「赤の騎士団総勢1900名、王子に忠誠を誓いま

す

白の騎士団団長「白の騎士団総勢2300名、同じく王子に忠誠を誓います」

王子「感謝します」

王子が「ありがとう」と再度言つと騎士団は立ち上がる。

そんなにすぐに信じて大丈夫かなと思つたら、元々両騎士団団長は王子派らしく、それで危険視されて幽閉されてしまつていたらしい。それに姫も小さな頃から知つてゐるらしく、妹のように感じているようだ。

すぐには3800名の元両騎士団出身の騎士のことを伝えると両騎士団副団長が再編入する為に何人かの騎士を連れて走つていった。

赤の騎士団団長「遅くなつて申し訳ありません」

王子「いえ、無事で何よりでした」

白の騎士団団長「王子達が騎士団員達に策を授けてくれたお陰です」

王子「その策を考えたのは」ひかりの若です

急に話を振られて驚く。

僕「えりも

両騎士団団長が僕を見る。

どいつもこいつも若く見える。
30代後半といったところか。

両騎士団団長の方が年上のよつたな気がする。

赤の騎士団団長「貴殿が若殿か」

僕「はい」

赤の騎士団団長「貴殿のお陰で我々もいひじり自由になれた。感謝
する」

僕「いえ、そんな」

白の騎士団団長「全くその通りだよ。憎い有力貴族に一泡吹かせて
やめ」とも出来たし、本当に感謝してるよ」

白の騎士団団長が笑う。

どいつもこいつも両騎士団の団長は少し毛並みが違つよつだ。

赤の騎士団団長「騎士団を再編成したらすぐ追撃に出撃します」

HN「少しほんだ方がいいのでは?」

赤の騎士団団長「いえ、今が好機です。ここで攻め込まないと…」

白の騎士団団長「敵は削つておぐに越した事も無いですしね」

翁「そりやな。しかしも一部の兵を出せ」

王子「全軍で向かうべきでは？」

翁「物資なども運ばなくてはなりませんからな。」

すぐに大砦の兵から2000の騎兵が出兵の準備を行つ。
同時に物資を運ぶ後発隊の準備も始まり、両騎士団の編成と合わせて大砦内が慌しくなる。

両騎士団団長と何かを話し合っていた翁と王子に呼ばれる。

王子「若に追撃部隊の指揮をお願いします」

僕「はい？」

王子「追撃部隊の、指揮です」

僕「僕が？」

翁「今までの事情を鑑みて適任と判断したのぢや」

王子「お願ひします

僕「は、はい」

王子の気迫に押されて頷く。

王子「今までの事でかなり若の評価は高いですが、ここでもう一押しして置きたいんですね」

いつの間にか僕の評価が高くなっているらしい。

魔王『方針の決定、敵の取り込み、投石兵器の発明…中々の戦果だ
らひ』

そうかな

評価されるのは単純にうれしい。

王子「姫姉さまの為にも」

姫？

確かに敵を減らして王都に向かつ事は姫の願い一步も一步も近づく。

爺「そうですね。チャンスがあればどんどん行かないと行けません」

翁「周りを黙らせるくらいにな

うこうと頷く爺と悪そつに笑う翁。

やはり相手が弱っている時にはがつひとつに行かなことダメだね！」

僕「分かりました」

王子「よろしくお願ひします」

僕と一緒に美女さんと領主息子、兵士隊長が行く事になった。

赤白両騎士団団長にも挨拶をする。

赤の騎士団団長「よろしくお願ひする」

白の騎士団団長「お手並み拝見ですね」

どちらの騎士団団長も僕が行く事には特に不満は無いようである。
気になって赤の騎士団団長に聞くと「赤の副団長から話は聞いた」と言っていた。

初めてあつたときの事だつけど、特に大した事をした記憶は無い。

白の騎士団団長は美女さんに笑顔で挨拶していた。

白の騎士団団長「初めましてお嬢さん。白の騎士団長と申します。
お見知りおきを」

美女さん「若の従者をしてくる美女と申します。」

白の騎士団団長「若殿はこんな美人を従者にしてくるなんてひりや
ましき」

僕「はあ、どうも」

白の騎士団団長「どうですか？戦が終わつた後に食事でも」

美女さん「私は若の従者ですので」

白の騎士団団長「つれないですね。貴方に食事を頼むのに若殿に決
闘を申し込まないとダメですかね」

なんどそんな話に

白の騎士団団長「今のうちに約束でも取り付けておきましょうか」

やつぱり白の騎士団団長が僕の方を見て笑う。

美女さん「若に危害を加えよつとこつなら私がお相手しますよ~」

白の騎士団団長「ダンスのお誘いならうれしいのですが」

美女さん「それなら他を当たつてください」

白の騎士団団長「ではお願ひしましそうか」

そつまうと美女さんに向き直る。

剣の柄に手を当て立つ白の騎士団団長。

数歩踏み込むと一瞬で剣を抜き美女さんにせまる。

美女さんは笑顔でそれを眺めたままピクリとも動かない。

剣先を美女さんの首に当てた状態で止まる。

少しして剣をしまつ白の騎士団団長。

白の騎士団団長「」無礼をお許しください」

美女さん「もうよろしいのですか?」

白の騎士団団長「大体分かりました。ありがとうございます」

美女さん「そうですか」

白の騎士団団長は僕にも向き直り「急に申し訳ありませんでした」と笑顔で謝罪した。

僕「いえ、斬られなくて良かったです」

どちらが、とは言わなかつた。

それで白の騎士団団長も分かつたらしく、笑顔で「まつたく」と頷いた。

あの騎士団団長も「聞きしに勝る」と言つていた。

いつどこで美女さんの噂を聞いたのか知らないが自分で噂を確かめてみたらしい。

姫と妖精少女が現れた！

普通に妖精少女の手を引いた姫が王子と翁達と来ただけだけど。2人は激励に来てくれたようだ。

赤の騎士団長がこれまたどこで聞きつけたのか「あれが幸運の少女か」と妖精少女を見て呟いた。

「彼は迷信やまじないを信じる性質たちなんだよ」と白の騎士団長が小声で教えてくれる。

まじないと聞いて花占いを想像し、花占いをする赤の騎士団長を想像して笑つてしまつた。

妖精少女「おにいちゃん、気をつけてね」

僕「うん。美女さんも領主息子もいるし大丈夫だよ。」

妖精少女「うん」

姫「若…」

姫が真剣な表情でこちらを見ている。
やはり戦は不安なんだろう。

僕「必ず勝ちますよ」

姫「どうか、」無事で「

僕「次に会うときは姫を王都へ迎える時です。僕が迎えに来ますので待っていてください」

姫「は、はい！」

そう言つて自分の馬のところに戻る。
それを見ていた赤白両騎士団団長が近づいてきた。

白の騎士団長「中々いい感じですね」

何がいい感じなんだろう？

首を傾げようとして思い立つ。

姫と妖精少女が来て兵の士気がかなり上がっている、その事だろう。

僕「そうですね」

白の騎士団団長「これは頑張って姫を早く迎えないといけませんね」

僕「ええ、最後まで気を抜かないようこしないと」

白の騎士団団長「この戦が終わったらあの子にですか」

何? その死亡フラグ

魔王『死亡フラグ? なんだそれは』

魔王に手短に説明をしながら今度こそ首を傾げる。

僕「ああ、姫を迎えて話へと重ひ話ですか」

白の騎士団団長「もうそれです」

僕「早く姫を安心させてあげたいですからね」

白の騎士団団長「この戦が終わった後も色々あると思いますが、姫を支えてあげてください」

僕「出来る限りの事はしますが、いつまでもこの国に居る事は出来ませるので」

赤白両騎士団団長「は?」

今まで黙つて聞いていた赤の騎士団団長も白の騎士団団長と共に口を合わせる。

僕「妖精少女も早く故郷に連れて行つてあげたいですし、僕もやることがありますから」

白の騎士団団長「ちよ、ちよっと待つてくれださい」

僕「はい？」

白の騎士団団長「戦が終わつたら国を出るつもりですか？」

僕「つもつも何も最初からその予定ですが？」

赤の騎士団団長「姫を支えるのではなかつたのか？」

僕「ここは姫を支えるたくさんの仲間がいます。戦が終われば後は皆さんの仕事です」

僕の言つ事にて言葉をなくし王子達を見る白の騎士団団長。

白の騎士団団長「あ、さか？」

王子・翁・美女さん「そのままか、です（じゃ）」

3人が唱和する。

白の騎士団軟調「赤の騎士団団長を超える御仁が居たとは」

赤の騎士団団長「その物言いは納得行かないが、さすがにこれは俺でもわかる」

僕達を見つめる姫と妖精少女に手を振っていると「若殿」と赤の騎士団団長が声を掛けた。

赤の騎士団団長「用事はどうくらいかかるんだ?」

どれくらいだらうか?

想像も付かない。

僕「いつ終わるかわかりません。」

赤の騎士団団長「それまで待たせると?~」

僕「待たせる?」

赤の騎士団団長「もううん」

そういつた所で翁と白の騎士団団長が赤の騎士団団長を止めゐる。

翁「できれば戦が終わつた後も姫を助けて欲しいんだがな」

僕「妖精少女を早く連れて帰つてあげたいんです」

白の騎士団団長「本人に聞いてみましょう」

そういうと姫と妖精少女を呼ぶ。

白の騎士団団長「妖精少女は戦が終わつた後も姫を助けてくれるかな？」

白の騎士団団長「でもそつすると故郷に戻るのが遅くなるよ。」

妖精少女「…姫お姉ちゃんと居たいからいい」

白の騎士団団長「だ、そうです」

僕「妖精少女、いいの？」

妖精少女「うん」

由の騎士団団長「 もちろん、その間も我ら我が妖精少女の故郷と連絡を取る手配をしますよ。ねえ翁殿」

翁「 もちろんござりや」

妖精少女が良こと悪つたり良このだが、問題はもう一つある。

魔王

魔王『 なんだ』

魔王の方はどうなの?』

魔王『 ベルモントもソルジャーも無い。我にはベルモントもなししな』

僕は魔王の問題を放置するつもりはない

魔王『 我も無い』

なら

魔王『 だがそれほど急いでもおらず』

いいの?

魔王『 良いも悪いも無い。まだ力が足りない。今戻っても何も出来ない』

せうか

魔王『そうだ』

ありがとう

白の騎士団団長「どうですか？もし良ければ戦が終わっても姫を支えてもうえなこでしようか」

僕は考えて美女さんに話しかける。

僕「美女さんはどうですか？」

美女さん「」随意に

美女さんを見つめるもこつも通りの笑顔は変わらない。

僕は頷くと翁と白の騎士団団長の方を向いた。

僕「…いつまでも、とは行きませんが」

白の騎士団団長「それでかまいません

僕「時期が来たら旅立ちますからね」

翁「それはかまわんよ」

僕「最後に地位も名譽も不要です。それが条件です」

翁「いらっしゃいと~」

僕「いりません。土地も何もかもこじりません」

翁「じゃが姫のそばに居る為にはある程度の地位についてもらわん
といへん」

僕「じゃあこの話はもう終わりですね」

白の騎士団団長「まあまつて。」

僕「なんですか？交渉は決裂したじゃないですか？」

白の騎士団団長「まだだよ。まだお互いの意見のすり合せの段階
じゃないか」

僕「……なるほど」

白の騎士団団長「姫のそばに居ても周りから文句が出ないようにな
る為ににはある程度の地位を得てもらうのが一番簡単なんだだけ、
それでもダメかい？」

僕「なるほど」

白の騎士団団長「理解してもらえたかい？」

僕「ええ、話しあつても無駄だと判りました」

赤の騎士団団長「地位をくれると云つのに何が不満だー?」

僕「何もかもが不満ですね」

白の騎士団団長が赤の騎士団団長に「話がややこしくなるから黙つててね」と云つと僕に「何でやううの?」と聞こた。

僕「話の起點から食い違つてるんですよね」

白の騎士団団長「元風ひごひびき」

僕「僕は別に『この国に残りたい』なんていつてませど

白の騎士団団長「もうだね」

僕「でもみんなが『姫を支えてあげて』と云つので条件付で条件を受け入れるつもりでした」

白の騎士団団長「やいまではお互に認識があつてるね」

僕「なのこ『姫と居るの元話が居る』と云つ

白の騎士団団長「おかしいかい?」

僕「おかしくないですか?」

白の騎士団団長「どうが?」

僕「…僕は『居たい』んじゃなく『居るよ』ってお願い』されたんです。なにこ』居る為に地位が居る』とこつのはおかしこと思いましたか?」

白の騎士団団長「なるほど、『お願い』されて『この』押し付けられるのは不快だと言つ事だね」

僕「そうですね。」

翁「じやが姫のせばあみ為には仕方ないんじや」

僕「だから無理を言わずに話を流さうとしてるんですけど」

翁「むづ」

白の騎士団団長「えりこつ状態なら受けてくれるんだー?」

僕「地位など不要な状態で『姫の騎士』として近くにられるのなら」

白の騎士団団長「それは騎士団などにも所属しないこと叶つ事かい?」

僕「そうです。」

僕は正直、このやつ取りに面倒くさくなつてきていた。
だから働かない宣言をしてやつたと諦めてもらつことじた。

白の騎士団団長「ちよと待つともうかるかい」と言つと王子と翁と赤の騎士団団長とで話し出す。

はやく出陣準備が終わらないかな

魔王『やせぐれであるな』

正直、面倒になつてきたよ

魔王『地位くらこ受ければいいではないか』

だめだよ、いざれ出て行くのこそんなのを受けると、それを理由に引きとめられる事が予想される。だから面倒事は事前に避けないと。

魔王『……やつか』

話し合いが終わったよひでまたここへひよってきた。

翁「話は」了承した

僕「では？」

翁「地位等無くても姫のそばに居る事ができるよひてある」

僕「ですか

翁「『姫の騎士』といつ地位を新たに作る

僕「はい？」

翁「『姫の騎士』じゃ」

僕「だから地位とかは」

翁「安心せい。姫のそばに居れるだけで他には何も無い名譽職のようないものじや。姫の命のみに従えればいい地位じや」

僕「他の誰にも?貴族や王族にも」

翁「そりゃな…おぬしなり王の命でも納得できん場合は従わんじやうつしな。地位的には執政と同じ地位にしてよつ」

魔王『執政は国王の次に偉いな』

僕「物凄い地位じやないですか」

翁「実権は何も無いよ。王に礼を貢へとなくて良いわけではない。それくらいはしてくれるじやうつ?」

僕「ええ。でもそんな地位を作ると後々、拡大解釈されて大変な事になるのでは?」

翁「まあそこいら辺は追々詰めるとじや、実権は無いが立場は執政と同じ位にしてくか」

僕「大丈夫なんですか?」

翁「大丈夫じやうつ」

本当に大丈夫か不安だ。

僕「とりあえず実権の無い『姫の騎士』といつ地位は受け入れます。でもそれ以外の地位も土地も何も要りません。」

翁「うむ」

僕「後々、どんな理由でも押し付けられる場合は出て行きます。時期が来たら出て行きますけどね」

翁「わかった」

僕「ここにいる面々が証人です。後で証文が無いとかは聞きません。いいですね」

王子「は、はい」

僕は疲れてため息を吐ぐ。

僕「何でまだ戦も終わってないのに終わった後の話をしてるんだろう」

翁「終わった後では話をする前に居なくなってるかも知れないではないか」

白の騎士団団長「まあまずは邪魔な敵を倒しに行きますか

話している間も準備は刻々と進んでおり出陣の時間が迫っていた。

第19話 死亡フラグ（後書き）

誤字修正

「ありあとう」 「ありがとう」
「しているらしく」 知つて いるらしく
ああの騎士団団長 あの騎士団団長
着たのか知らないが 聞いたのか知らないが
撃つて 打つて (数箇所修正)
試論騎士団長 白の騎士団長

第20話 独断専行

追撃が始まった。

追撃部隊は総数約9900

僕、美女さん、領主息子、兵数約2000

赤の騎士団 兵数約3900

白の騎士団 兵数約4000

斥候の情報では敗走した国王軍は100000の軍勢を大幅に減らしながらも何とか体裁を保つて王都への帰路についているようだ。戦闘後半刻（約1時間）程は死に物狂いで進んでいた様だが追撃が無いと判断したのか、今は速度は遅い。

一時（約2時間）程で追いつく予定だ。

斥候が王都へ戻る国王軍を見つけた。

悟られないように距離を開けて一旦停止する。

赤の騎士団団長「このまま行くか？」「

白の騎士団団長「そうですね」

僕「今のスピードで行けば野営地はここ（地図上を刺す）あたりで
しょうか？」

赤の騎士団団長「通常で考えたらそうだが、そこよりの辺り（僕が指した場所より王都方面）だろうな」

僕「そこになると着くのは夜中では？」

赤の騎士団団長「それでもここまで確実に行くだろ？？」

白の騎士団団長「そうだね。ここから先は有力貴族の土地だからね」

「自分達の勢力圏まで戻らねば安心して休むことも出来まい」と赤の騎士団団長が言つことに白の騎士団団長も頷く。
僕はその有力領主の領地の直前にある箇所を指を刺して聞く。

僕「ここは？」

白の騎士団団長「ここは小さな渓谷ですね」

僕「渓谷？」

白の騎士団団長「ええ、徒歩でも2~3刻も掛からずに抜けることが出来ます。」

僕「幅は？」

白の騎士団団長「そこそこ広さがありますね。馬車がすれ違う程度には」

僕「有力領主の土地に入るにはここを通った方が早い？」

赤の騎士団団長「早いですね。迂回だと一時（約2時間）は掛かります。」

僕「じゃあいいを通りますね」

赤の騎士団団長「通るな。確実に」

僕「では回つ」として待ち受けましょう」

赤の騎士団団長「何？」

僕は地図を指しながら説明する。

国王軍は渓谷に掛かるまでもまだ時間はかかりそうである。
その間に両騎士団には回つこんで渓谷の出口に布陣してもいい。
そして国王軍が渓谷に半ば入った辺りで僕達が国王軍の最後尾に奇襲を掛けるので、出口側から出てきた国王軍を両騎士団で襲つてください。

赤の騎士団団長「面譜十団が出口に行くよつは、分かれて挟んだほうがよいのです？」

僕「いえ、確実を来たして行くには出口に向かへ配置するべしです」

赤の騎士団団長「じつじつだ？」

今の国王軍は予想しなかった大敗で士気が下がっている。

そんな状況では渓谷を抜けたら自分達の勢力圏だという事で気も緩みだすだろう。

そこに背後から敵が迫れば恐怖で「渓谷を抜ければ安全」という幻想に向かつて我先にと入つて行くことが予想される。

その恐怖の一押しには人数はそれ程必要ではない。

僕「精神的に弱っているその恐怖の一押しをするのにはそれ程の人数は必要ありません」

赤の騎士団団長「確かに」

僕「本当に怖いのは出口です。相手は死に死に物狂いで出てきますので」

白の騎士団団長「それでも渓谷に押し入るには少なく無いか?」

僕「すぐには渓谷内の敵には突入しません」

赤の騎士団団長「何?」

僕「狭い渓谷内は逃げ惑う敵で阿鼻叫喚でしょ。危険ですので相手の最後尾がわかる程度の距離を保ち進入します」

白の騎士団団長「それで?」

僕「敵が渓谷を抜けたら『』で攻撃してください」

赤の騎士団団長「それ程多くの『』は持ってきてないが」

僕「構いません。出口の敵を『』で射つて出口を封鎖してください。そつすれば渓谷内で足が止まるでしょう。」

赤の騎士団団長「なるほどな」

白の騎士団団長「中々辛辣な手を思いつきませぬね」

僕「そうですか?『獲物を前に舌なめずりは三流のすることだ』ってとある人が言つてました。その通りだと思います。」

「手加減する余裕も無いですしね」と言つ僕に両騎士団団長が頷く。

僕「そこを今度は僕達が背後から『』を射つてさらりと混乱させます。その後に降伏を勧告します」

白の騎士団団長「今の状態で捕虜を取つても困るだけでは?」

僕「捕虜にしませんよ?大多数は武装解除の後に逃がします」

赤の騎士団団長「なに? 大多数といつ事は、領主などだけ捕まえるのか?」

僕「正確には領主と領主の正規兵の指揮官クラスですね」

白の騎士団団長「それでも500近い人数になるのではないか?」

僕「そうですか。それは多いですね」

赤の騎士団団長「なら領主だけに抑えればよいのではないか?」

僕「出来るだけ兵がまとまる可能性を下げたいんですね」

白の騎士団団長「いつその事全部斬るかい?」

僕「それが楽でいいんですが」

両騎士団団長が黙る。

僕「戦後、民衆を味方につけにはちゃんとした処刑でないとダメだと思つんですね。姫も望まないでしきうし」

赤の騎士団団長「なりだつする?」

僕「いつその事、全部の敵を渓谷に封じ込めまじょうか」

渓谷は出入り口を塞げば逃げ道の無い牢獄になる。

武装解除し武器を取り上げた後に領主と指揮官は騎士団が身柄確保。他の兵士達は渓谷内に監禁する。

僕「ここなら半日くらいで大砦から後発隊が来るでしょう。来たら領主達を受け渡して補給物資を受けて王都へ行きましょう。」

これなら残存兵が王都に逃げ込むのを防ぐことが出来る。
すぐに両騎士団は敵に悟られないように迂回しながら目的地に向かつた。

本隊は敵から少し離れた場所を進み、少數で敵の背後を追尾する。やっと渓谷が見えてきた。

あそこを通過せずに回り込まれると作戦は失敗するのだが、どうやら通過しそうで一安心である。

領主息子「そろそろ行くか？」

僕「いえ、もう少し待ちましょ！」

領主息子「何故？」

僕「渓谷にある程度入らないと、反撃される恐れが高くなります。」

領主息子「なるほど」

僕「ある程度入つたら突撃します。当初の作戦目的は渓谷に敵を押し込める事です。深追いに注意を」

そう言い敵を見る。

まだこちらには気が付いていない。

どの兵士も疲労困憊といつ感じで俯き加減にたまに進んでは立ち止まる繰り返していた。

「そろそろ」そう告げたときに敵兵の一人が何気なくこちらを見ようとするのが見えた。

それを察して「突撃！」と叫ぶと敵の集団に襲い掛かった。

大声を張り上げ半包囲状態で敵に牙をむく。

2000の兵が扇状に突撃していくのだ。

本来そのような事をすれば厚みが減りすぐに包囲を突破されてしまうが、相手は士気が下がり放心している所への襲撃で正常な判断も出来ない。

魔王『まあ、元々正常な判断が出来ていないようだったがな』

我先にと渓谷へ逃げ込もうとする敵兵を背後から斬りつける。

反撃しようとするものなど殆ど居ない。

一方的な虐殺の後に敵が渓谷に逃げ込んだのを確認し停止の号令を掛ける。

隊列を組みなおす。

前から兵士隊長、僕、領主息子、美女さんの部隊の順に各500で

隊列を組む。

領主息子「是非、 我を先発隊に！」

誰が先発にならうが作戦通りに動くのであれば問題は無い。
唯一あるとすれば敵に仕掛けるタイミングを間違えると大打撃を受けかねないという事くらいだが、それも敵が戻つてこようとするタイミングでいいのでもほゞ難しくない。

だが と考える。

先日の夜襲の際の領主息子を思い出すと、任せせるのではなく足を踏む。

状況判断が出来ないわけじゃないが、若干、目の前の前に囚われてる感がある。

領主息子「是非！」

僕「…作戦のタイミングを間違えるといついらが崩れる可能性が高いですよ」

領主息子「理解している」

僕「何があつても敵がこっちに来るまで手を出したらダメですよ？」

領ぐ領主息子に再度念を押し任せせる。

美女さん「大丈夫でしょうか？」

僕「大丈夫だと信じたいです。ただ用心はしておきましょう」

領主息子の部隊が渓谷にゆっくり侵入していく。

渓谷の入り口を僕の部隊を中心に左右に美女さんと兵士隊長の部隊で包囲する。

後は結果を待つだけだ。

程なくして渓谷から伝令が飛んでくる。

確認すると領主息子の軍勢が敵と交戦を始めたそうだ、

僕「交戦? どうしたことだ?」

聞くと領主息子は予定通り敵に近づき過ぎないように渓谷に入つて行つたそうだ。

そして駆軍の最後尾の動向を見張つていたらしいが、その内に敵兵が同士討ちを始めたらしく、それを見ていた領主息子は攻撃を始めたらしい。

美女さんに伝令を送り状況の説明と内部への突入を命じた。
兵士隊長にも状況を知らせる伝令を走らせる。

すぐに美女さんの部隊がいくのを見やつてため息をついた。

兵の集団が飛び出してくる。領主息子の部隊だ。

やはりと言つて何と言つか、かなりの被害が出たようだ。

すぐにはじりに来た領主息子は悔しそうに「申し訳ない」と一言いう。

傷だらけの姿が惨状を物語つている。

ざつと見る限りでは深い傷は無い様だが後方で手当を受けるように指示する。

美女さんの部隊が迫り来る敵を受けながら渓谷から出てきた。

後退する美女さんの部隊が左右に分かれた所に僕と兵士隊長の兵が弓を降らせる。

敵が怯んだところに兵士隊長の部隊が突っ込み、程度敵と交戦する

とすぐに離脱した。

そこに僕の部隊と美女さんの部隊が「」を射かけ僕の部隊が突撃し、兵士隊長と同じくすぐに離脱し敵兵と距離を取る。

その攻撃は敵の勢いを削いだがすぐに渓谷から飛び出してきた。

僕「無理に当たる必要は無い!」

そういうに向かってくる敵に当たる。

正面から受けずに部隊を少し左に寄せて敵の退路を作る。

そこに向かって逃走していく敵を見ながら向かってくる敵だけを倒す。

数刻で敵が方々へ逃走していく。

それを確認した後、すぐに兵を集め被害状況を確認する。

僕と兵士隊長の部隊はそれぞれ合わせて十数名の犠牲者で済んだ。美女さんの部隊は領主息子を逃がした後に敵の猛撃を防ぎながら渓谷を撤退したために20名近い被害が出た。そして領主息子の部隊である。

敵に突っ込みすぎたようで一時は囮まれてしまったようだ。80名近い死者とそれに倍する重傷者を出した。

両騎士団が渓谷を抜けて合流した。

敵が居なくなつたのでおかしいと感じたようだ。状況を説明する。

赤の騎士団団長「何故計画を守らずに突っ込んだのだ?」

領主息子「敵が混乱で同士討ちを始めたので…」

赤の騎士団団長「それで好機だと思つたのか?タイミングが大事だと言われなかつたか?」

領主息子「言われておりました」

赤の騎士団団長「それなのに突っ込んだと?」

領主息子「…はい」

赤の騎士団団長「その結果、敵を逃し味方に損害を与えたのか?」

悔しそうに震える領主息子から視線を外した赤の騎士団団長が今度の方針を聞いてくる。

赤の騎士団団長「どうする?」

白の騎士団団長「捕虜はいないし、先に進みますか?」

僕「ここは一旦戻りましょ」

赤の騎士団団長「何?」

僕「当初の目的では王都まで行く予定でしたが、状況がかわりました」

白の騎士団団長「状況ですか」

僕「大砲から後発部隊が向かってきていると思います」

白の騎士団団長「やすでうね」

僕「本来ならそれを前線で待てばいいのですが、先程多くの敵を取り逃がしました」

赤の騎士団団長「それが補給部隊を襲うと?」

僕「可能性の話ですが」

白の騎士団団長「しかし補給部隊とはいえ護衛の兵もついてますが

？」

僕「そうなんでしょうが、今回は急遽出撃したので準備が整つません。僕達に出来るだけ早く物資を届ける為に隨時出発している状態です。そうなると一隊毎の人数が少ない可能性が高いですね」

白の騎士団団長「確かに」

僕「補給部隊の安全の確保もありますが、敗走する国王軍を一応は壊滅させました。ここは一度大砲に戻つてしつかりと攻城戦の準備をして出たほうが、王都攻略が少しは有利に運べるでしょう」

赤の騎士団団長「そうすると一日から二日程王都へ行くのが遅れるが？」

僕「今更遅れても王都の戦力が大幅に増える事は無いと思います。逆にじちりに降る領主等出てくるのでは無いかと」

白の騎士団団長「確かに、国王軍が一方的にやられて残るは王都のみですしね」

赤の騎士団団長「領主息子の件はどうする？」

領主息子は静かに話を聴いていた。

僕「そうですね。翁に委ねましよう。翁ならまさか命までは取らないでしょ？」

白の騎士団団長「命令違反と独断専行、それによる危機存亡」と。

赤の騎士団団長「その場の現場指揮官による採決で死罪になつてもおかしくないな」

皆の言葉に領主息子が反応した。

そこまでとは考えてなかつたのもかもしれない。

赤の騎士団団長「軍隊における命令違反はそれ程重いものだとやつと気がついたのか?」

領主息子「状況により判断するのはいけないのですか?」

赤の騎士団団長「状況判断を読み間違えて勝手に行動したのがいけないこと言つてこる」

領主息子「それは…今日は結果的にそつなつたのであって、状況的に判断は間違つてなかつたと思ひます」

赤の騎士団団長「そんなこともわからない愚か者なのか…！」

領主息子の言葉に赤の騎士団団長が叫ぶ。

赤の騎士団団長「誰の目から見てもこの結果になる事は予想できるだろつ…」

白の騎士団団長「そうだね。だからこそ最初から作戦を組んでいたんだし。」

領主息子「なぜそれを言えるのですか！」

白の騎士団団長「まず立地。両脇を渓谷に囲まれて逃げ場が無い空間である事」

赤の騎士団団長「そこを襲われたら死に物狂いで逃げようとするに決まっている。しかも片方の出口は我々西騎士団が抑えているのだ。暴発する方は反対側に決まっている」

領主息子「では作戦通りにしても同じ結果だったのでは無いですか！」

赤の騎士団団長が「起きなかつた事について言つのも馬鹿馬鹿しいが」とため息をついて

赤の騎士団団長「暴発が予想されたからこそ近づかずに追撃し、敵が戻る気配を感じたら『』を擊てと言つていたのだ！」

白の騎士団団長「そりすれば敵との距離も保てるし「相手に近づく前に殺される」という事実から気力も削げるからね。そこに投降を呼びかける手はずだつたんだよ」

赤の騎士団団長「どうやらが被害が少ないか想像できるか？」

無言で俯く領主息子。

赤の騎士団団長「若の作戦に誰も異を唱えなかつたのは、それが効果的で味方の損害も少ないと予想されたからだ」

「他に言いたい事があれば大砲で聞こう」そう言つと赤の騎士団団長は「一時的に領主息子の指揮権剥奪が必要でしきう」と僕に言つ。僕は頷いて領主息子の軍勢を美女さんの指揮下に置く事と、領主息子も美女さんの下に付く事を伝えた。

僕「では戻りましょう。今から戻れば夜中には大砲に戻れるでしょうから」

魔王『今回の領主息子の独断は今までの戦果が状況が生んだのかもしないな』

どういう事?

魔王『勝ちすぎなのだ。小砲も、大砲も、防衛線も』

勝ちすぎ……

魔王『本来ならもつと苦労している戦いばかりだ。小砲では騎士団の攻撃は無かつた。大砲は内通者が門を開けた。防衛線は相手が戦を知らない馬鹿だった』

その勝ちすぎて気が緩んでいると?

魔王『緩んでいると詫ひよりは相手を女く見すぎているな』

その結果が無謀な独断専行

魔王『逆にこの程度で済んでよかつたとも言えるな』

もつと酷い状況も予想された?

魔王『それこそ大きな戦で全軍が崩れるくらいの事はあつたかもな
そうなると、この件を氣を引き締める事に利用するしかないね』

魔王『処刑するか?』

それは…したくない

魔王『出来ないのでなく?』

そうだね。出来ないと詫ひてもいいかもしね。命は助けたい。

魔王『甘いな。甘肃ある。いつか痛い日を見るぞ?』

そうかもしね

魔王『かもではない。確実だ』

出来るだけ気をつけるよ。とりあえずほこの件については翁に任せよう。

魔王『責任転嫁では無いか?』

『うるさい言われても仕方ないけど、でもここで斬るのは良くない気がする』

魔王『どうしてだ?』

『面くいえない。ただ斬るのが嫌なだけかもしれないしね』

魔王『ふむ』

それつきり魔王は黙ってしまった。

僕はそつとため息をついて空を仰いだ。

勝ち戦が続いているにも関わらず、気分は敗戦者だった。

第20話 独断専行（後書き）

誤字修正

確実にたして 確実を来たして

杯背後から 背後から

員人数 人数

赤の医師団 赤の騎士団

王都方面) だりうな 王都方面) だらうな

すぐに美女さんの部隊いくのを すぐに美女さんの部隊がいく

のを

第21話 ルール違反

途中で補給部隊を回収しながら夜半（やはん）（〇時頃）に大砦に入る。前もつて状況と帰還を伝えていたので大砦では受け入れ準備が行われていたようだ。

王子と翁と爺が僕達を迎える。

王子「状況はある程度把握しております。領主息子」

領主息子「はい」

王子「処分を検討します。それまで自室で待機を」

領主息子「はい」

領主息子が自室へと2人の兵士を連れて行く。
大砦への帰還の帰路の途中で領主息子と両騎士団を交えて少し話をした。

酷い内容だが領主息子は快くと言つては変だが引き受けてくれた。
翁が「申し訳ない」と頭を下げるのを止めて「その件で処遇にお話をあります」と伝える。

翁はすぐに領ぐと僕と両騎士団団長、美女さんを会議室に案内する。
「食事を作らせておるが?」といづ申し出に「まずはこの話を終わらせてから」と云えた。

翁「領主息子の処遇だが、厳しい処分が必要だとワシは思つてある

王子「翁！？」

翁が処刑もありえると言葉に含むのを王子が止める。

翁「王子、事は反国王軍の士氣に鬱わる問題じゃ。身内だからと甘い処罰では反国王軍の結束を乱しかねん」

赤の騎士団団長「ここで甘い処罰をすると、独断専行をしても許される。結果、戦果を上げればよし、といつ風潮を生みかねない」

白の騎士団団長「その結果、反国王軍は内部から瓦解する」

僕「そうですね。ですがあまり厳しきるのもどうかと思いまーす」

翁「でもそれでは他のものに示しがつかん！」

僕「領主息子はここまで来れた功労者の一人です。その戦功と差し引いてのこじまじょう。」

赤の騎士団団長「それでは周りが納得せんだけ？」

だから厳しく処罰するべきだと言つのだ。

僕「後から来たものより確実に戦功があるのでから、それが無かつた事になるのは厳しいといえると思いますが

白の騎士団団長「それでも、そういう事を理解出来ないものは多いんだよ」

僕「そうですか。では、財産を献上してもらいましょう」

翁「財産だと？」

僕「そうです。領主息子はどれくらい持っていますか？」

翁「領主息子本人のとなると、殆ど無いのではないだろ？」「

僕「では翁と現領主に泣いてもらいつしかありません」

翁「…それで領主息子が助かるなら安いものじゃ」

僕「…じれぐらいが妥当でしょうか？出来ればそいつらの領主ではそうそう出せないぐらいが良いのですが」

翁「そうじやな…領地の年収の半分と領地を幾つか…か

僕「領地の年収は高い方？」

翁「中堅領主なみじやな。有力貴族の4分の1程度じゃ

白の騎士団団長「有力貴族は榨取しますからね」

僕「では土地はいいので年収の2倍としましよう。4年の分割で払つてもらいましょう」

翁「わかつた

僕「本来なら幾つかの土地と翁の領地の年収4倍の財産を没収の所を、今までの戦功を差し引いて年収4倍のみ。その上で領主息子は後方支援部隊への配属を言い渡す。と言つ事でビリビリじょつ

王子「それではもう戦功は立てれませんが?」

僕「そうですね」

王子「厳し過ぎませんか? 領主息子の面子を潰しすぎの氣もします」

白の騎士団団長「すでに領主息子には納得してもらっています

翁「何と?」

僕「今回の件については今までの戦の勝利が起因していると思います」

王子「戦の勝利?」

僕「勝ちすぎました。それも殆どの被害を圧迫すると書かれてござるの」

赤の騎士団団長「それによる楽勝ムードが氣の緩みを生み、相手を低くみるようになつてている可能性がある、と言つ事です」

僕「ですので、今回の件を逆に利用して氣を引き締めます。『翁の所の領主息子ですらミスをすれば罰を受け、今後の功績を立てるチャンスをなくされる』とね

王子「なるほど」

僕「当初から参加をし戦果を上げても独断専行をしたらこれだけの罰を受けるんです」

白の騎士団団長「そうですね。言い方は悪いですが、本来ならそこまでの失敗ではありません。」

赤の騎士団団長「そうだな。兵を無駄に死なせた罪はあるが、本来なら今後の戦で取り戻せ、といつ所だな」

それを分かつていて領主息子に「処刑もありえる」と言い切る赤の騎士団団長も人が悪い。

僕「これは他の領主への警告と、今後降る領主達への警告です」

翁「今後降る?」

僕「今回の防衛と追撃で国王軍に対して圧勝を収めたと言えます。この状況を見たら降る領主もいるでしょう」

王子「それに対する警告とは?」

僕「今まで傍観してた者に対しては、今更来る事に対しての精神的重圧になるでしょう」

白の騎士団団長「一番の功労者である翁一族にもミスに対する処罰

で財産の没収があるんです。今まで傍観していた者は焦るでしょう。最初に『傍観している者には財産没収』と通達しますし

僕「国王軍に付いていたものに対しても財産を差し出せ安くなりますね」

赤の騎士団団長「翁であれだからな。敵対してた者は我が身の命を守るために土地も財産もある程度出すだろう」

僕「そういう事です。領主息子を処刑してしまって、逆に彼らに『今更行つても処刑されるだけかもしれない』という想いを抱かせかねません」

王子「なるほど」

僕「翁と現領主に関しては、戦後の功績で今回の件以上の物を得てもららえればいいでしょ」

王子「そうですね」

僕「そして僕に対する処遇ですが
僕「あなたにもか?」

僕「指揮官としての責任は問いませんと。部下に行わせて」と言つ
のもありますしね

翁「むひ

僕「今までの戦功剥奪と、土地や財産の無い僕には戦後の土地の分

配無し、でこいのでは？」

翁「なんとー？」

僕「元々、土地は貰わない約束ですし、痛くも痒くもないですね」

翁が唸るのを見て笑う。

僕「何かしらの理由を付けて押し付けるつもりだったでしょう。それは行きませんよ」

爺「厳しすぎませんか？」

僕「厳しいくらいがいいんです。その分、良い働きには十分に報いてあげてください。信賞必罰です」

処遇については概ね決まった。

後は出撃の時期だ。

ずっと準備を行っていたお陰で明日の昼には準備が終わるらしい。だが兵に休憩を取らせないとまずい為に出発は明後日以降となつた。

僕「そうだ、王都に降伏勧告を行つてみましょーか？」

爺「何？」

僕「勝手に暴走して処刑されても困るので、王子と有力貴族のトツ

ブの2人の身柄の引渡しと王都の無血開城で他の者の土地と財産の一部を認めると

爺「土地と財産の?」

僕「土地と財産の、です」

翁「馬鹿でもさすがに自分の命に關しては気がつくだらう

僕「では命も助けると言いましょう」

翁「だがヤツラに財産を残したら、また何をしでかすかわからんだ

「ひ

僕「そうですね。ですので戦後に責任を取らせて没収しましょう」

翁「は?」

王子「待ってください。財産は一部認めるのでは?」

僕「はい。王都攻略時の接收は行いません。ですが、戦後の敗戦処理では罪を償う為に差し出してもらいます」

赤の騎士団団長「何と悪辣な…」

白の騎士団団長「言葉遊びではないですか

僕「何か問題が?今の王都にいる顔触れで惜しむ人物でもいますか?」

翁「…おらんな

僕「では良いですか。命は助けるのですから。財産を全て没収されても命が残るだけマシでしょう。それでも財産を残したい人は死んでもうつて遺族に一部財産を渡しましょう」

赤の騎士団団長「一部?」

僕「ええ、女性と子供が一般家庭で1～2年間生きていぐのに困らない程度に渡します。後は前に決めたように土地を耕して生活してもらえばいい」

赤の騎士団団長「男は?」

僕「え? 拒否の場合は全員、処刑されているのでは?」

翁「確かにそうじやが…」

僕「なら考へなくとも良いじゃないですか」

王子「若…急に雰囲気が変わりましたね?」

僕「そうですか? そうかも知れませんね。姫の騎士と決めた時から、この戦は他人事じゃなくなりましたから」

翁「ふむ」

僕「今後、姫に害する可能性がある存在は潰しておきたいんですよ」

「頼りになると云つか恐ろしこと云つか」と呟く翁。

僕「領主達から接収した土地で今回の戦功に応えて、財産で国の復興に当たる。いい事次ぐめじやないですか」

王子「そうなのでしょうか？」

本当の所はそうでもないとは思つ。

でもそれは王子や翁達が戦後の状況を見ながらやつていけば良いこと

思つ。

赤の騎士団団長「無血開城を受けない場合は？」

僕「通常通り王都を攻めるしかないでしょ。投石器を使って外壁一枚壊した後にさらに厳しい条件で再度呼びかけましょ」

赤の騎士団団長「厳しいとは？」

僕「そうですね。身柄の引渡しに有力貴族のトップとその3等身までの男子の身柄の引渡しにしましょ。そしてその他の者は土地は没収で財産の一部と命の保障で。それで受け無い場合は」

翁「場合は？」

僕「城壁をさらに一枚壊してもっと厳しい条件を突きつけます。前の条件に身柄確保は有力貴族の何名かも追加します。これは今の国の要職に付いている人物などで良いでしょ。王達が5名ほど選ん

でぐださい

翁「わかつた」

僕「そして他の者は財産を全て没収。これに応じない場合は以後の降伏は受け入れないものとして女子供も含めた一族郎党処刑」

僕の物言いに一同言葉を無くす。
それを見て僕は笑いながら言つ。

僕「これまで言えば相手も折れると見込んでの事です。別に女性や子供を殺したいとは思つてません」

王子「よかつた…」

僕「でも仕方ない場合は処刑しかありませんけどね」

王子「……」

僕「王子、僕は姫との約束で命を守れる人は守ると言いました。でもそれは『守れる人』です。相手がそれを拒否した場合は仕方ありません。」

王子を真っ直ぐ見る。

僕「戦の旗頭として、王族として決断しなければならない時もあり

ます。その時に躊躇した結果、大切な人や多くの者が死ぬかもしれません。」

王子「国の為に多少の犠牲は仕方ないと?」

僕「仕方ないと言つのではなく、やるんです。時間を掛ける余裕があり、全員助けるいい方法があるらなそれを選べばいいだけです。戦後、貴方が国を背負うのでしょうか?」

王子「僕が…」

あれ?違つの?

てつきり王子が国王になると思つて居たので翁に聞く。

僕「戦後は王子が国王になるのでは?」

翁「そうですね」

王子「そんな!第3王子を差し置いて僕なんかが!」

僕「その第3王子が国を荒廃させたんですね」

王子「それは周りの有力貴族が…」

翁「それでは国民は納得しません」

王子「では第3王子はどうなるのですか!?」

他の者と一緒に処刑されると思ったのかもしれない。
王子が顔を真っ青にして叫ぶ。

僕「通常は退位の後に幽閉でしょ?」

翁「そうじやな。国王であった者を処刑はできぬ。生涯幽閉となる
じやうひゅうじやん

王子「そんな…

僕「王子が国王にならない方法がありますよ?」

王子「それは…?」

僕「姫に押し付けるのです

王子「え?」

僕「姫に押し付けなさい。そして姫には他国から婿を貰えれば国同
士のつながりも強化でき! 石鳥です」

王子「そんな事は出来ません!」

僕「何故ですか?」

王子「つー」

僕「王子は王にならなくてはいけないと言つた。でも姫が婿を取つて国を治めるのは出来ないと言つ。」

王子「……」

僕「ならいつその事、反国王軍は解散しましょうか」

王子「なんで……」

僕「戦後に誰も治めない国よりは悪政でも今の方がマシでしょう。我々の大儀も無くなりますし」

皆は僕と王子のやり取りを見守る。

翁「他にも方法はあるがな

弦く翁に皆の視線が集まる。

王子「どういう方法ですか?」

翁「若が姫と婚姻を結べばよい」

何を言つてゐるんだこの爺さんは?

まじめな話をしてゐる状況でそんな茶化す事を言つとは!

爺が「おお」と慌てながら手を打つ。

王子「それだ！」

それだけじゃないよ！

僕「何を言つてるんですか。この国の人間でもなく何処の誰かも分からぬ者を王位に付けてどうするんですか」

翁「それはそれ。今回の戦での最大の功労者はお主であらわ。姫の危機を助けたしな」

僕「それならずっと守つてた爺が上でしょう！」

爺「それでも今までの勝利は全て若の作戦のお陰ですからな」

僕「周りが認めませんよ」

翁「そうでもない。『姫の騎士』として十分に名が知れ渡つてある

王子「頼る先も無い姫の窮地に駆けつけその身を守り通し、軍勢を集め今までの勝利の立役者として認知されてますね」

僕「何で昨日の今日でそんな通り名が通つてるんですか！」

翁「戦後に『姫の騎士』の立場を確立する為にと思い、触れて回ったのじゃ。まさかこうも役に立つとは」

呆然と翁と王子と姫を見る。

何でこの人達はこんなに笑っているんだらう。

僕「…姫を政治の道具にするのは感心できません」

翁「先程、お主は『他国から姫を取れ』と言つていたではないか」

僕「それは王子に発破を掛ける為の方便です。もしその方向に動いたら、そんな事が無いように動くつもりでした」

翁「それは何故じゃ？」

僕「政略結婚などさせられません！」

翁「おかしな事を言つ。王族の結婚は政略結婚が基本じゃ。貴族間ですら似たようなものぞ？」

棒「姫には笑顔でいて欲しいのです。姫の意に沿わない結婚はさせません」

翁「意に沿えばよいのか？」

翁が邪悪に（というしか形容が無い顔で）笑う。

姫は「國のため」と言われば受けるだらう。

それくらいに責任と優しさの溢れた人だ。

僕「姫なら自分の気持ちを押し殺して受ける可能性が高い」

翁「そう思つなら何故、お主が娶むとひつとしない?」

僕「だから姫の意に沿わない事をさせたくないと言つてゐるでしょ
う」

翁「意に沿えればいいのじやな?」

僕「丸め込むのは無しですよー。それじや意味が無い」

翁の笑顔の裏にあるものが読み取れない。

だが決して良いものではないような気がして必死で翁の道を塞ぐよう言葉を紡ぐ。

元々、なんでこんな話になつたのだろう?

魔王『気がついていないのはお主だけだ』

何か分かつてるなら教えてくれ!

魔王『……』

魔王!

僕と翁が言い合つてると赤の騎士団長が「まさか」と呟く

赤の騎士団長「まさか本氣でそこまで姫の気持ちに気がついて無

いだと？」

部屋が静かになる。

赤の騎士団団長の方を見ると横で白の騎士団団長が「あぢや～」といつ感じで顔を抑えていた。

僕「はい？」

赤の騎士団団長「本気で姫の好意に気が付いていないのか?と聞いてる」

そつこつ赤の騎士団団長を白の騎士団団長が押さえつけた。

赤の騎士団団長「何をする。一度けやんと確認したいと思つていたんだー皆もそつぱりあらひつーーー」

白の騎士団団長「例えそつぱりも、直接聞くのはルール違反ですーーー」

赤の騎士団団長「何故だー面倒なのは好かぬー」

白の騎士団団長「それでもこの場合はルール違反です。もし貴方が自分の気持ちを他人に勝手に言われたらどう思いますか!」

赤の騎士団団長が「ひ、つむ…やつか」と黙つて席に座る。

姫が好意？誰に？

理解が及ばない。

白の騎士団団長「本当に申し訳ありません。こうこう形でお伝えするには不本意ですが、こうなつては仕方ありません。貴方の意見をお聞かせ願いたい」

僕「え、あ、その…赤の騎士団団長の勘違いでは？」

何か言おうとする赤の騎士団団長を手で制して言葉を繋ぐ

白の騎士団団長「そんな事はありません。みんなそのように認識しております。気がついていないのは貴方だけだ」

白の騎士団団長の言葉に周りを見る。

王も爺も王子も僕が見ると頷く。

視線を彷徨わせて美女さんに縋る様に見ると笑顔で口を開いた。

美女さん「気がついていないのは若じ本人だけですよ

魔王『ちなみに我も気がついていたが？』

ええええええええええ

いきなりの展開（おぬしの中だけでな）に僕はどうしていいか分からなかつた。

第21話 ルール違反（後書き）

赤の騎士団団長がやつてくれました。

こんな方法で姫の気持ちに気が付く予定ではなかつたのですが、若が朴念仁を通り越して植物に成らないように考えたらこのタイミングとなりました。

丁度いい汚れ役もいましたし。いい意味で！

話は元の予定を大幅に超えて行つてます。
何処へ向かうのでしょうか？

そろそろタイトルも決めたいのに何も思いつかない。
終わるまでに決まると…いいね。

誤字修正

戦功に答えて	戦功に応えて
菜穴井方法がありますよ	ならない方法がありますよ
面倒なの好かぬ	面倒なのは好かぬ

一部、王子のセリフが僕になっていた部分を修正

第22話 告白

あのまま王都に攻め込んでいたほうが良かったかもしない。

魔王『まあ先延ばしにするだけだがな』

急に出てきた新事実（と僕だけ思つてゐる内容）に僕は困惑していった。

僕「でもそれは、皆がそう思つてゐるだけでは？」

美女さん「そんな事はありません」

僕「何故そういう思つの？」

美女さん「今までの若の行動や言動に対する姫様の反応を見てれば

美女さん「言つてもよろしいのですか？」

よろしく無い！

せつこづ間もなく美女さんが今までの出来事を上げる。

翁に会つた後に迎えに言つた時の事、王の館までの道中、翁の館での事、小砦での姫との話、大砦から迎えにいった時の姫の態度、大

皆での僕の忠誠を誓ったときの事。

次々に出てくる内容に他の面々が「ほほう」と頷く。

殺せ！ いつそ一思いに殺せ！ ！

あまりの恥ずかしさに悶死しそうになる僕。

美女さん「などと、この状況を総合する限り、事実ですね」

美女さんが話を締めた。

僕は顔を真っ赤にして死に体である。

翁「でじゃ、先程の話に戻る」

翁が後をついて続ける。

翁「王位は王子が付くのが順当なのでそれは変わらないとしても、姫と婚姻を結ぶ気は無いか？」

僕はあまりの事に口をパクパクするしかない。

婚姻？僕が？姫と？

冗談にもほどがある。

しかも僕は魔族だし

魔王『魔族も人族も元は同じ種族だと言つただろう。子をなす事も出来るぞ?』

KO!

魔王『まあ我には元々婚約者と呼ばれるものが何人かあるしな。人くらい増えても問題なかろう』

混乱した僕に魔王が更なる爆弾を落とす。

「んやくしゃ？！」

魔王『馬鹿っぽいだ。その言い方』

聞いてないよ！

魔王『言つて無いな』

大事な事なら言わないと…！

魔王『とはいって、王族として宛がわれただけであつた事もない者ばかりだぞ？行方不明になつて大分立つ。今頃破棄されているだろうよ。』

そ、そつか

魔王『それに魔族は一夫多妻制だ。問題ない！』

大アリだよ！

魔王の衝撃の発言に突っ込むのが必死で僕は黙り込む。
まあ唯単に現実から逃げているとも言つけど。

翁「どうなのじや？」

現実そうそう逃がしてくれない。
逃げられないのは魔王からだけじゃないんだ。

僕「少し 考える時間を下さい」

翁「そもそも言つてられんのだが」

僕「今のままの気持ちでは拒否以外ありません」

翁「ふむ では明日の夜まで待とつ」

やつ言つと話は終了した。

僕は茫然自失となりながらも美女さん曰く「話があります」と言つと
部屋に戻った。

部屋で美女さんと向かい合ひ。

僕「どうしまじゅう

美女さん「若がお決めになる事かと」

僕「姫が その、アレなのは間違いないんですか?」

美女さん「そうですね」

僕「魔王に婚約者が居る事は知っていますか?」

美女さん「そうなのですか?でも居てもおかしく無いですね」

知つてるとばかり思つていたが、意外と知らないらしい。

不思議に思つていると「私は若の従者となつて日が浅いので」と言った。

長寿の魔族の「日が浅い」がどれ程の物か分からないうが、とりあえず知らないらしいので簡単に説明した。

美女さん「なるほど。でもそれがどうしました?」

僕「え?」

美女さん「別に実際に妻が居る訳では無いでしょう。それに魔族は一夫多妻制ですし」

美女さんまで!

美女さん「問題は他にあると思ひますが?」

僕「……」

美女さん「まづは若の気持ちです」

僕「それは」

美女さん「少なくとも好意は持つているでしょ?。程度の差はあれど」

僕は考えて頷ぐ。

美女さん「それが姫を愛おしいと呼べる感情かをゆつくりとお考え下さい」

僕「うん」

美女さん「そして最大の問題は、魔族といつことです。」

僕「……」

美女さん「魔族と人族は突き詰めれば同じです。結婚も子をなす事も可能でしょう。ですが王族との婚姻となれば問題は山積みとなります」

「しつかりと考えて答えを出してください」と言いつと席を立つ。何処に行くのかと尋ねたら「姫が気になります。この事が耳に入る前に私から説明したいと思います」と言い部屋を出て行つた。

姫をどう思つか
か。

魔王『好意を抱いているのだろう』

そうだね。今までは友人としてだつたつもりだけど、考えてみるとそれ以上の気持ちを無理やり「友人」として抑えていたかもれない。

魔王『なら悩む事もあるまい』

でも

魔王『魔族の事か?』

それもあるけど、それは姫や周りの人間に話をするしかないと思ひ。

魔王『ではなんだ?』

もし一回で姫を受け入れたら、魔王のやるべき事の支障になるかもしれない。

魔王『……』

当初、魔王は剣もろくに使えない僕に「こんな事では魔王になれないぞ!」とか「他の魔王に勝てない」と言つていた。
それがいつの間にか言わなくなっているのは、魔王の優しさだと思う。

だがその優しさにこいつまでも甘えているわけには行かない。

魔王『魔族の争いは最終的に勝てばよいのだ。何十年も戦つなど良くあることだ』

そんな事を言つ魔王。

そんな魔王に「ありがとう」と言つと『べ、別にお主の為を思つて
いる訳じゃないからな!』とシンデレ発言した。

精神が2つある影響が悪い方向に出ている気がする。

この問題も早く何とかしないといけないのかも知れない。

どれくらい時間がたつただろうか。

疲れているのに意識が冴えて眠れず魔王と話をしていると、明け方頃に部屋の扉がノックされた。

返事をすると「よろしいでじょうか?」と美女さんが声を掛けた。

僕「起きてますよ」

美女さん「そうですか。よければ姫様とお話なさいますか?」

こんな明け方まで姫が起きていた事にビックリだ。

美女さん「姫様も若に気持ちを知られた事に対して動搖しておいでしたが、今は落ち着かれました。お話しするなら早い方が良いかと思われますが?」

僕「そうですね。」

僕は頷い美女さんに言つ。

僕「魔族の事も伝えようと思います。その後、王子や翁にも。場合

によつては今日中にここを出る事になるかもしません。妖精少女の安全の確保をお願いします」

美女さん「分かりました。一緒に居るよつります」

そういうと美女さんは僕を促して部屋を出ると廊下を渡り姫の部屋をノックする。

中から「どうぞ」という姫の声がして美女さんは姫の部屋の扉を開ける。

美女さん「失礼します。若をお連れしました」

その言葉に椅子に座る姫が身を硬くする。

僕も逃げたい気持ちを押し殺して姫の部屋に入る。

美女さん「さすがに未婚の女性の部屋に早朝とはいまだ夜も空けていない状態で男性と2人には出来ませんので、私も控える事になりますがよろしいですか?」

姫「お願いします」

美女さん「妖精少女、こちらへ」

子狼と戯れていた妖精少女を呼んだ美女さんは妖精少女をベッドの端に座らせるとその傍らに立つた。

僕と姫は無言で向き合つ。

目も合わせる事が出来ない。

それを見かねた美女さんが「このままだと何も話が出来ないまま誰かが来てしましますよ?」と言つ。

僕「え、あの、その、聞きました

姫「っ…」

僕「正直な気持ちを言つて感つてます」

僕の言葉に姫が震える。

僕「でもうれしい気持ち一杯なのは確かです。」

姫が顔を上げる。

僕「僕は今まで姫を友人だと思つて接して来てました。」

姫「……」

僕「でも姫の気持ちを聞いて、そつじゃないと初めて理解しました」

出来るだけ姫に僕の気持ちが伝わるよつに言葉を選ぶ。

僕「姫と僕の立場の違いを知っていたので、知らず知らずの間に『友人以上の好意を抱いてはダメだ』と思うようになつてありました」

僕の言葉を必死の面持ちで聞く姫。

僕「僕達の立場の違いが何を指すかご存知ですか?」

姫「私がこの国の姫という事ですか?」

僕「それも一つです。だがそれくらいなら何とも思いません」

姫「…やらねばならない事がある、という件ですか?」

僕「そうですね。それが大きいし、それに起因する事なのです」

姫「それは」

姫の問いに一瞬、言ことよどむもしつかりと姫を見て言つ。

僕「僕は魔族です」

姫「つ！！」

僕「僕は魔族であり、やるべき事と言つるのは魔族の土地での王位継承争いです」

姫は僕の言葉に何も言わない。

僕「魔族なんです。魔族も人族も元々は一つだったと言つたのは覚えてますか？」

頷く姫。

僕「それでもこの2つは分かれて長い時がたちました」

姫は僕を凝視している。

僕「その間に生まれた魔族と人族の心の溝は小さいものではない」

そう、何百年と争ってきた。

決して昨日今日の出来事ではない。

僕「本当は黙つたまま去るつもりでした。」

僕の言葉に姫が口を開きかけるが何も言わない。

僕「でもそれでは姫に不誠実だと思つたのでお話をしました」

姫が痛いほど見つめてくる。

僕「僕は魔族です。でも姫の事を愛としつつていう事も事実です」

姫「つ

僕「僕が誓つた姫の笑顔を守りたいといつ氣持ちにも一切の偽りはありません」

話し終えた後に冷えの言葉を待つ。

無言に耐え切れず、「もし許されるなら」と僕は言つ。

僕「王都攻略までいる事を許してもらえないでしょうか?」

姫「！」

僕「僕は王都攻略後は戦の中で戦死した事にして国を出ます。もし
それもダメなら今すぐここを出て行こうかと思ひます

そういうった後は何もいうことが無くなり黙り込む。
どれくらい沈黙していただろうか。

姫が何か呟いた。

姫「。

よく聞こえなかつた僕は姫の言葉に必死で耳を傾ける。

姫「 そんな事は関係ありません

姫の言葉を待つ。

姫「私は若が 好きなのです。魔族とか関係ありません

顔を真っ赤にしながらもそういう姫に「ありがとう」と僕は言ひつ。

姫「それに 人族と魔族はむ、結ばれないとか、そういう事はない
のですよね?」

美女さん「人族と魔族の夫婦は居ますよ。珍しいだけで」

姫「それなら」

美女さん「子も為せますしね。」

その言葉に顔を真っ赤にする姫。

「今言わなくともいいじゃない！」と美女さんを見ると微笑んで言った。

美女さん「でもお伝えしましたが、お一人の婚姻を望む声は出でおりま

僕「そうだけど、するかしないかはまだ分からぬよー。」

そういう僕に姫が顔を挙げ「私はー！」と言つとさうに顔を真っ赤にして俯いた。

姫「私はそう、望んでいます」

姫のストレートな言い方に死にそうになる。

僕「え、あ、その、それは」

姫「それは？」

何かが吹つ切れたのか姫が顔を真っ赤に聞いてくる。

僕「やるべき事もあるので、それが全て終わってから話しあひと言
う事でいいでしょうか?」

姫「どれくらいかかりますか?」

僕「えと」

美女さん「数十年はかかるかと」

美女さんの言葉に絶句する姫。

そしてそのまま固まつて涙をこぼしだした。

美女さん「泣かせましたね」

僕「美女さんの言葉でどう一」

美女さん「でも嘘は申しておつけません。空手形で逃げよつとした若
の所為です」

やつ言わると辛い。

僕「姫…決してそのようなつもつでは

姫「では、どうして」

僕「それは、いつ帰るか分からぬ状況で姫と婚姻を結ぶ事は出来ず、かといって連れて行くことは出来ないと思い」

姫「かまいません!」

僕「そういう風に　はい?」

姫「それでも構いません。足手まといなうじで待ちます」

そういうと姫は一生懸命語りだした。
恥ずかしいので割愛するけど、とりあえず僕を好いてくれているようだ。

恥ずかしさに死にそう。

姫「ですので、私を」

そういうと姫は真っ赤になつて俯いてしまった。

それを見て僕は色々考える。

「どうするのがいいのか?」などといつ事から「可愛いなあ」という事まで。

1・9の割合で『馬鹿だな』否定できない

魔王は僕が姫と結婚してもいいの?

魔王『そうだな。特に問題は無いな』

そり、なの？

魔王『お主は我で、我はお主だからな。問題ない』

魔王の存在も話したいんだけど

魔王『お主がそう判断したならよしだろう』

そりか

僕は姿勢を正すと姫に話しかけた。

僕「姫」

姫「はい」

僕「もう一つ伝えないといけない事があります」

僕は自分が別の世界で生まれて理由は分からぬがこの世界に来た。
その時にこれも理由は不明だがこの世界の魔王の体に入り込んだ事。
そしてその魔王は僕の意識の中で残っている事を伝えた。

姫「その…魔王さんは今もいるんですか？」

僕「います」

姫「その…今の姿は魔王さんの姿なんですか?」

僕「良く分かりません。僕はこの体を僕の…元の世界と同じ体だと認識します。ただ魔王も同じように自分の体だと認識している様です」

姫「よくわかりませんね」

僕「僕もわかりません。ただもとの世界と姿がたちが変わっているわけでは無いですね」

姫「…」

僕「これが僕の真実です」

姫「…私に剣を捧げてくれたのは若ですか?」

僕「僕です。魔王は意識は残つてますが行動に影響を及ぼす事は出来ません」

姫「…そうですか」

僕「この事を知っているのは美女さんと姫だけです。妖精少女にもまだ話してませんし、王子達には魔王の事は言つつもりはありません」

姫が僕を見つめる。

僕「これを聞いて姫が僕の事を嫌いになつたのなら今までの話はなかつた事にしましよう。できれば魔王の事を黙つて置いていただけると有難いです」

姫「誰にも……いいません」

僕「ありがとうございます」

そう言つと互いに黙り込んでしまつた。

どれくらいそのままだつただろうか？

体感では長い時間だつたが、実際は一瞬だつたのかもしれない。

姫が「今度、魔王さんの話も聞かせてもらひえますか？」と言つた。

姫「若是若です。私は今の若をす、好きになつたんです」

顔を真っ赤にする姫に僕は感動すら覚える。

純粹に好意を寄せられた事が嬉しい。

僕「では婚姻というか婚約、という事でいいでしょつか？」

姫「つはい！」

僕「王子や翁には魔王の事は言ひませんが魔族である事を伝えます。

L

姫
「

僕「そこで反対されたら婚姻はダメになると思うてください。」

姫がそれを聞いて泣きそうになる
泣いて欲しくなんか無いのに。

僕「だからそうなると、姉には選んでもらう事になります」

姫「え？」

「僕か國か僕かを」

姫が息を呑む。

国を選べば僕と分かれる事になり、僕を選べば国を捨てる事になる。どちらにしろ辛い選択を迫る事になる。

姫「わかりました。でも受け入れられる可能性もあります」

僕「そうですね。そうなった場合は、僕はいつかやるべき事の為に
国を出る事になります」

姫「！」

魔王『まあ、行きっぱなしも無いだろ？し、数ヶ月出て戻って、また数ヶ月という感じも出来るがな』

「ううなのー！？」

魔王『移動手段はあるのだ。出来ない事ではない』

再度涙を浮かべる姫にあわてて言つ。

僕「でも向こうに行きっぱなし出はなく、数ヶ月に一度は戻ってきたりしますー」

それを聞いて姫が少しほっとする。

「それでも数ヶ月は離れ離れで心配です」という姫は本当に可愛い。

僕「僕が魔族の王になつたら姫を迎えに上がる事になります」

杯「はい！」

僕と姫が見詰め合つ。

美女さん「まともってよかつたですが、まだ言つべき事がありますよ？」

僕「え？」

美女さん「婚約者です」

僕「あ！」

その言葉に姫が「婚約者？」と聞いてくる。

僕「僕も魔族の王族なので婚約者候補が何人も居ます。」

美女さん「殆どが面識の無い方々ばかりで、若が行方不明になつて半年以上経つておりますので、破棄されている可能性は高いですね」

僕「そ、そうです」

美女さん「でも魔族は一夫多妻制ですので、姫様と婚姻されても政略的に複数の別の姫君とも婚姻関係を結ぶ事があります。その事は最初にご了承ください」

「そうなの！？」

魔王『それは魔王だから仕方あるまい。』

姫はその事に驚いているようではじめてしまった。

沈黙が部屋を満たす中、「私もお兄ちゃんのお嫁さんになるー」と妖精少女が元気に言つ。

それを美女さんが笑顔で頭を撫でながら「それはいいですね」と笑う。

いいのか！？

魔王『まあ妖精族とも子は為せるだろ？』

ええええええええ

魔王『何を驚く、たいていの種族となら出来るぞ？』

わざわざ人族と魔族は元の種族とか説明要らなかつたのでは！？

魔王『いらんな』

じゃあ何故！

魔王『しかし、そういう説明があつたほうが踏ん切りがつくだろ？
実際ついただろ？』

その通り過ぎて魔王の言葉に言つ事が無くなる。
僕が黙つていると姫が少し笑つて言つた。

姫「そうね。妖精少女なら、妖精少女と美女さんなら私は大丈夫」

姫！？何で美女さんまで！？

「あら私もよろしいので？」と笑う美女さん。

「冗談にしても恐ろしい未来である。

姫「ええ、他の 婚約者の方達は分かりません。想像もつきません」

僕「……（茫然自失）」

姫「でも、王族の義務として子を為す為に妾を囲う事があるのは私も知っています。そういうものだと割り切れます」

意外と言つが何というか、驚いている僕をよそに「それでこそ魔王の妻です」と美女さんが笑った。

「これでお兄ちゃんと姫お姉ちゃんとずっと一緒に居れるね」と笑いながら姫に飛びつく妖精少女の頭を撫でながら「そうね」という姫。

何このハーレム

魔王『爆ぜり?^は』

いやだよー

魔王『冗談はさて置き、ここへ来てよかつたのでは?』

やつ、なのかな?

魔王『まあ婚約者の方も、本当にたいていの者はもつ破棄していると思うので大丈夫だ』

そ、そつか

魔王『危険なのは数人だ！』

え？

魔王『まあがんばれ！』

『冗談だよね？

魔王『ソウダネ』

茶化さないで真剣に答えて…！

魔王『まあ、危険と言うか、まだ婚約を守つてそうのが一人一人いる可能性があるだけだ。それ程たいした事にはならんさ』

ああああ、なんかフラグつぽくて嫌だ！

魔王『死亡フラグだな』

死ぬのは嫌だ…！

心の中で魔王と漫才をしていたら美女さんに声を掛けられる。

美女さん「で、王子様達にはこう話しますか？」

忘れては無いけど、逃げてた。
そつか、早く話さないとダメだね。

僕「今から話そう

姫「若…」

僕「王子と翁と爺と話す機会を作つてください。」

美女さんに言つと少し考えて答えた。

美女さん「姫様がよろしければ、姫様のお部屋にお呼びしてお話するのはどうでしよう?」

僕・姫「え?」

美女さん「ここなら邪魔者は入りません。その場で姫様のお気持ちもお伝えできます」

姫「そう、ですね。」

僕「いいの?」

姫「はい」

「よりしきお願ひします」と姫が言ひと美女さんは一礼してすぐで
部屋を出て行った。

緊張で互いに言葉を無くす僕と姫。

2人きつって何を話せばいいんだ?

魔王『2人だけじゃないがな』

確かに魔王は居るけど…

魔王『そりではない』

え?

そうじつとこきなり「何で何も言わないの?」といつ声が聞こえて
きた。

その声にハックリして妖精少女を見る。

妖精少女の存在を忘れてた!

魔王『おろかな』

自分の愚かしさに笑いそうになつて姫を見たら、どうやら姫も同じ

だつたようでお互いに顔を見合させて笑つた。

妖精少女が良く分かつてない感じだが僕達が笑つているのがうれしいのか一緒に笑つてる。

「ずっと一緒に居られるのがうれしい！」という妖精少女を優しい笑顔で撫でる姫を見ながら「妖精少女を娶るとかは想像つかないけど、養女にするのはいいかも」と勝手な事を考えていた。

第22話 告白（後書き）

予想外の展開で姫と若が心を通わせました。
姫おめでとう。

話が一段落したら後書きにて、当初の予定とどう違つかが後書きに
でもちよこつと書けたらと思つてます。

ここから当面「爆ぜろー」と言つ場面が続きます。
こういう話を求めてなかつた方、すみません。
本当にすみません。

文字修正

王族そして 王族として

姫が生きていた事に 姫が起きていた事に

魔賊 魔賊

2里には 2人には

姫「そえは」 姫「それは」

半年以上立つて 半年以上経つて

黙っている 黙つている

以外と言うか何というか 意外と言つか何というか

話し機会 話す機会

第23話 公開処刑

僕の話を聞いた王子と翁と爺は無言で僕を見ている。

翁「姫は何と？」

姫「それでも若と居たいです」

しつかりと答える姫。

顔が真っ赤なのは愛嬌だと思つるのは惚れた弱みなのだろうか？

翁「王子はどう思われますか？」

問われた王子は我に返り考え出す。

王子「魔族も人族も元は一緒の種族なんですよね。なら王族同士の婚姻と言つだけなのでは？」

翁「しかしそまだ王位をついではおりません」

王子「それを言つなら僕も姫姉さまもです」

翁「しかしその事はもう田の前まで来ております」

王子「その立役者が若です」

その言葉に翁が黙る。

王子「関係ないのに何の打算もなく手を貸してくれました」

翁「打算が無かつたといえますか?」

王子「今ならせつめいと聞えます」

翁「それは」

王子「まず第一に地位や土地を求めるいばかりか拒絶していた事。これは自分が魔族である事を差し引いても、やつこつ事に欲が無いと判断できます」

翁「……」

王子「それに姫に無条件で剣を捧げた事。王族である身でそんな事をするのは危険にもかかわらず、です。僕は若を支持します」

翁「…翁は」

爺「支持」

翁「早ーもう少し考へいー」

爺「私は既より少し長く若を見ていた。その中で姫を任せれる御仁

と判断した

田の前で繰り広げられる僕への賛辞に、これは公開処刑なのでは無いかと思わざるを得ない。何でこうなつた。

王予「それに王族同士の婚姻は両国を縛びつけん事となつますしね。」

そう笑い王予。

爺「して、聞いてばかりの縛めじつゝのじや？」

翁「…ワシも賛成じや」

その言葉に姫が「…」と聞き取れないが轟びの轟のよつたものを出す。

爺「賛成なら良いではないか」

翁「一人くらい反対意見を出すものが居ないと議論にならん…」

爺「面倒くせこのわ」

爺が翁を茶化して笑うという不思議な光景を見る。

えっと、こんな簡単でいいの？

「まだお伝えする事が」といつ美女さんの言葉に僕は婚約者の話もする。

翁「まあ王族なら仕方あるまい」

爺「そうですな。姫が第一王妃となるなら問題は無いです」

そういう2人に妖精少女が「私もだよ！」と笑う。

「は？」という2人に美女さんが笑顔で答えた。

美女さん「姫様のお許しを得て妖精少女は第2王妃になりました」

王子・翁・爺「「「は？」」」

美女さん「言葉の意味の通りです」

頷く姫が「美女さんが第3王妃です」と言つと3人は動かなくなつた。

「ねー」と言い合つ姫と妖精少女。

美女さんは「そういう事になりました」と笑顔で答える。

僕「冗談ですかね」

僕の言葉に3人が息を吹き返す。

「危うく死ぬかと思つたわい」という翁に「冗談では言つてません」と姫が爆弾を落とす。

姫「ありえる未来です。」

王子「姫姉さまはそれでよろしいので?」

姫「はい。妖精少女と本当の家族になれるんです。うれしい以外の気持ちはありません」

王子「はあ…」

「もちろん、美女さんともです!」と力説する姫に笑顔で「ありがとうございます」と言つ美女さん。

なんだこのカオス

魔王『おぬしが要因だな』

でも原因は違うよね!

魔王『もつ嫁に板ばさみか』

それも何か違う

翁「ヒ、とつあえず姫との婚姻は問題なこと言つ」
「じやな」

翁が話を纏めに掛かる。

王位継承争いで年に何ヶ月か留守にする事も伝えている。

「まあ王位は王子が継ぐから問題ないじやん」
とこいつ翁に王子が
何か言いたそうにしていた。

もしかして王位をこひらに押し付けるつもりだったのか？

正式な婚姻はすぐには無理だ。

だからとつあえずはこの戦が終わつた後に婚姻を発表する事に決まつた。

話も終わつ皆で部屋を出て行つとした時に「そうこいえば」と美女さんが言つた。

「腕の紐の本当の意味を知つてますか？」と。

僕「本当の意味？」

美女さん「桃色は姫のファンが付けている色です」

僕「え？」

美女さん「黒は若のファンです」

僕「え、だつて、幸運とか無事とか」

美女さん「ああ、あれは嘘です。」

僕「は？」

美女さんを見ると「嘘です」と笑顔で再度言った。

姫を見ると真っ赤になり俯いている。

その腕に黒い紐があるのを見て、桃色の紐を進めたのが姫だと思い出し、本当の意味で理解する。

顔が熱い。

そんな僕を笑顔で見やり「ではそろそろお休みになれますか？」

美女さんが僕に言つ。

美女さん「若は戦続きで二二日程寝て無いでしょ？し、姫も昨日から一睡もして無いでしょう」

確かに寝てないかも知れない。

気が高ぶって気がつかなかつただけで物凄く眠いのかも知れない。

美女さん「それとも皆さんと食事にしますか？」

それはなんだか恥ずかしいのでとりあえず少し時間が欲しい。
そして眠い。

美女さん「お一人で寝ますか?」

その言葉に皆固まる。

妖精少女だけが「じゃあ私も一緒に寝る!」と元気に言つてゐる。

僕「は、はは、ははは、び、美女さんは面白い事を言つな」

無理やつせうじつと「とつあえず毎まで寝ます」と言つと姫の部屋を出て一人で部屋に戻つた。

魔王『一緒に寝ればよから』

出来ないよ!

魔王『何故だ?』

つ!

魔王『もつ夫婦のようなものだらう。何をためらつ

色々あるんだよ!』

魔王『へたれめ』

「めんねー！」

もう眠たいせいか良くなくなってしまった。
ベッドに倒れ込むように

田を覚ます。

田差しが高いのが分かるがまだ眠たくて起きずにはじめる。

魔王『田覚めたか？』

あ、うん

魔王『そつか』

何か変な夢

魔王『夢じやないんだがな』

魔王の言葉に覚醒する。

夢じや、ない

魔王『無いな』

姫との婚約も？

魔王『現実だ』

魔族と伝えた事も

魔王『全部現実だ。魔王だと云ひ事も伝えたのも全部現実だ』

それじゃ…

魔王『妖精少女と美女を嫁にするのも現実だ』

つ！

魔王『その上、この世の女全ては俺のものだ…』と云んだのも全て
夢じやない』

それは嘘だよね…

魔王『覚えて…無いだと…』

え？ どうした事？ 本当にそんな事言つたの？

昨日の出来事を必死で思い出す、

やつぱつ言つて無いよね！ ！

魔王『だが妖精少女と美女を嫁にするのは現実だ』

え？ あれは皆の「冗談だと思ひよ？ 」

魔王『そつだと良いな』

え？ ええ？

その時部屋の扉がノックされる。
「エヘン」と言つと美女さんが「お食事をお持ちしました」と入つて来た。

テーブルに並べられる食事を見ながら美女さんを盗み見る。

魔王が変なことを言つから意識しちゃつたじゃないか！

魔王『そん事は知らん』

美女さん「どうかしましたか？」

僕「いえ…」

美女さん「それとも食べさせて欲しいのでしょうか？」

僕「は？」

美女さん「第3王妃として『あーん』とかした方がいいのでしょうか？」

僕「び、美女さん…？」

「冗談です」と笑う美女さん。
心臓に悪い。

美女さん「それは第一王妃である姫様が一番最初にするべきですか
らね」

美女さんの物言いにガックリと肩を落とす。

僕「美女さんまだその冗談に乗るんですか？」

美女さん「と言ひつ？」

僕「別にもう良いでしょ。僕を苛めてうれしいのですか？」

美女さん「それは うれしいですが」

うれしいんだ！

美女さん「まあ半分は嘘ですが

僕「半分って」

美女さん「第3王妃については構いませんよ」

僕「は?」

美女さん「構いません」

何? どういふことなの?

魔王『そのままの意味だろ?』

美女さん「今と変わりませんじ

僕「はい?」

美女さん「私は若の従者です。若に従いついて行くのみです」

僕「従者も王妃も同じだと?」

美女さん「若の所有物には変わりません」

笑顔で言い切る美女さん。

僕「美女さんが望むなら従者を続けなくとも良いですよ?」

魔王『何を言つ』

美女さん「どうこつ」とですか?」

僕「美女さんを縛るつもりはありません。もしやりたい事が見付かれば従者を辞めても良いですよ」

その言葉に美女さんが少し眉を寄せた。
笑顔以外の顔は珍しい。

美女さん「もう 必要ないと?」

僕「そんな事は無いですよ!ただ美女さんは美女さんの」

美女さん「では私は若につき従います」

そういうところの笑顔を浮かべた。

美女さん「第3王妃ですね」

もう勘弁してください

食事を取りながら美女さんに今の状況を聞く。

王都は動きがなく敗走した国王軍は殆どが自分の領地に戻ったようだ。
こちらの準備はほぼ終わっている。

だが今日一日は兵の休日という事で、明日以降も大警防衛で残るメンバー以外は半休暇状態らしい。

だから僕達も今日一日は休んでいて良いらしい。

「どうか美女さんはいつ寝てるんだ？」

美女さん「食事の後はどうしますか？」

僕「そうですね。明日に備えてもう少し休みます」

美女さん「添い寝しまじょうか？」

僕「えええ！」

美女さん「冗談です。それも第一王妃の姫が先です」

僕「心臓に悪いのでその冗談は辞めてください」

「分かりました。控えます」と美女さんは笑顔で答えて、僕が食べた食器を片付けると部屋を出て行つた。

僕は食事後すぐとの間に疲れがぶり返し横になるとすぐに眠つてしまつた。

途中、部屋の扉がノックされた。
起きようとしたが疲れが酷く目を開けることが出来ない。

訪れた相手は何かを呟いたがよく聞こえない。

入り口で立っていたが静かに部屋に入ってくる。

そして僕の隣に立つと「寝ているんですか?」と微かに聞こえる声で呟いた。

「起きていますよ」と言おうとしたが体がいつ事を効かず声に出せなかつた。

相手は少し笑つて僕を見下ろしていたが寝ていると確信したのか、僕の恐る恐る前髪を触りだした。

そのうちに大胆になつてきたのか最初は恐る恐るだったのが堂々と触るようになる。

すると耳元で「ふふ…」と笑う声が聞こえる。

どれくらいそうしていただろうか。

不意に触るのをやめたかと思うと、そつと頬を触りすぐに部屋を出て行つてしまつた。

僕は結局、疲れに勝てず最後まで起きる事が出来ないまま再度眠りに落ちた。

夕方に目が覚める。

久々にゆっくり寝た為か体が痛い。

夕食まではまだ時間がありそうだ。
体をほぐしてビーブリょうか迷迷つ。

今日一日寝て過ごしたし、少し体を動かすかな。

そう思い劍を持ち館の脇のちょっとした広場で剣を振るひ。体が熱くなり薄つすらと汗が出てきた頃に声を掛けられる。

白の騎士団団長「稽古ですか」

振り返ると白赤両騎士団団長が歩いてきていた。

僕「今日一日、寝て過ごしてしまったので、晩御飯までこ少ししおなかをすかせつかと」

白の騎士団団長「受けねば手合わせしますか？」

赤の騎士団団長「それなら俺と…」

僕「えと…では軽く。まあ先に言われた白の騎士団団長と…」

全然軽くなかった。

飄々として物腰の柔らかい感じの白の騎士団団長だが、そこにはやはり騎士団団長。

流れるよつな剣捌きで隙がない。

僕もそれを受けながら合間を見ていは攻撃し返すが、全ていなされる。お互い一步も引かずに剣戟を打ち重ねていると不意に「そこまで…」と声が掛かった。

赤の騎士団団長「いつまでやつてこる。次が控えているんだ」

赤の騎士団団長がそつこつと白の騎士団団長を押しのけて前に出でてきた。

白の騎士団団長は肩をすくめると「続きはまた今度」と言つて下がつた。

赤の騎士団団長が剣を構える。

僕もすぐに剣を構えた所に白の騎士団団長の「はじめ」の声が掛かる。

赤の騎士団団長の剣は性格に似合わず力任せ一辺倒ではない。

こちらもさすが騎士団団長といった所だらう。

「なかなかやるな」「これならどうだ」等といいながら結構騒がしい。

それに白の騎士団団長が「あなたは手数より口数が多い」と言われて「うるさい」と返していた。

赤の騎士団団長つまといつと硬派なイメージだつただけに驚きもひとしおだ。

赤の騎士団団長と剣を合わせていると白の騎士団団長が僕に話しかけてきた。

白の騎士団団長「姫と婚約したそうですね」

僕の剣が揺れる。

僕「な、な」「

赤の騎士団団長「俺も聞いたぞ」

タイミングをずらされた僕は必死で赤の騎士団団長の剣を受ける。

赤の騎士団団長「まさかいきなり婚約まで行くとはな」「

僕「な、何で」「

白の騎士団団長「翁に聞きました。」

僕「え、あ」「

白の騎士団団長「安心してください。知っているのは一部の人間だけです。」

赤の騎士団団長「発表は王都攻略後に落ち着いてからにする予定だそうだ」

もう2人の言葉に翻弄されて僕は剣筋が乱れ赤の騎士団団長の剣を受けるので必死だ。

赤の騎士団団長は「ふつ」と笑うと距離を取つて剣を収めた。

それを見て僕も剣を收め息をはぐ。

物凄く疲れた。

赤の騎士団団長「心を乱しながらも我が剣を受けきるか。さすがだ
な」

僕「心を乱した時点で負けてますけどね」

僕はやさぐれながら言う。

「確かに」と笑い声を上げた赤の騎士団団長は急にまじめな声を出すと「お前の事も聞いた」と僕を見て言った。
白の騎士団団長も真剣な表情で僕を見ている。

これは僕にも分かる。

魔族という件の事だわ。

赤の騎士団団長「だからと言つてお前への評価は変わらない

そう言うと赤の騎士団団長は僕の肩を叩きながら大きな声で笑った。
白の騎士団団長も「僕も同じ意見です」と笑顔で言つてくれた。
それに対して「ありがとうございます」とだけ僕は答えた。
2人の気持ちがうれしくてそれだけを言つので精一杯だった。

赤の騎士団団長「戦が終わつて落ちついたら茶化し無しの真剣な仕合をしよう」

そういう赤の騎士団団長に僕は頷いた。

第23話 公開処刑（後書き）

誤字修正

僕のせりふが「」ではなく『』となっていたのを修正

繭 眉

反休暇状態 半休暇状態

正確に似合わず 性格に似合わず

白の騎士団軟調 白の騎士団団長

第24話 特使

日が落ちる頃に王都からの使者が来た。
降伏勧告の返答を携えてきたようだ。

広間の玉座に座る王子と姫。
脇にはそれぞれ翁と爺が立ち、その前に両騎士団が立つ。
僕は美女さんと脇に控えていた。

広間に入つてくる4人の人物。

そのまま進み王子と王女の前で膝を折り臣下の礼を取ると、その中の一人が「有力貴族の娘、国王の親書を持って参りました」と挨拶した。

無言で頷く王子。

赤の騎士団だが進み出て貴族娘から親書を受け取ると王子に渡した。王子は無言のままその手紙を読むと「使者殿もお疲れでしょう。夕食の用意をさせますのでそれまでお休みください」と一言だけ言った。

それでこの会見は終わりである。

使者が退席すると王子が深いため息を付いて背もたれに体を預ける。手紙を受け取った爺は一聲すると「馬鹿らしい」と言つた。

爺が受け取り内容を読む。

爺「降伏を受ける条件として以下の要求を提示する。」

・王子と有力貴族の娘の婚姻

- ・身柄の引渡しから有力貴族のトップを外す事
- ・国王派の家（地位・土地・財産）・命の保障
- ・新政府には反国王派と国王派の半分ずつ就任

僕「こちらの条件と、それを断つた後の降伏時の条件は伝えませんでしたっけ？」

爺「伝えましたな」

僕「なのに何でこそこそに上田線な条件を出してくるんだが？」「？」

翁「状況が読めて無いだけじゃろう」

白の騎士団団長「こちらの降伏勧告を自分達の良いよしに解釈したのでしょうか？」

僕「自分達のいいよし？」

白の騎士団団長「王都攻略が厳しいから降伏勧告をしてきた」とでも

僕「なるほど。では？」

翁「突っぱねるに決まってる」

僕「王子？」

黙つたままの王子に違和感を感じ呼びかける。

はつと顔を上げた王子は「受け入れることは出来ません」と言った。違和感は拭えないが話は続いているのでそちらに意識を向ける。

白の騎士団団長「そうなると開戦ですね」

翁「そりやな。明日の朝にでも使者に伝え、そのまま王都へ向かおう」

全員がその言葉に頷き、明日に備えて各自の白馬で帰る途中で「若と王子に呼び止められる。

振り返ると「少しよろしくでしょうか」と言い先を行く王子の後を僕は付いていった。

王子と2人でテーブルを囲う。

部屋の作りは姫と似た感じだが若干質素だ。

王子「先程の国王軍からの使者の話です」

僕は王子に先を促す。

王子「受けた方が良いのではないかと」

僕「受けた方がいい?」

王子「あ、いえ、一部です……けど」

僕「国王派の申し出のうり、新政府に国王派を、とこりのは受け入れられません。これは絶対です」

王子「はい」

僕「財産・土地の保障も無理です」

王子「はい」

僕「有力貴族のトップの首は……正直どうなんだうるわ」

王子「え?」

僕「命まで必要なのかは疑問ですよね」

王子「……それは、やはり首謀者の命でしかこの戦は終わらない」

僕「なら答えは出しますね」

王子が驚いたように僕を見る。

僕「そうなると王子の引っ掛かってる事は領主娘との結婚」

王子「…別に結婚したいわけじゃないです」

そう言つと王子は黙り込んだ。

僕は王子の表情から真意を捉えようとして諦める。

元々、僕に人の気持ちを量るのは無理だ

魔王『そうだな』

そうだけど！

僕「王子 僕を（友人として）信じて話してください」

王子「そうですね。僕は若を（義兄として姫姉さまを任せることができます）信頼しています

そういつと王子は「彼女を助けたいんです」と呟いた。

僕「彼女が好きなんですか？」

王子「っ！…わかりません。違うと思います…」

王子の言葉を待つ。

王子「有力貴族娘は 僕の幼馴染なんです」

王子の言葉に僕は耳を傾ける。

王子「有力貴族は昔から王宮に出入りしてました。その関係で有力貴族娘とは子供の頃によく遊んだんです」

懐かしそうな顔をする王子を見やる。

王子「彼女から今の状況が想像できません」

僕「結婚が想像できない?」

もう時「違います。このような状況を受け入れる女性ではない、です」

真っ直ぐ僕を見つめる王子

僕「助けたいとは?」

王子「え?」

僕「有力貴族の娘の命を助けたいといいましたが、それはどのよう

な意味を?」

王子「…それは」

僕「それならこのまま何もしなくても助かりますよ。」

王子「え?」

僕「戦後に処刑されるのは成人男性だけです。女性である有力貴族娘は助かります」

僕の言葉に王子が首を振る。

王子「そうじゃ、そうじゃないんです」

僕は首を傾げたまま王子の声を聞く。

王子「僕は」

そつ言ひと王子は固まってしまった。

僕「命が助かるだけでは無理だといつ。王子の言ひ助けるとは、どういふ事を指すのですか?」

俯き黙る王子に僕はそれ以上の言葉を発さず見る。

少し経つて王子の部屋の扉がノックされる。

黙つて答えない王子の変わりに僕が返事すると扉が開き美女さんが入ってきた。

美女さん「若、いらっしゃりでめでたしか

僕「どうしたの？」

美女さん「姫様がお呼びです」

僕「そう 王子」

僕の呼びかけに答えない王子。

僕「今の話の続きは食事の後にしましょう。それまで考えて居て下さい

僕の言葉に王子が小さく頷いたのを確認すると「失礼します」と言つて部屋を出た。

美女さんは何も聞かずに僕を姫の部屋まで案内している。

姫の部屋を美女さんがノックし扉を開ける。

「失礼します」と言つて入つた僕に2人の女性が迎える。

一人は姫でもう一人は 有力貴族の娘だつた。

美女さんはそのまま扉を閉めて出て行つてしまつた。

妖精少女と子狼は居ないようだ。

テーブルに案内され座つた僕に有力貴族の娘が挨拶をした。

有力貴族の娘「先程はご挨拶が出来ずに申し訳ありません。 有力貴族の娘と申します」

僕「いらっしゃりこそ、申し訳ありません。 若と申します」

何故姫と有力貴族の娘は居るのか？

何故僕がここに呼ばれたのか？

状況が飲み込めず戸惑う。

姫「私と有力貴族娘は幼馴染なんです」

僕「は？」

有力族の娘「私は小さな頃から王宮に出入りしてたので、そのご縁で姫と仲良くさせて頂いておりました」

なるほど。

よく考えれば姫も王子も王宮に居たんだ。

王子の幼馴染と姫の幼馴染が同じでもおかしくない。

姫「小さな頃から一緒に遊んだり勉強したりしてたのです

有力貴族の娘「懐かしいですね」

姫「有力貴族の娘は私達の中で一番勉強が出来たんですよ」

有力貴族の娘「そういう姫もかなり勉強されていたではないですか」

そういうてお互い笑う。

仲は本当によややつだ。

有力貴族の娘「…」んな事になるまでは姫には仲良くして頂きました

姫「私は今でも親友だと思つております！」

有力貴族の娘「姫 ありがとうございます！」

有力貴族の娘はそう言つと目に涙を浮かべた。

悪い子では無いようだね

魔王『女はわからんがな』

そ、そつ？

魔王『まだ様子を見るべきだ』

姫「若をここに呼んだのは、有力貴族の娘と昔約束した事を守るつと思つて」

有力貴族の娘「約束」

姫「有力貴族の娘、この若がわ、私の 王子様なのでしゅ！」

囁んだ

魔王『囁んだな』

それを聞いた有力貴族の娘は何を言われているのか分からぬようだつたが、少しして意味を理解すると「えええ～～～～！」と声を上げて席を立つた。

有力貴族の娘「お、お、お」

姫「王子様」

恥ずかしそうに言つ姫に僕も赤くなる。
それを見ていた有力貴族の娘は僕を睨むと「説明を」と腹の底から出すような声を出した。

僕「えっと、何というか、気が付いたらそういう事になつてました。

「

有力貴族の娘「気がついたらって何ですか！？」

姫「落ち着いて有力貴族の娘。これはもう皆納得してるので

有力貴族の娘「みんな？」

姫「王子も爺も翁も。今回の戦が終わった後に私達の婚約を発表する予定なの」

「キヤッ」と頬を染める姫は可愛いが、僕を睨む有力貴族の娘が怖い。

「ぐぐぐ…」と何かを堪えていた有力貴族の娘は拳を振り上げると

「これは今すぐ戻つて兵を再編しなければ！！」と叫びだした。

有力貴族の娘「姫ちゃんを誑かす魔手から一刻も早く救い出さねば

「…」

豹変した有力貴族の娘を姫が「まつて、まつて」と宥める。
少しして落ち着いた有力貴族の娘は「失礼しました」と席に座る。

姫「私が望んだことなの」

有力貴族の娘「姫ちゃんが？」

姫の呼び方が「姫ちゃん」になっているのにも気がつかない有力貴族の娘。

姫がそう呼ばれるのが嬉しそうなので言わないけど。

姫「私が憧れて…でも若是私を友人としてみてい事が分かってたの」

黙つて話を聞く有力貴族の娘。

姫「でもとある事から私の気持ちが若に知られて、ダメだと思ったけど若が真剣に答えてくれたの」

「嬉しかった」と呟く姫は悶死しそうになる。

それを止めたのは「とある事?」という有力貴族の娘の低い声だ。

姫「赤の騎士団団長が口を滑らせてしまったような」

有力貴族の娘「それまで若是姫ちゃんの気持ちに気がついてなかつたと?」

僕「う、うん」

有力貴族の娘「あの（自主規制）！余計な事を」

え〜！何この豹変振り！！怖い

魔王『やはり女はわからんな』

そういう意味じゃなかつたくせに！

姫「最初は『何でそんな事を言つの？』って思つたけど、若が気持ちを受け入れてくれたから、今は感謝の気持ちで一杯」

有力貴族の娘は僕を睨み殺す勢いで見つめ

有力貴族の娘「貴方は姫ちゃんの気持ちに気がついてなかつたというけど、では何故戦争に参加してたの？」

僕「え？友人が危ないんだ。出来る事をしようと」

有力貴族の娘「本当にそれだけ？姫に取り入つて地位や土地を得ようと思つたんじゃないの？」

僕「そんな事無いよ！」

有力貴族の娘「本当かしら」

姫「本当よ」

姫の言葉に有力貴族の娘が「え？」と声を上げる。

姫は嬉しそうに、誇らしげに語りだす。

姫「若是本当にそういうのに興味がなったの」

有力貴族の娘「そうしてそう思うの？」

姫「国王軍が大砦に迫つた時に私に剣を捧げてくれたの」

有力貴族の娘「それは兵士として当然」

姫「若是この国の人ではないわ。それでも私の笑顔を守りたいと言つてくれたの」

有力貴族の娘「……」

姫「たとえ友人としてでも嬉しかつた」

有力貴族の娘「それが無欲とどう繋がつて」

姫「その時に土地も権力も要らない。ただ私を守るつて」

有力貴族の娘「！」

姫「その後も爺たちに戦後に国を支えて欲しいという事を言われたけど、その度に土地も権力も要らないと跳ね除けてるわ」

それを聞いた有力貴族の娘は僕に目を向ける。

有力貴族の娘「本当に？」

僕「要りません」

有力貴族の娘「土地も？」

僕「土地の治め方なんか知りませんし」

有力貴族の娘「権力も？」

僕「土地も分からぬのに国なんか」

有力貴族の娘「お金とか」

僕「まああるほうが良いですが、生活できる程度あれば」

有力貴族の娘「何の為に戦ってるの？」

僕「最初は友人である姫を助けるため。」

有力貴族の娘「最初は？では今は？」

僕「姫の笑顔を守るため」

恥ずかしくて「大好きな」とは言えなかつた。

有力貴族の娘は顔を真っ赤にしている姫と僕を眺めるとため息をつ

いた。

有力貴族の娘「分かりました。貴方なら信頼できそうですね」

そういうと有力貴族の娘はまじめな顔をした。

有力貴族の娘「本題に入りましょう」

第24話 特使（後書き）

新キャラ登場しました。

あまり増えると扱いきれなくなるのに…

タイトルを「（仮）」しました。

「無題」よりはマシだと思ったんですが、ざつちもびつちでした。

誤字修正

言いように解釈 良いように解釈

少し立つて 少し経つて

扉を空ける 扉を開ける

扉を締めて 扉を閉めて

第25話 世界

有力貴族の娘「国王軍は現在、2つの勢力にわれています」

僕「2つ」

有力貴族の娘「交戦を続けるべきだという一派と降伏するべきだと
いう一派です」

「私は降伏派です」と有力貴族の娘は言つ。

有力貴族の娘「降伏派はこれ以上の内乱は他国を引きいれかねない
とし、反国王軍の要求を呑むつもりでした」

僕「……」

有力貴族の娘「しかし交戦派は自分達の利権が無くなる事を良しと
せず、徹底抗戦を唱えております」

僕「それなのに良く特使が出せましたね」

有力貴族の娘「そこは折衷案で条件に『土地・財産・命の保障』と
『戦後の権力』を折込み納得させました」

姫「貴方のお父様は？」

有力貴族の娘「父は 有力領主は交戦派です」

その言葉に姫が息を呑む。

有力貴族の娘「ですが実情は降伏派です」

僕「そうなると」

有力貴族の娘「この度の戦の責任を取らされるでしょう。」

責任といつのは処刑の事だらう。

姫「！！」

有力貴族の娘「父も、もちろん私もそれは納得しております」

姫「そんな」

僕「では何故、交戦派と言つているのですか？」

有力貴族の娘「有力貴族の身の安全を守るためです」

僕「どういう事でしょ」

有力貴族の娘「もし今の状態で降伏派と言つと、交戦派に暗殺されかねません」

僕「……」

有力貴族の娘「交戦派と同じく愚かな発言をする事により身を守つてます。戦後に責を負う為に。」

姫「つ！」

有力貴族は戦後に責任を取る為に嘘をついてまで生き延びていると言つ。

姫「なぜそこまで」

有力貴族の娘「それが有力貴族の誇りです」

毅然と言い放つ有力貴族の娘は美しかった。

有力貴族の娘「先程の王宮からの手紙に『王子と有力貴族の娘の婚姻』と言つのがありました。」

僕「ええ」

有力貴族の娘「あれも嘘です」

姫「は？」

有力貴族の娘「正確に言つと私が王都から脱出する為の嘘です」

僕「王都を出る為？」

有力貴族の娘「はい。今の王都はかなり危険な状況です。隙を見せると仲間であるはずの国王派から殺害されかねません。それを回避しつつ王子に真意を伝える為には私が出向くように仕向ける理由が必要でした」

僕「それが王子との婚姻だと？」

有力貴族の娘「ええ。そういう条件を載せた後に『直接会った方が王子を落としやすい』と言いくるめました」

中々したたかな女性である。

有力貴族の娘「私の本当の目的は内通です」

僕「内通？」

有力貴族の娘「はい。父である有力貴族が率いる一部の兵による決起と王都の開城です」

僕「それは！」

有力貴族の娘「反国王軍が王都に来た晩に行う予定です」

有力貴族の娘の言葉が真実なのかを見抜こうとした。

それを察した有力貴族の娘が笑顔で答える。

有力貴族の娘「嘘は申しておりません。拷問をして頂いても結構です。元より、こちらに来た時点で無事に帰れるとは思ってません」

そう言つと「この場で直接体に聞きますか?」と言つ有力貴族の娘に僕は首を振つた。

僕「冗談でもそういう事は言わないで下さい」

有力貴族の娘「冗談ではありませんが?」

僕「なおさらたちが悪い」

有力貴族の娘「姫が気になるのでしたら別の部屋で行いましょう。ただの拷問です」

魔王『丁度いい、練習がてら試せばよいではないか』

黙れ

僕「そんな事はしません」

有力貴族の娘「では別ものにさせますか?」

僕「それもさせません。拷問は一切しません」

有力貴族の娘「…信じると？」

僕「はい」

有力貴族の娘「何故？」

僕「貴方が姫の親友だからです」

有力貴族の娘「…そのような振りをしているだけの可能性は？」

僕「姫がそう信じてます。だから僕も信じます」

そう言つと姫が「若」と嬉しそうに呟いた。

僕「それに僕は試されるのが気に入りません」

姫「試される？」

僕「ああ言って僕が心を動かされるか…有力貴族の娘に惑わされかを見てたんです」

姫「何故？」

僕「姫にふさわしいか見る為でしょ」

有力貴族の娘「分かりましたか」

僕「分かりますよ。貴方の目を見れば

挑発的にこちらを見る田を見つめる。

僕「貴方はそこまで安い人じゃない」

有力貴族の娘「私の覚悟を嘘だと？」

僕「いえ、本物でしょう」

有力貴族の娘「でしたら？」

僕「気を抜いた時に僕を殺して自害するぐらいの覚悟を持った女性を相手にする勇気はありません」

有力貴族の娘「何故そう思うのですか？」

僕「姫と似ているからです」

その言葉に息を呑む2人を見やり「似てますよ」と再度言った。

僕「見た目はもちろん性格も似てません」

有力貴族の娘「では？」

僕「でも根っここの部分、芯を持っている感じは同じだと感じました。さすが親友同士ですね」

そう言うと姫は嬉しそうに、有力貴族の娘は顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。

有力貴族の娘「」、婚姻は国王軍を騙す嘘ではあります、本当にしない訳ではありません」

姫「有力貴族の娘?」

有力貴族の娘「王子は無理でも我が一族の存亡の為に誰でもいいから有力な人物に取り入ろうと考えてまいりました」

姫「つ!」

その言葉に姫が僕を仰ぎ見る。

「どうにかできないか?」といつ事だらう。必死で頭を回転させる。

僕「一族の存亡」とは、どこまで助かればと考えてますか?」

有力貴族の娘「成人男子は仕方ないとしても、女性と成人前の子供の命と、生活の保障」

僕「財産、ではなく生活の保障?」

有力貴族の娘「そこまで高望みは出来ません」

女子供は助命と決めてはいる。

ただ有力貴族の一門となると状況によっては成人前でも男児は全て処刑の対象になる可能性が高い。
それを成人前の男児まで確実に助けるほどの力を持った人物となると誰だろう。

僕「王子、翁、爺の3人か？現領主では少し弱いし領主息子は無理だ。両騎士団団長はダメだな。他の領主達は…出来そうな人物は少ない上に、口約束だけで付け入ろうとするかもしれない」

ぶつぶつ言つ僕に有力貴族の娘が頷く。

有力貴族の娘「やはり王子と翁と爺くらいですか。」

僕「そう…ですね」

有力貴族の娘「王子なら いえ、今の時期に私が近づけそうにもありますん」

僕「確かに。でもそれだけの事をするとなると王族が余程の権力者でないと難しいので、そうなると後は姫ですが」

有力貴族の娘「姫なら私に手を貸して下さると信じておりますが」

姫「私が出来る事ならどんな手助けも…！」

姫の言葉に「ありがと」「ざま」言い首を振る。

有力貴族の娘「それでも姫だと押しが弱いのです」

姫「何故」

僕「政治に介入できないからです。」

有力貴族の娘「そうですね。他に王族などの候補が要ればよかったです」

「王族」と呟く姫。

僕と有力貴族の娘はあでもない、いじでもないと位置を探るもループしてしまい答えが出ない。

応酬される言葉の合間に姫の呟きが通る。

姫「若も王族になるのですよね？」

僕と有力貴族の娘が姫を見る。

姫「私と、その、け、結婚するなり」

有力貴族の娘「確かに」

有力貴族の娘が僕を見る。

いやいやいやと首と手を振る僕の手を掴み

有力貴族の娘「若の妾になればいけます！」

僕「ちよつとまつて！」

有力貴族の娘「待てません。これしか手はありません！」

姫に助けを求めようとしたが姫は僕達をじっと見つめている。
「姫」と情け無い僕を見て姫は頷くときっぱり言った。

姫「有力貴族の娘なら」

僕「ええええええ」

有力貴族の娘「本当ですか！」

姫「えつと、本当は嫌だけど…有力貴族の娘を助ける為なら、が、が、がまんしゆる」

目に涙を浮かべる姫。

それを見た有力貴族の娘が僕の手を離し落ち着いた声を出した。

有力貴族の娘「やはりこの話は無かつた事に

姫「え！？」

有力貴族の娘「私は姫ちゃんを泣かしてまで無理を通そうとは思いません」

姫「だめ、だめだよ」

有力貴族の娘「姫ちゃんが泣く方がダメです」

有力貴族の娘が姫に手を添えると優しく微笑んだ。
それを見た姫が「だつて、だつて」とぐずる。

姫「有力貴族の娘は、綺麗だから、若が取られちゃうと思つて」

それを聞いた有力貴族の娘が「そんな事ありませんよ」と優しい言葉を掛けながら僕に合い図を送る。

どうやら「お前も何か言え」という事らしい。

僕「姫、僕は姫の騎士です。姫が何より大切です」

それを聞くと姫が泣き出してしまった。

有力貴族の娘は僕を睨みながら姫をあやす。

少しして落ち着いた姫は鼻声で「有力貴族の娘も若の」と言った。有力貴族の娘が何か言いそうになるのを制して姫は「それしか方法は無いから」と言つ。

それでもなお否定しようとした有力貴族の娘に「これでいつでも一緒に居られるね」という姫の一言で有力貴族の娘は反撃する気力を奪われた。。

僕の気持ちは？

魔王『考慮された事が今まで幾度あつた？』

ですよねー

「よろしくお願ひします」という有力貴族の娘に「こちらこそ」と頭を下げる僕。

お互い偽装だと分かっている。

姫「若は優しくてかつこいいから、すぐに有力貴族の娘も好きになれるよ」

笑顔で姫が言う。偽装だと分かってるよね？

先程取られると泣いていたくせに、決まればこういつ事を言つのは、姫が変なのか王族が変なのか一度確認した方がいい気がする。

誰に確認すればいいんだ？

有力貴族の娘「姫ちゃんあのね」

姫「これからは一緒に居られるなんて、嬉しいな」

有力貴族の娘「うん。嬉しい ジゃなくてね」

姫「嬉しくないの？」

有力貴族の娘「嬉しいに決まってるじゃない！」

姫「良かつた」

有力貴族の娘「でね」

姫「有力貴族の娘は第4王妃だね」

世界！（日本語訳）

時が止まる。

ぎさぎさ、と音がしそうな感じでこちらを見た有力貴族の娘は「第4？」呟いた。

僕の長い戦いが、今始まる！！

「声援ありがとう（りや）

結局説明に時間が掛かった。

第2と第3の名前が出ると「さつきの美人！」と有力貴族の娘が囁み付く。

妖精少女が本当に少女だと聞くと魂まで凍りつきそうな目で見られた後に「本当に可愛いんだ」という姫の笑顔にとろける有力貴族の娘。

「そういう事になつてるけど実際は違つ」という事を有力貴族の娘が受け入れられそうになつた瞬間に「でもみんな有力貴族の娘と同じで納得してるよ」という姫の一言で燃料投下され、再度火が燃え上がる。

説明して理解してもらひ頃には僕は精神的疲労で燃え尽きそうになつていた。

僕「…とりあえず、決まった内容は食事の後に話をしましょっ」

そう言って姫に食事中に言わないように伝える。

食事には特使も呼ばれるはずで、そこで計画がバレルのはまずい。食事後に王子や翁、爺を呼んで話を詰めないといけない。

部屋を出て廊下を歩きながら有力貴族の娘と話をする。

僕「そういえば王子がもし婚姻を受け入れると言つたらどうするんですか？」

有力貴族の娘「その場合は諦めるよう説得します」

僕「王子のほうが確実では？」

有力貴族の娘「王位を継ぐ人間が私のような立場の人間を引き入れたらダメですよ。王妃で無ければまだ分かりますが」

僕「では妾としてなさいと？」

有力貴族の娘「王妃が正式に居ない状態では無理ですね。 いえ、居てもやはり無理でしょう」

僕「何故？」

有力貴族の娘「あの子に囲われるのは想像できません」

有力貴族の娘「それに丁度いいのを見つけましたしね」

僕「はあ」

僕「はあ…」

有力貴族の娘「何でそこでため息つくんですか」

僕「出来るだけ早く解消できるよう尽力します」

有力貴族の娘「あら？別にいいですよ？」

僕「は？」

有力貴族の娘「若がお求めならいつでもお呼び下さい」

僕「何を？」

有力貴族の娘「それくらいの覚悟はここに来る時には出来てあります」

僕「……」

有力貴族の娘「ではまた後ほど」

そう言うと有力貴族の娘は会釈をして部屋に入つていった。

魔王『違う意味で怖い女だな』

そうだね

有力貴族の娘の扉を何時までも見つめていても意味がない。
先程王子に相談受けた後にこんな事が決まってしまったので、王子
に事前に話をしようつと王子の部屋に向かった。

第25話 世界（後書き）

誤字修正

責を追う為に

責を負う為に

第26話 王宮ハーレム物語

王子「姫がそんな事を？」

頷く僕と呆然とする王子。

そうだよな。

自分の好きな人が偽装とはいえ妾扱いされるんだ。

僕「本当は王子と婚姻できたらいいのかかもしれないんだけど」

「あの子に囲われるのは想像できません」とい言つた有力貴族の娘の顔が浮かぶ。

王子「いえ、それは無理でしょう」

考え込んでた王子が口を開いた。

王子「王位を継ぐ予定の僕が、現政府の貴族との結びつきを強くするには絶対あつてはならない事です。それに」

「もしそうなつても有力貴族の娘が断るでしょう」と。

そういう王子は無表情ではないものの、嬉しいのか悲しいのか苦し

いのか楽しいのか分からぬ表情をしている。

僕「あくまで偽装だから安心してね」

王子「え？ そうなんですか？」

僕「もちろんだよ！」

王子「何故？」

僕「何故って 王子は好きなんでしょう？ 有力貴族の娘の事」

僕が言つと「はい？」と王子が聞き返した。

僕「え？ 好きだから助けたかったんじゃないの？？」

王子「まあ大まかに分類すれば好きですが、恋愛感情はありませんよ」

僕「本気で？ 強がりとかじゃなく？ 正直に？」

王子「嘘でも強がりでもなく本気です。」

僕「じゃあ何で？」

王子「幼馴染が危ないんです。どうにか助けたいと思つのは当然ではないですか？」

僕「そうかもしないけど」「

王子「それに有力貴族の娘は姉のような存在ですかね」

僕「その気持ちを突き詰めたら恋愛感情だつたりとか!」

王子「無いですね」

笑顔の王子。

王子「だって、子供の頃に色々酷い目に合わされましたから。将来結婚するならおしとやかな女性がいいと何度も思つたか」

僕「そう……なの?」

王子「そうです。もし僕の言こといつ話が出たら全力で拒否しますね」

そんななんだ…

僕「…でも僕は引きつける件についてはどうなんですか?有力貴族の娘に恋愛感情は無くても友情はあるんでしょうか?」

王子「そうですね 若なういと思想います

僕「偽装だから?」

王子「偽装じゃなくてもいいんじゃないですか？」

僕「は？」

王子「普通に有力貴族の娘を囮えればいいじゃないですか？」

また王族の理解できない部分が出た！

何なの？囮うとか囮わないとか！

王子がそういう事は言わないで欲しい！

…何となく。

僕「何を？」

王子「姫姉さまも納得しているのでしょうか？問題ないじゃないですか」

僕「…そこら辺が良く分からんだけど」

王子「そうですか？」

「ふむ…」と考える王子に僕の思つている事を言つ。

なぜ姫も有力貴族の娘も王子も妾の存在を普通に受け入れるのか。
もしかしてこの国は一夫多妻制なのか？
それとも王族だからなのか？

王子「この国は一夫一妻制です。王族だからとこりのありますね。

子を為す義務がありますし

僕「でも僕は」の国の王位継承権は無い」

王子「ありますよ?」

僕「は?」

王子「王位継承権で言つと第2位あたりです。僕に子供が出来たら話は変わりますが、今の段階では第2位です」

僕「なんで」

王子「正確には王位継承権第2位は姫姉さまなのですが、姫姉さまが女王として付いたら自動的に王配です」

もしかしなくても謀られた!

王子が笑顔で「そう考えるとすぐに退位するのもアリかもしれません」と言つ。

僕「そんな事をしたら國を出奔して一度と戻りません」

王子「冗談です」

その「冗談は笑えません。

王子を凝視していると「本当に冗談です」と苦笑した。

王子「まあそういう事で若も王族の一員なんですね」

僕「……」

王子「まあそんなことは関係なく当人同士が良ければ問題ないので
は？」

僕「友人が妾などにされるのは問題ないんですか？」

王子「普通の妾なら考え方直すように言ったかも　いえ、僕の言葉で
考え方改めるような人ではないんですけどね」

僕「では何故？」

王子「若だから、ですかね。」

僕「はい？」

王子「僕は若を高く買つてます。その若なら姫姉さまも有力貴族の
娘を任せた安心だと考えてます」

何だろう。

言つてる意味は分かるけど、考え方理解できない。

魔王『なら考えずに受け入れればよから』

そう、なのか？

魔王『別に受け入れても不具合があるわけではあるまい』

まだわからない

王子「それに姫姉さまも納得し、有力貴族の娘は受け入れたのでしょう?」

僕「え、ええ」

王子「なら問題ないでしょ。有力貴族の娘を本当に妾にすればいいと思います」

僕「何を」

王子「有力貴族の娘がこの件を了承したのであるなら、受けれるでしょう」

僕「それは、できません」

王子は首をかしげ「なぜ?」と言つ。

王子「姫姉さまを思つての事なら、姫姉さまも有力貴族の娘ならと納得したので問題ないでしょ?」

僕「そういう問題じゃないんです!」

王子「ではどのよつたな問題で？」

僕「政治の道具のよつて女性を扱うのは好きじやない」

その言葉に王子は目を細め「そんなあなただからこそ」と呟く。

王子「何度も言いますが有力貴族の娘も了承しますよ？」

僕「それは一族の女子供を守るため、にです」

王子「それがいけないと？」

僕「そりは言いません。でも僕は嫌なんです」

王子「では純粹に愛情から有力貴族の娘が本当の妻にしてくれと言つてきたら受け入れますか？」

僕「それもその時にならないとわからない」

王子「そりですか」「

王子は少し考えた振りをして「では」と切り出す。

王子「今の関係は回避できないので、今後の有力貴族の娘との付き合いの人となりを見て判断すればいいじゃないですか」

魔王「そう、ですね。別に無理やつ手籠めにじりとこつてる駄(j)じゃないんですからね」

王子「でも姫と婚約した後は月の満ち欠け毎（約半月）に2～3回は寝所に呼ばないとダメですよ？」

僕「は？」

王子がまた良くなき分からぬ事を言い出す。

何時からこには異世界空間になつたのだ？

魔王『お主からしたら最初から異世界だな』

冷静なツッコミありがとう…それよりまた王子が変なことを言い出した！！

魔王『何処が変だ？』

王子「最低でもそれくらいの頻度で寝所に呼ばないと有力貴族の娘の立場が悪くなりますね」

魔王『そうだな。妾の意義は夜伽が世継ぎを作ることだ。それが寝所にも呼ばれないとなると肩身は狭かろつ』

王子「場合によつては追放とこつ事になり、一族の女性と子供を守る後ろ盾を無くす事になります」

魔王『そうだな。主に見向きもされない妾など価値も無いからな』

王子「逆に言うと有力貴族の娘を寝所に呼ぶ回数が多ければ多いほど、身の安全は守られます」

魔王『だが正室よりもいとそれはそれで問題が発生するがな』

もう訳が分からぬよ！

魔王『とりあえず、有力貴族の娘の意思を守りたいなら寝所に呼ぶしか無い訳だ』

脱力する僕に王子が呼びかける。

王子「最初は呼ぶだけでいいと思います。一晩を過ごしたという事実が必要で別に本当の妾にする必要もありません」

その言葉に僕は顔を上げる。

王子「後は一緒にいる中で若が納得する判断を下せばよろしいかと」

結局は現状は受け入れるしか仕方が無いという事だけはわかつた。王子が納得してくれたのは良かつたが決然としないものを感じる。

夕食は静かなものだつた。

いつものメンバーに加え有力貴族の娘とお付のうちの一人が同席している。

本来なら騒がしくない程度に世間話などを話しながら食事を取るのに、今日に限っては誰もが無言である。たまに王子が「お口に合いますか?」「戦場なので大したものが得意できず申し訳ありません」等と言い、それに有力貴族の娘が如才なく答える程度である。

食事が終了した後に有力貴族の娘が口を開く。

有力貴族の娘「王子様、宜しければ食後のお茶でもござ一緒にいたいませんか?」

食後に2人でお茶を飲みましょう、と言つのだ。

王子は「それは素晴らしいですね。姫も」一緒しましょう」と申し出を受ける。

これで有力貴族の娘は王子と密談する場を設ける事が出来た。

有力貴族の娘を王子の后にと考える他の特使は心の中で順調に事が運んでいるとほそく笑んでいるのだろうか。

特使が自室に下るとお茶会の部屋に皆が集まる。

王子、姫、有力貴族の娘の他に、僕、爺、翁、両騎士団長、美女さん、妖精少女である。

妖精少女を初めて目にした有力貴族の娘は「姫に聞いてます。有力貴族の娘というの、よろしくね」と優しく微笑みかけ手を差し出した。

日頃は人見知りの妖精少女も有力貴族の娘に対しては何故か物怖じしない。

とはいって、やはり美女さんの後ろに隠れているのだが、それでも差し出された手にちゃんと触ると言うのは初対面に対しては快挙である。

有力貴族の娘「想像以上の可愛わー。」

姫「でしょー。もう可愛くて困つてるので」

有力貴族の娘「今後は妖精少女と一緒に居られると思うと、何も苦にならないですね」

姫「子狼2匹も可愛いの。私は妖精少女と子狼と毎晩一緒に寝ているのよ」

有力貴族の娘「なんとーつらやましい 姫も妖精少女もつらやましい」

異様な盛り上がりである。

翁が咳払いすると2人は首をすくめると少し笑つた。

爺「お話いただけますかな」

有力貴族の娘はそれに頷くと状況を説明した。

今の国王軍の現状、有力貴族の立場と気構え、書状の内容の意味。そして最後に自分がここに来た理由と僕の妾になる事をいい終わるとだまつた。

「妾」の部分で姫が「第4王妃です」と言つたが黙殺された。

爺「なるほど」

翁「先程の姫の物言いから察するに、姫はこの件は納得されると？」

姫「はい」

翁「王子は

王子「言つ事はありません」

翁「若は 納得していないが受け入れる、といつ顔ですね」

僕の表情から読み取つてくれたようだ。

翁「爺はどう思つ

爺「有力貴族の娘の人と成りといふ部分では高く評価しておる」

翁「ほ、」

爺「小さな頃から知つておるでな。知識と教養は申し分無く、姫への敬意や好意は過分にある娘じやな」

爺の言葉に有力貴族の娘は「ありがとうございます」と頭を下げた。

翁「それが国王派にいたと？」

爺「家の都合じやな」

王子「そもそも前の戦で裏切りを知らせてくれたのは有力貴族の娘の手のものです。…残念ながら間に合いませんでしたが」

有力貴族の娘「私が知つた頃にはもう遅かつたんです」

翁「なるほど」

考え込んだ翁に「お願い！」と懇願する姫。

翁「いえ、色々問題はあるのが困つたのですが、それをどうにか出来るなら良いとは思います」

王子「問題とは？」

翁「まず有力貴族の娘を受け入れて一族の女子供を助けた場合の周りの影響」

姫「元々、女性と子供は助ける予定ではないですか」

翁「命を助けるのと保護をするのとは違います」

助命は唯の助命、地位も財産も保証はされず、保護となると今まで通りとは行かなくても保護者の裁量である程度の地位は保証される。この違いは大きい。

翁「いざ蓋を開けたら芋蔓式に助ける人間が増えて困りますしな」

有力貴族の娘「人数としては成人女性が5名、成人前の男子が4名、女子が7名、乳飲み子が3名です」

翁「それ以上は増えない?」

有力貴族の娘「はい。これは有力貴族である父の一門の者だけです。他の有力貴族の一門は含まれておりません。」

翁「成人前の男子の年齢は?」

有力貴族の娘「10歳、7歳、6歳、4歳、乳飲み子が生後1年ちよつと、という所です」

翁「その者達に望む地位は?」

有力貴族の娘「お任せいたします」

翁「僅かながらの土地と財産のみで農民として、といつ事もありえるが？」

有力貴族の娘「そこは若の慈悲に願う他ありません」

翁「若はどう思ひ？..」

僕「どう、と言わればしても」

魔王『通常は保護となると自分の領地の館にでも住まわす、といった所だ』

やうなの？

黙り込んだ僕に翁が言ひ。

爺「大体は自分の土地に住居を立てるといった所か」

魔王と同じ意見だ！

魔王『当たり前だ』

爺「金を立てるだけや農奴にするのも良いが」

2人（実際は3人だけど）の言葉に考える。

僕「僕には土地も財産もないしなあ」

翁「では土地と財産を『えましょうか』

僕「…短い付き合いでしたね」

翁「冗談じゃよ」

油断も隙も無い老人である。

僕「そういえば住む家も無い」

僕の言葉に皆が僕を見る。

姫「…王宮ではダメなのですか？」

僕「え？王宮に住んでいいの？」

赤の騎士団団長「逆になんで王宮に住んではダメだと思つんだ

僕「だって、王宮だよ？王様の住む場所じゃないですか」

白の騎士団団長「王族も住みますけどね。そして貴方は王族と同じ

立場の人になるんです

言われてみればそうかもしない。

未だに姫と婚姻するというのが現実味を帯びない。

王子「王族は基本的に王宮に住みますが、中には自分の領地にお城を建てて住む人や、王宮内に自分の館を建てて住む人も居ますよ」

僕「王宮と王宮内の館は同じものでは？」

爺「王宮というのはそのまま城を指します。王宮内の館は一の郭に居を構えて住むという事です」

翁「まあ安全性で言えば王宮の方が格段に高いので王宮に館を構えるのはよっぽどの事じやな」

僕「姫の住まいは王宮ですか？」

姫「私は王宮にある離れのような場所に住んでます」

爺「王宮の最上階近くに作られた離れがありましてな。元々は何代か前の国王が後宮として作った場所なんですが、そこを姫と第一王女が使っておりました」

姫「お姉さまが嫁いで出て行かれてからは殆どの部屋が無人ですが

僕「後宮かあ。そこが使えたら」

姫「別に今は後宮ではないので若と私のし、し、新居とするのは問題ないと思いますけど？」

僕「そうなんですか？でも王子が後宮を作る時に困りません？」

その言葉に王子が笑いながら「後宮を造るかどうかも分かりませんけど」と言った後に「場所は他にもありますよ」と言った。

僕「結構広いんですか？」

爺「そうですね。一番多いときで20名ほどの姫君が後宮に入ったとありますので、使用人を合わせると100名近くは住めたのでは無いでしょうか」

僕「使用人も一緒に住むんですね」

爺「女性何かと手が必要になる事が多いですから」

僕「となると いけるかも知れませんね」

翁「いけるとは？」

僕「そこに有力貴族の娘の言つ助命する人たちを入れましょう」

翁「何と？」

僕「貴族の立場は守れませんが、姫、もしくは有力貴族の娘付きの侍女としておけば問題は無いと思います。」

爺「なるほど」

翁「しかしいくら子供と言え男子は入れるわけには行かんぞ
僕「そうですね。男子は近くの部屋に住まわせて貰えるよ」こしま
しょう。まさか乳飲み子までダメとは言わないでしょ」

翁「ふむ…」

翁が考え込んだ。

僕は有力貴族の娘に尋ねる。

僕「侍女という扱いはダメでしょうか」

有力貴族の娘「私には決める権利はございません。」

僕「それでも意見を下さい」

僕の言葉に探るような視線をした有力貴族の娘は思案するように言
葉を紡ぐ。

有力貴族の娘「王族の侍女というのはかなりの地位のある者しか
なる事が適いません。通常は貴族の娘なら、問題は無いかと思いま
す」

僕「有力貴族の一門の女性でも？」

有力貴族の娘「中には自分を王族と同等かそれ以上と勘違いしている愚か者も居ます。しかし今回私が助命を願い出ている者たちはそんな愚か者ではないません」

僕「侍女になるのは問題ない？」

有力貴族の娘「ありません。それどころか破格の待遇です」「本当に農奴なりにされてもおかしく無い立場ですから」と静かに言つ。

翁「そうじゃな。若の住まいとしても、妾を囲うのにも侍女として受け入れるにも申し分ないかも知れん。警備もしやすいしな」

僕「え？僕も住むんですか？」

翁「当たり前じゃう」

皆が「何を言つてゐんだ」とこう顔をする。

あれ？僕がおかしいの？

魔王『お主がおかしい』

いきなり異世界に飛ばされて気がついたら剣と魔法の国だった。

魔王『？』

スリル満点の冒険物だと思ったら国取り物だった。

魔王『何をいつてる？』

このまま興国物語が始まると思つたら勝利を目前に「次は後宮ハーレムもの」と言われた。

魔王『……』

そんな話、誰も求めてないよーー！

魔王『誰に言ひてる！誰に』

展開の速さに僕はついて行けそうになじよ

魔王『そんなに早いとは思わんが、気がつくのは遅かつたな』

何処から間違つたのだろう。

魔王『最初からではないか？』

第26話 王宮ハーレム物語（後書き）

誤字修正

相違継承権 王位継承権

女帝 女王

自動的に国王です

自動的に王配です

相違継承権

王位継承権

女王として着いたら

女王として付いたら

評価しております

評価しております

着いて行けそうに

ついて行けそうに

第27話 「原因は領主息子」

翁「住まいの話と処遇については無事まとめた

無事じゃないけどね！」

翁「後は今後の影響じゃな

王子「と、いつと？」

爺「有力貴族の娘の事を知った他の貴族が同じように娘を送つてくれるかも知れないと言つ事です」

翁「娘ならいいが、赤子まで送つてくるやも知れんな」

まさかそこまで、と笑おうとしたが翁と爺と両騎士団団長が頷いているのを見て辞めた。

嘘だと言つてよ、バーン（ry

翁「それをどう対処するかじゃな」

爺「難しい所ですね」

みんなが思案する中、王子が「いっそ、若が有力貴族の娘を求めた事にしましょうか」と言った。

はい？

王子「若は我が身可憐さにて女性を差し出すよつな者を許さない」と
う噂を流します」

僕「僕は本当にそいつら人は嫌いですが？」

王子「嘘か真かはどうでもいいんです」

僕「いえ、嘘じゃ」

王子「その上で若が有力貴族の娘の美貌に惚れこんで妾こと申し出
た」

翁「ふむ」

王子「有力貴族は王子である僕にならとこいつ事で差し出したが、若
の熱烈な申し出に仕方なく差し出した」

城の騎士団長「少し無理がありますが、こじつたにはなつていて
ので問題は無いかと」

翁「おありじゃ。王子から横取りするところ話じゃぞ」

王子「元々僕は有力貴族の娘を娶る事はできません。困っている所
を丁度良いので押し付けよう、という感じでどうじょ」

有力貴族の娘「私は不良品か何かですか？」

王子「え、いえ、そうじゃなく、その、周りを納得させる為に」

有力貴族の娘「冗談です。それくらいの扱いは句とも思いません。
ただ」

そう言つと有力貴族の娘は言つてくさうに「姫は宜しいのですか?」
と聞いた。

姫「私は本当の事を知つてます。問題ありません」

その言葉に有力貴族の娘がほつと胸を撫で下ろす。

話が纏まりそうになつた時に僕はとある事に気が付いて、急いでストップを掛ける。

僕「ちよ、ちよつと待つてください!」

王子「どうしました?」

僕「有力貴族の娘は僕の妾なので寝所に呼ばないと立場が悪くなる
と聞きましたが!」

王子「そうですね」

僕「それも最低でも月の満ち欠け毎に2~3回のペースで!」

翁「まあ最低でもそれくらいで呼ばねば立場は無いな

僕「それは有力貴族の娘を普通に妾にした場合でしょー！」

翁「それが何か？」

僕「熱烈に希望してなつてもらつたら月の満ち欠け毎に2～3回いや済まないじゃないですか！！」

僕の言葉に「あつ」という顔をする面々。

翁「確かにそうなるともつと回数を増やすねばならんな

僕「でしょー！」

いきり立つ僕に「構いません」という静かな声が聞こえる。

有力貴族の娘「元より覚悟は出来てあります」

僕「は？」

有力貴族の娘「と言つよつは、想像より待遇が良くなつたので安心します」

僕「なー」

一体どれほどのものを想像してたんだ？

魔王『愛玩ぐらいは覚悟してただろうな』

有力貴族の娘「愛玩道具ぐらいは覚悟してました」

まだ若い娘をそこまで覚悟させるものは何だろう。

家でも土地でも財産でもなく、一族の女子供の為に身を差し出す精神に怒りを通り越して恐怖を覚える。

見つめる僕の目に何を見たのだろう。

有力貴族の娘「もっとも、その場合は諦めて自ら命を絶ちますが」

僕の目を見つめて「一族の女性と子供は守りたいですが、家畜になるつもりは無い」と言った。

僕にはまだ理解できない。

でも有力貴族の娘の気高さには好感が持てる気がした。
やはりどこか姫に似ている。

有力貴族の娘「闇と共にする覚悟はござります」

有力貴族の娘の刺さるような眼差しに僕は「え、あ」としか言えない。

翁「ではそこは問題ないとして、寝所に呼ぶ回数ですが」

姫「有力貴族の娘と半分で構いません」

翁「姫」

姫「有力貴族の娘ならかまいません」

翁「で、では半々とこう」と

姫のきつぱりした言葉に翁が押し切られた。めずらしく。

翁「後は他の貴族の娘ですが」

僕「…も、そういう事をする者は『自分の娘も大事にできんのか』とか難癖つけて土地でも財産でも地位でも剥奪すればいいんですよ」

やさぐれた僕の言葉に翁が「ありじゃな」と答える。

ありなの！

翁「まあ戦後間もなく送つてくるような輩は国王軍派の者ばかりじやうづから、それでいいじゃうづ」

爺「そうですね」

翁「そこまでしたらその後、王子に自分の娘を と画策する者も減るじやろつ。出来たら罰せればよい」

翁「それで王子に対する無駄な政略結婚は減るじやろつ」

爺「その後に素晴らしい后を探されると良じでしょつ」

釈然としないと書つか、全然しつくり来ないが話はまとまつた。

有力貴族の娘と王子の婚姻については当然拒否。

もちろん王宮からの親書も全て拒否となり、そつなると国王派との決戦だ。

特使はすぐに王宮へと帰る事になるだろつ。

有力貴族の娘がどうにか大砦に残る方法は無いかと考え。

赤の騎士団団長「さりきりまで王子を籠絡できないかがんばつて見ます、とでも言えば大丈夫なのでは?」

爺「そうなると、今度は人質にされるかもと勘ぐるだろつ」

有力貴族の娘「その場合は自害する、と伝えます」

翁「それで納得するか?」

有力貴族の娘「元々、大砦への特使自体が生きて帰れるかどうかと思われておりました。それに私は有力貴族の娘です」

翁「なるほど。決死の覚悟で大砦に来たのだ。自害ぐらうする氣概はあると思われておるだろ？な」

頷く有力貴族の娘。

翁「いつその事、人質として身柄を確保してしまおつ」

爺「そうすれば人質になるかも、等と思われんな」

翁「もし特使が有力貴族の娘も一緒に戻ると言つならば『王子の后になるかも知れない者が大砦に残つて問題でも？』と言えばよからう」

そつ言つて翁は笑つた。

有力貴族の娘「父に文をしたためた物を特使に渡しても宜しいでしょ？か？」

翁「文とな」

有力貴族の娘「はい」

翁「内容は？」

有力貴族の娘「取り留めない『王子をどうにか説得します』や『私

の事は気にしないで下さい』という内容ですが、私の意見が取り入れられた時に記載する文面を父と決めてましたので、それで父に『くいつたという事を伝えたいと思います』

翁「…文は事前に確かめさせてもらひが?」

有力貴族の娘「構いません。決めた文は『必ず王子を我が夫にします』です。」

翁「そうか」

有力貴族の娘「それが届けば王都一の郭に私の父の軍勢の旗が立ちます」

爺「それで?」

有力貴族の娘「本来は父の軍勢は一の郭に詰めておりますが、二の郭まで降りて皆さんが来られるのを待ちます」

翁「ふむ」

有力貴族の娘「そして皆さんが王都の外壁を攻略した後に決起して城の門を一斉に開き放ちます。その際に空に向かっていくつもの火矢を飛ばす手はずになつております」

王都の作りは一から三の郭で構成されており、その外に町が広がりそれを城壁で囲う堅固な城だ。
いわば4枚の壁があるのである。

その一から三までの扉を開けてくれるのは嬉しいが外壁はどうにかしろと言つのだ。

有力貴族の娘「外壁も開けたとしても、外壁から一の郭まで行く間に門が制圧されて閉じられてしまう可能性があります。ですので時間短縮の為に外壁は攻略して頂かないと」

白の騎士団団長「まあ一から三の門さえ開けば後は国王軍の兵士のみ」

「後は押し切れるでしょう」といつ試論騎士団団長に頷く有力貴族の娘。

翁「特使に結果を伝えるのは明日の朝にする。特使が手紙を携えて戻る時間を苦慮して、出発は明後日の辰前、といつた所か」

その言葉に皆が頷くと「明日は戦の準備をしつかりやつてくれ」といつ言葉に解散となる。

翌日の朝食は有力貴族の娘以外の特使は別の部屋である。

有力貴族の娘ぐらいの有力者ならまだしも、本来なら一介の特使程度では王族と一緒にする事は無い。

特使は王子に食事の席に誘われたといつ件で条件を飲んでもらえると勘違いしてしまっているだろう、と言つのが翁の話である。

そして食事後に特使が呼ばれた。

王子が「昨晩はゆっくり休めましたか?」といつ質問に答える特使。一人の特使が「有力貴族の娘の姿が見えませんが?」といつ質問に「有力貴族の娘はまだお休みのようです」と答える王子。

それを聞いて特使が何を思ったのか笑顔で頷いた。

王子「お持ち頂いた親書の件ですが 条件は飲めません」

特使A「は?」

王子「我々の提示した条件以外は飲めません」

特使A「しかし」

王子「何か?」

特使A「やうなると国王軍と開戦となりますが…」

王子「そうですね。残念です」

特使A「再考していただく訳にはいきませんか」

王子「再考の余地は元々ありません。我々の出した条件がギリギリの妥協点です。」

特使A「そこを何とかお考え」

翁「くどい。本来なら昨晩の内に追い返しておる所を、王子の好意で一晩留め置かれただけに過ぎない。」

特使A「そんな」

翁「今より半時（約1時間）の猶予を与える。それ以降も大體に居る場合は特使ではなく敵の間者として扱わせて頂く事になる」

特使A「…後悔なれませんか！？」

王子「しません」

爺「我々は脣前には立つ。王都に迫るまでに条件を飲まない場合は第一条件は破棄となる。その事をしつかりと伝えて頂こう」

特使A「…分かりました。ではすぐに暇せする事に致します。」

そう言つと特使達は頭を下げようとした。

王子「そうだ。有力貴族の娘はここが気に入ったそうで少しの間、滞在を希望している」

特使A「何ですか？」

王子「そういう事なので特使殿達だけ先にお帰りください」

特使A「…有力貴族の娘に直接お会いしてお伺い致します」

王子「まだ休んでおると申しましたが？」

特使A「有力貴族の娘には申し訳ないが人をやつて起きていただく事になります」

翁「構わんが、女性の支度は時間掛かるからの。半時……刻々と時間は過ぎておるが、それで間に合つかの？」

その言葉に特使達が息を呑む。

翁「あああうじや、昨晩、有力貴族の娘に渡されたものがあった

そう言つと翁は懐から手紙を取り出し、白の騎士団の手に渡す。

白の騎士団は受け取った手紙を特使Aに手渡した。

翁「有力貴族の娘から父君へ当たた手紙だそうじや」

特使A「……どうしても有力貴族の娘は帰さないと申す事ですか？」

翁「残りたがつてあるからのう。本人の意思を尊重しておるだけじや

特使A「なら本人に確認を！」

翁「好きにするがいいが、時間は最初に申したとおり半時だけじや

特使A「…人質にするおつもりか!」

翁「言葉に氣をつけ為されよ」

特使A「な、何を」

翁「有力貴族の娘は、本人の意思で、残る、と申してある」

特使A「それは」

翁「それを人質などと言つ。それは王子の言葉を疑うと?」

特使A「…」

翁「王子への不敬は例え特使でもその場で斬り捨てても構わないが
?」

そう言つと西騎士団団長と周りに居る兵が柄に手を掛ける。
それを見て顔を青くする特使。

王子「まあ翁、それくらいにしてあげてください。他のものもよい

王子の一言で周りの兵は柄から手を離す。

王子「特使殿も有力貴族の娘の身を案じての事でしょう

コクコクと頷く特使達。

王子「本当に本人がそう言つてるんです。信じて頂けますか？」

特使A「…は、はい」

王子「ではお詫はこじままでですね。無事王都に戻られるよう。」

そう言つとHが特使の退室を告げる。

特使と他の兵が退出したのを確認すると奥の部屋から有力貴族の娘が出てきた。

有力貴族の娘「ご苦労様です」

王子「特に苦労もしてません。それにしてもまさかあそこまで拒否されるとは思つていないと私は思いました」

有力貴族の娘「基本的に先が見えてないんです。あれで受け入れられる訳ないのに」

翁「だから救いが無いと言える」

代々受け継がれただけの地位に胡坐をかき自分達の身の丈を知らず、不利になつてもそれを認められない俗物はこれだから、と翁が言つ。

翁「だから御し易いのだがな」

王子「有力貴族の娘、半時程で特使は皆を出ます。そうなれば自由に動いていただいて結構ですよ」

有力貴族の娘「宜しいのですか?」

王子「若の第4王妃なら問題ありません」

王子が笑顔で言つて聞いて僕はため息をつく。

今まで存在感は無かつたがこの部屋にはちゃんと居た。

それを見た有力貴族の娘は笑い「姫と一緒に居る事にします」と言った。

特使の動きは意外と早かった。

部屋を退出して一刻後には皆を出て、外に待たせていた兵と合流する。するとすぐに王都へ向けて出発していった。

どうやら早馬も飛ばしたようである。

決戦の日は近い

魔王『本来なら今頃、王都に攻撃していたかの知れんがな』

『の回り道があつたからこそ、有力貴族の娘という得がたい仲間

を得て

魔王『嫁が4人になつたと』

……

魔王『良かつたな。それもこれも領主息子のお陰だ』

僕「そうか…全て領主息子のせいか…」

僕の呴きに翁が「何がじゃ？」と言ひつ。

僕「いえ、渓谷で領主息子が突撃しなければ、今の状況にはなつていなかつたのだろうな、と」

王子「確かにそうですね！」

翁「そうなるとアヤツの戦果は物凄い事になるな！」

僕を姫と婚約させ有力貴族の娘を僕の妾にし王都攻略の糸口を掴むきっかけになつた。

確かに王都攻略の糸口だけで見たらすごいが、領主息子は特に何もして無いからね！

というか僕の犠牲分が大きすぎる気がする。

領主息子の居ないところで盛り上がる他の面々。

王子の「姫と若を結びつけた功労者として、婚約発表時に大々的に何かを報いましょう」という言葉に爺が「それはいいですね」と言う。

啖きが斜め上を行く状況を作つていつているが、姫との婚約も有力貴族の娘を囲うことも変わらない。

それなら領主息子が報われるならいいか、とポジティブな思考を無理やり考えられないとやってられなかつた。

第27話 「原因は領主息子」（後書き）

誤字修正

蒸すかしい

難しい

特使事態

特使自体

送つてくる矢も

送つてくるやも

棒「は？」

僕「は？」

外壁も空けた

外壁も開けた

申しましたが

申しましたが

回りに居る兵が

周りに居る兵が

第28話 新たなフラグ？

魔王『何故お主は婚姻や女を囮つ事を嫌がる?』

魔王が不思議そうに聞いてくる。

僕は剣を磨いていた手を一瞬止めたが、再度磨きながら答えた。

婚姻に関してはまだ僕には早いと思つてゐるんだ

魔王『別に早く無いぞ? それくらいの歳で結婚する者もいる』

『この世界の結婚は早いんだね

魔王『まあ全てが全てでは無いがな。身分や性別により変わる』

結婚が早いのは貴族の子どもと農家の娘である。

貴族の子どもが男女問わず結婚が早い理由の一つに、この世界の乳幼児の死亡率の高さが上げられる。

貴族が恐れるのは子が出来ず家が潰える事である為に早く結婚をし子を為すのである。

農家の娘は働き手としても期待される為に、どの家でも若く健康的で力のある娘が求められている。

逆に結婚が遅いのは商いをしている男である。

若いうちから働き、ある程度の財産が出来てからそろそろ結婚という頃にはいい年になつてゐるのである。

魔王『姫も国が荒れて居なければ今頃は同じくの国に嫁いでいるだろ？』

そう、か

魔王『だから決して卑こと言つわけではない』

魔王の言葉にビビリおつか迷つ。

魔王『姫が嫌いか？』

そういづわけではない

魔王『では何が嫌なのだ』

嫌な事は無い

魔王の言葉に僕は言つ。

嫌じやない。これは本当だ。

魔王『ならなんだ？』

僕は魔王じやない

魔王『何?』

『の体は魔王のもので僕ではないから

魔王『…だから婚姻を逃避してこうとへ』

僕はいつ居なくなるかわからぬからね

魔王『一つだけ言わせて貰う』

魔王が真剣な口調で言つ。

魔王『我とお主は一つだ』

魔王?

魔王『我はお主で、お主は我だ。そこまで考える必要はあるまい』

そう、なのかな

魔王『むむ』

もし僕が居なくなつたら…

魔王『そうだな。その時はその時考えればよい。ただ』

魔王は軽くそつとお主は消えぬよ』と呟いた。

魔王…

魔王『消えるなら最初から消えてる。お主みたいなしぶとい者は消えぬよ』

そいつと魔王は笑つた。

魔王『で、だ。問題は解消されたのだから女を困う事に対する抵抗も無くなつたであら』

それはまた別問題だよ！

魔王『何だ？他にあるのか。面倒くさいな』

本当に面倒誘ひに言ひつゝ『理由を申してこら』と言つた。

僕は一夫一妻制の世界…國で生まれ育つたんだ。

魔王『だから…』

だから一夫多妻制は考えられないんだ

魔王『それだけが理由か？』

それだけつて

魔王『おぬしの住んでいた世界は分からぬが、この世界では問題ない。慣れろ』

慣れろつて…

魔王『本当は他に理由があるのだらうへ』

『試してみる』と魔王が言ひ。

姫と結婚するのに他の女性をとこつのは姫に対して失礼な気がする

魔王『その姫が受け入れているでは無いか』

それでも…

魔王『では有力貴族の娘を見捨ててしまつと…』

そうじゃない！

魔王『では他に方法があるのか？』

それは…

魔王『無いであらう』

魔王『それに有力貴族の娘には手を出せんとか考えておるだらう?』

魔王『黙り込む僕に魔王が続ける。

魔王『それに有力貴族の娘には手を出せんとか考えておるだらう?』
うん

魔王『愚かな判断だ』

どーが?

魔王『そんなのは建前というのがわからんのか?』

違う

魔王『そうなのだ。それは有力貴族の娘も分かっている』

そんなはずは無い

魔王『そうでなければ妾に、などと言ひ出せん。それも初めて会つたばかりの男相手にな』

それは

魔王『初対面で妾の契約をしたんだ。 そななる事を織り込んで契約している。当初は偽装としても後々求められた場合は拒むまい』

そんな事は

魔王『無いと? 何故そう思ひづ?』

つ

魔王『姫も有力貴族の娘も「ある事」として既に納得すべくだまさか

魔王『だからお主は愚かだといつ』

魔王が嘆息する。

魔王『ちゃんと相手をするのは有力貴族の娘を妾として受け入れたお主の義務だ』

そんな義務は

魔王『まだ言つか?もし本当に有力貴族の娘に手を出さないつもりなら、せつせつと解約しろ』

それは出来ない

魔王『何故だ?』

そうすると有力貴族の娘の身内を守れない

魔王『なら本当に妾にしてみる』

何で!何で手を出すか助けないかの2択しかないんだよ!—!

魔王『お主は有力貴族の娘を抱かずに置いておく事がどれほど残酷かわかるか?』

残酷?

魔王『お主に困られたならもう他に嫁ぐ事は出来ない』

!

魔王『嫁ぐ場合はお主と妾の契約を解除した時だ』

その時はそうすればいい!

魔王『そつなると有力貴族の娘は後ろ盾を無くす』

解約しても後ろ盾として力を貸す事は出来る!

魔王『できぬよ』

出来る…

魔王『してはならんのだ』

何で…!

魔王『相手の家に泥を塗る事になる』

どうしてそれが泥を塗る事に…

魔王『他人の嫁に何時までも口出ししてたらどう思つ? それ伴う結果がどうなるかも想像出来ないのか?』

それは…想像できる。

魔王『それには。お主は王族になる。王族の妾を欲しがるような不敬なものは居ない』

その言葉に絶句する。

そうだ。

僕が王族だといつのは納得できないが、立場的にはそういう事になる。

その王族の妾をという事になると相手は王子しか居ない。
王子が有力貴族の娘と、といつのは限りなくに近い。
無いと言つてもいいぐら^レいだ。

魔王『その娘に対して子を授かる権利を一生与えないといつ?』

そんな…

魔王『おぬしとの妾契約とはそつこう事だ』

ならーなら妾ではなく保護といつことに

魔王『それでは弱いな。有力貴族の娘一人なら保護できるが、身内を全員守れるかは分からない』

全員保護するのは!?

魔王『それが出来るなら有力貴族の娘も妾契約など最初から結ばん』

なんで！

魔王『お主が「有力貴族の娘に惚れこんで妾に所望し、その条件が身内の保護だったのでお主が押し通した」という建前があつてこそだ。そうで無ければ敵の、それも首魁の一族の者など助けられるか』

そんな…

魔王『姫も領主娘もそこまで分かつて受け入れたのだ。何も理解していなのはお主だけだ』

魔王の言葉を呆然と聞く。

そこまでの事だったなんて

魔王『そこまでではなく、そこ以上のものだった、という事だ』

有力貴族の娘の毅然とした態度と涙を流していた姫の顔を思い出す。

だから姫も当初は涙を流したのか…

魔王『やつと分かつたか』

う、ん

魔王『…有力貴族の娘も本当の妾にしてやれ』

簡単に返事が出来ない。
本当に言いのだろうか?

魔王『まだ迷つか?』

それは… もちろん

魔王『理解はしたんだろう?』

うん

魔王『なら良いではないか』

そう、なのが

魔王『それでもまだ踏ん切りが付かないなら、有力貴族の娘を見て
決めればよからう!』

え?

魔王『一緒に過ごす中で有力貴族の娘を知り、その時が来たなら躊躇わずに抱いてやれ』

魔王の言葉をかみ締めて頷く。

無理強いだけはしないようにしよう。

今後はそういう契約をする時は『気をつけよう

魔王『『氣をつけても無理なときは無理だがな』

そんな事言つなよ！

魔王『まあ、少しは『氣が晴れたか？』

そう聞かれて気持ちが少し楽になつていて『氣がした』。
姫との婚約にしても有力貴族の娘の事にしても、なるようにならぬにしか成らない。

そう思えたお陰かもしれない。

魔王ならこんな事で迷わないんだろうね

魔王『『当たり前だ。我なら『氣に入つた女はどんな事をしても手に入れる』』

そうですか

魔王が自信満々に言つ。

魔王って女性経験あるの？

魔王『当たり前であろう』

そ、そりなんだ

魔王『我は魔族の王子だぞ？王妃は居ないが妾は何人か居たしな』

今はその人たちは？

魔王『さあな。他の王子に連れて行かれたか、それとも逃げ延びているのか、わからんな』

心配ではないの？

魔王『心配しても始まらん。それに我の妾に簡単にやられるような女は居ない』

そうなの？

魔王『われは大人しい女は好みではないからな。武装に長けたような気の強い者が好みだ』

『そういう意味では有力貴族の娘は中々だな』といつ。

え？

魔王『あの娘も何かやるだろ？。片手剣辺りだろ？が、護身術程度

とこりわけでは無い様だ。そじらの兵士程度なら粗手に出来るだらうな』

まじですか？

魔王『それでも我の好みからしたらまだまだだな』

そんなに強いの？

魔王『強いな。ここの騎士団程度なら簡単にあしらひだらう』

その人達が前に言つてた婚約者？

魔王『そんな訳なかりつ』

え？違つの？

魔王『我の婚約者になる程の地位を持つたものをそつそつ妾には出来ん』

魔王…

魔王『なんだ？』

その婚約者と妾の人達が現れて酷い目に合わされたりはしないよね？

魔王『どうだろ？』

魔王！？

魔王『妾は我のやる事に文句は言わないだろ？が、婚約者は我が婚姻を結んだ事にどういう反応をするか…』

ちよ！

魔王『まあ前にも言ったが、今頃破棄されているだろ？。仮にするな』

そう言つて魔王は笑う。

どう考へてもそういう話をするとこういう事は出でくるフラグなんぢゃ…いやさて！

オープニングでは出でくるのに本編で一切出でこない敵が居たりするんだ。大丈夫！！

魔王『何を言つていい』

『めん。あまりの事に現実逃避してた

魔王『現れたらその時考えたらよからう』

他人事のように言つね

魔王『まあ苦労するのはお主だしな』

魔王も僕なんでしょう？

魔王『あればお主を納得させる嘘だ』

ここで語りの！？

魔王が笑う。

本当に最初の頃のきるような冷たさからしたら考えられないぐらい笑うし冗談も言し、人を気遣う。

これがお互いの精神が影響しあった結果なんだろうか。

僕も変わっているのか？

自分では分からぬけど、戦場で相手の剣に怯える事が無くなつたのは成長なのか魔王の影響なのか。

そういうばんを斬つても何も思わなくなつた。
その事に思い至つて驚いたけど、それだけだ。

殺らなければ殺られる状況だつた。

別に進んで殺したいとも楽しいとも思わないけど、しなければならないなら躊躇はない。

そういう風に考へる事が出来ること自体が昔の僕ではない証拠だろう。

う。

いつまでもままなんだろ？

魔王『さあな』

僕はいつの間にか止めていた剣の磨きを再開する。

この剣は折れたので王子がくれた剣だ。

中々の一品らしく未だに使つてゐる。

毎日、美女さんに言われたようにちゃんと手入れしていくお陰といふのもあるだろ？

そういうえば魔王になるのに魔剣とか無いの？

魔王『魔剣は持つてなかつたが、それなりの剣は持つていた。今は無いが』

無くしたんだ

魔王『まあな』

すいの？

魔王『まあ我が魔力を込めても壊れない』といつ頑丈な剣だった

へえ。炎の剣とか水の剣とかそういうのじゃないんだ

魔王『それは精靈の加護がついた精靈剣だな。炎の精靈の加護で炎を出したり風の精靈の加護で剣圧を飛ばしたりする程度だな』

斬つた相手を呪つたりするよつた魔剣とかは無いんだ

魔王『そういうのは見たこと無いな。それに魔剣や聖剣と呼ばれるものは多くの逸話を残して後に呼ばれるようになる』

どうこういと？

魔王『お主が今使つている剣を使い続け歴史に残るよつた事をすれ

ば、いすれは魔剣や聖剣と呼ばれるよつになる』

一じゃあ普通の剣と変わらないとこり」と?

魔王『まあそり呼ばれるだけの何かを持つていいのは確かだな。そ
こらの剣では語り継がれる前に朽ち果てる』

そりか

魔王『我が戦つた勇者が聖剣を持っていたな』

それに相打ちで撃退できたのー?』

魔王『我の勝利で撃退、だ』

え、あ、うん。で、どりやつたの?』

魔王『どりも何も、普通に戦つたまでだ』

聖剣相手なのに?』

魔王『聖剣でもやつよつはある』

どんな性能を持つていたの?』

魔王『良く分からんな。切れ味のいいだけの剣に見えた。』

そりなの?』

魔王『まあ剣の性能を知るには食らわねばならんからな。それはさ

すがに出来ない』

それもそつか

魔王『勇者が持っていたのだ。唯の剣ではあるまい』

どんな剣だつたんだろう?

魔王『さあな。我が剣と相打ちになつて両方折れた』

折れたんだ!

魔王『聖剣は人族が回収したと噂で聞いた。我的剣はどうなつたの
だろうな』

折れた剣は治せるの?

魔王『聖剣、魔剣もだがそのクラスになると普通には無理だろうな』

でも治す方法はあるんだ

魔王『私は知らんがな。我的剣はそれなりの者が打ち直せば使える
やもしれん』

じゃあ誰か別の魔王に拾われているかも知れないね

魔王『まあ他の奴に使いきれるとは思わんが』

そうなの?

魔王『我の魔力を受け止める事が出来るだけの器を持った剣ではあるが、魔力が小さい物が使つても大した威力は引き出せんだ』

魔王のほかの候補者は？

魔王『どうだかな』

『最後に会つたのは幼い事だからよくわからん』と魔王は言った。複雑な家庭のようだ。

魔王『魔族の王族だぞ？後継者争いで殺し合ひをするのだぞ？普通であるわけが無い』

それはそうだ

今、魔王の国はどうなて居るんだろうか？
もしかしたらもう誰かが王位についているかも知れない。

魔王『それは無から』

なんでそう言えるの？

魔王『本格的に戦が始まれば、幾ら人族の土地と遠く離れてゐるといえ噂ぐらいいは聞こえてくるはずだ』

でも他国の、それも魔族の国の事なんて噂でも流れ来るかな

魔王『来るな。 我の国は魔族の国でも大きい方だ。 その国の動向は人族の国でも注意を払っているだろうよ』

そうなの？

魔王『王によつては人族の国への侵攻が行われる事もある。 王位継承争いとなると一大事だろうな』

だからまだ大きな戦にはなつていなかつたというが、情報がまだ来てないだけで始まつてゐる可能性もある。

出来るだけ早く魔王の国に戻らないとダメなのではないだろうか？

魔王『今の我には力が無い』

力…

魔王『戦は我だけでは出来ない。 信頼できる力を手に入れるまでは、どちらにしても国には戻れんさ』

力…か

この国の戦力を使うつもりは無い。
それは魔王も考えていないようだ。
力と言つてもどうすればいいのだろう。

魔王『そつ考えると、この国での出来事はいい練習になつたのかもしれないな』

練習といつ言い方は御幣があるが、そつ考えも出来るだらう。

『まあ今は日の前の事を考えるがよい』と魔王が笑う。

剣の磨き残し無いか日に^{かさ}覗してみる。

綺麗に光を反射させているのを確認し鞘に收める。

そうだね。まずは王都攻略に集中しよう

魔王『我は姫と有力貴族の娘の事を言つたのだがな』

ぐつ

魔王はいつも一言多かつた。

第28話 新たなフラグ？（後書き）

誤字修正

磨いていたてを 磨いていた手を

切つても 割つても

譲歩がまだ着てないだけで

情報がまだ来てないだけで

御幣

語弊

磨きの腰が 磨き残し

領主娘 有力貴族の娘

そんな分け そんな訳

帝位

王位

磨きの腰が 磨き残し

第29話 弟子入り

やはりと言つたか何といふか。

国王軍を退けた事により反国王軍へ身を寄せた領主が少くない数現れた。

その総数約1200。

こんなに早く来るのは国王軍に身を寄せる予定だつたのか、それとも元々反国王軍に参加するつもりだつたのかは分からぬ。中には先の大皆へ来た国王軍に参加していたものも居たが、何かと言ひ訳を付けては仕方なく国王軍に参加せざるを得なかつたという事を熱弁していた。

その領主達と面会をし終えた翁が「やましい気持ちがある者ほど良くしゃべる」と冷笑していた。

僕「まだこんなに参加していない兵が居たんですね」

白の騎士団団長「国内からかき集めたらまだまだ居ますよ
僕「やうなんですか?」

赤の騎士団団長「我が軍と国王軍を別としても1～2万近くは居る
だろうな」

僕「それが国王軍に参加したら勝ち目がなくなりますね」

赤の騎士団団長「集めるのは不可能だな」

僕「何故?」

赤の騎士団团长「国境警備等と国境近くの小規模領主ばかりだからな。国境の兵を動かす事は出来ないし、いまの状況で国王派に付く領主は居まい。」

翁「今更来た領主には申し訳ないが苦渋を飲んでもらう」

王都攻略では厳しい戦線に送られると言つ事だ。

今更来では文句も言えない上に、もしかしたら戦果を稼げるかもしれないのだ。

どの領主も文句は言えないだろう。

翁「意趣返しした領主に関しては、まあそれなりに頑張つてもらつた後に理由をつけて責任を取らせれば良いだろう」

「どうせ叩けばホコリしか出まい」と翁は笑つ。
酷い様だが国を良い方向に運ぶ為には仕方ない。

今までの付けを帰すときが来たのだ。

兎にも角にも新たに来た領主を含め総数15000を越える兵となつた。

昼前に一度軍議が開かれた。

方針は既に決まっているので形だけの物に近い。

新しく参加した領主も増えた事により、再度、略奪暴行に対する厳しい対処を取る事をしっかりと徹底させる事になった。

軍議が終わり一人で廊下を歩いていると声を掛けられる。

振り返るが見覚えの無い顔なので新しく来た領主の誰かなのだろう。笑顔で挨拶してくる領主達に同じく挨拶を交わす。

特に何と言つ内容でもなく世間話のような内容を振られる事に困惑する。

一体、この人達は何の為に僕に話しかけるのだろう

魔王『大方、姫と懇意にしている事や反国王軍でも重きを置かれている事を聞きつけて媚を売りにきたのだ』

一体そんな事をしてどうなるんだ。

魔王『お主が考える以上にお主は価値が出てきているのだ』

今までこんな事は無かつたのに

魔王『それは周りに護られていたのだ。』奴らは来たばかりでそれを知らぬからな』

そういう事らしい。

その後も意味の無い会話が続く。

早くこの空間から逃げ出したいが無下に扱つてもいいものか分からず、とりあえず無難に受け答えだけする。

話が僕の事に偏つて「何処の出身なのか」「今まで何をしていたのか」という話になつて来た。

魔王に『適当にはぐらかせ』と言われたので曖昧に答えていたら一人の領主が「よければ私が後ろ盾となりましょうか」と言い出した。

魔王『本題が来たぞ。絶対に乗るな』

わかった

後ろ盾に関しては翁と言つ事にして相手に伝える。

後で翁に謝らなければならない。

さすがに翁相手では強くは言えない様でほつと胸を撫で下りやうとしたら「よければ我が家の者と婚姻を結びませんか?」と急に言い出した。

もうオブラーートに包むつもつも無いらしい。

何だつて僕なんかにここまで言うんだ

魔王『反国王軍でも重きを置かれていて付け込めそつのがお主だけだったのだろう』

魔王『しかも思つたより価値がありそつだと判断したらじこ』

価値？

魔王『今後の国の重鎮となる翁が後ろ盾だからな』

面倒だな

『翁じや無ければもつと強く後ろ盾として立候補したかも知れぬな。そつなれば婚姻させよつが向しよつが意のままにできるしな』

本当に面倒な事になつた。

娘や孫や、中には未亡人まで僕に宛があつと者もいる。頭がおかしいのではないだろうか。

「今はそんなつもりはありませんから」とキッパリ断つたにも関わらず、「一度会つてみてもいいのでは」と貪つてかかる。

魔王『無駄に言質をとえたりといよいよ解釈されるような事を言つのは得策ではない。あつぱり断れ』

わかつた。

魔王に頷きながら、翁には申し訳ないけど召前を使わせて貰つて逃げる事に決める。

後継人である翁からそういう話を既に頂いており、もう大体の事は決まっている、と伝える。

姫との婚約は決まっているので、一部は嘘ではない。
そう言うと「相手は誰でしょう?」と詰め寄る領主達。
中には「気が変わるかも知れないのでは、良ければ一度会ってみるもの」とあきらめ切れない領主も居た。

本当に面倒になつて、そろそろ切れてもいいかな?と思つた頃に赤白両騎士団団長が現れた。

2人はざっと見ただけで状況を理解したようで、白の騎士団団長が「騎士団の訓練に付き合つてくれると仰られていたのに来られないと思つたら、このような所にお出ででしたか」といつもより丁寧に言つた。

騎士団の訓練?

魔王『この場を逃れる為の驟だらつ』

僕が「申し訳ありません」と謝罪する。

赤の騎士団団長が「して、皆さんは若に一体、どの様なご用件で?」と言つとじどうもじうに「世間話などを」と領主が答える。

それを聞いて「では訓練の時間も押してますので」と言つと赤の騎士団団長は背を向けて歩いて行つてしまつ。

僕がその姿をてこむと白の騎士団団長が「若も」と僕も連れ出してくれた。

領主達に短く別れの挨拶を言ひながら西騎士団団長と共に廊下を歩いていった。

白の騎士団団長「災難でしたね」

角を曲がり領主達から見えなくなると白の騎士団団長が笑った。
それを聞いて赤の騎士団団長が鼻を鳴らす。

赤の騎士団団長「あのよつな奴らを一々相手にしなくていいだろ
う」「冗談」

僕「無下に扱うのも問題かなと思いまして。まさかあそこまでとは
思はず」

白の騎士団団長「まあ彼らも家や土地、財産を護る事に必死なんじ
ょ」

赤の騎士団団長「あの程度の輩に気を使つ必要など無い」

ずばっと切り捨てる赤の騎士団団長。

翁の名前を出して話をせぐらかした事を伝えると「こい判断です」と言われた。

ただ話は通しておいた方がいいことつ事になり、翁に会って行く。

翁は王子と爺と領主息子と共に話をしていたようだ。

「どうやら今後の国を治める為の人事を考えていたらしい。

話を聞いた翁は「別に構わんよ」と言つた後に笑つた。

翁「もし恩に感じるなら今後、主要な地位に付いて国政を助けてくれたらいいぞ？」

僕「それは」

翁には迷惑を掛ける事になる。

しかし国政には何があつても関わりたくないのは本心だ。

それをどうぞよつかと考えていたら、「冗談じゃよ」と翁が笑う。

翁「逆に今までの恩を少しでも返せると想つて、後見人くらい安い
もんじや」

王子「そうですね。僕がなつてもいいへりです」

さすがに王子はやつすぎだらう。

それにもう領主達には翁がと言つてるわけだし。

王子もそこまで本気で無いだらつから別にいいけど。

部屋を退出すると白の騎士団団長が「行きましょうか」と僕に笑いかけた。

僕「どうく？」

赤の騎士団団長「騎士団の訓練に決まっているだろ？」「

そうやら先程の領主から逃げる為の言訳を実行しようとしたのに言つてゐるらしい。

僕「あれはあの場を去るための一時的な言い訳では？」

白の騎士団団長「それでも本当に訓練に参加したかは大體内に居たらわかるでしょう」

僕「確かにそうですが、別に嘘がばれてもいいのです？」

白の騎士団団長「何を言つてるんですが、領主達の心象を無闇に悪くするのは不得策じゃないでしょう。だから貴方も先程困っていたんですね？」

僕「そうですが、さつき嘘を使つ必要は無いと……」

赤の騎士団団長「まあいいから付き合へ」

赤の騎士団団長はそういうと僕を騎士団の訓練場に引きずつて行く。
どうやら逃げられそうではない。

『あきらめ』といつ魔王の言葉に僕は溜息を付いた。

騎士団の訓練は実戦形式だった。

剣と同じくらいの重さにされた木剣で行われる。

1対1で騎士団団員を相手に適当にあしらっていたら、5人目辺りで2人目が投入される。

何だ?と思い両騎士団を見たら美女さんが居た。

美女さんの差し金か!

魔王『そうだろうな』

『余所見をしてるとやられるぞ』という言葉に2人の騎士に集中する。

一人の騎士を打ち倒し一対一になつた所に2人の騎士が投入され、一対三になる。

一人倒す、一人追加される、一人倒す、追加される、倒す、追加される。

どうやら3人以上は増えないようだ。
これなら何とかなりそうだ。

白の騎士団団長「やりますね」

赤の騎士団団長「一人相手にいつまで遣られつ放しのつもりだ!」

赤の騎士団団長が激を飛ばし騎士団中隊長クラスを呼び寄せる。集まつた騎士団大隊長クラスが呼ばれる。

騎士団は約4000名の集団である。

団長と副団長以下、連隊長で2名、大隊長で10名、中隊長で20名、小隊長になると200名、分隊長になると400もの人数になる。

その騎士団大隊長クラスが呼ばれたのである。

両騎士団で20名になる。

赤の騎士団団長「次からお前達に出てもらひ。順番を決めておけ」

そう言わると両騎士団大隊長達は手早く順番を決める。
そうして一人倒すと大隊長の一人が入ってきた。

大隊長クラスが一人入るだけでかなりの負担が増える。
攻撃を避けて反撃しようとすると大隊長がそれを阻む。

それでも何とか騎士団員を倒すと後退で大隊長が入ってきた。

3人とも大隊長になる頃には7割近くが防御となり、中々攻撃できない。

それでも半分以上の大隊長を撃退した頃には息が上がっていた。

赤の騎士団団長「相手はもう息が上がっているんだぞ!」

赤の騎士団団長の発破に大隊長達が気合を入れる。

捌ききれなくなってきたて防戦一方になり押され始める。

息も上がり疲れている僕は、一人の攻撃を捌いたところで体が空いてしまった。

そこに打ち込もうとする一人の大隊長。

急に全てがスローモーションのようにゆっくり見えた。ゆっくり迫る木剣の腹を開いた手で押しのけて流れた体に木剣を打ち込む。

その痛みに倒れそうになる大隊長の体を掴み一人の大隊長に向けて突き出す。

怯んでいる間に距離を取つて身構える。

赤の騎士団団長「ほう」

白の騎士団団長「やりますね」

そう言うと白の騎士団団長は2人の追加を呼びかけた。

一人倒して2人追加で一対四になる。

囮まれないように位置取りしながら向かってくる相手を捌きつつ隙を探す。

剣を受けて避いて打ち返しながら捌いていると横から一人突っ込んできた。

剣を何とか避けつつ拳を握つて相手の顔面に打ち込む。

いきなりの剣以外の攻撃に顔面を殴られた相手は倒れ込む。

赤の騎士団団長「油断するからだ！」

白の騎士団団長「そうですねえ。実践ではどんな攻撃がくるか分かりませんから」

2人の騎士団団長の声が遠くに聞こえる。

後何人倒せば終わるんだ?

魔王『ほれ、またくるぞ』

疲労で深く考える事を放棄した僕は向かってくる相手の攻撃を裁きながら反撃をしながら、時には拳や蹴りで相手を打ちのめす。どれくらいやつていただろうか。
敵の攻撃が止んだ。

剣を構えながら注意深く次を待つていると拍手が聞こえた。

白の騎士団団長「すばらしくー!」

赤の騎士団団長「まさか大隊長クラスが全員やられるとはな

そいつ言つて近づいてくる。

白の騎士団団長「大丈夫ですか?」

僕「…もう、無理、です」

息を切らしながら答える僕に「よかつた」といつ笑う白の騎士団団長。

白の騎士団団長「」のまま連隊長、副団長まで倒されたらどうしようかと思いましたよ」

赤の騎士団団長「一人相手にやられるとは、精進せねばならんな」

赤の騎士団団長に頷く大隊長の面々。

その姿を見ながら僕は木の陰に入り腰を下ろす。
と、水の入った器が差し出された。

有力貴族の娘「なかなかやるじゃない」

器を受け取つて水を喉に流す。

どうやら汲み立てのようで冷たくて気持ちいい。
姫も近づいてきてタオルを渡してくれる。

有力貴族の娘「私もやるけど、あそこまでは無理だわ」

僕「そう? 美女さんにはまだまだ敵わないけどね」

そういう僕に「え？」と驚く有力貴族の娘

有力貴族の娘「あの人、そんなにすごいの？」

僕「すごいよ。多分、僕と同じ数を相手にしても笑顔のままだと思
う」

魔王『そのまま騎士団団長まで倒してしまつかも知れんな』

有力貴族の娘「そんな…信じられない」

「それは試して見たいですね」白の騎士団団長が近づいてきた。
両騎士団団長が美女さんと近くまで来たようだ。

僕「下手に行つと両騎士団の団員も新しい宗教に目覚めてしまいま
すよ」

その言葉に白の騎士団長が笑つ。

赤の騎士団団長「なかなかやるとは聞いているが、そんなにすごい
のか？」

僕「連隊長と副団長くらいならまとめて相手にしても平氣だと思いますよ」

赤の騎士団団長「ほひ」

美女さん「若の[冗談]ですよ」

笑顔で~~否定~~する美女さんに「是非やつてみてください」と言ひ両騎士団団長。

断つていた美女さんも「私もお手並みを拝見したいです」と真剣に言つ有力貴族の娘の言葉に笑顔を僕に向ける。

僕「美女さんがよければちょっとだけやってみてあげたら?」

僕の言葉に「よくは無いのですが…」と美女さんが「連隊長2名と副団長2名の4人のみで追加しななら」としぶしぶ笑顔で了承した。

結果については両騎士団副団長と連隊長達の名誉のために多くは語らない。

決して無様な仕合をしたわけではなく、素晴らしいものだったと言えるだろう。

4名が弱いわけではなく相手が悪かつたというだけだ。

赤の騎士団団長が「追加しなんていわないほうが良かった」と後悔し、白の騎士団団長が「若の女性でなければ求婚している所です」と絶賛した。

別に僕の女性ではない…はずだけど。

そしてやはり両騎士団で新たに改宗するものが続出したようだ。

翁の兵士達から始まつた宗教も数を増やし、今や数千に渡る信者を獲得したようだ。

国教になる日も近いかもしれない。

そして有力貴族の娘が美女さんに弟子入りした。

当初は断つていた美女さんだが、「私も強くなつて姫を守りたいんです！」と言う言葉に「若の女性ですから特別に」と折れたようだ。美女さん曰く「中々です」という事なので、いずれ国を代表する使い手になる可能性もある。

僕も斬り殺されないように精進しないといけないかも知れない。

第29話 弟子入り（後書き）

誤字修正

域が上がつて 息が上がつて
切り殺されないように 斬り殺されないように
一人倒す、使いされる、 一人倒す、追加される、
攻撃を裁いた 攻撃を捌いた
相手を裁きつつ 相手を捌きつつ

第30話 王都攻城戦

大砲を出て1日半、^{ほじ}時前（15時頃）王都が見えてきた。
本来ならもつと早めに着ていた場所なのだが、いろいろな外的要因
により時間がかかった。
といつても数日の違いだが。

その数日の所為で僕は大変な目に…

もういいんだけどね。

やっぱりあの時王都に向かっていれば、と思わないでもない。
そういう思いを振り払い王都へ目を向ける。

王都まではまだ距離があるが隊列を組む。

反国王軍 約15000

本隊、王子、翁、僕、美女さん、兵数約4700

前衛、騎士隊長、兵数約1200（大砲後に仲間になつた領主軍）

投石部隊、現領主、兵数約1000、投石機100台

右翼、赤の騎士団、兵数約4000

左翼、白の騎士団、兵数約4100

バラして運んでいた投石機がすぐに組み立てられる。

投石機1台に石を積んだ馬車1台、兵が10で一集団である。

投石機が組みあがると、進軍を開始し、速度を合わせて王都を田指して進みだした。

王都の面前まで来る。

国王軍の人数は不明だが、籠城策を取るようだ。

王都から弓が届かない場所で停止をし、隊列を組みなおす。

双方からラッパが鳴り戦闘が開始される。

前衛と両騎士団の一部が前進し弓を射掛ける。

城壁に並ぶ弓兵の数は圧巻である。

弓矢の応酬が続き、双方に少なからず損害を出し始めた頃に翁が投石兵に指示を出した。

放たれた投石は仲間の頭上を越えて城壁に当たる。

一つでは城壁に小さな傷を残す程度だがいくつも当たる事により大きく揺らすようで、城壁上の弓兵がバランスを崩すのが見える。しかも投石は数個で一箇所を狙っている為に城壁に与えるダメージは中々なものようだ。

城壁の門を狙つて飛ばされた岩の一つが門に直撃をする。

その一つで門に多大なダメージを与えたようだ。

それを見て反国王軍の兵士が歓声を上げ勢いを増すのに反比例して城壁を守備する兵は初めてみる攻撃に動搖を隠せず指揮系統が乱れる。

そこに各所から「押し込め!」という号令が上がる。

投石が飛んでこない箇所の城壁に兵士が張り付き梯子を掛けた。

城壁からも兵士を引き剥がそうと弓を射掛けたり岩を落としたりするが、反国王軍の士気は高く次々と城壁に張り付く。

それと時を同じくして投石機より放たれた岩が門を破壊した。

そして門の後ろに控えていた兵を何人か巻き込みながら城壁の中に転がっていく。

城壁が開かれたのを見た騎士団長が突撃を命ずる。

盾を掲げて突撃する騎士団隊長の部隊。

すぐに城門付近は敵味方入り乱れた混戦となる。

それを見た右翼の赤の騎士団団長が動く。

待機していた部隊を城門付近へと移動させると、城壁の上に居る『』兵に山のような矢を射掛ける。

そして城壁の上の『兵がある程度排除すると赤の騎士団全軍へ突撃を命じた。

城門を抜けさせまいと必死で抵抗を続けていた城壁守備隊も赤の騎士団の参軍に戦線を維持できずに崩れる。

そのまま王都へと雪崩れ込んだ騎士団隊長の軍と赤の騎士団は城門付近を制圧するとすぐに城壁上の制圧に掛かる。

それと平行してすぐに王城への血路を確保する為に大通りの進軍を始めた。

翁は城壁上に赤の騎士団の団員が登り制圧し始めたのを確認し、投石機の解体を命じる。

組み立てたままでは移動に時間が掛かる上に、高さ的に城壁を抜ける事が出来ないからだ。

城壁上にある程度制圧されたのを確認すると白の騎士団団長は部隊を2つに分けると、敵が逃げ出してきても対応が出来るように、正門以外の2つの門が見える位置に配置した。

王都を進む軍は予想以上に苦戦を強いられていた。

王都の家はどこも窓や扉を厳重に閉めている。

大通りの横道に部隊が潜んでおり横から襲撃されたり、家の屋根から弓兵が現れたりするからである。

それだけならまだしも、中には火を使ってくるものまでいる。

家屋に燃え移るとあつという間に大火事になりかねない。

そういう者を風漬しに対処していくのが大変なのである。

赤の騎士団団長は思った以上の敵の抵抗に苦虫を潰しながら大隊長を2人呼び出すと各自大隊を率いて裏路地と家屋の上に居る兵の掃討を命じた。

王子率いる4700の兵は城門付近には近づいたものの、王都の中に入ることはしない。

もちろん一緒にいる僕も同じように城門付近で待機である。

戦況は刻々と伝えられてるので把握できている。

大通りをすすむ部隊は敵の反撃に遭いつつも着実に一の郭の門へと進軍は続けている。

概ね戦の勝敗は決している。

一の郭の城壁まで肉薄し王都を制圧するのは時間の問題だろう。

問題は今まで何もしていないうて事だよね

魔王『楽で良いではないか』

それはそうだけどね

近くで命のやり取りが行われているのに見ているだけと云つのは辛いものがある。

死にたいわけでも殺したいわけでもないけど。だが『見ているのも将としての義務である』という魔王の言葉に我慢するしかなかった。

別に将になりたいわけじゃないのに

大通りの先の一の郭の門が閉じられるのが轟めき合ひの元ひに見える。

出来るだけ味方を回収していた様だが、さすがにその為に一の郭を開け放しには出来ない様でとうとう門を閉じた。

それを確認し赤の騎士団団長は指示を出す。

指示を受けた赤の騎士団副団長が「門は閉じられた！投降するならよし、抵抗するなら容赦はしない！」と敵兵に呼びかける。

一の郭に逃げ損ねた敵兵はすでに戦う気も失せているようで次々投降して言つた。

王都の残り2つの門が開け放たれる。

そこから王都へ入った白の騎士団はすぐに王都内に残る敵兵捜索に動き出す。

「住民への暴行略奪は行わない」「投降する兵士に対する命の保障」「国王軍を匿う、もしくは協力する者は厳罰に処す」と行った内容を触れて回つたのである。

一時（約2時間）程の捜索で国王軍兵約1200と領主3名が捕縛された。

本隊が王都に入る。

一の郭から少しあなれた所にある豪華な宿が一時接收され仮本部となり、そこに入る。

近隣の建物も同時に接收され、両騎士団で守られています。

捕縛された領主3名は同じ宿に軟禁した。

約1200の兵は武装解除の後にいくつにも分けて監視中である。

翁「さて、王都は攻略できたがこの後が問題じゃな」

王子「本当に有力貴族が門を開けてくれるかですね」

騎士隊長「一の郭に有力貴族の旗が翻っているのは確認できましたか…」

赤の騎士団団長「もし何もない場合は、そのまま普通に攻略するだけだ」

翁「それはそうじやな。とりあえず先の王都制圧による被害は…？」

騎士隊長「前衛部隊は約450名の死傷。動けるのは750名ほどです」

赤の騎士団団長「赤の騎士団は120名程死傷。動ける兵3800人

白の騎士団団長「白の騎士団は50名程の死傷。動ける4000人の内、1000人が現在王都治安維持に動いておりますので、実質3000程度」

赤の騎士団団長「そうだな。赤の騎士団からも500程この警備を行つてゐるので、実質3300程度だな」

翁「それに本隊の4700で…12000程か。被害も思った以上に少ない。圧勝と言つても良い成果じゃな」

通常の王都攻略ではもつと被害が出ていてもおかしくなかつただろう。

投石機がうまく門を破壊してくれたのと、それにより敵兵が動搖してくれたお陰だらう。

翁「さて、今後の方針じゃが…」

白の騎士団団長「夜に有力貴族が決起して門を開ける事を前提で動きますか?」

今も一の郭との間では絶え間なく弓矢の応酬が行われてはいる。だがそれは本格的な戦闘ではなく、敵に対する牽制と嫌がらせのよななものだ。

「そうじゃの」と言つ翁に僕は手を上げて発言を求める。

僕「一の郭も攻略しましょ」

翁「ほり」

僕「有力貴族の決起は深夜と言つ話です。それなら一の郭を攻略するくらいの余裕はあるでしょう」「

白の騎士団団長「」で無理をして一の郭を攻略する意味は？

僕「一つに兵の士気が高く、相手の士気を下げる事が出来る」

赤の騎士団団長「確かに我が軍の士気はかなり高い」「

僕「二つに相手に城壁に籠つても無駄だという意識を植え付ける」

王子「とこつと~」

僕「投石機による攻撃は弓の範囲外から門を破壊します。門が破られれば数に劣る国王軍は進入を防ぐ事は出来ない」

白の騎士団団長「確かにそうですね」

僕「それにこの手はもう一の郭の門でしか使えません」

翁「何と？」

僕「地図では良く分かりませんが、実際に王城を見ると結構な高い位置に立っています」

王子「元々小高い丘に立てられましたからね」

僕「そこなんです。一の郭の門の前は大通りが走っているので投石機を3台ほどは並べる事は出来ますが、二の郭以上は地図を見る限り2台置けるかどうかです」

白の騎士団団長「それでも二台あれば十分では？」

僕「通常ならそうですが、一の郭の門までは一本道でも曲がりくねつております、結構な急勾配だと思われます」

赤の騎士団団長「そうだな、敵の侵攻を遅らせる意味もあるからな」

僕「坂がきつい場合は投石機を使う事が出来ません」

王子「何故ですか？」

僕「岩を投げる際に後ろに引っ張るのですが、それにより後ろに重さが掛かって発射する前に投石機が倒れます。そのような無様な弱点を晒す訳にはいきません」

翁「なるほど。だがそれでも一の郭を攻めるより、有力貴族の内通を待つたほうが良いのでは？」

僕「確かにその方が門も壊さずに済むのでいいのですが、実際に門が開いたからと言って城内までたどり着けるかは疑問なんですね」

翁「何故じゃ？」

僕「一の郭の門から一の郭の門まで結構な距離があります。そして二の郭の門から三の郭の門までは、一の郭から二の郭までは近いとは言え急勾配と言う事もあり時間が掛かるでしょう。その距離を抜ける間に門を再度閉じられてしまいかねないのです」

白の騎士団団長「その時間を短縮する為に一の郭を制圧しておくる

？」

僕「そうです。まあ有力貴族の兵が僕達が城に届くまで門を維持し続ける事が出来る程居るのなら別にいいんですけどね」

赤の騎士団団長「居ても100～200程度だろうな、一～三と城の門を開けるには少し足りないか」

その足りない時間を一の郭を攻略する事で時間を短縮しようと言つのだ。

白の騎士団団長「攻める理由は納得しましたが、有力貴族がどう動くかですよね」

もしこちらが一の郭を攻撃するのを見て焦つて門を開きだすと同じ結果と言つより、普通に深夜に行つより悪い結果になる。

僕「有力貴族という人物はどの様な人ですか？」

翁「有力貴族は政治家としては有能だが、戦の経験は殆ど無いな…成功は半々と言つたところか」

僕「半々ですか？困りましたね」

半々では賭けに出るには確立が低い。

せめて有力領主と連絡が取れたらいいのだが、それは無理だ。
やはり有力領主が門を開けるのを待つしかないか。

翁「やはりせっかく門を開けてもらえるのに無駄に破壊する必要も
無からう」

僕「確かにそうですね」

有力領主の内通を待つことに決まった。
夜に向けて準備を始めた。

結果から言おう。

夜に合図の火矢が上がる事は無かつた。

第30話 王都攻城戦（後書き）

ちょっと短めですが、すぐに次をじゅする予定です。

誤字修正

投石器 投石機

閉じられつるのが

改宗 回収

何もなかい場合は

閉じられるのが

何もない場合は

場内 城内

近いとは言え

損害だを 損害を

始めてみる攻撃

初めてみる攻撃

巻き込見ながら

巻き込みならが

望郷略奪は

暴行略奪は

第31話 ちか

一の郭から合戦の火矢が上がる事は無かつた。
代わりに停戦の使者が現れたのである。

使者は国王軍派の重鎮の一人らしい。

王子の「降伏ですか?」とこう言葉で「停戦です」と言つ使者。

王子「では」ちらの要求を全て呑むとこうですか?「.

使者「いえ、その為の話し合いの場を設けたいのです」

王子「話し合ことせよ」とこいつでじょう

使者「戦後の国王軍に居た者の処遇に付いてです

王子「すでに通達済みだと思つが?」

使者「頂いておつます」

王子「なら話し合つ事はありません。受けけるか受けないか、の2択
です」

使者「そこを何とかお願いできぬでしょ?」

やつ言つて使者は頭を垂れた。

翁が何かを言つ前に王子が口を開く。

王子「話し合いとは誰が参加し、どこで行つのですか？」

使者「話し合いには国王陛下と有力貴族、他5名の大領主が参加します」

翁「陛下も有力貴族も参加するのか」

使者「はい。ですので場所は王城の謁見の間で行いたいと思ひます」

翁「我ら我に謁見の間に出席しようと？」

頷く使者に「戯言を申すな……」と翁が恫喝する。

国王に面会するのに謁見の間というのは常識である。

ただ今は通常とは違つ。

例え相手が国王であつてもこの状態で謁見の間に足を運ぶというのは、事実がどうであれ反国王軍の旗頭の王子が国王に膝を折つたと判断されかねない。

それ以上に敵軍の真っ只中に何故行かねばならないのだ。

使者「戯言など申しておつません

翁「何？」

使者「恐れ多くも国王陛下と面談なさるのです。臣下として国王陛下に礼を尽くすのは当然でしょ！」

セツツ言ひつと使者は醜く笑つた。

魔王『小物だな』

え？

魔王『国王の権威を我が権威と勘違いしている。その上、状況判断が著しく出来ないようだ』

翁「お主ははじしまで理解しているのだ？」

翁の静かな声に使者が「何の事ですか？」と首を傾げる。

翁「今の状況を正しく理解しているか？」

使者「もちろんです」

翁「どうみてもワシと違つ判断をされたみたいに見受けますが、ご説明願えるか？」

使者「は？国王陛下から停戦の申し出があり、その為の謁見の儀案内に上がったまでです」

何を言われているのか分からぬといつ風に答える使者。

それを見て城の騎士団団長が笑う。

使者「何がおかしいのですか！」

白の騎士団団長「いえ、申し訳ありません」

使者「何を笑ったのかの説明をしたまえ！」

白の騎士団団長「では失礼いたしまして。使者殿と私の理解している状況の理解の差が驚くべきものだったのです。眞顔でそう言える使者殿は余程の大物だと思います」

当初は白の騎士団団長の言葉の意味が理解できずに居た使者も、馬鹿にされていると理解すると顔を真っ赤にした。

使者「なんと言つ物言いいか！」

その使者に対しても翁が「言われても仕方あるまい」と呟つ。

使者「なー!?」

翁「本当の事じやうひつ

使者「何を……」

翁「本当に気が付いていないのか?」

そつと翁はため息をついた。

翁「お主は今すぐ首を落とされてもおかしくない事を言つてゐる
じやみ?」

使者「は?」

翁「本当に分からぬのか?」

使者「わ、私は停戦の使者で……」

翁「その認識の時点で状況判断が出来ていはないな

翁の使者を見る田が冷めて行く。

翁「何故に完全勝利の田の前で勝つてゐる側が負けてる側の停戦を
受け入れねばならん?」

使者「それは……」

翁「しかも降伏を受け付けたといつ内容ならまだしも、停戦してや
るからこりに来いと言つ。自殺志望者でもない限り使者として來

よつとは思ひまつこ

「他に来たがる者は居なかつたであらう」と言ひ翁は心当たりがあつたのか、使者は真つ青な顔で黙り込んだ。

翁「で、最後に何か言つ事はあるか？」

真つ青になつて震える使者に笑いかける。

翁は本当に人が悪い。

翁「何か言つ事はあるか？」と聞いている

使者「あ、う、あ…」

翁「何も無いが、では残念だが…」

そつ翁が言つた瞬間に使者はその先を言わせないと支離滅裂に話しだした。

命乞いなのか責任転嫁なのか良く分からぬ事を言つてゐる。

喚きだした使者を見ていた翁が「黙らんと今すぐ首を落とすぞ？」と言つたら静かになつた。

翁「今回は見逃してやる。だから帰つて、今からいつ事を一字一句伝える事じや」

翁の言葉に「クククと頷く使者に失笑しながら。

翁「降伏しか受け入れん。条件は前に伝えた通りだ。妥協は無い。今後の使者はお主の様な小物ではなく有力貴族が自ら来るぐらいで無いと首を跳ねられると思え」

「分かつたか？」と聞く翁に使者は人形のように頷くのを確認すると「さつさと出て行け」という言葉にあたふたと部屋を出て行った。

王子「あれで少しは現実を見てくれたらいいんですが」

翁「それぐらいで矯正されるならいいのだがな」

国王軍から停戦の使者が来た事により一時的に止まっていた戦争の気配が反国王軍から上がりだす。

使者が帰つて一刻もしない内に一の郭の防壁を挟んだ矢の応酬が始まる。

再開して半時。

王子「動きませんね

僕「そうですね」

一の郭の門は開かない。

僕「もう開かないと見て本格的な攻撃を行いましょうか」

王子「そうですね」

すぐに指示が飛ぶ。

組み立てていた投石器が一の郭の門に近づく。

そうして砲を装填した所で一の郭の門の上に使者の旗が立つ。振り返った赤の騎士団長は王子が頭を振るったのを見て「撃て！」と叫ぶ。

2台の投石器から飛んだ砲の一いつが門に当たり門を軋ませる。するとすぐに城門に新たな旗が立つた。

王子「降伏……」

僕「え？」

王子「降伏の旗が立ちました。ただ……」

僕「ただ？」

魔王『交渉の旗も立つてあるな』

どうやら各國間で旗が統一されているらしい。
王子が指示を出し停戦のラッパが吹かれる。

反国王軍が戦闘を止め、一の郭の門から離れると城門が開き、一人の人物が出てきた。

その人物は城壁上に何か言うとすぐに門が閉まり始め、それを確認するところちらへ歩いてきた。

使者を迎えた反国王軍の面々は、現れた使者を前に驚きを隠せなかつた。

使者が臣下の礼を取ると呆然としていた王子が何とか言葉を発した。

王子「…まさか本当に来られるとは」

有力貴族「お呼びだと伺ったのですが?」

翁「冗談だったのじゃが」

有力貴族「ええ、存じております」

翁が使者に対する皮肉で「いぶし程度の小物ではなく有力貴族ぐら
いの大物で無いと話にならん」と言ったのを理解しておきながら、
有力貴族はそれに乗つて来たらしい。
しかも一人で。

王子「前に来られた使者にはお伝えしましたが、降伏しか受け付け
ませんよ」

有力貴族「はい。降伏を受け入れる事をお伝えしました」

有力貴族「ただ条件について一度、話し合いの場を設けて頂きたい
と考えております。出席は互いに10名までで。」

翁「王城まで少人数で来いと申すのか?馬鹿馬鹿しい」

有力貴族「いえ、三の郭にある迎賓館で結構です」

王城になると他国からの客が結構な頻度で来城する。
客の地位によつて一つ三の郭の館に滞在してもらつ事もある。
その迎賓館の内の一つで行つとこだ。

翁「それでも敵の中に飛び込めといふのは承認できません」

有力貴族「私は独り出来ましたが」

翁「お主のそれは負ければどうせ処刑との判断で、今死のうが後で死のうが一緒だと云つ割り切りだらう」

そう云うと有力貴族が「そうですね」と笑った。

有力貴族「三の郭までの門を開きます。全員で来られても困りますが、200名程なら一緒に来ていただいて構いません」

翁「ほう」

考え方案する翁。

魔王『止める』

え？

魔王『いくら門を開くといつても相手の勢力圏だ。暗殺の可能性が高い』

辞めさせると云う事？

魔王『違う。条件をこちらの有利な条件にするのだ。後々説明する。翁が返事をする前に発言しろ』

僕「 よろしいでしょうか?」

翁が発言をする前に僕が言つ。

ただまだ魔王に何も聞いていないので何を言つのかは自分も分から
ない。

同時通訳をまたしなくてはいけないようだ。

王子「 どうしました?」

僕（魔王）「『 会合の条件をもう少し』ひら側に（せと）して頂
かないと（まことに）危険ですか』」

王子「 危険?」

僕（魔王）「『 ええ、暗殺の危険（だ）です』」

その言葉に一同が有力貴族を見る。

有力貴族「 … そのような事は行いません」

僕（魔王）「『 貴様（貴方）はそうだとしても他の（考へ無し）者
が勝手に動くかも（知れん）しれません』」

黙り込む有力貴族。

僕（魔王）「『通常ならこの状態で王子を暗殺した場合の弊害を予想して暗殺など行え（まい）ない。だが先程来た（愚か者）…使者の（知能の程）』」

まつて！

魔王「何だ？」

もう少し分かり易く言つて、同時通訳が辛い！

魔王『……』

僕（魔王）「『愚かさを見る限り、その事を理解できずに田先の事だけで動く（だらう）でしょう』」

国王軍から会合を申し出ておきながら現れた王子を暗殺したとしたら、その事は必ず他に知れ渡る。
それにより国王軍が勝利を収めたとしても、今後の外交などの信頼を無くす結果となる。
そうすればどうなるか… という話だ。

僕（魔王）「『ああいうのが（使者のような方がトップに居る政府（だ）ですから、暗殺の危険性は高い（だらう）でしょう。』」

僕の物言いに翁が「たしかに」と頷く。

僕（魔王）「『（だから） ですでので会合は此方緒条件を飲んで（貰う事が前提だ） 頂きたい』」

有力貴族「……壁下にここまで来いと申されるのか？それは出来ない」

有力貴族は僕を見て誰か分からず探る目をしていたが、反国王軍の面々が僕の発言に対しても何も言わない事を見取つてその事に付いては言及しなかつた。

僕（魔王）「『それが出来たら（よいのだがな） いいのですが、そこまでは（言わん） 言いません。』」

有力貴族「ではどのような条件を？」

僕（魔王）「『場所は一の郭で問題は（ない） ありません。ただし門を開けるのは一の郭ではなく王城まで全部（だ）。そして王城の中まで（我が軍） こちらの兵を（入れる） 入れてらいます』」

有力貴族「丸裸になれと？」

僕（魔王）「『降伏（なのだろう？） なのでしょう？ 何処に問題が？』」

有力貴族「……」

僕（魔王）「『国王軍は全員武装解除』」

有力貴族「それでは国王を守れない」

僕（魔王）「『誰から守る（のだ？）んですか？（我ら）僕達とは一時停戦となるのに』」

有力貴族「賊が居ないとは言い切れない」

僕（魔王）「『それは国王軍の兵が居ても同じ（だろ？）でしょ？逆に居た方が（危険だと思つが）』」

何を言つてゐるの！

魔王『ほれ、途中で言葉をやめた所為で余計に含んだ物言いになつたぞ』

僕が途中で言葉をやめた事により、有力貴族にはこいつの言いたい事が皮肉と通つたのだろう。見る目が厳しい。

僕（魔王）「『（我ら）僕達の兵が変わりに警備（する）しますので問題ない（だろ？）でしょ？』」

有力貴族「全ての兵を上に上げると？」

僕（魔王）「『全てとまでは（言わん）言こませんがが、結構な数は（上げる）上げます。ただし王城までは兵を上げ（るが）ますが、城の中には入らないよつて（すゐ）します』」

有力貴族「それで安全と?」

僕（魔王）「『（お主ら）国王派が警備するよりは。』」

有力貴族「……」

僕（魔王）「『ただし、それでも暗殺は恐ろしい。（だから）すでにお互いが口に含む飲み物は自ら用意した物だけに（しよう）しましょう。そうすれば暗殺される可能性も（減る）減るでしょう』」

「

お互に自前で用意した飲み物を飲む事により、相手「など」からの暗殺の可能性を減らしせるだろうと言つのだ。

僕（魔王）「『会合の建物は（我らが）一いつから派兵して確認した建物を選ぶ。それは迎賓館とは限らない』」

有力貴族「……」

僕（魔王）「『いざ建物に入った所を閉じ込められて燃やされても（困るからな）困りますからね。事前確認を行うのは基本（だ）ですね』」

有力貴族「…それだけですか？」

僕（魔王）「『後は降伏の条件（だが）ですが、国王軍派の領主の家の断絶は確定（だ）です。之に関しては一切の妥協無しです』」

有力貴族「その事はこれから会合で話し合ひのだ。貴殿が口を挟んでいい事ではない」

さすがに出すぎた発言の僕に対して有力貴族は声を荒げる事はしなかつたが、不快感を示した。

有力貴族「何の権限でそこまで申すのだ」

そういう有力貴族に王子が答える。

王子「姫姉さまの婚約者としてでしょつか?」

その言葉に有力貴族がありえない事を聞いたという顔で王子を見る。

翁「まだ発表はしていないが、戦後に姫との婚約を発表する事になつてゐる」

有力貴族「…一体何処の者なのですか?」

翁「ただの冒険者じゃな」

有力貴族「冒険者に姫を嫁がせると…」

さすがに驚きの声を上げる。

翁「ただの冒険者では無いがな」

有力貴族「…と言いますと？」

王子「まずは爺と姫が国王軍に取り囮まれてもうだめだという所に居合わせて、すぐにこちらに加勢して下さったそうです。その後は2人と一緒に逃亡を続け僕達と出会う事が出来ました」

翁「我の館に来れたのも若のお陰であるし、その後の両騎士団との内通も大砦の攻略作戦立案も、城の門を壊した兵器を作ったのも若だな。功績だけでも反国王軍で敵うものはあるまい」

いつまで立つてもこの様な贅辞には慣れない。

王子「何より姫姉さまが若との婚姻を熱望されてましたから」

有力貴族「それだけで婚姻を？何を狙ってるかわからないでしきつ」

そういう有力貴族に王子と翁が代わる代わる僕が無欲であることを語る。

もう勘弁してください。

僕が全力で地位や権力などを拒否した事に驚き、反国王軍への参加している理由を姫の好意に気が付いておらずにただ「姫の笑顔を守りたいから」と友情の為だったと聞いて有力貴族の顔が変わった。

有力貴族「…恥ずかしくないか？」

僕「……」

恥ずかしいに決まってるよ…！」

頑張つて無表情にしている僕の顔を見た有力貴族は少し笑った。
だがその笑いが次の一句で固まる。

王子「有力貴族の娘も若に囮われる事になりましたしね」

王子の顔を凝視していた有力貴族がゆっくりと僕を見る。
軋む音がここまで聞こえてきそうだ。
僕はどうしていいのかわからず、有力貴族との視線を外すことは出来なかつた。

第31話 ちぢみ（後書き）

誤字修正

死は 使者

大物棚 大物

買つてゐる側 勝つてゐる側

第32話 会談

「この、若者が。娘を？」

「僕を見つめたまま何とか言葉を発した有力貴族。

その言葉に翁が「そうじゃ」と答えるのが聞こえてくる。

翁「王子の后にする事は出来ん。正室が居ない状況で妻にするにも具合が悪い。なら有力貴族の娘の願いをかねる事が出来る相手は、姫の婚約者である若ぐらいだろ？」

「それともワシの妾になつた方がよかつたか？」と笑う翁に有力貴族は何も答えない。

僕を見つめたままの有力貴族に何か言わないと焦り「成り行きで…」と言つたら「成り行きだと！」と言う声が返ってきた。

翁「まあ成り行きではあるが、有力貴族の娘も納得しているぞ？」

「娘が？」

王子「姫姉さまも納得します」

有力貴族は経緯等を聞いている間は目を閉じていた。

そして聞き終わると体ごと僕の方を向いて「娘を、よろしくお願ひ

します」と頭を下げた。

それをどうにか辞めさせて話が再開される。

有力貴族「家の断絶は覆りませんか?」

翁「覆らんな。ただ命は保障してやる」

有力貴族「命は助けると?」

翁「戦争の責任、という意味ではな」

有力貴族「と言いますと?」

翁「戦争の責任は家の断絶と領地の没収で償わせる」

有力貴族「……」

翁「その後、国を乱した罪により国の復興の責任を取らせて財産を出させる」

有力貴族「全てですか?」

翁「ほぼ全てじゃな。一部、生活するだけの金と生活の場所は用意する」

翁は前に僕と姫が話で決めた内容を説明する。

有力貴族はそれを黙つて聞いていたが話し終わった翁の「だたし」という言葉に

有力貴族「ただし?」

翁「領民などに對する罪を調べ場合によつては成人男子までの処刑もありえる」

有力貴族「…罪とは?」

翁「必要以上の重税を掛けていた者、領民を虐待していた者などは成人男性まで全員処刑じやな。後はどれだけの事をしているかじや」

有力貴族「それは罪をかぶせて処刑されるだけでは」

翁「領民に決を取らす。有罪か無罪かのな」

その言葉に有力貴族は無言になる。

翁「善政を敷いておれば問題あるまい」

「それに降伏を受け入れなければ一族郎党皆殺しになるじやううしな」と脅す。

有力貴族「…殿下は?」

王子「三兄（第三王子）には退位していただき、その後は隠居して

いただく事になります

もう家族が死ぬのは見たくないません、といつ王子。

翁「王妃も一緒に。その後は城の奥で一生をすゞしてもうつ事になるだろ。もし子が生まれても王位継承権は伝えられずの場合によつては皇子に出される事となる」

第三王子は王位に付くと同時に国王派の主要貴族の娘の一人と結婚をした。

その相手も軟禁生活で一生を過ぐす事となる。

有力貴族「：会合の場所と武装解除については、それで行けると思います。ただ降伏内容は殿下に伝える事はしても決定は会合での話し合いでさせて頂きたい」

王子「構いません」

翁「こちらは折れんがな」

有力貴族「それと会合場所に我が軍の兵も100名程度付かせて頂きたい」

翁「武装解除は行つぞ？」

有力貴族「……ダメですか？」

翁「5〇なら許そつ。」

有力貴族「…それでお願いします」

会合が終わり再び礼をする有力貴族に翁が声を掛ける。

翁「時間を掛けて全ての館に細工をされても詰まらんしな。期限を区切らうか」

有力貴族「いかほど?」

翁「どれくらい掛かる?」

有力貴族「話をするだけなら3刻程、意見を纏めるにはどれ程の時間が掛かるか」

その事を考えると憂鬱になるのか有力貴族がため息をついた。

翁「長い時間は待てぬ。半時（約1時間）だ」

有力貴族「せめて一時」

翁「…わかった。一時じや。半時毎に一の郭の門の前で鐘を鳴らす。2回目の鐘がなった時点で返答が無い場合は交渉は決裂じや。その後は全面降伏のみしか受けいれん」

今度こそ最終通告である。

これを蹴れば全員処刑以外の選択肢は無いと翁が告げる。

「私も之で終わらせたいと思つていますよ」と笑う有力貴族。

僕「一ついいですか？」

有力貴族「何でしようか」

退室しようとする有力貴族を引きとめる。

僕「なぜ国王派に付いたのですか？」

僕の言葉に有力貴族は多くは言わず、ただ「今、この状況が全てです」そう言つと一礼して部屋を出て行つた。

有力貴族が出て行つた後に翁が口を開く。

翁「有力貴族が国王派に付いたのは人質でも取られたのであります」

爺「元々、国王派の面々を見て国が荒れることを予想して政権につ

いた常識派ですかね

僕「それは是非…今後に欲しい人ですね」

翁「それは自分の義父に当たる人物の助命嘆願か?」

僕「え、いや、そういうわけでは」

しどりもどりになる僕に「冗談じゃよ」と笑う翁は「ワシもそう思つておる」とだけ言つた。

一時後、鐘がなる寸前で使者の旗が立ち出てきたのはまたも有力貴族だった。

会合の場所などの条件を飲む事と武装解除、王城までの門の開放を受け入れる旨を聞いてすぐに白の騎士団団長が騎士を率いて一の郭の門をくぐつていった。

さらに一時程立つた頃、空が白み始めた頃に白の騎士団団長から準備が整つたという知らせが来た。

それを聞いた有力貴族は「では私も城に戻つて伝えます」と言い、半時後までにお互いに顔を出す事を決め戻つていった。

「何だこれは」と国王派の一人が口に出す。

何だといわれても天幕だとしか言いようが無い。

会談の場所は館ではなく一の郭の広場に立てられた大きい天幕の中で行われる事となつた。

天幕は2重に張られ中を伺う事は出来ないよう出來ている。

周りの建物なども徹底して人払いをしており、全ての建物や家屋の屋根、城壁上に兵を配置して安全対策も考慮している。

翁「これなら互いに仕掛けのしようもあるまい」

そういう翁に誰かが何を言う前に有力貴族が「そうですね」と同意する。

会合に現れたのは国王と有力貴族の他に国王派の主要貴族が8名のようだ。

先程の使者は来て無いらしい。

対する反国王軍は王子、翁、僕、白の騎士団長と6名の領主である。

赤の騎士団長は「小難しい話は好きじゃない」と美女さんと警備の任に付き、現領主は他の反国王軍を率いて宿に控えている。

簡単な挨拶の後に会合は始まった。

が、始まつてすぐに国王派の面々が騒ぎ出した。

国王派貴族A「何でこの大事な会合に良くわからない者がいるんだ！」

僕を指差して言つ国王派貴族A。それに「やつだそうだ」と声を荒げる国王と有力貴族以外の国王派の面々。

翁「煩いぞ。piipii喚くな」

国王派貴族A「な…」

翁「それに会合は互いに10名までの参加と決めたが、誰が出る今までは国王と王子以外は決まっておらん。こちらの面子に口出しする権限は貴様には無い」

国王派貴族A「なんて物言ですか！」

翁「逆に言わせて頂くと、その事すら理解できていない者がこの大事な会合”に参加している事自体、疑問に思うが？」

そう言つと国王派の面々からの声が止んだ。

翁「未だに状況を把握出来ていない者を何故呼んだのかのう」

有力貴族「…まさかそういう訳では無いでしょう。若の立場を知りたいと思つただけだと思いますよ」

有力貴族がフォローに見せかけた皮肉を言う。
その言葉に安堵の雰囲気を出す反国王派の面々。

魔王『ここまで無能が揃つと逆に驚きだな』

有力貴族「この”大事な会合”は成功させなくてはいけません。その事はここに居る誰もが理解できていると思います」

そう言つて言葉を区切つた有力貴族は国王派の面々を見た後に国王を見て、

有力貴族「もし会合を壊すような発言や行為を行う人物はこの場から退出していただくようにしませんか?」

国王「そうだな」

王子「こちらもそれで構いません」

有力貴族の「無能は黙つとけ」と言つ発言に国王と王子が頷く。

がつちりした国王と細身の王子はあまり似て居ないと思つたけど、薄く笑つて頷くその姿はやはり血の繋がつた兄弟と感じる。

翁の「では始めますかの」といつ言葉を皮切りに会合は始まった。

翁「まず降伏を受け入れると云ひ事で、その条件調整と言ひ事でよろしいですか」

その言葉に頷く国王と王子。

翁「では、まず国王については退位していただいた後に王妃と共に隠居して頂く事になります。お子が生まれても王位継承権を得ること無く、場合によつては里子に出される事もあります」

その言葉に国王派からざわめきがもれるが、発言するものは居なかつた。

そもそも事前に話を通してくるのだ。今更だろ。

国王「…わかった」

翁「では次ですが、国王軍に付いた者たちの処遇ですが」

翁が条件を伝えると国王軍派から「認められない!」といつ言葉が多数上がつた。

国王と有力貴族は黙つて聞いている。

翁「認められない」と云つ。ではあなた達の条件は?」

国王派貴族A「家と財産と命の保障です」

想像していた通りの答えが返ってきた。

翁「何一つ失わず、何を持つてこの度の敗戦の責を償つといへ。」

国王派貴族A「復興に対する支援にて」

相手も此方のいう事を予想して来たのだらう。だがそれは此方も同じだ。

翁「復興の支援と言つが、それはどれくらいこの期間を見ていくのぢや?まさか一回や二回で済むとは思つておらんだらうな?」

国王派貴族A「今後5年に渡り」

翁「10年だ」

有料貴族「支援を続けて、何ですと?」

翁「10年だ。5年は短い」

「国王派貴族A 「…ではー〇年で」

しぶしぶ頷く国王派貴族A達に翁は一年毎の出資額を伝える。

翁「もちろん各領主毎の金額だ。全一律、分割も認めず年度毎に一括で払つてもらつ」

その言葉に色めき立つ国王派貴族達。

その額はここに居る大貴族達でも領民に重税を課しても集まるかどうかの額であった。

翁「払えない場合は土地を国に売つて払つてもらつ。ちなみに新政府は各領主が領民に掛ける税の上限を決めるでな。好き勝手に住民から徴収は出来なくなるぞ」

国王派貴族A「それでどうやって払えと言つんですか!」

翁「それは頑張つてとしか言えんな」

国王派貴族A「そんな無責任な!..」

翁「責任?何故そんな物をワシらが取らねばならん。」

「そう言つ翁に国王派貴族達は言葉を無くす。

翁「責任を取るのはお主らであろう。我々の条件を飲まずに復興支援で購つと言つたのはお主等だ。」

国王派貴族A「そつは言つても額が大きすぎます」

翁「必要なだから仕方あるま」

国王派貴族A「もう少し減額を！」

翁「お主等は馬鹿か？」

国王派貴族A「何を！」

翁「ワシらはわしらの出した条件を基にした降伏しか受け付けぬと言つているのを、お主等が哀れなので条件を聞いて取り入れてやつているの過ぎん。それを、アレはいかん、コレはいかんと言える立場だと思つのか？」

国王派貴族A「そ、それは……」

翁「これ以上の妥協は無い。我々の条件を飲むか、復興財源を払つていいくか、だ」

一瞬で奪われるか、年々奪われていくか。
どう算出しても10年間、お金を出し続ける事に耐えれる貴族は無い。

翁「因みに復興支援が行えない領主は契約不履行で処刑となるがな。
今すぐどちらか決める」

そんな大事な事を即決できないという国王派貴族達に翁が言つ。

翁「だから馬鹿だと言つのだ。今まで散々伝えてきたらう。それでも考えて来なかつたのはお主等が無能だつただけだ」

「そうじやろ？有力貴族よ」という翁に「そつですね」と頷く有力貴族。

有力貴族「私はすでに国王派の言い分での全面降伏しかないと思います」

その言葉に国王派貴族達は声を荒げる。
それを見やつて、

有力貴族「では降伏は無かつた事にして戦い、全員で死にますか？」

国王派貴族A「それは…」

有力貴族「それに殿下も即答されたのですよ？殿下ほどの重責ある方が答えを出せる程の時間、貴方方は何をなさつていたのですか？」

翁「そうじやの。今、答えを出せていない者は現実を理解していない愚か者だけだろう」

国王派貴族A「な、何て言い草ですか！」

翁「そうか？今のこの状況で、自分達の命も家も財産も守った上に数年、国に金を出したら丸く收まると考え、それ以外の代案を考えてこない程度の理解力なんじやろ？」

そう言つと国王派貴族達は黙つたが、その一人が何かを思いついたよに口を開く。

国王派貴族B「では、この度の敗戦の責任として国の要職に就いていた者の首をつけましょつ」

国王派貴族達はそれ程の要職に就いていなかつたのだろうか？そもそもその程度の人物が参加しているのは何故だ？

翁「…要職に就いてた者はここに来ていなかつたのか？」

有力貴族「私以外は敗戦の責任を問われて解任されました。今ここにいる人たちが代行します」

翁「そうか」

やつ語りと翁は「首だけもらつたものお」と呟いた。

国王派貴族B 「ではその者の土地を一部國に返還せましょ」

翁 「そりじゃのお…」

翁はここに置く國王派貴族の面々を眺めて呟いた。

翁 「有力貴族はいいのか? おぬしの首と土地が無くなるが?」

有力貴族 「…それで戦が終わるなり」

翁 「そうか。では、今まで要職に付いてた者は打ち首と土地の返還」

そう言った翁に國王派貴族B が頷く。

翁 「そしてここに置く今の要職に付いている者達は一族郎党全員処刑の上で全て没収。他の國王派は領地に見合った復興支援を10年、とこゝ所で妥協しよう!」

國王派貴族B 「そんな…」

翁 「おかしいか? 國王派の殆どの家も財産も守られるぞ?」

國王派貴族B 「我々の一族は皆殺しですか!…」

翁「そつじや？」

国王派貴族B「何故！？」

翁「我が身可愛さに他人を売るような輩はいらんからな」

ガツクリと頃垂れた国王派貴族Bに翁は「では次の話は」と進めようとした。

国王派貴族A「待つてくださいー。」

翁「何じや？」

国王派貴族A「まだ話し合いは終わってないです」

翁「先程代案を出されて決まつたじやろ？。反論も無かつたしな」

国王派貴族A「国王派貴族Bが勝手に言つただけです。我々は同意して無い！」

そもそも国王派貴族Bが言つた時点で何も言わなかつた事が同意になるのにそんな事を言ひ。

翁「ほり」

国王派貴族A「ですので話し合いは終わってない！」

翁「国王派は決まつても居ない個人的意見を勝手に述べるような輩をこの”大事な会合”に参加させているのか？」

国王派貴族A「ぐつ」

翁「とりあえず勝手な事を言つて”この会合を”惑わした国王派貴族Bには退出してもらおうつかの」

国王派貴族B「なつ！」

翁「勝手な発言だつたんじやろ？」

翁の言葉に頷かざるを得ない国王派貴族B。

すぐに兵が呼ばれ国王派貴族Bは退出させられた。

翁「では、勝手な物言いで”大事な会合”を乱した者は、当初の決まり事にしたがつて退出してもらつた」

”大事な会合”と毎回強調する翁は人が悪い。

そして「勝手な発言」と言う言葉を取り上げて退出させる事により、これ以上の無駄な反論をする機会を国王派貴族達から奪つた。

翁「では聞く『我々の条件での全面降伏』か『10年いわたる復興支援』か選べ」

即答できぬ相手に「そつそつ」と言つといひ

翁「もう一つ『国王派貴族Bの勝手な発言』も候補に入れるか。」

国王派貴族A「……」

翁「後日返答はありん。今決断するか、物別れに終わり戦つか、じや」

それでも何も言わない国王派貴族達を見やつて有力貴族が手を上げた。
翁が名を呼ぶと、

有力貴族「確認なんですが、確かにそちらの降伏の条件に『領民による領主の裁判が行われ、無罪となつた場合は命と家の存続ある程度の土地と財産の保有を認める』とあります」

翁「そうじゃな。命以外の全てを没収するかは領民に決めさせる。伝えた書状に書いておつたのですに見ていると思つてわざわざ言わなんだが?」

有力貴族「いえ、ありがとつ」

そう言つて発言を終えた有力貴族が座ると周りの国王派貴族達が色

めき立つた。

魔王『馬鹿どもばかりで話がつまくまとまうそりで何よりだ』

反国王派の申し出を受ければ領民による裁判で助かるかもしない。田頃から忠誠を誓わせている領民達である。

必ずや無罪になるだろ？』といつ考えを持つたのだろうと叫う事が

国王派貴族達の顔からうかがえる。

中には微妙だと思っている者も幾人かはいるが、絶望的に思つてゐる者は居ないようだ。

国王派貴族達は小難しい顔（魔王に言わせたら『馬鹿顔』）をしながら、「有力貴族殿の意見に従う」とだけ伝えた。

それを聞いた有力貴族は魔王に「宜しいですか？」と伺いを立て、

魔王が頷くのを見て「全面的な降伏を受け入れます」と言った。

ここに半年近くに及んだ内乱は終結した。

第32話 会談（後書き）

戦争終結しました。

話の流れ上、いつこう形になりました。

当初の予定ではいつこう終戦は迎えない感じでしたが、この結果の方が良かつたような気もします。

22話の後書きに「話が一段落したら後書きに、当初の予定と同じ違うのが後書きにでもちょこっと書けたらと思つてます。」と書きました。

しかしそうこう話をするのは無粋の様な気持ちになりましたので、申し訳ありませんが、書くのを控えたいと思います。

誤字修正

前一律 全一律

一喝で 一括で

上弦 上限

要職について 要職に就いて（数箇所修正）

領かざるを獲ない 領かざるを得ない

第33話 魔王は歌う

その後は細かい内容が決められ、すぐに降伏に関する調印が国王と王子によつて為された。

天幕を出た国王と王子達は赤の騎士団団長が率いる兵と共に王城へ入り国王の声明で戦争終結と国王の退位、王子の次期国王就任が告げられた。

すぐに反国王軍の兵が王城へと入り国王派の領主達の身柄を保護（と言つ名の捕縛）していく。

謁見の間に集められた国王派の領主達に降伏の条件を伝えると不満の声が上がった。

しかし、

国王「では選ぶがよい。降伏条件を飲むものは我に同意という意思表示で膝をつけ。今後10年に渡る復興支援がいい者はそのまま立つていいがいい。王子は貴殿らの意思を尊重するそつだ」

国王の言葉に戸惑っていた国王派領主たちも有力貴族が真っ先に頭を垂れるのを見て次々と同じようにしていき、結局は全員が同じ姿勢となつた。

すぐに領民による裁判について話が始まる。

裁判は出来るだけ早く行つ。

だが一度には無理な為に順次行つていぐが、それまで王城に留まつてもらう事になる。

裁判が行われるまでは外部との接触は禁止となるが、家族への手紙は検閲が入るが送る事は可能である。

領地に居る一族の者は新政府が責任を持つて身の安全を守る。裁判は一族と新政府の立会人の下で行われ、結果を元にすぐに対応する。

無罪の際に保障されるのは家の存続であり、どれだけの土地や財産を残すかは状況により変る。

箇条書きするところな感じである。

日が完全に登つてもなお戦後処理はまだ終わらない。

とりあえず国王派の領主の兵以外の兵士達（近衛や王都守備軍）の一部は軟禁が解除されそれぞれの警備についている。

新政府が暫定的に樹立され、その顔触れば王子と翁達が考えていた面々で埋められていたが、どうして該当する人物が居ない所は王子と翁と爺が兼任していた。

そろそろ落ち着いてきた少し休もうかなと思つていた所で美女さんには呼ばれる。

連れて行かれたのは王子の所だ。

忙しそうに指示を出す王子を見ていろといひながらに気が付いたよう

笑顔を向けてきた。

王子「「」苦勞様です」

僕「いえ、王子」」そ大変そうで」

王子「まあ僕はこの為に居ますからね。戦場で役に立たなかつた分、これから頑張らないとダメですか？」

そう笑う王子の横で「誰か国政を手伝つてくれたら、王子の負担は減るのにのつ」と書類をチェックしながら翁が言う。
それに「すぐに爺が来ますよ」と笑顔で答えておく。

王子「それなんです」

僕「？」

王子「お迎え。姫姉さまに迎えに行くと約束したでしょ」

「あつ」と叫び声を上げてしまつ。
「やつぱり忘れていましたね。姫姉さまが泣きまよっ」と笑う王子。

王子「白の騎士団を率いてお迎えに来つて下せ」

僕「し、白の騎士団！？全員ですか？」

王子「そうですね」

僕「仰々しくませんか？」

白の騎士団団長「王女の凱旋ですからね。王子は戦で入城したので仕方ありませんが、国民に見せる体裁として最低でもそれくらいはいるんですよ」

後から来た白の騎士団団長が言つ事に頷く王子。

王子「姫姉さまは昔から国民に人気がありますからね。物凄い歓迎になると思います」

翁「すごいぞ。もし婚約を発表したら暴動が起ころるかも知れん」

驚く僕に「言こすぎですよ」と王子が笑う。

「冗談なんだよね？」

「冗談かどうかも言わないままに話は続く。」

王子「早馬は飛ばしていますので、すぐに勝利の報は届くでしょう」

僕「では早く出ないと姫が出発してしまいますね」

そういう僕に異口同音で「それはないな」と囁く面々。

魔王まで『無いな』と言つ。

その言葉に気おされて「何で…」と囁く僕に

王子「若が迎えに行くと約束したからです。姫姉さまは若が来るまで絶対待つてます」

僕「そ、そうですか」

王子「10日後に僕の戴冠式を行います。その前までに必ず戻つてください」

軍勢を率いて1日半程度である。

馬と馬車だと急げば半日で付くので急げば往復2日である。

何でそんなに余裕を持つて囁うのかな?と思つていたら、

王子「さすがに若も白の騎士団団長も騎士団の面々も戦が終わつたばかりで疲れているでしょう。大體で一日休養を取つてください」

翁「それに王都へは昼頃に入城してもらつ事になる。王都近くの領主の館に兵を送り姫を迎える準備をしておくので、入城の前日の夕方には入つてくれ」

簡単に話を纏めると

1日目（今日）僕と白の騎士団団長（以下騎士団の面々）が大體に

向かう。

2日目 大砦で休養

3日目 大砦を出発、王都付近の領主の館へ行く

4日目 王都入城

6日も余裕があればそつ考えるとそこまで無理は無い。

王子「王都に戻つたら式典などの準備に大忙しだすよ」

僕「僕が手伝える事があるなら手伝いますが」

爺「手伝って貰ひより自分の準備じゃな

僕「はい?」

爺「この国の作法を覚えたり、式典の夜にある祝賀会のダンスを覚えなくてはいかんしな」

僕「ダンス……だと……」

王子「まあ帰つてきてから頑張りましょ。まずは姫姉さまのお迎えです」

お迎え、それなら

翁「帰つてくるのを遅らせようとしても無駄じやよ。」

僕「……」

翁「美女殿に若をひやんと連れて帰つて頂くよつておるしな」

びつやら姫のお迎えに美女さんも同行するうじへ、逃げる事は敵わないよつだ。

すぐに準備をと思つたら既に出来ていて後は僕だけらしく、特に用意するものも無いのですぐに出発となつた。

早馬を再度飛ばし全員騎乗の騎士団は早馬に負けない速度で大砦を目指して馬を飛ばした。

日が落ちる頃に大砦に入る。

門を潜り砦の広場に入ると姫と妖精少女と爺と有力領主の娘が出迎えてくれた。

手前で降りて皆の前に行く。

僕「約束通りお迎えに上がりましたよ」

そういう僕に姫が抱きついてきた。

とつたに受け止め何とかバランスを取りつつ姫に離れるよつて言つ。

僕「姫、僕は戦が終わってすぐ来たので物凄く汚れています。せつかぐの綺麗な服が汚れてしましますよ」

そう言った僕に姫は答えずに抱きしめている腕に力を込める。

それを感じた僕は姫の背中をぽんぽんと軽く叩いた。

それを見て妖精少女が「私も！おかえり！？」と足に抱きついてきた（かわいい！）

子狼も僕達の周りを回る。

あまりの可愛さに妖精少女の頭を撫でると田を細めて笑つた。

その後に「美女お姉ちゃん！」と美女さんにも飛び込んでいく。

ふと目を上げると爺が笑顔でこちらを見ている横で有力貴族の娘が

笑みを浮かべて静かに僕達を見ていた。

白の騎士団団長「うひひひひひ」夜団団騎の白

同じく馬を下りた白の騎士団団長がそう言つと姫がぱつと僕から離れる。

「爺「お疲れでしょ。騎士の皆さんの分も食事の用意が出来てます

白の騎士団団長「ありがとうございます」

そつ言ひと白の騎士団副団長を呼び、騎士達に食事と明日の夕方までの休養を取るように伝えた。

翁の「祝い酒も用意します」とこつ言葉と内容を聞き、頷いた白の騎士団団長は

白の騎士団団長「姫が戦勝祝いに一人に付きワイン一本を用意して下さった。他にも酒を用意下さっているらしい。今日だけは食べて飲んで騒ぐ事を許可する。ただし食べ物を粗末に扱う者は騎士の資格剥奪だ。それ以外はある程度なら田を瞑る、楽しめ。そして明日の夕方までゆっくり休め！以上、解散！！」

その言葉に騎士の間から歓声が上がる。

一人の騎士から「この広場で宴会してもいいでしょうか？」と言つ

言葉が上がる。

それを聞いた爺は「いいですね」と発し、白の騎士団が頷く。すぐにその波は騎士団の間を駆け巡り賛同を得て大砦の兵と共に建物の中からテーブルと食事や飲み物が運ばれてくる。楽しそうな雰囲気に僕達も一緒に外で食事を取る事になった。

すでに日は完全に落ち月明かりが綺麗な夜だ。

準備も終わり白の騎士団総勢4000がアルコールの入った器を持つて立っている。

白の騎士団長「姫、乾杯を」

そう言いつと姫は一步前へ出た。

姫「皆さんのお陰で無事、この戦に勝利する事が出来ました。本当にありがとうございます」

そう言いつと姫は感極まつたのか声を詰まらせた。
誰一人言葉を発しない広場に火が爆ぜる音が響く。
皆が姫の次の言葉を待つ中、魔王が『いってやれ』と言つ。
僕は姫の隣に行くと無言で姫の肩に手を置いた。
姫が必死で堪えている顔を僕に見せる。
僕が姫に声を掛けようとした瞬間に

白の騎士団長「一人を祝して、乾杯！！」

その言葉に周りから「一人の未来に！」「勝利！」等と各自好き好きた乾杯の言葉を言いながら杯を煽る。

いや、確かに反国王軍内では周知の事実だけここでそれですか！

中には「ついやましいぞー」とか「姫を泣かしたら承知しないぞー」でもお前じや勝てないだろ？！とか爆笑なども聞こえる。

丘の騎士団、はつちやけ過ぎー！

だが今日は誰も咎めない。

皆の乾杯を聞いて何かが途切れたのか涙を流すと「ありがとう」と呴いて僕に杯を少し掲げた後に口をつけた。

その後はみんなが好きに飲み食いを始める。

僕も姫の横に座って食事を始める。

宴会が始まつてすでに食事はあらかた終わり立食形式の飲み会と様相は呈して目の前は阿鼻叫喚が繰り広げられている。

僕は有力貴族の娘に話しかけた。

僕「お父さんに会つたよ」

有力貴族の娘「… ですか

僕「有力貴族は無事だよ。王都に着いたら会えると思つ

その言葉に少し安心したような顔を見せる。

白の騎士団団長「有力貴族の娘の相手が若だと聞いた時の有力貴族の驚き具合は、そう見れないものだつたと思いますよ」

有力貴族の娘「それは…見てみたかったですね」

そう言つと柔らかく微笑んだ。

そんな顔も出来るんだ

そう思つて見ているとこちらを見て笑みを消すと薄い笑顔を出して僕を見た。

嫌われて…は居ない様だが打ち解けては居ない、そんな感じだ。隣に座る妖精少女が話しかけると僕とは違う笑みを浮かべる。

僕とは違う、姫に向けるのと同じ笑顔だ。

ちよつと寂しいな、と思つていたら姫が話しかけてきた。

姫「どうしました？」

僕「いえ、何でもないですよ」

姫「嘘ですね。有力貴族の娘の事でしょ？」

その言葉に僕は何も言えなくなる。

考えてなかつたと言えば嘘になるが、別に疚しい事を考えていた訳ではない。

僕を見て姫は「ふふ…」と小さく笑つた。

姫「有力貴族の娘と仲良くなりたいと思われたのではないですか?」

僕「…良くわかりましたね」

姫「若をいつも見ていますから…」

そつ言つと顔を真っ赤にする。

僕も釣られて顔が赤くなるのを感じる。
お酒の所為として誤魔化せるだろ?うか?

姫「有力貴族の娘は決して若の事を嫌つてませんよ」

僕「そうだと思いたいんですが、どう考へても僕にだけ対応が違う
んですね」

姫「薄い笑顔ですか?」

僕「そうです」

姫「緊張です」

僕「え？」

姫「有力貴族の娘は緊張するとどうしていいか分からなくなり、あ
あいう風に薄い笑顔を出すんです」

「初めて会った時は出さなかつた表情でしじゅう？」と姫に思
いながら頷く。

姫「初めて会つた時は若は反国王派の一人でしかありませんでした。
その後に若の奥さんになる事が決まつた段階でもまだ『この方法し
かない』という思いが強かつたので、若自身をどうこいつ思う余裕は
無かつたのだと思います」

僕「数日たつて冷静になつてきた？」

姫「そうですね。その後の若の人となりを見たり、待つてゐる間に
今までの事を私や妖精少女が話しましたからね。それで色々と考え
る事もあつたのだと思います」

そう言つた時に有力領主の娘がこちらを見ている事に気がついた姫
が「貴方の事を話していたの」と微笑むと驚いた顔をして妖精少女
と共にこちらに来た。

姫「緊張すると笑顔が固まるけど、若の事は嫌つてませんよ、つて
ね」

そう笑う姫に口をパクパクさせる有力貴族。

妖精少女が「私も好き！」と僕に抱きついてくる。

どうやら皆が楽しそうに盛り上がりしているのを見て嬉しくて仕様が無いらしい。

有力貴族の娘「べ、べつに私はそんな事…」

姫「無いこと無いよね！」

有力貴族の娘「ひ、姫ちゃん、飲みすぎじゃ無い？」

姫「そんな事無いよ

「ねー」と妖精少女と言い合つてる。

確かに飲みすぎかもしない。

姫があまり杯を重ねないように注意が必要かもしない。

有力貴族の娘「緊張なんかしてませんから」

僕「そ、そう？」

姫「嘘はだめだよ？」

有力貴族の娘「嘘なんて…」

姫「有力貴族の娘は私に嘘を言つんだ…」

有力貴族の娘「ひ、姫ちゃん！」

姫は拗ねた様にちびちびと舐めるようにお酒を飲みだした。

いつもの姫にはありえない雰囲気を出している。

これはこれ以上の過ぎないよう注意が必要かもしない。

だが可愛いから止めないけどね！！

魔王の『ダメだこいつ…』と言つ言葉が聞こえるがスルー 余裕でした。

微笑ましく姫と有力貴族とその間で一コ二コしている妖精少女を見ていると爺が近づいてきた。

爺「楽しまれていますか？」

若「ええ」

爺「よければ一杯」

そう言うと爺が手にしたボトルを掲げた。

僕は杯の中のお酒を煽ると爺から手酌を受ける。

それを飲むと喉が焼けるような思いをするが、祝い酒を頑張って飲む。

なにこれ！

魔王『中々きつねうな酒だな』

飲み干した僕は爺からボトルを受け取り返杯する。

爺は「ありがとうございます」とこうとそれを煽った。すると横から白の騎士団団長が数名の騎士を連れて僕の所に来て「私も受けでぐだせ」と言つ。

お酒は また爺が持つていたきつい奴である。
そのお酒も煽る。

すると姫が「私のも」と美女さんから手渡されたボトルの中身を空いた僕の杯に並々と注ぐ。

爺も城の騎士団団長も半分程度でどどめておいてくれたのに！

「さすがにコレは珍らうなの？」「と思つて姫を見るとものすごく期待した目で見ている。

それを見た僕は覚悟を決めて杯を煽つた。
胸が焼けるように熱く一気に来る。

と空いた杯に今度は有力領主の娘が並々と注いだ。
僕が見つめると「飲んでくださいますよね」と悪い顔で笑う。

そんな顔もするんですね

見つめる有力領主の娘を前に進退窮まった僕は破れかぶれに煽る。すぐに姫が注ぐ、煽る、有力貴族の娘が注ぐ、煽る、姫が

何回続いたのだろうか？

僕はいつの間にか意識を手放していた。

というよりは飲まされすぎたのか

頭が痛い。

どうやら昨日は飲みすぎたようだ。

寝返りをうづけ昨日の事を思い出すが、どうやって部屋まで来たのか
も思い出せなかつた。

喉が渴いたなと田をあけた僕は田の前の光景に固まつた。

横に寝ている有力貴族の娘とばっかり目が合つたのだ。

有力貴族の娘「：おはよう」

僕「お、おは、…え？」

いつの間にか魔王が暗いリズムの歌を歌つていた。

有力貴族の娘「…あなたは思つたより強引なのね」

ええええええええええええええええ

魔王の歌が一日酔いの頭に木靈する。

後々聞いたら魔族に伝わる家畜が売られていく歌らしかつたが、今は全く関係ない話だつた。

第33話 魔王は歌う（後書き）

中途半端ですが、今日はここまでです。

誤字修正

半国王軍

反国王軍

保障荒れるのは 保障されるのは

試論騎士団

白の騎士団

若自信

若自身

時期国王就任

次期国王就任

入城したのいで

入城したので

遭えると思う

会えると思う

表現変更

一遍には無理

一度には無理

第34話 家族

目を覚ますと知らない部屋で寝ており、有力貴族の娘が傍らに居た。

どこかで使った言い回しだある。

魔王が未だに歌っているのがうざいが、今の僕は魔王の事より現状把握で必死だった。

僕「え…？」

有力貴族の娘「しつ」

驚きの声を上げようとした僕に有力貴族の娘が「静かに」と拳動で示して「姫が起きてしまうわ」と言った。

そして目線を下に向けると有力貴族の娘の胸に顔を埋める様に抱きついた姫が寝ていた。

余計に意味が分からぬ！

混乱で何がなんだか分からぬのでとりあえず逃げよう。

そんな混乱の極みにあつた僕は一人から離れようとした所を有力貴族の娘に肩を捕まれる。

有力貴族の娘「そつちも危ないわ。妖精少女を潰してしまっ」

僕が後ろを振り返ると妖精少女が丸まつて寝ていた（かわいい！）

じゃなくて！魔王！！歌つてないで説明して！

魔王『…何をだ？』

どういつ事なの？

魔王『…どうせ何も…見たままだが？』

なんでこんな事に！？

魔王『お主が自分でした事だぞ？』

そんな訳は

魔王『無いと言い切れるのか？』

昨日の記憶が無い僕は魔王の言葉に反論できずに黙り込む。
黙った僕に何を思ったのか有力貴族の娘が小声で話しかけてきた。

有力貴族の娘「…何も無かつたから安心して」

その言葉に僕は有力貴族の娘を見る。

有力貴族の娘「妖精少女もいるのに何かある訳無いでしょう」

僕「た、確かに…」

有力貴族の娘「それに私達はもう貴方のもの。何があつてもおかしくは無いけど」

そう言つと昨日、僕の杯にお酒を注いだ時と同じ顔をした。

有力貴族の娘「それにしても…昨日の事覚えてないの？」

僕「え？」

有力貴族の娘「この状況には貴方がしたのよ？」

僕「ええモガ！」

あまりの事に声を上げそうにあつた僕の口を急いで塞ぐ有力貴族の娘。

「大きな声はダメ！」と小声で言つ。

そして昨日の僕の行動を説明しだした。

姫と有力貴族のお代わりコンボはもう何杯目になるか分からない。やつとボトルが空になつて杯に次が注がれる前に姫からボトルを奪い自分で杯に満たす。

僕「姫、返杯です。受けてください」

僕の差し出した杯を嬉しそうな恥ずかしそうな顔で受け取った姫は有力貴族の娘が「姫ちゃん!」と止めようとする前にぐいっと煽る。そして僕に杯を笑顔で返すと崩れるように意識を飛ばした。

僕「姫にはちょっときつかったようですね」

有力貴族の娘「当たり前です!どうするつもりですか!!」

眠っている姫を抱きかかえなおした僕に美女さんが「寝所までお連れしてください」と言うので歩き出す。

有力貴族の娘は「え、ちょ、まつて」そう言つと僕達を追いかける。半分眠りかけながら椅子に座つてた妖精少女に美女さんが「寝所に行きましょうか」と言って抱きかかえると爺に「お先に失礼します」

と言つと僕達の後に付いていった。

有力貴族の娘は何か言いたそうだったが黙つて姫の寝所まで着いてきた。

そこで何か言つてやううと口を開く前に僕が「扉を開けてください」と言言うと仕方なく扉を開ける。

僕は開いた扉を潜り寝台に姫をそつと下ろす。

有力貴族の娘「…ありがとうございました。後は私がしますので、殿方は退室してください」

そう言わても姫ががっかり僕の服を掴んでいるので動けない。無理にでも指をはがそつかと考えてやめた。

僕「姫が掴んで離れません」

有力貴族の娘「え?」

僕「仕方ないので僕もこのまま寝ましょ」

有力貴族の娘「何を言つて…」

僕は姫の横に転がる。

それを見た有力貴族の娘が「ちょっとー」と近づいてきた。

僕「何ですか？」

有力貴族の娘「婚姻するとは言え、発表前このよつた事はまずいわよ！」

僕「そうですか？」

有力貴族の娘「もちろんです！」

そう言つと僕の横に妖精少女を寝かしている美女さんに「そう思いますよね！」と言つ。

美女さんは「そうですねえ……」と呟いて

美女さん「明日、起きられる頃にお食事をお持ちしまじょうつか？」

有力貴族の娘「明日の食事の心配じゃないのー！」

美女さん「若は酔つた女性に何もしませんよ。そのよつた度胸もありません」

僕「酷い言われようだ」

魔王『だが事実だ』

美女さんの物言いに僕は笑う。

僕「何もしませんよ。度胸も無いですからね」

有力貴族の娘「そういう問題じゃないです！」

美女さん「心配なら有力貴族の娘様も一緒にお休みになればいいじゃないですか」

その言葉を聴いた僕は「それはそうだ」と言つと有力貴族の娘の腕を引いて寝台に誘う。

不意をつかれた有力貴族の娘は酔つていた所為もあるのかバランスを崩し寝台に倒れこむ。

姫を押しつぶすまいと必死で体をそらした結果、寝台に面く横になる。

有力貴族の娘「一体何を」

僕「姫も有力貴族の娘が一緒のほうがいいですよね」

そう話しかけると姫は「ふに」と目を薄く開けて「ひやい？」と言つた。

もう一度僕が言つと横になつている有力貴族の娘を見ると「一緒がいい」と有力貴族の娘に抱きついた。

それに嬉しいような怒ったような有力貴族の娘は、しかし姫を無下に扱う事も出来ずにされるがままにしていた結果、がっちらりと姫にホールドされ動けなくなつた。

それを見て僕は「うんうん」と頷く。

美女さん「では明日、食事をお持ちしますね」

有力貴族の娘「ちょっと待てくださいーー」のまま良くなつもりですか？」

美女さん「はい。何か問題でも?」

有力貴族の娘「大有りです!着替えても無いのに」

俺を聞いた美女さんは「確かに寝苦しいですね」と言う。
姫も有力貴族の娘もそれ程過度の装飾のある服を着てはいないが、
それでもちょっととしたドレスを着ている。
それでは確かに窮屈で眠りにくいだろう。

美女さんは「わかりました」と言つと有力貴族の娘の裏に回つた。

有力貴族の娘「え、ちょ、ええ、な、何を…」

美女さん「後ろのボタンを外しました」

有力貴族の娘「そ、う、じ、や、な、く、て、何、で、ー、ー」

美女さん「このままでは苦しくて寝にくいくと申されたので」

湯力貴族の娘「そ、う、じ、や、な、く、て、『着替えてもい、ない』と言つたのーー」

美女さん「でもこの状態では着替えるのは不可能かと」

がつちり抱きついた姫を見て「姫のボタンは有力貴族の娘様が外してあげてください」と言つ。

美女さん「若が外しても問題ないですけど」

有力貴族の娘「問題ありまりです！それに殿方の前で肌を晒すなんて！！」

美女さん「殿方の前で晒すのは問題ですが、若の前でなら問題ないでしょう」

有力貴族の娘「何故！？」

美女さん「お二人とも事実上はもう若の奥様なんですよ？」

「何処に問題が？」と首を傾げる美女さんに有力貴族の娘が言葉を無くす。

美女さん「それに若はもう寝つてます」

驚いて見ると僕はもう寝ていたらしい。

それを見て気が抜けた有力貴族の娘に美女さんが

美女さん「姫様も窮屈だと思いますので、服を脱にしてあげてくだ

れこ

そう言つと部屋の明かりを消して美女さんが退出して行った。

そうして朝を迎えたらしい。

何も無くてよかったです

そう心から思つ僕に魔王が笑うのが伝わる。

知つてたなら歌つてないで説明してよー！

魔王』見たままだ、と言つたであらう。

確かにそうだけだ！

説明してくれた有力貴族の娘眺めていると居心地悪そうに僕を見つめ返しながら

有力貴族の娘「その所為で着替える間もなく眠らされたんですけどね」

僕「！」、「めん」

有力貴族の娘「別に構いませんけど」

そういう有力貴族の娘の疲れた感じの雰囲気に引っかかりを覚える。

僕「もしかして休めてない？」

有力貴族の娘「そ、そんなこと無いわ」

僕「姫がずっと抱きついていたので眠りにくかったのかな。ごめんね」

有力貴族の娘「それはいつもなので問題無いです」

僕「そ、そつなの？じゃあ何で…」

有力貴族の娘「で」

僕「何か言つた？」

有力貴族の娘「緊張で」

僕「え？」

有力貴族の娘「殿方が一緒に寝ていると言つ状況が初めてで緊張であまり寝れなかつたのです！」

「悪い事をしたな」と思いつつも顔を真っ赤に言つ有力貴族の娘に可愛いなと微笑んでしまう。

それを見咎めて「何ですか！」と言つ有力貴族に僕は言った。

僕「思つてたんだけどさ」

有力貴族の娘「何か？」

僕「僕にそこまで改まつた言葉を使う必要は無いよ」

有力貴族の娘「でも王族になられる方にぞんざいな言葉を使う事など出来ませんし、周囲も許しません」

僕「そつか…対外的には無理なのか」

有力貴族の娘「当たり前です。王族なのですよ。貴方をぞんざいに扱う事は姫をぞんざいに扱う事と同意義です」

僕「なるほど……じゃあ僕達だけの時だけ、普通に話そづよ

有力貴族の娘「何を…」

僕「僕達だけしかいなければ問題ないよ。姫も気にしないはず」

有力貴族の娘「しかし」

僕「人が居る時と使い分け出来ないなら仕方ないけど」

有力貴族の娘「それくらい出来ますが」

僕「ならないじゃない」

有力貴族の娘「わかりました わかつたわ」

そう言つた有力貴族の娘に僕は満足げに頷く。
それを見た有力貴族の娘も笑顔を浮かべた。

そうして一人で笑つていると後ろで「ふえっ」と声が上がった。

どうやら妖精少女が起きたらしい。

寝ぼけ眼で目を擦つていた妖精少女は僕を見ると「おにいちゃん！」

と嬉しそうに抱きついてきた。

僕は妖精少女を受け止めながら頭を撫でてあげると目を細めて笑いながら「一緒だつたなんて気がつかなかつた！」と言つた後に「有力貴族のお姉ちゃんもおはようー」と元気に言つ。

有力貴族の娘が「おはよう」と微笑むのを見ながら「妖精少女は疲れて寝ちゃつてたからね」と言つと「今日も一緒に寝ようねー」と

気の早い事を言い出す。

それに「今日は無理かな」と言つと「え～」とベッドで跳ねる。横にいた子狼がバウンドしているが2匹は意地でも起きないつもりなのが丸まつたまま動かない。

僕「妖精少女、まだ姫が寝てるから跳ねちゃダメだよ」

そう言つと寝ている姫に気がついて「ごめんなさい」と言つ。それに「怒つては無いよ」と言つて優しく頭を撫でる。

だが時既に遅し、姫は周りの騒がしさに目を開けた。

姫「つ頭が、痛い…です」

有力貴族の娘「姫ちゃん、おはよっ」

姫「おはよう」

有力貴族の娘「姫ちゃん、落ち着いて聞いてね」

姫「どうしたの？」

妖精少女「姫お姉ちゃん、おはよっ。」

その言葉に振り返りながら妖精少女に挨拶をしようとして僕を認めるに固まつた。

僕「おおはよー」

姫「え、あ、おはよー、『やることある?』

混乱で疑問系になつた姫は僕と同じ布団で寝てゐる事に気がつくと声にならない悲鳴を上げてパニックになつた。

僕と有力貴族の娘で「何も無かった」「酔つてすぐ寝た」という話をし続けて姫を何とか宥める。

そして落ち着いてから有力貴族の娘が昨日の状況を説明する。

最後まで説明を聞くと「迷惑をおかけしました」と姫が小声で謝罪した。

僕「姫が謝る必要は無いよ! 僕も酔つ払つて寝てしまつてごめんね」

姫「いえ…」

有力貴族の娘「全くよーまだ婚姻していない娘の寝所に一緒に寝ようだなんて」

僕にぽんぽんと悪態をつく有力貴族の娘を見て姫が「あれ?」と言つ。

有力貴族の娘「どうしたのですか?」

姫「ううん、有力貴族の娘が若に対して普通に話していたのでビックリしただけ」

有力貴族の娘「つ!」

僕「僕がせめて僕らしかいない時位普通に話して欲しいとお願いしたんだ」

姫「そうだったんですか」

僕「うん」

姫「二人が仲良くなつた感じがしてすごい嬉しい」

有力貴族の娘「姫ちゃん!」

姫「そうだ!私にも私達のときほどのよつて話して」

有力貴族の娘「それは…」

姫「だめ?」

有力貴族の娘「だめ、です」

姫「どうしても」

有力貴族の娘「どうしても、です」

姫「お願い」

有力貴族の娘「つー！」

有力貴族の娘は姫のお願い攻撃にノックダウンする。
僕もあるお願い攻撃は耐え切れまい。

こくこくと頷く有力貴族に「ありがとう」と姫が微笑む。

ダウーン…ワン、ツー、スリー

魔王『何だそれは？』

独り言、意味は無いから気にはしないで

仲良く笑う二人に「私も」と妖精少女が突貫する。
その姿を見ていた僕はふと思つて口に出す。

僕「姫も僕達だけの時は普通に話そつか」

姫「え？」

僕「ほら、僕達は普通なのに姫だけ違つておかしいでしょ？」

姫「でも私はこの話し方が普通で」

僕「じゃあ気を抜いて話してみようか。僕たちだけ硬く話す必要はないよ」

有力貴族の娘「そうね」

姫「でもどう話せばいいのか」

僕「有力貴族の話し方を思い出してみたら?」

姫は考え込むと「わか…たわ」と頷いた。

僕「まあ無理にいつ必要は無いよ。少しづつ使えるようになればいいから」

姫「はい、ええ」

その言い方に僕と有力貴族の娘が笑い、それを見て妖精少女が笑う。姫はそれを見ていたが自分の言い方が笑われていると分かると拗ねてしまつた。

姫を宥めていると美女さんが食事を持って部屋を訪れた。

美女さんが食事の用意をしている間に「後ろを向いて」と有力貴族の娘に言われ一人は服の乱れを直した。

食事を並べる美女さんを見ながらふと思つ。

僕「美女さんはもつ食事は取ったの？」

美女さん「まだですよ」

僕「でも4人分しかないよ?」

美女さん「私は後で頂きます」

僕「一緒に食べようよ」

姫「そうですよ」

僕「美女さんの分を持つてくるのに時間掛かる?」

美女さん「それ程時間はかかりませんが」

僕「じゃあここは僕たちがやつて置くから、美女さんの分も持つてきてよ」

有力貴族の娘「そうね。皆で食べたほうがおいしいわ」

姫「それにここに居るのは若の奥さんだけですし、気にする必要は無いわ。それに」

「家族は一緒に食事を取ると聞いたわ」と姫が嬉しそうに言つ。どうやら王族は違うらしく、家族で食卓を囲むのは夢らしい。

その一言に僕は何も言えなくなる。

それを見た美女さんは「わかりました」と微笑むと自分の分を取りに行き、すぐに戻ってくる。

そして目を並べるとみんなで食事を取つた。

第3・4話 家族（後書き）

誤字修正

歌ているのが

竜力貴族の娘

子の話し方

笑顔で帰す

誤る必要

歌っているのが

有力貴族の娘

この話し方

笑顔で返す

謝る必要

第35話 時代

朝食後、自室に戻り昼前まで一眠りする。目が覚めると頭痛は軽減されていた。

部屋を出ると美女さんと妖精少女に会つ。

どうやら姫と有力貴族の娘はまだ眠つてゐるらしい。3人で軽く食事を取る。

妖精少女「近くにね、おっきな湖があるんだって！」

僕「そうなんだ」

妖精少女「一緒に行こうよ」

その言葉に考える。

最近はずっと妖精少女の相手が出来てなかつた。もう戦争も终わり危険性は低くなつてゐるだろつ。

それに水の精霊とも意思疎通が出来る妖精少女は、やつぱりそういう場所が好きなのかも知れない。

僕「そうだね。ちょっと出かけようか」

そういう僕に妖精少女が「わーい」と喜ぶ。

そこに白の騎士団長が「賑やかですね」と笑顔で顔を出した。

白の騎士団団長「昨日は結構な量を飲まれてましたが、もう大丈夫なんですか?」

僕「ええ、少し頭痛がしますがもう大丈夫です」

白の騎士団団長「それはお強い」

そう言つと「私はまだ少し体が重いです」と笑つた。

白の騎士団団長「で、先程は何で盛り上がりがつてたんですか?」

僕「近くの湖まで妖精少女を連れて足を伸ばしてみようかと」

白の騎士団団長「近くの湖ですか?…」

そう言つと僕を見て「私も」一緒にでも宜しいですか?」と聞いてきた。

「別にいいよね」と妖精少女に聞いたら「うん!」と元気に答えた。

白の騎士団団長「何人か騎士を連れて行きましょう」

僕「騎士を、ですか?」

白の騎士団団長「戦争は終わつたとは言え、野盗などが居ないとも限つませんので用心の為ですよ」

そう言って笑うのを聞きながら「それもそうか」と思つ。朝食後に出かける事となつた。

白の騎士団団長と共に来る騎士団のメンバーは10名。意外と来た。

まあ「これだけ居れば野盗」ときには負けないだらう。

美女さんもいるし

魔王『野盗』ときなら美女一人で十分だな』

その通り過ぎて言葉が出ない。

妖精少女が僕の馬に乗りたがつた為に一緒に乗る事になつた。
2人乗りはあまりした事は無いが妖精少女は小さいので何とかなり
そうだ。

大砲を出て一刻ほど走つた場所に湖はあつた。

僕「綺麗な水ですね」

白の騎士団団長「大砲で聞いた話では、湖の中に源水が幾つかある
為に綺麗らしいですよ」

僕「なるほど」

妖精少女を馬から下ろす。

すぐい湖の淵まで行くと「お～」と湖を覗き込んでいた。

妖精少女の下げていた小さな布袋から2匹の子狼が顔だけ出して同じく湖を覗いている姿が微笑ましい。

湖に手を入れて「つめたい～」といつている妖精少女を見ながら僕は木の陰に腰を下ろす。

すぐに美女さんと城の騎士団団長が僕のそばに来る。

僕「あれ？他の騎士団の人たちは？」

白の騎士団団長「念のために周りを確認させる為に出しました」

僕「何か折角の休暇をすみません」

白の騎士団団長「構いませんよ。代わりに王都に着いたら一日休ませます」

「逆に何も無い大砦での休みより王都での一日の休みで幸運ですよ」と笑う。

妖精少女が僕を呼ぶので手を振り妖精少女のそばに行く。
湖を近くに寄つてその透明さに驚く。
結構な深さまで底が見えるのだ。

妖精少女「お兄ちゃん、あそこには家がある

妖精少女が指差す方を見ると湖の底に建物が見えた。

僕「昔、村でもあったけど湖の底に沈んだのかな?」

妖精少女「ふしげだね~」

僕「そうだね」

妖精少女「階段があるけど、誰があそこまでいくのかな?」

魔王『ほう、これは』

どうしたの?

魔王『あの建物から結構な力を感じるな。これは 精靈か』

精靈?

魔王『この湖は力を持った精靈、それも中級クラスの精靈が居るかもしない』

中級

魔王『よつぽどの事が無い限り大丈夫だと思うが、精靈に敏感な妖精少女には注意しておいた方が良いかもしだんな』

美女さん「妖精少女?」

美女さんの声に妖精少女を見ると、妖精少女は湖の底から伸びる階段に向かつて湖を入ろうとしていた。

急いで僕は妖精少女の肩を掴んで引きとめる。

妖精少女「え? 何?」

僕「どうしたの?」

妖精少女「うん。まだなんだ」

僕「妖精少女?」

魔王『これは…精霊と交信中かも知れんな』

交信中?

魔王『そうだ。見れない人間からしたら何を会話しているかも分からんがな』

何かに向かつて話をしている妖精少女を見やる。

気が触れたりしたとか、何か良くないものに取り付かれたりした訳じゃないんだね

魔王『まあ精靈との交信に精神が耐えられなかつたら気が触れるし、精靈をコントロールできずに錯乱する事を乗つ取られた、という場合もあるがな』

今はまだ無事なんだよね？

魔王『分からん。我も精靈は見えぬからな』

じゃあどうにか辞めさせないと…

魔王『今の段階で止めるほうが危険だ』

中途半端な状況で手出しをするのは危険であると魔王に言われ、仕

方なく妖精少女を見守る。

僕は美女さんと城の騎士団団長に「精靈と交信中らしいです」とだけ伝えた。

その間にも妖精少女の会話は続く。

「そうそう」「むずかしい」「そうかな?」等など。

中に「お兄ちゃん」という単語が出たが、それは僕の事なのだろうか？

どれくらい話が続いたのだろうか。

「うん、わかった。ありがとう、またね、バイバイ」と虚空に向かつて手を振る。

すると波一つ無かつた水面が神殿の真上辺りから波紋が一度だけ広がつた。

話が終わったのかと妖精少女に声をかけようとしたら「うん…」と一際大きく妖精少女が頷いた。

そして僕を振り返り「お兄ちゃんビックリしたの？」と言った。
それを聞いて僕は安堵の息を吐く。

僕「妖精少女が急に精靈と話し出すからビックリしただけだよ。湖
の中に入っていくかと思つて」

妖精少女「そうだ！ すごかつたよ～」

僕「どうしたの？」

妖精少女「大きな精靈さんが神殿から出てきて挨拶したの」

僕「へえ～。大きいつてどれくらい？」

それに手を一杯に広げ「これくらい」と言つ（可愛いー）

僕「それでどうしたの？」

妖精少女「神殿へ遊びにおいで、って言われたので行こうとしたら
行けなくて、そしたら大きな精靈さんが水の精靈さんと仲良くなつ
てないのかつて聞いてきたの」

魔王『契約状況のことか』

妖精少女「うんつて頷いたら紹介してあげるから、来れるようにな
つたらまたおいで、って言われた」

僕「紹介？」

妖精少女「うん。大きな妖精と仲良くなつたー！」

そう言つて笑う妖精少女に「よかつたね」と頭を撫でてあげる。
嬉しそうに手を細める妖精少女。

魔王『紹介という事は中級以上の精靈か』

何故？

魔王『自分より下の位のランクしか紹介出来ぬだらうからな』

僕「その精靈は下級なの？」

妖精少女「下級？」

僕「えっと、いつも回りに回るよつな」

妖精少女「違うよ」

僕・魔王「『何？』」

妖精少女「いつも周りにいるのはこれくらい（手を水を掬う感じ）」

僕「そんなに小さいんだ」

妖精少女「そして仲良くなつたのはこれくらい（両手を広げる）」

魔王『もしかして中級か？』

僕「帰つて行つたのと同じくらい？」

妖精少女「ううん。帰つた精靈さんはもっと大きかった」

魔王『上級か』

僕「その大きな精靈が『またおいで』って言つたの？」

妖精少女「うん。精靈さんと一杯仲良くなったら水の神殿まで来れるようになるからって」

魔王『ほう。妖精少女は精靈に気に入られる才があるようだ』

気に入られる？

魔王『言つたであろう。精靈に気に入られないと契約できないと。どうやら妖精少女は気に入られたらしい。だから「また来い」と言われたのであろう』

なんで今すぐ契約しなかつたんだろう？

魔王『契約の条件があそこの神殿にあるのだろう。だが妖精少女は水の精靈との契約を結んでおらず神殿まで行く力が無い。だからまた力がついたら来いと言つたのであろう』

なるほど

僕は魔王の言つたことを美女さんと白の騎士団団長に伝えた。
驚く白の騎士団団長と笑顔の美女さん。

魔王『どれ程の力が使えるか聞いてみよ』

僕「妖精少女は精靈と仲良くなつて何が出来るの?..」

妖精少女「ん~（何も無い空間を見つめ）水を出せる

僕「水?」

妖精少女「うん。一杯出せる」

魔王『ほ~、水を出すか。やはり中級だな』

下級は近くに水があれば使える程度だ。水を出すとなると中級以上だひつ。

僕「すごいね。一杯出せるの?..」

妖精少女「出せるみたいだけど、出すと疲れるからやめなさいって
言われた」

僕「じゃあ出し過ぎないよ!つけないとね」

その言葉に「うん~」と言つ。

妖精少女「後ね、小さい怪我なら治る?」

魔王『治癒系か!』

僕「すごいね!」

僕に誉められえ嬉しいのか「うんうん」と笑顔で頷く妖精少女。

僕「どんな傷でも治るの?」

妖精少女「ううん。えっとね、ん~難しい。傷を水で覆つて直す力を早めるだけらしいから、大きな怪我は無理だつて」

魔王『治癒ではなく回復促進か。確かにそれだと自然治癒しないレベルの怪我は治らんな』

僕「それでもす?」

妖精少女「これも使いすぎるとすぐ疲れるから注意してだつて」

僕「そつか。気をつけないとね」

僕が頭を撫でるといつも通り目を細めて笑う。

僕「さつきの大きい精霊、上級精霊に会える様になつたらまたこよ

「うね

妖精少女は「うん！」と元気に呴いた後に「でも」と言つ。

妖精少女「でも上級精靈？じゃ無いって」

僕「そうなの？」

妖精少女「うん。王だつて」

僕・魔王・白の騎士団団長「『は？』『は？』

妖精少女「王だつて言つてるよ」

魔王『まさかの精靈王だと！？』

僕「…妖精少女が仲良くなつたのは？」

妖精少女「ん」中級つて言つてる

魔王『そ、そつか、安心した』

魔王が驚くつてよつぽどだね

魔王『精靈王だぞ！歴史上に現れたのも数える程の存在に妖精少女
が気に入られたのだ！』

しかも精霊王からの申し出である。

魔王が興奮するのも無理は無いらしい。

僕はすごい事だとは思つけどいまいち実感がない。

魔王『お主は全く…とりあえずこの事は慮した方が良いだろう』

何故？

魔王『膨大な力を手に入れるかも知れない器だぞ？どこから狙われるかわからんだろう』

そうか

魔王『まあ精霊と契約自体はそつ少なくないので問題無いが、精霊王と話をした事や「来い」と言われた事は妖精少女がもう少し大きくなつて判断できるまで隠した方が賢明だ』

それを聞いて僕は美女さんと白の騎士団団長に伝える。

それを聞いた白の騎士団団長は「それがいいですね」と頷いた。妖精少女にも黙つているように言うと「姫お姉ちゃんや有力貴族お姉ちゃんにも？」と言つ。

それに「二人には良いけど、それ以外の人は絶対ダメだよ。二人に話す時は僕も説明するから一緒に言おうね」と言い、妖精少女がしつかり頷くのを確認した。

僕「あの神殿があんなにはつきり見えるなら、だれかに悪用されないかな？」

魔王『今まで話にもあがらなかつたんだ。何かしらの対処方法があるのだろう?』

妖精少女「なんかね。精靈の力で見えなくするんだって」

精靈万能説浮上。

魔王『そこまで万能ではないがな』

とりあえず大砦に戻る事を決め、騎士達が戻ると大砦に向けて帰還した。

途中、騎士の一人に「わざわざついて来でもらつて確認までしたてらつたのにトンボ帰りで申し訳ない」という事を伝えると「気にしないで下さい」と笑つて答えてくれた。

大砦に戻ると姫と有力貴族の娘が立っていた。

二人は帰つてきた僕を見ると「宜しいでしょうか?」と笑顔で伝え「お話がありますのでお部屋まで」と言つた。

僕も妖精少女の件で話があつたので丁度いい。

美女さんにこのまま姫の部屋に行く事を伝えると「分かりました。お茶をお持ちしますので頑張つてくださいね」と言われた。

頑張る?妖精少女の契約の件かな?

魔王『お主は本当にめでたいな』

何がだよ

魔王『まあすぐ分かる事だ。気にするな』

そういう念みのある言ひ方って好きじゃないな

魔王『そうだな。「まづは謝れ」としか言ひようが無い。例え自分が悪くなくても、だ』

全く持つて意味が分からない。

悪くないのに謝るとか、どんなに氣弱なんだよ。

やう思つていた時代が僕にもありました。

魔王『言つた通りであら』

僕は姫と有力貴族の前に土下座をさせられていた。

第35話 時代（後書き）

誤字修正

更新中

交信中

要人の為
変わりに
着いて来て
用心の為
代わりに
ついて来て

表現変更

あの湖は

第36話 気持ち

何故正座サセラレテイルノダロウ

部屋に着いて即行正座させられた上で有力貴族に「何故妖精少女と美女さんとだけで遠乗りに行つたのか」という質問をされた。妖精少女から出かけようと言われた事や、最近妖精少女の相手をしてあげる事が出来てなかつたので連れて行つて上げたという趣旨を伝える。

すると姫が「有力貴族…」と名前を呼んで「仕方ないわね、立つていいわ」と有力貴族が行つてくれたので立ち上がる。

なんだか分からぬけど怒りが収まつたらしいと思った僕は、その後に「姫が一日酔いで体調が悪そうだった」や「有力貴族の娘はまだ寝ていたようだつた」と2人を気遣つた事を伝えると何故かまた「正座…！」と言われた。

縋るように見た姫も「正座です」と言つるので正座に逆戻りとなる。

2人の体調を気遣つたのに何で…！

魔王『氣遣う方向が間違つていたのであるつ』

方向つて何だよ！

魔王『頑張つて探れ』

その後、2人の会話の中から誘わなかつた事について怒つている

ことが分かり、魔王の『謝れ』という言葉で一生懸命謝り、「次からは『一人も誘います』と約束させられてから開放された。

その後に湖であつた出来事や口外しないようにという事を伝える頃には半時（約1時間）以上の時間を要していた。

夕食は姫と僕と有力貴族の娘、妖精少女、美女さん、白の騎士団団長で食卓を囲む。

今日の湖での出来事に大興奮の妖精少女は姫と有力貴族の間に座つて話し続けている。

それを2人は楽しそうに聞いていた。

食事が終わる頃に王都から伝令が届く。
何かあつたのかと緊張が走つたが、明日に向かう館の場所を案内する手紙だつた。

それを聞いた白の騎士団団長は副団長を呼び、500名の兵を率いてすぐにその館に向かうよつに伝えた。

僕「なぜ今すぐ向かわせるんですか？」

白の騎士団団長「警備の為ですよ」

僕「警備？」

白の騎士団団長「姫が入られる館です。念には念を入れて置くだけですよ」

やつぱり本当にただそれだけだと畠山よつこ食後のお茶を飲む。

出発は明日の朝、食時（8時頃）と決まった。

夜に久々に美女さんと手合わせする。

必死で美女さんの攻撃を捌いているとあつとこつ間に時間が過ぎていく。

美女さん「強くなられましたね」

僕「はあ、はあ、そ、やつですか…」

美女さん「ええ」

笑顔でそういう美女さん。

息も殆ど切らせてない上に防戦一方だったのは明白で、本当に強くなつているのかな？と思っていたら美女さんが「なつてますよ」と言った。

「心が読めるのか！」

魔王『顔に出すきなだけだな』

「そ、そのなの？」

美女さん「この内乱に参加する前の若はまだまだと重い感じでした」

僕「そうだよね」

美女さん「今は結構な感じです」

僕「よくわかんないよ」

美女さん「剣筋が鋭くなりました。さすがに私も動かすに対処できないうになりましたよ」

そう言えば美女さんがたまに立ち位置をえていた気がする。
前までは棒立ちで一方的にやられていたのに。

「少しづつでも強くなつてこる」 そう思つと純粹に嬉しかった。

美女さん「でもまだ昔の力の一割程度ですけど」

僕「ええ! そんなに強かつたの?」

美女さん「私が勝てないくらいは」

マジですか!

魔王『当たり前だ。だから美女は我の従者になつたのだぞ?』

『そんな事も分からぬのか?』 とこう魔王。

まさかそこまで魔王が強かつたなんて。
美女さんが「今日はここまでにしましようか」と館に戻つていいくの
を見送り空を仰ぐ。

もつともつと強くなつて昔の魔王と同じくらいにはならなこと、

魔族の王位継承争いは厳しいよね?

魔王『 そうだな』

これが終わつたら戻るつもりだつたけど、まだまだなんだね

魔王『 そうだな』

『めんね

魔王『 気に病むことは無い。まだ始まつたばかりだ』

頑張るよ

魔王『当たり前だ』

その魔王の物言いに思わず笑つてしまつ。

そうだ、当たり前だ。

僕は体を拭うために井戸に向かつた。

大砲を出発した。

馬車に姫と有力貴族と妖精少女と美女さんが乗り込み、僕と赤の騎士団団長が馬車を挟む。

その周りを数十人の騎士が囮み前と後ろに列を成す。
そして分隊クラスの斥候が10分隊程、斥候として周りを走り回つ
ているらしい。

やはり仰々しい。

途中、小川の近くで昼食を取りながら小休止である。
携帯食として渡されたサンドイッチとお湯を沸かした紅茶が昼食で
ある。

妖精少女が「ピクニックみたいだね」と言つていたのが微笑ましい。
子狼達はサンドイッチが入つていたバスケットを気に入つたようで
中に入つて遊んでいたが、妖精少女が布を入れると丸まって眠つ
しまつた。

数刻してすぐに出発をし口が沈む前には問題なく目的地の館に付いた。

館には爺が居て僕達を笑顔で迎えてくれた。

すぐに館の広間に案内されると明日の凱旋パレードの説明を受ける。
といつても白の騎士団全員が正装をし隊列を組んで姫の乗る馬車と
共に悠然と王都を進むと言う程度である。

「へえ～」と思つてこむと爺曰「若も正装ですよ」と言われた。

僕「え？」

爺「していただきま～す」

僕「正装…？そんなの無いですよ？」

爺「用意しておつま～す」

僕「用意…？」

爺「ええ」

そつ言いつと黒く塗られた鎧が運ばれてきた。

僕「黒は黒の騎士団と被るんじや～？」

爺「あれば名前だけです」

僕「それもでイメージは良くない気がするなあ

爺「しかし他の色と成りますと…」

白の騎士団長「我々は白で赤の騎士団は赤ですしね

姫「他の色と成ると黄色とか桃色？」

有力貴族の娘「縁とか」

妖精少女「水！」

全身黄色とか桃色とか何処の戦隊ものなんだよ！

まあ別に問題ないなら黒でも良いけど。

ただ

僕「全身鎧は嫌だな」

爺「そうですか？」

僕「動きにくそうだしね」

美女さん「では最低限の部位だけつけばいいのでは？」

爺「うううう。服を黒くすれば変では無いのですな」

僕「じゃあそれで」

美女さん「その場合だと素顔を民衆の面前にさらす事になりますけどね」

僕「！！」

美女さん「さすが若、勇気がありますね

爺「全くですね」

「さすが」と口々に言ひ姫達に今更やつぱり全身鎧がいいな、とも
言えない。

白の騎士団団長「まあ遅かれ早かれ知れ渡るのですし」

僕「ええ！何で！？」

爺「若是姫と婚約されるのですぞ？」

有力貴族の娘「発表時に民衆の前に顔を出さなくてはいけません」「
爺「年に何回かは国事にも出席していただく事になります」

僕「それは、最初からそういうのは断ると…」

有力貴族の娘「無理よ。そんな事をしたら姫を笑いものにする事にな
なりますよ。」

国事に夫婦で出席しないといふのは不仲であるといふ事をさうに出
す事だ。

本来のどつとかは関係なく、そつ思われる。

僕「……」

有力貴族の娘「嫌なら婚約しなければよろしいかと。そうしけばそういう事も必要ありませんし」

姫「若…」

姫が心配そうに見ているのを見て決心する。
僕はもう姫にこういう顔をさせたくないのに、僕の覚悟が弱いせい
でいつもさせてしまつ。

僕「分かりました。王都に居る間は公式の式典で本当に必要なもの
だけ、は出ます」

有力貴族の娘「必要じやない公式の式典…まあ無いとは言い切れま
せんね」

それを聞いて「確かに」と笑う爺。
それに釣られて何人かが笑う。

一頃り笑った爺は「大切なお話を忘れてました」と笑みを消してい
つた。

爺「一部の領主の領民裁判が行われました」

僕「もう、ですか」

爺「私が出てくるまでで5人でしたが」

僕「それで？」

爺「その中に有力貴族が含まれておりました」

その言葉に有力貴族の娘が身を強張らせ、姫がそつと手を掴む。その姿を見た爺は優しい笑みを浮かべ「安心してください」と伝えた。

爺「有力貴族は民衆裁判の結果、全会一致で無罪となりました」

その言葉に有力貴族の娘から一筋だけ涙が流れる。

だがそれでも気丈に振舞う有力貴族の娘に誰もが見てみぬ振りをする。

爺「その結果により家は続行、土地は一部国に返上、年収の10分の1を今後5年間にわたり復興支援として収める事と決まりました」

僕「その他のお責任については？」

爺「一切必要なし、です」

有力貴族の娘が静かに涙を流すのを姫がゆっくりと抱きしめる。

爺「まあ最初は確実に無罪になる者から領民裁判を行つておりますからな」

僕「どこいつ？」

最初から死罪だの家の断絶ばかりが続くと決起する輩が出無いとも限らない。

それに有能な者は早く国政に戻つて貰いたいからである。

王子の戴冠式前後までは有望なもののが領民裁判は終わる見込みだ。逆に言つたら、それ程多くの人数が居ないと言つ事である。

爺「王子が王位に付いた後に有罪になる者たちの裁判が行われるでしょう」

それが王子の最初の仕事となる。

爺「論功は王子の戴冠式の後に行われます。ただし与えられるのは爵位や勲章、物品などに限られ、領土などの下賜に関しては後日、別の理由をつけて行う事になるでしょう」

まだ国王派の領主から分捕つてないので渡すのは不可能だ。だからそれが終わつてから渡す事になるらしい。

僕「それでみんな納得しますか？」

爺「その代わり既に接収した財産から戦の褒章として反国王派だった者達には渡されます。その上で戦功により授与されるのです」

白の騎士団団長「通常、他国への侵攻で勝利した時ぐらいしか領土は下賜されません。国内での戦ですから、十分な額が出れば不満はないと思います」

そういうものらしい。

爺「因みに王子の即位式の後にある高位受領式で若も姫の騎士として任命されますので」

僕「はい！？」

爺「正式に任命しないとダメですからな」

言いたい事はわかる。

ただ身内だけで「姫の騎士ね」と言つても意味が無いのは分かる。

だからと書つて受領式とか！

と叫びたいが口に出さない。
いつも言つるのはどうしても避けられないものがある、こういう事は理解

した。

魔王『勉強したな』

「ひむかこよ！」

僕は「わかりました」と悔しそうに言つ。

その後は明日の凱旋パレードに着るドレスの話で盛り上がる女性人を眺める。

どうやら妖精少女も美女さんもドレスを着るらしい。

妖精少女は喜んでいたが美女さんが嫌がっていたのは意外だった。最終的に馬車の中でそれ程目立たないという話と戴冠式などには出席しないという話で落ち着いた。

「美女さんにも戦功があるのに」という言葉に「私は若の従者ですのでそういう場に出る資格はありません」や「私の戦功は若の戦功です」の一矢張りでこれだけは譲らなかつた。

資格が無いというが出たくないだけだろうと思つ。

どうしても引かない美女さんに「とりあえず、その話はまた王子達と話し合いましょう」ととりあえず先送りにした。

話は大体終わり夕食までの時間、居間で各自が時間を潰している。爺と白の騎士団長は明日の進路や安全の確認の話し合いをしている。

姫と有力貴族の娘は妖精少女に似合う色を妖精少女の髪を弄りながら話しており、妖精少女は目を細めてされるがままになつてゐる。

そして美女さんは笑顔で皆にお茶を入れていた。

僕はその姿を眺めながらふと思つ。

僕「有力貴族が無罪なら、有力貴族の娘は僕に嫁ぐ必要は無いんじや？」

僕の一言にみんなが止まり、そして僕のほうを一斉に見る。それに戸惑いながら「違うかな？」と聞いたら、皆は今度は有力貴族の娘を見た。

有力貴族の娘「そうですね…もう一族を守る必要は無くなつたかもしません」

僕「なら有力貴族の娘も不本意な立場に居る必要はないよね？」

有力貴族の娘「そうですね。不本意な立場に居る必要はなくなりました」

姫「有力貴族の娘…」

僕「なら僕に嫁ぐ必要も無くなつたと言つことだよね」

その言葉に僕を見つめたままの有力貴族の娘は「必要は無いですね」と静かに答える。

あれ？何この雰囲気

魔王『……』

有力貴族の娘「必要が無くなれば私はお払い箱でしょうか？」

僕「いやいや、お払い箱も何も、無理に嫁ぐ必要は無いんだよ」

有力貴族の娘「そうですね。無理は必要なくなります」

僕「だつたら自由にしたらいいじゃない」

有力貴族の娘「自由…ですか」

その言葉に困ったような顔をする有力貴族の娘。
何でそんな顔をするのかが分からぬ。

姫が「若」と言つ。

そんな縋るような目で見られてもどうしていいのか分からぬ。
妖精少女は姫と有力貴族の娘を見ていたが、何かを感じたのか何も
言わずに黙つている。
爺と白の騎士団長がそつと部屋を出るのが視界の隅に入るが何も
言えない。
黙ってしまった僕に美女さんが言つ。

美女さん「若是有力貴族の娘様がお嫌いですか？」

僕「え？ そんな事無いよ」

美女さん「好き？」

僕「え、まあ、じりりかと言えば好き、かな？」

美女さん「では」のまま若に嫁ぐのはダメですか？」

僕「何で？ だつてもう必要なくなつたんだよ？」

美女さん「必要無くなるとこう事は、若ヒトつて不必要になつたんですか？」

僕「まさか…」

美女さん「では何故？」

僕「だつて無理に嫁ぐ必要ないじゃないですか？」

美女さん「無理じゃなればいいのですか？」

僕「え？」

僕「う、うん」

美女さん「無理に嫁ぐ必要が無いから解消と言つてゐんですね？」

美女さん「では無理じゃなく必要なら嫁いで言つていつ事ですよね」

僕「そう…だよね」

美女さんの言葉に考えるが、言われている通りだと思つので頷く。すると美女さんは有力貴族の娘に向き直る。

美女さん「有力貴族の娘様」

有力貴族の娘「はい」

美女さん「若に嫁ぐのは無理ですか?」

有力貴族の娘「……」

美女さん「若に嫁ぐのは必要ないですか?」

有力貴族の娘「……」

何も言わない有力貴族の娘に美女さんは「わかりました」と頷く。

美女さん「若」

僕「はい」

美女さん「若は何故有力貴族の娘が嫁ぐのを拒否なさるのでしきう?
?」

僕「え、だからもう有力貴族が無罪になつたので無理に嫁ぐ必要が

無いから…」

美女さん「では有力貴族様の無罪といつのは関係ないものとして話を進めます」

僕「え？」

美女さん「有力貴族の娘様が無理に嫁ぐ必要が無いから、解約されるのですよね？」

僕「え、ええ」

美女さん「では無理にではなかった場合は？」

僕「は？」

美女さん「無理にでは無い場合なら続けますか？」

僕「え、まあそうなるの…かな？」

美女さん「次に必要な話ですが、確かにもう一族の為に嫁ぐ必要は無くなりました」

僕「はい」

美女さん「では他の必要性があつた場合は受け入れますよね？」

僕「それはそうですね」

美女さん「全く無理ではなく、その上で嫁ぐ理由があれば受け入れ

る?」

僕「……」

美女さんの言い方に何かあるよつた気がして返答に口惑つていると
「どうなんですか?」とさらに聞かれて恐る恐る「そうなります」と答えた。

それを聞いた美女さんは笑顔で頷くと有力貴族の娘の方を見た。

美女さん「本来なら女性の口から言わせるのは不本意ですが、若は
こういう方です」

有力貴族の娘「……」

美女さんの物言いに口を開けたが魔王に『黙つておけ』と言
われて黙る。

美女さん「しつかりはつきりと口に出されないと誤解を解く事は出
来ません」

有力貴族の娘「……」

姫「有力貴族の娘、思つた事をはつきり伝えて。そつしないと若に
は届かないわ」

有力貴族の娘「姫ちゃん……」

美女さんの言葉に言つか言わまいか迷っていた有力貴族の娘は姫の言葉に決意をしたらしく、頷くと僕のほうをしっかりと見て言った。

有力貴族の娘「私は、若に、嫁ぎたいと思います」

僕「はい？」

有力貴族の娘「同じ事をもう一度……！」

僕「あ、ごめん。聞こえました。驚きでつい」

有力貴族の娘の雰囲気についそんな事を言つてしまつ。

僕「でも……もう無理する必要は無いんだよ？」

僕の物言いに「これでもダメなの？」という有力貴族の娘と「頑張つて！」という姫。
何だ、この図？

有力貴族の娘「無理なんかしてない。私が、貴方に、嫁ぎたいの」

僕「……」

有力貴族の娘「な、何か答えてよ…」

語尾が聞き取れないくらい小さくなつていく有力貴族の娘の姿に何か言わなくてはと必死になる。

僕「え、あ、その、何で？」

有力貴族の娘「何でつて…そう思つたから仕方ないじゃない！」

僕「だつてまだ会つて数日だよ？」

有力貴族の娘「理由は色々あるけど、正直分からぬいわ！！」

そういうと色々と理由を挙げていく。

僕が剣術の訓練を受けていた姿だつたり姫との話だつたり

有力貴族の娘「他にも妖精少女を見ている目が優しくていいなと思つたとか一体私は何を言つてゐるのか良く分からなくなつてきたわ

「あわあわ」としだす有力貴族の娘に「私も同じ事を思つてゐるわ！頑張つて！！」と姫が手を握り、妖精少女は間に挟まれながらも「私も！」と言つた。

何、その応援。

そして姫が「ここも」と例をあげると「そうね。ここもいいわよね」と2人で話し出し、妖精少女は「うんうん」と頷く。

有力貴族の娘は本当に混乱しているようだ。

美女さん「若、解約なさるのですか？」

僕「それは…」

美女さん「若に嫁ぐのが無理していない事も、そして必要だと書つ事もわかりましたよね？それでも解約なさりますか？」

僕「……」

美女さん「先程までの関係に戻るだけです。いえ」

「違いますね」と美女さんはいつも以上に微笑むと

美女さん「義務だとか無理だとかそう言つのは一切無くなり、互いに望んでそうなつたと言つ事実のみで繋がつた関係となります。気に病むことは無くなるでしょう」

僕「そう、なのか？」

美女さん「若が有力貴族の娘を嫌つていいなら、はつきりと断つてあげてください」

そう言うと美女さんは妖精少女に「あちらに行きましょうか」と言いながら部屋を出て行く。

嫌つてなど無い

魔王『逆に好いておるぐらいだな』

わ、だね

魔王『では氣に病むことは無いだらつ。姫も受け入れてる。この話は前もしたな』

したね

魔王『その時に決意したのであらうへ。』

その時とは違つよ

魔王『どひつ違つのだっ。』

それは…

魔王『美女の言つとおりであらうへ。後はお主の気持ち一つだ』

やつぱり魔王は変わったね

魔王『おぬしの悪影響だな』

苦々しそうに言つ魔王に「ありがとう」とだけ伝える。
そして僕のいい所を上げあつている一人に目を向ける。

今まで恥ずかしいから出来るだけ耳に入らないようにしてたけど、聞くとやっぱり恥ずかしい。

だがそれを我慢して有力貴族の娘を見る。

僕「有力貴族の娘」

僕の言葉に2人の会話が途切れる。

もう一度呼びかけるとゆっくりと二つを向いた。

僕「有力貴族の娘」

有力貴族の娘「…はい」

僕「有力貴族の娘に伝えないといけない事があるんだ」

そうして僕は「この事は姫と美女さんしか知らない事だけど」と前置きをして話し出す。

僕「僕は実は」

有力貴族の娘「魔族なんでしょう？」

僕「そう魔族なん、え？」

有力貴族の娘「姫から聞いたわ。魔王の意識の事も、別世界から来

た事も「

僕「え？え？」

姫「有力貴族の娘は若の奥さんになるんです。だから隠し事はしてはいけないとthoughtて言いました」

僕「ええ？」

有力貴族の娘「全部聞いてるわ。その上で私はそんな事は気にしない」

有力貴族の娘はしつかりと僕を見つめて言つ。だが自分の服を掴む手は白くなるほど固く握り締められており、姫がその手を優しく包んでいた。

僕は有力少女を見つめ返し、しつかり聞こえるように言つ。

僕「有力貴族の娘が良ければ、今までどおりの関係を続けてもらつてもいいだろうか？」

有力貴族の娘「え…」

姫「若…」

有力貴族の娘の目に涙が溜まる。

あ、あれ？

魔王『なんだ、断るのか？』

ち、違つよ！！

魔王『今までの関係』と言つのは偽装だったの「友人関係のまま」と受け取られるだろうな』

それを聞いて焦つて言葉を紡ぐ。

僕「あ、違つ！違つんだ有力貴族の娘！！」

有力貴族の娘「……」

僕「えっと、僕の所に嫁いで着てくれると嬉しい。その、義務とかそういうのではなく

そう言うと有力貴族はうんうんだけ頷き続ける。

それを聞いて姫が有力貴族を抱き寄せた。

僕「姫、今聞いて貰つたとおり、姫と婚姻をしながら有力貴族を本当に迎え入れる事になるから」

姫「はい。私は元よりそのつもりでした」

確か最初から姫はそう言ってたかもしれない。

僕は近づくと二人の肩に手を置いた。

僕「二人が僕を選んでよかつたと言つて貰えるように力の限り頑張るよ」

僕を見上げた姫が「違いますよ」と言つて言葉に有力貴族の娘が頷く。

姫「二人ではありません」

有力貴族の娘「よ、4人で、す…グス」

僕「はい?」

姫「妖精少女と美女さんも入れて4人です」

有力貴族の娘「そう…ね」

美女さんと妖精少女に関しては突つ込みどころ満載だつたけど、姫と有力貴族の娘の嬉しそうな顔を見ると何もいえなくなり、とりあえず「がんばるよ」とだけ伝えた。

第36話 気持ち（後書き）

誤字修正

付いて速攻 着いて即行

誤り 謝り

裁いている 捧している

そういうと そういうと

こひもいいわよな こひもいいわよな

第37話 二者択一、二者一択

食事の席で爺と白の騎士団団長に有力貴族の娘を正式に娶る事を云ふ。

「わざわざ言わなくても」という有力貴族の娘に「心配掛けたからね」と言つ。嬉しそうに頷く爺と「それは良かつたですね」とさわやかに笑う白の騎士団団長。

姫も優しく微笑んでおり美女さんと妖精少女はいつも通りだ。穏やかな時間が流れる。

白の騎士団団長「では父君に挨拶に行かないダメですね」

僕「挨拶!?」

爺「そうですね」

有力貴族の娘「別にそんのはいいです!」

爺「いやいや、良くないでしょ!」

僕「やっぱり行かないとダメだよね」

姫「私も行かないと!..」

有力貴族の娘「姫ちゃんはいいの！」

妖精少女「私も！」

姫「そうね。家族全員で行かないと」

有力貴族の娘「姫ちゃん、それ違うから

白の騎士団団長「やっぱり定番のアレですかよな。『娘はやらん！』
とガツーンといぐアレ」

僕「ぼーじぼーですか！？」

姫「私も！？」

有力貴族の娘「姫ちゃんは私が守るから！」

僕「じゃあ僕は有力貴族の娘を守ればいいのかな？」

姫「私も守ってください！」

僕「じゃあ陣形は僕が先頭に立つて、その後ろは真ん中を姫で左右
を爺と白の騎士団団長、最後尾を有力貴族の娘が固める1・3・1
のインペリアルクロスで」

有力貴族の娘「陣形つて何ですか！？」

有力貴族の娘のツツコミが響き渡る。

新たな立ち位置を手に入れたようだ。

魔王『求めてないだろうがな』

そうだよね

王城の門を潜る。

先頭の騎士が門に差し掛かつただけで何かが爆発したような音がする。

何だと思つたら歓声らしい。

何千何万という人が声を上げると人の声には聞こえないようだ。

姫の馬車と共に僕も門を潜ると一際歓声が大きくなる。

馬車の通り道は赤の騎士団と翁の兵達により市民が入らないようにされているが、その外側は人で溢れ帰っている。

道はもちろん建物の各窓も全て開かれ何人もの人が乗り出している。そして巻かれる…花びら?

黄色い花びらが雨のように降り注ぐ。

どうやら市民には受け入れられているようだね

魔王『まあ姫は人気らしいからな。この熱狂を見ると「婚姻発表をしたら暴動」というのは強ち嘘で無いかもしねない』

怖いことを言わないでよ

魔王『腹は括つたんだろう？それぐらいで引くなよ』

引かないよ

魔王『がんばれ』

声援と花びらの量は城に近づくにつれて益々大きくなる。
城まであと少しという所で騎士の間から抜け出し馬車に近づくものが居た。

とつさに剣の柄に手を掛けた僕に魔王が『おんない 幼子だ！』と叫ぶのが聞こえ、柄から手を離し近寄ってきた影を捕まえて馬に引き上げる。僕が止まった事により馬車も止まり、それに釣られて全体が止まる。すぐに周りの警備兵が寄つてこようとするのを手で制し相手を見る
と、妖精少女と同じくらいの歳の小さな女の子が急に馬の上に抱き上げられて目を白黒していた。

僕「急に飛び出したら危ないよ」

小さな女の子「『めんなさい』」

僕「急にどうしたの？」

小さな女の子「姫様にこれをあげたかったの」

そう言って差し出したのは数輪の黄色い花だった。

僕は「だからって飛び出したら馬に蹴られて危ないから、今度からはダメだよ」

そう言うと馬を馬車に寄せる。

何事だらうと心配そうに見ている姫の恋の傍に拠ると「姫にプレゼントを持ってきてくれたそうだよ」と伝えた。

姫が馬車の扉を開けると周りの兵が護衛に寄つてくる。

馬車の上から小さな女の子が差し出した黄色い花を「ありがとうございます」と受け取った姫は大事そうに胸に抱くと「お花のお礼よ」と綺麗な黄色のハンカチを少女の手首に巻いてあげた。

姫「我が国では黄色は幸福を表すんです」

僕「今度は嘘じゃないんだね」

そう笑う僕に姫はキョトンとしたがすぐに腕の紐に思い至り「そうですね」と微笑んだ。

そうして少女の頭を撫ると「ありがとう。でも危ないから飛び出

してはダメよ」と微笑んだ。

馬車の扉が絞められ窓越しに姫が手を振っている。

その姫に手を振り返す小さな女の子を連れて脇によると母親なのか姉なのか、若い女性が駆け寄ってきた。

必死で謝る女性に「姫は全然怒つてませんよ。逆に小さな女の子の心からの贈り物に感激し、自らのハンカチを小さな女の子に送されました」と伝えると、小さな女の子が「これ！」と手に巻かれたハンカチを女性に見せた。

僕「ただし姫は小さな女の子が飛び出した事は危ないので怒つてしましました。でも小さな女の子がもうしないと約束したのでこれ以上の罪には問われません。安心してください」

そう言うと小さな女の子を馬から下ろし女性に預ける。

そして「もしこの小さな女の子から姫のハンカチを奪い取るような輩が居たら城に申し出てください。犯人を見つけ出し厳罰に処しますにで」と笑いながら言つ。

あまりの事に恐縮しまくつている女性を笑わせようと思つて言つたけど、あまり効果は無いようだった。

魔王『いや、効果的だぞ』

そう?

魔王『あれだけ回りに聞こえるよつて言つたのだ。奪う輩はそう出まい』

本当に居るんだ！！

魔王『姫の私物だぞ？好事家がどれだけの金を出すか』

そういうもののなんだ

「またね」と手を振る小さな女の子に手を振り替えしながら馬車の横に戻るとパレードの行列は再度動き出した。

姫と小さな女の子のやり取りを見ていた人達から、見ることが出来ずには止まっているのか分からぬ人に説明が波のように広がる。それを知った人は知らない人に大声で伝え、そのまま姫への歓声を上げ続けと言う事が繰り返され、あつという間に大歓声になる。誰もが姫の優しさに熱狂していた。

隊列が止まる前と後ではものすごい違のだ。

鼓膜が破ける

魔王『いまく？』

音を拾つ膜だよ。耳の中にある

魔王『そんなのがあるのか？』

え？知らないの？

魔王『知らん』

そつか。こっちの世界は医療技術がそんなに進んでないんだったね

魔王『お主の国では違つのか?』

「こゝよつはかなり進んでゐると思つけど、僕自身にその知識は無いからね。伝える事は出来ないよ。

魔王『それは残念だ』

全くだね

そんな話をしていると一の郭の門が見えてきた。

王都の市民は一の郭の門の前までしか居ないのであそこを潜ると凱旋パレードは概ね終わりを告げる。

無事に姫の乗る馬車は城の門を潜つた。
馬車から降りた姫を王子と翁が出迎える。

王子「お帰りなさい。姫姉さま」

姫「…ただいま」

姫が感極まつたように笑い泣きで言つ。

この顔のために僕は頑張つて居たと胸を張つて言へる。

王子「若もお疲れ様です」

僕「王子殿下、疲れてくるようですが？」

王子「戦後処理で色々と」

そう笑うと爺が「昼食を用意しますので」と先を促したので皆で向かう。

部屋に入ると有力貴族が居た。

部屋に入った自分の娘を無視し姫に臣下の礼をとる。姫がその挨拶に「私は良いので有力貴族の娘に…」と言つと「ありがとうございます」と言い、「無事でよかったです」「お父様こそ」とお互いに短く言つた。

どうやらさすが親子といつか似たもの同士らしい。

昼食が運ばれて来てみんなで食事をする。

食卓には王子、僕、姫、妖精少女、有力貴族の娘、美女さん、翁、赤の騎士団長、白の騎士団長、有力貴族、現領主、領主息子、翁とぐるりと並んでいる。

といつか領主息子、久しぶり！

今度こそ穏やかな時間が流れ。

白の騎士団長「皆さんで食卓を囲むのもこれが最後かもしけませんね」

翁「そうじやな

僕「なんですか？」

爺「王族と食卓を囲むなどと血の事は滅々にあります」

赤の騎士団団長「戦場という特殊な環境であったからこそ行われていたに過ぎぬからな」

僕「そうなんですか」

白の騎士団団長「でも若は王族になるの王子や姫と今まで通り食事が出来ますよ」

「私は？」と聞く妖精少女に「妖精少女も若の奥さんだから大丈夫」と笑う白の騎士団団長。
いつの間にか既成事実になつただからその冗談をあまり言わないで欲しい。

王子「せつ言えば前に話をしていた城の上にある離宮ですが、とりあえずは部屋は常に手入れされていましたので今日の晩からでも入れますよ」

姫「そうですか」

王子「たださすがに婚約発表前の若が入ることは出来ないので、離宮に渡る通路にある部屋を仮住まいとしてください」

翁「初めて内部を見たが、中々すこいい設備じゃつたぞ。どうやってるのか水を上までくみ上げているようだしの。食料を運び込めばあそこだけで籠城が出来そうだ」

僕「す」いですね。なら火をたけばお湯が沸かせますね」

翁「火を絶やさなければいつでも入れる風呂もあつたからの」

白の騎士団長「それはす」い。さすが後宮」

この世界はお湯を沸かして貯めて入ると言う事はあまりしない。
個人宅ではせいぜい水で体を拭くか川で水浴びをするか。

お風呂は大都市に大衆浴場がある程度である。

個人で風呂を所有しているのは王族か大貴族くらいである。
小さな領主だと蒸し風呂があればいい方である。

王子「取り合えずどの部屋もすぐに使えますので好きな部屋を選んでください。どの部屋も素晴らしい感じでしたよ」

それを聞いた姫は「楽しみですね」と有力貴族と妖精少女に言ひつ。

翁「そういえば、有力貴族の娘は若に嫁ぐのか?」

その言葉に有力貴族が止まる。

翁「もう嫁が無くても良くなつたが?」

僕「それなんですが、有力貴族の娘と話し合つて娶る事にしました」

翁「ほり」

僕「後はお父さんである有力貴族殿に認められるかどうかです」

翁「じゃ、そうだが? お父さん」

有力貴族「私は翁のお父さんではありません。若、なぜ尋ねられるのですか? 王族になられるのだ。よこせと一言いうだけで済むでしょう」

有力貴族の言葉に「それは違うと思います」と僕は言つ。

僕「物じやないんです。よこせ、で終わらしていい問題じやない」

有力貴族「しかし王族といふのは人を物扱いできる立場にあるのです」

僕「僕は王族じゃない。王族は姫です」

有力貴族「その姫と婚姻なれるのだ。やうしたら貴方は王族の一員です」

僕「だとしてもそういうやり方は好きじやない」

有力貴族「私がダメだと言つたらどうするんですか?」

その言葉に有力貴族の娘がピクッと揺れる。

僕「認めてもらつままでお願いし続けるのみです」

有力貴族「何故そこまで娘を?」

僕「有力貴族の娘が好きだからです」

姫が「いいなあ」と呟くのが聞こえ笑いそうになる。

有力貴族「貴方は姫と結ばれる。その上で娘まで欲しいと?」

僕「姫ももちろん大好きです。でもそれだけじゃダメなんですね」

有力貴族「何がダメだと?」

僕「もう有力貴族の娘も僕達の家族の一員なんです。居なくなるなんて考えられない」

そういう僕に姫が「そうです」と頷く。

ぱつとこっちを見た妖精少女の頭を撫でながら「もちろん妖精少女も家族よ」と姫が言う。

有力貴族「有力貴族の娘自身はどう考えている?」

有力貴族の娘「家族になりたいです」

しつかりと目を見つめ返して言う有力貴族の娘。
その娘を見つめていたがふと笑うと

有力貴族「元々跳ねつ返りな所があつた上に、今は私が国賊のレッテルを張られてしまつた所為で嫁ぎ先も困る状況でした。逆にこちらからお願ひしたいくらいの好条件です」

有力貴族の娘が反論しようとするのを手で制して「娘をよろしくお願ひします」と呟いた。

王子「別に国賊等と思つてませんよ」

翁「そうじゃ。有力貴族が居なければ国はもつと荒れていだらうしな」

有力貴族「そう言つていただけるだけで身に余る光栄です」

王子「有力貴族には論功で国の安定に尽力したとして章を与えるつもりです」

有力貴族「受け取れません」

翁「受け取るしか選択肢は無い。今の状況で辞退する事が王子に与える影響を考えれば、断る事も出来舞い」

通常なら「自分には身に余りすぎる」と辞退する事は悪い事ではなく、場合によつては謙虚さが賞賛に繋がる。

しかし有力貴族は国王派に付いて居たにも関わらず拒否すると「ついで」事は王子の治世を拒否するとの同義語だ。

そんな事をすれば向かう先は断頭台である。

遠まわしの脅しかよ！

有力貴族「…分かりました」

翁「そして内務大臣もやつてもひつからいの」

有力貴族「それは」

王子「今からが国の本当の大事なんです」

翁「それを見捨てるど？」

有力貴族に拒否権など最初から無い。

元々翁もお願いではなく断定で語つていたしね。

白の騎士団長「論功として言えば前に話していた領主息子はどうしますか？」

領主息子「は？自分ですか？」

赤の騎士団団長「ああ若が姫と結ばれたのは領主息子のお陰といつやつだな。それを言うと我の功績も大きいだろ？」

白の騎士団団長「女性の気持ちは勝手に口に出す罪は100回断頭台に登っても償いきれませんけどね」

赤と白の両騎士団団長の言葉のやり取りに戸惑いながら「えっと、私が何か？」と、いう領主息子。

やつぱりあの件を引きずっているようで、前より大人しくなっている。

白の騎士団団長が領主息子の手柄、簡単にいうとミスのお陰で大砦に戻る事になり、そのお陰で姫の気持ちは気が付いた若が姫と婚姻する事になった、と説明を受ける。

白の騎士団団長「それに有力貴族の娘が特使として来たのに出会えたのも領主息子のおかげかもしませんね」

王子「確かにそうですね。あそこで大砦に居なければ今の展開は無かつたかもしません」

そのまま進軍して出会っていた場合は進軍を優先して使者を放置していた可能性が高いからだ。

そうなると実力行使での王都攻略になり、もつと被害も大きくなつた上に有力貴族とこうして食卓を囲む事も無かつたかもしれない。その話を聞いた領主息子は首を振り「偶然です」と自分はそんなも

のを受け取る立場ではないと並べ。

王子「いえ、受け取つてもらこます」

領主息子「しかし…」

白の騎士団団長「あの時のミスですが、本来ならあそこまで厳しい処罰を受ける程のものではありませんでした」

赤の騎士団団長「そうだな。せいぜい行つても戦果取り消しでも十分おつりが来る」

王子「でも連勝に緩みがちな軍を引き締める為に人身御供としてあいつ処罰にしました。申し訳ありません」

領主息子「いえ、その話は爺からの手紙で伺つておりましたので恨んでおりません」

爺「差し出がましいとは思いましたが、一つのミスで腐つて欲しくありませんでしたので。爺はそういうのは送るような奴ではありませんし、他の方は立場的に無理でしたしね」

王子「爺、ありがと」

領主息子「功を早つて同断戦功した上に大きなミスを犯したのは確かにあります。前に美女殿に言われた事を全然理解していなかつたとゆつくり考える事が出来ました」

翁「それが分かつただけ十分成長できたじゃうつな」

王子「ですので本当は戦果に対する論功なのです

翁「拒否権は認めない」

翁が言つ切ると領主息子は「あつがとうござります」と深々と頭を下げた。

王子「若さもあつますよ

僕「は?」

王子「ただ若は何もいらないこと言つ張ると思ったので、褒章はお金と姫の騎士の地位だけにしました」

翁「当初の約束通りにな

僕がほつと胸を撫で下ろすと翁は悪うに笑つて言う

翁「論功の最後に姫自信による姫の騎士の叙任式を行つまつじや

僕「は?」

翁「あの時の姫への件の誓いが素晴らしいかったのでな。あれを少し
変えて行つ予定じゃ

そういう翁に姫が「それはいいですね」と手を叩く。
有力貴族が「私も見てみたかったんですよ」と言つのを聞きながら
僕は呆然としていた。

王子「論功授与式は僕の戴冠式の後に行つ為に武器の携帯は出来ません」

翁「なので若が最初に捧げていた剣をこちうで用意しておいて姫がそれを若に授けると言つ形にする予定じや」

王子「宝物庫にある一品を若に上げますよ。」

僕「ちよつと待つてください！見世物は嫌です！…！」

王子「見世物ではありません」

翁「まあ見せるんだがな。若が姫の騎士だといつ事を国内の全ての者にな」

僕「いやいや…」

姫「若は嫌ですか？」

僕「え、いや」

姫「嫌ですか？」

僕「そんな事は無いですが…」

姫「ではやつてくださいますか？」

僕「あの、その」

姫「はい」か『うん』で答えてください

どうちも肯定だから！というか何処で知ったのそのネタ！！

姫の台詞に笑う面々。

魔王『どうせ拒否権は無いんだ』

そうだつたね。忘れて居たかつたよ

僕はしぶしぶ「はい…」と答えた。

第37話 二者択一、二者一択（後書き）

誤字修正

守ればいいのなか 守ればいいのかな
言うようですが いるようですが

進化の礼 臣下の礼

娘自信 娘自身

棒是 呆然

有力貴族を守れば 有力貴族の娘を守れば

湯力貴族の娘 有力貴族の娘

竜主息子 領主息子

前に美女殿荷 前に美女殿に

試練は続く。

パレードから3日がたつた。

僕と姫が婚約するらしいという噂がすでに蔓延している。反国王軍内では周知の事実だったようなので、予想はされていたけど。

ただ婚約に関して賛成の風潮になりつつあるのは翁による工作が見え隠れしている。

本人は知らないと言つてたけど

魔王『それは無いな』

礼儀作法とダンスの練習は毎日行われている。

式典の礼儀作法はそれ程難しいものではない。奇抜な内容は無いし姫の騎士を授与される手順だけを覚えれば良いようなものだ。

ただその手順と言つのが僕がこの前やった姫に剣を捧げる行為で、それを大勢の前でやるのは少し恥ずかしい。

王子「そうですか？僕はいいと思ひますけど」

姫「私もかつこいいと思ひます」

僕「あ、ありがとうござります」

白の騎士団団長「練習を見ている限りでは素晴らしいものに思えますが」

周りには好評らしい。

やる方は恥ずかしいんだけどね。

それでもこれはまだマシな方だった。

ダンスの練習に比べたら。

有力貴族の娘「ほら、また下を向く！足元を見てはダメよ」

ダンスの練習は有力貴族の娘がしてくれる。

最初は姫が行う予定だつたらしいが、僕がダンス未経験者と分かると姫より有力貴族の方が教えるのが得意と言つ事で変わったのだ。

有力貴族の娘「間違えて私の足を踏んでもいいから、しっかりと前を向いて」

中々のスバルタである。

半時（約1時間）の練習で疲労困憊である。

これなら剣を振るつての方が楽だ。

いつもなら冷やかし半分に現れる両騎士団団長も顔を出さない。

魔王『逃げたな』

やつぱりー？

ずっと僕と有力貴族練習をにこにこ見ていた姫に声を掛ける。

僕「姫はダンスの練習をしなくてもいいんですか？」

有力貴族の娘「姫は幼い頃から習っているから、今更数日練習する必要なんか無いわ」

姫「それにダンスを踊るのは王子と若だけですから」

どうやらダンスはある程度決められたパートナーで踊った後は好きにダンスの誘いを申し込めるらしい。

姫は王子と僕以外で踊る気も無いので、すぐに上座に上がつて見ている事にするらしい。

さすがにそこまで追いかける無礼は誰もしないだろう。

僕「有力貴族の娘はどうするの？」

有力貴族の娘「私は……お父様と踊った後は適当に申し込まれたのを受ける事になるわね」

僕「そうなの？」

姫「有力貴族の娘は大貴族の娘ですからね。未婚の貴族の子弟達が沢山申し込むと思うわ」

有力貴族の娘「面倒ですけどね」

僕「僕の奥さんと言つ」とで断る事は出来ないの？」

姫「まだ発表していない状態では難しいですね……」

なんだか物凄く嫌なので何か出来ないかを僕は考える。

有力貴族の娘「あら、独占欲？」

「ふふ……」と笑う有力貴族の娘の言葉に僕が抱えていたもやもやが晴れる気がする。

僕「そうだ、独占欲なんだ」

有力貴族の娘「え？」

僕「何か嫌だつたんだけど、独占欲と言われたらしくり来た。他の男と踊るのを見るのが嫌なんだ」

有力貴族の娘「え、な…」

「何ではつきりとそんな事を…」と真っ赤で言つ有力貴族の娘に「僕の奥さんになる人だからね！」と言つと「独り言を盗み聞きしないで！」と真っ赤になつて怒られた。

「私みたいに逃げる事が出来たらいいのに」と呟く姫に「それだ！」と僕は手を叩く。

僕「上座に登つて姫と一緒に居ればいいのでは？」

有力貴族の娘「少し難しいわね」

僕「何で？」

有力貴族の娘「勝手に上がつていけば不敬罪だわ」

僕「勝手じゃなければいいの？」

有力貴族の娘「そう…なるわね」

僕「姫、踊る順番はどうなつてますか？」

姫「私は王子と踊つた後に若と踊つて上座に戻るわ

僕「王子の順番は？」

姫「一人目が私ね。一人目以降はその場に残つて適当に来る踊りの相手を続ける事になるでしょうね」

僕「王子の2人目の相手を有力貴族に出来ないかな？」

姫「それは…翁達に聞かないと分からないわ」

僕「じゃあごり押しで入れ込もう

有力貴族の娘「どういうつもり？」

僕「有力貴族の娘は一人目を僕、一人目を王子に踊つてもらうんです」

有力貴族の娘「…それで？」

僕「僕は姫と踊つたら姫を上座へ案内するようになります。有力貴族の娘は王子に上座に案内してもらえばいいんですよ」

「名案ですね！」と姫が声を上げる。

これで有力貴族の娘も煩わしい誘いを受ける事も無い。

有力貴族の娘「それは…ダメですよ」

有料貴族の娘が言つには未婚の王子がそのような行動を取ると王妃候補として騒がれてしまうと言つのだ。

さすがにそれはまずいのかな?と思つていたら姫が「聞くだけ聞いてみましょう」と言つて部屋を出て行つてしまつた。

有力貴族の娘「大変な事になつたわ」

僕「そうだね」

有力貴族の娘「貴方が言い出したのでしよう」

僕「でも有力貴族の娘が誰かと踊るのは見たくないから」

有力貴族の娘「…も、もし王子が無理ならどうするの?」

どつじよつ?

はつきり言つと王子が断るとは思わない。

なんだかんだできつとやつてくれると言つ確信がなぜかある。

ではもしダメだつたらどうじよつか。

僕「有力貴族の娘と踊り続けるしかないかな?」

その言葉に有力貴族の娘は「なにそれ」と笑つ。

そんなに笑う事…だよね。

僕「それか踊った後に踊りの輪から外れるように誘つしかないかな？」

有力貴族の娘「バルコニーとかで2人きりで会話できるよ?」

僕「そうだね」

有力貴族の娘「姫との婚約を発表した直後にそんな事をすると誤解されるわよ?」

僕「誤解じゃないし、問題ないよ」

有力貴族の娘が黙り込む。

どうしたのかと思って声をかけようとした時に姫が王子と翁をつれて戻ってきた。

姫が来るまでに簡単に話をしていたらしい。

すぐに「問題ありませんよ」と王子が言つてくれた。

話が早くていいね。別に長々会話するのが面倒な訳じゃないけどー。

魔王『何に対する物言いなんだ、それは』

翁「ただし上座の立ち位置を工夫せねばならん」

そう言つと翁は地図を取り出した。

祝賀会の行われるホールの地図らしく、色々書き込まれているとこ

ろを見ると警備の場所を記した地図らしい。

工夫という程でもない。

ただ上座の数段下に椅子を用意して置くというだけだった。
どうやら元々そこには妖精少女と美女さんが待機している予定だつたらしい。

妖精少女は実質何もしてないけど兵達の心の支えとして（勝手に）祭り上げられていたし、美女さんに至っては新興宗教の神になつてゐる。

そして一人とも（僕もだけど）この国の人間ではなく、姫と王子を助ける為だけに手伝っていた客人でもあるので、このような待遇でも不満は少ないというのだ。

僕「王女だけ上では寂しくない？」

姫「確かにそうですね」

僕「一緒に座つたらダメなのかな？」

翁「そういうかんじやろう

僕「そうですか？」

翁「王族だぞ？」

僕「でも王位に付く王子は無理でも姫なら問題ないのでは？その王子もダンスの相手で踊りっぱなしなんでしょう？」

翁「確かにそうじやが

王子「問題ないと思ひますよ。全員、若の家族ですし、今から周知
されぬのもありでしょ?」

その王子の言葉に翁が「確かにそれはあるな」と頷く。
それで王女は祝賀会の最初だけ王子と共に上座に居て、踊り終わつ
た後は妖精少女達と同じ場所に居る事となつた。

僕「王子は踊りっぱなしになるそうですが、大変ですね」

爺「仕方あるまい」

首を振りながら笑う。

王子が未婚と言う事で誰もが自分の娘を送り込んでくる事が予想さ
れる。

王子「まあ王族の定めと諦めます」

僕「王子の后か…王子には好きな人は居ないんですか?」

王子「…僕は国同士の結びつきを強くする為に他国の姫を娶る事は
決まつてますからね」

僕「そなんですね…」

王子「相手は爺達が決めてくれますよ」

爺「まあ、そうなりますな」

「王族はそういうものです」と王子が言つので、そういうもののらしい。

王子も受け入れているものを僕がどういつぶやくわけも無い。

王子「だからこそ姫姉さまが本当に好きな人と婚姻する事は嬉しいんです」

その言葉に姫が「ありがとう」と微笑む。

王子が「有力貴族の娘もね」と言つ。

僕「有力貴族の娘も?」

有力貴族の娘「私も大貴族の一人娘ですから、どこかの大貴族の嫡男か王族の誰かに宛がわれていたでしょうね」

翁「王族も貴族も婚姻は家を強くる手段だからな」

「相手の顔を見るのは婚姻の席というのは良くあることだ」と言つ翁の言葉に驚く。

そうなの?

魔王『 そうだな。会つてみたら物凄い幼子だつたり年寄りだつたりと言ひ事もある』

王族も貴族も大変だ。

王子「だから幸せになつてくださいね」

そう笑う王子に僕はしっかりと頷いた。

いい感じ（？）で話が纏まって、後は本番を迎えるだけ。

だと思つたら、そんなことは全然無かつたぜー。

ダンスの練習は熾烈を極めた。

有力貴族の娘が嬉々として僕に叱咤しダンスが一応の形なり姫とも練習を始める頃には前日になつていた。

本当にここ数日は大変だった。

僕の物覚えが悪い所為なのか一日の大半をダンスに費やした。それにつき合う有力貴族のパワーは大したものだ。

そして空いた時間で寸法を何回も取られたり試着をさせられる。どうやらパレードでの黒尽くめを姫がいたく気に入つたそうで、僕は黒で統一しようという事に決まつたらしい。

王子「姫の騎士団が設立されたら、騎士団メンバーも黒尽くめ決定ですね」

僕「はい？姫の騎士団？なにそれ？」

王子が言つには姫の騎士と言つのは僕しか居ない。そして王子から任命されて殿騎士団にも所属せずに新たになるとと言つ事は、騎士団を作つても問題ないという事らしい。冗談だと思つて翁を見たら「作れるぞ」と言われた。

僕「でも作つてどうするんですか？」

翁「姫と後宮を守ればよかう」

僕「そつなると女性騎士団となりますが？」

姫「女性騎士団つて素敵ですね」

王子「面白いかもしだせんね」

「どうやらいの国だけではなく、何処の国にも女性騎士団は無いらしい。

そもそも兵として女性が勤務している事はあるが、騎士に任命される事はありえない。

女性でも頑張れば騎士になれるといふのは画期的な発想らしい。

「そうか、まだこの世界では女性の地位はそんなに高くないのか

魔王『おぬしの世界は違うのか?』

政治を司つたりしている事を伝えたら魔王が驚いていた。
やつぱりこの世界はそつらしこ。

僕「女性騎士団…ですか」

姫「作つてみませんか?」

僕「姫が望むなら構いませんが、雇うお金が出来るかどうか」

翁「騎士団を設立したら國から規模に応じてある程度出るが?」

魔王『面白そうだな』

全ては出ないし大きくすればするほど出ると言つものでもないらしいが、幾らかは毎年出してくれるようで、そこが領主の私兵と騎士団

の違いらしい。

そして足りない部分を実費で補えばいいらしい。

僕「では作りましょうか…って簡単に出来るかな?」

姫「そうですね…」

王子「志願を募つて選考会でも開きますか」

僕「そこまでやつていいのかな?」

爺「騎士団だから。変な者が入り込んでも困るからな」

それでも何人の志願があるかも分からないうらしい。

もしかしたら〇の可能性もあるし、志のある女性がこの機会を逃すまいと沢山集まるかも知れない。

そればかりはやってみないとわからないらしい。

有力貴族の娘「私も志願してもいいですか?」

姫「有力貴族の娘?」

有力貴族の娘「それとも若の奥さんになる人物が騎士団入りするの
はまずいでしようか?」

王子「どうなんでしょうか?」

翁「そうじやのう…実力以上の待遇を受けければ周りの者が納得しないが」

「周りも何も一人もおらんから大丈夫じゃうつよ」と翁が言つ。
選考会に参加して実力でなれば良い。

僕「有力貴族の娘、本当に出るの？」

有力貴族の娘「私も剣は使えるわ。美女さんにも教わつてゐし

美女さん「中々優秀な生徒です」

僕「怪我だけしないようにね」

有力貴族の娘「必ず受かるわ」

そう頷く有力貴族の娘。

僕「実力至上主義で騎士団内の立場を決めるけど、有力貴族には是非僕の補佐として頑張つて欲しいからね」

有力貴族の娘「実力至上主義なら美女さんが騎士団団長じゃない」

僕「たし…かに！」

翁「いやいや

僕が姫の騎士に任命されたから騎士団が成立されるので、若以外に団長はありえないと言つのだ。

余程の事が無い限りは一代限りの騎士団になりそうである。まあ今はそんな将来の話をしても意味が無いので、とりあえずは騎士団に人が集まるかどうか、である。

僕「まあ姫と後宮…僕達の住まいを守るために兵だから20名程度の騎士団でいいのかな?」

翁「まあ最初はそんなものだが、体裁を保つ為に1000くらいうはならんとな」

僕「そんなんに!?」

どつむら住居だけではなく式典の警備などにも借り出せるので、それくらいは要るらしい。確かにたった20名ついて住居だけならまだしも式典では周りしか警備できない。

僕「となるとしっかりとした形を作らないとダメですね」

王子「最初は若が副団長を一人決めて以下騎士団といつ形でいいと思いますが」

魔王『美女を副団長にすればよいだろ』

そうだね

僕「副団長は美女さんに頼めるかな」

美女さん「私ですか？」

僕「うん」

美女さんは少し考えて

美女さん「そうなると若が出かけるときに私が騎士団を見る為に残る事になりませんか？」

僕「そうか…うん」

王子「それはやらない下の者を育てて任せれば問題ないかと思います」

僕「それでいいの？」

爺「まあ姫のところが若の私兵のようなものじゃからな。問題あるまい」

そういう事ならと美女さんが副団長に妖精少女が「私も！私も！」と言つ。

それを聞いて「妖精少女が私の騎士の一人なんて素敵」と言つので「姫の騎士団団長補佐」という名誉職に付いてもらつ事になつた。

姫の騎士団として女性騎士団を発足する事は就任式の際に同時に発表する事に決まった。

そこで公募する事を伝えて後日に選考会を行つのである。選考会の内容とかについても後日詰合つ事となつた。

第38話 騎士団（後書き）

誤字修正

不經濟 不敬罪

なるそうですが なるそうですが

一台限りの 一代限りの

湯量貴族の娘 有力貴族の娘

規模に規模に応じて 規模に応じて

変な物が張り込んでも 変な者が入り込んでも

回りも何も 周りも何も

王子「最初は王子が 王子「最初は若が

若の言葉に「」が抜けていたのを修正

第39話 我が剣は

式典は恙無く進む。

前国王である第三王子の退位の式典に続いて王子の就任式が執り行われる。

厳かな雰囲気の中、頭に冠を載せられた王子は振り返り広間に並ぶ人達に手を上げる。

すると広間は歓声に包まれた。

歓声が止み次は論功授与式に移行する。

まず一番に翁が呼ばれ王子の前に立つ。

姫を助け周りの領主に呼びかけ、先頭に立つて軍を導いた功績により幾つかの物品の授与と執政に任命される。

それを拝命した爺は王子の傍らに立ち、次々と名前を上げて聞く。

爺は姫を守り続けて来た功績とその後の戦場での働きで内務大臣に任命された。

現領主も同じく功績が称えられ、爵位が一つ上がり子爵となり国の要職に就いた。

爵位に関しては恩に報いる事が出来ない領主息子への救済策でもある。

いずれ跡を継ぐ領主息子の為といつても過言ではない。

他にも当初から参加していた領主に勲章や国の要職の地位が与えられるしていく。

それは王子を助けて立った者たちも同様だった。

小砦以降の者達には勲章と物品が与えられる。

赤白両騎士団団長も呼ばれる。

両騎士団は無駄な戦闘を避け、団長を救出した後は獅子奮迅の働きに対しても称えられ、騎士全員に勲章が授与された。

軍務大臣は不在とし殿下の管轄の下で赤白両騎士団団長が2人で軍務の副大臣になる事が発表された。

そして有力貴族が呼ばれた。

最後まで国王派であつた有力貴族が呼ばれる事に少なからず驚きの声が上がる。

王子の「辛い時期にも国政に携わり國を守つた」との言葉に一時は収まつたものの、その後に外務大臣に任命されると一瞬ざわめきが大きくなつた。

その後も元国王派の中で領民裁判で無罪になつたものが呼ばれ、同じように國を守つたとして称えられ國の要職に任命される。

これだけで論考が始まつて半時（約1時間）以上掛かつた。

美女さんと妖精少女が呼ばれる。

2人は王子の前に立つとまたざわめきが起つる。

そして2人が姫のピンチに居合わせ助けた後に行動と共にし、妖精少女は兵達の心の支えとして、美女さんは共に剣を振るつて尽力を尽くしてくれた事を称える。

王子「一人には私の客人として王宮に滞在していただく」

王子がそつ宣言する。

遠まわしに「勝手に近づくなコラ！」という事らしい。

そして最後に僕が呼ばれた。

美女さんと妖精少女を従者とし（妖精少女は本当は違うナゾ）姫のピンチを助け翁の所まで守った。

その後に赤白両騎士団と話をつけて引き込んだり、新兵器を発明したり。

大砲で大活躍した事になつてたり大砲に現れた国王軍を撃退した功労者になつてたりと、若干誇張が入つてたけど物凄く持ち上げられる。

昨晩、王子に「姫の騎士の箱を付けるため為に多少の誇張はあります」とは言っていたけど、何処が多少なの！？

しかし翁にも「何があつても表情を変えず毅然としておれ」と言われてるので我慢する。

たしかにこそばゆい感はある。

しかし耐えれないわけではない。

唯一つ問題があるとしたら『あの男は物凄い剥げだな』とか『あの髪は取り外し可能かもしれない』と僕を笑わせようと話続けていることだ。

一つ一つはくだらない事でも、ピリッとした式場でひたすら言われ続けると面白くなつてくるから困る。

黙つててよ！

魔王『何だ？ 別によいではないか』

全然聞いてくれない。

別の意味で（笑わないように）必死で無表情を貫いていたりする。

王子の「姫の騎士として任命する」と言つ葉と共に姫が前に出でくる。

誉めは跪いた僕に微笑むと「貴方を私の騎士に任命します」といゝ剣を手に「この剣を騎士の証として貴方に授けます」と言つた。その剣を受け取ると僕は決められた文言を述べる。

僕「我が剣は姫の為に」

色々と長い文言を言つぱつぱつと言われ皆で考えたけど、式典の雰囲気にダラダラ言つのもなんかなと感じたので最後の一文だけを口にする。

その一言に姫は大きく頷くと「期待します。私の騎士様」と言つた。それを聞いて立ち上がると姫の背後に控える。その後は恙無く式典が終了した。

姫達と控えの間に入ると僕はぐつたりとする。
思つた以上にキツカッタ。

対照的に姫は「これで若是私の騎士様」と物凄いテンションである。
後は夜に開かれる祝賀会である。

そこで僕と姫の婚姻が正式に発表されるらしい。

本当に大丈夫なのだろうか？

翁「まあ何とかは異議を唱えるかもしかんが、大丈夫じゃ。」

「若是黙つて成り行きを見てればいい。我々で異議を唱える者を叩き潰すでな」と物騒に翁が笑う。
別にいいんだけど穩便にだけはお願ひしたい。

夜になり祝賀会が始まる。

フロアには多くの領主達とその子弟などが大勢参加し歓談している。
そこに王子改め殿下と姫の来場を告げる声が響く。

僕も姫に続いて入る。

元々殿下と姫が入る扉は他とは違ひ高い場所にあり上座に直接行ける様になっている。

美女さんと妖精少女も一緒に入りそのまま上座の下の席に座る。
殿下が挨拶した後に「皆様にお伝えしたい事があります」と告げた。

殿下「この度、姫と若が婚姻する運びとなりました」

殿下の言葉に静まつたフロアが騒然とする。

人々話を聞いていた反国王派に居た人々から祝福の言葉を送る。でもその数は半分程度であり、残り半分は戸惑つて要るよつだ。

その中の一人が「お待ちください！」と前に進み出る。

見るとどこかの貴族の子弟なのだろうか、豪華な衣装に身を包んだ青年の集団が前に進み出る。

その先頭に立つ若者が「その者が姫の婚約者になるのはおかしい」と声を張り上げる。

その声に周りの者が「全くだ」などと異口同音に賛同の声を上げる。殿下が「大貴族の子弟です」と僕に耳打ちする。

殿下「何処がおかしいですか？」

その言葉に「恐れながら言わせて頂きますと、この国の国民ですらなく身分も低いものが姫の婚約者など持つての他です」とお居掛かつたように言つ。

それを聞いて殿下がふつと笑う。

殿下「身分ですか…因みに姫の騎士は執政と同じ地位にありますか？」

殿下の物言いに絶句する貴族の子弟達。

何とか「だとしても行き成り姫の婚約者と言つのは無理がある」と言つのだ。

僕の事を言われていたが殿下も爺も黙つていろと言われたので黙つて聞いている。

「実力も伴つてゐるか分からぬよな輩が騎士に任命されただけでは飽き足らず、姫の婚約者になるなど、おかしいと思いませんか？」と周りに語りかけるように言つ。

さらに芝居掛かつた動きに笑いそうになつてゐると、それを聞いてた一人の人物が笑つた。

見ると白の騎士団団長である。

「何がおかしいんですか？」と聞く貴族の子弟に

白の騎士団団長「実力をどうこう言つながら、演説ではなく決闘を申し込めば宜しいのでは？」

しかし祝賀会でそこまでするのは、と言つ貴族の子弟に「ただ不満を大きな声で言つよりは潔くて素晴らしいと思いますが？」と白の騎士団団長が言つ。

殿下は頷き「確かに本来は祝賀会で剣を抜くのは良くないが、今は若の実力を証明する為のものである。許可しよう」「しかし、すぐに貴族の子弟用に一本の剣が渡される。

それを迷いも無く受け取ると言つ事は少しあ自信があるのでどうか？仕方なく僕は階段を下りて貴族の子弟の前に立つ。

途中で妖精少女に「頑張つて」と言われたので頭を軽く撫でる。

白の騎士団団長が「はじめ」と言つと貴族の子弟が切り込んでくる。それを剣で捌きつつ相手の出方を見る僕。

がんがんと打ち込んでくる貴族の子弟を捌きながら思つ。

弱い

魔王『そこそこやるが、所詮はそこそこレベルだな。身内で強いから勘違いしてたのだろう?』

防戦一方の僕に「降参するなら怪我をする前がいいですよ」という貴族の子弟に本当に打ち倒していいのか分からず白の騎士団団長をチラツと見たら、苦笑をして小さく頷いてくれた。
それを見た僕は「ハツ」と短く息を吐くと貴族の子弟の剣を根元から切り落とし返す刀で喉に剣を突きつける。

魔王『中々の一品だな』

本当にいい剣だ

動きを止めた僕に「そこまで」と白の騎士団団長の声が掛かる。剣を收めると周りからの拍手を受けて一礼し元に戻る。そこに貴族の子弟から「剣の力だろ?」と吐き捨てる。
僕は振り返り「拳でやりあいますか?」とだけ聞く。
その言葉に貴族の子弟は何も言わずににらみ続ける。

翁「納得いったか?」

黙っていた翁が口を開く。

その言葉に何かを言おうとした貴族の子弟を睨み黙らせる。

翁「今更、若に付いてどうひつが、そういうお主は婚姻を辞め
れかね程の者なのか?」

その言葉に自分は「エリナリの貴族の嫡男です」と胸を張って言ひ。それを聞いた翁は「なるほどとのつ」と頷いた。
その姿を自分達の事を肯定するのだと思つた貴族の子弟はちと言葉を重ねようとして翁の言葉に遮られる。

翁「父親は出兵してきてたが、お主の顔は見た記憶がないのつ」

翁の見下した物言いに顔を怒氣で染める貴族の子弟に

翁「戦に出でいれば若がどのよつな者は知つてゐる筈だからな。
のつ、白と赤の騎士団団長」

白の騎士団団長「わづですね」

やつぱり笑ひ田の騎士団団長。

赤の騎士団団長「反国王派に居たもので今更、若の実力云々と言に出す事は無いだろ?」

赤の騎士団団長「剣の腕は僕達でも負ける事があるへりこですからね」

剣の腕で国内でも名が通る両騎士団団長の言葉に言葉を無くす貴族の子弟。

翁「それに戦場でどれだけの活躍をしたかは誰もが知っている。知らないのは戦場に出ずにはのつと過ごしてたものだけじゃな」

黙り込む貴族の子弟達に「この國のものではない? 身分が低い?」と翁が言つ。

翁「その『この國の者』で『身分の高い』者は一体どうなんじやつたかな?」

「ほれ、こつてみい」という翁に「…領地を守つておりました」と言ひ。

「あなたの領地は国境にあるわけでもないのにか?」と言ひ翁の言葉に下を向く貴族の子弟。

翁「さて、權能ではおぬしよつはるか上、戦の功績はここに居る誰

よりも高く、この度身分も執政と同等になつた。他に何か問題が？」

「しかしその身分はただ任命されただけの騎士ですか」 最後まで足搔く貴族の子弟に「ただのひつ」と翁が言つ。

翁「簡単に誰も成れないから執政と同等の身分なんじやよ」

成るのに姫の指名と殿下、執政、内務と外務の大臣と軍務を代表する赤白両騎士団団長の全員の賛同が必要となり、その中の誰か一人が拒否をしたらなければならないのである。

翁「勘違いしているものも居るかもしぬが、今後は今までの身分だのなんだのは通らんぞ?」

その言葉に周りの反国王派に参加していなかつたものから驚きの声が上がる。

翁「殆どの者は知つてゐると思うが、身分だけ高いものが国を乱したでな」

能力が無ければ身分が高くても優遇される事は無い、と言つのだ。逆に言えば能力があれば身分が身分に関わらず取り立てるという事だ。

そんな事、宣言したっけ？

魔王『して無いな』

だよね！

反国王軍の中では確かに言つてたので、参加していた者達は知っているだろ？。だが初耳のもの達は驚きを隠せずにじわめき出す。

殿下「執政の言つとおりです。国を良くする為に、これからは身分に関わらず能力のある者は、例えそれが市井の者しやくだとしても取り立てていく事に」

その言葉に一際声が大きくなりそうな所に爺が「でもまあ能力があれば良いのですから、気にするほどの事でも『う』と良い爺が『その通りじゃ』と笑つ。

殿下「他に婚姻に異議を唱えるものは？」

別に異議がある者は僕と決闘をする決まりがあるわけでも無いが赤白両騎士団長の「自分達と同等の剣術」という言葉に誰も何も言わない。

実力行使過ぎない！？

魔王『まあ仕方あるまい』

殿下「貴族の子弟はどいつもですか？」

殿下の言葉に「…」と搔かせん」と搔つと殿下に一礼して周りの面々を引き連れて人垣の奥へ消えた。

殿下「では婚姻の発表はここまで、後は祝賀会を皆、楽しんでください」

そつ言ひと殿は姫の手を取り階段を下りる。

殿下の「若もどなたかと踊ればいい」と搔つ言葉に周りを見る。

先程のやり取りの所為か周りにいる女性達の見る目が少し怖い。

魔王『今なら入れ食いだな』

なにそれ

魔王『好きな娘をモノに出来るだらう、と搔つ事だ』

なんでも？

魔王『さあな。王族になるのが魅力なのか、剣の腕が魅力なのか』

さつわと選ばつ

まあ選ぶと言つても相手は決まつてはいる。

何處にいるのか探して見つけると「一曲お願ひできますか」と声を掛ける。

有力貴族の娘は微笑んで「お受けいたします」と僕の手を取ると周りから黄色い声が上がる。

手を引くと王子と姫の横あたりで踊りだす。

すると有力貴族の娘が耳元でささやいた。

有力貴族の娘「さつきはなかなか格好よかつたわよ」

僕「中々なんだ。でもありがとうございます。有力貴族もあまりにも綺麗で一瞬分からなかつたよ」

有力貴族の娘「いつもは綺麗じゃないみたいじゃない」

僕「いつも綺麗だけど、今は綺麗の種類が違うんだよ」

魔王『20点だな（「厳しいよー」）』

若干しどろもどろに成りついづ僕に有力貴族の娘は「そういう事にしておくわ」と笑つた所で曲が終わる。

有力貴族の娘と一緒に礼をして離れるとき、姫の前で「お願ひします」と言い踊り始めた。

見ると王子も有力貴族の娘と踊っている。

姫「先程は有力貴族の娘と何を話していましたですか？」

僕「先程の件についてですよ」

それを聞いて「格好よかったです」と姫も言ってくれた。
姫の綺麗さも称えると魔王が『30点』と言った。
100点は一体どうしたら取れるのだろうか。

当初の予定通りに曲が終わると僕は姫の手を取つて、王子は有力貴族の手を取つて階段を上がる。

上座に上がりしていく王子を見て女性達から残念な声が上がるが、有力貴族を美女さんと妖精少女の所に送るとそのまま階段を織り出した王子を見て今度は黄色い歓声が上がった。

僕がそのまま姫の横に控えると少なからず残念そうな声が上がる。

姫「若が降りない事に残念がっている娘も居るようですよ?」

僕「まさか」

姫「ほら、こちらを残念そうに見ているでしょう」

そう言われてみると居るような居ないような。

「面倒なのでいいですよ」と言つと僕は姫のとなりに腰をおろした。本来はダメなんだろうけど婚約者であり祝賀会でもあるので許される行為だ。

美女さん、妖精少女、姫、僕、有力貴族と扇状に並ぶ。両手に花と言うレベルではない。

下で行われるダンスを見ながら軽食を食べつつ飲み物を飲む。

王子や白の騎士団団長はもちろん赤の騎士団団長まで女性が周りを囲んでいる。

有力少女が「お一人とも、一応未婚ですからね」と有力貴族の娘が教えてくれた。

とこりか白の騎士団団長も結婚していないのか。

と思つたけど、どうやら内縁の妻らしき人物は居るらしい事は周知の事実らしい。

ただ身分が低い為に婚姻できていないようだ。

僕の件もあるし今後は正式に婚姻できるかも知れないと聞いて少し嬉しくなる。

踊りを眺めていたら殿下がこちらを向く。

殿下「若ー。」

なんだろ?と思つと僕に向かつて笑顔で「来い」と言ひつつに手を振る。

姫が「行つてらっしゃい」と笑顔で答える。

行きたくないんだけど

有力貴族の娘「行くべきよ」

僕「何で?」

有力貴族の娘「ここで色んな娘と仲良くして味方を作つておくの」

僕「味方?」

有力貴族の娘「女は政治に入れる力は無いけど社交界では強力なパイプを持つわ」

だから少しでも仲良くしとけば、それだけ多くの味方が集まり、姫も有力貴族の娘の立場も良くなるらしい。

そう言わると行かざるを得ず立ち上がった所に「でも本気になっためよ」と有力貴族の娘が鋭く言った。

その言葉に僕は笑顔で「わかってる」と言つと階段を下りていった。

殿下「若、皆さんがあと踊りたいと言つていたので呼びました」

見ると数名の若い娘がこちらを見ていた。

僕は「僕でよろしければ」とその中の一人の手を取り踊りだす。踊りの途中に色々話しかけられるが、殆どが挨拶と「別の日」でも

戦のお話を聞きたいです」とお誘いが殆どだった。それに「機会がありましたら」とだけ答えておく。

魔王『もつたいない』

ソウデスネー

僕もそう思うよ。
でも仕方ないじゃない。

数名の娘と踊つてお終いかと思つたら後から後から交代の娘が来る。
結局、祝賀会が終わるまで踊り続ける羽目になつた。

祝賀会から2日程立つた。

僕は婚約発表の後に住まいを後宮に移した。

この後宮は「いつまで後宮と言えばいいんだ?」と思つていたら何代か前の王が「空の館」と言つていたらしく「その姫前もどうなつた?」といつ氣もするが後宮よつせマシなのでそつ呼ぶよつになつた。

取り合へず姫と有力貴族とはまだ何にも無いからね……

魔王『誰に言ひてるのだ?』

姫とは正式に結婚するまではそつこう関係にならないとこつ暗黙の了解が成り立つている。

魔王『お主がそつ思つていいだけでは……』

成り立つてゐる――

そして姫とそつこう関係が無い限り、有力貴族の娘ともそつこう関係にはならぬ。

魔王『何時までそんな事を言つてゐるのか……根性無じが』

はじめだよ――

取り合へずそつこう事である。

夜に美女さんが僕の部屋を訪ねてくる。

美女さん「行き成りですが、若は姫様と有力貴族の娘様はお嫌いで
すか?」

僕「そんなこと無いけど?」

美女さん「では何故お抱きにならなおのですか?」

美女さんのストレートな物言いに僕は声が出ない。

美女さんが言つのは2人は僕が何もしない事にやきもきしながら、
でも女性から求めるのははしたないと思つて何も言えずに居るらしい。

有力貴族が何も言わないのも姫を惟おもんみて何も言わないだけらしい。

『ほれ見たことか』魔王の言葉を聴きながら僕は「決して一人の事を
嫌つてはいるわけではない」という事を伝え、姫と正式に結婚する
まではけじめとして抑えて居るだけだと熱弁した。

「どうか何この状況?」

意味が分からない。

ただその言葉を聴いた美女さんは「では明日、挙式をするよう國王
殿下に進言いたしましょつ」と言つと部屋を出て行こうとした。
それを取り合えず止めて話し合つ。

半時（約1時間）程して美女さんに言い負かされてしまつ。

魔王『弱いな』

ソウダネ

晩御飯の席で姫に「食事の後に2人でお茶でも如何ですか?」と誘う。

姫は驚いたようだが「はい」とだけ頷く。

妖精少女が「私も!」と言つが美女さんが「妖精少女は私と有力貴族の娘とバルコニーで夜景を見ながらお茶にしましょうか」と話を逸らしてくれた。

部屋が静かにノックされる。

返事をすると姫が真っ赤な顔で入ってきた。

僕はテーブルの席を勧めると美女さんが用意してくれていたお茶を入れる。

変わった匂いだが「人の気持ちを高ぶらす効用があります」と美女さんが笑顔で言つていたのを思いだす。

会話はたまにしては途切れ、たまにするの繰り返しである。

因みに魔王は今は居ない。

居ないと呟つのも変だが「魔王は、その、やっぱりずっと見てるの？」とき言つたら『他人の情事に興味は無い。消えておいてやるから安心しろ』と言つてから消えたように気配が無くなつた。どうやら僕の意識の中のどこかに魔王の個室があるイメージらしく、そこに籠つたみたいだ。

だからたまに静かだつたらしい。

なんて都合のいい設定！

あまりの緊張に良く分からぬ事まで考へてしまつ。

僕「姫」

姫「ひやー！」

驚きに噛んで顔を真っ赤にした姫を見て「本当に可愛らしげな」と心の底から姫を愛おしいと思い口に出していた。それが姫の笑顔を誘い自然と会話が繋がる。二人をとても優しい雰囲気が包んでいた。

第39話 我が剣は（後書き）

誤字修正

無駄な先頭 無駄な戦闘

「ただののう…」と王が言う 「ただののう…」と翁が言つ

そんあんこと そんなこと

名にこの状況 何この状況

要職に着いた 要職に就いた

たちかに たしかに

放し続けている 話続けている

継げる 告げる

この旅 この度

回り 周り

「何がおかしいんどうすか？」

「何がおかしいんですか？」

裁きながら 拭きながら

殆どの者は気は知つていると

殆どの者は知つていると

女性達が見る目 女性達の見る目

行かざるを獲ず 行かざるを得ず

居間は居ない 今は居ない

第40話 キス（前書き）

40話が41話になっていた為に、以降の話が全て1話ずつずれておりました。

第40話 キス

殿下が戦後すぐに送つていた妖精少女への国の使者が戻ってきた。

魔王『おい』

それだけではなく使者は

魔王『おいー』

妖精少女の故郷から何名かのお客さんを伴つて

魔王『無視をするな!』

なんだよ、魔王

魔王『おかしじだろ?』

何が?

魔王『その後をちゃんと説明しないとダメだろ?』

その後…?

魔王『ああ、面倒くさい。祝賀会から2日後の夜だ!』

：人の情事には興味が無かつたんじやないの？

魔王『無い！しかし突つ込まねばいかん気がするのだ』

なんだよそれ

取り合えず、姫と有力貴族の娘は僕の正式な奥さんとなつた。

魔王『抱いたという事だな』

わざとほやかして話しているのに！

魔王『だが事実は変わるまい』

確かにそうだけど。

魔王『よかつたな』

?……うん。

まあ、そういう事である。

話を元に戻す。

妖精少女の故郷に出ていた使者がお密さんを数名連れて戻ってきた。

殿下との挨拶をしている所に入出した妖精少女はお密さんの集団を見ると「お姉ちゃん！」と走り出してしまった。

お密さんの集団はその声に振り返り走り寄つて来る妖精少女を見止めると一人の女性が立ち上がった。

その女性に「お姉ちゃん！！」と飛ぶように抱きつく妖精少女と、その妖精少女を受け止めて抱きしめる。

お姉ちゃん？

魔王『よくまあ、これだけの数の妖精族が出てきたものだ』

妖精族は集落付近の森の外に出るものは本当に珍しい。
それが男女合わせて5名も出でているのである。

4名の男性と1名の女性の計5名の妖精族の男女は一頻り妖精少女との再会を喜んだ後に、一人の若者がはつと気がついたように殿下に「申し訳ありません」と頭を下げた。

どうやら自分達の世界から出ない種族ではあるが人族の身分制度などの理解はあるようで、今の行動は一国の王の前で行うべき態度ではないといつ判断ができるようだ。

魔王『別に特別人嫌いという種族わけでもないからな』

そりなんだ

魔王『ただ人間が妖精族をさらつたりする事があるので避けているだけだ』

謝罪する妖精族の若者に殿下は「構いません。久々に会つ」とが出来たんですか」と笑顔で頷いた。

そして「良ければ部屋を用意しますのでこちらでゆっくりとお話ください」とい「若、案内をよろしくお願ひします」と言われた。取り合えず頷いて「いらっしゃく」と5名の妖精族の若者と妖精少女を謁見の間から出るやうに促したが、ここで困った。

案内するのはいいけど、何処にするか知らないよー。

すぐに美女さんが「いらっしゃるです」と先導してくれるのでついて行く。そして談話室の一室に案内をする。

美女さん「お泊りになるお部屋は後ほど案内致します。とりあえずは夕食まではこちらでお休みをください」

そう案内して美女さんが出て行こうとしたので僕も付いて出て行こ

うとする所を「お姉ちゃん」と呼ばれていた妖精族の女性の膝に座る妖精少女が呼び止める。

妖精少女「お兄ちゃんも一緒にいよつよ」

その言葉に僕が振り返ると妖精族の若者全員が僕を見ていた。

何と言つプレッシャー

魔王『警戒心しかないのに中々の圧迫感だな』

妖精少女が「お兄ちゃん」となつていて僕は一体何者だろうか、と皆が思つてゐるであろう中に「お兄ちゃんは私を変な人から助けてくれて首輪も外してくれたんだよ!」といつ妖精少女の声が響く。

「どういう事なんでしょう?」と言つ妖精族の若者の言葉に搔い摘んで説明する。

僕と美女さんが旅をしている時に野盗に襲われた商隊に出くわし、野盗を倒した。

だが生き残つたのは妖精少女のみで、妖精少女の風貌から奴隸商人の商隊だつた事が分かつた。

「家に帰りたい」という妖精少女を帰してあげる為に妖精少女の故郷に向かつてゐる間にこの国の内乱に巻き込まれてしまつた。

そしてやつと内乱が終わり殿下の好意で皆さんに連絡が取れた。

首輪と言うのは奴隸商人のつけた魔法の首輪で、無理に外すと危ないので魔力で内部を破壊して壊した。

それを聞いた妖精族の若者達は口々に「ありがとう」と僕に礼を言う。

しかし本当はすぐにでも送らないといけないのに危険に巻き込んでしまったのである。その事を謝罪すると「貴方がいなければ妖精少女はどうなつていたか分からぬ」と言つた上で「精霊の導きです」と言つた。

妖精少女が「かわいいでしょう」というと2匹の子狼を取り出すると、妖精族の若者から「狼の子だ…」と声が上がった。

僕は何故2匹の子狼が妖精少女になつてゐるのかを説明する。すると「そういう事でしたら仕方ありません」と頷いた。どうやら狼は妖精族の中では守り神のような存在らしい。いろんな考え方があるもんだ。

そうして美女さんが飲み物を持ってくると美女さんにも全員が感謝の言葉を告げた。

美女さんは「気にしないで下さい」と言つと「姫様と有力貴族の娘様も」挨拶したいと申しておりますが宜しいでしょうか?」と尋ねた。

僕はすかさず「姫と有力貴族の娘は妖精少女と仲良くしてくれて、僕達が戦で不在の時には傍にずっといてくれたんですね」と言つと妖精少女が「家族なの!」と言つた。

家族の意味に首をかしげながら「妖精少女がお世話になつた人なら」と喜んで一人を招き入れた。

入出した姫と有力貴族の娘が挨拶をする。

それに答えて妖精族の若者達が挨拶する。

妖精少女を膝に乗せている女性美女さんと同じぐらいの歳で「妖精姉」と言つらしい。

といつより来ている全員が結構若いよつだ。

妖精姉「妖精少女を良くして頂いて、感謝の言葉もありません」

姫「私達が妖精少女を好きで行つただけです。気にしないで下され」

妖精少女「そうだよ！家族になったから」

妖精姉「家族？」

あ、何か嫌な流れになつてきた気がする

妖精少女「うん！全員お兄ちゃんのお嫁さんなんだ！…」

魔王『予想が当たつて良かつたな』

妖精族の若者達が妖精少女の言葉に固まりゆつくつといひけりを見る。

何か前にも見たな、この風景

僕は冷静に「違いますからね」と言つた。

姫と有力貴族が僕の奥さんであることは間違いないが、妖精少女と美女さんは冗談で言つてゐるだけだ。

確かに僕達は家族として暮らしてはいるが、決して妖精少女に何かしていると言うわけではない。

姫と有力貴族、美女さんが笑いながら肯定してくれたので、誤解を解くのは簡単ではあった。

疲れる事には変わりないけどね。

魔王がこの状況を楽しんでいる感じのがむかつぐ。

妖精姉達はやはり妖精少女を迎えてから来たらしい。

小声で妖精少女に何かを語りかけ、妖精少女も嬉しそうに頷いていた。

しかし妖精姉が何かをささやいた時に妖精少女は「お兄ちゃん達もだよね?」と唐突に言つたが妖精姉が首を振ると「や!」と大声を出した。

どうしたのか聞いたら妖精姉が「妖精少女に妖精の里に戻りましょう」と伝えたのだと言う。

宥めて梳かしても妖精少女は首を縦に振らない。

どれだけ言われても妖精少女はイヤイヤと首を振り続いている。

あまりの嫌がりようにならそろ止めようかと思つた時に魔王が叫ぶ

魔王『感情が高ぶりすぎている。危険だ!』

え？

2匹の子狼が跳ね起きるように部屋の奥に走っていく。
と「やーーーーー！」と叫んだ瞬間に何かが妖精少女から迸った。

とつさに姫と有力貴族を前から抱きかかえると力任せに座つてた椅子を乗り越える。

そこで美女さんが駆け寄つてきたので一人を渡すと美女さんは驚きで声も出ない二人を担いだまま壁際まで後退した。

振り返ると妖精少女から迸る力を5人の妖精族の若者がシールドを張つて抑えているようだ。

妖精姉が良く分からぬ呪文のような悲痛の叫びが聞こえる。

魔王『聞こえていないな』

どうすれば

魔王『妖精少女の力は強い。このままではシールドが破れるだろう』
『どうする?』

どうする?』

魔王『この部屋が吹っ飛んで、妖精少女が力尽くるまで暴走するのだろう』

どうすれば止められるんだ!?

魔王『妖精少女の気持ちを落ち着かせる事だろう』

見て入間に妖精族の5人は押されるように妖精少女から離されていく。

僕はどうしたらいい

魔王『呼びかける』

僕「妖精少女！！」

僕は何度も呼びかけるが声にならない叫びを上げ続ける妖精少女には届かない。

魔王『直接言葉をぶつけるしかない！』

直接ってどうするのさー…？

魔王『妖精少女を捕まえて直接言霊を吹き込むんだ』

捕まえるって、あの中に入れと…？

妖精少女を囲むシールドの中に渦巻く何かを見る。入つたらずたずたになるのでは無いだろうか。

魔王『今なら妖精少女までの距離は一歩くらいた。時間が経てば距離は開くぞ!』

確かにじりじりとシールドが押されている。

魔王『今の内に妖精少女を捕まえるんだ!』

どうすれば捕まえられる?

魔王『全身に魔力の膜を作つて飛び込め。それで少しは耐えてるはずだ』

わかつた

魔王『足りないとズタズタになり、多すぎると自滅するから注意しろ!』

分かつたけど、今言われたく無かつたよ!

魔王『妖精少女を捕まえたらすぐに言霊いごだまを吹き込め』
どうやって?

魔王『口から直接吹き込む』

それって、もしかして

魔王『接吻せくふんだ』

！？

魔王『驚く時間は無い。やれ！』

どう吹き込むのさ！？

魔王『意識を込めた接吻で言霊を相手に送り込め

それでいくのだろうか？

魔王『いかない場合は吹っ飛ぶだけだ』

それを聞いて決心する。

僕は魔力で全身を包む事を意識する。

魔王『それではまだまだ弱い！』

つ！？

さらに魔力を込める。

魔王『それで足りるか分からんが、魔力を途切らすなよ！』

僕は心の中で頷くと魔力を途切らせないように歩き出す。

妖精姉「何をしているの！？危ないから離れ！」

その声に反応せずに歩いていくとシールドに手を伸ばす。本来なら触ると大怪我をするだらうシールドに触れた手は、すり抜けるように中に入る。

と荒れ狂う奔流に手の皮膚が裂ける。

魔王『もつと魔力を込めろ！』

僕は無言で魔力を込めるそのままシールドを越えて中に入る。それを周りの妖精族の若者達が驚きと共に見つめる。あまりの驚きに気が逸れたのだろう。

シ ル 口 の 範 囲 が 急 に 広 が り
獣 の 一 旦 身 が 急 に シ ル 口 で

僕「つ！！」

あまりの衝撃に声が漏れる。

すぐにシールドの広がりは止まる。

僕はそのまま止まらずに中へと進んでいくと妖精少女の方に触れようとした。

魔王『あまり外側に魔力を放出すると妖精少女を傷つける事になるからな！』

妖精少女が傷つくぐらいなら魔力を切つてやる！

その僕の思いが伝わったのか、魔王が笑う。

妖精少女の肩を慎重に掴んだ頃には僕の全身はシールド内に入っていた。

上を向いて叫び続ける妖精少女の両肩を掴む。

その間も刻々と魔力は消費されていく。

妖精少女の首輪を壊した時とは比にならない程の消耗だ。

掴んだ肩に力を込めると妖精少女を抱き寄せる。

それでも変わらず声にならない悲鳴を上げ続ける妖精少女に意識を込めたキスをする。

この後どうしたらいいのか分からぬ僕は妖精少女を抱きしめたままキスをし続けた。

妖精少女の全身から力が抜けるのを確認してキスをやめる。

いつの間にか周りを取り巻いていた奔流が止んでいる。

腕の中の妖精少女が少し身じろぎする。

僕「妖精少女…大丈夫？」

妖精少女「おに…いちゃ…ん」

僕「無事でよかつた」

妖精少女「おにいちゃん…」

僕「何?」

妖精少女「『めん…ね』

僕「ん?」

妖精少女「怪我…」

そう言いつと泣き出してしまつ。

その妖精少女の頭をなでると「全然痛くないよ」と笑つ。

僕「妖精少女が無事ならこんなのが全然平氣だよ」

魔王『うそつけ』

黙つて!

妖精少女「でも…でも…」

それでも自分を責めようとする妖精少女に「家族を守るのは当たり前だよ」と頭を撫でた。

妖精少女は何も言わずに泣き続ける。

それを優しく撫でながら周りを見ると、皆が僕達を放心したように見ていた。

やはり大事にならずにすんでみんな安心したんだろう。

姫「…キスした」

僕「は？」

妖精姉「キスした」

美女さん「しましたね」

僕「え？え？」

有力貴族の娘「舌を入れた」

僕「そこまでしないよ！」

あれ？何この空気。

無事に収まつてよかつたつて思つところじゃないの？？

妖精姉「何もして無い」と言つていたのにためらひ事も無くしました
ね」

姫「本当は私達の知らないところでキスをしてたのかも

美女さん「あらあら」

有力貴族の娘「妖精少女はあんなに可愛いのだから、仕方ないと言

えば仕方ないけど…』

僕『いやいやいやいや』

その反応おかしくない！？

僕『ああするしか無かつたんだよ！？』

有力貴族の娘『本当かしら？』

妖精姉『妖精少女に近づけるならキスでなくともいけた筈です』

あれしかなかつたんだよね魔王！？

魔王『我は「驚く時間はない、やれ」とは言つたがな』

魔王ううう…！

妖精姉『別にあそこまで魔力を扱えるなら、妖精少女に魔力を送つてどうにかする事も出来たはずです』

魔王『それはさすがに危険を伴つがな』

僕『それは危険も伴つからあの場合は使えないよ！だから言靈を吹き込んだんだよ！？』

有力貴族の娘『言靈？』

僕「そう！」

妖精姉「言靈を…キスで？」

なんて説明したらいいんだろう、魔王お願い！

魔王『ああ言霊は嘘だ』

僕「言靈はう

ええええええ！――！――！――！――！――！

魔王『ただ接吻で妖精少女の意識を呼び寄せただけに過ぎん』

だって言靈がどういって

魔王『だから嘘だ！』

魔王の言葉に呆然とする。

姫・有力貴族の娘・妖精姉「「「う?」」」

僕「うつまく…送る為にあの場は仕方なかつたんだ…」

魔王『「仕方なかつた」言い訳の常套句だな』

魔王の所為じやないか！！！

魔王『でもそのお陰で妖精少女は落ち着いただりつ』

確かにそうだけど納得いかない。

言い出したのは魔王で騙された僕も悪いけど、魔王の事を妖精族の若者の前で言うわけにはいかない。

どう言えばいいんだろう、と悩んでいると姫と有力貴族の娘が噴出した。

有力貴族の娘「あの状態でそこまで考える余裕が無いのは分かつてるわ」

姫「そうですね。結果的にちゃんと收まりましたし」

「傷の手当てを…」といつ姫と有力貴族の娘の顔が笑っている所を見ると、魔王の差し金と言つのは分かつて面白半分に僕をからかつたらしい。

勘弁してください。

妖精少女を助ける為にシールド内に突入するより、みんなから妖精少女へのキスを責められるほうが精神的に何倍もキツかった。

第40話 キス（後書き）

誤字修正

身長 慎重

野党に 野盗に

開きこまれて しまった

巻き込まれて

無理い 無理に

そつやら どうやら

継げた

告げた

目にも見たな 前にも見たな

余りの あまりの (数箇所修正)

交代した 後退した

振り帰ると 振り返ると

優勢姉 妖精姉
言葉だ 言靈ことだま

魔力の消費は消費されていく

魔力は消費されていく

本流 奔流

第41話 方針

僕の腕で泣いていた妖精少女が静かになっていた。

疲れて眠つたのかな?と思つたら顔を上げて「えへへ」と笑つた。

そして僕の全身にある切り傷を見て「痛い?」と聞いたので「それ程じゃないよ」と答えた。

実際の所は良く分からない。

ひりひりしている気もするが、全身満遍なく擦り傷があるので全体的に熱を持つて熱いような気もする。

妖精少女「治すね!」

そう言うと妖精少女は掌を僕に翳すと目を閉じた。

傷口に水の膜が張り擦り傷が消えていく。

それを見た妖精族の若者が何か驚いた声を出した。

そんなに珍しい術なのだろうかと思つて聞いてみた。

妖精姉「回復の精靈魔法は中級以上の精靈にしか使えません」

妖精少女が精靈と契約している事すら驚いたのに、中級と契約を結んでいた事にさらに驚愕したと言うのだ。

僕「確かに出会つた時の妖精少女は精靈と意思疎通は出来たようだけど契約して無かつたですしね」

妖精姉「それだけでもすゞいんですねけどね」

どうやら精靈族の全てが妖精少女のように精靈と意思疎通が図れるわけではないらしい。

しかも妖精少女の歳で精靈と契約を結ぶ事もそつそつある訳でもなく、しかも中級精靈との契約である。

精靈族の皆が驚くのも無理は無い。

僕「そうか、みんな妖精少女みたいに精靈と話せるわけじゃないんだ。すごいね」

僕を治療している妖精少女は誉められた事に嬉しそうに笑う。

僕「だから精靈王から話しかけられるのか」

妖精姉「は？」

驚く妖精族の若者達。

妖精姉「ナニ、ナンデスッテ？」

僕「精靈王だつたんだよね？」

妖精少女「うん」

妖精姉「話しおかけてきた?」

妖精少女「またおいでつて言われたよー!」

さらに衝撃を受ける妖精族の若者達に僕は当時の状況を伝える。それを黙つて聞いていた妖精族の若者達は話が終わつても動かなかつた。

僕「よ、妖精少女!-?」

魔王『力の使いすぎだ。心配は無い』

すぐに駆け寄ってきた美女さんが妖精少女の様子を見て「力の使いすぎで気を失つただけのようです」と言った。
それに一同が安心していると「部屋で寝かせきます」と美女さんが妖精少女を抱きかかえて部屋を出て行く。
姫と有力貴族の娘と妖精姉が付いていく。

残つた妖精族の若者に精靈王に話しかけられる事がどれ程の事なの

かを教わる。

どうやら妖精族の集落は各地に散らばつてあるようだが一つの集落に上級精霊と契約を結んでいる者が一人居るかどうかであり、妖精族全体でも精霊王となると過去を振り返ってもそれ程多くない。現在の妖精族の女王が精霊王と言葉を交わせて力を借りれるそ่งだが、契約までには至つてないらしい。

力を借りると、契約を結ぶ事の違いは使える力の量かなり違うらしい。

力を借りる場合は、精霊がその場の状況で使える力の中から気が向いただけ使う。

例えば水の精霊王の力が100だとしてその場の水の力が50%しか使えない場所では、使える最大は50である。

その50から精霊王の気持ち一つで1~50の力を使うのである。

契約を結ぶと50%の場でも契約者が残り50%の力をたしてあげれば100%の力が出せる。

しかも契約しているので術者の希望通りに精霊王は力を貸してくれる。

ただあくまでも術者の力次第な面もあるので、50%の場で30%しか足せないなら80%の力しか出せない。

しかも単純に30%の力を足すだけで80%の力が使えるわけではなく、ちゃんと80%の力は必要なのである。

だから100%の力が出せる場でも術者に80%分の力しかなければ、80%しか出せないと言う事になる。

100%の場で80%しか出せなくとも100%使えるのでは?と思つたが、力を借りる場合と契約の場合で精霊がこの世に影響を及

ぼす方法が違うので仕方ないらしい。

ここら辺は良く分からぬがそういう事だと思つておく。

未契約で力を貸してもらえる状況なら1～場の力の最大まで、術者の力は必要なく力を貸してもらえるが、契約すると術者の力次第となるのである。

しかも妖精女王も精靈王との会話には自ら赴いて後に会話できるようになつたのであつて、精靈王から語りかけてくる事は物凄い事なのだそうだ。

「妖精少女も精靈王の居た湖まで出向いた事になるんだけど?」と言つと首を振り「出向いただけで出てくるのがすごいのです」と言う。

妖精女王の出向いたというのは、精靈王の居る場所まで出向いた上で儀式を行い精靈王を召還して協力を得たらしいのだ。

それから見るとどれだけ妖精少女の状況が特殊なのがわかる。だからこそ一度妖精族の里に戻らなくてはいけない、と言うのだ。

僕は何か言う前に妖精姉と美女さんが戻ってきた。

姫と有力貴族の娘は妖精少女の傍に付いているらしい。

妖精姉も傍に居ようと思ったが、こちらで妖精少女の話をしつかり行わないといけないと想い戻ってきたそうだ。

当初は妖精少女を保護しなくては、と妖精族の里に連れ帰ろうとしていたが、妖精少女が精靈と契約をしている事で状況は変わった。妖精族は精靈と契約を結べたら未成年でも一人前と扱われる。だから妖精少女も一人前として扱われる為に、本人が帰りたくないといえば無理に帰す事は出来ない。

妖精姉「でも一度、妖精の里に連れ帰りたいと考えております」

僕「何故?」

妖精姉「妖精少女はまだ幼い。あれ程の力を手に入れてしまったのに、それを制御できないんです」

妖精の里に戻つて力の制御ができるように練習しないとダメだと言うのだ。

僕「訓練はここではできない?」

妖精姉「出来ない事も無いでしょうが、できる人物が居ません」

妖精族の里に戻れば知識も経験も豊富な先達せんだつが居る。だから妖精の里に戻る方が良い。

僕「でも、妖精少女が嫌がつてますからね」

妖精姉「しかしあのよつた暴走が起こればどれ程の被害を周囲に与えるか…」

魔王『だがその原因は妖精族の若者達なんだがな』

だよね

どうにか妖精少女に里に戻つてもらいたいが、嫌がる妖精少女をどう説得すればいいのか分からぬのだ。

妖精姉「若からも妖精少女を説得していただけないでしょうか?」

魔王『それこそまた妖精少女が爆発しかねないな』

僕「…妖精少女が嫌がる事を説得できません」

妖精姉「でも妖精族に戻るのは必要な事なんです」

それは分かる。分かるけど妖精少女を納得させる事は出ることは思わない。

ああそうか、僕自身が妖精少女が帰つて離れ離れになつてしまつ事を納得して無いんだ

元々送り届けるつもりだったにも関わらず、である。
納得していないのに説得なんかできない。

僕「僕には…無理そうです」

妖精姉「そんな事無いと思つんですが」

僕「僕には無理です」

妖精姉「妖精少女が帰りたがらなかつたのは、貴方と離れたくないからだと思つたんですねが」

僕「僕だけじゃなく、美女さんにも姫にも有力貴族の娘にもですよ」

それを聞いて何かを考え込む妖精姉。

他の精霊族の若者達が小声で何か話し合つてはいるが、多分どうにか連れ帰す事が出来ないかという事だろう。しかし「コレ」という解決策は出てこないようだ。

妖精姉「若、一緒に妖精の里まで来ていただけないでしょうか?」
急な申し出に驚いて聞く。

僕「別種族が入つても大丈夫なんですか?」

妖精姉「本来はありませんが、絶対ダメと言つわけではありません」

僕「そうなんですか?」

別に言つてもいいかなと思つていると美女さんが口を開いた。

美女さん「今すぐ返答は致しかねます」

妖精姉「何故ですか?」

美女さん「若が王族の一員だからです」

妖精姉「え!?」

美女さん「若が先程、姫様を奥さんとお伝えしたと思いませんが」

その言葉に妖精続の若者達は先程の僕の言葉を思い出したのだろうか、一様に無言になる。

王族だとまずい?

魔王『まあ、王族が他国に無断で侵入したら国際問題だらうな』

じゃあ僕はもう旅に出れないの!?

魔王『身分を隠して行けばよからう。この場合は「兵を率いて」と言う意味だ』

兵なんか率いなきゃいいのでは?

魔王『本来、王族が出かけるのなら護衛が付くのは当然であるう』

そりか

ただ、今回の妖精族の集落は国境付近にあるらしい。
だから身分を隠して同行するのは問題ないのではないか?

魔王『確かに。だが美女がここで王族という立場を出したのは別の意味があるだろしな』

別の意味?

魔王『王族であるお主が「保護している」妖精少女を無理やり連れ去る事はできんだろう』

それは妖精族の若者達が無理やり拉致する可能性があるって事?

魔王『どうしても連れ帰らないといけないといつている。だが妖精少女は嫌がっているのなら、無いことでは無いだろ』

なるほど

美女さん「ですので、若が付いていくといつお話に付いては今すぐの返答は致しかねます」

妖精姉「しかし…」

それでも食い下がろうとする妖精姉に美女さんは「貴方はわが国と隣国間で争いを起こさせたいのですか?」と一刀両断した。

それにしても美女さんはなぜこんなに攻撃的なんだろう?

いつも通りの笑顔なんだけど有無を言わせぬ雰囲気が物凄く怖い。

「妖精少女は」のままでは危険だ」と言い張る妖精族の若者の一人に「妖精族の事も考えて申しているのですが?」と美女さんが答える。

だがどうこう事か相手はわからないようである。

美女さん「王族である若を招き入れるという事は、わが国との関係を強くしようつといふ事に繋がりますが」

「それとコロとは…」と反論しようとするのを制して「我々がどういつもりか、ではなく他の国がどう感じるか、です」と美女さんが制する。

美女さん「妖精族の全体的な方針としては中立を貫いていたと思いまますが」

それが一国との関係を強くしようつとして取られてもいいのか?と言つのだ。

それを聞いてさすがに理解できたのか「それは…」と言葉が続かない。

僕「どうですか?一度、妖精族の集落に連絡を取つて方針を仰ぐといつのは?」

妖精姉「そう…ですね」

僕「その間に僕達の方でもどうするか話し合いますよ」

妖精姉「話し合いとは?」

僕「妖精少女にどうしたいかを聞いて、それに付いて検討します」

妖精姉「とりあえず妖精少女に集落に連れて行けば…」

僕「それが出来そうに無いから困つてるのでは?」

そう言つと妖精姉は黙り込んでしまつた。

しつかりしてそうに見えるのに意外と抜けてる人なのかな?

美女さん「そろそろお食事の時間となります。お話はその後にしませんか?」

そう美女さんが言つた時に扉がノックがノックをされ「お食事の用意が出来ました」と侍女が言つた。

食事は殿下と翁も居た。

妖精族の面々はその事に恐縮しているようだ。

僕達は今でこそ一緒にとる事も減つたが、戦時中は王子だった国王とよく食べていたので何とも思わなくなつたが、コレが普通の反応かも知れない。

魔王『お主も王族なんだがな』

妖精少女も起きたようで姫と有力貴族の娘の間で食事…というよりご飯を食べている。

魔王『何が違うんだ?』

食事より、ご飯を食べる、の方が何かしつくりするんだ

ただの気分の問題である。

妖精少女は食事前に妖精族の若者達と出会つた時に、妖精姉が何か言つ前に姫の後ろに隠れて「やー」とだけ言つた。

それを見て妖精姉が仕方ないと言つた感じでため息をついた。今ここで強く言つても意味が無いと思つたんだろう。

食事の後に妖精族の若者達を部屋に案内する。

妖精少女の近くがいいと言う妖精族の若者達に美女さんが「妖精姉様なら構いませんが、その他の方は無理です」と言つ。

妖精姉「何故ですか？」

美女さん「男子禁制だからです」

妖精姉「男子禁制？」

美女さん「姫様の寝所がある場所だからです」

妖精姉「なるほど…私はいいでしようか？」

美女さん「部屋は余つてますので問題ありませんが…よろしいでしょうか、若

僕「そうだね。いいんじゃない？」

妖精姉「何故若にお尋ねに？」

美女さん「ああ、若も住んでるからです」

妖精姉「え？ 男子禁制じゃ？」

美女さん「そうです。若以外は入れません」

妖精姉「それはどういuff…」

美女さんが説明をする。

それを聞いた妖精姉は「妖精少女もそこに…」と僕を見る。

慌てて姫と有力貴族の娘に懐いているので一緒に住んでるので、

家族のよつなものであつてやましい事は何一つ無いと力説する。

なんで毎回毎回、いいわけじみた事を言わなきゃダメなんだ

魔王『身から出た鎧だろ?』

妖精姉は空の館の一室、他の妖精族の若者は少しほなれた部屋を宛がわれた。

その後に空の館の入り口付近の応接間に再度集まる。

妖精姉「一度、集落に戻つて方針を仰ぐ事になりました」

僕「そうですか」

妖精姉「それでですね…私だけ残るつと思つんですが…」

僕「じゃあその間は今の部屋を使つてください」

妖精姉「…いいのですか?」

僕「構いませんけど」

何か問題があるのだろうか?

妖精族の若者は明日の朝に集落へ戻る為に出るらしいが、どれくらいで結論が出て戻つてくるか分からないと言つ。

僕「そうなんですか。まあ別に部屋は余っているので、いつまでも居ていただいていいですよ」

僕をじつと見ていた妖精姉は「…ありがとうございます」と一言だけ呟いた。

翌日、妖精族の若者は何かを小声で妖精姉に言つと、護衛の兵士達と共に馬を走らせた。

第41話 方針（後書き）

誤字修正

償還して

召還して

無いことで花だろう

無いことでは無いだろう

その他の片 その他の方

妖精少女見たいに

妖精少女みたいに

妖精王

精靈王 (多数修正)

言づ音 言づ事

第42話 第一次選考会・午前

さらに数日が立つた。

姫の騎士団の応募数は78名居たらしい。
思つたより多い。

第一次審査は書類審査になつた。

僕「アイドルの選考会か！」

つい突っ込んだ僕に翁が「あいどる？」と聞き返す。
それでアイドルと言つのを簡単に説明をすると翁は「確かに似てお
るの」と笑つた。

翁「だがこの審査は応募した全員の素行調査も含まれております」

翁が言うのは兵士なら勤務期間や勤務態度、周りの評価を確認する
だけで済むが、それ以外の応募は結構時間が掛かるらしい。
市井のものなら本人は愚か、親兄弟、本人の交友関係まで調べる。
冒険者の場合は冒険者組合に問い合わせを行い、冒険者としての経
歴や本人の交友関係、噂まで調べるそうだ。
大げさな、と思つたけど「姫のお傍に仕える者だから、大げさに過
ぎても足りないぐらいですな」と言つられて納得。

ただ翁が僕に警護を使うのが何とも慣れないでのその事を言つと「
若はもう王族ですからな」と言つられた。

そこを何とか説き伏せて公式の場以外では今まで通りで行くよしお願いをする。

翁は「その方が楽でいいがな」と言つ。

選考会に関して「よろしくお願いします」と言つと「まかせておけ」と豪快に笑っていた。

そして書類選考が終わって78名が73名になつた。

殆ど通過かよ！

魔王『落ちた5名の素性が気になるな』

翁に聞いたら「幼子が1名、男が1名、素行が良くないものが2名、姫が1名」と言つた。

姫を守るための騎士ですから！

魔王『男だと？』

まあ性同一性障害の人かも知れないしね

魔王『なんだそれは』

性同一性障害というものに関して僕が知っている事を伝える。

まあ僕のいた世界では少しづつだけど、そういう人もいると受け入れられてきてはいたよ

魔王『なるほどな』

ただ応募した男の人がそうなのかは分からぬけどね

とつあえずは7~3名をどうするかだ。

美女さん「本来なら対戦試合を行つたりして決めますね」

僕「仲間を決める選考会で、行き成りそれで振るいにかけるのはどうなんでしょうか?」

翁「だが実力の無いものは採用できないと思つが?」

僕「そうでしょうか?」

僕の考えを一人に告げる。

本来の騎士なら剣の腕前も必要だらう。
でも姫の騎士団は姫を守る為だけの騎士で、他の騎士とは少し違う。
だから剣の腕以外でも能力のある人間は取り入れたい。

翁「他の能力とは?」

僕「そこまで深く考えてませんが剣一辺倒の騎士団にはしたくないです」

翁「ふむ…」

そう言つと「なら面談しかあるまい」と追つが呟いた。
面接を7、3名行つのか、結構ハードだな。
そんな事を思つていたら「では」いつまじょう」と美女さんが手を
叩いた。

美女さん「全員と手合わせしましょ」

僕・爺「手合わせ?」

美女さん「はい。勝ち負け関係なく手合わせをすれば、相手の剣の
腕以外も見れますね」

翁「なるほど…」

僕「まつて…誰がするの?」

念の為に聞いてみたら2人が僕を見るし、魔王まで『決まつてある
だろう』と言つ。

やっぱり僕がするんですね

美女さん「私も副団長として手伝いますよ」

さすが美女さん…！

そう思つて物凄い期待して美女さんを見たら「ちゃんと立ち会います」と言つ。

僕「立ち会つ？」

美女さん「ええ、実際に剣を振るつのは若のお仕事です」

僕「一人で…？」

美女さん「若なら一人でも十分いけます」

魔王『いつも通りお主に拒否権は無い』

美女さんの太鼓判と魔王の冷たい一言で僕が全員と直接剣を交える事となつた。

さらに数日後、姫の騎士団の一次選考前日の夜。

姫、有力貴族の娘、妖精少女、美女さんと、ここ数日で（僕以外と）すっかり打ち解けた妖精姉とで食卓を囲んでいた。

姫「明日、姫の騎士団の一次選考なんですね」

僕「ええ」

姫「手合わせと聞いてますが…」

すでに候補者に向けて、一次選考は僕との手合わせと告知している。単純な勝ち負けではないという事は伝えられているが、内容は手合わせ以外は当日となっている。

僕「姫、申し訳ありませんが有力貴族の娘も候補者の一人である限り、ここで内容は言えません」

姫「そんな…」

有力貴族の娘「私も他の候補者と同じ立場で挑みたいので構いません」

毅然と言つ有力貴族の娘に妖精姉は首を傾げる。

妖精姉「有力貴族の娘は若の奥さんなんでしょう?なら選考無しで合格なのでは?」

僕「それはありえません」

妖精姉「何故?」

僕「僕の奥さんという立場と姫の騎士団の一員と言つのは別だからですよ」

妖精姉「身内でも贔屓しない?」

僕「ここで僕が有力貴族の娘を特別扱いで合格させると、今後、コネで入るうとする者を拒否できなくなります」

そうなると姫の騎士団は貴族や豪商のような力ある娘に箔を付けるだけの騎士団に成り下がってしまうだろう。
それでは姫の騎士団を作る意味は無いのだ。

妖精姉「しかし若の奥さんである限りは実力で入ったとしても、やつぱりコネとして見られるのでは？」

僕「その可能性は否定できません。しかし騎士団の選考をしつかり行えば問題はありません」

選考内容に有力貴族の娘を優遇するような不正を行わず他の候補者達と同じ立場で試験を受けて合格すれば、騎士団の中から有力貴族の娘に不満を持つ者は出ないだろう。

それでも不満に思うよう器の小さい人は騎士団に必要は無い。騎士団の仲間がちゃんと理解してくれているなら、例え騎士団以外の誰かが有力貴族の娘の事を悪く言つてもみんなで守れるのだ。

妖精姉「それでも力のある者はコネだと信じて娘を入れようとするのでは？」

僕「その為にしつかりと選考会を行ふんですよ」

選考会をしつかり行つておけば、後々にコネで娘を入団させようとしても選考会と同じテストを受けさせればいいよ。

僕「テストは生半可な気持ちで受かるようなモノは行いません。コネで来るよつた娘は到底無理ですよ」

美女さんも笑顔で頷いている。

因みに明日の一次審査は決まっているが三次以降はまだ決まってない。

ただ単に自分の首を絞めたかな?とも思わないでもないが、姫の騎士団について妥協したくないのは確かである。

姫「私も見学に行つても宜しいでしょつか?」

僕「かまいませんが…」

美女さん「ですがに直接は危険ですので、選考会の広場を見渡せる3階のバルコニーに席を用意させます」

姫「近くで見るのはダメですか?」

美女さん「素行調査は行つておりますし赤白両騎士団の騎士も手伝いに来てくださいますが、それでもどの様な者がいるかまだ分かりませんので」

それを聞いて姫が「そうですか…」と残念そうにする。

姫「せめて2Fで…」

美女さん「2Fですと投擲用の武器があれば十分姫に危害を加えることが出来ますし、協力者がいれば飛び移る事も可能です」

美女さん「私ならナイフで確実に仕留められますね」

魔王『3Fでも出来そうだ』

魔王の呴きが聞こえたかのように「3Fでも10回に9回は出来る
と思います」と笑顔で呴いた。

それを聞いて姫が「分かりました」と頷く。

妖精少女「私も姫お姉ちゃんと一緒に見るー。」

美女さん「わかりました。妖精姫様のも合わせて3席用意致します」

妖精姫は「私は別に……」と言つていたが妖精少女の「楽しみだね」
という言葉に「え、ええ……」と何となく頷いていた。

一次選考当日。

姫の騎士団の候補者7~3名は城にある兵の訓練場広場に集められた。

その中には有力貴族の娘もいるが選考会が始まってしまえば一人の候補者として扱う。

美女さん「では姫の騎士団の2次選考会を始めます」

美女さんはそう宣言すると今回の選考会の趣旨を説明する。

全員にくじを引いてもらい一班9～10名に班分けをし紅白に分かれて模擬戦を行う。

各班、一人の大将を選び、大将は鉢巻を巻いておく。
模擬戦毎に大将を変えるのは構わないが、戦闘中の交代は認めない。
攻撃は木剣のみで飛び道具や魔法、精霊魔法等の類は使用不可である。

勝敗は相手大将を討ち取るか、一定時間後に決着が付かない場合は生き残りの多い方が勝ちである。

大将の交代は認められないために、鉢巻が外れた場合も負けとなる。

戦死判定は一人につき一人の判定者が付き行い、旗が揚がった方の色の候補者は戦死となる。

2人の判定者（自分と相手）の戦死判定が合わない場合は両方相打ちで戦死となる。

A（赤）とB（白）が戦つた場合の両判定者の判定。

両方、赤を上げたら赤の戦死。

両方、白を上げたら白の戦死。

赤と白で分かれたら両方の戦死。

旗が揚がらない限り戦闘続行。

判定員の判断は絶対であり異論は認めない。

判定員は赤白両騎士団の連隊長と大隊長達を行い、毎回ランダムで決める。

模擬戦の立会い人は赤白両騎士団副団長2名が行う。

美女さん「赤白両騎士団の全面協力の下で行います」

美女さんがそういうと白の騎士団団長が「どうも」と挨拶をし、赤の騎士団団長は目礼だけした。

まさに赤白両騎士団の全面協力である。
しかもこれだけではなく、両騎士団から各数十人の騎士団員が手伝いに来ているのである。

白の騎士団団長曰く「騎士団員の勉強になると思って」
赤の騎士団団長も同じ考え方らしく、互いの騎士団から次代を担うだろう数十人を厳選して連れて來たらしい。

美女さん「では、午前中は私と若のペアと総当たりで対戦してもらいます」

その言葉に候補者から動搖が伺える。

一部は「2人で?」という反国王軍に関わってない市井じせいの者や冒険者。

残りの大半が僕と美女さんをある程度知っている反国王軍の兵士だ

つたもの達である。

美女さん「私達の大将は若が行います。判定員は赤白両騎士団団長にお願いします」

「お一人なら皆さんも判断に納得なさるでしょう」と美女さんが微笑む。

赤白両騎士団団長が頷くのを確認して「ではクジを引いてください」と言つた。

全員がくじを引き番号順に並ぶ。

1～8が横に並びその後ろに9～16が横に並ぶ。

全員並んだ縦の列が班になり、そうして8つの班が出来上がる。

美女さん「模擬戦の順番は一番先頭の人の数字の若い班から対戦となります。一通り終わればまた1から。それを午前中は繰り返します。戦闘の勝敗は関係ありません」

勝敗ではなく模擬戦を通して協調性ややる気などを見るのだ。

美女さん「各模擬戦を時間一杯に行えば3周くらいですが、何戦出来るか楽しみです」

魔王『ほひ』

美女さん？

魔王『美女は「どれくらい耐えれるのか？」と挑発したのだ』

だよねえ！

なんて事言つの！？って思つたが、それを聞いた候補者達がやる気を出してくれたようなので、まあいいかと思つ。

美女さんは「1刻、作戦会議に時間を取ります」と言つと一時解散を告げた。

白の騎士団副団長の「始め！」言葉で模擬戦が開始される。

僕達は赤で美女さんを前衛、僕が後衛に立つ。

白側の1班のメンバーは7人が前衛、3人が後衛で大将を2人で守るつもりのようだ。

7人の内3名が美女さんに張り付き4名が僕の方に突っ込んでくる。

と美女さんに張り付いた3名が崩れ落ちる。

すぐに白の旗が3本揚がる。

僕に向かおうとしていた4名が驚きで足が止まつた瞬間に僕は自ら突っ込んで2名を倒す。

慌てて僕に向かおうとする残りの一人を倒した時には、美女さんは走り抜けて後衛に肉薄すると大将を含む3人を打ち倒していた。

一斉に白い旗が揚がり「そこまで」という声が掛かる。

すぐに周りにいた赤白両騎士団の騎士達が1班のメンバーに駆け寄り怪我の具合などを確認しながら模擬戦エリアから連れ出す。

開始1分未満で終了である。

他の候補者からざわめきが上がった。

模擬戦前の作戦会議中に美女さんから「候補者は人数差から気を抜いていると思うので気を引き締めましょう」と言われた。

第一班は見せしめとして一瞬で叩き伏せられたのである。

もちろん、全員次の模擬戦に影響を及ぼさないように打ち身程度に抑えている。

「次、第2班！」という掛け声の下で2班がフィールドに入る。

「はじめ！」の合図で9名の内、8名が美女さんに殺到する。

美女さんは8名を捌きながら次々と倒していく。

それを横目に僕は飛び出すと相手の大将に迫る。

予想はしていたようで剣を構えたが僕は剣を叩き落すと喉元に剣を突きつけた。

すぐに「そこまで！」という掛け声が掛かる。

やはり開始1分未満である。

次の班は剣を握った事の無い市井出身の娘が大将を勤めていた。

というよりは剣が使えないのに大将に追いやられたのだろう。全員が大将を守り打つて出てこない。

僕と美女さんは回り込んで左右から挟撃するとあつといつ間に防御は崩れた。

唯一驚いたのは剣を初めて握るような市井の娘が独りになつても降伏せずに僕に向かって来た事である。

もちろん素人の剣など問題になるわけも無く難なく剣を叩き落したが、向かってくる勇気は中々だと思ひ。

その後も各班は他の班の戦いを見ながら戦術を考えて立ち向かってきた。

2週目は相手の出方を伺いながら対応したので1週目よりは対戦時間がかかる。

それでも数分といった所だつたが…

全班各2回づつ対戦を終わった時点で始まつて半刻（約1時間）と言つた所だ。

美女さん「2回ずつ終了しました」

美女さんはそう言つと若干息の上がつてゐる候補者達を見て「どいか打開策を見出した班はありますか？」と聞いた。

しかしどこの班も思いつかないようで声を上げない。

美女さん「わかりました。では1と2、3と4、5と6、7と8のそれぞれ2つの班を統合して引き続き行います」

一つの班 18～19名になる。

1刻の作戦会議の後に若い番号順から模擬戦を行う。

1つ目の班は開始直後に大将を除く18名全員が向かつてきた。

「いさぎが良いですね」という美女さんはいつもの笑顔で集団に飛び込むと触れるを幸いに片つ端から打ち倒していく。

次々と揚がる白い旗。

このまま美女さんが倒してくれたら楽だなと思つたら二分の一ほど倒した後に僕と目を合わせた美女さんが引いた。
そして候補者を引き連れたまま僕の方に向かつってきた。

魔王『樂はさせてくれないようだ』

そのようだね

美女さんは僕の横を通り通る時に「サボつたらダメですよ」と僕にだけ聞こえるように言つとさらに下がつていった。

美女さんと共に向かつてきた候補者達は大将である僕を見逃す訳も無く僕をそのまま取り囮もうとする。

僕は前面の的に突つ込むと3人の候補者を打ち倒し囮みを抜ける。
すぐに振り返り向かつてくる9名を近い順に対処する為に剣を構えた。

昼間近になり休憩となる。

息も絶え絶えに地べたに崩れ落ちる候補者達の前に立ち「では昼食と休憩をはさみます」と美女さんが言つ。

最初から最後まで笑顔の美女さんに候補者達は恐怖を覚えるかもしない。

僕は怖いよ

魔王『我也怖い』

さすがに僕も肩で息をしながら汗を拭つ。

立つてるのが辛いなあ

だが候補生の前だから見栄を張つてなんでもない風を裝つ。

魔王『息も絶え絶えで裝えてないがな』

それくらいは許してよ

美女さん「もし姫の騎士団を辞退したいと考える場合は、昼の選考会が始まると申し出してください」

美女さんが「以上です」と言つと回りの騎士達が「昼食の用意はあ

ちらです」と候補者達を案内していた。

僕と美女さんも赤白両騎士団長と副団長達と共に食事を取りの為に移動した。

第42話 第一次選考会・午前（後書き）

誤字修正

考え方お

考え方

生き残り

生き残り

私達の対象

私達の大将

3週くらい

3週くらい

数分といった

も数分といった

対象は

大将は

午前中では

午前中は

裁き

捌き

応募者数の間違いを修正

第43話 第2次選考会・午後

白の騎士団団長「中々激しい選考会ですね」

赤の騎士団団長「ウチの入団テストよりハードだな」

白の騎士団団長「やうですね。よければ食後の運動がてら、うちの騎士団とやつませんか?」

赤の騎士団団長「我が騎士団もやつてみたいな」

そういう一人に「選考会もあるのに無理ですよ」と僕が言つと美女さんが「昼以降は若是模擬戦を行わないのでは?」と言ひ。

美女さん、何を言つのー??

確かに午後からは候補者同士の模擬戦を行う予定だけど!

白の騎士団団長が「おお、じゃあ赤白両騎士団から選抜で班を作りまじょうか」と赤の騎士団団長や副団長達と話を始める。

僕「…美女さんがそういうならいですが、赤白両騎士団団長は無しで、班の人数は6人ですよ」

赤の騎士団団長「なんだとー?」

僕「当たり前じゃないですか。赤白両騎士団副団長も無しにしたいくらいです」

白の騎士団団長「そんな…」

どうしてもやりたいという赤白両騎士団団長に美女さんが「じゃあ、私達と組んで4人でやりますか」と笑顔で告げる。

4人vs赤白両騎士団選抜でやろうというのだ。

「面白そうだ」と両騎士団団長がノリノリで今度は対戦する赤白両騎士団選抜の人数を何人にするか、という話で盛り上がる。

「一人10人で40人」「さすがに多くないですか?」「じゃあ8人で32人」「キリ良く30というところですか」という事で30名になつた。

朝の模擬戦から姫騎士候補生の実力に話が飛び、連れてきている騎士達なら何人で対応できるかの話になる。

赤の騎士団団長「9人の班なら3人だな」

白の騎士団団長「でも何戦もする事を考えると5人は要りますね」

僕「もし今の状態の疲労困憊の候補生なら?」

白の騎士団団長「9人の班なら4名で8班対応できないと困りますね」

僕「18人なら?」

赤の騎士団団長「そうだな。6名…7名だな」

僕「じゃあ7名の班を2つほど、午後から入れましょーか」

赤の騎士団団長「何?」

僕「男性騎士団の実力を肌で感じるのはいい刺激になると思つたのですよね」

赤の騎士団団長「なるほどな

僕「もちろん、疲れている候補生との差を無くす為に模擬戦を2回ほどやってもらいますけど」

そうこうと赤白両騎士団団長は一つ返事で頷く。

僕「ただし参加するのは赤白両騎士団選抜の中から平騎士団員のみにしてもらいますけどね」

僕の言葉に赤の騎士団団長が「なつ!」と声を発する。

白の騎士団団長は「他の騎士候補生の選抜試験に出る騎士団長が何処にいるんですか」と苦笑いを浮かべる。全くその通りである。

午後になつた。

候補生から5名の脱落者が出了た。

3名が貴族の娘で2名が市井の娘である。

これで貴族出身者は有力貴族の娘のみとなつた。

残つた候補者の一人に市井の娘がいた事に驚いた。

集まつた候補生68名に午後の内容を伝える。

人数が減つたので再度17人一組で班分けを行う。

まずは僕と美女さんに赤白両騎士団団長の班と赤白両騎士団団選抜の班による模擬戦を見てもうづ。

4対30の模擬戦。

騎士が30名隊列を組んでいるのは中々壯觀である。

開始ししてすぐに突つこんでは来ず、2列横隊を維持したまま前進する。

前衛3人の美女さん、赤白両騎士団団長の前まで來ると1列目がそれぞれに当たつていく。

そして2列目が脇をすり抜け僕に向かつてきた。

魔王『守る氣ナシだな』

僕は向かってくる騎士達10名を迎える。

隙無く向かってくる騎士達にどう対処しようかと思つたら、向かってくる騎士達の肩越しに美女さんがこちらを見ていた。

5人相手にしながらである。

美女さんがこちらを見ている…

魔王『「情けない姿を見せたらどうなるか分かるか?」という所か』

ひいい

向かってくる騎士達に対して手加減無しで向かう。
一番近い騎士に接近し打ち倒す。

そして足が止まつた騎士達から距離を取るように離れる。
僕を囲もうとする騎士たちの一端に立つて、僕を打ち倒し囲まれる前に脱出する。

出来る限り全員の姿が視界に入るよう後に下がりながら、一人突出している者を見つけたら倒す、という戦法を取り続けて半分の5人になった。

人数も減つたので5人の輪に飛び込む。

今まで囲まれるのを避けながら戦っていた僕が突つこんできた事に戸惑っている間に5人全員を打ち倒した。

それ待つていたかのように（待つて居たんだろうけど）直後に美女さんが大将を討ち取つて模擬戦が終了する。

白の騎士団長が「今の模擬戦を見て何かを感じてもらえれば」と候補者達に言い纏めているが、後ろで赤の騎士団長が「お前ら…

もう少し頑張らんか！」と言っているので色々口無しである。

明日からの訓練を厳しくすると言つ赤の騎士団団長の言葉に白の騎士団団長も「ウチも精進が足りませんね」と同意する。

がんばれ赤白両騎士団団員達。

くじ引きで再度班分けを行う。

午後は7名一班の騎士選抜と模擬戦を行う。

騎士選抜は2班あり、一定数模擬戦をこなしたら入れ替わる。それ以外は朝のルールと同じである。

模擬戦が始まった。

当初こそ騎士団選抜が大将を打ち倒して勝利を収めていたが、すぐに時間制限一杯まで掛かる試合が出てきだす。

各班5戦ずつ行つたあたりで選考会は終了する。

美女さん「お疲れ様でした。これにて2次選考会を終了します」

美女さんの言葉に息も絶え絶えの候補者達から「お疲れ様です」と挨拶がちらほら聞こえてくる。

美女さん「今残っている候補者の皆さん2次試験合格者となります」

その言葉に顔を上げる候補者達。

美女さん「2次は技術などではなくやる気を見せて頂きました」

だから最後まで残った全員合格なのだ。

美女さんは候補者達を見渡すと「一次合格おめでとうござります」と言った。

それを聞いて安堵なのか脱力する候補者達を美女さんの言葉が襲う。

美女さん「ではこれから第3次試験を行います」

候補者達に戦慄が走る。

魔王『候補者達には美女は悪魔か何かに見えているだらうな』

まあ午後に僕と美女さんが決めたんだけどね

美女さん「今から4日間に渡る合宿を行います」

これから野営用の荷物を担いで行軍し、野営を行つ。
明日からは今日よりハードな選考会を行う事を伝える。

美女さん「もちろん、もう一時（約2時間）程で日が沈みだしますのでそれ程遠い場所ではありますん」

いつもひとつ手に持つた地図を広げて目的地を指す。

「どう考へても一時でいける距離ではありません、ありがとうございます」

美女さん「一刻後に野営の装備が支給され行動開始となります」

美女さんの言葉に誰も一言も発しない。

美女さん「途中でリタイヤされても困ります。もし辞退したい者がいたら今すぐ申し出てください」

呆然としているのか誰一人反応しなかったが、その中の一人が「辞退します」と手を上げると連鎖的に手が上がっていた。

美女さんは「そうですか。残念です。では辞退者はあちらへ。体の不調を感じる方はあちらへ」と辞退者一人一人に「お疲れ様でした」と微笑む。

半数以上が辞退を申し出て居なくなり、残りは29名になった。
残留者に有力貴族の娘も居る。

美女さんが3次試験を受ける候補者に立つよに促す。

全員、疲労困憊という感じで立ち上がるが、何人かは立つているの

もやつとのよつだ。

「では3次試験を行いますので」ひらく」と美女さんが29名を促して歩き出す。

城の中の一室へ案内する。

すでに赤白両騎士団団員により椅子が用意されており候補者達を座らせる。

美女さん「ではこれから3次試験を行います。これより辞退出来なくなりますが、宜しいですか?」

そういう美女さんに皆頷く。

美女さん「ではまず皆さんに自己紹介をしてもらいましょう。名前と志望動機で構いません」

「志望動機が選考基準になりませんので、どんな内容でもかまいませんよ」と言ひ。

何故自己紹介?と首を傾げる面々に「これから4日間一緒に生活する仲間ですからね」と美女さんは言ひと端に座っている候補生を指名した。

一人一人自己紹介をしていく。

志望動機は様々だ。

「姫様のお役に立ちたいとずっとと思っていた」という兵士。

女性が認められる数少ない場だと感じて応募した者。

いつまで冒険家業が続けられるか分からないので定職に就こうと思つた者。

純粹に騎士に憧れていたという者。

驚いたのが市井の娘が残つており「私でも頑張れば何か出来るかと思つて」と言つていた。

有力貴族の娘は「姫様を守りたい」と言つていた。

中には「美女さんに憧れて」と言つていた者もいた。

全員の名前と志望動機を来た美女さんは「ありがとうございます」と言つと「若」と僕を呼んだ。

僕はみんなの前に立つと「3次試験合格おめでとうございます」と言つた。

何を言われているか分からぬといつ顔の面々に」3次試験の合宿は嘘です」と伝える。

僕「3次試験はどんな環境でも騎士として命令に従つ氣概があるか。絶望的な状況でも諦めずに居る事が出来るか、等を見させて頂きました」

僕の言葉が少しづつ理解できてきたのだろうか。

候補者達がざわめきだす。

美女さんがすかさず「静かに、話は途中です」と言つざわめきを止める。

僕「まあそれは建前で根性をみさせていただきました」

僕は全員を一通り見渡すと「合格です。姫の騎士団として一緒に頑張りましょう」と言った。

静まり返る部屋に美女さんの「おめでとうございます。これからよろしくお願ひします」という言葉が響く。

それを聞いてやっと実感が沸いたのか、喜びで横の候補者達と抱き合つものや泣き出すもの表現は様々だ。

喜びを表現する候補者達が落ち着くのを待つて美女さんが口を開く。

美女さん「今日は城に部屋と食事を用意しております」

5人部屋となるがゆっくり休むように言つ。

「明日、朝食後にまたここに集まってくれさー」と言つと解散を伝えた。

夕食の席に有力貴族の娘は居ない。

なぜなら姫の騎士団の候補者として他の候補者達と用意された部屋で休む事になつていて。

妖精少女「有力貴族のお姉ちゃんが居ないと寂しいね」

姫「そうね。でもすぐに戻つてくれるわ」

僕「すぐは無理ですよ」

姫「そ、うなんですか？」

姫にこれから数日の訓練などを経てやつと姫の騎士団見習いとして姫と面会を果たす。

だから少なくともそれまでは有力貴族の娘は戻つてこれないし、戻つてきても勤務中は一騎士団員に過ぎないので特別視は出来ないと言う事を説明する。

姫はそれを聞いて「そ、う…なんですか」と寂しそうに言つた。

同じく寂しそうにしている妖精少女の頭を妖精姉が慰めるように撫でていた。

翌日、29名の姫の騎士団候補者達は昨日の部屋に集まつた。

美女さん「今から貴方達は姫の騎士団見習いとなります。まずは姫の騎士団という立場を理解してもらひつ為に説明を行います」

美女さんはやうやく姫の騎士団の説明を行う。

あくまでも僕が姫の騎士という立場に任命された副産物として出来た騎士団である為に、僕が引退したりした場合は解散する事になる一代限りの騎士団である。

僕は執政と同じ立場に序されている為に姫の騎士団に命令できる立場にある者は国王殿下と姫様と執政だけである。

もし不当な命令などを受けた場合は団長である僕か副団長の美女さんに申し出る事。

ただしあくまでも姫の騎士団として守られているだけで、決して騎士団員に権力がある訳ではない。

美女さん「分かつてゐるかとは思いますが勘違いしてしまうような事があり、姫の騎士団員として相応しくないと判断された場合は、騎士団として処罰いたしますので注意してください」

美女さんの言葉に皆が頷く。

それを見届けると続きを話し出す。

姫の騎士団は姫と僕に忠誠を誓つ集団である。

姫の騎士団の見習いとなつた全員、今までの身分は関係なく横並び

になる。

元の身分が貴族だろうが平民だろうが関係なく、今後の頑張りを見て立場を決めていくというのだ。

まあ貴族は有力貴族の娘だけだが。

美女さん「他は赤白両騎士団と同じような規則となります」

姫の騎士団の宿舎で寝泊りをし、一日の大半を訓練や警備に費やす。休みの日も基本は宿舎で準待機状態でしかなく、外出などにも許可が必要となる。

美女さん「ここまで聞いて辞退したい人は居ますか？これが最終となります。今後は姫の騎士団団員として、除隊も自由に出来なくなります」

見渡すが誰も何も言わないのを見て美女さんは頷く。

美女さん「では訓練は昼から始めます。午前中は姫の騎士団の制服を作る為にみなさんの寸法を測らせて頂きます」

そつ言うと扉が開いて針子が数十人入ってきた。
僕は寸法測りが始まる前に部屋を後にした。

姫の騎士団選考会から数日。騎士団員達の訓練も進み、ある程度形になった。

騎士団は7～8名一班とし4つの隊に分け各隊で実力から隊長を決め、有力貴族の娘もその一つの隊長になった。

そして姫との顔見せを行つた。

やはりといふか何といふか、姫の騎士の制服は黒ずくめである。夏は暑いだろうなと思つたが、それまでには涼しい服が用意されるのだろう。

姫が「折角の女性騎士団なのですから、華やかなのがいいです」「いい制服はドレスがいいと言つていたが、僕と美女さんで『それでは勤務に差支えがある』という話をして納得してもらつた。

そして服のデザインは色々上がつたが「僕がズボンとスカートを足せば良いのでは?」と適当に言つたのが採用され、ヒラヒラの多い制服となつた。

さすがといふか何といふか美女さん含めて30名の女性が黒ズくめとは言え、ヒラヒラした服を着ているのは華やかではある。一応、剣を抜いたり動き回るのには邪魔にならないように出来ているが、僕も着るといわれたら騎士団解散を宣言しなくてはいけないだろう。

一時的に姫の騎士団の詰め所は空の館の中になつた。
空の館が元々後宮だつた為に、後宮で働く侍女たちの部屋が沢山ある。

その中から入り口に一番近い部屋から数部屋を騎士団の部屋とした。
後宮に勤める侍女も身分は高いものだつたようで、部屋は2人部屋
だが結構な広さを確保してるので、そこに寝具を入れて4人部屋にし
た。

有力貴族の娘が僕の奥さんである事はすでに団員に伝えている。
今までの訓練でも特別扱いは行つていなしに、隊長にも実力でな
つた為に今の所は特に問題は無いようだ。
空の館に移つても騎士団員として行動し、休みの日に姫や僕たちと
食事をする程度である。

昼食時、有力貴族の娘の話をした時に団員からが「姫の騎士団団員
は団長の奥さんになるんですか?」と言われた。
さすがにそれは無いと言うと「残念ですね」とある騎士団団員が
「冗談を言い、まわりの団員もそれを笑つた。

休憩中に「冗談が言い合えるぐらいは騎士団団員と良好な関係が築け
ていると言えるのだろ?」

「言えるよね?

魔王『いきなり29人増えるのか…大変だな』

いやいや、増えないから！

姫の騎士団の勤務は隊単位で行動となる。

1日目と2日目が訓練、3日目の朝から4日目の朝まで24時間警備。

警備明けの4日目が休みとなる。

このサイクルを4つの隊が日々ずらしていく。

少しづつ騎士団の様相を呈してきた。

第43話 第2次選考会・午後（後書き）

誤字修正

簿義戦

模擬戦

訓練が厳しくすると

訓練を厳しくすると

高所派の皆さん

候補者の皆さん

2鉄横隊

2列黄隊

対象 大将

1時

一時

付こう

就こう

今度の
回りの
周りの

今後の

第44話 そんな一日

朝は早い。

日が昇る前に起きる。

起きるとまずは寝室に隣接したバルコニーで軽く運動をする。内乱時に他の者達…若や赤白両騎士団団長と一緒に行っていた時からの日課で、これをしないと一日じっくり来ない。剣を手に取り型の練習をする。

元々それほど弱くは無かったが強くも無かった自分が、若と一緒に練習する事により戦場で足を引っ張らな程度に剣を振るえるようになれた事は純粋に嬉しかった。

国王となりもう剣を振るう事もあまり無いだろうが、それでも剣の練習をするのは楽しい。

僕「今度、若に手合させでも願おうかな……」

自分の義兄となる人を思い出しそうと笑う。

自分にとつて義兄に当たるにも関わらず、その事を鼻にかけないどころか地位の大きさを理解していない節がある。

王族、それも国王の義兄ともなれば国政に干渉する立場についてもおかしくない。

若には是非国政を手伝って欲しいのだが「^{まつりいじ}政は僕には向きませんよ」と笑つて断られる。

向かない事なんて無いのに。

若ほど広い視野で物事を見ている人は居ないと想つので、是非国政に携わって欲しいのに…

本人はその気がまったく無いのである。

若が国王になつて、僕が補佐の方がいいけど

そうなつたら僕は全力で若を支えるつもりだ。
僕は若をそれほど買つていても
買つてているという言葉は妥当ではない。

心酔していると言つてもいいかも知れない。

初対面で姫姉さまを孤立無援な状態にも関わらず守つていた姿を見た時点で好感は持つっていた。

その後、若が「姫の笑顔を守りたいだけ」という事を言った時の真摯さを目あたりにした時初めて、姫姉さまと共に国を引っ張つていつて欲しい人だと感じた。

その後もその気持ちは変わらず今も思つてゐる。

若が国王で姫姉さまが王妃、そして僕が執政として脇に控える姿を想像してため息を付く。

何故なら若が全力で拒否をするからだ。

その事を強引に進めたら出奔する勢いかもしれない。

僕は溜息をつくと剣を鞘に収めてベッドの脇に立てかける。扉がノックされ侍女たちが桶にお湯を張つて持つてきたのでそれで体を清めた後に服を着替える。

朝食は基本的に翁と爺と取る。

それを聞いた若が「それは寂しいですね」と言い、4日に一度若と

姫姉さま達と一緒にとる事になった。

どうやら姫の騎士になつた有力貴族の娘が一緒に食事を取れるのが4日に一度だかららしい。

同じく夜も4日に一度、若たちと一緒に食事をする。

僕はこの日を楽しみにしている。

朝食の場に行つたら既に若達は来ていた。

姫姉さまと有力貴族の娘、妖精姉が「おはよひざります」と言ご、若が「おはよう」と言つのに挨拶を返す。

若も「おはよひざります」と言つていたのだが僕が「義兄になるのですから、挨拶くらいは普通に」と言つて、最近やつと「おはよう」になつた。

妖精少女はいつも元気に「おはよー！」と挨拶をしてくれる。

それを妖精姉が「おはよひざりますでしょ」と奢めているのを「構いませんよ」と笑顔で返す。

翁と爺達との食事も嫌いではないが、若たちとの食事は賑やかでやはり楽しい。

食事が終わると執務室で書類との格闘が始まる。

主に行つているのは復興に関する事と国王派貴族の領民裁判、治水

や治安、国防に関することである。

領民裁判に関しては半分ぐらいが終了している。

有罪になり接收した土地は一旦国の直轄にしていつてはいるが、そろそろ誰に任せらるかを決めなくては行けない。

今までの治水については災害が起じた後や良く起じる場所だけで行つてはいたが、国庫が今までに無いくらい潤つてゐるのでこれを機にしつかりと行つことにした。

治安に關しては元国王軍派領主の下で働いていた兵士達を召し上げて軍を編成し当たらせてはいる。

2000もの数になつた軍は領主息子と騎士隊長の指揮の下に国を巡回させ魔物や盜賊などを討伐して廻らせた。

まだ出て数日だが野盗の集団を一つ、魔獸を1体倒したらしく成果は上々だ。

このまま続ければ領主息子にも褒章を与えるとい口実になるので一石二鳥である。

昼食は姫姉さまと妖精少女と妖精姉と取り、有力貴族の娘が休みの日は有力貴族の娘もその中に入る。

若と美女さんは「食事は仲間の結束を固める」機会「らしく姫の騎士団員と取る。

確かに姫の騎士団は他の騎士団に比べ、有力貴族の娘の話を聞く限りでは仲が格段に良い。

女性騎士団だつたり少數だと詰つても差し引いても、やはり若の人徳なんだと思う。

しかも勤務中は美女さんが適度に引き締めるよりで、そこのメリハリもいい感じのようだ。

昼食は毎食、姫姉さまや妖精少女、妖精姉が居るので華やかで楽しい。

僕の大切な時間となつていてる。

ただ妖精姉は僕に対しては笑顔が硬い気がする。

もう少し楽にしてくれたら良いのにと思い若に相談したら「国王だから最初は仕方ないのでは?」と言われた。

その後に「若も妖精少女にキスした所為(理由は既に聞いている)で、違う意味で警戒されますよね」と美女さんに言われ「ですよねー」と言つていたのが面白かった。

昼からは半時(約1時間)程、他国の大使との面会や領主達の陳情を受ける。

そういうた用件の無い日は赤白両騎士団や城の各部署を訪問する。赤白両騎士団以外は僕が行くと畏まってしまって仕事にならないうなので、あまり行かないけど…

その後に一時(約2時間程)の休みを取る。

基本的には若の所に遊びに行く。

何故ならあそこは男子禁制で若以外は魔王である僕しか入れないからだ。

彼らも仕事とは言え四六時中付き纏わるとさすがに肩がこる。

基本的には若達の訓練風景を眺めたり姫姉さまや妖精少女や妖精姉とお茶を飲んだり、妖精少女と子狼の戯れを見て過ごす。
ここは癒しの空間だと思う。

その後は夕食まで翁と爺と有力貴族とその補佐官達との会議である。今までにはここに貴族が出張つて自分達の権益の為に色々と口出しをして来た様だが、僕の代からは出席させていない。

施策の報告や新たな問題の提起と解決策、他国の情勢に対するわが国の対応を話し合つ。

たまに若も参加するが黙つて聞いているだけで意見を求められた時にだけ答えている。

大抵が「僕にはわかりませんが、それでいいのでは」で終わるけど。

どうしても良い解決方法が思いつかない場合に意見を求める時にも思いつかない方向からの解決策を提示される事があり毎回驚かされる。

翁なんかは若を何とか国政に引っ張り込めないかと頭を悩ませており、若が居ない時に会議の議題として上がる事もしばしばある。

あくまでも会議での息抜き目的の議題での事で、ここに出席している面々は誰も実現出来るとは思っていない。

熱望はしてるけど。

夕食は朝食と同じく有力貴族の娘が休みの日はみんなで食べる。

若には「それ以外の日でも空の館に食べに来たらいいのに」といわれるが、家族の団欒に毎日邪魔するのは気が引ける。

というよりも有力貴族の娘を差し置いてそんな事をするのは怖…気が引ける。

別に有力貴族の娘が酷い事をするわけでは無い。

確かに子供の頃の有力貴族の娘はかなりのお転婆で一緒に居た僕は色々な目あつた。

どれもこれも楽しい思い出として僕の記憶に生々しい傷跡を残してくれている。

歳を重ね僕は女の子と遊ばなくなっていたので大器で出会ったのは数年ぶりだったけど、まるで深窓の令嬢のような立ち振る舞いに驚いた。

だが挨拶を終えてた時に驚いている僕にまるで悪戯が成功したような目を一瞬だけしたのを見て「変わってないな」と思つた。

その後は色々あって若の奥さんになった有力貴族の娘は本当に優しく笑うようになったと思う。

いや幼い頃から優しかったが今はその比じやないくらい優しく綺麗で幸せそうなので、相手が若で本当に良かつたと思う。

話が逸れてしまった。

もし有力貴族の娘を仲間はずれにしようものならどの様な目にあつかからないのである。

食事の後は一時程雑務を行い、明日の予定を確認して一日の勤務が終わる。

その後は入浴をして寝るだけだ。

ある日、休憩時間の日課に空の館に顔を出した時の事。

姫姉さまは有力貴族と妖精少女を連れて町へ出かけていて居なかつた。

若と美女さんも警備以外の当直の姫の騎士団を引き連れて護衛に行つてしまっていた。

そういうえば前日の昼にそのような事を姫姉さまが言つて居た様な時がする。

居ないならしょうがないと戻ろうとした所で声を掛けられる。

妖精姉「殿下？」

声をした方を見ると妖精姉がバルコニーにある椅子に腰掛けている。すぐに立ち上がりうつとするのを制して話しかける。

僕「今日は昼前から出かけると言っていたのを忘れて来てしました」

妖精姉「なるほど」

僕「妖精姉は一緒に行かなかつたんですか？」

そう言つと「町は…怖いので」と静かに言つた。

どうやら人族の町に出たのは今回が初めてらしく、やはり人族の町は未だに何があるか想像できなくて怖いらし。

「なるほど」と僕が頷いて居ると妖精姉は思い出したかのように僕に席を勧めてきた。

妖精姉「殿下を立たせたままで申し訳ありません」

僕「気にしないで下さい」

妖精姉「しかし…」

そういう妖精姉に「妖精少女のお姉さんなら若の家族も同然。なら僕とも家族ですよ」と笑いかける。

僕がテーブルに着いた事で気を利かせた侍女が飲み物を用意してくれた為に、なし崩し的に2人でお茶を飲む事になった。

僕「少しはここに慣れましたか?」

妖精姉「はい、皆さん良くしてくれます」

妖精姉の言葉を聞いて僕は小さくため息をついた。
それを感じた妖精姉が「何か?」と言つて来た。

僕「いえ、やはり氣を使われているなと感じまして」

妖精姉「そんな事は」

僕「姫姉さまにも言われませんでした?」

何か思い当たる節もあるのだろう。

黙り込んだ妖精姉に僕は笑いながら言つ。

僕「先程も言ったとおり家族のようなものです。公式の場でない所では気を使わないで下さい」

妖精姉「しかし一国の王に対してそんな事は…」

僕「妖精姉は国王はどの様なものだと聞いてきました?」

妖精姉は僕の台詞に言いにくそうにしていたが「国王は絶対の権力者であり、その国に居る者は絶対服従が義務付けられていると聞いてます」と言つた。

それを聞いて僕はさらに笑つ。

僕「確かにそのように振舞う国王も居るでしょうね」

妖精姉「…殿下は違うと?」

僕「違いますよ」

妖精姉「どう…違つのですか？」

僕「僕は国王じゃ無いんですよ」

妖精姉「は？」

「何を言つてゐるの？」というキョトンとした顔の妖精姉を見て僕はさらりと笑ってしまった。

僕「僕は国王じゃないんですよ」

妖精姉「それはどういふ意味でしょ」

僕「まあ実際に戴冠式も済ませて国王といふ立場に居ますが、本当はもつと相応しい人が居るんです」

僕がそう言つと僕が何をいつているのだといふ感じで探るように妖精姉は黙つてしまつた。

僕「ただその人がやりたくないといふので、僕は仕方なしに国王代理をしています」

妖精姉「代理…？」

僕「だから、僕に対して公式の場以外はかしこまらなくても良いですよ」

僕の突飛な理論に妖精姉は溜まらず噴出した。

一頻り笑いが収まると妖精姉は「わかりました」と頷いた。

僕「良かつた。で、この国には慣れました?」

妖精姉「慣れ…とは言えないですね」

さすがに人族の町では気が休む暇は無い。

ただこの空の館は若以外の男性は僕しか来ない上に寝起きしている人数も少なく、大抵は妖精少女や姫と一緒に居るのでまだマシだというのだ。

妖精姉「本当にここの人たちには妖精少女共々良くしてもらつて感謝をしています」

僕「そう言つてもらえると良かつた」

そう言つとお茶に口をつける。

僕「若も優しい人でしょう?」

妖精姉「そう…ですね」

僕「あれ、そうでもないですか？」

妖精姉「決してそんな事は」

僕「何がありました？」

妖精姉「あつたという程の事では」

僕「妖精少女にキスした件で怒っています？」

妖精姉「そんな事は無いです」

そう首を振ると妖精姉は話し出した。

確かに若は人あたりも良く優しい人だと思つ。

それは妖精少女の懐き様や姫の話などから伝わつてくれる。

ただ説明は難しいのだが、何か感じる時がある。

決して実は悪人だと思っている訳では無いが、違和感を覚える時があるらしい。

それは若の魔族の部分を感じているのだろうか？

妖精族つて魔族と仲が悪かつたっけ？

僕「悪い人ではないんですけどね」

妖精姉「そうですね」

僕「まあ一緒に生活してればじきに違和感も無くなるでしょう」

妖精姉「そうですね……」

僕「もし負担があるなら別に部屋を用意させましょつか？」

妖精姉「いえ！そこまでしてもらう必要は無いというか、ここの方
が人が少なくて落ち着くというか、一人は寂しいというか……」

そつ言う妖精姉に僕はやっぱり笑ってしまう。

僕「そういうえば妖精族の里とはどの様な場所なんですか？」

僕の言葉に妖精姉に緊張が走る。

「何、だろ？？」と思つて首をかしげて意味に気が付き「ああ」と声
を上げてしまう。

僕「別に妖精族の里の実情を探ろうとか、何かしようといつて訳じや
なく、ただ単純な興味なんです」

妖精姉「……」

僕「何か警戒させてしまってすみません。噂でとても綺麗な所だと
聞いた事があつて興味があつたんです。国王の僕は一生訪れる機会
が取れないだろ？」「……」

そう言うと妖精姉は方を力を抜き「大した事はお伝え出来ませんよ

と言つた上で教えてくれた。

妖精族の里は森の深くにあり夜になると月明かりのみで静かである事。

里には精靈が沢山居て幼子の時から精靈と遊ぶ事。

人族の国とは全然違う話に時間もあつといつ間に過ぎて言つた。

姫の騎士団の騎士が「国王陛下。執政の使いの者が来ております」という言葉で、時間を大幅に過ぎている事に気がついた。

僕「しまつた。もつ戻らなくては。楽しい時間でした。ありがとうございます」

そういう僕に「いらっしゃり」 と妖精姉が微笑む。
今日だけで妖精姉と仲良く出来たようで嬉しい。

僕「また機会があればお話を聞かせてください」

妖精姉「あんな話でよければいつでも」

戻ると仕掛けた所を振り返り「よければ暇なときにでも執務室にも遊びに来てください」と言つ。

妖精姉「仕事中に向うのは……」

僕「構いませんよ。翁には『たまには息抜きしてくださらない』と、ワシが休めません!』って言われてますから

翁の口真似をしながら言つと妖精姉は笑つてくれた。

僕「ここから執務室までは殆ど人が居ませんから」

だから人に怯える必要もありませんよ、と言葉外に言つと妖精姉は
「そこまで怯えてません!」と頬を膨らませる。
そんな子どもっぽいじぐさに笑いを堪える。

僕「ではまた」

僕は会釈をしながらそつと空の館を後にした。

執務室まではすぐ着く。

扉を開けて入り「遅れてすみません」と言いながら席に着く。
すでに他の人々は集まつており何かの議題で話し合っていたようだ。

翁「構いませんよ」

僕「何を話し合っていたのでしょうか?」

翁「若をどうしたら国政に引っ張り込めるか、です」

それを聞いて噴出してしまひ。

爺「殿下、何か良い事がありましたか?」

僕「うん? なんで?」

爺「なにやうに樂しきうとしたの?」

爺の言葉に「確かに」と翁が頷く。

確かに妖精姉と仲良くなれた事はよい事だと言えるな

僕「大した事ではないですが、ありましたよ」

爺「それは良かった」

そういうと内容まで突っ込んで聞かず嬉しそうに頷く爺。翁が「では殿下も来たし今日の議題に取り掛かるか」と言つて会議が始まった。

第44話 そんな一日（後書き）

誤字修正

若い者は 若以外

国王派どの様なもの

国王はどの様なもの

獲れないだろう 取れないだろう

これを気に これを機に

討伐して回らせた 討伐して廻らせた

1時 一時

深層の令嬢

深窓の令嬢

妖精少女「そんな事は」

妖精姉「そんな事は」

時期に

じきに

第45話 事実

妖精族の里に帰つた妖精族の若者達から手紙が届いたと言つ事で殿下に呼ばれた。

僕と姫と美女さんと妖精姉と妖精少女が殿下の執務室に向かう。有力貴族の娘は本日は勤務中である。

執務室に入ると殿下が妖精姉に一枚の手紙を渡した。
どうやら手紙は2通あり、一通は国王宛でもう一通は妖精姉宛のようだ。

殿下と妖精姉は手紙を開封すると中身を確認した。

殿下「手紙には妖精少女の処遇について妖精族間で会議を開く為に時間が掛かりそうだと書かれていますね」

読んでいた手紙を翁に渡しながら言つ。

妖精姉「こちらも似たような事が書かれておりました。会議は妖精女王の名の下に行われるそうです」

殿下の「宜しければ見せていただいても良いですか?」と言つ言葉に妖精姉は頷いて『読めないかも知れませんが』と手紙を渡す。

妖精姉の言つには手紙には、妖精女王の名の下に妖精族の会議が招集された事の他には里の近況と妖精姉と妖精少女の体調を気遣う内

容が書かれているらしい。

僕も見せてもらつたが読める訳がないと思つたが、魔王が『妖精姉の言ひとおりだな』と言つてたので間違いないだろつ。

というか妖精語読めるの！？

魔王『読めるぞ。話す事は殆どできんが聞き取りなら出来るしな

聞き取り？言語も違うの？

魔王『当たり前であるひ。種族によつて独自の言語を持つのは当然だ』

ただ魔族や人族が多いのでその言葉が共通語のように扱われているだけの事らしい。

魔族と人族が同じ事に驚いたけど、元々同じ種族だったのにおかしくないようだ。

それもあくまで「魔族や人族の中で長年力を持った国々が使つていた言語」という話であり、地方や特殊な地域には共通語とは若干趣の違う独自の言語が使われているらしい。

そしてあくまでも共通語となつてはいるが、全ての者が話したり読み書き出来るわけじやないそうだ。

今までたまたまそういう者に会わなかつただけなのだそつだ。

じゃあ妖精少女があの歳で共通語が話せるのはすごいんだね

魔王『すう』こと言えばすういが、本当にすういの耳だらうな』

耳？

魔王『妖精少女は元々そんなに共通語が話せるわけじゃないのだろう』

でも普通に話してない？

魔王『普通ではないな』

魔王が言うのは僕達の会話を聞いて覚えているようだ。
だから最初はあまり話さなかつたし、話しても片言になるらしい。
てっきり幼いからそういう話方なのだと思つてた！

だからたまに周りの話を黙つて聞きながら「一二三四」としている時は、
良く分からぬ單語が出てきて分からぬけど周りの皆が笑顔な
で一緒に笑つてゐるのだろう。

魔王『出会い系ってそれほど立つていらないのに、日常会話を聞く事が出
来るのは耳と頭が良い証拠だな』

確かにす』いね

魔王『それを言つなら妖精姉も中々だな』

なんで？

一緒に來ていた妖精族の若者達があまり話さなかつたのは共通語を

それ程理解してなかつたからだろ。

妖精姉だけ残つたのも共通語への理解が一番出来ているからと思ひ。それは少しの時間では理解できるものでもないし、妖精姉の理解力を見る限りではある程度の勉強をしたと予想されるそうだ。

僕は手紙を妖精姉に渡しながら「妖精姉の言つている事は本当のようです」と伝えた。

すると妖精姉が「読めるのですか！？」と驚いた表情をし、他の面々（美女さん以外）も一様に驚いていた。

僕「え、ええ… 文字の読み書きと聞く事だけで話すのは難しいですが…」

僕がそつと妖精姉が歌つように何かの言葉を紡いだ。

魔王「貴方はどこで妖精語を？」と聞いている。知り合いで妖精族の出身者がいたと言つてよいだ

どうやらあのメロディが妖精語の言語らしい。
歌うよに響く言葉は綺麗だと思つ。

姫も同じように感じたのか目を閉じて聞いている。

僕「昔の知り合いで妖精族の出身者が居たのです」

するとさらに妖精姉は歌う。

以降は同時通訳が面ど… 分かりにくいので会話出来て いるように簡潔に。

妖精姉「その者の名前と出身がわかりますか？」

僕は名前と出身を伝え、その人は昔に病氣で無くなつたと伝えた。

妖精姉「（魔王にも読解不能）なのですか？」

僕「『じめん』。その言葉の意味は分からぬ」

僕の言葉に何かを探る言づな感じだったが、別の言葉を紡いだ。

妖精姉「貴方に出身を伝えた者との関係は？」

魔王が『愛人だ』と言つのに「いえるか！」と突つ込むと「冗談だと笑えないことを言い出した。

もし僕がそのまま冗談を口にしたら、冗談ではすまない惨劇が待ち受けていたかもしれない。

僕「昔住んでた付近の森で怪我をして居たのを助けました。魔獸に襲われたそうです」

妖精姉「…試すような事をして済みません」

僕「構いませんよ」

そう言って会話が終わると妖精少女が僕に飛びついてきた。

妖精少女「お兄ちゃん、話せるの？」

僕「聞くだけなら出来るよ」

妖精少女「すごいね！これで沢山お話できるね！」

そう言うと妖精少女が物凄い勢いで話し出した。

「本当はもつと皆と話したかった」という事、「中々言葉を覚えられないなくて聞く話せずもどかしい」事、「ちゃんと覚えたいから共通語を教えて欲しい」と言う事。

沢山話す妖精少女は本当に楽しそうで、歌う声は共通語より軽やかで綺麗だ。

妖精少女に「じゃあ毎日少しづつ覚えようか」と心の中で魔王に「頼むよ」と言いながら言うと、頷く妖精少女と共に姫も「私も妖精語を覚えたいです！」と言って来た。

「一緒に頑張りましょうね」という姫と妖精少女。

これ以降、毎晩一時（約2時間）程、妖精語と共通語の勉強会が開かれる事となる。

それは何故か姫の騎士団も参加となつたが、それは有力貴族の娘を

仲間外れにしない為の力技であった。

しかし姫の騎士団でも妖精少女は人気の様で「妖精少女と話せるな
らー」と殆どの者が乗り気だった。

勉強会により僕自身や姫の騎士団の面々も妖精語をある程度理解し、
姫に至つては日常会話でも妖精少女と妖精語で会話をしたりした結果、
精靈語が話せるのみに今までなるのはまだ先の話である。

殿下「妖精族の会議はどれくらい掛かると思いますか?」

妖精姉「手紙が書かれた時点で召集という段階ですので、まだ始ま
つても無いと思こます。決まるのはどれくらいになるか…」

殿下「そうですか?」

そつ言つと考え込むよつに黙つていた殿下が顔を上げた。

殿下「妖精姉にお願いがあるのですか?」

妖精姉「なんでしょうか?」

殿下「したた妖精女王宛に親書を認めていただけませんか?」

妖精姉「私が…ですか?」

殿下「はい」

妖精姉「殿下が直接共通語で書かれても解読できますが？」

殿下「そうなんですが、妖精姉に妖精語で搔いて頂くのに意味があるんです」

妖精姉「意味……？」

殿下「まあ深く考えずに、一緒に貴方や妖精少女の近況なども書いて貰つて構いませんから」

妖精姉「妖精女王にそんな事は書けません」

殿下「それはそうですね……」

そう言つと殿下は笑つた。

殿下「妖精姉は妖精女王にお会いした事はありますか？」

妖精姉「…あります」

殿下「では、どの様な判断を下すと思われますか？」

その言葉に妖精姉は思案したが、「特殊な状況過ぎてわかりません」と答えた。

殿下「どんな人ですか？」

妖精姉「優しく美しい方です」

誇らしげに妖精姉が言つ。

それを聞いた殿下は「そうですか」と言つと笑顔で頷いた。
そして「親書の件はお願ひできませんか?」と聞く。

妖精姉「内容によりますが、問題ないようなら」

そう答える妖精姉に「たいした内容ではありませんよ」とだけ答えた。

親書の内容は以下の通りである。

- ・妖精族と事を起こすつもりはないと言つより、出来れば仲良くしたい
- ・妖精少女は若達と本当に家族のように仲が良いので無理やり引き離すような事はしないで欲しい
- ・妖精族に迷惑が掛からないようなら若が妖精族を訪問する意思はある（僕も了承済み）
- ・出来れば隨時、親書のやり取りで近況報告を行いたい

概ねこんな感じだ。

僕の訪問に関しては殿下に「と言う事を織り込んでいいですか?」と聞かれたので二つ返事で答えた。

姫も「私も!」とすごい食いついていたが、取り合えず今は妖精少女が「一緒じゃなきゃ嫌だ」と言つた僕だけ伝てるだけだ、と言

う事で納得してもらつた。

殿下「この内容さへ書いていただければ、後は妖精姉が他に何を書いていただきてもいいですよ」

そう言つと「すぐに印璽（いんじ 蟻で封筒を止めて印を押して封印する事）を押すので、こちらで書いていただいてもいいですか」と少し離れたテーブルの椅子を薦め数枚の紙とペンと封筒を渡した。妖精姉は黙つてそれを受け取ると紙に羽ペンを走らせる。数刻して2枚の手紙を書き終わると、インクが乾くのを待つて手紙を僕に差し出した。

僕「？」

妖精姉「内容を確認しないのですか？」

僕「何で？」

妖精姉「何でつて…読めるのは若だけなのですから」

僕「いや、何で内容を確認するの？」

妖精姉「は？」

僕「殿下、必要あります？」

殿下「無いですけど？」

僕「ですよね」

その言ひと僕は手紙を受け取り、内容を確認する事無く折りたたむと「2枚とも同じ封筒に入れていいいですか?」と聞いて封筒に入れ殿下に手渡す。

殿下はそれに手早く印璽いんじを押す。

殿下「家族宛などの手紙も一緒に送りましょつか」

そう言ひとさらに数枚の紙を妖精姉に渡す。

そして妖精少女に「文字は掛けますか?」と聞いて「少し」と答える妖精少女にも紙とペンを渡した。

姫が「私も妖精少女の家族に手紙を書きたいのですが、共通語でもいいでしょか?」と妖精姉に確認していた。

妖精姉が「大丈夫です」と言ひと姫は綺麗な共通語で手紙3枚に渡る長文を書いていた。

内容は今までの妖精少女の元気な様子を書いてたら止まらなくなつて、無理やり途中で止めたそうだ。

といふかそれでもびっしり3枚か

魔王『すう』いな

妖精少女も妖精姉に聞きながら両親に手紙を書き終わつたらしい。

姫が「私も一緒に入れていい？」と妖精少女に聞いたら「うん…」と元気に返事をしていた。

妖精姉の物と妖精少女と姫の物にも殿下が印璽を押す。

「印璽つてそんなに無駄使いしていいものなのだろうか？」と思つたけど「大事な手紙には違いないので構いません」と殿下が笑つた。妖精少女の手紙は妖精少女が「押してみたい！」と言つたので押させてあげた。

「熱いから火傷しないようにね」と横で殿下と姫が見ている中で一生懸命押した印璽は歪んでいたが「できた！」と喜ぶ妖精少女が可愛いので問題なしだろ？。

魔王『国王の印璽を国王以外の者が押すとは…妖精少女はやはり大物だな』

すごい事なの？

まじですか！

魔王『通常は処刑物だな』

魔王『それ程、国王の印璽は大切で重要な物のだ』

それをさらつと「押したい」と言つて押す妖精少女は本当にすごいと思つ。

すぐに兵士が呼ばれて「親書を届けるよつて」「いつどゝ通の手紙を渡す。

敬礼をし受け取った兵士はすぐに部屋を出て行つた。

あの手紙はあつという間に控えている伝令に渡されると、十数騎の護衛の騎兵を伴って物凄いスピードで国境まで届けられるのだろう。そこで国境付近にいる妖精族の者に渡されて数日で親書が届く筈である。

姫「そういえば妖精少女のお母さんってどんな人？」

妖精少女「おかーさん？ん~」

そう言つと考へ込んだ。

共通語が難しいのか、言葉に言い表すのが難しい母親なのだろうか？出来れば前者であつて欲しい。

妖精姉「妖精女王です」

姫・殿下・翁・爺・有力貴族「「「「「は？」」」」

皆が呼吸を合わせて言つ中で、僕は言葉も出ないほど驚いていた。妖精姉の言つている意味がわかんない。

妖精姉「妖精少女の母は妖精女王です」

固まる僕達に妖精姉は再度言葉を紡いだ。

第45話 事実（後書き）

誤字修正

妖精姉の言つには手紙には殿下の手紙には
部分不要の為削除

「殿下の手紙には」

要請女王の 妖精王女の
人族がおいので 人族が多いので
搔いていただいても 書いていただいても
余り あまり (数箇所修正)

第46話 娘

妖精姉「妖精少女の母は妖精女王です」

姫「え…え？」

それ以上の詳しい説明方法は無いとでも言つよつに妖精姉は黙る。いや、確かに無いけど！

殿下「…何故、今、それを言つたのですか？」

妖精姉「今までの皆さんの妖精少女に対する対応を見て、言つても良いかと思いました。」

そうやら妖精族が妖精少女をどうしても連れ帰れるとした要因の一つにそういう事が関係していたようだ。

そして妖精少女が妖精族の女王の娘と知られると利用されるのは間違いないと思い、妖精少女にも口止めをし黙っている予定だったようだ。

といふか後者（言葉に表しにくい方）だった！

魔王『私は知っていたがな』

なんだつて！

魔王『妖精族の若者達の会話や、先程の妖精姉の妖精語での質問で聞かれたりしたからな』

なんで黙っていたの！？

魔王『知つてはいる必要があるか？関係あるまい』

それも… そうだね

魔王『まあ、知つた時の驚きを見てみたかつただけだがな』

魔王！？

魔王『冗談だ。妖精族の若者の会話がしつかり聞こえたわけではないのだ』

「妖精少女」「妖精女王」という単語しか聞こえず、娘だとまでは思つていなかつたらしい。

妖精姉の質問で「妖精少女が妖精女王の娘と言つ事も存知なのですか？」と聞かれて初めて理解したらしい。

ただあの場は知らない振りをしたほうがいいと判断し、解読できないと嘘を尽いた様だ。

言つてくれたら良かつたのに

魔王『言つたら少なからず驚きの反応をするであろう。それでは意味が無い』

確かに…

殿下「何故そう思われたのですか?」

そう言うと妖精姉は説明をした。

本当に妖精少女が大事にされているし、姫と有力貴族の娘を見る限り絶対に妖精少女に対しても酷い事は行われないだろう事。

殿下と話してみて国王も同じようにそんな事をしない人だと判断できた。

そして何より僕が妖精少女が妖精女王の娘だと知つていながら誰にもその事を話すつもりがない様子だった事等が、ここに居る人たちを信用出来ると判断したようだ。

妖精姉「先程の手紙にも妖精少女を妖精女王の娘と伝えた旨を記載しました」

殿下「…勝手な判断をして大丈夫ですか?」

妖精姉「勝手な判断ではありません」

妖精姉が言うのは先程届いた手紙に妖精女王の言葉も記されており
「妖精姉が信頼に値すると判断するようななら眞実を明かしてよい」とあつたそうだ。

ただ何故そのような判断を妖精女王がしたのかまでは分からぬそうだ。

そうなの？

魔王『あつたな』

なんで言わないの？

魔王『真実が何か分からなかつたからだ』

でも妖精姉は嘘は言つて無いって

魔王『「嘘」は言つておらん。ただ全てを申してなかつただけだ』

ああ言えば「いつ頃」…

妖精姉の言葉に翁が「妖精姉の申すとおりですか？」と言つ翁の言葉に頷く。

翁「何故その事を仰らなかつたのですか？」

さう言われても黙つていたのは魔王だから…

と言える訳も無く、仕方なく魔王が言つたとおり「真実が何か判断しかねた」と伝えた。

しかし翁が「貴方は妖精族の若者達の言葉で女王の娘である事を知つていたはずなのに？」

さすが翁！するどい。

しかし僕は開き直つて由を切りとおす事にした。

僕「それが真実と結びつきませんでした」

翁「何と？」

僕「僕にとって妖精女王の娘と言つのは左程重要な事では無かつたので」

翁「重要な事では無いと？」

僕「はい」

翁「何故そう判断した？」

僕「妖精少女は妖精少女でしかありませんから」

それを聞いて翁が「他国の姫君を……」と言つ。

僕「例えそもそも妖精少女は僕達の家族に違はないかもしれません。今まで通り家族として守るだけです」

そう言つと姫も「そうですね」と頷いた。

「それに」と僕は妖精姉の目を見て「妖精姉も言わないようでしたので、黙つている事が最善だと判断しました」と伝える。それでも何か言おうとした翁を殿下が制する。

殿下「別に知つたとしても若の言つとおり何も変わりませんよ。それとも利用するつもりでしたか?」

殿下の言葉に翁は「あつません」とはつきりと言つた上で

翁「ワシが言いたいのは王族の姫君としての扱いをしなくて良いのか、という事です」

僕「ああ、なるほど……妖精少女」

妖精少女「何?」

僕「姫様になりたい?」

僕の言葉に「ん~」と考える妖精少女に「今まで通り僕や姫や有力貴族の娘と一緒にいることが出来なくなるけど」と伝えると「今ままが良い!」と元気に答えた。

僕「妖精姉はどうですか? 妖精少女に対しても王族の姫君として熱かつたほうが良いですか?」

妖精姉「いいえ。妖精少女が望むままにしてあげて欲しいです」

僕「なら問題ないですね」

翁が頷く。

今まで通りで行く事に決ましたが、もしその事を知った誰かが良からぬ事を仕出かす恐れがあるので、妖精女王の娘という事は口外しない事に決ました。

空の館は城の最深部に位置し、男子禁制で姫の騎士団も居るので僕の後宮（じゃないよ！住まいだよ！）という事を差し引いても、この国で1・2を争う安全な場所だと言えるだろう。

僕「そういえば妖精姉もやつぱり姫になるんだよね？」

妖精姉「なりませんよ」

僕「そうなの？」

妖精族の子育ては人族と違いまとめて行われる。

そして小さな子どもの面倒を見るのが、一人前になる前の妖精族の若者達なのだそうだ。

妖精姉は妖精少女の年代を見ていた一人だから姉となるらしい。

妖精女王の娘もそれ以外の子どもも一縷めに面倒を見るというのは驚きである。

妖精姉「そもそも妖精女王の地位は妖精族は血縁による世襲ではありますから」

妖精族は女王制だそうだ。

これは女性の方が争い事を起さないだらうという事から始まつたと予測されるが、遙か昔から女王制なので詳しいことは良く分かつて無いらしい。

だが妖精族の歴史では女王制で問題がこる事は殆ど無く反対意見も出る事が無かつたので今までずっと続いてきたらしい。

女王が絶対君主ではなく各集落が集まつた際の議長のような立場であるのも要因の一つと言えるらしい。

そして女王は各集落から推薦された娘が代表となつて、一人に決まるまで話し合いを続けるらしい。

例え途中で女王が不在になつてもその事は変わらないと言つ。気の長い種族だ。

妖精姉「だからこそ議会がどれくらいで意見が纏まるか分からぬんです」

殿下「なるほど」

殿下は妖精姉を見て頷くと「しかし」と思案するよつと云つた。

殿下「そうなると妖精少女が若の奥さんというのは問題あるのかな？」

僕「は？」

殿下「いえ、だつて世襲制ではないとは言え妖精女王の娘で姫には変わりありませんし」

翁「そうなると外交の問題となつてくるな

ヤコまでの話になるの…？」

魔王『なるであらひな』

いや、違ひから！

僕「そもそもが妖精少女が僕の奥さんとののが間違いだからね！」
？

姫「そんな事ありません。妖精少女も家族です」

僕「いや家族だけ奥さんじゃないよね？」

妖精少女「奥さんになるー」

姫「妖精少女もこいつ申しておつますし」

僕「意味分かつてないだけだと思つよー」

姫「そんな事ないですよね」

妖精少女「うん…お兄ちゃん達とずっと一緒に居る事…！」

妖精少女の言う事に「その通りですよ」と姫が頷く。
間違つてないだろうけど若干違うからーー！

妖精姉「その事に付いては先程、妖精女王宛の手紙に記載させて頂きました」

僕「何て事を仕出かしてくれたんだーー！」

妖精姉「え、いや、さすがに本当にそつだとは書いてませんので問題は無いですよ」

その言葉にほつと胸を撫で下ろす。

妖精姉「ただ妖精少女の気持ちは固く、いざれそうなるだろうと
ぐうの音も出ない僕が何とか言おうとする前に姫が「あつーー」と
声を上げた。

「問題大有りだ！」と叫ぼうとしたが「手紙を確認するか伺つたのに確認なさいませんでした」と妖精姉に言われる。

姫「妖精少女が妖精女王の娘という事は、妖精少女のご両親宛の手紙は妖精女王に届くという事ですよねー？」

妖精姉「そうですね」

姫「大変だわ…」

姫が呟く。

「これ以上何が大変なのですか？」と恐る恐る聞いてみると姫は先程、認めた手紙の内容を話した。

どうやら姫が妖精少女と出会ってからの妖精少女の事を書き綴つたらしい。

その中でどれだけ妖精少女が可愛く愛おしいかも書いたそうだ。

何が問題なのだろう？

そして僕の事も妖精少女を最初に助けた人物である事や姫や有力貴族の娘を妻としている事を書いた後に、妖精少女も家族の一員として一緒に暮らしてゐ事を書いたらしい。

妖精姉「それの何処が問題なのでですか？」

姫「いざれは妖精少女がもう少し大人になつたら若の正式な奥さんとして迎えて本当の家族となりたいと書きました」

なんてことするだー！

姫「そしていつか直接お会いしてお話をし、若や私達を知つても

らえたらと思つてます、と書いてしまつたわ」

一国の姫君が他国の女王に、しかも国交がまだ正式に結べてゐるわけ無い状況で姫君がいうべき内容ではない。

その事に思い当たつて姫は「やつてしまつた」と言つてゐるのだ。一同が「それはまずいかもしれない」と思い翁が急いで手紙を差し押さえる為に早馬を飛ばそうとしたの妖精姉の言葉が止める。

妖精姉「それなら同封した妖精少女の手紙に『姫は妖精女王が母君と知らずに妖精少女の母君宛に手紙を書かれました』と添えてあるので大丈夫かと」

例えその一文があつてもそれは「同封された別の手紙」に書かれた内容であり、無視したらなかつた事にされる程度のものである。本当に大丈夫か?という表情の面々に「妖精女王はそこまで器量の狭い方ではありませんので、ご安心ください」と妖精姉が言つ。

妖精姉「逆に妖精少女が大事にされていると分かり喜ばれるでしょう」

それを聞いて姫がほつと息をつく。

妖精姉「まあ若の奥さんになると件についてはどう思われるかわかりませんが」

僕「あ、う、あ…」

妖精姉が悪戯つぽく言ひつが僕は言葉にならない。

翁の行動を思い出し手紙を差し押さえる為に伝令を一と叫ぶも翁に
「伝令は最速のものを選んだ、間に合わんよ」と言ひ。

自分も早馬を飛ばそうとしたくせに…

魔王『間に合わなくとも、事が國同士の問題なら飛ばす必要も無い』といつ判断だらう

じやあ飛ばしてよ！

魔王『お主の事程度なら飛ばす必要も無い』といつ判断だらう

旨酷いや

どんよりとしている僕に妖精少女が「元気を出して」と頭を撫で、

姫も「大丈夫ですか?」と心配そうに覗き込んできた。

2人の優しさが染み渡る。

やつぱり僕には家族しか居ないんだ！

僕は姫と妖精少女と今はここに居ない有力貴族の娘の4人で田舎で
ひつそりと優しく暖かい家庭を築いていくんだ！と心中で叫ぶ。

魔王『いや、だからその妖精少女を妻にするという事が問題となつてゐるのだろう?』

そうだった。

魔王『しかもその火種に薪をくべたのは姫だな』

確かに!—

現実逃避したくて適当なことを想像していた僕に魔王が容赦なく突つ込む。

一人反省会をしている僕を尻目に殿下が「取り合えずは妖精女王から」の返答を待つしかないですね」と言い話は終わった。

空の館に戻ると僕と姫と妖精少女と妖精姉は応接室に集まつた。

美女さんは姫の騎士団の訓練に戻つて今は居ない。

椅子に腰を下ろすと僕は深いため息を付いた。

姫「お疲れですか?」

僕「まあ色々ありましたからね」

妖精姉「妻にするという事を妖精女王に伝えた事ですか？」

僕「それが一番の悩みの種ですね」

僕はそう言つと頭をかいた。

別に妖精少女が嫌いなわけでも無いが、奥さんとして迎えたいかと言えばそうではなく、妹のような存在だ。

娘を持った事が無いのでさすがに娘とは言えない。

僕「そもそも妖精姉は僕が妖精少女を奥さんとして迎える事に賛成なのでですか？」

妖精姉「賛成も反対もありません」

僕「どちらでも無いと？」

妖精姉「決めるのは妖精女王です」

僕「妖精族の婚姻は親が決めるんですか？それとも妖精女王？」

僕の言葉に「どちらでもありませんよ」と首を振る妖精姉。
妖精族同士なら特に問題なく当人達の問題でしかないが、僕が人族（実は魔族だけど）である事が問題らしい。

他種族との婚姻に加えて妖精少女が精靈王から言葉を掛けられる程の使い手という事が問題をややこしくしているらしい。

妖精女王の娘というのはそれに比べると些細な問題なのだと呟つ。

妖精姉「そもそも他種族との婚姻は無い事ではありません」

僕「そうなの？」

妖精姉「はい。何かの偶然で妖精族の里に紛れ込んだり、または外出した妖精族が別種族と家庭を持つ事はごく稀にあります」

僕「そなんだ」

妖精姉「まあ他種族といつても人族か魔族が殆どで、それ以外の種族とは無いといつても過言ではありませんが」

僕「魔族でもいいんだ」

「人族も魔族も私達からしたら違いは左程ありません」と言う。

姫「でも他種族とのロマンスなんて素敵ですね」

妖精姉「実際はそれでも無いようですが」

姫「どうですか？」

妖精族「妖精族と人族、魔族は時間の流れが違います」

人族は100年も満たない時間しか生きられない。

妖精族は百数十年～一百数十年。魔族は長いもので数百年生きる。その時間の流れが圧倒的な絶望感となることが多い。

その事を聞いて姫が息を呑む。

姫のそして妖精少女や有力貴族の娘と僕の関係に置き換えて、何れ残されていく僕に何かを思つたのだろうか。

姫「でも、一人の愛の結晶が生まれれば！」

妖精姉「人族と魔族の間では元々同じ種族だった為に子が成せ易いですが、妖精族との間には殆ど成す事が出来ません」

そうなの？

魔王『まあ全くと言うわけでは無いが、少ない事は確かだろくな』

妖精姉「まあゼロではありませんけどね」

姫の気持ちを慮つてか妖精姉が付け加える。
それを聞いても姫は何も言わなかつたが。

妖精姉「何にせよ、妖精少女がその氣である限りは、後は妖精女王の判断次第です」

うん。まず妖精少女に考え方【説得しよう】。

姫が「やはり手紙の返答を待つしか無いんですね」と妖精少女の頭を撫でる。

妖精少女は僕達の家族なんだ。どうにか守らなければ

魔王『そうだな』

嬉しそうに目を細める妖精少女を見やり、妻に迎えるとかではなく何かしら現実的な方法で妖精少女を守れないかを考えていた。

第46話 娘（後書き）

誤字修正

妖精女王だと知つていながら
松しかない 待つしかない

妖精女王の娘だと知つていながら

第47話 独占欲

僕と姫の式の準備が始まった。

式は次の新芽が芽吹く頃なので季節を2つもまたぐのにも関わらずだ。

殿下が「国を挙げての挙式になりますので、これでも準備期間が短すぎるくらいです」と言っていた。

翁の「若が逃げる前にしなくては」と言ひ言葉に「逃げませんよ!」と反論しながらも、国を挙げての挙式と言わると逃げ出したくて仕方ないのも事実である。

各国には既に挙式の招待状が送られている。

城下では既にお祭り騒ぎで、これが挙式の日から数日後まで続くそうだ。

祝福されているのは嬉しいが、そんなに騒いで大丈夫なのだろうか?

挙式に関する色々は翁と有力貴族が全力で取り掛かってくれているそうだ。

警備はもちろん、列席する予定の各国の要人の席順はとても重要で、それ専用の組織を臨時で立ち上げたらしいだ。

各部署から優秀な人材を20名ほど集めて、今から席順などを決めていいくらしい。

「何もそこまで」と思つたが、国の大小で席順を決めるわけには行かず、わが国の友好国や歴史の長い國の他に國同士の友好関係や宗教観など、色々考慮しなければならないらしい。

僕「でも殿下の結婚式ならいざ知らず、僕と姫の結婚式でそこまで人が集まりますか？」

翁「殆どの国が来ると思われるぞ」

翁が言うのはこの国は位置的に中々重要なのだそうだ。

国 자체は特にめぼしい鉱山がある訳でもなく産業も農業も特筆すべきものは無い。

ただ大陸を横断する険しい山脈に国の3方向が囲まれている。山脈を抜ける大きな街道はわが国に面しており、物流の拠点として成り立っているのである。

山脈を迂回する事も出来るが、その場合はわが国を抜ける3倍以上の時間が掛かる上に幾つもの国境を越えねばならない為にお金も時間も掛かってしまうらしい。

だからどの国もある程度の人物が来ると予想されるのだ。

こういう各国の要人が集まる場は他国との情報交換を行える得がたい場もある為に、数日前から国を挙げての盛大な宴が催されるのが通例らしい。

僕「その全ての宴に顔出ししないとダメとか？」

翁「国が主催する大きな宴は全てですな」

絶句する僕に「私もなので一緒に頑張りましょう」と殿下が言つてくれる。

いや、何の慰みにもなってないから！

姫と有力貴族の娘と美女さんが式で着るドレスについてあれこれ話しあっている。

妖精少女は妖精姉と一緒に殿下の所にお茶を飲みに行っている。この世界はスカートの広がったドレスが一般のようで、結婚式のドレスも同じように広がったものの上に物凄く色々と「コレクション」されているようだった。

それを見て僕が「うわ、良くななの着れるね」と声を出してしまう。

どうやってスカートは広がっているのかと思つたら金属制のコルセットで広がった型を作つており、それを装着しているそうだ。聞いたら騎士の鎧の上部分くらいの重さが金属の型だけであるで、そんなのを着て笑顔で踊つているのかと思つと、女性つてすごいと感心してしまつ。

姫「こんなのと申されましても…どかにどの様なものがあるんですか？」

僕「あ～僕の居た世界ではこのよつた広がったドレスは使用されていないもので…」

有力貴族の娘「ではどの様なドレスなのですか？」

僕は紙とペンを取ると適当な絵を描く。

と言つても絵心もデザイントセンスもある訳ではないので、入っぽ

い曲線に何とかウエディングドレスに見えなくも無いような絵を描く。

なんとか、出来たかな

魔王『何だこれは、魔獣か?』

ドレスを着た人だよ!!!

姫「これは…」

有力貴族の娘「私達の知るドレスとは全然違いますね…」

僕「そうだね。でも姫の騎士の制服をズボンから膨らんでいないスカートにした感じ、と言つのが一番近いかもね」

有力貴族の娘「姫の騎士団の制服を…」

姫「それは…以外と…」

姫と有力貴族の娘が「あーでもない、こつでもない」と言つのを美女さんが紙に絵で書いていく。中々の腕前だ。

僕が書いたものとは全然違う、ちゃんとしたドレスのように見える。姫と有力貴族の娘が「中々言い感じ」と盛り上がるのを身ながら「今までに無い形のドレスで大丈夫なんですか?」と聞く。

各国の要人が来るような席で大丈夫なのか?

美女さん「肌の露出的が多いわけでもなく、ただスカート周りの形が違う程度ですから問題は無いと思いますが」

「一応、国王殿下や翁様に確認をしましょ」^フと言つと書いた絵を持つて部屋を出て行つた。

姫と有力貴族の娘は何色にするかで盛り上がつてゐる。

姫「やはりこ^ニは黒でしょうか?」

有力貴族の娘「しかし姫は華やかな色が」

そこに美女さんが妖精少女と妖精姉を連れて戻つてきた。

美女さん「問題ないそうです」

それを聞いて喜ぶ姫と有力貴族の娘。

妖精姉は美女さんが置いたデザイン画を見て「このような形の服もあるんですね」と感心していた。

僕「妖精族は結婚式でどの様な服を着るの?」

妖精姉「妖精族に結婚式という概念はありません」

姫「なんですか?」

「ええ」と頷くと「しいて言えば、精霊への誓いの儀式がそれに近いかもしれません」と言った。

妖精族は一緒になる時に精霊に誓いを立てるらしい。
その時に着るのはドレスなどではなく、白い布を体に巻く程度な
だと言つた。

姫が「妖精に誓いを立てるなんて素敵ですね」と妖精姉の言葉に言
う。

有力貴族の娘「白も中々いいですね」

妖精姉「何がですか?」

有力貴族の娘「姫の着るドレスの色です」

妖精姉「なるほど」

そう言つと何色が良い、とまた話し出す。

それを二口二口聞いてた妖精少女が「桃色!」と声を上げた。

妖精姉「姫お姉ちゃんは桃色が良い!」

有力貴族の娘「…確かに」

姫「そうね、桃色が良いわね」

妖精少女「でねでね、有力貴族のお姉ちゃんは 紫一。」

有力貴族の娘「え？ 私？ 私は良いわよ」

そういう有力貴族の娘に「なんで？」と妖精少女が聞く。

妖精少女「お兄ちゃんとの結婚式でしょ？」

結婚というのは奥さんとするもので、有力少女のおねえちゃんも奥さんだからするんだよね？」といつ。

何と説明したものかと困った顔の有力貴族の娘に姫が「そうね」と手を叩く。

有力貴族の娘「姫ちゃん！？」

姫「妖精少女の言つ通りね。一緒にしましょつ」

有力貴族の娘が「姫ちゃんの一生に一度の大事な日に何故私まで一緒に！」と反論するのを「私達は家族だもの」と姫が笑顔で答える。

うん。有力貴族の娘を見る限り、やはり姫がおかしいんだな

魔王『お主は反論せんでもいいのか？』

僕が何を言つても姫の意思は変わらないからね。なるみづくなるよ

悟りの境地で答えたなら魔王がおかしそうに笑つた。

有力貴族の娘「若はいいんですか！？」

僕「当日の主役は姫ですよ。主役がそういうなら僕は何も言えません。ただ」

「殿下と翁が許可するまでは分かりませんが」と言つと「早速聞いて来ましょう」と姫が部屋をでていってしまった。

美女さんと有力貴族の娘が急いで後に続いて出て行くのを見やる。

妖精姉「なんというか…姫はすごい人ですね」

僕「そうだね」

感心したような呆れているような、そんな半々を感じていう妖精姉に少し吹いてしまう。

何となく和やかな空気が充満した部屋に爆弾が投下された。

妖精少女「わたしも一緒に結婚式するー！」

僕・妖精姉「…………」

「わたしも奥さんだから！」と笑う妖精少女に僕は驚きで何もいえない。

妖精姉が何とか妖精少女は出来ないという事を必死で伝えているが「わたしも！」と聞かない。

魔王の面白がる笑いが伝わってくる。

魔王、何か打開策を！！

魔王『あげればよいでは無いか』

いやいやいやいや、妖精族とどうなるかも分からぬのに勝手に拳式とか、戦争する気なの！？

魔王『確かにな』

『仕方ない』と言つと自分の言つよつと言えといつ。

僕（魔王）『『妖精少女はまた今度（だな）ね』』

妖精少女『何で？』

僕（魔王）『『妖精少女がまだ（幼い）小さいからだよ』』

妖精少女『もう大人だよ？』

僕（魔王）「『』（毛も生えて「いえるか！」）式はドレスを着て長時間立つて居ない（いかん）ダメなんだよ。この前の賀会の時より長い時間を『』

その言葉に「うひうう……」と言う妖精少女。

妖精族はスカートの膨らんだ人族のドレスを来た事が無かつた様で祝賀会の時のドレスの重さと窮屈さを思い出してうめいた。あの時もすぐに耐え切れなくなつて会場をすぐに出了のだ。

魔王ありがとう。とうふあえずやばくなつたらまたお願ひ

妖精少女「我慢……できるもん」

僕「本当に？」

妖精少女「するもん」

僕「嘘はダメだよ？」

そう言つと僕は妖精少女の頭を撫でて「無理に式を上げてもいい思い出にならないよ」と言つ。

どういう事かと僕を見上げる妖精少女に「ドレスが辛くて我慢して、妖精少女は楽しいかい？」と聞くと首を横に振り「たのしくない」と言つた。

僕「だから妖精少女が大人になって式を楽しく迎えられるまで少し
だけまとう

妖精少女「でも…」

僕「大丈夫。式を挙げて無くとも妖精少女は僕の大切な家族に代わりは無いよ」

「だから今回は姫と有力貴族の娘をお祝いしてくれるかな?」と言
うとと妖精少女は目を細めて「うん!」と笑った。

妖精姉が後ろでホツとしている。

何とか妖精少女を丸め込む（と言うと言い方が悪いが）事が出来た
ようだ。

殿下の所に向かつた姫達が戻つてこない。

さすがに殿下や翁に止められて姫が諦めきれずに長引いているのか
と思つたところに有力貴族の娘が戻ってきた。

僕「ど、どうしたの?」

肩を落とす有力貴族の娘に声を掛けると何かを小声で呟いた。

「え?」と近づいて聞こうとした所、姫が美女さんを伴つて入つて
きた。

有力貴族の娘が「そんな…」と小さく呟き、姫は満面の笑みである。

僕「え？ もしかして……」

美女さん「認められました」

僕「え？」

美女さん「姫様の『』要望は認められました」

僕「それって」

姫「有力貴族の娘も一緒にいいそつよ」

そつ言つと姫は小躍りしかねないぐらい舞い上がつていた。

まさか通るとはー！

魔王『驚きだな』

姫は喜びで妖精少女と手を取り合つて喜んでいるし（妖精少女は半分もわかつて居ないだろうけど）有力貴族の娘は脱力状態である。美女さんに「どういう事なの？」と聞くと説明してくれた。

当初はもちろん殿下も翁も爺も有力貴族さへも「ありえない」と否定したそうだ。

それはそうあるつ。

一国の姫君の挙式に姫（他国からはそつ判断されるのは当然である）が一緒に式を挙げるなど聞いた事も無い。

だが姫は「聴いたこと無いからといって、ダメなわけではない！」と反論する。

それは反論ぢやつ。

意見は平行線を辿り、後は姫が折れるのを待つだけと言つ所で裏切りが生じた。

何と爺が「姫が言つとおりにするのが良いかも知れません」と言い出したのだ。

爺の援軍を受けた姫は息を吹き返し「何事にも新しきはあります！」と言つた。

何か憑き物に憑かれたような姫に「落ち着いてくだされ」と爺はたしなめる。

翁「どうぞ、事じやな？」

爺「式には各国から要人が来ます」

翁「当たり前じやな」

爺「多国は他国との情報交換の他に殿下の元の座を手に入れようとしていくでしょ」

翁「それが悩みの種ではなるな」

何処の国も殿下の元の座を得るためにそれなりの娘が選ばれて同行してくれるだらう。

殿下はそれを相手にしながら不快に思わせないようにならわなくてはならない。

翁「それまでに后を決めるか…来る者たちの中から誰かを選ぶのか…頭が痛い問題じゃ」

爺「そうですね。だがそれは殿下だけじゃありません」

殿下程では無いにしても後一人、各國から狙われる相手がいる。その一人が領主息子だ。

ただ領主息子は対外的には内乱時の判断ミスにより戦果を剥奪され、現在に至るまで要職に就く事は無く国中を走らされている。多くの者達は例え執政の孫だろうが政への影響力は少ないと思うだろ?。

だからこそ領主息子に近づく国は危険だとも言える。

翁「あやつには婚約者がいる。たゞそと夫婦にさせれば問題あるまい」

そう言って領主息子の婚姻はさつと決まってしまったそうだ。

といふか婚約者がいたのか。

魔王『貴族の嫡男だ。生まれた時から居てもおかしくあるまい』

そういうものらしい。

そしてもう一人と言うのが有力貴族の娘である。

元々国王派とは言え現在は内務大臣である有料貴族の一人娘であり、結婚をすれば有力貴族の跡取りとなるのだ。

男にとってこれほど魅力的な結婚相手は居ない。

殿下と同じく各国の独身男性が放つて置くわけが無いビリュカ、来る独身男性全員から確実にアプローチがあるだらう。

翁「だからさつと若の奥さんである事を公表してしまおうと言つのだな」

爺「まさか他国の王族の妾をよこせと言つ者は、そういうありますまい」

自國の者がいえば不敬罪、他國の者がいえば宣戦布告と言えるだろう。

どうせ僕の奥さんというのが事実として既にあるなら、一々誰から会つてどう断るか等と考えるより「僕の奥さんだから」と会つこと自体拒否してしまった方が楽というものだ、と爺は言ひ。

翁「確かに」

有力貴族「そうしてもらえたと私も娘も気は楽ですが……」

有力貴族の娘へ縁談を持つて来るという事は、有力貴族も相手をし

なくてはいけない。

それが一気に無くなれば物凄く楽である。
しかし、それと式を挙げるのは別問題ではないだろ？

うつか？

姫「でもちやんと式を挙げないと相手は納得しないかもしません」
翁「えうじゅな。縁談を断る口実だと思いつつ押ししていくやも知
れん」

先程も言つたとおり一国の王族の敵を「よけ」ところは宣戦布告と同じだ。

だがまだ妾として困られても居ない状態なら小国などは無理でも大國なら「私にもチャンスを」と言つるのは社交辞令として押し通す事も可能である。

社交辞令とは言えそれなりの身分の者に言われた事を此方から「社交辞令で無いと思つてました」とは言えないものである。

面倒くさいー色々面倒くさがるーー

魔王『どいもこんなものだ』

魔族も？

魔王『まあな。ただ魔族は人族よりすぐに力に頼るものが多いとい
うだけだ』

それもどうなの？

これで大勢は決したと言えるだろ？

すでに翁と殿下は「姫と並んで誓う訳にはいかんが、姫の後ろに控えてなら…」などの様に式を挙げるかの話まで始めている。

姫は「じゃあ決定で良いですね！」と畳み掛けると殿下が「まだどのような形になるか分かりませんが、そのようにします」と頷いたのだ。

美女「 という事で、有力貴族の娘も一緒に式を上げる事に決まりました」

僕「あれ？ そういえば説明時に有力貴族の娘は何も言わなかつたようだけど？」

美女さん「それは」

姫が乗り込んだ場は殿下の執務室である。

その場には殿下の他に執政である翁や内務と外務の大臣である爺と有力貴族が居て、國の方針（と言つても結婚式の話だけど）を話し合っているのである。

いくらそれが自分の事であれ、意見を求められても居ないのに不意に発言などは出来ない。

僕「え？ 出来ないの？」

有力貴族の娘「…出来ないわ」

有力貴族の娘は小さな頃から政について父親である有力貴族に躊躇っていた。

将来、有力貴族の娘が地位のある者に嫁いだとしてもその権力は夫や家に付属するものであり、有力貴族の娘自身にあるわけではない。だから権力を使って好き勝手して良いわけでもなく政に口を出す権利も無い、夫となつたものを支えるよう心がけなさい、と。

有力貴族は代々続く名門貴族の嫡男として色々と見てきたのだろう。だからこそ有力貴族の娘には小さな頃からそういう事にならないよう良い含めてきたのだ。

そしてその結果、何も言えないまま一緒に式を上げる事に決まったというのだ。

僕は項垂れる有力貴族の娘の頭を撫でて上げる。

有力貴族の娘「…何よ？」

僕「世の中にはね、本人の意思では避けられない事が山ほどあるんだよ」

優しい笑顔でそう言つと「若が言つと何も言えなくなるわ」と有力貴族の娘が呟いた。

有力貴族の娘「切実過ぎて」

笑顔の裏で僕は少し泣いた。

姫と妖精少女が美女さんにドレスの絵を見ながら「ここに羽をつけよつー」と言つてゐるのが聞こえてくる。

僕「…せめてドレスくらいは意見を伝えないと、どんなものになるかわからんないよ?」

有力貴族の娘「そうね、行つて来る」

力なく歩いていく有力貴族の娘を見送る。

魔王『お主は驚きはしたが否定はしないんだな』

有力貴族の娘の一緒つて事に?

魔王『そうだ』

実を語つと姫の意見に賛成なんだ

魔王『ほう』

先程の美女さんの話にあつたように例え全て断るとは言え、他の男が有力貴族の娘に近づくのは我慢がならない。

魔王『意外と独占欲が強いのだな』

自分で驚いているよ

自分で納得して決めた事とは言え「自分の妻だ」と言張る事なんて出来るとも思わなかつたけど、今は言つ事に躊躇いは無い。

その上、この独占欲だ。

やはり魔王の影響は大きいと思つていたら『我の所為にするな』と怒られた。

第47話 独占欲（後書き）

誤字修正

意外

「たのしくな」

「たのしくない」

要職に就く

要職に就く

殿下「何かお疲れのようですね」

いきなり執務室に押しかけてため息を付いた僕に殿下が声を掛ける。僕は殿下に「執務中に申し訳ないです」と言しながらも出て行こうとはしない。

殿下も翁もそんな僕に出て行けとは言わずに黙々と資料に目を通してサインをしている。

翁と有力貴族は会議などの時意外は自分の執務室におり、殿下の執務室は基本的には殿下と翁のみである。

殿下「毎日、式の準備で追い回されて大変そうですね」

僕「まだ先の話なのに、何であんなに話す事があるんですかね」

本当に細かい事を一々確認される。

有力貴族の娘が非番の日などは2倍ではなく2乗である。

この前などドレスの『デザイン』が変わったので見て欲しいと言われた。『デザイン』画を手渡されて見たが、この前見たのと違いが分からない。

なんなの？脳トレなの？？

魔王『ん？スカートの段が一段増えてないか？』

：ホントだ

ただ単にスカートのフリルが一段増えただけだつた。

正直どうでも良い気がするが、それを言うと大変な目にあつのでそれは言えず「フリルが一段増えてさらに華やかになったね」とだけ伝えた。

あまり増やしすぎると重くなつて大変じゃないかと聞いたら、軽い生地を使うのでそれほど重くなく、コルセットをつけることを考えると全然平氣らしい。

女性はやはりすごい。

最近の悩みは姫の騎士団の団員も巻き込まれて…と言つより取り込んでいることだ。

もちろん勤務中の団員は勤務をしているが、非番の団員と一緒に衣装の原画を見ているのだ。

姫が「姫の騎士団も式用に新しい衣装を作りましょー!」と言つたのが始まりだ。

さすがにそれは無駄使いじゃないかと思つていたが翁が「構わんよ」とまさかの許可を出した。

どうやら赤白両騎士団も勤務用で平時用（戦時は上から鎧を着用するだけ）、公式の式典用、そして婚礼などの礼服用で3種類はあるそうだ。

だから姫の騎士団としても礼服用を作るのは問題ないらしい。

ただそれだけならここまで大事にならなかつたのに姫が「どうせなら実際に着る騎士団の皆さん意見を聞きましょう」と言ったから大変

である。

騎士とは言えやはり女性なので大半の騎士団員が姫の意見に賛同して、非番の日に姫達とわいわい話し合っているのである。

大抵の騎士団員、それから外れたのはたつた3名。

一人は美女さんだが、元々手伝っているが非番の日にわいわいと言う感じではないだけだ。

残り2名も別に嫌だとか反対と言つわけではなくその反対で「自分にはセンスが無いので、意見など言えません」というスタンスで、新しい礼服には期待をしているようだ。
といふか結局は全員が楽しみらしい。

それに巻き込まれる僕はきつこけれどね

殿下と翁が仕事をしてくる場にただ何となく居るだけと言つのが居た堪れなくなつて殿下に話しかける。

僕「この前、この国が流通の拠点だつて言つてましたよね」

殿下「ええ」

僕「この城の場所は丁度真ん中くらいい？」

殿下「そりですね。国を横断する中間地点のような場所にあります

王都を中心に十字に大きな街道が通つてゐる、

そして十字の道のそれぞれの点（国境に当たる部分）を戦で結ぶようにも街道が走っているようだ。

僕「もしかして小砦や大砦はその街道に立てられてる?」

殿下「そうですね、やはり他国の侵攻は街道を通り真っ直ぐ王都を目指す事が多いですからね」

僕「なるほど」

そう言つて言葉を止めた僕に追つがどうかしたのか? と聞く。

僕は「いえ、ちょっと不思議だったんですが、他国の侵攻を気にして街道を整備してないのかと納得しただけです」

翁「街道の整備じやと?」

僕「あれ? 違うんでですか?」

翁「街道は人や馬車が良く通るで、特に整備せんでも道は無くなるまい。何かで街道が崩れたりした時は補強するがな」

僕「あ~その程度なんですね…」

道を整備するという感覚が無いために何処の国でも行われていないのか。

べじつ言つたものかと考えてこると魔王が『べじつした?』と聞いてくる。

街道を整備する事を薦めるべきか考えてる

魔王『整備とは?』

道を平らにし城下の道のよつて石を敷き詰める

魔王『ふむ』

そつするだけで馬車などは速度を増すし、道の凹凸による痛みも減る

魔王『しかし、街道全部となると時間も金も掛かるぞ。石置は特に』
だよねえ。だから困つてゐる。アスファルトがあればなあ

魔王『あすふあると?』

僕はアスファルトの話をする。

と言つても僕もアスファルトの原料など知らないので大雑把になるが。

そもそもあれつて石油で出来てるんだっけ? その程度の知識である。この世界では石油があるのだろうか?

魔王『あすふあると、なるモノは無いな』

だから困ってるんだ

黙り込んだ僕に殿下が「どうしました?」と聞く。
「うへん」とうなつていた僕は頭をかきながら

僕「本当なら街道の整備をしたほうが良いこと言つんだけど、時間も
お金も莫大に掛かりそつなので困ってる
「る」とつけてる

翁「街道の整備だと?」

僕は魔王に伝えたように街道を整備するメリットを伝える。
それを聞いた殿下と翁は「なるほど…」と言つと翁は鈴を鳴らし部
下を呼ぶ。

そして「内務大臣達を呼ぶよ!」「元気」と伝えた。

すぐに爺が「どうしましたかな」と他の内務官と共に姿を現す。

翁は街道の話すると爺も「なるほど」と腕を組んだ。

僕「いや来て貰つて申し訳ないけど、石畳だと時間もお金も掛かり
すぎるので現実的じゃないんですよ」

爺「確かに時間は掛かりますが一考の余地はありますな

翁「確かに街道を整える事は国を豊かにする一步かも知れん」

僕「因みに王都から国境までの道一本に掛かる時間と費用はどうぐれく

らいか算出できますか?」

すぐに内務官たちが地図を見比べながら話し合いだす。

それを見ながら翁に「他にも何か思ついた事はないですか?」と言つて来る。

取り合えず「実現可能かどうかは分かりませんが」と思つた事を言う。

僕「街道にもう少し兵士の駐在所を作つても良いのでは?」

街道を旅する場合に野営をする場所は大抵決まってくる。

そこに塀の駐在所を作るのだ。

一つの国境から王都までの距離と、人と馬車の一日の走行距離を簡単に出し適当に丸をつける。

そこに簡単な小屋を建てて駐在させるのだ。

小屋の兵士は王都側と国境側からそれぞれ5名ずつ、一日前きに一箇所移動していく。

一日田を移動なら一日田は小屋で待機をし周りを巡回するのである。毎日5名ずつ送り出す事により各小屋には王都と国境から来た10名の待機者と、その日新しく着た10名で夜には20名になる。そして翌日には前日待機していた10名がそれぞれ5名ずつ隣の小屋に移動する。

そして新たにきた10名でまだ20名となる、といつ考へだ。

これにより街道を今より安全に通過できる上に、兵がいるなり野営も安心だろうと思つたのだ。

翁「一つの街道に兵が500程か…」

僕「まあ全部は規模が大きすぎるんで国境と王都の間だけでも出来
たらいいのでは?」

翁「4本の街道で約2000…出来ない事も無いな」

翁は現在國中を回つてゐる領主息子の率いる兵の数がそれくらいだ
と言つ。

ある程度の田処が付いたら、その者達の再就職先として良いかもし
れないというのだ。

小屋は簡易の小屋で良いと思つと告げる。

さすがに屋根だけとかだと兵士に氣の毒なので最低限休める家であ
つて欲しいが、街道の整備をするなら移動距離も変わるだろうし、
何かあつた場合に取り壊せるような建物が良いといつ話をする。

他にも教育の話をした。

これは市井の者などは生まれた時点で将来が決まつてゐる事が多い。
教育を受ける事が出来て職業を選択できるのはある程度裕福な層だ
けだ。

市井の者達にも簡単な教育として義務教育を受けさせる。
それは識字率を上げる為でもあるが、簡単な教育の中からさらに勉
強を望む者はさらに高度な教育を受けさせることも出来る。

そして勉強する意思や能力があつても家の事情で教育を受ける事が出来ないような者に対しては国が援助する。

そうすれば人材も育ち優秀な文官を育てる事により国も良くなるだろつ。

殿下「しかし国の援助を学問に使わない者も出でるのでは?」

僕「現金で渡さなければ良いんですよ」

全寮制の学校を作り、能力があり勉強したい者はそこに通わせる。進級をと卒業を実力制にすれば援助に値するか判断できる。厳しいようだが能力の無い者は残念ながら進級も出来ないし援助も切られる。

卒業後は必ず城で文官として働いて貰う事が援助の条件である。
「折角育てたのに他の国とかに行かれても困りますからね」と言つと翁は「確かに」と笑つた。

僕「問題は派閥を作られたりエリート思考ですが、それも幼い頃からの教育で何とかなるでしょう」

翁「はははっ?えりーとじい?」

僕「派閥は何ていうか簡単に言つと、最初に自分の仲間を作ります。自分が卒業した後も残つた仲間が新たな仲間を作ると言つのを繰り返し、仕事に付いた後も仲間達で結託して物事を動かそうとする集団ですよ」

翁「ああ、昔の貴族が我が物顔でいた次代の王宮がそひじやつたな

エリート思考に付いても説明する。

これこそ貴族の思考なので説明は簡単で、それを優秀な成績で卒業した者達である自分はすごい、という事に置き換えたなら終わりだ。

翁「しかし義務教育と言つのは実行するのは難しくないか？」

僕「そうですね。まずは王都で子どもを対象に行つてはどうでしょうか？」

殿下「子どもですか？」

僕「1年程で構わないと思います。文字の読み書きと簡単な計算を教えるのです」

殿下「王都だけでも何千人といつ子どもが居ますが？」

僕「成人前から数えで8つくらいの子どもで何人くらいでしそう？」

翁「やあのう。2、3000は居るのではないか？」

僕「全員は無理ですか？」

翁「教える者の数が圧倒的に足りん」

確かに子どもの数がある。

僕「では最初は公募しましょ」

王都に「希望する対象の年齢の子どもは無料で読み書きや計算を教える」と触れを出す。

志願者の数次第だが、多ければ裕福な家庭など自分達で学費を出せるような所は対象外にする。

その中からやる気がある者は学校に入る。

学校の授業の一環として下の者に勉強を教えるようにする。

そつすれば義務教育も行える上に、教える側の人間性も見れる。

僕「ちよつと強引過ぎる論法ですかね？」

翁「まあ人間性云々は別として、勉強を学生が教えるのはアリかも知れんな」

殿下「そうですね。勉強を教える教師の数も確保できますし」

翁「それに金もかかりませんしな」

そう言つと翁が笑う。

学校の卒業生は王城へ上がる。

途中で学校をやめる者も能力によつては教師として子ども達に勉強を教える。

もしくは他の町に派遣したり出来るかもしれない。

そして他の村でも勉強を教えてやる気と能力のある者だけ王都に呼

んで学校に入れれば良い。

翁「良い事すべめのよつな気がするな」

僕「まあ毎年莫大なお金が掛かりますから、そりとも言えませんが」

翁「確かにの…」

僕「将来的に何かしらの技術も教えることが出来れば工業や商業なども発展するかもしませんね」

翁「ほつ」

僕「色々な所から職人を引き抜き教える。育つた者達が次代を育てたり國のどこかで腕を振るつ。そつすれば國は発展しますよ」

爺「それはすゞい」

僕「それには街道整備より物凄い時間が掛かりますけどね。ただ将来的には色々な技術を学べる学校が國の最大の産業になり、國を守る事に繋がりますよ」

殿下「学校がですか?」

僕「どいつも高い技術や教育を受ける事が出来る用になれば他国からも入学希望者が出てくるでしょう。」

「さうなるにはどれだけの月日が掛かるか分かりませんが」と言つ。

翁「しかし無料なら人が着ても金が掛かるだけだろ？」「

僕「学費をとれば良いじゃないですか？」

王子「学費を取るのですか？」

僕「国の援助を受ける権利はこの国の国民で、卒業後に国で働く人だけです。他国に戻る人は対象外で良いでしょ？」「

殿下「なるほど」

翁「して、國を守るとは？」

僕「各国からの入学希望者は毎年学費を取ります。と言つ事はそれなりの裕福な家庭か、身分のある家の子弟でしょ？」「

その子ども達が人質となり容易に手が出せないと言つのだ。

翁「それは…面白いの？」「

僕「何度も言いますが、そうなるまでかなりの時間が掛かります」

殿下「しかし一考の余地はありますね」

そう言つと一人の文官を見る。

文官は僕のいう事を必死で文字に起こしていたのだ。

先程の街道の警備についても別の文官が同じように書き起こしていた。

実際にやるかどうか分からぬのに、本当に「苦勞様です。

翁「まだあるか？」

翁が期待して言う。

「そんなに思いつかないよ、と思いながら思い出した事があつて、「孤みな児じ…」と言つ。

爺「孤児？」

僕「王都の裏路地に行くと多いと聞きます」

殿下「残念ながら数は減りません」

僕「孤児というかスラムに住む人を国が保護しましょ？」

翁「何と？」

孤児が生きる為に犯罪を犯し、それがさらに孤児の迫害へとつながり犯罪を犯すという悪循環に繋がる。
だから国で全員保護するのだ。

翁「全員となー!? それこそ読み書きを教える子どもの比では無いぞ
?」

僕「ただ保護するだけではあつません」

保護した子供達に居食住を保障する代わりに労働をしてもらひ。もちろん年齢にあつた労働をしてもらひ、一部を積み立て一部を渡す。

農作業を手伝わせたり、王城の下働きをさせたり。

そして教育も受けさせる。

兵士になりたい者は兵士の訓練を受けさせても良い。

もしかしたら騎士になるくらいの腕の者も居るかも知れない。

ある程度の年齢に達したら就職先を探す。

今まで通り働いたりするかもしねないが、一定年齢を超えると自立してもいい。

自立の資金は今まで働いて積み立てたお金を渡し、それで住む家を探す。

僕「そうすれば……まあ孤児も犯罪も減るし、労働力も増える……かな
?」

翁「なるほどいのう」

僕「何度も言つたナビ、どれもお金が掛かりますからね

殿下「それでもどれも行いたいですね」

爺「貴族から接収したので結構な資金があるとは言え……」

さすがに全部を行つるのは無理である。

殿下「優先順位をつけるとしたら若ならびつします?」

僕「そうですね…孤児、街道警備、街道整備、学校?いや、孤児、学校、街道警備、街道整備?」

爺「何にせよ孤児が一番最初なのですか?」

孤児を含むスラムに住む者たちを保護する事で大人は街道整備などの仕事が出来る。

他の女性や子どもは王都の外で農業を行わせれば、食料事情もよくなるだろう。

勉強を教える事で子どもに勉強を教える人材を育てる事が出来る。

僕「だからスラム街を何とかするのが最優先ですね」

翁「ふむ」

僕「一遍には無理なので、順を追つてやつていけば、まあ無理は無いかと」

翁「順……」

まずスラムの人たちに説明をちゃんとして保護する。

もちろん、会いたいときにはすぐ逢えるようにする事で安心感を与える。

同時に病人や妊婦や老人も保護する。

そして残った大人達に話をし、職を斡旋する。

そして住民が全員納得した地域からスラムの家を取り壊して集合住宅を立てる。

そしてそこに元々住んでいたスラムの人たちが住めるように手配する。

密集したスラム街をなくし道の広い区画を作り、何箇所か兵の詰め所を作る。

僕「何区画か整備をし綺麗な家にそのまま住んでもらえる事が分かれば、どこも自分達も同じようにして欲しいと思つでしょう」

爺「しかしそれこそ莫大な金がかかるな」

僕「まあそこは家賃でどうにかできるみつたればいいと思いますよ」

殿下「家賃を取るのですか?」

僕「国営の集合住宅ですし、仕事も斡旋しますしね。それに国が住む所と仕事を斡旋してくれると噂が広まれば、色々な所から人が集まると思いますよ」

翁「それは…怖いな」

僕「まあ人材も集まると考えるしかないですね。街道の整理や開墾などやれる事は色々ありますしね」

翁「開墾はどこを行つのだ?」

僕「王都の隣にも沢山平原はあるじゃないですか」

さすがに全ては無理でも開墾できる場所は残つてゐる。

人が増える事を見越して農作物を育てて置く事は間違いではないだらう。

余れば輸出すればいい。

働いてお金が溜まれば良い所に住む為に引っ越す者が出でくるだらう。

開いた所に新しい人を住ませれば良い。

考え込んだ殿下たちに街道整備の時間や予算を計算していた文官たちが「試算できました」と言つた。

4本の街道は長さがまちまちであるが、一番長い街道で試算した。
王都側と国境側両方から工事を行つとして、各200名程度が作業の効率的に限界と予想。

両方から工事をして早くても2月といった所だと云つ。

僕「作業工程を3工程に分ければもう少し早くなりますよ」

街道を掘り砂利を敷き詰め平らにしてレンガを敷き詰める。
それと一緒に行おうとするから時間が掛かるのである。

街道を掘る物、砂利を強い詰めて平坦にする者、レンガを敷き詰めていく者、に分ければ問題ない。しかもそれを道の片側だけ行っていく。

翁「片側？」

僕「一遍に全部すると馬車が通った際に作業が止まる。片方だけなら開いてるほうを通ればよいのだ」

そして片方がある程度進んだらもう半分も作業を始める。そうしたら少しばらくなるだろう。

「それなら2ヶ月掛からないかも知れません」と文官たちが言つ。

僕「ただレンガが足りるかどうか」

翁「國中の釜を使えば何とかなるだろう」

殿下「やりますか？」

翁「やりたいが、本当に実現可能かまずは検証が必要ですま」

爺「早速、本格的に検討させます。何から始めますか？」

殿下「若の言つどおり、スラム街と街道整備ですね」

翁「街道警備に関してはすぐにでも行えるだろう」

「明日の会議まではある程度結果を持つてきます」と爺はいつと文官たちを引き連れて自分達の執務室へ帰つていった。

僕も「さすがにもう思いつきましたよ」と翁が何か言ひ前に言つ。

「これ以上言われても一遍には出来んよ」と笑つと「お金も時間も掛からないことなら歓迎じゃがな」と言つ。

僕は肩をすくめ「もう少しここに避難させてくださいね」と言つと「お好きだけいいですよ」と殿下が笑つた。

第48話 内政（後書き）

誤字修正

中間達 仲間達

街道を掘る物 街道を掘る者

避難させてくださいね 避難させてくださいね

余り あまり

第49話 負傷

久々に王都を出る。
別に式の準備に辟易してでは無い。

ではない！

魔王『何を言つてゐる』

そんな事実は無い！

あくまでも今回は姫の騎士団の実戦演習だ。

演習と言つても国境線付近に住み着いている魔物の討伐任務である。國中を回っている領主息子に手こじな相手を発見し次第、連絡をくれるようにお願いしていたのだ。

姫と妖精少女は近衛騎士団に任せ全員での出陣となる。

僕「で、何で白の騎士団団長と一緒に来るのですか？」

横を10名ほどの騎士を連れて走る白の騎士団団長に向ひ。

白の騎士団団長「初の実戦ですから、補佐として付いてきました」

「よつぽどの事が無い限り手は出しませんよ」と笑う。

白の騎士団が居ると緊張感が無いんだけど…まあいいか。

2日程走り国境付近の村に着く。

駐屯していた領主息子に簡単な挨拶をした後に話を聞く。

魔物は最近になって現れたらしい。

山に入った者たち5人の内4人と同行していた犬が殺され、残りの一人も逃げ帰ってきたが傷が元で亡くなつたそうだ。

その帰還した者がゴブリンの群れに襲われたと言つていたようだ。10匹以上居たと言つていたが錯乱状態であつた為に正確な数は分からぬが、逃げ帰る事が出来たという事からもそれ程多くは無かつた可能性が高い。

領主息子「現場に向かつてみたところ遺体が無造作に打ち捨てられている状態で身包みは剥がされていてませんでしたが犬の死体はありませんでした」

身包みを剥いでいるので野党の可能性は低く、人肉には見向きもせずに犬の死骸だけ持つて帰つたという事はゴブリンあたりでほぼ間違いないだろう。

姫の騎士団を集める情報を伝えて方針を話す。

僕「この中にゴブリンとの戦闘経験のある者は?」

騎士団の過半数が手を上げる。

僕「ボブは？」

各隊で数名と所だ。

僕「それ以外のゴブは？」

誰も手を上げない。

まあホブゴブリンと戦闘経験がある者が隊に居れば、それ以外のゴブリンはシャーマンかロードだと分かるだろう。
ゴブリンロードは一回りくらい大きさ違うし。

僕「では第一～第三は美女さんの指揮の下で付近の索敵。第四は僕といつでも援護しにいけるように後方待機」

注意事項を伝える。

ゴブリンを見かけても安易に戦闘を行わない。
相手が自分達と同数が多い場合は戦闘を避ける。

少ない場合は気が付かれないように後をつけ行動を監視、出来れば巣の場所を特定する。

伝令を出す場合は2人以上で出し、決して一人で行動しない。

敵に気付かれた時は慌てずに対応し他の敵に知らせないようにする。数が多い場合や巣へ仲間を呼びに行つて危険と判断した場合は笛を吹いて他の隊に知らせる。

巣を見つけても単独で攻撃は仕掛けない。
捜索時間は半時（訳1時間）で、何も無くてもその時間には必ず戻る。

全員が頷くのを確認し出発する。

白の騎士団団長は付いてこようとしたが、それでは姫の騎士団団員のために為らないと丁重にお断りした。

実際には「殿下や翁から僕を守れと言われているよつのは理解しますが、こうも監視される様なら考えがありますよ?」と云えたら「分かりました。無茶だけしないで下さい」と苦笑した。

どうせ付いて来るんだろうけど。

捜索が始まつて数刻。

未だに遭遇などの報告は来ない。

森の外れとは言え警戒を怠るわけには行かず、第四班の隊員からは緊張感がありありと感じられる。

「どうにかこの緊張を解せないかな

少し考えて世間話を装つて、その中で落ち着いている第四隊隊長に話しかける。

僕「第四隊隊長はゴブリン討伐はいつ行ったの？」

第四隊隊長「兵士になつたばかりの時に巡回中に出会いました」

僕「それは…運が無かつたね」

第四隊隊長「ゴブリンが4匹だけしかおらず、私達は10名程居たのであつという間に勝負は付きました。でも私は怖くて剣を構えて震えてるだけでした」

そう言つと第四隊隊長は苦笑した。

第四隊隊長「その後、巣は別の者達が討伐をしたために結局私は何もせずに終わりましたけどね」

僕「でも今は違うでしょ？」

第4隊隊長は僕の言葉に「そうですね」とだけいった後に、僕の目を見て意図を悟ったのか「隊長と副隊長に鍛えられましたので、ゴブリンロードでも負ける気はしません」と笑う。

さすが隊長、わかつてくれたか

それを聞いた他の隊員たちが頷いた。

第四隊隊長の言葉に他の団員も緊張が少し解けたようだ。

まあ今までの訓練を見る限り、余程の事が無い限りは大丈夫だろうけど

そう思つた時に笛の音が森に響く。
その後に長い音が2回鳴らされる。

2回は第一隊が敵と遭遇中だ。

有力貴族の娘の隊か！

僕は「いくぞ！遅れるなー！」と言つと笛の音のした方へと走り出す。

森の中を走り抜けて少し行くと争う音が聞こえてきた。

「まずは状況の確認、そして味方の安全の確保！1人で突っ込みます
2・3人で一匹を狙え！」と言つと森が開けて戦いの場に出る。

開けた視界に目に飛び込んできた惨状に舌打ちをする。

美女さんと第一隊、第三隊は現場に既に到着し戦闘を繰り広げている。

しかしそれは戦闘と言える様なものではなかつた。

美女さんが最前線でゴブリンに囲まれている。

そこから離れた位置、美女さんの後方にいる騎士団達もゴブリンと戦つているが、その数は第一～第三の半数にも満たない。

半数上がゴブリンに押されて戦闘不能になつていて

一部のメンバーでゴブリンを押さえている間に倒れている団員を負傷している団員が後方へ移送している。

そこへ側面から僕が率いる第四隊が到着したのだ。

数が多いことは言え、ゴブリンと一緒に何故こんなに…

魔王『ゴブリンシャーマンが一匹居る…』

見るとゴブリンシャーマンが放つた魔法を美女さんが叩き落している。

しかしあべてを防ぎきることは出来ず、魔法やその爆風で隊員はやられたようだ。

僕は助太刀しようとしていた美女さんの方ではなくゴブリンシャー

マンに向かつて走る。

後ろで白の騎士団団長が「援護しろ!」と叫んでいるのが聞こえた。
「やはり来ていた」と思つことはなく、ただ単純に「これで数でも
負けないだろ?」とだけ思った。

道を塞いで立ちふさがるゴブリンを斬り裂きシャーマンの魔法を剣
に魔力を込めて弾く。

そして逃げようとしたシャーマンの首を跳ね飛ばした。
すぐにもう一匹のシャーマンを田指して走る。

此方に気が付いたシャーマンが魔法を連発してきたが止まらない僕
に恐れをなしたのか、背を向けて逃げようとするシャーマンにナイ
フを投げて足止めをする。

そして追いすがるスピードのまま振り返りつつしたシャーマンの肩
から袈裟斬りに斬り落とす。
これで魔法は無くなつた。

後はゴブリンロード2体とホブゴブリンが5体、ゴブリンが7体だ。
ゴブリンは騎士達に向かつていつたが第四隊と白の騎士団団長達
の援軍で撃退できそうだ。

ゴブリンロードとホブゴブリンを一人で相手にしていた美女さんも
魔法の攻撃がなくなつた事により見る見る間に数を減らしていく。

僕はゴブリンロードの一匹の後ろからか近づく。

ホブゴブリンの声で僕に気が付いたのか、振り返りつつしたゴブリ
ンロードの腕を美女さんが斬り落とす。

痛みに怒り美女さんの方を向こうとした所を魔力を込めた剣で胴を
真つ二つにする。

僕と美女さん v/s ゴブリンロードとホブゴブリン 2匹。

勝敗は一瞬で決した。

戦闘が終わった後に第四隊隊長に負傷者の状態を確認するように指示を出す。

白の騎士団団長は部下の騎士団員に領主息子に伝令を送る指示をするとすぐに4名の騎士が走り去っていく。

そして自分は周囲の警戒をする為に騎士達と共に行動してしまった。すぐに4名の騎士が走り去っていく。

それを横目に僕と美女さんはゴブリンの巣に入る。

何かの巣を彫り広げたような巣は以外と広い。

だが巣に居たゴブリンは全て出ていたようで新たに出来わす事はなかつた。

一つの広い空間で「ゴブリンの子どもを6匹見つけるが、僕は何も言わずには6匹を始末した。

奥に貴金属などがあつたが今はそんなの相手にしていられないので放置する。

巣の捜索にはそう時間が掛からなかつた。

巣を出て状況確認する。

今回の戦闘による被害は、重症は19名、内危険な状態の者が1名。

僕「どうこう状態だー？」

駆けつけながら聞くと「シャーマンの魔法の直撃を受け、全員に火傷を負つてます」と第四隊隊長が言つ。

美女さんが「名は？」と聞く前に「第一隊隊長です」と答えた。

僕は「そうか」とだけ言つと地面に寝かされている有力貴族の娘の

横に跪く。

有力貴族の娘は息も絶えだえという状態で倒れていた。
近くに居た第二隊隊員の一人に「状況を」と言つと、声を詰まらせながら説明した。

巣を発見した第一隊は巣を発見の伝令2名を出した後に草陰から状況を確認していた。

その時はまだ巣の中の状況は良く分からず、巣の前にゴブリンが3匹居ただけだったようだ。

すぐにホブゴブリンとゴブリン4匹が戻ってきた。

そしてホブゴブリンが手に持っていたものを地面に投げ捨てる、それをゴブリンたちが寄つてたかって蹴りだしたのだ。

それが幼い人間の子どもだという事が分かつた瞬間に誰かが小さく息を呑んだ。

それは本当に小さかったのも関わらずゴブリンには届いてしまったようだ、ホブゴブリンと2匹のゴブリンが近づいてきた。

有力貴族の娘は小声で「3匹を撃退後に子どもを保護して逃げる。笛は巣の中にいるゴブリンに気付かれるのでギリギリまで吹かないように」と指示を出し、第一隊隊員4名も頷いた。

そしてホブゴブリン達が近づいた所を5人は飛び出しホブゴブリンとゴブリンを仕留める。

そしてぐつたりしている子どもの周りのゴブリンに斬りかかる。

一人の隊員（今話している隊員）が子どもを抱きかかえ「息はあります」と言うと子どもを抱えて駆け出した。

周囲にいたゴブリンも打ち倒して逃げようとした所で、巣の入り口から魔法が飛んでき。

子どもを抱えて森の中へと入るつとしている騎士団員はそれに気が付いておらず、背後から魔法の直撃を受けそうになつた所を有力貴族の娘が体を張つて止めたそうだ。

倒れこむ有力貴族の娘を守るために他の3名はその場に残り、巣から出てくるゴブリンと対峙しながら笛を吹いたそうだ。

その後、すぐに美女さんと第三隊が駆けつけた。

「魔法攻撃です！」と言つと状況を確認した美女さん負傷者を後方へ連れて引くように指示すると、ゴブリンを出来るだけひきつける為に真っ只中に飛び込んでいった。

第一隊が駆けつけるまでに数名の騎士団員が魔法の爆風などで負傷していた。

そして迫り来るゴブリンを押しと留めながら負傷者を後方へ移送している所に僕と第四隊が到着したのだ。

僕「その子どもは？」

美女さん「全身の打撲と骨折。意識を失っていますが、命に別状はないようです」

僕はそれを聞いて頷くと有力貴族の娘に向き直る。

全身の火傷はすぐに治療しないと命に関わる。

しかしこの世界には火傷に対する医療技術など確立していない。

神聖魔法に火傷の治療があるが使えるのは神官だけでここには居ない。

魔王『つまり有力貴族の娘は助からない』

っ！

有力貴族の娘が薄く目を開け何か呟く。

耳を近づけると「…ども…は?」と聞いた。

僕は有力貴族の娘を見ると「命に別状は無い」と言った。

有力貴族の娘が僕を見つめる。

それを見つめ返し「よくやつた」と言つと目がかすかに微笑んでそのまま閉じた。

僕はそれを無表情に見やる。

そして横に居た第四隊隊長に「他の者の容態は?」と聞いた。

それを聞いて何かを言おうとした第四隊隊長は僕の目を見ると静かに「命に別状はありません」と言つた。

有力貴族の娘の意識が無くなり呼吸が弱くなつてくる。

誰も何も言わずにそれを見つめる。

僕も有力貴族の娘の手に手を重ねながら見つめる。

魔王『この火傷では夜中まで持つまい』

自分がもつと用心をして少數行動をさせなければ有力貴族の娘はこんな目にあわなかつたかもしれない。

そう思つと田の前が真つ暗になる思いがした。

第50話 美女

魔王『…………か！聞こえているのか！』

……？

魔王『時間が無い、小娘を助けたくば我の言つとおりにしろ！』

何を……

魔王『早く！』

そつ言つと美女を呼べと叫んだ。

同時通訳で言葉を選ぶほど頭が回っていない僕は魔王の言葉をそのまま言つ。

僕（魔王）「美女、封じられし力を我の名において時はなつ」

美女さんは頷くと僕に跪き腕を組んで目を閉じる。

魔王が呪文を唱えるのを同時通訳で唱えると魔王の言われるままに美女さんに口付けをした。

麻痺している僕の思考は有力貴族の娘を助けたい、ただその気持ちだけで魔王の言葉にしたがつていい僕は何をしているのか理解していない。

呆然とその光景を見詰めていた騎士団の面々の前で美女さんが僕の口付けを受け入れる。

何が起こったという訳でもない。

ただそれだけだ。

美女さんは目を開け立ち上ると有力貴族の横に両膝を凭いて腕を組む。

そして何かを呟きだした。

火傷により風前の灯の有力貴族の娘の横で美女さんが一心不乱に祈りを捧げる。

笑顔以外の表情を見るのは初めてかもしてない。

あまりの事に現実逃避している僕はそんな事を考えていた。

有力貴族の娘が淡く光る。

それを見た一人が「神聖…魔法？」と呟いた。

美女さんの祈りは続き有力貴族の娘の顔の火傷が少しづつ小さくなつていく。

魔王『…何とかなるかもしない』

魔王の言葉が良く分からぬ。

ただ美女さんの祈りが有力貴族の娘を救うようだ。

美女さんは祈り続け、有力貴族の娘は光の膜に覆われていく。

僕は美女さんの背後からそれを見下ろしながら目を閉じ心の中で有力貴族の娘が助かるように一心に念じた。

どれくらい続いたのだろうか。

美女さんが祈りをやめると両手を地面に叩き荒い息を吐く。

僕は「一人に駆け寄ると美女さんが「なん……とかなりました」とダルそうに呟いた。

有力貴族の娘を見ると全身にあつた火傷が消えている。苦しそうだつた呼吸も今は落ち着いている。

魔王『火傷は治療ができ助かつたようだが体力が戻るわけではない。当面は意識を取り戻すまい』

僕はそれを聞いて顔を手で覆つた。

嬉しさで泣き叫びたい所だが他の団員の手前、ぐつと堪える。する遠くから「若!」と叫ぶ白の騎士団団長と領主息子の声が聞こえてきた。

その瞬間に僕はハツとする。

有力貴族の娘は全身を火傷しており、全裸に近いというより服が無い。つまり全裸だ。

などと良く分からぬ説明をするくらい混乱した。

有力貴族の娘の裸体を他の男に見せるわけには行かない。

僕はすぐに羽織っていた姫の騎士団団長の証のマントを外すと有力貴族の娘をそれで包んだ。

駆けつけた領主息子は有力貴族の娘が無事だと聞いて胸を撫で下ろす。伝令から大火傷と聞いて急いできだらしい。

もしもの時にと思って白の騎士団団長が呼び寄せていた法術師も一緒に連れてきていた。

今は他の姫に騎士団団員に治療法術を唱えている。

美女さんのモノとは違ひ効力は小さいようだ。

だが血が止まり傷口がふさがつてゐるのを見ると、それだけでもありがたかつた。

馬車も共に來ていたので、有力貴族の娘を馬車に横たえる。そして疲労で立てない美女さんを抱えて馬車に運ぶ。

美女さんの状態を見て驚きを隠せない白の騎士団団長と領主息子に「一応確認しましたが、後をお願いします」と言うと領主息子は部下に付近と巣の搜索を命ずる。

「巣は既に搜索済み」と説明するのも面倒なううに精神的に疲れていた。

美女さんは運ぶ途中に僕の腕の中で少し身じろぎをすると「恥ずかしいですね」と弱々しく微笑んだ。

僕は美女さんを有力貴族の娘の横に座らせる。

魔王が伝えろというので小声で「魔王が容態が落ち着いたら話があると言つてます」と言つと美女さんは「分かりました」と頷いて目を閉じた。

他の馬車に重症の騎士団員を運ぶのを手伝つ。

相手が女性とは言え、人一人を抱きかかえるのは女性同士では難しいものもある。

しかも兵士達は女性にどう触れて良いのか分からぬ、という感じで惑つてゐる。

白の騎士団団長なら気にせず手伝つてくれるだろうが領主息子と騎士隊長と共にゴブリンたちの死体を検分している。だから僕が自分で歩けない者を全員運んだ。

騎士に叙任した時に覚悟していたつもりだったが、いざ女性の体に跡が残る可能性の高い傷があるのを見ると息をのんでしまう。

そんな僕に騎士団員達は「気しないで下さい」「有力貴族の娘が

助かつてよかつた」と異口同音に言葉を掛けてくれる。

中には「傷が残つたら貰つてくださいね」と笑う騎士団団員もいたが、色々と一杯で頷く事しか出来なかつた。

怪我人を馬車に乗せ、馬に乗れる者は騎乗し出発する。

白の騎士団団長と騎士団員が護衛に付いて近くの村を日指す。

領主息子と騎士隊長はもう少し付近の搜索と巣の破壊を行つてから戻る予定のようだ。

村に戻る頃には日が落ちかけていた。

村の村長の家を借り受けて有力貴族の娘と美女さんを休ませ、すぐに姫の騎士団員28名を居間に呼ぶ。

全員の顔を見ながら「有力貴族の娘の怪我と美女さんの力については部外秘で」と通達した。

有力貴族の娘は大火傷も負わなかつた。

だから美女さんも治療なんか行わなかつた。

「話せる時が来たら、ここに居る皆には必ず話す」と言つと姫の騎士団団員全員が頷いた。

助けた子どもは近くの村に住む子どもで、他の子ども達と森に遊びに入りゴブリンに捕まつたようだ。

腕の骨折は直せないようだつたが神官が治療を行い裂傷は治療をした。

意識を取り戻した時には錯乱状態だつたが、姫の騎士団の一人が抱きしめて「大丈夫」と言い続けたら落ち着いて寝てしまつた。

そして家族が心配しているだろうと言う事で白の騎士団員が責任を

持つて子どもの村まで送り届ける事になつた。

そして姫の騎士団達に「今日は見張りは白の騎士団員が行つてくれるので、当直は無し。全員休んでくれ」と言って解散した。
怪我が酷い者はベッドで、それ以外の者は村長の家の周りに張られた天幕で休んだ。

翌日、美女さんは一日ベッドの上で過ごした。

夕方には体を起こす事は出来たがベッドを離れるまでは回復しなかつた。

有力貴族の娘は眠り続けている。

美女さんが「消耗した体力を回復している状態ですから、明日のは意識を取り戻しますよ」と言つてくれたので一安心である。
有力貴族の娘が目覚めておらず美女さんもベッドを出れない上に殆どの姫の騎士団員がどこかしら負傷をしているのでもう一日休んでいく事になつた。

昼過ぎ、白の騎士団団長が領主息子と騎士隊長を連れて僕を訪ねた。
ゴブリンの検分結果を伝えにきたらしい。

美女さんはまだベッドから離れられないの第一、第二、第四隊の隊長を呼び、一緒に話を聞かせる。

ゴブリンの数は「ゴブリンロード2匹、「ゴブリンシャーマン2匹、ホブゴブリン17匹、ゴブリン31匹いたそうだ。

赤の騎士団団長が「我々の出動する規模のゴブリン族です」と言つた。

本来ならゴブリンロード一人でも一般兵には荷が重い。

それでも僕たちが到着するまでにホブゴブリンとゴブリンを半数近く倒していた計算になる。

ゴブリンたちが住み着いてそれ程の時は立つていなかつた様だが、近隣の村には数日前から小さな被害は出て居たようだ。

ただこの規模のゴブリン族が何故住処を移動してきたのかは分からぬ。

国境にそびえる山脈は険しく人が入る事が少ない。

その為、魔獸や魔物が多く生息している土地ではあり、たまに山を降りた魔獸や魔物による被害はあつたが、ここまで大規模の住処の移動は聞いた事が無いそうだ。

すぐに国王には状況を説明し、討伐済みだが山脈付近の監視の強化と調査が必要だと言う旨の伝令は走らせているらしい。

白の騎士団長は有力貴族の娘が大火傷を負つていていたのを見ていたとは思わない。

それならあの場で何かしらの行動を起こしてはいたはずだ。だが部下の騎士が目撃していくて後で伝えた可能性はある。

しかし傷が無いが眠り続ける有力貴族の娘や疲弊した美女さんの話を聞いて何かを察したのか何も言わないので黙ってくれているらしい。

夜に美女さんの部屋に行く。

美女さんは僕が来る事を見越していたのだろう。

ベッドの上で身を起こして待っていた。

僕「体の調子はどうですか?」

美女さん「ほほ大丈夫です。大事をとつて寝ているだけで、普通に歩いたりも可能ですよ」

僕は美女さんのベッドの脇の椅子に腰掛けると美女さんに向かって頭を下げる。

僕「有力貴族の娘を助けてくれてありがとうございます」

僕が頭を下げる、「ありがとうございます」と再度言つと少し間をあけて「頭を上げてください」と美女さんが言つ。

僕はその言葉に上げていた頭を元に戻すと美女さんはいつもの笑顔ではない真剣な顔で「話は聞きましたか?」と聞いてきた。
多分、魔王の事を指して言つてているのだろうが特に何も聞いていないので「いいえ」と言つ。

美女さんは「そうですか…」と言つと魔王と話をさせて欲しいと言

つた。

同時通訳で話してくれと囁うのだ。

いちいち丁寧な口調に戾さずにそのまま話して欲しいらしい。

美女さん「魔王」

僕（魔王）「『なんだ』」

美女さん「お久しぶりですね」

僕（魔王）「『我はずっと見てたがな』」

魔王の言葉を代弁すると「そりですね」と美女さんは笑った。

美女さん「何故、事情を説明しないのですか？」

僕（魔王）「『面倒でな』」

美女さん「貴方らしさと言えば貴方らしさですが、卑怯ですよ」

「説明を私に全部させよひなんて」と囁く美女さんに魔王が笑う。

何だろ？美女さんの雰囲気は魔王の従者のそれではない気がする

僕（魔王）「『当たり前であらう。美女は我が無理やり従者にした

(のだ)うええええええええええ…?』

美女さん「そうですね。無理やり従者にされました」

僕「何で美女さん程の人が何故魔王なんかに…」

美女さん「魔王に敗れたからです」

美女さんと魔王は敵同士だつたそうだ。

そして戦いの最中で美女さんと魔王は相打ちとなつた。
だが最後の最後で魔王の自力が上まわり美女さんは倒れ、魔王が立つていた。

意識が飛びそつになつてゐる美女さんに魔王は服従の魔法を掛ける。
それは心臓に楔を打つ魔法で、魔王の意に沿わない行動を取ろうとする
と心臓に負担をかけ死に至らせる恐ろしい魔法だ。

しかし魔法が完成した直後に魔王も意識を失い、次に目覚めた時に
は僕が中に入り込んでいて体の自由が利かなかつたそうだ。

美女さんと魔王の過去と、美女さんに対する魔王のあまりの仕打ち
に僕は言葉も無い。

美女さん「私を嬲るつもりだつたのか、それとも…いえ、多分気ま
ぐれで行つたのでしよう」

僕（魔王）「『嬲るなら無抵抗な女より、抵抗するような粹の良い
ほうが好みだな。まあ美女を気に入つたのは確かだが、ただの気ま
ぐれだ』」

思考停止中の僕は魔王の言葉を無意識に口からぼそぼそ述べていた。

美女さん「でしょうね

僕（魔王）「『面白』と思ったのは確かだ」

それを聞くと美女さんは静かに笑った。

美女さんが「若」と何回も呼びかける言葉に意識を取り戻す。

美女さん「若にも関係する事です。しっかりしてください」

僕「え、あ、はい」

僕（魔王）「『全く』だつるさによー」

傍から見たら僕は一人芝居をしている変な奴である。

美女さんは「落ち着いて」と囁つと説明を始めた。

美女さん「あの時、呪文を唱えて私に口付けしましたね」

それを聞いて僕は今更ながらに大それた事に取り乱す。

それを「そういう態度を取られると説明しにくいので落ち着いてください」と言いく

美女さん「アレは服従の契約を解除する呪文と儀式だつたのです」

僕「なるほど。ではあの力は?」

美女さん「あの力は服従の契約時に封印されていた力です」

僕（魔王）「『あの力は神聖魔法の上位魔法だな。世界でも2人しか使えない貴重な魔法だ』」

神法と神聖魔法は違うらしい。

神法は法力を元に神の力を借りる魔法で、神聖魔法は信仰により神の奇跡を起こすらしい。

その神聖魔法の中でも上位に当たる治癒の奇跡を美女さんは使ったらしい。

僕「2人だけ…美女さんってすごいんですね」

僕（魔王）「『そうだな。世界で神に愛された一人、聖神国のお皇女と勇者のみだからな』へえ、聖神国のお皇女と勇者?」

聖神国のお皇女と勇者のみしか使えない上位神聖魔法。そして魔王は僕が入り込む前に大怪我を負つており、その戦つていた相手は勇者…

僕「美女さんは…勇者…なの？」

美女さん「そう呼ばれていました」

魔王『何を今更』

美女さんが「今は違いますよ」と言つ。

今とか昔とかいう二つの問題じやなこと思ひたるだ――

あまりの驚きに僕はもう一度意識を飛ばしかけた。

第50話 美女（後書き）

誤字修正

余り あまり （数箇所修正）

第51話 勇者

僕「何で…黙つてたの？」

美女さん・魔王「『面白そうだったの』」

この2人は似た者同士だ！！

絶句する僕に「魔王もそう答えましたか？」と美女さんが笑うのでコクコクと切れた糸人形のように頷く。

「私は冗談ですよ」と笑うと「貴方を見極めておりました」と言った。

美女さん「初めて若とお会いした時…」と言つのも変ですが、別人格で中には魔王が居ると言つたときは、魔王が私を誑かすために付いている嘘だと思いました

僕「ですよね…」

だが貴方は剣も扱えない。

あれ程の力を持つた魔法も使えない状態でいる僕を見て本当に別人格だと理解したようだ。

「まあ元の魔王とは似ても似つかない性格だったので、本当はもっと早く確信してましたが」と笑う美女さんに「『余計な世話だ』」と僕が代弁する。

美女さん「本当に力を使えない貴方を見て、最低限の力の使い方を教える事にしました」

僕（魔王）「『何故あの時殺さなかつた？』は？殺す？」

魔王が言うには服従の魔法は術者が死んだら解ける。

そして術者に服従させる魔法であるが、それは術者が力を込めたら心臓に負担を与えるという物であつて、心の動きに反応して勝手に負担を与える者ではない。

僕の行動から明らかに使い方を理解していないのを知り、美女さんの使い手なら神聖魔法を封じられていても一瞬で僕の首を落とせただろう。

それなのに何故、今まで何もしなかつたのか？

僕は魔王の言葉を代弁しながら血の気が引く思いがする。

剣術の練習の中で美女さんに剣を突きつけられた事は数知れない。

その一回でも一歩踏み込んでいたら僕はここに居ない。

美女さん「若の人格がどうなるか、というのが躊躇つた一つの要因です」

美女さんありがとう！

美女さん「ただ魔王の命と天秤に掛けた時に、多少の犠牲は…とも思いましたが」

ちょ！！！

「冗談です」と美女さんが笑う。

服従の魔法が解けてからお茶目にも程があるーー

美女さん「元々こんな性格でしたよ?」

僕（魔王）「心が読めるの!?.『おぬしが分かり易すぎなだけだ』悪かつたね!」

そういうえばたまにお茶目な事を言つていたかも知れない。
恐ろしさが先行してお茶目に受け取れなかつただけだ。

美女さん「若と旅をして妖精少女を助けたり、ゴブリン退治、姫との出会いなどを共に行動して、若なら無理に倒す必要はないと思いました」

僕（魔王）「『お前も丸くなつたな』」

美女さん「私は前から変わつてません」

僕（魔王）「『そつだな…甘いといひは変わつてないな。で、だ』」

美女さん「はい?」

僕（魔王）「『封印もある程度解けて神聖魔法も体の負担を無視すれば使えるようになった』全部解けてないの?」

美女さん「はい。やはり解除の魔法が不十分だつた様です」

僕（魔王）「『今なら無理やり解除できるのではないか?』」

美女さん「できますね」

僕（魔王）「『しないのか?』」

美女さん「まだ本調子では無いですからね」

僕（魔王）「『……』何か言つてよー無言を代弁つてどうなの!?.
『だまれ』!..」

美女さん「貴方こそ、今の内に私に止めを刺すなり、再度服従の魔法を掛けるなりしないのですか?」

僕（魔王）「『いやつが許すま(い)』当たり前だよー『と言ひ事だ』」

美女さんは「そうですか…」と言つと黙り込んだ。

そんな美女さんに「ちゃんと解けるなら解いた方がいいのでは?」と伝える。

美女さん「え?」

僕「不十分だつたのならちゃんと解いたほうが良くない?」

美女さん「それは私を抱きたいと言つ事ですか？」

「ノヒトハナニヲイツ テルノ？」

美女さん「口付けによる魔力の注入ではうまく行きませんでした。それならそれ以上の接触が必要になります。」

僕「それが…？」

美女さん「そういう事になりますね」

あんぐりとしている僕に美女さんが笑い出し、「冗談です」と笑う。

美女さん「そんな事、あるわけ無いじゃないですか」

くすくすと笑う美女さんに魔王の笑いも頭の中で重なる。

僕「分かつてて2人とも黙つていたな！？」

美女さん・魔王「『おもしろそつだつたので』」

僕「やつぱり2人は似た者同士だよ」

ガツクリする僕に「また同じ事を聞こましたか」と美女さんが笑う。

美女さん「まあ魔王とは敵味方とはいえ、付き合ひが長いですから」

僕（魔王）「そつなの？」『まあな』

美女さん「私は勇者として前魔王とも戦つてましたからね。小さな頃の魔王にも何度も会つてますし、話した事もあります」

僕（魔王）「『ま、まあ昔の話は良いではないか、今は今後の話（だな…）』どんな感じたんですか？」

美女さん「小やこのに剣を構えて『倒してやるー』と可愛かつたですよ」

僕「『だまれ、言つなー聞くな…』』よく殺されなかつたな…魔王」

美女さん「私は小やな子どもを殺すほど凶暴ではありませんので」

小さな魔王をあじりつたりしながらまたおに会話をしていくたらしく。

美女さん「あの頃の魔王は可愛かつたですよ」

僕（魔王）「『（ \$ × # ）…』へえ～…つてー美女さん
幾つなの？」

セツヒト「女性に年齢を聞いてはいけませんよ」と言った。

僕（魔王）『美女はハーフエルフだ。年齢も80年くらいだったかな？』はーふえるふ！？

美女さん「まだ70年ちょっとです！ハーフエルフなので耳は普通の人と同じで見分けは付かないんですよ」

お父さんがエルフでお母さんが人族の娘だったようだ。
両親はすでに亡くなっているそうだ。

自分の身を守る為に色々な事を学んで居る時に神の声を聞いて神聖魔法を使つようになり、色々あつて勇者になつたそうだ。

小さな頃に会つてゐて、魔王は今はいくつの

魔王『我か？50年ちよつとだ』

50年！！

驚きの新事実！！

僕（魔王）「そうだったんですか』で、今後はどうするべ。』

美女さん「そうですね…」

そつ言うとちよつと考えた美女さんは「正式に若の奥さんになります
しうつか」と言った。

僕「は？」

美女さん「もう一度言います？」

僕「イイエケッ「ウデス」

美女さん「では帰つたら姫様と有力貴族の娘様に言いましょうか

僕「いやいやいやいや

僕は手を横に振つて美女さんを制する。

僕「何? どういう事? 何でそつなるの?』毎回煩いな。勇者の嫁などそういうもんぢやないぞ』

美女さん「魔王の割には言ひ事をいいますね!」

僕「だから待つて!」

美女さん「何なんですか?『若』

僕「おかしくない? ねえ、おかしいよね。この流れ」

美女さん「そうですか？」

僕「いきなりそんなのおかしいよーー?」

美女さん「いきなりではありますけど?」

やつぱり、「詳しい話は姫様と有力貴族の娘様の時に話しますが…
といふ」

美女さん「私の初めてを奪つておきながら、奥さんに迎えるのを嫌
だといったのですか?」

僕（魔王）「は?『酷い奴だ』もう通訳しないからーー」

美女さん「本当に酷い…」

そういうと美女さんは泣き真似をする。
それを見て脱力しながら

僕「美女さん、キャラ変わりすぎ…」

美女さん「今まででは従者でしたので。これからは奥さんとして頑張
ります」

僕「いや、だから…」

美女さん「初めてだつたのに…」

僕「…だから何がなの？？」

そう言つと美女さんは恥ずかしそうに「口付けです」と言つた。
今まで笑顔しか見たことが無かつた美女さんの恥じらいを見て可愛
いときめき

僕「70歳いいいいいいいいいい」

危ない危ない。
騙される所だつた。

美女さん「年齢は言わないで下さい。それに入族に置き換えたま
だ15歳程度です」

僕「年下になるんだ」

美女さん「私もお兄ちゃんと呼びますか？」

僕「いめんなさい。調子が狂うので前と同じ感じでお願いします」

美女さん「それは良かった。あの感じのノリは疲れるので

僕「じゃあしなきゃいいじゃん…！」

ど「うしょ」。

僕の中での美女さん株が大暴落中だ。

美女さん「まあ若の奥さんになる事は置いておいて」

僕「いや、置かずに『ならない』といつ結論を出せりよ。」

美女さん「そこまで嫌がられると本氣で傷つきますよ?」

美女さんがいつもの雰囲気で良く分からない事を言つ。
どうにか「しない」方向に持つていかなくては

僕「そもそも神聖魔法って穢れたらダメなのでは?」

美女さん「ああ、それなら大丈夫です」

僕（魔王）「『確かに処女のほうが神の声を聞きやすい』と言つが、
それは幼い女兒の方が穢れが少ないから、と言つだけだしな。子を
為した女でも神の声を聞く事はある。』 そんなんだ」

美女さんは頷くと「本気で愛し合ひ子を為すための行為は穢れてま
せん。だから大丈夫」という。

美女さん「神の声を聞いた後は、変わらぬ信仰心さえ持ち続ければ

問題ありますん

僕「そんな簡単なものなの?」

美女さん「穢れ無き信仰を持ち続けると言つのは難しい事です。狂信ではいけませんからね」

信仰心にも色々あるらじー。

美女さん「私にかかるている服従の魔法のことですが」

僕「美女さんを抱くと解除されるつてのは嘘なんでしょう?」

美女さん「^{あなたが}強ち嘘では無いんですけどね」

服従の魔法は術者が死ぬ以外でも術者とかけられた者の心の結びつきが強くなつた時に解かれると言われてるらしい。

僕（魔王）「らじー?『服従の魔法を掛けられてまで服従させられて、心の結びつきもあるまい』なるほど」

美女さん「そうですね。ただ、そう言われ云々られてるるのは確かです」

僕（魔王）「『やうだな』」

美女さん「ですので、実際にわざわざ確かめるこい機会でもあります

僕「それとこいれとはー。」

美女さん「まあ王都に戻つてしかやんと話しあわせましょひ」

魔王『王都に戻つたら負けだな』

だよね！

「こいは強く出て話を終わらせて置かないと大変な事になる。
そつ思に言おうと口を開いたところで美女さんが「申し訳ありません」とベッドに横になつた。

美女さん「やはつ本調子じやないので横にならせていただきますね」

僕「ああ、ごめんね。気が付かなくて」

美女さん「お気になれりまし。少し樂しくてはしゃこじしまいました」

美女さんとはしゃべとこいは葉が似合わないと思つていていた時が僕
にもありました

「何か？」そつ皿つとこいダルそつ「何か言われようとしてしませ
んでしたか？」と美女さんが言つ。

僕は「また今度でいいです。無理をしないでゆづくつ休んでください

い」と言つと「ありがとうございます」と美女さんが微笑んだ。
美女さんに「また明日」と言つと部屋を出る。

魔王『はぐらかされたな』

魔王の言葉に振り返る。

美女さんの部屋からかすかな笑い声が聞こえたので扉を開けようと
ノブに手を掛けて思いとどまる。

最後に横になつた時の美女さんは本当に辛そうだった。
もし演技だとしても本調子でないのは本當だろつ。
そう思い扉から離れる。

きつと美女さん程の達人なら、僕の扉の前の葛藤くらい気配でお見
通しなのだろつ。

僕は廊下を少し歩いて一つの扉の前に立つと小さくノックする。
中から「どうぞ」と聞こえたので開けて部屋に入る。

僕が「どうかな?」と聞くと有力貴族の娘のベッドの脇に腰掛けた
姫の騎士団員の一人が「眠っているだけで問題は無いそうです」と
言った。

姫の騎士団員達が二人交代で有力貴族の娘の看病を続けてくれてい
る。

美女さんの見立てでは有力貴族の娘は疲労から眠り続けているだけ
で明日の昼前には目覚めるらしい。

ただ当面は激しい運動は出来ないそうだ。

だから本当は看病など必要ないのだが「目覚めた時に一人なのは心
細いですよ」とみんなが言い交代で付いてくれているのだ。

僕は騎士団員に礼を言つと部屋を後にした。

第51話 勇者（後書き）

誤字修正

余計青世話だ

余計な世話だ

選考して

先行して

幼い女児の法が

幼い女児の方が

第52話 帰還

王都を目指して帰路につく。

有力貴族の娘と美女さんは馬車に乗つての帰還だ。

有力貴族の娘は脣前に一度目を覚ました。

「あの子はどうなったのか」「あの後どうなったのか」を聞くとまた眠りに付いてしまった。

美女さん曰く「疲労困憊なので仕方ないでしょう」との事だ。

その美女さんは歩けるくらいには回復したが、大事を取つて有力貴族の娘と共に馬車に乗つてもらつたのだ。

王都に着いた。

出る前とは違ひ騎士団はボロボロだ。

出て行くときは華やかだった姫の騎士団の異様な姿に王都へ続く道の脇に居る人たちの声を上げない。

その中を僕達は背筋を伸ばし精一杯の虚勢を張る。

王城を抜けた。

馬を下りる僕に声が掛かる。

「酷い有様ですね」見ると祝賀会の時に文句を言つていた貴族の子弟達だった。

彼らは満身創痍の姫の騎士団員たちを見て「やはり急造の、しかも女騎士には魔物退治は荷が重すぎたようですね」と笑う。

僕は「その通りですね」と言つと一礼をして傍から離れる。

背後から「女に守られて自分は無傷か」と嘲りの声が聞こえた。

王都に帰還して一時（約2時間）程して謁見の間に呼ばれる。姫の騎士団員で歩けるものは全員、僕と共に謁見の間に入る。正面に殿下と翁、周りには僕たちを見る貴族や文官、武官達が並ぶ。姫は居ない。有力貴族の娘に付いているのだ。

僕達は左右に人が並ぶ間を進み、殿下の前で跪く。

僕「姫の騎士団、ただいま戻りました」

僕の言葉に「お帰りなさい」と殿下が言つ。一部の貴族から「あんななりでよく戻れたものだ」と言つ小声が聞こえてくる。

チラリと視線を向けると、なるほど左右に立つ人達は綺麗に一つに分かれている。

右が貴族達、左が反国王軍に居た領主や文官、武官達。あからさま過ぎて笑いそうになる。

嘲りの声も右からのみ聞こえてくる。

殿下「よく無事に戻られました」

僕「ありがとうございます」

殿下が頷くと翁が前に進み出て宣言する。

翁「今回のゴブリン討伐の功により姫の騎士団団長に黄翼勳章を、副団長に白翼勳章、団員には黒翼勳章を授ける

翁の言葉に右側からぞわめきが起る。

勲章は上から紫青赤黄白黒の6種類がある。

翼の文字が入っているのは国旗に翼が掛けているからだろ。

勲章の授^レの日安などは明確に無い。

しかし僕が黒と白を飛ばして黄色を貰うとこう事や、団員一人一人にまで渡すと言つ事に右側から「どうこうことだ?」「女なのにか?」「そもそもゴブリン程度に苦戦した奴らだな?」という声が聞こえてくる。

左側からは一切何の反応も無いといふ事は、状況を知っているのだろう。

女性で勲章を授^レされるのは今回が初めてのようだ。

翁が「白の騎士団団長、報告を」と言つと、白の騎士団団長が「はつー」と言つと用紙を広げ内容を読み上げる。

白の騎士団団長「姫の騎士団団長以下30名、国境の森にてゴブリンと遭遇。これを撃破し捕まっていた子どもを救出、巣の壊滅を行いました」

その後にゴブリンの数が告げられる。

白の騎士団団長「ゴブリンロード2、ゴブリンシャーマン2、ホブゴブリン17、ゴブリン31匹、巣に居た子ども12匹、全て死亡確認。巣を破壊しました」

ゴブリンロードとゴブリンシャーマンが2匹ずつと聞こひざわめてた声が消える。

それだけの規模のゴブリンに魔法を使うシャーマンが2匹も居るのだ。

領主軍程度ではそいつ手出しの出来る規模ではない。

そして放置をしていれば数を増やして更なる脅威になっていたに違わない。

それを31名で立ち向かい、死者〇で壊滅させたのだ。

とてもじゃないが満身創痍を笑える状況ではない。

とはいって、美女さんが居なければ今頃全滅に近い状態だったのは間違いない。

翁がざわめきが消えた事に満足そうに頷くと「姫の騎士団団長、前へ」と言つて聞いて僕は立ち上がり前に出る。

殿下の前に着くと再度膝を折った。

殿下「姫の騎士団の働きに黄翼勲章を授ける」

そつ言つと立ち上がった僕に黄翼勲章をつける。

この場では僕だけだが騎士団員全員に後で送られる。

勲章と言つるのは名誉もあるが、将来の保障にもなるのだ。

勲章があれば退役後の年金も増えるのだ。

僕だけなら断つていたが団員にも出るなら喜んで受け取る。

離れる間際に殿下が「本当にこ無事でよかったです」と心から言つてくれた事の方が勲章より嬉しかった。

殿下「何か望みはあるか？」

殿下の言葉に「ありません」と短く伝えた。
それで謁見は終了である。

姫の騎士団の活躍と勲章授与はすぐに国中に知れ渡った。
満身創痍ながらも氣丈に馬を進めていた姿と知られた功績、勲章
授与に姫の騎士団の名声は上がったようだ。
だが少なからず妬みも買った様だ。
注意をするべきかもしれない。

王都帰還から3日、ようやく有力貴族の娘も歩けるくらいにはなつ
た。

しかし大事を取つて姫の騎士団への減退復帰はもう数日後となる。
そして美女さんの素性を姫と有力貴族の娘に明かすこととなつた。
とは言え、どこまで話すかは美女さんに任せることにした。
妖精少女には話しても構わないだろうが妖精姉には今は黙つておく
べきだと言つ判断をし、2人には席を外してもらつて居る。

美女さん「私は勇者なんですよ」

「ぶつちやけた！」

魔王『全部言つたな』

姫が「ゆうしゃ？」と首を傾げる。

有力貴族の娘はあまりの事に言葉が出なかつたらしい。

有力貴族の娘「勇者と言われると…『』ののでしょうか？」

『』の？

魔王『勇者と呼ばれるのは何人か居るのだ。そして勇者にも格が在る』

勇者といふのはどこの権力者が認定して初めてなる。

その認定した者の力や数により勇者としての格付けがあるのだ。

逆に言うと影響力も何も無い小国の王が認めて、他からは相手にもされない事もあるのだ。

美女さん「恐れ多くてあまり好きな呼び名ではありませんが、『神の御遣い』と呼ばれてました」

有力貴族の娘「か…」

魔王『因みに「神の御遣い」は最高クラスだな』

まじですか！

有力貴族の娘「『神の御遣い』は力ある魔王と戦つて相打ちになつたと発表された記憶しますが」

美女さん「そうですね。因みに若の中に居るのはその魔王です」

姫・有力貴族の娘「「え…」」

2人が驚きの顔で僕を見る。

魔王は『ふん』と得意げだが僕はどうして良いか分からずに頭をかく。

2人とも僕が魔族である事は知つてゐるし、魔王であることも伝えていた。

しかし今の僕からは「魔王だった」と言つ事までは現実味が無かつたのだろう。

『神の御使い』と対立していた噂の魔王といつのも想像だにしなかつたのだろう。

僕ですら魔王がそんなに凄かつたというのが想像出来ない。

姫「『神の御使い』が何故、戦つた魔王の従者をしているのですか？」

美女さん「その呼び名は好きではないですし、今は若の従者でしか

あつませんので今まで通り呼んでください」

姫「え、あ、はい。では…美女さんは何故?」

美女さん「まあ服従の魔法を掛けられていたというのもありますが、権力争いの道具にされるのが嫌になったのもありますね」

美女さんはそういつたと「しがらみが増えると大変です」と笑った。

有力貴族の娘「では私を治療したのは神聖魔法の…」

美女さん「はい」

有力貴族の娘が「ありがとうございました」と詰まりながら言った。
あの時の自分は決して助からないと解っていたらしい。

美女さんは「封印を解いてくれた若のお陰です」と美女さんはいつ

が、そんな事は無い。

僕「美女さんのお陰ですよ。本当にありがとうございました」

姫も「ありがとうございました」と続く。

姫「有力貴族の治療の件があるとは言え今、私達に勇者である事を伝えるのは何故でしょう?」

美女さん「一つは神聖魔法を使った事によりいづれは知られるだろ
う事」

それを聞いた有力貴族の娘が自分のドレスを固く握り締めるが「気
にしないで下さい」と美女さんが微笑みかける。

美女さん「それでもう一つが服従の魔法の効果が弱まつた事ですね」

神聖魔法を使う為に僕が封印の一部を解除した事を説明する。
封印解除の方法は言わないで置こう。

美女さん「だから今後の身の振りようについてお話するべきかと」

姫「今後…」

美女さん「はい」

有力貴族の娘「美女さんは…どうなさるおつもりですか?」

美女さん「私はこのまま若の従者で居たいと思います」

美女さんの言葉に僕は驚く。

まさか今まで居たいとは思わなかつた。

姫「なら特に問題ないのではないでしょうか?」

有力貴族の娘「いえ、勇者が魔王の従者をしていると知られると大問題ですよ」

魔王『裏切り者のレッテルを貼られかねんな』

その言葉に美女さんは「それはたいした問題ではありません」と笑う。

自分の神聖魔法が使える限りは信仰を疑われる事も無いというのだ。それよりも問題は美女さんの生存が知れ渡った際の各国の動きだ。

美女さん「間違いなく私の身柄の引渡しを要求するでしょうね」

有力貴族の娘「引渡し…犯罪者ではないのですから」

美女さん「引渡しが良くないなら保護と言いましょうか。少なくともこの国の保護下に居る事を認め無い国は幾つも出ててくるでしょうね」

魔王『勇者を抱えると言つのは一種のステータスだからな。格の高い勇者をそつそつ他国に手放す国など居ない』
「ね」
「ひやつてどこの国の庇護下にあるかを決めるのを

魔王『一番最初に認定した国が基本的にはそうなるが、そこが小国の場合には大国が奪つこともある。美女ほどのクラスになれば数力国

で共同だらうな』

美女さんの価値は各国にとつてそれだけ高いのだ。
そひの王族よりノーマである。

美女さん「他国に知られた際にこゝに居られるだけの理由が必要になるのです」

姫「居たいと言つだけじゃダメなのですか?」

美女さん「残念ながら」

それで済むなら迷わないだらう。

美女さんは「とつあえずは国王殿下にもお話しないといけません」と言つ。

美女さん「国王殿下達が私の保護を断つたらそれで話はおしまいなんですけどね」

僕「そつなつたら仕方ありません。國を出ましょ」

姫・有力貴族の娘「え」

2人に僕は「もちろん2人も一緒に」と伝えると姫はすぐに、有力貴族の娘は姫が頷いたのを確認して頷いた。

確かに殿下が無理だと言えばそこで話が終わる。まずは殿下にも話すべきだと言つた事となり、すぐに殿下のトヘと向かった。

部屋に入ると殿下と翁、爺、有力貴族が数名の文官と話し合っていた。

僕は「少しお話宜しいですか?」と殿下に言つ。

殿下「丁度休憩する所なので大丈夫ですよ

そういう殿下に僕は「大事なお話です」と言つと、何かを察した翁が文官たちに「呼ぶまで待機」と伝え部屋から追い出した。全員が退出するのを確認すると美女さんの正体を明かした。4人とも驚きで言葉も出ない。

僕「出来れば美女さんがこの国に居る事を認めて欲しいのですが

翁「…もし無理だと言つたらどうするのじゃ?」

僕「美女さんと共に姫と有力貴族の娘を連れて国を出ます

翁「姫もじゃと…?」

僕「2人は僕の妻ですからね」

僕の言葉に姫が嬉しそうな顔をする。

喜んでくれるのはありがたいけど今はそういう状況じゃないからね。

翁「姫を…」

殿下「翁、ちょっとまって」

そう言つと「無理だと言つた場合の話だから」と殿下が翁を止める。

殿下「僕は美女さんを受け入れないとは言つていない」

翁「しかし、現実問題…」

翁「それをわかつた上で、どうすれば美女殿がわが国に居るだけの理由を作れるかの段階の話ですな」

殿下「その通りです」

そう言つと4人とも考え込んでしまった。

有力貴族「王妃になつてもらいますか?」

翁「確かにそうすればわが国に居るだけの十分な理由になるが…」

殿下「僕には無理です」

殿下が笑顔で「美女さんは僕にはもつたいない」と言ひ。翁は「身分的に釣り合わないとは言いませんが」と

翁「美女殿本人がその氣で無い場合は無理でしょう」

「折角殿下の后問題も一挙解決できそうな妙案なのだが」と残念そうに言つた。

その言葉に「申し訳ありません」と美女さんが頭を下げる。

爺「他に何かありますかな?」

翁「他国を黙らす方法…やはり婚姻が一番なのじゃがな」

殿下「さすがに美女さんが納得してない婚姻は出来ませんよ」

そつ殿下が言ひと「納得ですか…」と美女さんが言つた。

美女「若の奥さん一人になりますか」

その言葉に僕の「いやいやー」と叫び僕と姫の「名案ですー」という姫の声が被る。

姫「元々、美女さんと妖精少女も若の奥さんでしたし」

僕「違うよね。ただ言つてただけだよね??」

有力貴族の娘「予定通りですね」

今まで黙つて成り行きを見守っていた有力貴族の娘も「家族の会話」になつたとたんに姫の援護をします。

というか、有力貴族の娘はそれで良いのかを聞いたら「美女さんを尊敬してますから」と言つた。

意味がわからない。

有力貴族の娘「美女さんと家族になれるのは嬉しいです」

美女さん「ありがとう」

美女さんは有力貴族の娘に微笑みかける。

姫が「本当の家族になるのだから私の事も様を付けずに呼んでください」という言葉に首を振ると

美女さん「あくまでもこの国に居る為の方便としての妻です」

姫「そうなんですか…」

美女さん「それでもダメですか？若」

美女さんの言葉に詰まる。

確かにこれしか方法が無いし、名田で良いなら良いとは思つ。

僕「それで他国を黙らせる事が出来ますか？」

翁「まあ少し弱い気もしますが、継承権第一位の姫婿の妻なら言い様はありますな」

僕「名田上なんですね」

美女さん「事実上でも構いませんよ？」

僕「いやいやいや」

美女さん「冗談です」

「若には好意を抱いておりますが、さすがに妻にとなると…」と美女さんが言つ。

何だろう。
物凄く安心したのにちょっと納得できない感じ。

ああアレだ。

好きでもないのに勝手に好きだと周りに決められて、それが本人の

耳に入った上で「良い人だてや思ひナビ」めんなさい」と言われた時のような気分だ。

魔王『微妙な例えだな』

まあ有力貴族の娘の時のよひになし崩し的にならなくて良かつたよ
殿下「では美女さんは若の奥さんと云ひ事で発表しまじょつか」

僕「もつかるのー?」

翁「後で美女殿の正体がばれた時に云ひよう、今から云ひていたほう
うが後々有利じや」

美女さんの「それで構いません」と云ひ言葉で即発表と決まった。
世間では僕は好色扱いされるのだわ。

魔王『世間など云ひもせぬいか

まあそりだけどね。

「美女さんの信者に殺されるかもしれない」と云ひ僕に「私が望んだ事にしてもらって結構ですよ」と美女さんがそう云つてくれたので、それをお願いした。

この件に関しては魔王の『へたれ』と云ひ言葉を甘んじて受けける。美女さん信者はそれだけ脅威なのだ。

第52話 帰還（後書き）

誤字修正

余り あまり

有料貴族の娘

有力貴族の娘

段階のはない

段階の話

行つてただけ

言つてただけ

回りに

周りに

第53話 第2回選考会

美女さんが僕に嫁ぐ（偽装）事はすぐにでも発表する事となつた。よくよく考えたら姫との発表と同時に有力貴族の娘が嫁ぐ事も発表され、それから間もなく美女さんを娶るのだ。どれだけ女好きなんだという話である。

魔王『よくよく考えなくとも女好きだな』

仕方無しだよーこれで打ち止めだから…！

魔王が『そうだと良いな』と言つのが怖い。本当に次が出そうだからやめて！

取り合えず美女さんを娶る（偽装）話はすぐに発表する。

魔王『（偽装）とは何だ』

付けておかないとこいつの間にかその通りになつてこないでコワイから

『くだらん』と一笑された。『うう…

美女さんを娶る事を発表する。

では美女さんの正体をいつ流すか、という問題が残る。

姫の騎士団員にはあの場で見た事を口外しないように伝えて居る。

だが何処からビのよつに漏れ出るかはわからない。

殿下「今すぐはダメですか?」

爺「ダメでしょう。まだ他国の介入に対する備えが出来ていません
しな」

翁「若と美女殿の発表からある程度開けた方が良いだらうな」

「夫婦としての関係を無視できなくなる程度にはな」と翁は言った。
そうなるとどれ位の帰還が必要なのだろうか?
爺が「長ければ長いほど良いでしょうな」と囁く。

姫「いつそ知られるまで黙つておきますか?」

美女「そもそも行かないと思います」

「姫との結婚式に他国から沢山の人来るでしょうから」と囁く
だ。
各国のお偉いさんの中には美女さんと直接面識がある者も居るよう
だ。
そうなると「新芽が芽吹く頃」がタイムマシット見ても良いだ
わ。

美女さん「その時期は私は隠れてしましょうか?」

姫「ダメですよ。一緒に式を挙げるのですから」

はい？

僕が「偽装だとわかつてますか？」と聞くと「わかつてます」と姫ははつきり答えた。

しかし私と有力貴族の娘が挙げるのに美女さんだけ挙げないのはおかしいと言つのだ。

翁「確かにのう」

僕「翁！？」

翁「よく考えなされ。姫の言つとおりだ

有力貴族の娘と美女さんの発表は殆ど時期が同じである。
それなのに片方は挙げて片方は挙げないとなると、色々と勘ぐる者は出てくるだらう。

だから美女さんも挙げるべきなのだと言つ。

それでも何か言おうとする僕に姫が「美女さんが居なくなつても良いんですか？」といつゝ言葉にべつの音も出ない。

魔王『毎回毎回似た事でうづうづ言つて、似た様な事で言い負かされよつて』

くつ

魔王『そろそろ損得で物事を判断できるよ!』なれ』

でも!

魔王『そういう立場なのだ』

魔王はそう言ひとこれ以上の事は言わせないと感じに黙り込んだ。

魔王とそういう話をしている間に美女さんも一緒に式を上げるという方向で纏まりつつあった。

美女さんが僕に「よろしくですか?」と聞いてきたので、少しして頷いた。

姫の騎士団の問題がいろいろと浮き彫りになった。

もちろん僕の能力不足もそうだが、やはり人数が少ない。

姫の騎士団員の増強をする事としたので第一次公募を行う。

勲章の授与などで姫の騎士団への応募数が跳ね上がり400名近い数が集まつたらしい。

特に姫の騎士団に市井の者が居て同じく勲章を得たのが大きによつだ。

その市井の者である商人娘がそれを聞いて「恥ずかしいです」と言つていた。

400名近い応募の第一次審査はやはり書類審査だ。

翁が「早く若もこひう事をやる部下を持つてくださいね」と言われたので「今回で最後になります」と言つたら笑われた。

早くそれなりの地位に付いてくれと言われたのだ。

勘弁してください。

人数が増える。

どれくらいかわからないが増える事は間違いない。
だから姫の騎士団員が駐在する館をもらえないかと殿下に言つたら
すぐに用意してくれた。

一の郭と二の郭に5箇所。

僕「多すぎですよ」

殿下「好きな所を選んでください」

僕「いえ、姫の騎士団宿舎なのでそんな豪勢な建物は必要在りませ
ん」

何だこの「お風呂が大きい」とか「ガーデニングが綺麗」とかは。

姫の騎士団団員が訓練できる庭などがあるよつた建物が良い。そつと翁が「これはどうじや？」と一つの建物を出した。

古い。

一の郭の一番奥になる建物だが何せ古い。
かなり昔に人はすまなくなつてはいるが国が管理していたので住むのは問題はない。

この建物を建てたのは昔の国の軍人貴族で「もし王都が攻められた時に籠城できないと困る！」と自分の館を要塞化したそうだ。
何せ館の周りに2重の堀を掘つて水を張つて跳ね橋にしていく上に、
高い堀で囲つているとという懲りようだ。

籠城を考えて水も引いているらしい。

本当は王都でクーデターを起こすつもりだったのではないだろうか？

城の裏門が館の中にあるといつのは、よほどこの館を作つた軍人貴族は信頼されていたのだろうか？

勝手に壁に穴を開けて作つた訳ではないだらう。

因みに城壁に引っ付いているのはこの建物だけである。

殿下「数代前の王の後宮だつたといつ噂もありますよ」

また後宮か！

だから城から直でいける様になつてしているのか。

何にせよ姫の騎士団の宿舎としては申し分ないと思つ。

一つには一番奥である事。

少々訓練で騒いでも文句は言われないだらう。

一つに直で城に上がれる事。

二つに堀と高い塀で囲われている事。

三つはどちらかと思つが、少なからず快く思つていないものが居る。

何かをすぐにされるとは言わないが用心するに越した事は無い。騎士とは言え女性のみである事には違いない。

特に姫の騎士は執政と同じ地位にある事から、姫の騎士団に頭がなしに命令は出来ない。

だがどこにも頭の悪い者は居る。

女性によからぬ事をしようとする者も居るかもしぬないのだ。

姫の騎士の権力で頭の悪い権力者を、そして塀と堀で無頼漢をそれぞれ防げるだろ？

姫の騎士団の館は決まった。

殿下のお墨付きで中に入れる者は姫の騎士団員と執政並みの地位があるもの。

それ以外は殿下、もしくは僕の許可が居ると言つ事にした。

それ以外で不當に侵入を試みた者は侵入者とみなして斬つてもよいと言つのだ。

さすがにやりすぎ感はあるが、館の裏に王城への入り口があるのである。

これを盾に正当性を無理やり付けた。

今後は姫の騎士はここで寝起きをし、姫の護衛の任の者だけが空の館に登る事となる。

すぐに姫の騎士団のメンバーと翁が用意した侍女を連れて美女さんが準備の為に下りて行つた。

姫の騎士団寄宿舎に僕が入ったのは3日後、王城側から入ったがその異様さに驚いた。

王城側の入り口が3階の高さにあったのだ。

城と宿舎の3階から橋が伸びて繋がっているのだ。

そして寄宿舎側の橋の一部、城壁のところが跳ね橋になっている。

どれだけ凝つてるんだ

魔王『物凄い用心だな』

王城へ上ぐるのに寄宿舎の中を通らないといけないのは中々良いかもしれない。

ただ王城から橋を渡つて寄宿舎へ入つてすぐ近くの扉が寝室だとうのは、やはり元々後宮として使われていたからなのだろうか。

まあ一部屋を姫の騎士団の会議室にすれば良いか。

姫の騎士団寄宿舎は下記のような間取りになつている。

1Fは姫の騎士団員の宿泊と食堂、厨房などの生活エリア、幾つかの会議室。

2Fは指揮官クラスの宿泊と予備室。

3Fは会議室と資料室と予備の寝室。

3Fの予備の寝室は何かで僕が泊り込むことがある際の寝室となる

予定だ。

姫の騎士団の第一次選考会通過者は384名。一回目の5倍以上の数である。

商人娘が居るからか多種多様な人材の応募があった。市井の者も多いが中には娼婦の出などもいる。

さすがに翁が「弾くか?」と聞いてきた。

余程の理由が無い限りは弾く前に確認して欲しいと伝えていたのだ。それに僕は「徹底的に調べて白なら通してください」とだけ伝えた。通ったという事は白なのだろう。

貴族の娘の応募も増えた。

これには翁が「若に近づくには姫の騎士になるのが早いと感じたのだろう」と言つ。

馬鹿らしいと笑おうとしたが『3人の妻のうち2人が姫の騎士団員だな』という魔王の言葉で辞めた。

そう取られても仕方ないらしい。遺憾である。

まあ思惑はどうであれ、それくらいでは弾かれずに一次審査を通りている。

そういう者は一次以降で脱落すると思っているのだろう。

候補者384名を寄宿舎の広場に集める。

現在ここにいるのは僕と美女さんと姫の騎士団員と候補者のみだ。

姫の護衛は近衛兵に任せている。

候補者にこれからのお預りを伝える。

一月間、ここで寝起きをしながら姫の騎士団員と同じ生活をしてもらひ。

ただし警備の任に付いてもらひわけにはいかないのでそれは免除だ。384名を4つの隊に分け、一つの隊が96名とし、各隊に分けられる。

3日間訓練で1日が半分休暇だ。

とは言え休暇は外出出来ず、食事の用意や館の掃除と座学、寄宿舎の警備などを行うのだ。

この事を聞いた候補者の一部からざわめきが起つたので見ると貴族の娘達だった。

騎士団の候補になつた時点での身分は関係なく「一候補」となる。

自分の事は自分で行い、騎士団内の上下関係は階級性のみである。それは他の騎士団でも同じであり、それが受け入れられない場合は今すぐ候補を取り下げるべきである。

美女さん「姫の騎士団内の階級に従えない場合は、騎士団団長の名の下に罰する権利があります」

それが軍隊と言う者である。

「騎士団団長が死ねと言えば死ぬ覚悟がない者は向いておりません」と美女さんが言つ。

誰一人何も発しないのを確認した美女さんは「次に負傷を追つた場合の保証はありません」と言つ。

美女さんが一人の騎士団員を見るとその団員は領いて小手を取り外し腕をまくつて傷を見せた。

この前の「ゴブリン退治で負つた傷だ。

美女さん「」によつて傷が残る事もありますが、保障はありません

「傷は名譽です」と美女さんが言つた。

本当はそこまで厳しくない。

傷が絶えないのは確かだ。訓練でも負傷をする事はある。ただ傷を負つた者たちには僕が個人的に保障をしている。だが覚悟を無い者を振るいに掛ける為に脅しているのだ。

「次に」と美女さんが言つ。

騎士団のルールの厳しさに付いてだ。

まず休暇の日は基本的に寄宿舎で待機をし、必要がある場合は外出申請が必要である。

出せば毎回通るわけでもなく、親兄弟の呼び出しであらうが認可が降りない事もある。

次に恋愛に関する事だ。

姫の傍で警護するといつ立場上、自由に交友関係を作る事は許されない。

特定の誰かと会う場合や婚姻も許可を必要とする。

厳しいようだがそれだけの立場になるのだ。

その他にも厳しい騎士団のルールが上げられる。

「これを聞いて無理だと思ったものは申し出てください」と言った
が立つ者は居なかつた。

それを見た美女さんが隊を分けるために全員の名前を呼んでいく。
出来るだけ知り合いと違う隊に入れるためだ。

各隊96名をさらに6つに分けて16名の分隊にする。

寄宿舎は今回は1Fに候補者、2Fを姫の騎士団員を寝起きさせて
候補者へは2Fへ上がる事を禁止した。

そして4名一部屋で部屋割りを決めて行つた。

その後、再度全員が広場に集まる。

これからが1ヶ月に渡る第一次試験の始まりである。

美女さんが第一隊が半休暇と伝えた。

見張りは寄宿舎の入り口を6つにわけた分隊で丸一日警備するのだ。
一つの分隊一時（約4時間）程なので対した事は無いのだが、その
間は無言で立つて居ないといけない為に素人には結構大変である。
翌日以降は第一、第三と順番に行つ。

美女さん「4日に一度各隊の姫の騎士団隊長を集めて会議を行い勤務態度や適性を確認し、姫の騎士として適さない場合は落選する事

もあります

「だから姫さん頑張ってください」と締めた。

すぐに姫の騎士団団員が揃つて敬礼をする。

そして第一隊長の号令の下、それぞれの分隊が割り振られた箇所へ姫の騎士団員と共に向かっていく。

座学は隊長が初日は敬礼などを教える事になつていて

そして残つた第一～四隊は訓練である。

しかし最初の4日間、各隊で3日ずつは基礎訓練と簡単な素振りのみである。

もちろん姫の騎士団員も行いながら候補生の監督に努める。未経験のものには辛いだろうが、今まで姫の騎士として短い期間なりに訓練を受けてきた団員にはこなせるだらう。

昼を挟んでもさうに訓練を行う。

夕方に「今日はここまで」と言つと候補者達はその場に座り込んだ。騎士団員が「まだ終わつてない！」と候補者達に告げる。

何とか立ち上がつた候補者を確認し姫の騎士団団員が「敬礼」とい全員が行つ。

僕と美女さんが館に戻ると「今日はこれまで」とこの声と各隊隊長の声が飛び交うのが聞こえた。

夕食の後は各隊は交代で風呂に入る。

最初の数日は慣れるまで夜は休むという事を通達している。逆に言うと数日後には夜にも何かしら行つのですが、さすがに初日と

言つ事で殆ど之の候補者が今すぐ寝たいと言つ感じである。

因みに僕は空の館で寝泊りする。

さすがに正式団員でもない候補者である若い娘が沢山いる所に男が寝泊りするのはまずいだろうという配慮の元だ。

これ以上、なし崩し的に奥さんが増えて困るのである。

いひつて姫の騎士団の選考会は始まつた。

第53話 第2回選考会（後書き）

誤字修正

切つても

斬つても

公いう事を

こういう事を

下りて言つた

降りて行つた

5枚以上

5倍以上

とは言え休暇は外出は出来ず

とは言え休暇は外出出来ず

一部、寄宿舎の説明がわかりづらい文章になっていた為に訂正。
それに伴い僕の台詞を一部変更し、寄宿舎3Fの説明を「予備室」
を「予備の寝室」と変更。

第54話 第一王女

選考会開始から20日程が経つた。

当初は384名居た候補者は現在347名になつた。
37名が自主的に候補を降りたのだ。

辞退の理由はそれぞれだが、その中の一人であるとある貴族の娘は姫の騎士団の方針に合わずには辞退する事となつた。

理由は食事の用意の際に「何故自分が食事の用意をしなくてはいけないのか」と言つたからだ。

今まで蝶よ花よと育てられてきて水仕事など一切した事は無く、そういう仕事は身分の低い者が行つべき事だと教えられてきたのだろう。

しかし姫の騎士団員になるならば元の身分は一切関係無く、姫の騎士団としての階級のみがモノをいつ。食事の用意だけではなく掃除や洗濯なども自分達で行わなくてはいけないのだ。

その事を受け入れる事が出来なかつたとある貴族の娘は不満を述べていたが、美女さんに論破されると翌日には辞退を申し出て去つていつた。

選考会開始から20日が過ぎた。

しかしそく347名もの候補者が20日も持つたものである。
訓練はハードなものだつた。

姫の騎士団の通常訓練をベースにしているが、それより少しハードに出来ている。

もちろん初日からではない。

日を追う毎に訓練内容を徐々にハードな内容にしていったのだ。

因みに僕は最初の10日以降、候補者を美女さんに任せて別の事をしていた。

姫の騎士団寄宿舎に一日一時（約2時間）程しか顔を出せていないかつたのだ。

別にサボっているわけではない。

各所から続々と僕と姫の婚約祝い等が届きだした為に対応に追われていたのだ。

早馬で知らせを伝えたとはいえ、どこも動きが早い。

祝いの品程度なら後で目録を確認するだけで良いだろう。だが祝いの使者が来た場合は別である。

相手によっては一々相手にしないといけない場合もある。

一番最初に困ったのが隣国の王妃だ。
とかこの国から嫁いだ第一王女、姫の姉に当たる人の事だ。

式もまだまだ先なのに直接出向いてきた。

隣国の王妃である上に姫の姉だ。粗末に扱えるわけがない。

殿下に呼ばれて行つた謁見の間で第一王女と初めて挨拶をした。やはり姉妹と言つべきだろうか、第一王女は姫と似た雰囲気を持っている。

2人が並ぶと特にそう思つ。

姫が「今」だとしたら第一王妃は「少し未来」という感じだ。

魔王『姫が大人びてもっと落ち着いた雰囲気を出すと第一王妃のようになるのか…』

魔王が『姫にはいま少しの努力が必要だな』とか何とか言つている。ふと視線を感じて目線をそちらに向けると姫がこっちを見ていた。姫は笑顔なんだけど少し怖く感じるのは魔王があんな事を言つていたからなんだろうか？

『ナンデモナイデスヨー』と言つ魔王。

別に姫は魔王の事を認識できないから聞かれてもいないし、取り繕つても意味ないし！

第一王女にお祝いの言葉を頂いたので「ありがとうございます」と笑顔で答える。

「後でお茶をお付き合いください」と言われたので「用意をしてお待ちしております」とだけ答えた。

その後、第一王女は隠居中の第三王子に会つために部屋を退出して行つた。

隠居させられているとは言え、第一王女からすれば弟の一人である。

第一王女が退出すると王子が僕に「上姉様はああ見えて手ごわい方なので注意してくださいね」とやつと言つてきた。

僕「どうごい」とですか?」

殿下「いえ、特に危険だとかそういう事では無いんです。ただのんびりしている様で以外としっかり物事を見ている方なのです」

僕「はあ…」

殿下「後は…実際に話してみたらわかると思います」

殿下は「本当に危険な方という訳では無いので安心してください」と締めた。

良くわからないが嫌な予感はある。

空の館にあるバルコニーに置かれたテーブルに侍女がお茶の用意をしていた。

さつそく姫が第一王女をお茶にお誘いしたのだ。

後宮であつたこの場所に第一王女を呼んで良いのかと思つたけど、今は後宮ではなく姫の住まいなので問題ないだろうとの事だ。逆に男子禁制で殿下と僕しか入れないので都合が良いらしい。そこに僕と姫と有力貴族の娘と美女さんと妖精少女と妖精姉が居る。妖精姉はお茶会を辞退しようとしたが姫に押し切られて参加する事となつた。

押しに弱いらしい。

魔王『お主と一緒にだな』

うん。もうそれで良いと思つ

否定できない。

第一王女が空の館に現れたので全員が立ち上がって挨拶した。

妖精少女を見た第一王女は「可愛い！」と抱きつき、それからは膝に乗せたままでいる。

妖精少女も姫のお姉さんと聞いていたのが良かつたのか、容姿も似ている為なのか特に人見知りをする事も無く第一王女の膝の上で二コニコしていた。（可愛い！）

因みに子狼は妖精少女の部屋でお留守番である。

挨拶の後はお茶が配られ和やかな雰囲気でお茶会が始まった。

『一ひついう場では男は話を振られた時意外は黙つているほうが良い』と魔王に言わされたので、出来るだけ笑顔で座つてゐる事にする。

有力貴族の娘は第一王女と面識があるようだ。

姫と幼い頃から面識があるのなら当たり前である。だが歳が少し離れている為に一緒に遊んだ事はあまり無いそうだ。

第一王女「あの有力貴族の娘がこんなに綺麗になつて」

有力貴族の娘「ありがとう」

姫「若のお陰ね」

第一王女「そうなの？」

姫「有力貴族の娘も若の奥さんなの」

第一王女「まあ」

姫の言葉に僕はもう慌てる事は無い。

こうこう場で姫がそう言つのは想定の範囲内である。事実、有力貴族の娘は実際に僕の奥さんなのだ。

姫が「有力貴族の娘と家族になれて嬉しい」と言つのを聞いて有力貴族の娘は嬉しそうにしている。

相変わらず有力貴族の娘は姫が大好きなようだ。

姫「美女さんも若の奥さんになるの」

第一王女「あらあら」「

あ…慌てる事は無い。

美女さんも対外的には僕の奥さんといつ事になる。

第一王女「じゃあ妖精少女もそつなの?」

妖精少女「うん!」

いやいやいやいやいやいやいやいやー

僕が何か言う前に姫が「それが妖精少女はまだなの」と残念そうに言った。

「まだ」という言葉は引っかかるが、一応の否定の言葉に胸を撫で下ろす。

姫「だから今、妖精族の女王に妖精少女を若の奥さんにして良いか確認中なの」

違いますからーー！

有力貴族の娘「姫、それはちょっと違いますよ」

有力貴族の娘が妖精少女の事を説明する。

僕が妖精少女を助けた事や、今は妖精少女を妖精の里に戻すかどうか

かを妖精族が話し合つてゐる最中であるといふ事を有力貴族の娘が説明してくれたので再度胸をなで

有力貴族の娘「最終的に若の奥さんになる事は決まつてますが」

何言い出してるのー?」の娘は!!

有力貴族の娘が「妖精少女も家族だもんね」と言つと妖精少女が「ねー」と言つ。

おかしい...ここには敵しか居ないのだろうか?

それを「姫は幸せそうね」と笑つていた第一王女、本当にその認識で良いのだらうか?

魔王の『お主が言つ事か』と言つのは丁重に無視する。

第一王女「じゃあここには姫と若の家族が集まつてゐるのね」

そう言つと「じゃあ貴方も若の奥様なの?」と妖精姉を見て言つ。妖精姉は首を振ると笑顔を浮かべ「私は妖精少女が居るのでお世話をなつてはいるだけで、奥様ではありません」と言った。

普通の応答なのに感動するのは何故だらう

魔王『疲れているのではないか?』

第一王女は「それはごめんなさいね」と言つと「気になさらないで下さい」と妖精姉は笑顔で答える。本当に氣にして無い様だ。

その後、第一王女は妖精少女言つ事を笑顔で聞いたり、姫の騎士団の話を聞くと「見てみたいわ」と言つたりしながら時間は過ぎて言った。

姫の騎士団に関しては美女さんと有力貴族の娘が団員で副隊長と隊長と聞くと制服姿を見たいと言いだした。

姫の騎士団自体は選考会中で見学する事は出来ないので、2人の制服姿で我慢してもらう。

2人の騎士服姿を見た第一王女は「かわいい」と言つと2人の間をくるくる回りながらいろいろな角度で眺める。
少しして満足したのか座ると「女性騎士もいいわね」と言つた。

美女さんは制服に着替えた事もあり、選考会もあるので「失礼します」と言つて騎士団宿舎に向かつて行つた。

それに「行つてらっしゃい」と笑顔で送り出した第一王女は美女さんが出て行くまで笑顔で手を振つていたが、部屋の扉が閉まるため息を付いた。

第一王女「それでも若はずいわね」

僕「何がでしょう?」

第一王女「姫と有力貴族の娘を奥様にするだけでもすごいのに勇者様も奥様にして、将来的に妖精少女まで奥様にするなんて」

僕「妖精少女は彼女達が言つてるだけです」

魔王『それより勇者を知っている事に突っ込め!』

そうだった!

僕「…それより勇者とは?」

第一王女「美女さんは『神の御使い』でしょ?昔、一度だけお見かけした事があるの」

「美女さんは』存知じやないだろうけど」と第一王女は言った。
何故、美女さんがいる場で言わなかつたのかと言うと「美女さんが『若の従者です』としか言わなかつたから」だそうだ。
妖精少女は良く分かつてないようだが、妖精姉は「勇…者?」と驚いている。

姫「お姉様、出来ればその事は内緒に」

第一王女「分かつてているわ。本人が言わないことを公言したりしないわ」

「姫の大切な家族の一人でしょ」と微笑む。

第一王女「それに知られると色々と大変そうですね」

魔王『中々聰い女だな』

失礼だよ

第一王女「魔王と相打ちになつたと噂で聞いていたけど、お元気そ
うで良かったわ」

そう言つと「前にお見かけした時はどいか辛そうだったから」と言
つた。

美女さんは語らないが、勇者が生きてる事をすぐに公言したくない
と言つ事は色々な目にあつたのだろう。

それより何より今は妖精姉である。

「妖精姉」と何回か呼びかけると妖精姉が「ひやい！」と我に返つ
た。

僕「美女さんが勇者だと言つ事は黙つておいて貰えるかな」

妖精姉「言つとまずいのですか？」

それに僕と姫と有力貴族の娘が頷く。

それを見て「殿下は…？」と聞いてきたので殿下には伝えている事
を言つ。

僕「いづれ結婚式の場で美女さんを見た人から伝わると思つけど、
それまで黙つておいて欲しいんだ」

そう言つと妖精姉は少し考えて「わかりました」と頷いた。

後は妖精姉を信じるだけだが、信じると僕は思つ。ほつとした空気は第一王女の一言でぶち破られる。

第一王女「で、お子様はまだなの？」

その言葉にお茶を吹きそうになる。
僕が「な…」と言葉をなくしていると

第一王女「夫婦なのだから当然の話でしょ？」

僕「そ、そうですが」

第一王女「姫と有力貴族の娘はまだなのね。でも何故美女さんだけ仲間はずれなの？」

僕「は？」

第一王女「美女さんだけ本当の奥様ではないでしょ？」

妖精少女をおもんかばつてそういう言い方をするが、何を言つているのかは丸分かりだ。

妖精姉が顔を真っ赤にして俯いている。

なんで分かるんだ！？

魔王『何故だらうな?』

魔王にも分からぬいらしい。

小声で「妖精少女と妖精姉は本当に違うようね」と囁いた。

怖! なんでわかるの??

殿下の「色々手ごわい方」と言つ葉が頭をよぎる。
よく考えたら妖精少女はまだ小さいし、そういう話題に顔を真つ赤
にしている妖精姉はそういう関係で無いと予想は付く。
だが美女さんと何も無いと言つのは何故分かるのだろう。

姫が「お姉様」とだけ言つと「立ち入った事を聞いてごめんなさい
ね」と第一王女が言い、別の話題に移つていった。

それ以降のお茶会は概ね良好だ。

妖精少女も妖精姉も楽しそうに話を聞いている。

「概ね」と言つるのは現在の話の内容が僕にとっては居心地が良くな
いからだ。

姫「その時若が言つてくれたんです『姫の笑顔を守る』と」

姫と出会つてからの話が続く。

今すぐ部屋を飛び出して布団にもぐり枕を頭にかぶつて叫びたい。
今ならバルコニーから空も飛べるかもしない。

たまに「お兄ちゃん、かつこよかつたね~」と言つ妖精少女の台詞がこそばゆい。

妖精姉も当時に話を聞いて第一王女と共に興味心身に聞いている。

盛つてゐるから~。その話は殆ど盛つてゐるから~!姫の補正込みだから~!!

魔王『それでもお主の台詞部分はそのままと言つのが、逆にイタイな』

ぐはつ!

今は有力貴族の娘の登場して僕たちと話している辺りだ。

先程から頻繁に第一王妃と妖精姉が「キヤー」とか言いながら聞き、僕を見ては「キヤー」と言つるのが本当に辛い。

ああ、夢を見てるんだ

僕は「ははは」と乾いた笑いを浮かべながらこれは「夢だ」という現実逃避をしていた。

しかし魔王が『吟遊詩人の歌うサーガでももつ少ししまともだな』等と内側からも僕をえぐり、無理やり現実に繋ぎとめる。

「そして私達は若の奥さんになったの」と姫が締めくくると第一王女と妖精姉が「ほおー」とため息を付いた。

僕も心中で違う意味のため息を付く。

魔王『あのまま話しえれば初夜まで語る可能性もあつたな』

ホントに…ホントにあそこで終わって良かつたよ。

他人の惱^{のう}氣^き話^わもきついモノがあるけど、自分の惱^{のう}氣^きを他の人の口から聞くのも厳しい。

女性と言つのはよく「こうつこつ話^わ」で盛り上^あがれるものである。

第一王女「若つて熱い人なんですね」

僕「はあ、何かすみません」

第一王女「あら、いこと思ひわよ」

そう笑う第一王女は「やつぱり姫のお姉さんなんだな」と思ひへりいに雰囲気が似ている。

お茶会はその後も続き気が付くと夕刻になつていた。

まあ僕はずつと氣^きが付いていたけどね

美女さんが姿を現し僕に「そろそろ騎士団へ」と言ってくれたので第一王女に「申し訳ありませんが失礼します」と言って部屋を出る。寄宿舎の3Fへ付いた所で他に人が居ないのを確認して第一王女が美女さんの正体を知つていた事を伝える。

美女さん「そうなんですか？」

僕「昔、見かけた事があるらしいよ」

美女さん「なるほど」

僕「取り合えず黙つていてくれるらしい」

美女さん「そりですか」

僕「しかし第一王女は殿下の言つとおり、色々手ごわい人のようだよ」

そう言つと第一王女が美女さんを名田だけの妻といつ事を当てた。ところ話をすると、美女さんは「すごいですね」と言つた。

美女さん「仕草や表情から読み取ったのだとしか思えませんが、すごい方ですね」

そう言つと美女さんは「確かに手ごわい方です」と頷いた。でも本人も黙つてくれるという事なので、そこまで考える必要は無いだろう。

とりあえず「そりこう事があつた」という事が美女さんに伝われば十分である。

美女さん「やはり実際に奥さんになるしかないですかね？」

僕「うん、そういうのいたいと思った。必要ないね！」

美女さん「以外と冷静に返されましたね」

少し残念そうに囁く。

僕「散々似たような状況を経験したからね。」

美女さん「では時間も少しありますし、そこで済ますか

そう言いつつある寝室を指差した。

僕「は？」

美女さん「一度部屋もありますし、ここは誰も来ませんし」

僕「いやいやいやいや。ただだから必要ないですよねー！？」

焦る僕に「ふふ」と笑う美女さん。

からかわれた！

「こういうパターンは何回かあり、今回はつまづ返してたと思ったが
今日のこの一件で分かった。

」のネタは乗るも反るの地獄だ。

どちらにしても僕に勝ち目は無い。

「冗談ですよ」とちゃんと言う美女さんが若干顔を赤くしているのは、自爆テロの様相を呈していたからだろう。
最近分かってきたが、美女さんは自分に関するこの手の話は苦手のようだ。

他人事なら無表情でいじつてくるくせに。
そう思いながら僕は「勘弁してください」と頭を下げる。

第54話 第一王女（後書き）

誤字修正

家族だんね

家族だもんね

第55話 そういう物語

泣いたり叫んだりしなければそつそつ酷い事はされない。その事に気が付くまでそれ程の時間は要さなかつた。

捕まつて檻に押し込められて馬車に乗せられ、もう何日経つたか分からない。

何処に行くのかも分からぬ。

首輪を付けられてから精霊のがあまり感じられなくなつたのがとても悲しい。

それでも来てくれる精霊だけが心の支えだつた。

でも精霊と話をしたり遊んだりする事は出来ない。

そんな事をしていると誰かが来て気持ち悪そうに見たり、時には何か言いながら小突いてくるのだ。

だから精霊見ているだけか、周りに知られないように小さく頷くくらいのことしか出来ない。

精霊が居ない時は出来るだけ目立たないように小さく丸まつているしかなかつた。

それが起つたのは捕まつて何回目の夜を迎えた頃だらうか。

急に外から叫び声が聞こえたと思つと騒がしくなつた。

たまに外の人物が陽気に歌つたりしている事もある。そうならい。だがもし怒つていたらハッ当たりされるかもしれない。

でも今のわたしの世界はこの狭い檻の中で何処にも逃げれない。耳を塞いで丸くなり、誰も来ないよう祈つた。

いつもと違うと感じてそつと田を開けた。

何が違うのか良く分からなかつたが、少しして聞いた事の無いような人の怒声や何かがぶつかる音が聞こえた。

それはとても恐ろしく、ただただ怒つた人が来て何もされない様に祈りながら耳をふさいで小さくなるしかなかつた。

いつの間にか叫び声とかが聞こえなくなつていた。

少しの間は静かだつたが、またすぐに話し声と笑い声が聞こえる。笑つてゐるから怒つていなはずだ。

急に馬車の中に見た事無い人が乗り込んできた。

何を言つてゐるけど、何を言つてゐるかわなんない。

入つてきた男の表情は暗くて見えないが、知らない声だと思つ。

その男が檻の扉を開けるのを震えながら眺める。

嫌な予感しかしない。

「開かないで」という祈りは「カチャ」という小さな音に脆くも破られる。

男は何かを叫ぶとわたしの髪を掴んで無理やり馬車から引きずり出した。

怖い怖い怖い怖い怖いこわいこわいコワイコワイ

行きたくない。

でも今までの経験で泣き叫んだり抵抗をすると余計に酷い目に合わされるという事を知つてゐる。

その為に体を強張らせながらも付いていくしかない。

ただ「やあ…」とだけ小さく声を出した。

男はわたしの髪を掴んだまま馬車を出る。

久々に見た馬車の外の世界は何の感動も無い。

ただ近くに倒れていた人物がわたしをよく小突いていた一人のようだと言うのは何となく分かつた。

髪を掴んでいた男は「面白いもの見つけたぞ」と言つとまるで狩りの獲物を見せるように数人の男の前にわたしを出した。

今からどんな酷い目に合つのか想像も出来ないし、したくも無かつた。

目の前の男達は今までわたしを小突いた男達より酷い事をしそうな感じである。

「なんだ？妖精族か」そう笑う男が手を此方に伸ばすのを見て、無意識に悲鳴を上げていた。

その後はどうなったかよく分からぬ。

わたしの悲鳴に髪を掴んでいた男に「煩い！」と突き飛ばされた。余りの恐怖に痛みは余り感じなかつた。

酷い目にあう前に逃げたいが、恐怖で体が動かない。地面に伏せたまま男達の暴力に怯えながら目をと身を固めていると、また回りが騒がしくなつた。

男達がわたしに怒つたのかも知れない。

痛いのは嫌だと思しながら、身をぎゅっと丸めた。

周りが静かになった。

何があつたのかを確認するのも口ワイ。

もしかしたらもつともつと怖い目に合つかもしれない。

すると女の人の優しい声が聞こえてきた。

わたしに言つてゐる様でないが、声が今まで聞いた誰より優しく響く。

でも何を言つてゐるのかは良く分からぬ。

丸めた体の隙間から目を向けると女人が男の人を抱きしめていた。

さつきまで嫌な感じの男達に酷い目に合わされそうになっていたのに、目を開けたら女人人が男の人を抱きしめていた。

状況が分からず呆然とする。

すると男の人が何か行つて来るが聞いた事が無い言葉なので良く分からぬ。

今までの男達とは違ひ声が心配する感じには聞こえる。

良く分からぬけど大丈夫そうだと思つたら「つておかしいからね！」と叫んだ。

やはり怖い人かもしね。

状況がわからず呆然と見ているとすぐに女人人が来て話しかけてきた。

男の人は少し離れたところで倒れた人を見ている。

女人人は話しかけてくるけど良く分からない。

困つて「妖精族？」と言つのが聞こえたので少し緊張した。その言葉には良い思い出は無い。

わたしを見てそう言つた人達はわたしを連れ去り小突き回した。怯えたわたしを女人人は抱きしめてゆつくりと「だいじょうぶ」と言った。

抱きしめられた暖かさに涙がこぼれた。

少しして泣き止む。

わたしを抱きしめてくれていた女人人は離れると「私は美女と言うの。美女と呼んでね」と言つた。

「美女…おねえちゃん?」と言つと「そりよ」と優しく微笑む。

美女お姉ちゃんと少し話をした。

わたしがなんて言っているのか分からないと首を傾げると何回も聞いてくれて、何て答えて言いか分からない時も黙つて待つてくれた。

男の人は「若」と言ひらしい。

その人も「妖精族」と言ひ单語を使つたがわたしに酷い事はしなかつた。

2人で何か話しているけど早くて聞き取れない。

美女さんが「おうちまで送つてあげる」と言ってくれて驚いた。

首輪も外してくれるらしい。

今は無理だけど、必ず外してくれると若という人が言つてくれた。その言葉に「おねがいします」と言つた。

あの人達に無理やり言わされて嫌だつた言葉だつたけど、全然言うのが嫌じゃなかつた。

移動に馬車を使うと分かつた時はまた檻に入れられるのかと思つた。けど檻に入れられたのはさつきの嫌な感じの男達と、動かなくなつたわたしを連れ去つた人だけだつた。

馬車は美女お姉ちゃんが動かして、わたしと若が乗り込んだ。まだ若という人がどんな人かわからないけど、わたしを小突き回したりはしそうにないので少し安心する。

でも出来るだけ美女お姉ちゃんの近くにいようと前の方に座つた。

少しして馬に乗つた人達とあつた。

何かされるのかもしないと怖かつたが、美女お姉ちゃんが「大丈夫だよ」と言つてくれたので安心する。

少し話していたが、その中の一人の人について何処かに行くみたい。

大きな屋敷の人とあつた。

色々話していたが良く分からなくて怖いので美女お姉ちゃんにしがみ付いていた。

少しして美女お姉ちゃんに「行こうか」と言われて連れて行かれる。何処に行くのかと怯えていたら温かいお水の所だった。

暖かいお水は「おふろ」と言うらしい。

おふろは初めて入つて驚いたけど、美女お姉ちゃんみたいで気持ちよかつた。

おふろを出ると今まで来ていた服じゃなく、別の服を着させてくれた。ちょっと大きいけどこれなら夜も寒かつたりしない。

その後、ご飯を食べた。

今まで食べてきた硬いパン屑とは違ひ暖かくておいしかった。

ご飯を食べたら馬車に乗つてまた出発した。

今まで閉じ込められていた馬車の中で嫌だつたけど、美女お姉ちゃんと若が居たらそれ程嫌じやなかつた。

美女お姉ちゃんと若といつ人と一緒にいるよつになつて数日たつた。前までは夜が怖かつた。

昼間はほとんど移動しているので良かつたけど、でも夜になると馬車が止まる。

そしてわたしをさらつた男達が小突きに来る事も多かつたからだ。

でも美女お姉ちゃんと若という人はそんな事はしない。

獣などが怖かつたが、美女お姫ちゃんがいるのでぜんぜん怖くない。

この前も襲つてきた獣をあつという間に倒していたし。

途中の村でわたしの服を貰つてくれた。

それを着たら若という人が笑顔で頭をなでてくれた。
手を伸ばしてきた時は小突かれると思って驚きのまゝ固まってしまった。
つたけど、なでなではとても優しかった。
やつぱりいい人だ。

その後に子狼に出会つた。

弱く小さな存在が酷い目に合はれよつとしている姿に「かわいそう」とつい眩いでしまった。

檻に閉じ込められて小突き回されていた頃のわたしを思い出した。
そう思つていると美女お姉ちゃんが「2匹の面倒を見れる?」と聞いた。

一生懸命頼ぐと「じゃあ2匹を守つてね」と渡された。
抱きしめると2匹もわたしに抱きついてきた。

頼られている嬉しさに2匹はわたしが絶対に守ると決めた。

それから何日が経った。

美女お姉ちゃんと若是毎晩、剣の練習をしていた。

剣を振るう人は怖い人ばかりだったので嫌だったけど、2人は全然嫌じやなかつた。

でも若是いつも美女お姉ちゃんに負けていた。

若が弱いのか美女お姉ちゃんが強すぎるのかわからない。

2人が剣術をしている時は馬車の中で子狼と遊んだり、小声で精靈に話しかける。

でもやっぱり首輪のせいでの精靈があまり近くに現れてくれない。早くはずしてしまいたいけど今はまだ外せないらしい。

若が頑張つて外す為に練習しているらしいけど、良く分からぬ。

ある日、外で大きな音が聞こえた。

美女お姉ちゃんと若に会った時に似ていて怖かつたけど、美女お姉ちゃんが「大丈夫だからね。静かに隠れて」と言つていたので、頷いて小さくなつた。

美女お姉ちゃんと若が馬車から居なくなつて心細かつたけど、すぐに「妖精少女」と美女お姉ちゃんが話しかけてくれて安心した。そして馬車に新たに2人の人が乗つてきた。

お爺さんと女人の人だ。

女人の人は服で全身を隠していたので良く分からなかつたが、その人

に付いて「この精霊が女人の人だと教えてくれた。

美女お姉ちゃんと若とお爺ちゃんが話しているけど、早く良くな
からない。

突然お爺ちゃんが笑い出したのはビックリした。
どうやら若は女人の人を女人の人と知っていたみたいだ。
若も精霊が見えるのかもしれない、と思つたけど違うっぽい。
「当たつた」「すごい」と手を叩くと若がこっちを見て笑つた。
美女お姉ちゃんはいつも通りの笑顔だった。

女人の人は姫、おじちゃんは爺といつらしき。

姫お姉ちゃんは美女さんとは少し違う「優しい」。

美女お姉ちゃんと違ひ顔が口々口々変わるけど、怖い顔は全然しな
い。

そしていつも楽しそうに話しかけてくれる。
良く分からないとゆつくり話してくれたりする。

お陰で少し言葉を覚えた。

覚えたので話すと「かわいい～～」と抱きしめてくれる。
それもとっても嬉しい。

美女お姉ちゃんと爺が何処かに行くらしい。

美女お姉ちゃんと離れるのは嫌だつたけど、姫お姉ちゃんと若が一
緒に待つらしいので少しだけ安心。

でもやつぱり美女お姉ちゃんも居て欲しかつた。

わたしが妖精族だという事を伝えたら姫お姉ちゃんは驚いていた。
嫌われるかもと思つたけど、そんな事無くて嬉しかつた。

夜に若に呼ばれて首輪を外すと言われた。

言われたとおり顎を挙げて田をギュッと閉じてると首が温かくなつた。

「もう大丈夫だよ」とこの若の声に田を開けると、田の前に沢山の精靈が居た。

首に触れるとあの首輪がなくなつてゐる。

「もう無い」と分かつた時に涙がいっぽい出た。

姫お姉ちゃんが後ろからそつと抱きしめてくれたのでしがみ付いていっぽい泣いた。

涙が止まつてから「ありがとひ、お兄ちゃん」と言つたらお兄ちゃんがすごい笑顔になつた。

久々に精靈とお話できたので嬉しくて、お兄ちゃんと姫お姉ちゃんに精靈が出来る事を見せてたら疲れてしまつた。

寝ていたら姫お姉ちゃんに起された。

小さな声で「馬車に行くよ」という姫お姉ちゃんの声は硬く、握り締める手は少し震えていた。

馬車の中でわたしを抱きしめている姫お姉ちゃんは少しく震えている。

何か嫌な事が怒るのかもしねない。

そう思うと自然に姫お姉ちゃんにギュッと抱きついていた。

外からまた何かがぶつかる音がする。

その音に前に嫌な人達が現れた時の事を思い出す。

外にはお兄ちゃんしか居ない。

お兄ちゃんもあの嫌な人達みたいに動かなくなつてしまふかもしない。

それは嫌だ！

姫お姉ちゃんが物音で身を硬くした瞬間にすり抜けて馬車から外を見る。

すぐにお兄ちゃんを見つけた。

そして剣をお兄ちゃんに振り下ろそうとしている人が見えた。

とつさに精靈に「お兄ちゃんを助けて！」と言ひ。

精靈がお兄ちゃんに襲いかかるうとしている人を突き飛ばした。
「お兄ちゃんを助ける！」と叫ぶと、お兄ちゃんが「隠れているんだ！」と叫んできた。

他の人がこっちに来るのが見える。

すぐに姫お姉ちゃんが「私が守ります」とわたしの前に立つた。

子狼も一生懸命威嚇している。

でもあつという間の囮まれてしまつた。

若がこっちに来ようとしているけど邪魔をされてなかなか来れない。

一人の男が姫お姉ちゃんに斬りかかるうとした。

もうダメだと思った時に「待て！」と言う声が聞こえた。

後から現れた人と何を話しているのかは良く分からなかつた。

ただ姫お姉ちゃんが、その後現れた男の人を見て「良かつた」と咳いたので良い人らしい？

王子といつて姫お姉ちゃんの弟らしい。

そういうえば笑い方が似てゐるかもしけない。

その後、お兄ちゃんと「待て！」と叫んだ人」が剣の練習を始めた。早くて良く分からぬけど、王子が「そこまで！」と言つまで続いた。

とても長く感じたけど、本当はそうでもなかつたみたい。腹を撫でていた子狼が止まつた手に「撫でて」とじやれ付いてきた。

子狼と遊んでいると「そろそろ寝ましょうか」と姫お姉ちゃんが言つてきたので馬車に戻つた。

馬車で横になつても姫お姉ちゃんは興奮したように「今せつきの若、すごかつたね」と言つ。

その言葉にわたしはうんうんと頷いた。

なんだか良く分からなかつたけどすごくかつた。

一生懸命小声で話す姫お姉ちゃんの言葉は理解できるけど、それに返す言葉が良く分らない。

それがもどかしいけど、私は気持ちを伝えよつと一生懸命頷いた。

その後、すぐに美女お姉ちゃんが帰つてきた。

物凄く嬉しい。

でも王子はまだバイバイするらしい。

馬車ともバイバイした。

バイバイ。

途中で森を抜けた所で隠れたり馬に乗つたりしながら、爺という人の家に付いた。

爺が何か言つてたけど早口で良く分らない。

ただ周りの沢山の人々が注目しているのが何か嫌だつた。

嫌な人達と違う感じだつたけど、二ガテ。

新しい馬車に姫お姉ちゃんと乗つて沢山の人と出かけた。

小砦といつ所を攻めるらしい。

行くのとは違うのかな？

美女お姉ちゃんもお兄ちゃんも、どこかでやる事があるらしいくて今は一緒にいられないそうだ。

寂しいけど姫お姉ちゃんと子狼達が居るので我慢できる。

遠くて「ワー」と叫び声が続いていたけど、いつの間にか止んで一段と大きく「ワー」と聞こえた。

爺が「取ったよ！」と言いつと馬車が動き出した。

小砦といつ場所に着いてから姫お姉ちゃんがおかしい。

顔が真っ青なので心配。

急にお兄ちゃんが姫お姉ちゃんを抱きかかえて部屋まで来た。

どうやら姫お姉ちゃんは寝ているようだ。

心配そうに見るとお兄ちゃんが「大丈夫だよ」と優しく言つたので大丈夫だと思つ。

「姫を見ていてあげてね」と言われたので見ていたけど、姫お姉ちゃんも寝てるし眠いので姫お姉ちゃんの横で寝る事にした。

一緒に居たらいいよね？

お兄ちゃんと美女お姉ちゃんはまた出かけるらしい。

「姫をお願いね」とお兄ちゃんに言われたので「うん…」としつかり頷く。

お兄ちゃんと美女お姉ちゃんが出かけた後、姫お姉ちゃんはすつとそわそわしていた。

何を話しても「そうね」しか言わずに遠くを見ていたけど、お兄ちゃんの話をした時だけはいっぱい聞いてきた。だからわたしが出会った時の話をしたら「辛かつたね」と抱きしめてくれた。

ちょっとびり泣いた。

いっぱいお兄ちゃんの話をする姫お姉ちゃんは、わたしと同じ様にお兄ちゃんが好きなのかもしれない。

姫お姉ちゃんのそわそわは美女お姉ちゃんが迎えに来るまで続いた。

美女お姉ちゃんはいつものように優しく笑顔で抱きしめてくれた。

姫お姉ちゃんが「すぐに向かいましょう!」と言つた言葉に「若是大丈夫ですから」と美女お姉ちゃんが言った。

お兄ちゃんが居ないと思つたら、大砦とこうといふに居るらしい。

美女お姉ちゃんと一緒に戻つてくれたらよかったですのにと思つたけど、後で皆でそこに行くみたい。

今すぐにでも大砦に向かおうとする姫お姉ちゃんを美女お姉ちゃんと爺が一生懸命止めている。

わたしも早くお兄ちゃんに逢いたいな。

第55話 そういう物語（後書き）

妖精少女視点のお話でした。

1話～16話あたりまでの内容です。

本当はもう少し細かくとも思ったのですが、外伝的なお話なのでさ
らっとしました。

こうこう終わり方をしていますが、後に続くかは不明です。
続かない気もしますけど…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8400w/>

（仮）

2011年12月25日19時52分発行